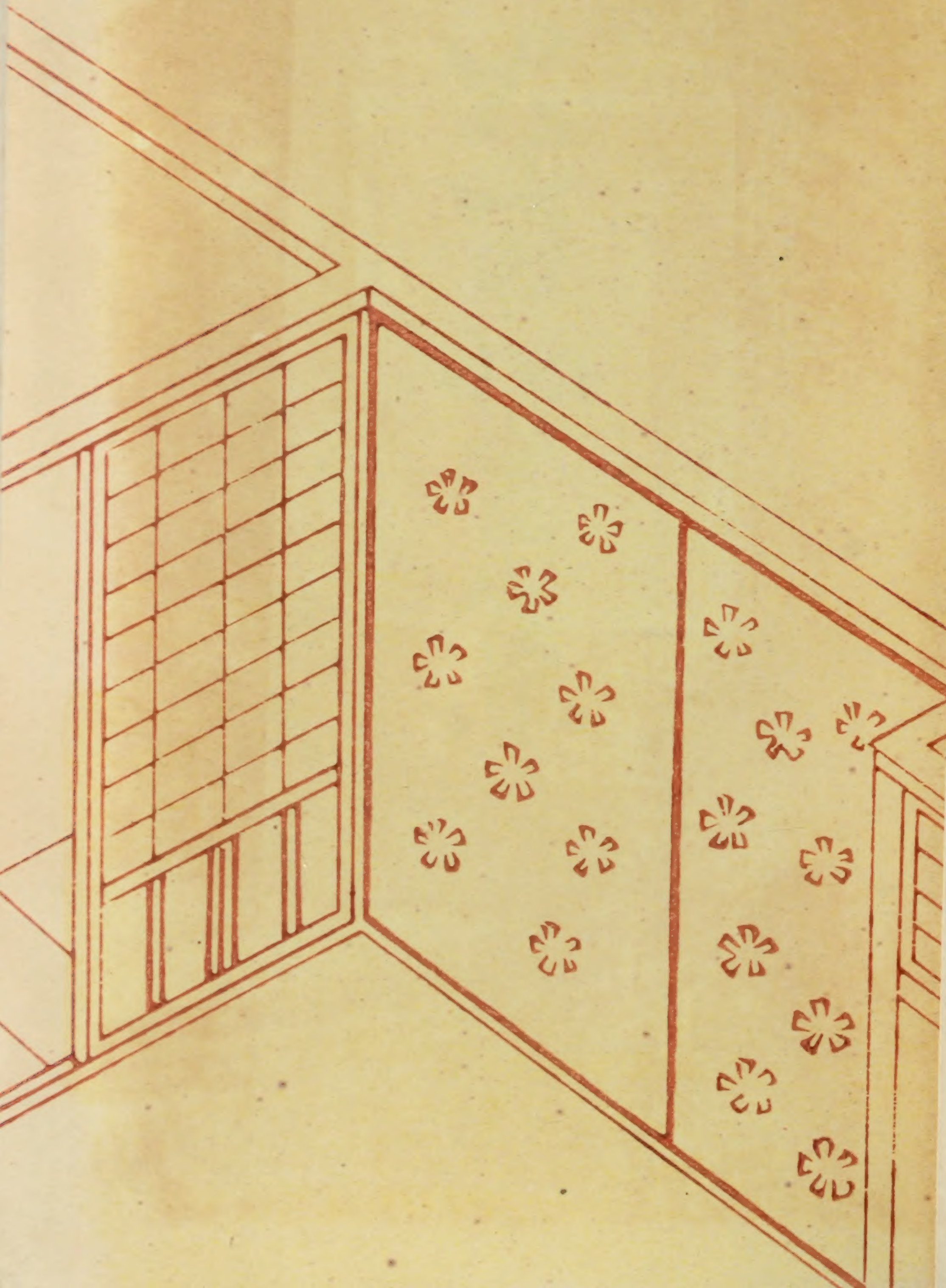




大南北全集

第六巻

文學博士 坪内逍遥
渥美清太郎 共編

大南北全集 第六卷

東京 春陽堂刊行

大南北全集 第六巻 目次

挿繪目次

挿繪解説

■巻頭に入れた木版は「隅田川花御所染」序幕の幕切れで、清玄尼が青坊主になつて引込みの場である。この趣向が記録破りであつた事は本文の解説に書いておいた。これは初演の折の錦繪である。

■大南北の肖像は、いくら探しても無かつたのが、偶然「お染久松色讀販」大阪根本に、かつら師友九郎と共に出てゐたのを發見したので、以前、歌舞伎狂言傑作集へ入れて置いたが、本集にはその「お染久松色讀販」を收録したので、南北の肖像も、多少廓大して巻頭に入れたのである。勿論晩年の肖像らしい。

■「隅田川花御所染」新清水の場は、實に彌生狂言の序幕らしい美しい場面で、出る役々も綺羅やかな姿のみである。この幕へ出る全部の人物を殘らず描いた大錦繪が見附かつたので挿入した三度目の所演の折の似貌であるが、斯うした繪は珍らしい。

■隅田川の場に、清玄尼が渡し場の姿を描いた錦繪は、コロタイプ版ではハツキリわからぬかも

知れぬが、[illegible]である。[illegible]の[illegible]へ置いたものである。[illegible]は初演の五世[illegible]四郎であるが、出来たのはズッと後であらう。

■同じく[illegible]の[illegible]は、[illegible]が[illegible]に合せて見集めた[?][illegible]である。

■『[illegible]』は大阪で刊行された[illegible]本の中に、各場面のみならず、早替りの仕掛けから衣裳の[illegible]、[illegible]の[illegible]、面白い[illegible]が沢山挿入されてゐるので、その全部を縮写して、各場面へ入れて置いた。

■他の二狂言[?]は、[illegible]を発見しなかつたので、入れられなかつた。その代り、各初演の絵番附[?]だけは全部集めて、各場面の中へ収録した。


五渡亭国貞画


松本幸四郎
岩井半四郎
五渡亭国貞画

解說及年表

隅田川花御所染

「隅田川花御所染」は、文化十一年三月、市村座に書きおろされた狂言で、南北が六十歳の時の作である。前年の顏見世、芝居町に火事があつて同座は類燒し、この時が新築落成の、開場式だつたのである。

「隅田川花御所染」は、南北が得意の手法の一つ、卽ち二つの狂言を結びつけて一つの戲曲を構成する式で書かれたものである。二つの狂言とは、「鏡山」と「女淸玄」とである。そして、この二つとも、以前からあつたものなのである。

「鏡山」は、人も知る、享保年中、松平周防守の奧殿に起つた、局澤野の事件を、加賀騷動に結びつけて脚色されたもので、天明二年の一月、江戸の操淨瑠璃の外記座で、「加賀見山舊錦繪」といふ題で上演された。作者は容楊黛であつた。歌舞伎へ移入されたのは、翌天明三年春の森田座で、岩藤が三國富士五郞。尾上が小佐川常世の役割であつた。內容は、すつかり歌舞伎式に脚色し直したらしかつたが、大

物怪出の場面多く、登場人物其他を當時の大名屋敷の寫實で行つたので、宿下がりの屋敷女中に非常な好評を博し、大入を占めた。その後も度々改作上演され、岩藤は初代尾上松助が當り役となつて、家の藝とまで稱讃されたのである。その事は「花御所染」でも、岩藤役の團十郎が、せりふで度々述べてゐる。時が三月なので、南北はこの「鏡山」を背景に持込んだのである。そんなら、從前の脚本をソックリ使つたのかといふと、決してさうではない。いま殘つてゐる以前の脚本を見ても、まるで變つてゐる事が解る。場面でも、せりふでも、決して以前の作に囚はれてゐない。さうして、今日上演される「鏡山」の狂言には、寧ろこの「花御所染」の方が、すべての點に於て非常に接近してゐるのである。

「清玄櫻姫」の狂言は、元祿の昔からあつて、有名なものであるが、その清玄を女形でゆく所謂る「女清玄」は、安永元年七月、森田座で上演した、「けいせい紅葉[illegible]」といふ狂言が初めらしい。この狂言で、山下金作の清水寺清玄尼は

　櫻姫と千原左近が密通をかばひ、その身に受けて、惡人の計略にて、玉子酒まで飲みて多年の行法を破り、思はず左近が容色に迷ひ、墮落するところ大當り。のち櫻姫に執着して、片岡幸十郎に殺され、恨みをなすところ大出來。

といふ筋のあるから、清玄櫻姫をソックリ女で見せる趣向だつたのである。南北は、この狂言の事を知

つてゐたかどうかは解らぬが、兎に角岩井半四郎に、女清玄を演らせようとして、鏡山の中へ書き込んだ。無論「けいせい紅葉襠」とは、骨子の趣向が同じなだけで、脚本は全然南北の創作なのである。南北が女清玄を選んだ眼目は、美しい半四郎を、青坊主にしたいといふ思ひつきからであつた。昔の女形は非常に色氣を尊んだから、比丘尼の役を演じても、いづれも切下げの尼か、頭巾を被つてゐるかで、青青とした頭なぞは決して見せなかつた。南北はこの記錄破りを遂行して、大當りを取つたのであつた。序幕の幕切れに、清玄尼が青頭を撫でゝ、傘をかむつての引込みは、ひどく見物を驚かせたものであつた。

清玄尼が夢を見てから、墮落する件も巧みであるが、二番目の、隅田川渡しの場は、殊にうまいものである。本筋と大して關係も無い場でありながら、實にしつとりとした情景を捕へて、錦繪を活かしたやうな場面を作つてゐる。半四郎以外、惣太の幸四郎、松若の團十郎と、名優を巧みに使つて、南北が腕一ぱいに揮つた幕である。大切の所作事は、「双面（ふたおもて）」を男姿で行つたもので、美しい場面ではあるが、有る型である。

初演の役割は左の通りであつた。

吉田の松若丸。入間の局、岩藤。吉田下部、軍助（二ヤク七世市川團十郎）奴、隅田平。松井源吾貞景（二ヤク澤

村四郎五郎）番頭太の森坊、汐入の彌蔵（二やく市川門三郎）奴、戸田平（中山門三）奥女中、十藤、荒川東藤太時澄（二やく尾上菊五郎）奥女中、宮野野（阪東善次）奥女中、竹尾、菖蒲左馬之助（三やく市川男蔵）奥女中、嘉島　同心、無縁坊（二やく嵐音八）石門、清水の長老浄念（坂東鶴十郎）庄屋、奉行氏家（松本虎蔵）足軽門助、長〔判読不能〕（〔判読不能〕金五郎）天文（坂田丸）高化、傳〔判読不能〕坊（三やく市川〔判読不能〕蔵）入国家中老、尾上、富助女房、綱女（二やく市川團之助）入間斧蔵、傳吉（松本よね三）大友宿禰之助、〔判読不能〕國〔判読不能〕奥女中、後附（二やく吉〔判読不能〕）傳馬の傳〔判読不能〕、鬮屋（山下万作）吉田梅若丸（岩井粂三郎）〔判読不能〕、尾女〔判読不能〕岩井粂三郎〔判読不能〕入国の〔判読不能〕、花子の前〔判読不能〕清水清玄尼、尾上召仕、お蘭（二やく五世岩井半四郎〔判読不能〕）平内上〔判読不能〕門五郎、後藤兵庫〔判読不能〕〔判読不能〕の辻〔判読不能〕、猿島惣太（二やく左団〔判読不能〕松本幸四郎）

二度目の上演は、文政三年三月の河原崎座で、名題は初演に同じく、幸四郎半四郎が上阪の名残狂言であつた。この時は初演の折より若干訂正を施して、大切の作事の狂女を深讃の松兵衛といふ男〔判読不能〕頭に作り替へなぞした。その役割は

平内、惣太、讃しげ宗深讃の松兵衛（三やく松本幸四郎）穂積（松本〔判読不能〕）幽居、綱女（二やく〔判読不能〕蔵）宗女（瀬川路之助）常陸之助、丈八郎（瀬川如之助）清水清玄（市川茂々太郎）讃坊（市川宗三郎）隅田平、桜谷（二やく大谷馬十）鬮若丸（市川門三郎）尾上（中村大吉）吉初、花子の前（二やく岩井半四郎）松若丸、岩豊、宮助（三やく市川團十郎）

その年、幸四郎半四郎は上阪して、約一年滞在したが、翌文政四年二月、中の芝居で、この「隅田川

花御所染」を出した。岩藤と惣太を幸四郎、お初と花子を半四郎の外に、尾上は澤村國太郎、松若は市川團藏が勤めたのであつた。

次は、天保三年三月の市村座で、名題は元のまゝ。この時の役割は

花子（岩井半四郎）清玄（市川鰕十郎）隅田平（阪東三津太郎）戸田平（市川團九郎）梅若丸（瀨川路太郎）尾上（市川富瀧）櫻姫、お初（二ヤク岩井粂三郎）岩藤、惣太、松若（三ヤク市川海老藏）軍助、北條四郎（二ヤク市村羽左衞門）

いつも、半四郎が、花子とお初を早替りで勤めるのであるが、もう老年になつたので、忰の粂三郎へお初を讓つたのである。

次は、天保六年三月の森田座で、名題は「花舞臺丹前俠客」――この時は、「花御所染」から鏡山の筋を拔いて、同じ南北の「浮世柄比翼稻妻」不破名古屋を交へたのであつた。「花御所染」としては、序幕の六本杉、清玄の墮落、隅田川の渡し場、庵室、大切淨瑠璃の各場を出したのであつた。また。一番目に、清玄尼が夢に松若と契る野路の玉川の場は、從來は長唄の獨吟を使つて、色模樣を見せてゐたが、この時初めて爰へ富本の淨瑠璃「櫻露の濡事」を使つて、純舞踊劇の舞臺を見せたのであつた。役割は

松若（澤村訥升）綱女（小佐川常世）清玄、軍助（二ヤク市川壽美藏）源吾（大谷友右衞門）櫻姫（瀨川菊壽）常陸之助（澤村清十郎）采女（中山みよし）平内、局松川（二ヤク松本幸四郎）花子（六世岩井半四郎）惣太、松兵衞（二ヤク四世阪東

三津五郎)

この中で最も松川といふのは、この時増補したもので、鏡山の筋を抜いたところから、清玄の庵室へ岩藤の亡霊を出す事が出来ないので、隅田川の場へこの松川を出して、軍助に殺させ、その亡霊が庵室へ現はれる筋に直したのである。

弘化四年二月の中村座「鐘聲比翼花隅田」は、薄雪物語に女清玄を組合せたもので、女清玄は、殺し場と庵室の二幕だけであつた。さうして、庵室の前へ「[illegible]」といふ清元浄瑠璃を出して、松若と清玄尼の夢の場を見せ、道具居所変りで、庵室に変るといふ趣向であつた。

惣太(坂東彦三郎)清玄尼(岩井粂三郎)采女(岩井松之助)松若、軍助(二ヤク八世市川團十郎)

同年三月、市村座では「初櫻尾上い丸藤」といふ名題で、全編を通して出した。

惣太(三世尾上菊五郎)清玄、北條四郎(二ヤク澤村源之助)藻園(澤村宇十郎)梅若丸(坂東橘蔵)庵篤(坂東玉三郎)

櫻姫(吾妻藤蔵)綱女(藤川花友)隅田平(中村芝十郎)お初、花子の前(二ヤク坂東しうか)松若丸、岩藤、軍助(三ヤク澤村宗十郎)尾上(市村羽左衛門)

この時の女清玄の競争は、しうかの方が勝であつた。粂三郎は未だ若年で、たゞ半四郎の孫といふ格式から、勤めさせたに過ぎぬのであるから、そこは技にすぐれたしうかの勝が當然であつた。たゞ美貌

といふ點から行つたら、しうかも美しくはあつたが、粂三郎にはとても及ばなかつたものである。

文久三年三月の中村座では「源平盛櫻柳營染」で、女清玄と遠藤盛遠を搦交ぜにした狂言であつた。清玄尼の夢には、前年通り「誓袖想稚戀」の清元を使つた。

松若、軍助(二ノヤク河原崎權十郎)隅田平(市川八百藏)櫻姬(中村いてう)轟坊(阪東佐十郎)櫻ン坊(尾上覺之助)賴國、戸田平(二ノヤク山崎國三郎)清玄(市川米十郎)花子の前(澤村田之助)粂の平内、惣太(二ノヤク阪東彥三郎)

明治十九年四月の市村座「新清水花御所染」は、原作へ三世河竹新七が多少の添削を加へたものである。

軍助(片岡我童)尾上、網女(二ノヤク河原崎國太郎)清玄、源吾(二ノヤク中村鶴藏)梅若丸(中村兒福)江戸平(市川權十郎)轟坊(市川市友)賴國、戸田平(二ノヤク片岡仁三郎)櫻姬(中村歌女之丞)隅田平(關三十郎)花子の前、お初(二ノヤク中村福助)粂の平内、惣太(二ノヤク中村芝翫)

岩藤と松若丸の二役は、當時若手の人氣者、我童と權十郎に一日變りに演じさせ、今の歌右衛門が人氣盛んな福助時代の女清玄なので、非常な好評であつた。

明治三十一年三月の市村座「新清水花御所染」は、鏡山を拔いた女清玄の件のみであつた。

松若丸(中村芝鶴)花子の前(澤村源之助)清玄、軍助(二ノヤク三桝稻丸)櫻姬(中村種太郎)江戸平(片岡龜藏)隅田

年（中村勘八）迦香（澤村宇十郎）惣太（片岡市藏）

「女淸玄」を大劇場で興行したのは、これが最終であつた。尤も「鏡山」の方は、早くから獨立して一つの狂言となり、漸次改作されつゝ今日に及んだのである。

この脚本は、從來も活字になつて現はれてゐたが、どういふ譯か肝腎の、一番目の淸玄尼が戀から墮落の場が缺けてゐた。今度は初演の折の臺本を得て、少しも洩れなく收める事が出來た。

お染久松色讀販

文化十年三月の森田座へ書きおろした、お染久松の書替へ狂言である。俗に「お染の七役」といつて五世岩井半四郎に、七役を早替りで演じさせ、目にもとまらぬ替りやうの鮮やかさで、客を呼ばうとしたのである。

早替りといふ事が、芝居の技巧の中でも、あまり藝術的なものでない事は明らかであるが、江戸劇壇の中でも特に文化年間は、非常に早替りが流行した時代であつた。流行した原因は、要するに觀客が平凡に飽きて、珍らしいもの〳〵とばかり求めてゐた際、たま〳〵忠臣藏の七役などが喝采を得てから、急に早替りといふ事に注目し、二役三役から終には七役十一役の早替りまで、單に目先だけの刺戟で、客

の好奇心を滿足させようとしたのである。一部の觀客には、兎に角非常に受けるので、南北も相當に早替り芝居を書いてゐるが、流石にそれも狂言中の一つの趣向として使つてゐるばかりである。ところがこの「お染久松色讀販」は、單に早替りをさせようといふのが眼目の狂言である、理窟からいへば、箸にも棒にもかゝらない筈なのであるが、矢ッ張り南北は南北だけの事はある。出來上がつた狂言は、早替りといふ技巧を餘所にしても、立派に存在の價値がある。早替りをさせる手法に至つては、元より得意な一流である。斯うして、見た目の非常に面白いところから、この狂言は現今猶上演を絶たないのである。

初演の役割は左の通りであつた。

油屋娘、お染。同丁稚、久松。奥女中、竹川。お染母、貞昌。久松云ひ號け、お光。喜兵衞女房、土手のお六。賤の女、鶴土手のお作（七ヤク五世岩井半四郎）五百崎の百性、久作。猿廻し・左次兵衞（二ヤク七世市川團十郎）山家屋清兵衞（尾上新七）油屋丁稚、久太（桐島儀右衞門）油屋太郎七（市川門三郎）同番頭、善六（澤村四郎五郎）同手代、九助（阪東善次）鈴木彌忠太（大谷紋次）刀屋勘吉（澤村川藏）中間、權平（市川成藏）百性、寺島の彌五兵衞（坂東重太郎）油屋多三郎（阪東大太郎）藝者、お糸（中山龜三郎）髮結ひ、中の郷の龜（阪東鶴十郎）竹川召仕ひ、お勝（岩井芳之助）油屋下女、お閑（岩井梅藏）松本屋左四郎。鬼門の喜兵衞（二ヤク五世松本幸四郎）

一回目の上演は文政二年四月の玉川座で、名題は初演の折に同じ、半四郎、幸四郎、團十郎の三人は初演と同じ役割で、その外は

清兵衛(瀬川菊三郎) 多三郎(市川茂々太郎) 善六(大谷馬十)

文政三年九月、半四郎幸四郎の両人が上阪したとき、中の芝居でこの狂言を出した。半四郎幸四郎は持役通りであるが、その外は

佐五兵衛(松本幸四郎) 文作(浅尾與次郎) 善六(嵐冠十郎) 多三郎、清兵衛(二役澤村國之助) 九助(浅田[illegible])

三度目は、文政十年三月の中村座で、同じく幸四郎半四郎の一座であるから、両人の持役は初演と同じ事である。その外の役割は

文作、佐五兵衛(二役[illegible]之助) お糸(中村大吉) 清兵衛(中山富三郎) 太郎七(市川門三郎) 久太(市川[illegible]) 九助(大谷門蔵) 多三郎(岩井[illegible]) 善六(嵐冠十郎) 彌忠太(中村傳九郎)

嘉永元年五月の市村座「[illegible]染久松[illegible]讀賣」。淨瑠璃は「心中[illegible]」であつたが、どういふ譯かこの時は、[illegible]十分純演[illegible]してゐる。

お染、お六、[illegible]、[illegible](市川小團次) 清兵衛(澤村[illegible]之助) 善六(中山文五郎) 久太(嵐[illegible]) 九助(中村[illegible]) 太郎七(市川[illegible]) [illegible](市川[illegible]) 多三郎(市川[illegible]) お糸(市川[illegible]) [illegible]

本小次郎）竹川、お光、久松、お園（四ヤク阪東しうか）喜兵衞（八世市川團十郎）久作（市村羽左衞門）

嘉永三年一月の河原崎座は、名題も初演通り。半四郎の孫粂三郎に、七役を勤めさせたのである。

お染、久松、竹川、お六、貞昌、お光、お作（七ヤク岩井粂三郎）清兵衞（尾上松緑）彌忠太（淺尾爲十郎）多三郎（阪東竹三郎）龜（關歌助　久太（市川猿三郎）九助（阪東大次郎）太郎七（市川鰕十郎）久作（市川九藏）お糸（岩井しげ松）お勝、お園（二ヤク市川團之助）善六（淺尾奥山）左四郎、喜兵衞（二ヤク阪東彦三郎）

慶應三年八月の中村座では「二世紫由縁色上」で、坂東彦三郎が勤めた。

お染、久松、お六、竹川、お光、貞昌、お作（七ヤク阪東彦三郎）喜兵衞（河原崎權十郎）左四郎（嵐吉三郎）久作（市川米升　多三郎、清兵衞（二ヤク嵐璃鶴）お糸（中村いてう）お勝（尾上多賀之丞）善六（中村翫太郎）彌忠太（中村千代飛助）太郎七（中村成藏）九助（市川小半次）龜（市川新之助）久太（大谷萬作）

明治七年一月の澤村座「其昔浮名の讀販」では、

お染、久松、お六、貞昌、竹川、お光の兄作藏（七ヤク澤村訥升）久作（中村壽三郎）左四郎（大谷門藏）久太（市川荒次郎）多三郎（阪東橘三郎）喜兵衞（阪東太郎）太郎七（市川團四郎）お勝（阪東佳志久）善六（澤村しやばく）お園（澤村千鳥）

明治十八年二月の市村座「昔模樣染衣更着」。淨瑠璃「比翼子飼鶯」では

お染、久松、竹川、お六、百日、お光、芳之丞（七ッ目助高屋高助）左四郎（團三十郎）喜兵衛（市川壽美蔵）、お勝（岩井松之助）多三郎（澤村訥升）喜兵衛（市川九蔵）太郎七（市川市女）久作（澤村訥子）お糸（澤村紀久之助）お園（市川升之助）九助（團猿六）

明治二十二年一月の春木座は、一番目が初演通り。

お染、久松、お六、竹川、お光、百日（六ッ目中村芝鶴）お勝、お作（二ッ目市川女寅）喜兵衛（澤村訥子）久作（市川米丸）喜十（市川團次）喜兵衛（市川喜昇）多三郎（市川夜十太郎）大島之（中村時十郎）久太（團花助）左四郎（市川團蔵）

東京の大劇場では、これが打どめになつてゐる。

この中には、關西劇場の年代を略したのだ。それが不備なので、市川小團次から系統を引いた、先代市川右團治は、この七役を非常に得意な出し物とし、度々上演して現今の右團次に傳はつたので、關西方面でも相當に賣る物に上つてゐるのである。右團治は淨瑠璃の場へ大改作を加へ、當り中者のやうなる筆んで受けるやうにしてゐたが、今に傳はつてゐる。

また、この淨瑠璃の場は、役者の都合で、江戸でも殆んど上場毎に多少の潤色はされてゐる。前場中表の中に、百姓の出たり、芳太夫が出たりするのも、畢竟は場面の賑やかしと役々の配合上、その時々

に種々な人物を點出したものなのである。

容賀扇曾我

この脚本は、文化十三年一月、河原崎座に上場されたものである。吉例の曾我狂言である。曾我狂言に就ては、前に述べてあるから茲には繰返す事をやめる。本篇は、普通の曾我狂言である。文化文政度の曾我狂言の一番目といへば、こんな物だと思つて間違ひはない。南北の本領を發揮してゐるのは、無論この時も、二番目の「封文めでたくかしこ」の方なのであるが、その脚本が見つからぬので、一番目だけを掲出したのである。半四郎、大吉、菊之丞、團之助、粂三郎と、女形の名優が揃つてゐるので、それを巧みに使ひこなしてあるところが、先づ認められる點であらう。役割は左の通りであつた。

鬼王女房、月小夜。小林の朝日丸(二ヤク五世岩井半四郎)手越の少將(五世瀨川菊之丞)大磯の虎(市川團之助)化粧坂の少將實ハ曾我五郎時致(岩井粂三郎)曾我の團三郎。八幡三郎行氏(二ヤク關三十郎)監物太郎妹、小竿(岩井かほ世)伊豆次郎祐兼(大谷鬼次)曾我十郎祐成(淺尾勇次郎)工藤犬坊丸祐友(關龜松)梶原源太景季(阪東善次)仁田四郎忠常(市川門三郎)梶原平次景高(助高屋吟八)八幡の妻、眞弓(市川おの江)百足屋手代、次郎七(市川團七)中間、ぶる平(桐島儀右衛門)奧女中、宇佐美(市川稻三郎)同、久須美(岩井龜三郎)廿繩猶太夫(澤村

之平）曾我の禪司坊（助高屋金五郎）箱根の權兵、閉坊丸（市川新藏）近江小藤太成家（澤村四郎五郎）工藤祐經の妻（中村大吉）曾我五月、御江。工藤左衛門祐經（二十ヶ月助高屋高助）

この狂言は再演されなかつた。

色一座梅椿（いろいちざうめつばき）

文化九年一月、市村座に上演された二番目狂言である。

この脚本は、お讀みになれば直ぐにお解りになる事であるが、中々特色のあるものである。第一、どんな脚本にでも附いて廻る、寶の詮議といふ事が無い。南北の作も大抵は、中心の狂言廻しは寶物の詮議にしてあるが、これには四方出の香爐といふ物は出て來ても、それほど重大に取扱かつてゐない。それだけに、これといふヤマがない。頗る平坦に、スラ〳〵と進行して、どこが中心の幕といふところも無い。それに、悪役專門の幸四郎を使ひながら、いつもの徹底的な、悪の權化といふやうな悪黨を出さない。つまりは、南北らしくない作であるが、その代り、出てくる役は、今日でも實在しさうな人物ばかりで、性格描寫といふやうな點は、非常に細かくやつてある。大名の世嗣ぎでありながら、出入りの材木屋に同居して、町人の生活に憧がれてゐる遠山甚三郎。泥坊の金を預かつて戻しもならず、今更そ

の後難を恐れてゐる葛飾十右衛門。その外、文藏にしても、仁太にしても、お初にしても、お鶴にしても、いづれ平凡な人間であるだけに、いかにも實社會にいつでも見出されさうな人々である。さういふ役のみを並べたばかりでなく、また各幕毎に、當時の世相風俗を活寫してある事は、作者が意識して描いたか何うかは知らないが、實に驚く程であると思ふ。元より南北の世話物は、それ自身いつでも化政度の江戸の一部其物ではあるが、この脚本は特に、いろ〳〵な方面に向つて、鋭いスケッチを試みてゐるその度合が強い。例へば、序幕を見ると、柳橋の料理屋とか、淨瑠璃の浚ひ會とか、無盡講の樣子とかは、如實に臺帳の上に現はれてくる。二幕目の寺院や見世物氣分、三幕目の深川岡場所の活寫、四幕目の木場附近の情景なぞ、實に手に取るやうに映寫幕へ顯はれる。殊に三幕目で、川柳を利用した趣向なぞ、空前絶後の奇拔さといつてもいゝ。

　當時、深川の小名木川の附近で、旗本の次男が殺されたとかいふ事件が、實際あつたので、この脚本はそれを當込んだものださうである。讀んだ所では解らないが、當時の官憲は上演された舞臺を見て、その餘りに事實に近い事を認めて、この狂言の上演禁止を申し渡した。芝居では狼狽して、其筋に嘆願の結果、事實に近い幾場かを拔いて、やう〳〵上場を許可してもらつた。が、その幾場を拔いた殘りだけでは、どうしても全體の筋が解りかねたので、見物の不評となり、間もなく閉場したといふ記錄が殘

つてゐる、最初は富以外が利いて、非常な大入だつたさうである。

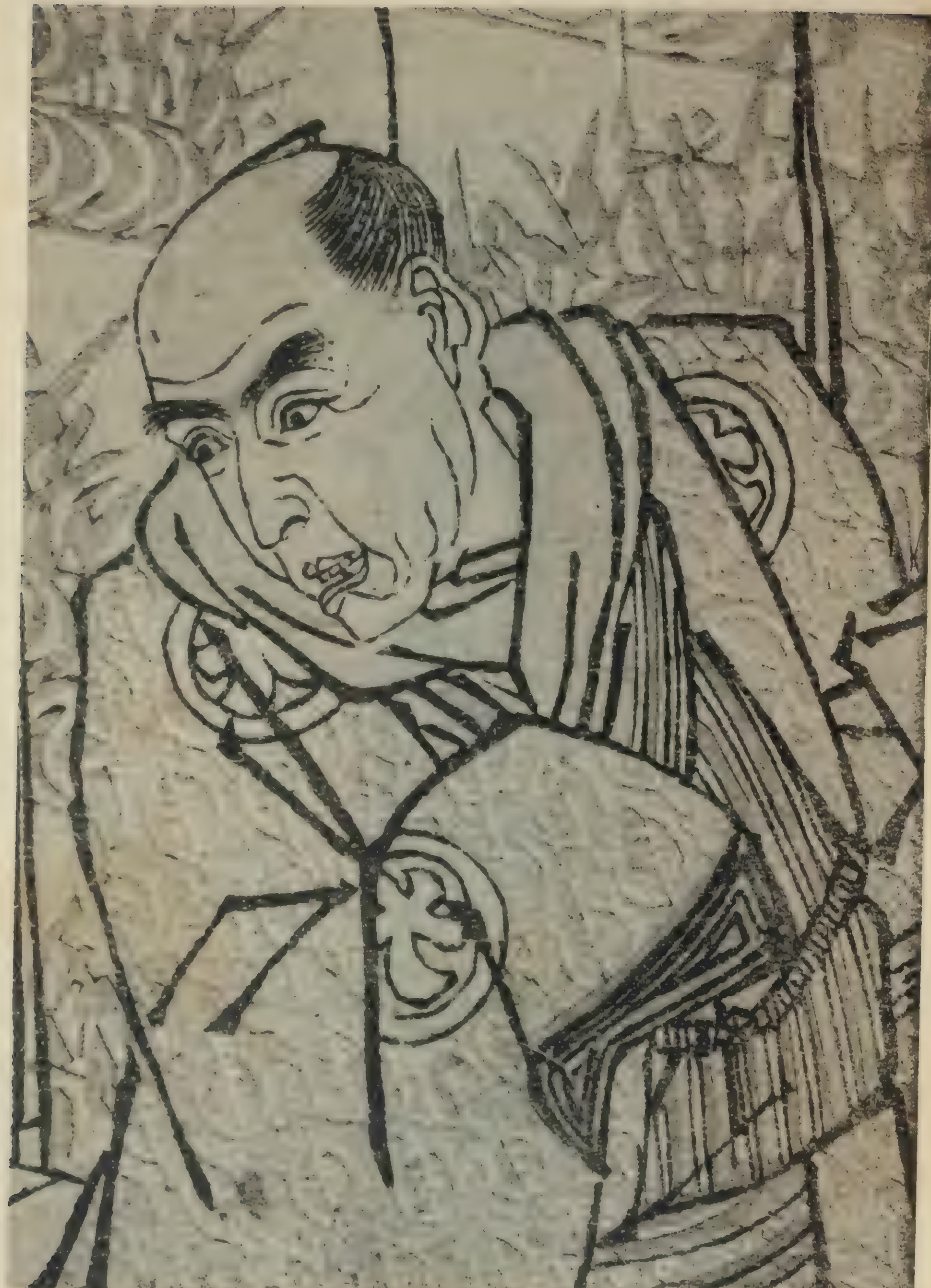
る。尚、讀んでゐても面白い脚本であるが、殘念な事には最後の一部が缺けてゐるので、大詰の結末が判つてゐない。やつと簡單な筋書を附けて間に合して置いたが、誰にか本書の下卷である、若し此の完本が發見されたら、必ずや増補する事を茲に約束して置く。

初演の役割は左の如くであつた。

逸田兵三郎（澤村宗十郎）木屋文藏（七世市川團十郎）藝者、佛島町のお初（市川團之助）鐵の九平太（澤村四郎五郎）大上關右衞門、金澤五人（二十ヶ市川染三郎）見習●重太七（澤村宗十郎）天満屋女房お光（中山富三郎）辻屋平四郎（坂東三五郎）町人、土佐武（市川宮十郎）橋本屋文六（坂東大吉）藝者お染（岩井粂三郎）澤屋金兵衛（叶幹平）十神惣七　小藏（市川團五郎改め小九郎）藏屋藏　猫八、春吉（市川團之助）眞入女房、お藤（岩井藤藏）藝者築千代（市川宮十郎）同、吉野（瀬川國三郎）鳥八、藝お玉（瀬川多門）丁稚、丈吉（坂東善助）同、馬吉（澤村蔦二）下女、およし（市川染藏）鳥居、十太（市川小十藏）十右衛門女房、おりく　山長者女房、中ゑらお鶴（二十ヶ瀬川路考）藝者のお豊、天満屋お房（二十ヶ澤村田之助）番頭　庄兵衛、曲り金の仁太（五世松本幸四郎）葛飾十右衛門（三世坂東三津五郎）

この狂言は再演されなかつた。

渥　美　清　太　郎　識



隅田川花御所染

すみだがみはなのごしよぞめ

隅田川花御所染

第一番目　三建目

相州鎌倉六本杉の場
新清水花見の場

役名──入間家中老、尾上。入間の妹姫、櫻姫。牛島主次。醫者、藪坂元庵。奴、丸輪鎌助。奴、隅田平、櫻姫かしづき、關屋。奥女中、綾瀬。同、梅田。同、花形。同、待乳。同、宮戸。同、淺芽。同、柏尾。同、築地野。同、七浦。同、霧島。清水平馬之助清玄。大友常陸之助頼國。所化、櫻ン坊。奴、戸田平。新清水の住職、轟坊。櫻姫かしづき、庵崎。若黨、諫早求馬。吉田公達、梅若丸。粂の平内左衛門長盛。猿島惣太實ハ粟津七郎。入間の姉姫、花子の前後ニ新清水の清玄尼。尾上の召仕、お初。吉田の松若丸。入間家の局、岩藤。

第一番目三建目始まりと口上觸れあると、大ドロ〳〵にて、向う正面より誂への黒雲、振り袖衣裳、稚兒の形を引擺へたる見得にて、花道の上へ群り出づる。向うより大友常陸之助頼國、若衆形、着流

し手甲、股引、拳の三尺帯、大小、眼形にて、菅笠を持ち、つか〳〵と出て来て花道にとまり、この雲を見てきつと思ひ入れ。小太鼓の音になり

頼國　ハテ、心得ぬ。いま大友常陸之助頼國が、筑紫の果より鎌倉へ下向の折柄、俄に吹きくるこの魔風、龍の吟ずる様は見えねど、黒雲起つて群立ちし内に、怪しき振り袖の閃めく様子は、越路に吹きつ鎌鼬、又は物の怪霊つて、魔風に誘ふ怪有なるか。何にもせよ、心ならざる雲立ちやなア。

ト大ドロ〳〵にて、この雲黄、幕の内へ入る。ト揚幕の向うにてバタ〳〵にて譜早求馬、道服、手甲、股引、大小にて、傘、提灯を持ち出て来て

求馬　若旦那常陸之助さま。

頼國　家老譜早求馬、後れたが参つたか。

求馬　只今のはやち風にて後れましたが、俄の風雨に驚きましてござります。

頼國　殊に雲中に怪しき女子の、見えたるは心得ぬ。

ト思ひ入れあつて

親人常陸の大掾殿には、鎌倉どのへ御敵対にて家滅亡、家宝系図を悩みて降参の相願ひ、比企の判官どのゝ取持ちにて相済み、その下向の道すがら此あの様、何はともあれ鎌倉へ急がん

求馬、參れ。

ト大拍子になり、賴國、求馬、幕の引付へ入る。又ドロ〳〵、雨車、大石の降る音、雨忽暗くなる。

本舞臺、三間の間、眞中杉林の梢、東西は立延びし杉の大樹、何れも本杉皮葉の茂り、舞臺前は黑雲の幕、手摺の樣にして、すべて杉立の梢魔所空中の體。眞中の杉の梢に吉田の松若丸、さらけ、おどろなる稚兒の鬘、振り袖、衣裳にて楊柳笛を啣へ、杉の枝を引執へ、疲れたる體。矢張り大ドロ〳〵、雨車、土石の音にて幕明く。

ト松若丸あたりをきつと見る。風の音、谺の鳴り物になり

松若　吉田の少將惟貞が嫡子と生れ、幼年ながら禁庭の守護たり。我れ思ふに、吉田の家を承繼いでも神祇官、殊に入間家へ養子の身、武將の榮華を見るに羨ましく、一度謀叛を企てゝ、四海を掌握なさんずと、家出をなせしその折柄、叡山颪に誘はれて、何者なるか連れ行くと、思へば暫し放心して、あたりを見れば相撲の國の高山、或ひは富士ヶ根、豐前の彥山、瞬く内に日本國中、飛行自在は魔界の術、勿體なくも後鳥羽院、汝をこれへ連れ來りしは、魔道の望み、內裏の寶楊柳笛、魔術を以て取得たれば、其方に與へて反逆の、囮となして大望成就、楊柳笛を授くると、思へば

又も發心して、下界へ落つると思ひしが

トあたりを見て

まだ高山の雲中にて、杉の梢にとゞまりしか。正に下界は大日本。

ト我が着物を見て

世間の事は早立ちしか。魔道の一日は世界の三年、これ三惡の苦みならん。何にもせよ、我が念願の時來れり。ハヽア、面白し〳〵。

トきつと下を見て

この經立の根本へ下りて、世の有樣を、ソレ。

ト丈八ヤコーし、[illegible]の雷にて、[illegible]前の雲の中へ飛び下りる。チョン〳〵にてこの杉の梢の[illegible]を段々とせり下げる。これに隨ひ、[illegible]の黒雲の幕、次第々々に引上げ、替る時にこの幕を切つておとす。

本舞臺、三間の間、前に杉の大樹、うしろ黒幕、[illegible]の[illegible]、上の方に[illegible]の[illegible]、右の[illegible]にて[illegible]よろしく打明る。

[illegible]〳〵頭々[illegible]の前、[illegible]の、[illegible]。

ト、ドロ〳〵、誂への鳴り物になり、粂の平内左衞門、かつらきの樣なる、さばきの鬘にて蠟燭を灯したる鼎を冠り、御忌衣仕立ての異形の姿にて、附太刀、足駄を穿き、時詣りの見得にて、鐵釘を持ち、鐵槌を振り上げ、賴國をきつと見て居る。賴國、右の形にて刀に反りを打ち、平内左衞門に詰めかけ居る。下の方に松若丸、右の形にて、牛の形の石に倚りかゝり氣絕の體。これを一面にせり上げる。鳴り物打あげる。薄ドロ〳〵、凄き合ひ方。

平内　某粂の平内左衞門と變名して、入間家へ入込みしも、一度平家の世となさん爲。いま鎌倉へ在番の折を窺ひ、毎夜々々の時詣り。この牛石を神と定め、卽ち魔所なる六本杉へ鐵釘を打ち、まだその上に一ヶ國に一首つゝ、首塚を築き源家調伏、今宵滿願の夜に當つて、妨げといひ、大事を聞いたる汝こそ、いま首塚の標とせん。その首洗つて待つて居ろ。

賴國　ヤア、烏滸がましき平内左衞門、この大友常陸之助が、鎌倉へ降人となつて下向の折柄、窺ひ知つたる平家の殘黨、其方を討取り我が手土産。それに何ぞや某を、首塚の標とせんとは不屆き者、今一刀に

ト切つてかゝるを平内左衞門、立廻りにて附太刀を拔き、一討ちに切りつける。賴國肩先の血汐胸へ滴り、ドロ〳〵にて、玉つきの御鏡現れる。平内左衞門見て

平内　さてこそ門出なす怪しき御鏡。

　ト取上げ、きつと見て

これぞ聞き及ぶ大友家の重宝、牛王の御鏡。いま手に入るは、我が大望の成就なさん時来れるか、

エヽ、忝い。

　ト御鏡を懐中して被りし鼎を取り、蠟燭の火にてあたりを窺ひ、松若丸を見て

さるにても、心得ぬは童が気絶、形といひ、そぼろの様、様子ありげなこれなる男子。心を付けて

　ト風の音になり、平内、松若丸の側へ行かうとする。この時、松若丸「ウム」と息を吹返す。また凄き合ひ方。平内、手水鉢の柄杓に水を掬ひ、松若の傍へ行き

この水飲んで心をつけよ。

　ト松若、平内の持つたる柄杓に手を掛け、水を飲まうとする。ドロ〳〵にて柄杓の水熱湯になり、狐火燃える。松若苦しむ。平内驚き

柄杓の水の、熱湯に燃ゆる様子は。ハテ、訝しい。

　ト松若あたりを見て

松若　して、この所は

平内　相州鎌倉、六本杉の天狗谷。

松若　さては下界の大日本、相州鎌倉、武將の住ふ在國なるか。

平内　心が附いたか。

ト松若を介抱せうとして懐へ手を入れ、思はず都鳥の一卷を引出し

平内　こりやこれ慥かに。

松若　それを。

ト立廻りにて、松若丸、手早く引ッ奪り、懐中する。平内思ひ入れあつて

平内　ハテ、心得ぬ童が有樣。今この所へ正丑滿に時詣り。望みある身の我れなれば、おことが樣子、包まず語れ。

松若　すりや某に

ト三味線入りの谺になり、松若、牛石に腰を掛け

望みある身とあるからは、定めて聞きも及ばれん。四海を望む逆叛人と、疑ひかゝりし某は、吉田の嫡子松若丸、家出をなして本望遂げんと、思ふ折柄魔風に誘はれ、後鳥羽院の靈まし〳〵て

鎌倉一家義時親子に恨みあつて、直ちに源家を亡さん、首領となれよと勅諚にて、楊柳笛を賜れば、いよ／＼謀叛と心の定め。して、其方は、何人なるや。

平内　さては吉田の松若丸。

ト松若の懐へ手を差込むを振り拂ふ。立廻りにて平内は御鏡、松若は一巻を落すを、互ひに取替へ、取上げて

松若　こりや聞き及ぶ大友の重寶、牛王の御鏡。

平内　疑ひもなき都鳥の一巻。

松若　この御鏡を所持すれば

平内　平家の怨靈、後藤兵衛盛長。

松若　さてこそ彼れ鎌倉一家を

平内　討ち亡さんかねての叛逆。

松若　して、過ぎ行く月日の年號は。

平内　承久三年霜月の頃。

松若　某鎌倉に誘はれしは、承久元年。

二建目 発端



三建目



平内　すりや、三ケ年のその間。世の盛衰とは云ひながら、松若丸を逆心と云ひ立て、北條家の讒言、家臣松井の源吾が惡事にて、少將惟貞横死の上、吉田の家は早や滅亡。

ト松若きつとなり

松若　すりや北條家の讒言にて、家は滅亡。猶もこの上、鎌倉一家を討ち亡して

平内　平家の仇を報ひん時節。この盛長と合體なさば

松若　日頃の本望成就なさんは瞬く内。

ト兩人思ひ入れあつて

平松　ハテ、心地好やなア。

トこの内賴國心付き、苦みなが

賴國　エヽ、殘念や口惜しや。手柄始めに其方を討取り、惡逆無道の根を絶たんと思ひしに、不覺を取りしか。さては吉田の松若丸も、いよ〳〵叛逆、今某が冥途の道連れ。

ト松若へ切り付けるを

松若　小癪な賴國。

ト立廻り。

平内　小事は大事、おッ片づけよ。

松若　可哀や命の縮くされ時。

ト立廻りにて頼國の刀を引つ奪り、見事に切つて捨てる。頼國又ウンとなる。直ぐに松若、杉の枝を取り

松若　心變せぬ堅めのしるし。

ト枝を差出す。この時後へ求馬、菅笠を持ち、窺ひ出でゝ

求馬　お主の敵。

ト杉の枝を引つ奪る。松若それなりに求馬を平内の方へ押やる。平内引ッ捕へ、杉の枝を取つて

平内　杉の文字は木扁に久し。

松若　まアこの通り木扁を取れば

平内　久しく合體。

求馬　うぬ。

ト父かゝるを平内、求馬を取つて投げ

平内　耳しるしには

松若　この御鏡。

ト御鏡を出す。求馬「それだ」と又かゝる立廻り。

平内　都鳥の一卷。

ト出して見せる。

平松　慥かに預かり。又の再會。

ト兩人懷中する。日覆にて大勢「ハヽヽ」と笑ふ聲する。

松若　嬉しや魔道の彼の悦び。

トきつと思ひ入れ。また賴國起上がり

賴國　思へば〳〵

ト松若にかゝるを、立廻りにて賴國の腹へ突込み、直ぐにぽんと首を打落す。

平内　常陸之助が首は、しるしの首塚に。

松若　我れもこれより變名して、入込む方便の常陸之助。

平内　出來た。

ト求馬心付き

求馬　うぬ。

ト松若へかゝるを引ッ捕へ

松若　我が子の内の褒美、喰へ。

ト又求馬を投げやるを平内取つて投げる。

平内　ハテ、天晴れな。

松若　又の再會。

ト鳴物になり、松若思ひ入れあつて下座へ入る。平内見送り

平内　ハテ健気らしい、若者ちやなァ。

求馬　敵を討つて主人へ供へやう。

ト平内へ切り付けるを、立廻りにて

平内　エヽ、敵によもやお働きさせまし。

求馬　觀念。

ト風の音になり、求馬、平内へ打つてかゝる立廻り。平内、求馬を切つて捨てる。風の音雨車になる。平内、空を見て笠を取上げ、雨を請ける。これをキッカケに、ドロ〳〵、しつぼりした合ひ方。平内、目當を守り、悠々と向うへ入る。チヨン〳〵、幕引付け、眞中の杜を引上げ、引落しにして、杜の鳥居

櫻の大木になる。

本舞臺、三間の間、淸水の舞臺、高欄つき輪作り、破風際より内は觀音堂、狐格子、唐戸附きの出入り。奉納の繪馬大分。この内に紅葉傘を掛けたる繪馬、象鼻、組み物惣朱塗り極彩色。眞中の石段、中二階まで打拔き、平舞臺、上の方龍神の宮、鳥居、音羽の瀧、三筋本水にて瀧壺へ落つる仕掛け。爰に枝垂れ櫻咲き亂れあり。所々に櫻の幹、吊り枝見事に、すべて淺草新淸水の體。右のドロ／＼と双盤の音にて道具とまる。

ト雨窓明るくなる。直ぐに三味線入り賑やかなる行列の鳴り物になり、東の揚げ幕より中間可助、牛島軍次、對の模樣羽織看板にて、緋のもんぱのゆたん、庵に木瓜の樣に入間と苗字の紋の付きたる挾み箱を擔ぎ二行に出て來る。次に絹羽織の先徒士六人、振つて出て來る。次に、模樣の看板羽織にて緋もんぱ紋付き袋入りの長刀を擔ぎ、その跡より花子の前、さゝぎ付きの廣振り袖裲襠、衣裳にて誂への金地の扇を持ち、麻裃の侍ひ一人、股立にて、朱の爪折、筒守りの付いたる長柄を差かけ、きり禿のお小姓守り刀を持ち、次に櫻姫、櫻の模樣、さゝぎ附廣振り袖、裲襠衣裳にて、扇を持ち、これも麻裃の侍ひ股立にて、朱の爪折、筒守りの付きたる長柄を差かけ、きり禿のお小姓、守り刀を持ち、梅若丸、お小姓にて、三寶に蒔繪の御朱印の箱を戴せ持ち、腰元四人、定家文庫、莨盆二つ、

その跡より岩藤、衣裳擣取にて、日傘をさし、扇を持ち、尾上、衣裳擣取にて、日傘をさし、扇を持ち、その跡より櫻姫の傅き關屋、奥女中淺茅、侍乳、都、綾瀬外三人、留め袖、跡より奥女中紫地野、霧島、嶋尾、七瀬、いづれも箱せこ、日傘をさし、扇を持ち出て來る。次に奴隅田平、草履を持ち、右濱官藏、看板羽織にて、茶辨當、醫者數田元庵附添ひ、中間大勢挾み箱を擔ぎ、合羽籠三荷、紺看板の定紋、侍ひ二人、股立羽織にて大押へ。この行列順よく出て來て、中の間のあゆみを渡り、本花道へかゝる。すつと跡より猿島惣太、汚き布子の拵へ、一本差しにて、草履大分竹にて擔ぎ出て來る。皆々本舞臺へ來て、關屋、庵崎、床几へ毛氈を敷き、花子の前、櫻姫床几にかゝる。皆々程好く列ぶ。惣太、つか／＼と行かうとするを、侍ひ制して

侍ひ　慮外者。控へぬか。

惣太　モシ／＼、わしやァお局樣と草履取りに用のある者。どうか逢はして下さりませ。

侍ひ　控へならう。

　　トきつと云ふ。

惣太　ヘイヽヽ。

　　ト退りして跡へ寄つて居る。

侍ひ　お供廻りは、眞珠院の休息所に扣へ召され。

皆々　ハア丶。

ト行列の人數下座へ入る。

岩藤　お二方樣へ申し上げまする。今日はお日柄も好う、空も長閑に春の麗か。その途すがらといひ、清水の花盛り、咲きも殘らず散りもせず、一入のお慰みと存じられまする。

尾上　草木心無しとは申しますれど、時を知つての花盛り、お氣晴らしに御覽遊ばされませう。

ト花子の前、櫻姬、櫻を眺め

花子　清水の千本の櫻みな咲かば

櫻姬　うへおし人の見も榮えなん。

ト三味線入りの音樂になり

軍次　姬君樣には斯樣な景色を御覽あつて、お歌でも遊ばされませう。拙者なども憚りながら、眺めは盡きませぬやうにござりまする。

花子　牛島軍次の云やる事なれど、眺めある櫻木の、花は散りても根に歸れど、歸らぬは云ひ號けの松若さま。

櫻姫　花の若みのお方なれど、情なや評議の、惡名を受け給ひ、お家出なされてその後は

築地　身ははの〴〵と明け初むれど、櫻に曇る横雲の、お尋ねなれどお行くへ無う。

關屋　博士陰陽師に占はせ給ひしに、散り行く花のお命にて、御縁も構ゃ谷なれば

淺茅　鎌倉の松ヶ岡へお入りあつて、かねてのお願ひ。櫻と法の花なれば、花の緒解く法華經に、實姫の月の御方を、お迎ひ申して今日の御剃髪。

待乳　御身はあはれ二衣にて、墨染櫻のお姿を、世に流れ行く音羽の瀧。

花形　新淸水のお導師にて、紅葉堂の粧ひの、花の盛りの黒髪を

梅田　おろし給ふはいとしい。花のふり行く後の世を、お願ひあるは普賢象。

宮戸　法の門出の家櫻、殿御の爲には浮世をば

綾瀨　淺黄櫻と思し召し、木末を助かるお誓ひは、枯れたる木にも花の咲く

霧島　觀音櫻のこのお庭で、見る花よりもお囃子の

築地　日でつきじの石をより、強い男の桙先で

船尾　搗いてもらうて夜をこめて、有明櫻供養櫻。

七浦　ふだん櫻の好い殿御と、だかれて一重八重櫻。




鏡山行列之圖

皆々　花子さまにはその花が、お目に着かねど私しどもは

皆々　眺めに飽かぬぢや、ござりませぬかいなア。

花子　花物云はねど香にぞ知る、早う染衣の身の願ひ。

七浦　さつても我折れ、云ひ號けばつかりで、殿御を御存じないお姫樣ゆゑ、其やうに御意遊ばします
れども

築地　ちよつとにても御存じなれば、思ひは築地の島よりは

柏尾　日本國が夜々の、睦言かごと思ひ出しても、首筋元がぞく／＼と

四人　たまつたものでは、ござりませぬわいなア。

岩藤　これは又しても皆の衆のざれ言、嗜ましやんせ。

ト思ひ入れあつて

今日は御遊山とは申せど、大切なる清水詣で。花子の前さまには、入間家の御惣領なれば、吉田の松若丸さまを、お聟がねとして御相續のお定め。殊に姫君より松若さまへお云ひ號けのしるしに、世にも稀れなる赤地の錦の、富田裂れまで遣はされましたる御仲。そのお云ひ號けの松若さま、お行くへ知れざる上、お果てなされしと、博士にも申し上ぐるに依つて、操をお立て遊ばされ、

御剃髮のお願ひなれど、大殿さまにもお聞入れなきゆゑ、いつぞやお家出遊ばされ、鎌倉松ヶ岡へお入りのところ。

尾上　扇ヶ谷には、花子の前さまのお乳の人の娘、綱女といふ者あつて、在所ながら親切の者にて、花子さまをお留め申しての御介抱、江戸表のお屋形にては、御一家さまが始め、岩藤さまにも御相談の上、御家督は櫻姫さまと相定まり、尤もお妹君には、大友常陸之助さまへお入りのところ、大友家滅亡にて、常陸之助さま御降參のお願ひにて關東へ御下向、これ幸ひと、お望がねとしての御家督、それゆゑ鎌倉より、花子さまをお呼び迎へ申して、お願ひの御剃髮。

岩藤　櫻姫さまには、いよ〳〵入間家の御家督と定まり、お云ひ號けの常陸之助さまにも、近々降參のお願ひ相濟みますれば、御婚姻取結び

ト梅若御朱印の箱を持ち、前へ出て

梅若　大切なる關の東の、八ヶ國の御朱印は、これに守護してござります。

岩藤　この清水の觀世音の、御寶前にて御祈念の今日なれば、隨分と心を付けられてよからう。

ト花子思ひ入れあつて

花子　かねての願ひ自らが、心の内はこの扇。

ト持ちたる金地の扇をひろげて見せる。岩藤尾上見て

岩藤「過ぎし日の暮るゝを急ぐ夕顔の

尾上 花の便りを誰れか問はまし」

皆々 その三十一文字は。

尾上 花子さまのお詠み遊ばされしを、勿體なくも順徳院の御叡聞に達し、あの扇へお書し賜りし御宸筆。

花子 夕顔の、花は暫しの盛りにて、思へばこの身に適ひし詠歌。

ト尾上思ひ入れあつて

尾上 それに引換へ櫻姫さまの、短冊のお歌は。

ト櫻姫懐より袱紗に包みし短冊を出し

櫻姫「九重に立つ白雲と見えつるは、大内山の櫻なりけり。」

尾上 お七ツの時お詠みなされし、このお歌について、櫻町の中納言さまより、幼少には珍しきと御賞美あつて、短冊を下され、お名もそれより櫻姫さま。殊にお歌のお心も、九重に立つ白雲とあるからは、入間家の御家督、思へば〳〵、おめでたい事でござりまする。

ト岩藤思ひ入れあつて

岩藤　尾上どの、お黙り。

尾上　ヽ。

岩藤　こなさんは物知りぢやの。和歌の心をよく御存じ。花子さまが御惣領で、御剃髪のお望みゆゑ、お妹御の櫻姫さまへ御家督譲り、その御剃髪の無いすつと先から、櫻姫さまの御家督は知れてあるのかえ。

尾上　左様ではござりませねど、花子さまへ松若さまを、お聟君にお取り遊ばさるゝ筈なれど、お行くへ知れねば姉君には、お妹君へ御家督譲りあつての御剃髪、以前より御家督の事は知れませねど、斯様になりまする知らせの端でがなござりませうと申す事。それを、其やうに仰しやりましては。

岩藤　成る程、それではわたしが無調法、こりや恐れ入りまする。その筈でもござりませうか。先岩藤どのは、お局頭の出頭で、松蘇院というて今では御隠居、わたしはその姪でござりまして、お部屋子に上がつて居て、段々と立身いたして、只今ではお局頭の岩藤、これと云ふも、伯母松蘇院のお蔭。何にも存じませぬ無調法者、尾上どの、何かと宜しう、お指図なされて下さりませ。

ト わざと手をつき慇懃に云ふ。

尾上　これは又、痛み入つたる御挨拶、なんの指圖を致しませう、私しこそ、やう〳〵と

岩藤　今度始めてのお中老役の尾上どの、こりや、さうありさうなもの。何にも知らいで物識り顔、流石は成りあがりの町人の娘。ほんにお里が顯はれるわいなう。

尾上　ハイ。

ト思ひ入れ。

岩藤　お二方には、この岩藤が附いて居る。この上にも、ツベコベ〳〵と口出しすると、中老役とは云はせぬ。以後は屹度嗜ましやんせ。

ト思ひ入れあつて

ほんに忠義と云へば、尾上どのゝ召仕ひは、強う主人を大切に勤むるといふ評判、名は何とか云ひましたの。

尾上　ハイ、初と申しまする。

岩藤　オヽ、それ〳〵、お初であつた。好い女子を置き合さんしたの。

ト軍次思ひ入れあつて

軍次　これについても、アヽ、姫君さまのお歌はお氣の毒なれど、松若さまにはお果てなさるが、お爲と申すもの。

尾上　そりや半作さま、なぜでござります。

軍次　これ御覧じませ。

ト懐より松若の繪姿を出し

叛逆人の悪名なれば、この通り繪姿を以てお尋ね。さすれば生きながらへて、鎌倉どのへ召捕られでもなされては、恥辱の上の恥ではござりませぬか。

尾上　すりや、それが松若さまの

ト繪姿を取つて見る。

花子　尾上、これへ。

尾上　ハツ。

ト繪姿を差出す。花子取つて思ひ入れあつて

花子　云ひ號けの名はあれど、これまでお目にかゝらねば、お顔見知らぬ松若さま、悪名を受け給ひ、お尋ねの身とおなり遊ばされ、お姿繪にてお目もじ致しまするは、思へば／＼、詮ない宿世でご

ざりまするなア。

ト思ひ入れあつて

せめては剃髪した上で、お姿繪に御回向を

尾上　御殊勝な事でござりまする。

ト岩藤思ひ入れあつて

岩藤　アイヤ、申し、そのお姿繪に御回向とは、お道理さまではござりまするが、お尋ねのお身を描きし事なれば、天下の科人、申さば穢れ。それを御回向なさるゝを、御殊勝な事と云はしやんす、尾上どのゝ差出口、何にも知らいで、ホヽヽヽ。

ト笑ふ。

尾上　エヽ。

ト思ひ入れ。

花子　イヤ、岩藤の詞なれど、剃髪すれば貴賤に依らず、回向するのが佛の教へではないか。

岩藤　エ。

ト思ひ入れ。

花子　光明皇后の例もあれば、法の道には穢れも無い。それを咎めて尾上に彼れこれ。

　　ト云はうとして

なんと、其やうなものではないか。岩藤、軍次。

軍次　へイヽヽ。

　　ト思ひ入れ。岩藤こなしあつて

岩藤　花子さまは、鎌倉の尼寺近くお入りなされて、佛門の道は、おいたはしい事なア。

　　ト囁いて云ふ。花子綺麗な懐へ入れる。このうち惣太、煙草のみながら花子に見惚れ、思ひ入れあつて

惣太　ハテ、女中衆といふものは好いものだ。先刻から見れば、いま坊主にならうといふ花子さまとやら、途方もない美しいものだなア。

　　ト花子の方へ、つかつかと行くを、隅田下引退けて

隅田　野郎め、こりやア何處へ參る。

惣太　知れた事。あのお姫樣によらうと抱きついて

　　ト隅田下を見て

隅田　ヤア、こなたは草履取りの隅田平だな。おらァ草履の錢を取りに來たのだ。

惣太　コリヤ〳〵、何を云ふ。知らないぞ〳〵。

隅田　知らないもすさまじいわいっ

ト云ひ合して

惣太　お局さまと云ひ合して

隅田　ハテサテ、つがもない事を云ふが、この隅田平は、知らない〳〵。

ト云ふなとこなしにて

惣太　何事も呑みこんで居る程に、草履の事も鼻緒の事も、必ず申すな、扣へて居れ。

ト惣太に呑みこます。

惣太　さういふ事なら、草履の事も云ふまいが

ト花子へ思ひ入れあつて

その鼻緒、ぢやァない花子とやら云ふお姫樣、どうも美しいわい。

軍次　あなたは誰れあらう、花子の前さまと申して、吉田の松若さまへ御婚禮あるお身なれど、その松若さまのお行くへが知れぬゆゑ、今日御剃髪あつて、尼におなりなされるのだ。

惣太　エヽ、

ト悔りして

あのお姫様が坊さんに。ハテ、惜しいものだなア。

ト花子、思ひ入れあつて、何か思案してこなしあり。

これを思へば、大和當麻の中將姫も、こんな事であらうかい。

尾上　これなる下部は、當麻寺へ參詣して、中將姫の事知つて居やるか。

惣太　當麻寺どころか、此やうに草履を賣つて歩く、雇ひ辻番の足輕だが、六十六部同然に、國々を經巡つて

花子　アノ、日の本の有り難い御寺をば

尾上　存じて居るなら、花子さまへお慰みに

惣太　拜香見いわしが話しを

皆々　申し上げてたもいなう。

ト時の鐘、合ひ方になり

惣太　先づ都には祇園、淸水、智恩院、金閣寺御覽なら、好いたほは選りどりのお前方より、お姫様へお話し申すは、有つた事の幽靈話し。

女皆　どうやら聞かぬ先から、恐ろしいやうでござりまする。

惣太　マア、有り難いのは高野山、上り下りの山の間が三里の餘、それから先が不動坂、そこが女人禁制で、奥の院は石塔だらけ。無名の橋を渡ると、向うが名代の蛇柳、丁度そこで日は暮れる。しよほ〳〵雨で淋しい胴中、風に柳がザワ〳〵と、身の毛もよ立つ、柳の蔭から稚兒の幽靈、佛つくつて色蒼ざめ、申し〳〵と聲かけられ、悔り驚くまいか、氣も魂ひも飛んでしまつて、わしやア夢中。

女皆　アレ、怖いわいなア。

ト皆々に執付く。

惣太　コレ、驚くな。某ことは吉田の嫡子松若丸、いつぞや都で天狗に攫はれ、其のち高野山にて、世を果敢なくも相果てたれど、修羅三悪道に迷ひ居て、浮みもやらぬ亡者の身、何卒娑婆にて追善供養あるならば、成佛得脱疑ひなし、無縁の其方を頼む程に、某縁者の輩あらば、この事を告げてくれと、云ふかと思へば、忽ち消えて常の通り。なんと恐ろしい話しぢやアごんせぬか。

皆々　エヽ。

ト悔りする。

花子　すりや、松若さまには、いよ〳〵お果て遊ばされ、三悪道に迷ひ給ふとや。

ト隅田せゝら笑ひ

隅田　野郎め、嘘ッ話しは止めにしろ。

惣太　成る程、さう云ふであらうと思つた。嘘でない證據といふは、これだ。

ト懐より一巻を出し

その松若の幽靈どのが、偽りならぬ證據とあつて、渡してくれた都鳥の一巻とて、吉田の重寶、これで疑ひ晴らさつしやりませ。

ト一巻を差出す。關屋取つて花子へ渡す。

花子　成る程、これがあるからは、松若さまには

皆々　お果てなされて冥途に

花子　其お疑ひを晴らすは、自らが剃髪して。

惣太　して、その一巻は。

尾上　お姫様へ差上げたれば、きつと御褒美は後程御沙汰。

惣太　必ず間違へて下さりますな。

岩尾　左様なれば、花子さまには

花子　阿闍梨さまへ、かねての願ひ。
ト立上がり行かうとするを、櫻姫ちやつと留めて
櫻姫　姉上さま。
皆々　まづお入りあられませう。
ト唄になり、花子先に綾瀬手を執り、櫻姫は關屋手を引く。岩藤尾上皆々附添ひ、石壇の上へ入る。
隅田平行かうとするを、惣太とめて
惣太　コレ、待ちやれ。金剛草履を拵へさせ、その錢は如何する。
隅田　ハテ、そりやァ合點だから遣ると云ふに。
ト行かうとするを引とらへる。
惣太　また逃げべいと思つてか。錢が無ければ草履を此方へ。
ト隅田平の懐へ手を突込み、裂れに包んだ金剛草履を引出す。
隅田　これを遣つてつまるものか。
ト引ッ奪らうとする。立廻りにて草履を前に置き、双方より手を掛け
惣太　よく積つて見ろ。入間家のお局さまの頼みぢやァないかえ。

ト大きな聲で云ふ。

隅田　コレ、靜かにしやれな。

ト押へる。三味線入りの禪のツトメになる。

惣太　おれが居る忍が岡の辻番へ、われが來て頼むには、下野國阿曾の沼は、鴛鴦のたんと棲む池で、そこに生へる菅菰で、草履を作つて穿せる時は、鴛鴦の思ひにて、忽ち色深くなつて心が亂れるとの事。その菅菰で金剛草履を作つてくれろと頼むから、ゑつちらおつちら、阿曾の沼から菅菰を取つて來て作つてやつたに、その錢を寄越さないとはあんまりだ。それを彼れこれおくねると、入間の屋敷へ踏んごんで、お局さまの頼みで斯う〳〵だと、草履の事を囁き出してしまはう。

隅田　サア、そりやア。

惣太　但し錢を寄越すか。

ト隅田不思ひ入れあつて

隅田　よいワ。錢をやらう。明日とも云はず今夜で

ト錢を百出して「ソレ」と投げやる。惣太取つて

惣太　なんだ、金剛草履の錢が僅た百か。猿唐人めが。

ト錢を投げつける。隅田平きつとなり

隅田　これぢやァ不足か。

惣太　知れた事だ。何か玉に使ふ金剛草履、百や二百で賣られるものか。

隅田　さうして、いくらだ。

惣太　百兩と云ひたいが、負けてやつて五十兩。

隅田　アノ、小判でか。

惣太　この金剛草履を作らして、今日坊主になる花子の前にこれを穿かせて、心をば亂させ何かの越度、それを囮りにお局の、一物ありと睨んだる、眼は違はぬ金輪奈落、金剛草履の作り人が、惡い事をば聞き出す、猿島惣太といふ足輕だ。五分でも引けを取るのぢやごんせぬ。

ト隅田平思ひ入れあつて

隅田　成る程、さう云へば隱すに及ばぬ。お局岩藤さまの計らひで、花子さまを呼び寄せ、この淸水で出家させ、この草履を穿かせて心が亂るれば、その上にて罪に取つて落すのだ。それだに依つて草履の代は望み程……べら坊め、勝手にしろえ。

ト金剛草履を手早く取る。双盤早めになり、隅田平石段へ逃げて入る。惣太きつとなり

惣太　うぬ、駄折助め。

ト壷の蹴け、石段へ踏みかけ、思ひ入れあつて

いゝサ、いゝと逃げても、取る所で取つて見せうワ。したが、草履は格別、衆の中内さまより渡された在部島の一巻、吉田家の残黨を味方に付けよと云ひつけられたが、あの一巻彼方へ遣つたが、闘賀に大事な物だと見える。これといふも、あの花子の前の美しいのにうツ惚れたばつかりだ。

アヽ、女にやすのろい奴よ。

ト思ひ入れ。唄になり、惣太石段へ入る。清水舞臺の後にて

呼び　御祈念の刻限。

ト音樂になり、舞臺の上へ櫻姫、御朱印の箱を持ち、綾瀬、都、待乳、淺茅、各白拍子、筆の笛、琵琶、

羯鼓を持ち出て來て

櫻姫　入間家の御朱印御祈念の爲

女皆　樂を奏し奉りまする。

ト時を打ち、み見得、誂へ三味線入りの管絃になり、向うより松若丸、吉田松若、女装束にて、

大小、[illegible]の直垂を着り、扇を持ち、供廻り、草履を持ち出て來る。右の奥より清水下馬之助清玄

三建目





剃立て大髻、袴羽織、大小にて、深編笠、扇を持ち、戸田平、笹龍膽の紋散らしの蒔繪の箱を三方に載せ、持ち出て來て、花道に止まり

松若　ハテ、咲いたりな花盛り、されば日本の花の王と、貴賤賞美をなすゆゑに、櫻を賦したる唐歌は無し。

清玄　櫻は花の優美にして、全く春の暖氣を受けて、開くは仁の姿なり。

鎌助　旦那のお供でこの奴も、お江戸櫻の花見とは、舞臺も花の新清水。

戸田　おいらは構はぬこの跡の、酒屋で一杯青ッきり、ぐつと引ッかけ山櫻。

清玄　ハテ麗かな

奴二　景色ではごわりまする。

ト松若思ひ入れあつて

松若　ハテ、面白き祈念の樂。聞きしに違はぬ關八州の

ト云はうとして

我れも暫く黄鐘調に、笛を合せて慰まん。

ト懷より袱紗包みの以前の笛を出し、調べる。櫻姫思ひ入れあつて

櫻姫　ハテ、合點の行かぬ。樂に合する横笛は、何處であらん。

ト松若笛を調べながら、清玄も本舞臺へ來る。女形皆々見て

淺茅　アレ、お姉様、御覧遊ばせ。深編笠でお顔は見えねど、笛を調べて

ト櫻姫舞臺から見て

櫻姫　どうやら御風俗が

郡　若しやこの程よりお下りある、お云ひ號けの常陸之助さまか知らぬ。

女客　ほんに平氣な。お笠をお取りなさんせいなア。

清玄　ヤア。

ト編笠を取る。

戸田　アレ〳〵、清水の舞臺に櫻姫さまが

ト松若、笛を懐中して

松若　戀と花との盛りぢやなア。

ト編笠を取つて床几にかゝる。

清玄　ハテ、其許には見慣れぬ御仁。

松若　某ことは九州浪人、比企の判官どのゝ取持ちにて、鎌倉御所へ降参の者。

清玄　ムウ、この程聞き及んだる、大友常陸之助頼國どのでござるか。

松若　いかにも。願ひ相濟むまでは當地に旅宿。

清玄　身共は清水平馬之助清玄と申す、鎌倉武士でござる。

ト床几にかゝり、煙草のんで居る。始終右の鳴り物にて、この石壇の上より、櫻姫、綾瀬、都、淺茅、待乳、築地野、霧島、柏尾。七浦は御朱印の箱を持ち出て來て

女皆　申し、お姫さま〱。

ト櫻姫嬉しきこなし、松若見て

松若　これは櫻姫。

ト云はうとするを

綾瀬　アヽモシ、櫻でそこらがまばゆうて

ト櫻姫思ひ入れあつて

櫻姫　恥かしいわいなう。

戸田　お旦那、アレ、お恥かしいと仰せられまする。

ト清玄衣紋を繕ひ

清玄　櫻姫どの、恥かしい事はござらぬ。こなたさへ水心あれば、此方は魚心。その上にては御親父郡領どのへ、申し入れたらよろしうござらう。この儀は定めて承知でござらうが。

櫻姫　エ。

ト合點のゆかぬこなし。淺茅思ひ入れあつて

淺茅　成る程、御承知らしい事でござりませうぞいなア。

清玄　さういふ事なら、思ひの丈を筆に云はせて

ト懐より文を出して、そつと櫻姫に渡す。取つて見て悧りして

櫻姫　思ふ君様まゐる。焦る丶清水清玄。

ト云はうとするを

清玄　エヘン／＼。

ト云ふなと咳拂ひ

戸田　畜生め／＼。

ト清玄の背中を叩く。

櫻姫　エヽ、穢はしい。
　　ト文を後へ抛り、松若の方へ行かうとする。皆々とめて
女皆　アヽモシ、それでは
清玄　どうぞ色よい
　　ト女形皆々思ひ入れあつて
女皆　サア、お返事やら御挨拶を……ほんに好う御參詣でござりましたなア。
　　トこの内戸田平この文を拾ひ懷へ入れる。
清玄　某とても鎌倉御所より、預かり奉る鯉魚の一軸祈念の爲、持參いたして只今參詣。
　　ト一軸の箱を出して見せる。
七浦　此方にても關八州の、御朱印の御祈念の爲
　　ト同じく御朱印の箱を出して見せる。松若見て
松若　見ますれば入間家の御朱印、清玄どのゝ一軸も、皆一對の蒔繪の箱。
清玄　實朝公武將宣下の折柄、家々の重器へ下さるこの箱、何れも笹龍膽の御紋散しの同じ蒔繪……これ幸ひに御朱印を

ト云はうとして

明日こなたの館にて、清玄の一軸も、共に内見でござれば、いま改めて、お渡し申さん。

ト箱を明け、一軸を改める。

關屋　此方にても、御祈念は相濟みましたれど、猶も御寶前にて御祈り。

戸田　一軸お受取りあられませう。

關屋　ハア。

ト辭儀して、櫻姫に受取れと教へる。櫻姫、清玄より受取る。

清玄　して、觀音堂の内陣へは。

關屋　その一軸を、御大切に致されて、梅田どの、御案内。

梅田　畏まりました。

ト一軸を受取る。

清玄　然らば祈念に

皆々　清玄さま。

清玄　戸田氏、參れ。

戸田　ネイ。

ト唄になり、清玄思ひ入れ。梅田、一軸の箱持ち、下座へ入る。皆々跡見送り

女皆　邪魔は拂うた、櫻姫さま。

櫻姫　ほんに憎らしい。

女皆　あなたに惚れ申して、どうも斯うもなる事ぢやござりませぬ。

櫻姫　常陸之助さまには、好うこそ今日は

松若　浪人のつれ〴〵、清水の花を眺めて心の樂み。併しながら某降人の一埒、比企の判官どのゝ取持ちにて、鎌倉御所へ相濟まねば、思はずも婚姻の延引。

鎌助　ハテ、小ぢれつたい。丁度逢うたは、明いた口へ持ちかけた旨い色事と思つたに、これぢやァ牡丹餅へ鹽を付けて食ふやうで、旨くないわえ。

女皆　サア、その御婚禮は、姫君さまにも、お待かね遊ばされて……今日の花見にお出でなされたこそ好い幸ひ。

築地　それ〴〵。マア、前祝ひにちよんの間を、

柏木　物を買ふにも、約束の手附といふ事もあれば、ナア、皆さん。

七浦　それが無ければ姫君さまにも、あなた様のお心を、お疑ひ遊ばされまする。

ト松若思ひ入れあつて。

松若　その疑ひの無い證據に、きつとした誓ひの印を遣はさう。

女皆　櫻姫さま、此方からもおしるしに。

ト櫻姫思ひ入れあり。此うち隅田平出て來て、こなしあつて、床几の上に寐腹這ひ、見て居る。七浦もどかしがり

七浦　何も其やうに、辛氣に思し召す事はござりませぬ。爰にある關八州の御朱印を

女皆　滅相な、どうしてマア。

露島　ハテ、大事ござりませぬ。どうで姫君さまのお好きなされた、お聟さまの事なれば

築地　それ〳〵、どの道入間家の御夫婦なり、誓ひの印に上げられても、矢ッ張り此方へ戻す道理。

七浦　イザ、御朱印を

ト箱を明けて差出す。櫻姫御朱印を取る。

淺茅　こりや斯うなされては如何でござりませう。お疑ひの無いやうに、御内證で御婚禮のお杯でも、遊ばされたその上にて

松若　云ふにや及ぶ。盡未來まで變らぬ夫婦。

櫻姬　オヽ嬉し。

ト寄りそふ。

四人　こりやモウどうも

ト皆々こなし。隅田平、床几より落ちる。皆々悄りして

女皆　エヽ、隅田平どの、悄りしたわいな。

隅田　お姬さまの色事て、とんとたまらぬ。

四人　御婚禮がお待遠なら

女皆　もうこの上は合圖を定めて、お屋形へお忍びの

隅田　ハテ、ぢれッたい。それまでは待たれない。どこへなりと。

女皆　して、御朱印の

隅田　箱の片付、下郎が合點、愛構はずと。

女皆　お出でなされませいなア。

ト祇園囃子になり、松若先に、櫻姬を突きやり〳〵、皆々石壇へ入る。隅田平思ひ入れあつて

隅田　かねて若殿さまのお望みの通り、マアあれで色事の過りの上に、御朱印の越度。これからは、この草履。

　ト以前の金剛草履を出し

佛足守護の金剛草履と名を付けて、花子さまが坊主になれば、これを穿かせ、色に迷へば越度となる。よし〳〵。

　ト思ひ入れあつて御朱印の箱を取上げ、金剛草履と兩手に持ち

その上にて御朱印の箱の中へ、金剛草履を入れて置けば、盜賊は花子の前で、過りは櫻姫、姉妹一緒に罪に取つて落すは、上々吉の分別、うまい〳〵。

　ト思ひ入れ。ゴンと時の鐘鳴る。隅田平伏りして

措きやアがれ。時の鐘といふやつさ。

　トチヨン〳〵音樂になり、道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、竹のふし欄干、御簾一面に上げおろし。見附金襖り附佛殿。爰に繪馬かけてある。平舞臺、下の方、杉戸口出入り。爰に奧女中大勢、各自角盥、湯つぎ、手拭を掛け、

腰元、みだれ箱、鼻紙臺、何れも蒔繪にて、これを持ち、立ちかゝり居る。音樂にて道具とまる。

關屋　最早放參の鐘に間もござんすまいから

都　此やうに花子さま御剃髪のお支度を

皆々　急ぎますわいなア。

ト唄になり、向うよりお初、着流しにて、袱紗包みを持ち出で來て

はつ　どなた樣も、これにお出で遊ばされましたか。

ト築地、七浦、ちろりと見て知らぬ振り。

築地　花子さまの御用が後れる。早う行かしやんせ。

トわざとお初の方へ寄り、行かうとする。

はつ　アヽモシ、ちとお頼み申し上げまする。

ト七浦築地の袖を控へる。

築地　エヽ、忙しいわいの。

トお初を突き退ける。

女皆　こなさんは尾上さまの女中衆。

はつ　ハイ、初でござりまする。

築地　その初なら、お姫様の御用の邪魔せにやならぬか。

七岡　これも大方、尾上どのゝ云ひつけであらう。

両人　さうでもあらうがの／＼。

はつ　イヱ、どう致して。マア、お邪魔は致しませぬ。どうぞ主人の尾上へ

四人　エヽ、知らぬわいなう。

ト　お初を睨め廻す。お初迷惑がりし思ひ入れ。

はつ　ハイ、どうぞお願ひ申し上げます。

霧島　部屋方者なら部屋方のやうに、お留守を大事にせねばならぬ身で、お姫さまのお出で先。

柏木　この清水へは何しにおぢやつた。

はつ　ハイ、主人尾上が大切に致しまする九重のお守り、それを忘れられましたゆゑ、心がゝりでござりませうと、それゆゑ持つて参りました。闘屋さま、どうぞお届けなされて下さりませ。

ト　守りを出して渡す。闘屋受取り

闘屋　そのお守りは、わしが届けて上げませうわいなう。

築地　ハア、、そんならこりや、わたしどもが取次いでは、盗まれでもせうと思うて居るか。さう聞けば此方では知らぬ。

霧島　さうしてマア、わがみ達の來る所でもない所へ來て、何ぢや。

四人　立ちや〳〵。立ちやらぬか。慮外者めが。

はつ　ハイ。

ト下の方の杉戸へお初入る。奥にて

呼び　御剃髮の刻限。

ト呼ぶ。

四人　ほんに部屋方者は、物知らずぢやわいなア。

ト琴唄になり、下の方より岩藤、三寶に紫の法衣、錦の袈裟を載せて持ち、尾上引添ひ出て來る。此うち御簾一面に上がる。結構なる衾の上に花子、櫻姫と並び居る。皆々平伏する。

岩藤　只今阿闍梨樣よりも私しを召され、七條のお袈裟に紫法衣、花子さまへ贈り參らせ、未の下刻は放參にて、鐘もろともに御剃髮、何かの御用意ある樣にと、仰せ渡されにござりまする。

ト花子の前へ直す。花子取つて戴く。

女菅　すりや、どうあつても

花子　法の門出が嬉しいわいなア。

　ト皆々じつとなる。花子懐より以前の繪姿を出し

思へばお果て遊ばされし、松若さまの此お姿繪、殿御の菩提に今日の剃髪。

　トまた最前の都鳥の一巻を出し

殊に最前この一巻、三悪道に迷ひ給ひし物語りに、佛に仕へ、このお姿繪に回向して追善供養。

尾上、近う。

尾上　ハア。

　ト合ひ方になり、尾上、花子が側へ行く。

花子　この都鳥の一巻は、申さば松若さまのお形見なれば、大切にして、吉田家の菩提所へ納めてたもひなう。

　ト一巻を渡す。待乳取つて三方に載せ尾上へ渡す。岩藤これを見て思ひ入れ。

尾上　お形見とあれば大切なる一巻、尾上にお預け下されまする段、冥加に叶ひ、有り難う存じまする。

　ト岩藤むつとする。

岩藤　尾上どのは、果報者ぢやわいなう。

尾上　エ。

ト思ひ入れ。岩藤前に出て

岩藤　たとへ花子さまが其お形見を、お預けあらうとも、先づ一旦辭退して、岩藤どのへと申し上げられさうなものぢやぞえ。御首尾の好いをかさに被て、局役の私しを差措き、何ぢやゝら、當時お氣に入りの尾上どのでなければならぬやうに、局役は、有つても無うてもの事ぢや。隨分と御前よろしく、お勤めなさるゝがようござりまする。

尾上　イエ／＼、無調法な私しに、何事に依らずお指圖を

岩藤　なんの、そもじの樣に發明で、この岩藤が指圖を受けられさうなものかいなァ。尾上どのは歷きとした、親御はしかも本町で名高い町人、塚本屋佐五右衞門とやらいふ、お表の御用を勤めて身上よし。その金持ち顏が鼻の先へ、ぶらり／＼ぶら付いて居る、その顏に見えるわいの。なんぼ金持ちの娘でも、お役向きは御中老、この岩藤は局役、お表ならば御用人格ぢやぞや。女子一通りの事は勿論、萬一狼籍者が切り入るか、又は盜賊などが御寢所近う入るまいものでもない。その時は役柄ぢやに依つて、女ながらも御前を固め、討取る器量が無ければならぬ御奉公ぢやが、尾

上どの、定めし長刀の一手も、心得てござらうがの。

尾上　ハイ、その儀は。

岩藤　誰れに稽古なされた。お發明ぢやに依つて、お嗜みがあらう。どなたのお弟子でござります。

尾上　サア、その御指南を受けましたは

ト　つかへる。

岩藤　先生はどなたえ。御流儀はえ。眞影流か、但し眞刀流かえ。これいなう、人にばつかり物云はせ、挨拶せぬのは、アノ、武藝に心掛けは無いのかえ。イヤ、ほんに厚かましい者があるものぢや。コレ、その職に居て、その道を知らぬは、祿盜人ぢや。

ト　きつと云ふ。尾上むつとする。

アノ知行盜人と云ふわいなう。盜人々々、イヨ、盜人さまめ。サア、斯う云はれるが口惜しくば、今この所で、岩藤と立合つて御覧じやれ。

ト　まくしかけて云ふ。尾上思ひ入れあつて、ちつと俯向く。皆々思ひ入れ。

關屋　イヤ、お二方樣の御前、十種香などのお望みならよろしうござりませうが、殊に只今佛門にお入り遊ばさるゝ折なれば、武藝の試合ひは


清玄尼
岩井半四郎
豊国画



トこの時御簾半ば下りる。

譬はゞ御簾のお透き見でも何とやら。

トこの時下の方の杉戸を明け、お初出かゝり窺ひ居る。

岩藤　イヤ、苦しうござらぬ。この經殿に安置あるは、田村堂の觀音さま、大悲の利劍、千本の矢先と同佛でも、弓矢、木太刀の繪馬の奉納物、御寳前での武の試み、尾上どの、立合はずば、御中老の役目が濟むまいがの。

七浦　尾上さまのお相手なら、世間晴れて御前にて、一番勝負して見たい。

築地　私しはこれでも、岩藤さまの一番弟子、劍術柔術の大達人、嘘をつきぢでない事よ。

柏木　いつぞは本まに汗かいて、どうぞ相手になりたうて、何處も彼處もむづ〳〵と、毛槍すやりの早業早速。

霧島　長刀ならばわたしが得手物、仕事上手で相手には、嫌ひは無き達者もの。

四人　サア、立合うて御覽じませ。

尾上　サア、それは。

四人　どうぢやぞいなア……エヽ、爰へ出やしやんせ。

ト引ッ立てにかゝる。お初さつと前へ出て

はつ　憚りながら、マア〳〵お待ち下さりませう。

尾上　ヤア、其方は初ぢやないか。

はつ　ハイ、左樣でござりまする。

尾上　これはしたり、わがみ達の參る所ではない。殊にお二方さまの御前ぢや。下がりや。

はつ　ハイ〳〵。

尾上　早く下がらぬか。

ト思ひ入れにて、ふゝ、お初おず〳〵立上がり、花道へかゝる。

岩藤　コリヤ、待て〳〵。

トこれにてお初花道にとゞまり平伏する。

そちや尾上の召使ひ初ではないか……部屋方者の身を以て、何しに來たのぢや。コリヤヤイ、お二方さまのお目通りへ、誰れが許して出たのぢや。慮外者めが。下がらぬか。

はつ　ハイ、誰れも許しは致しませぬが、ちと御願ひがござりまして、それゆゑ無禮慮外も顧みず、これへ出ましてござりまする。

岩藤　そりや誰れに願ひに。

はつ　あなた樣に。

岩藤　ヤ。

はつ　只今あれにて承りますれば、主人尾上を相手に、立合ひとやらんを、御覽なされたいとのお望み。御存じの通り尾上ことは、町人の娘ではござりますれど、お宮仕へを致しますれば、少しはその心がけがござりまする。召仕ひの私しへも、小太刀の一手位ゐは、敎へ置きましてござりまする。その名代と申しまするも、恐れ多い事でござりまするが、私しをお相手に遊ばされますれば、尾上が手練も知れませうかと存じますれば、憚りながら、お相手になされて下されませうならば、有り難う存じまする。

ト思ひ入れある。尾上もこなし。

岩藤　アノ、部屋方者の其方へ、尾上が

はつ　長刀の一手も、敎へ置きましてござりまする。

岩藤　ムウ。

ト思ひ入れ。

笹地　イヤ、岩藤さま、折角の願ひ、叩き据ゑて遣はされませ。
岩藤　このやうに致さう、コレ初、心根が不便ぢや。其方が願ひ聞き届けた。叶へてやらう。
はつ　ナニ、お叶へなされて下さりまするか。
岩藤　イヤ、岩藤が相手はならぬ。相手にはわしが弟子。アノ霧島、コレ、大儀ながら打擲してやれ。
霧島　畏りました……コレ、初や、其方は身を知らぬ者ぢやぞいの。
はつ　これは何方かと存じましたら、有り難う存じまする。
霧島　今に足腰の立たぬやうになるのを、有り難いとは笑止やな。
関屋　コレ、初、お二方さまの御前といひ、有り難いこの場の立合ひ、随分共に心を付けて……サヽ、これへ、これへ。

ト　お初思ひ入れ。

はつ　ハツ。

トもぢ〳〵思ひ入れ。

関屋　ハテ、何にも遠慮には及ばぬ。お局さまのお指図といひ、サヽ、早く〳〵。

トお初思ひ入れあつて立上がり、岩藤の方へ扣へる。

柏尾　幸ひ〳〵、観音様へ御奉納の繪馬の竹刀を。

ト二重舞臺へ上がり、繪馬を取つて竹刀を眞中へ直す。

岩藤　双方ともに、支度しや。

初霧　畏りました。

ト白囃子になり、兩人支度あり、二重舞臺へ式して竹刀を取上げ、色々立廻りあつて、お初、霧島をしたゝかに打つ。七浦、柏尾、築地野かゝるを、立廻りあつて散々に打据ゑる。尾上こなし。お初一人づゝ塵を拂ふ。四人お初を睨みつけ

四人　よう酷い目にあはしやつたなう。

はつ　御免なされて下さりませ。

ト思ひ入れあつて行かうとするを

岩藤　コレ、待ちや。

はつ　御用でござりまするか。

岩藤　其方の手の内、あんまり見事ぢやに依つて、わしが相手になつてやらう。

はつ　勿體ない、どうしてあなた様と。

岩藤　そんなら尾上と立合はうか。

はつ　サアそれは。

岩藤　サア

はつ　サア〳〵

岩藤　何とぢや。

はつ　ハイ、それ程までに仰しやりまする事なれば、憚りながらお相手に。

岩藤　すりや、立合ふか。

はつ　畏りましてござりまする。

岩藤　サ、支度しや。

はつ　ハツ。

ト白囃子になり、四人手傳ひ、岩藤支度する。合ひ方、眞中へ出て

岩藤　初は仕合せ者ぢや。

ト突然に打つてかゝる。お初手早く竹刀を持つて受留め、立廻り、兩人きつと見得。これより三味線入りの白囃子になり、立廻りよろしく

はつ　これではお相手になられませうか。

岩藤　なか〳〵味をやるわいの……ところを斯うして。

ト矢張り右の鳴り物にて又立廻り。

はつ　これでは如何でござりませう。

岩藤　オヽ、出かす〳〵。ところを

ト身を躱して打つてかゝる立廻り。トヾお初、岩藤の小手をしたゝかに打つ。岩藤「ウム」となる。お初直ぐに竹刀を打落さうとして、思ひ入れあつて、岩藤が持つたる竹刀をそつと取り、これを持つて立ちかゝる。敵役四人立ちかゝる。尾上「コレ」と思ひ入れ。お初こなしあつて右の竹刀をば岩藤が前へ置き、下がらうとする。この時岩藤心付き、竹刀を取つてお初を散々に打つ。

岩藤が手練の早速、なんと骨身に徹へたか。

はつ　イエ〳〵、そりや御卑怯でござりまする。先を取つたる私しの勝、御遠慮いたして扣へたを、騙し打ちに。

岩藤　黙れ〳〵、黙り居らう。口強情にこの場の云ひ譯。互ひに武藝を顯す立合ひ、なんの遠慮も會釋もいらぬ。わがみ勝なら、なぜ私を打たぬのじや。心根が不便さにあしらうて居たを、誠と心

得付け入る無體。打据ゑたは以後の見せしめ、その未熟の手の内、お相手なぞとはすさまじい。それで尾上が手練も知れた。もう四五年も稽古しや。どうしてわしに歯が立つものか。ホヽヽヽ。

はつ　慮外か未熟か、あなたの竹刀を打落しました上からは。

ト立ちかゝるを、尾上、つか〳〵と行き、扇にて打据ゑ

尾上　慮外者めが。お二方さまの御前といひ、あなたをどなたぢやと思ふ。お局さまぢやぞ……お屋敷の中で、まあや〳〵と思うたに、物の見事に

ト嬉しきこなし。これを隠して

サア、見事あなたのお相手になられうと思ふか。無禮者。

はつ　御免なされて下さりませ。

ト思ひ入れ。

櫻町　末の者には似合はぬ、初とやらが手の内。尾上、目を懸けてやりやいなう。

尾上　有難う存じまする。岩藤さま、さぞお腹も立ちませうが、何を申すも、賤しい者でござりますれば、御料簡なされて下さりませ。

岩藤　實にいなア、みんな此方が悪いゆゑ、お詫びには及びませぬ。

ト云ふ。尾上思ひ入れあつて

尾上　アレ、岩藤さまのお詞を聞いたか。必ず詫びるに及ばぬとの事。其方が身に取つては、有り難い事ぢやに依つて、これに付けてもお上の御恩を忘れぬやうに、御奉公大事に致せ。お免しあらば身の喜び。早うお次へ立ちや。

はつ　エヽ、有り難う存じまする。

トお初思ひ入れあつて杉戸の内へ入る。放參の鐘鳴る。

岩藤　ありや放參の鐘。

ト音樂になる。上の御簾卷上げる。花子坐り居る。下座より新清水の住僧轟坊、黄衣の形にて、水晶の珠數と柄香爐を持ち、跡より腰衣の同宿二人、香合を持ち出て來て

轟　花子の前には、かねて佛門に歸衣あつて、佛の御弟子となられたれば、只今より受戒の身。

僧一　佛說是普門品時。

僧二　衣中八萬四千衆生。

僧一　開發無等々。

兩人　阿耨多羅三藐三菩提心。

花子　思ひ廻せばたらちねの

櫻姫　かゝれとてしも烏羽玉の

花子　我が黒髮の撫でずやあらん。

清玄　五重の脉五戒を保てば、即ち法名は清玄比丘尼。

皆々　すりや、清水の清玄さまとや。

清玄　放逸の隔を違はず剃髮あつて、一切衆生陀羅尼を唱へ、佛に仕ふる身となれば、中門の内の水は、都清水の寫し、一切功德に勝りたる清水、これへ參つて水を汲まれよ。

ト此の時下の方より隅田平、以前の金剛草履を持ち出て來る。

隅田　清玄さまには、阿闍梨さまよりお授けあつて、佛足守護の金剛草履を、差上げまするでござりませう。

清玄　瑠璃金色の法の道は、その佛足にて歩みを運び、阿伽の水汲み花摘みて、觀音薩陀へ獻げられよ。なを佛足なれば佛間より。

隅田　これまで拙者も彼君の、お草履藏みし下部が名殘。せめてはこれなる佛足を、直し申して身の功德。皆々さま、御免下さりませう。

ト同宿草履を受取る。此うち轟坊二重舞臺へ上がる、皆々剃刀の盥を直す。

櫻姫　すりや、姉上さま。

轟　清玄尼には、はや佛名。

ト岩藤思ひ入れ。

岩藤　鐘の響ともろともに、あたら柳の黒髪を

尾上　おろし給ふと思へば、胸が張裂く程

皆々　櫻姫さま。

櫻姫　皆の者。

皆々　おいとしうござりますわいの。

ト花子思ひ入れ、合掌して

花子　南無大慈大悲の觀世音菩薩。

皆々　南無阿彌陀佛。

ト憂ひのこなし。唄になり、御簾一面に下りる。隅田平下の方へ入る。皆々思ひ入れあつて、岩藤、尾上、辭儀して入る。このうち下の杉戸よりお初出て、思ひ入れあつて

はつ　ほんにマア、おいたはしいは姫君さま、花の蕾みのお姿を、お變へなされて尼法師、下々であらうならば、お十九やそこらでは何のマア、後生どころか。上々さまのお心は、また格別なものぢやわいの。御殊勝な姫君さまに引替へて、お局さまの意地の惡さとした事が、お心好しの旦那さまを擬へて、云ひたいがい。そしてマア、いま竹刀打ちにもわたしが勝つたを、何おやの彼おやのと無理云うて、したゝかに叩きくさつて……これがほんの、くほい所へ水とやら、腹が立つても仕樣はなし。アヽまゝよ。わしはどのやうになつても、旦那さまに何事も無ければよいといふものぢや。斯ういふ内、もう御歸館に間もあるまい。ドリヤ、お先へ行て、お歸りを待ちませうか。

ト唄になり、お何花道へかゝり、思ひ入れ。双盤になり、向うへ入る。矢張り双盤にて道具廻る。

本舞臺、一面に元の清水の道具。上の方に假番屋、幕張つてあり、下の方石の井戸「ふへらう水」といふ建て札。眞中に合羽箱、次に挟み箱、その上に櫻姫腰掛け、煙草のんで居る。關屋眞弦を差出して居る。侍女二人附添ひ、陽田平心を配つて居る。三味線入りの騷ぎのウトメにて道具とまる。

櫻姫　常陸之助さまはまだかや。

關屋　待たるゝとも待つ身になるなとは、よう云うたもの。

綾瀬　もうお出でなされさうなものぢやなア。

隅田　エヽヽ　こぢれつたい。おれなれば疾うに來て、ツイ、ちよん〳〵の花見まで、露に濡るゝであらうのに。ドレ、ちよつとお迎ひに行つて來よう。

ト下座の方へ行く。思ひ入れにて

ヤアヽ、ござつたぞ〳〵。モシ、櫻姫さま、常陸之助さまがござつた〳〵。節季候ぢやない、せき切つて此方は待ちかね。皆下に居ろ〳〵。

ト女形皆々下に居り

綾瀬　ハイ〳〵。

ト辭儀をして

關屋　隅田平どの、戀のお取持ちに此やうに、お辭儀してゐては、埒が明くまいぞえ。

隅田　成る程、こりやお辭儀なしに、据ゑ膳を食はつしやるがよい。

ト鎌助走り來て

鎌助　モシ〳〵、おらがお旦那、ござつたぞ〳〵。

隅田　常陸之助さまには、早くこれへござれや。此方は、せきぞろ〳〵。

ト立騷ぐ。松若丸出て來て

松若　櫻姫どのには、これにござつたか。

隅田　あなたのお出でを、大抵此方はせきぞろで

關屋　お待ちかね申した事ぢやござりませぬ。

松若　承れば花子どのには、もはや御剃髮も相濟むとござるが、定めて櫻姫どのにも、安堵いたされてござらう。

櫻姫　姉上さまの事を思へば、ほんにおいとしう存じまするわいなア。

關屋　申し、櫻姫さま、其やうな事を思し召しますと、何や彼やのお心がゝり。そんな時にはお氣晴らしに

綾瀨　煙草は辛苦を忘れ草と申しますれば

關屋　あなたからお吸つけ遊ばされまして。

櫻姫　吸ひつけて如何するのぢや。

隅田　成る程、お姫さまが吸つけ煙草を御存じなきは御尤も。こちとらが樣に、ずどんと放した鐵砲見世、煙草しめれば三々九度、やう〳〵に吸ひ付たのを、呑むと其まゝちぎりきな、路地の鐵棒音にび

つくり、歸りがけに又一服と、別れの煙草。うまい契りを煙草でばつかり、濟む身の上と、あなたがたとは、同一にはならぬ筈。

鎌助　どうで命を限りといふ、うまいところへ、もう路地は締りますと、云はれるこちとらとは、お月樣とすつぽん程、違ふ思ひでぢれつたい。

問屋　ほんに辛氣な事でござりますわいなア。

櫻姫　それ〳〵、煙草は辛苦を忘れ草と申しますれば

ト煙草のんで居る。

鎌助　モシ、旦那、あのお煙管を。

ト取つてのめといふこなし。

松若　その辛苦晴らしに某にも、ドレ一服。

ト合羽箱に腰を掛け、櫻姫の煙管を取つて煙草をのむ。

櫻姫　これは憚りでござりまする。

松若　未だ某降参の一埓、願ひの儀相濟まねば、表立たぬ事ながら、侍女腰元の志しにて

淺茅　善は急げ、惡は延べいと申す事もござりますれば、丁度只今何や彼やの御首尾。

綾瀬　客殿や庫裡では、人目があつて惡うござりますから、ちよつと最前わたしが見て置きました、氣の付かぬこの番屋。
松若　すりや、誰れ憚らず
櫻姫　御婚禮のその前に。
女皆　こりや内證の御婚禮。
櫻姫　ホヽヽヽ。

ト恥かしきこなし。此うち下座より花子、帽子紫衣、錦の袈裟の形にて、水晶の珠數を持ち、樒の入りたる花手桶を持ち、右の金剛草履を穿き、同宿二人、女中侍女四人附添ひ出て來る。

櫻姫　久方の長閑けき春の今日よりも、お緣ひ申せし姉上さまに、あはれ暫しは別れしも、飾りをおろし給ひしより、明行く雲は紫の
花子　三衣のあかつき眞如の月、眺むる心の身となりしは
同宿　世を觀念の衆生濟度。
花子　觀音さまへ奉る、閼伽の水汲み花摘みに

ト下の井戸の方へ行く。

關屋　この井のもとへお手づから、お出でなさるゝ御有樣。
隅田　思へば吹雪の櫻と共に
都　散り行く花の
皆々　お姿でござりまするわいなア
トこの時花子、松若丸をちよつと見て、心得ぬこなしにて
花子　それにお出でなさるゝお方は。
櫻姫　あなたは。
ト恥かしきこなし。
關屋　櫻姫さまのお云ひ號けの、常陸之助さまでござりまする。
花子　エ。
ト思ひ入れ。
これはお初にお目にかゝりまする。
松若　さては、こなたが櫻姫どのゝ姉上、花子の前。承れば今日御剃髮あつて清玄尼どの、某ヽ妹御とは云ひ號けの名はあれど、未だ婚姻濟まねば、兄妹とも申されず。併し俗緣を離るれば、こなた

には身一つ。

ト花子なほよく見て

ハテ、變つた折に對面いたしまする。

ト花子じつと思案する。

花子　そんならあなたが。

ト思ひ入れ、誂への竹笛の合ひ方になる。

妹が云ひ號けの、常陸之助さまでござりましたか。

松若　いかにも。

ト思ひ入れにて

ハテ、美しい。

トこなし、花子もぎつくり思ひ入れあつて、松若の顏をじつと見る。

同宿　モシ、阿伽のお水を。

ト花子心付き花手桶を差出す。同宿、繩釣瓶にて井戸より水を汲み、花手桶へあける。此うち花子、懷より以前の繪姿を出し、松若を見て、寸分違はぬといふこなし、大きに驚き

花子　ハテ、よう似たる

松若　ヤ。

ト思ひ入れ。

同宿　ハイ、お水を汲みましてござります。

ト花手桶を差出す。花子繪姿を懐へ入れ、花手桶を持つて思ひ入れあつて、再び顔を見ながら、じりじりとつけ廻し、花子上の方へ行く。珠數にてあたりを拂ひ、目を眠り

花子　南無大慈大悲の觀世音菩薩。

ト云ひながら思ひ入れあつて目を明く。また松若と顔見合せ、思はず花手桶を取落す。バラ／＼と毀れる。皆々驚く。花子ツイと下座へ入る。

女皆　何の事ぢや。

ト都、淺茅續いて入る。

鎌助　何だか、ねつから解らねえ。桶を落して水がこぼれると、ばた／＼。

隅田　成る程、おぬしが云ふ通り、水こぼれると、ばた／＼と行かしやれたが

ト花子の眞似をして

あれではどうやら、狂人の水こぼし。

松若　ハテ、合點の行かぬ。

櫻姫　姉上さまには、如何遊ばされたか。

閑棲　私しどもには、とんと解りませぬ。

ト松若思ひ入れあつて

松若　何は格別、櫻姫どの、枕がはしたその上にて

櫻姫　誓ひの約束御朱印を

松若　それら暫くあの番屋で

ト櫻姫、松若上の番屋へ入る。ト唄になり番屋の幕を卸す。皆々下座へ入る。隅田平殘る。下座より同宿、花子の金剛草履を持ち來り

同宿　清玄さまには、觀音堂へお入りあつて、香花を献げ、普門品を讀誦あれば、この佛足をお草履取りのこなさまへ。

隅田　すりや、このお草履を

同宿　慥かに渡しましたぞや。

ト同宿下座へ入る。三味線入りの禪のツトメになり、隅田平思ひ入れあつて、最前の箱を出し、草履片足を中へ入れ、片足を投げやり

ト云はうとして

隅田　斯うして摺りかへて、清水堂の御寶前へ入れて置けば

うまい〳〵。

ト思ひ入れあつて下座へ行かうとする。下座より尾上出て來るゆゑ、隅田平下の方へ入る。番屋の内より松若、櫻姫出て來て身形を直し居る。此うち尾上出て來り、在合ふ手桶の水を柄杓にて汲み、水をかける。三人こなしあつて

尾上　これは常陸之助賴國さま。

松若　尾上どの。

三人　ホヽヽヽ。

ト笑ふ。

櫻姫　オヽ、恥かし。

尾上　モシ、岩藤どのゝ目にかゝつては大事でござりまする。必ずともに

松若　人目の恐れ。
尾上　人目千本吉野にあらねど
松若　ヤ、その櫻は我が花と
尾上　やがて晴の御婚禮。
松若　誓ひのしるしを
櫻姫　後程きつと。
松若　忘れてたもるなよ。
尾上　エ、
櫻姫　嬉しうござんす。
尾上　あの嬉しさうなお顔わいの。

ト唄になり、松若扇遣ひして下座へ入る。このうち下座より惣太窺ひ出て

惣太　コレ、お中老さん、都鳥の一卷を取上げて、讓人も寄越さず、どうするつもりだよ。
尾上　讓人は追つての沙汰に及ぶ。
惣太　イヤ、呆れるワ。

櫻姫　姉上さまの大切に思し召す一巻、違はぬといふしるしはこれ。
　ト懐より最前の短冊を出す。尾上取つて
尾上　これを割符に。
　ト惣太取つて
惣太　これをしるしに褒美をしつかり。
　ト懐へ入れて。
イヤ、こんな緩慢い事ぢやァ否だ。爰で直ぐさま褒美の金を。
尾上　ハテ、聞分けの無い。
惣太　その一巻を、大方こなたが。
　ト尾上の懐へ手を入れる。
尾上　こりや理不盡な。
　ト振り拂ひ
松若さまのお形見とあるゆゑ、滅多には返されぬ。褒美を取らす。
惣太　褒美もいらない。面倒なその一巻を

ト また尾上の懐へかゝる。都鳥の一巻を出す。立廻りの内後より隅田平出て来て

隅田　こりや、何とするのぢや。

櫻姫　尾上へ慮外いたす下部。

隅田　その一巻を

ト惣太を突廻し、一巻を取る。

惣太　それをやつては。

ト取らうとするを突倒し、双盤になり、隅田平一巻を持ち、向うへ、惣太跡を追駆けて入る。

尾上　今の下部が一巻なれば、松若さまのお形見といひ、預かり申したれば大切。併し隅田平が追かけ行たれば、気遣ひはあるまい。櫻姫さまにお怪我あれば大事。まづ／＼。

ト櫻姫、尾上下座へ入る。時の鐘、合ひ方になり、下座より戸田平、頬冠りにて出て来る。堂の上に清水清玄窺ひ出て来り

戸田　人目の無きを幸ひに、清水の内陣より、繪馬堂へ忍び込み

清玄　戀の叶はぬ恨ばらしに、奪ひ取つたる寶の箱。

戸田　まんまと首尾好く

清玄　御朱印を。

ト清玄、箱の蓋を明けて見て、愕りし

ヤア、こりや御朱印ならぬ鯉魚の一軸。

ト此うち戸田平、寶箱の蓋を明けて

戸田　こりやコレ、寶は無くて草履の片し。

清玄　ムウ、闇に紛れ取違へたか。

兩人　エヽ、いま〳〵しい。

ト戸田平、清玄と顔見合せ

戸田　あなたはお旦那。

清玄　そちや戸田平。

戸田　すりや、最前の様子を

清玄　殘らずこれにて承つた。

戸田　イヤ、無駄骨を折りました。

清玄　イヤ、無駄骨でない。身共が鯉魚の一軸も、櫻姫に渡してあれば、明日の內見をしくじらすは、

幸ひ〳〵。

ト　あたりを見て、以前の金剛草履の片しを取上げ

この箱の中へ金剛草履を入れて

ト箱より一軸を出し、中へ草履を入れる。

一軸が紛失にて詮議になれば、盗んだ奴は草履の主。

ト一軸を投げやる。

戸田　こりや出来ました。斯うして置けば御朱印も、一軸も盗賊は草履の主。併しこの鯉魚の一軸を

ト一軸を取上げる。

清玄　大事ない。斯ういふ事もあらうかと、拵へ參つた一軸は似せ物。この上は、盃箱ともに、密かに忍んで内陣へ。

戸田　心得ました。

ト一軸と二つの箱を懐へ入れる。向う、ばた〳〵とする。

見咎められては一大事。

清玄　して、櫻姫を引き攫ふは。

戸田　モシ。
　　ト囁く。
清玄　すりや、入間の屋敷へ忍び込み
戸田　幸ひの合羽籠。
　　ト合羽籠を明け、中へ清玄を入れる。元庵出て
元庵　こりや此方の合羽籠。
　　トかゝる。戸田平驚き
戸田　こりやアやらぬ。
　　ト元庵を引退ける。「それを」とかゝる立廻り。
　幸ひな片荷の重り、此奴を入れて入間の屋敷へ。さうだ。
　　ト元庵を三尺手拭にて引縛り、合羽籠へ入れ、やう／＼擔ぎ上げ
　こいつは重いワ／＼。
　　ト太鼓入りの双盤にて戸田平下座へ入る。向う、ばた／＼にて隅田平、一巻を持ち、惣太追ひ駆け出
　　て來て引ッ捉へ

惣太　駄折助め。うなア太い奴だぞえ。骨を折らした金剛草履の代も寄越さず、又その上に都鳥の一巻まで締めこの兎とは、土器もどきの泥坊野郎め。さうはならない。

隅田　様子を聞けば、この一巻で吉田の嫡家の集まる品。おれも入用だ。うぬに渡して堪るものか。

惣太　さう云や、うぬを。

ト一巻を取らうとする。双盤になり、兩人一巻を柳に立廻り、よろしくひやうし　幕
し時の鐘にてツナギ。引返し早幕

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、眞中に九尺の亭屋體、丸柱、本縁側、綺麗なる葭すだれ。舞臺前、花道とも一面に流れ澤山に、白萩の花盛り。よき所に竹床几を直し、月出てあり、螢そこらに飛びかふ。すべて近江の國、野路の玉川の態。大ドロ／＼にて夜明く。

トどろ／＼打あげる。獨吟になり、向うより松若、萩の花を墨繪にしたる衣裳の心にて、腰下駄を穿き、蟲籠と銀の團扇を持ち出て來て、花道にて

松若　あすも來ん、野路の玉川萩こえて、色なる浪に月宿りけると、その近江路の玉川は、鄙びたる所と聞きたるが、この白萩の花盛りといひ、風雅の東屋、月の宿りに螢の風情。ハテ、倦きもせぬ眺

めちやなア。

ト螢を追うてゐる。また獨吟になり、簾上がると、内に花子、さけ毛のそぎ尼、紫衣の形を墨繪にしたる心の衣裳にて、經机を前に置き、經卷を持ち、讀誦してゐる。

花子 妙法蓮華經、觀世音菩薩。

ト雨車になり、月、雲に隱れる。松若、螢を拂ひながら

松若 これはしたり、雨がぼろついて來た。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來て

この野路の玉川に、珍らしい風雅の庵、主は尼御前。ア、聞えた。月の明り、螢の光りで經文を

花子 邪魔なされて下さりまするな……普門品第二十五……

ト構はずにゐる。

松若 染衣の身にはきつい慳貪。殊に雨がぼろついて參つたれば、暫らく雨宿りを

花子 アレ、また矢ッぱり妨げを

ト一心に讀誦してゐる。松若、花子をよく〳〵見て

松若　これサ、御經普誦の邪魔は致さぬ。して、こな樣は

花子　今日剃髪いたしました、清水の清玄尼と申します者でござりまする……念誦觀音力。

ト　あちら向いて經讀んでゐる。松若驚き

松若　その清玄尼このなれば、俗の名は花子の前……某はこなたと云ひ號けの、吉田の松若丸ぢやわいの。

花子　エヽ。

ト偏りして思ひ入れ。矢張り見向きもせず

何をマア。松若さまにはお行くへ知れず。お果てなされてそれゆゑに、自らがこの剃髪。

松若　疑ひ深い。この松若を死んだとは

花子　人を惑はす障化の業。エヽ、穢らはしい。

ト構はず平舞臺へ下り、上の方にて空を見て

雲も晴れたる眞如の月。南無大悲大慈觀世音菩薩。

松若　さてもつれない。三衣に似合はぬ

ト思ひ入れあつて、同じく下り來て

この盛りなる萩を眺めて、妹脊はなれず飛びかふ蜻蛉、それを捕へてこの蟲籠へ。これでも見さつしやれて、ちと氣晴らしをなさるがよい。

花子　ナニ、秋津蟲を蟲籠へ。エヽ、殺生な

ト合掌して

南無大慈大悲觀世音菩薩。重罪五逆消滅自他平等卽身成佛。

松若　この松若とは、云ひ號けでありながら、獨り卽身成佛して、某を無間地獄へ落すのか。

花子　エヽ。

ト經卷を持つて逃げようとする。松若、經の端を引ッ張る。花子驚き「アレ」と思ひ入れ。

松若　それ、經卷が破れるわいの。

ト經を枷に花子を無理に引寄せ

ともに成佛させて下されい。

ト思ひ入れ。チリ〳〵の合ひ方になり、下座より櫻ン坊、腰衣の同宿にて、大きな八丁笠をかぶり、安下駄を穿き、茶碗とちろりを持ち、合ひ方に合せ、一寸法師のやうにして出て來る。兩人見て

最早雨は上がつたに、八丁笠の酒貰ひ。慥かに狸。

花子　エヽ。

ト恟りして立上がる。

櫻坊　恟りさつしやりまするな。愚僧ぢや／＼、櫻ン坊ぢや。

ト笠を取る。

花子　ヤア、こなさんは

櫻坊　お師匠様が清玄さまへ、お経で気が塞ぎやうから、これを上げいとの云ひつけ。雨も随分降るから、肴をうんらいくうせいてん、酒に酔つたら、それこそ念彼観音力。

ト笑ひ方になり、ちろりと茶碗を置いて、櫻ン坊こなしあつて下座へ入る。

松若　そんなら罪の化け物ではなうて、御酒一ちろり。さて／＼粋な阿闍梨様。

ト花子へこなし。

花子　所詮害身者念彼観音力。

松若　コレ、其やうにひぞり切らずと

ト花子を捕ゆるを突きのけ

花子　エヽ、穢らはしい。

ト逃げるを、松若捕へてこなし。花子、松若を押退け、逃げようとして、よく〳〵見て、ギツと思ひ入れ。ギツクリとなる。誂らへの合ひ方。

成る程、あなたはお姿繪の、松若さまによう似たお方。

松若　ハテ、云ひ號けの松若ぢやもの。

花子　妹櫻姫の聟におなりなされた、常陸之助さまの、お顔も矢ツ張り生寫し。

松若　ヤア。

花子　どちらが、どうやら

ト松若の手を取り、キツと思ひ入れ。

松若　すりや、染衣の身にて穢らはしいと云はれたが、俄に心の變つたは

花子　松若さまのお姿繪に、生寫しのあなたぢやもの。

松若　ハテ、その筈、誠の吉田松若丸。

花子　とはいへ、お果てなされし我が夫。

松若　その疑ひを、晴らすはコレ

ト赤地錦の袱紗を出す。花子、悄りして

花子　これをお持ち遊はすからは

松若　たらちねの、云ひ續けせしその折に、我れへ送りし富田裂れ。

花子　エ。

ト思ひ入れ。

松若　その松若ぢやによつて、杯ごとをしようではないか。

ト茶碗を取上げて酒をつぐ。

花子　とはいへ一旦、傾城に住かへし身にて

松若　今ぢやに我れを

ト酒を飲みにかゝる。その手を押へ、持ちそへて、それなりに右の酒を一口飲む。松若、こなしあつて、茶碗を取つてグツト飲む。花子、顔見て恥かしきこなしにて、衣の袖を顔へあてる。これをキツカケに又、獨吟になり、此うち松若、捨ぜりふにて、二重舞臺へ上がり、こなしあつて、机の上にある箱入りの經卷を取つてせりふ、また舞臺へ下りて、花子の衣をとり、裾の先をとらへ、二重舞臺へ引き付ける。花子思ひ入れあつて、婦人をとめかしきこなし。獨吟一ぱいにチョンと幕下りる。合ひ方になり、下座より鼕の囃、鼓音を押へ、謳ひ出て來る。右の衣を舞臺前へ置き、裏の内の様子を窺ひ、思

ひ入れあつて此方へ來る。此うち蜻蛉出て硯蓋の上へとまる。櫻ン坊、八丁笠にて押へようとする。よき時分、薄ドロになり、蛇出る。櫻ン坊、これに恐れ、逃げて入る。大ドロ〳〵にて、屋體の內より誂らへの魂ひ現はれ、日覆へ引上げる。道具バタ〳〵と變る。大ドロ〳〵にて、道具廻る。

本舞臺、眞中、右清水の舞臺を中程にして、高欄より上ばかり見せ、結構に仕立て、舞臺前、櫻の梢ばかり、東西とも凄まじく櫻の花盛り。爰に花子の淸玄尼、花の帽子、紫衣の形にて、高欄によりかゝり、眠りゐる。大ドロ〳〵にて道具とまる。

ト日覆より魂ひ下りて來て、花子の懷へ入る。煙硝火立つ。雨窓明るくなる。花子、目を覺まし

花子 ハテ、合點のゆかぬ。迷ひの心を拂はんと、この舞臺にて普門品を唱へるうち、ついトロ〳〵と現のやうに、所も變りて近江なる、野路の玉川、白萩の、花の盛りのその中にて、逢うたは焦れた松若さまと、破戒の身となり、妹脊の語らひ。

トあたりを見て

爰は矢ツ張り、新淸水の舞臺の櫻。そんなら妹の云ひ號けの、常陸之助さまが、松若さまのお姿繪に、よう似た似たと思ふ輪廻に、心が迷うて

トちつとこなしあつて

さては今のは夢であつたか。エ、、恥かしい。どうせうぞいの〳〵。

ト思ひ入れ。

心の曇りを晴らさんと、思ふに又も追ひくる煩悩、松若さまと初めて添臥しなした夢。とても生きてはゐられぬこの身。

トあたりを見廻し、絵馬に掛けてある紅の笠を取つて、

この清水の観世音へ願ひをかけ、舞台より飛び下りても、願望叶ふその時は、身に恙はなしといへど、それには變り、この清玄尼は、舞台より飛び、身を捨てゝ、死んで未来をお頼み申さん。

すゝ、さうぢや。

ト思ひ入れ。

枯れたる木にも花の咲く、観世音の導きにて、必ず未来を助け給へ。南無大慈大悲の観世音菩薩。

ト合掌して舞台前の樒の中へ飛び下りる。舞台の上へ、パタ〳〵にて、隅田平、一巻を持ち、惣太出て引ッ返へ

隅田　ハテ、うるさくも追ひ駈け廻るな。
惣太　知れた事、この一卷は、おれの物だワ。
隅田　ところをおれが、物にするのだ。

ト一卷を奪ひ合ふ立廻り。風の音になり、この一卷を日覆へ吹きあげる。兩人驚き

兩人　ヤア〳〵、一卷を深山颪に
惣太　これも、うぬゆゑ

トありあふ傘を取つて打つてかゝる。立廻り。この傘を下へ落す。兩人よろしく組み合ひ、キッと見得。誂らへ賑やかなる鳴り物になり、チョン〳〵にて、この舞臺道具、一面にせり上げる。

本舞臺、元の清水の麓の道具になり、上の方へ音羽の瀧を押し出し、この舞臺の下に花子、前へ扇を落し、氣絶してゐる。側に松若、立ち身にて花子を見てゐる。この見得にて一面にせり上げ、道具とまる。

松若　最前より花の下にて樣子を見るに、覺悟とはいひながら、思ひ切つたる事いたして、淸玄尼には氣絶の體。

ト落したる扇を取つて見て
この扇子の歌に、慥かに順徳院の御宸筆。綸言同然。ムウ。
ト扇を懐へ入れ、花子を介抱して
清玄尼どの／＼……これ程介抱してゐ、心のつかぬは
ト雷鳴のこなし、しつぽりとした合ひ方になり、松若、滝壺の水をすくひ、保たぬゆゑ口に含み
て、花子へ口うつしに飲ませ、介抱して
コレ、清玄尼どの。
ト呼び生ける。花子、心づき、松若を見て、恟りして
花子　ヤア、松若さま。
松若　サ……イヤ、常陸之助頼國でござる。
ト花子、松若をよく／＼見て
花子　そんならアノ、死んで未来を助からんと思うたに
松若　介抱いたして甘露の瀧の
花子　水にて、つかへしこの咽喉が

松若　速かに通りたるも
花子　思へば心が
松若　附きましたか。
花子　あの瀧壺の
松若　冷水を
花子　賴國さまが
松若　口から口へ
花子　ナニ口うつしに

トぢつとなつて、思ひ入れあつて

死んで未來の松若さまにと、思ふに又も心を附けて下されたは、生寫しの常陸之助さま。すりや、どう思うても離れぬ輪廻。ア丶、死ぬるにも死なれぬかいなア。ハア丶。

ト思ひ入れあつて「ウン」とのる。下座より櫻姬、女形皆々奥女中と共に出て來て、花子を見て驚き

皆々　淸玄さまには、なんとなされました。
松若　世を思ひ切り、舞臺より、死ぬる覺悟で飛び下りての氣絶。介抱いたして心の附きしが、また此

やうに

皆々　清玄さま、お心が附きましたか。

ト花子心附き

花子　アヽ、淺ましや。迷ふまいと心を定め、死んで未來を助からんと、舞臺より身を捨てしに、死ぬに死なれぬ、矢つ張り因果。

トこなしあつて

アヽ、思ひますまい／＼。觀世音へ誓ひを立て、心がゝりの無いやうに、妹、杯事してたもひなう。

櫻姫　杯事、とはえ。

花子　其方と常陸之助さまと、三々九度の

松若　すりや、婚禮の

花子　めでたく爰で

關屋　幸ひ爰にお持たせなされた、さゝへがござりまする。

トさゝへを出して

皆々　イザ、おめでたう

ト三味線入り、禪のツトメになり、花子、思ひ切つたるこなしにて、上の方へ行く。此うち戸田平、合羽籠をかつぎ出て來り、淸玄と共に窺ひゐる。さゝへより錫の德利、杯を出し、皆々　櫻姬の前へ直し、關屋、以前の鳥籠を出し

關屋　まだお放しは遊ばさぬ、この鴛鴦は比翼のもの、島臺がはりに

七浦　なんと、斯うなされてはどうでござりませう。この妹脊の鳥を、島臺にして置かうより、したしみ深い鳥の血酒を。なう、築地野さん

築地　左樣でござりまする。何であらうと、お姬樣とお聟樣の、お仲の好いのが肝腎。私しどもなら蠑螺の黑燒で、斯う引ツついてゐたうござります。

ト柏尾へ寄り添ふ。

柏尾　おきなさんせ。お前とわたしでは、和合神のやうで、額の寒山拾得だと申しませうぞえ。

築地　わたしを寒山拾得とは、アタ好かん。

霧島　鴛鴦は執心の深いもので、夫を慕ふこの鳥の血を飮むと、猶々妹脊離れず、したしみもあると申しますれば、御婚禮の御酒の中へ

ト ボのく、鸚鵡を井にて突き殺し、徳利へ血汐を取る、皆々驚き

皆々 ヤ、。

関屋 これはしたり、霧島さん。その鸚鵡を殺さしやんしては、放生會のお妨け。

皆々 きつい殺生さしやんしたな。

霧島 ほんにマア、心附かいで、ひよんな粗相いたしました。どう致さう〳〵。

ト花子頷き

花子 オヽ、鸚鵡を殺しましたか。でも殺生な。南無大慈大悲の觀世音菩薩。

ト拜んでゐる。七浦キッとなり

七浦 霧島さんとしたことが、花子の御様の御剃髪にて、放生會を遊ばさるゝ、その鸚鵡を殺さしやんしてはすまぬ。お局様やお中老様へ申し上げて、御遠慮申しつけねばならぬ。

皆々 御遠慮しや〳〵。

ト口々に立騒ぐ。

花子 ハテ、大事ない、立騒ぎやるな。

三人 でも、放生會の、あの鸚鵡を

花子　生けるを放つその鳥を、誤まつての殺生は、無調法なれども、鳥の代りに奉公を、遠慮さするには及ばぬわいの。

霧島　エヽ、有り難う存じまする。

關屋　併しながら、御婚禮のお固めには、至極よろしいこのお酒。

皆々　左樣なれば、御緣女樣から

ト櫻姫、杯を取上げる。關屋、酌して、櫻姫飲んで松若へさす。松若同じく飲む。此うち花子、珠數を爪ぐり、いろ〳〵思ひ入れあつて

松若　初献も濟めば互ひの約束。

櫻姫　自らが御朱印を

松若　大友家の重寳、牛玉の御鏡。

ト双方出す。この時、袱紗包みの笛を落す。花子、これを見て、思はず立上がり、眞中へ來て、取上げ見て

花子　この笛は

ト松若、恟りして

松若　こりや某の

ト手早く懐へ入れる。花子、落ちたる袱紗を取つて見て、合點のゆかぬこなしにて、松若に隱し、

とつくり見て驚く。

櫻姫　互ひのしるしに

ト互ひに取かへ、櫻姫、鏡を懐へ入れる。松若、うまいトいふこなしにて、ニツコリ笑ふ。

松若　これ取らうばつかりに……ニヽ、嬉い。

ト腰印を懐中する。花子、いろ／＼思ひ入れあつて

花子　いよ／＼違はぬ松若さま。

ト云はうとする。戸田平、満玄窺ひゐる。松若、花子顔見合せ

松若　コレ……イザ、三々九度の

ト盃を差出す。櫻姫酌をする。花子思ひ入れあつて

花子　アヽシ

ト飲まうとする。皆々驚き

皆々　満玄尼さま、なんと邪魔しまする。

花子　道理こそ、思ふに違はぬ

ト繪姿を出す。

松若　その松若とやらは、叛逆人のお尋ね者。

花子　でも、見す／＼證據の

ト袱紗を出さうとして、思ひ入れ。下座より同宿二人出て

同甲　モシ、清玄尼さま、阿闍梨樣のお尋ね

同乙　何やら仰せ渡される事がござりますゆゑ

同甲　早うお連れ申して來よとの事。阿闍梨樣の御用でござりまする。

花子　阿闍梨樣の

皆々　御用とござりますなら、早うお入り遊ばしませいな。

ト花子、いろ／＼あつて

花子　云ふに云はれぬ

皆々　エ。

花子　なぜ春の夜の、月は朧であるぞいなう。

ト杯を打ちつける。唄になり、花子思ひ入れ。同宿二人附いて奥へ入る。

皆々　清玄さまには、どう遊ばしたのぢやしらぬ。

ト戸田平出て

戸田　ヤア、不義の兩人、詮議がある。動くまいぞ。

松若　不義の詮議とは。

戸田　未だ降參の願ひ相濟まざる常陸之助と、櫻姫の杯は不義同然。こんな惡事を聞き出すは、おらが旦那の役目なれば、奴が代つて、二人を召連れ

ト捧棒を引立てる。女形皆々押へる。松若、戸田平を取つて投げる。

不義の名ある兩人を、引つ立てるを、なんで投げた。

松若　未だ降參を願ひ中なれど、比企の判官どのゝ內意にて、內祝言のこの杯。これでも申し分あるか。

戸田　サア、それは。

ト清玄出て

清玄　この祝言の杯は、それでも濟まうが、降參の願ひ相濟まぬうち、常陸之助と櫻姫に、杯さすれば

入間郡領は、叛逆人の一味徒黨だ。

松櫻　サアそれは。

皆々　サア／＼／＼。

清玄　この云ひ譯はあるまいが。

ト下座より轟坊出て來り

轟坊　イヤ、その杯は婚禮の、取結びではござらぬ。

清玄　ヤア、なんと。

轟坊　その證據にはこの阿闍梨、櫻姫どのより、杯を受け申さう。

皆々　エヽ。

清玄　ナニ阿闍梨どの、櫻姫の杯を受けるとは心得ぬ。出家たる身は女の手より、物を取ると五百生が間、手無き者に生れるといふ

轟坊　イヽヤ、この酒は當境內の鎭守の神酒、愚僧も隨分頂戴いたす。

松若　ナニ、この酒が神酒とや。

清玄　して、その鎭守は

轟坊　櫻姫。
松若　ヤア。
　　ト思ひ入れ。
皆々　ナニ櫻姫の、御神酒とはえ。
清玄　珍らしい事を聞くものだ。櫻姫といふ神の名は、神武以來はじめて聞いた。
戸田　阿闍梨か網か知らないが、この場をたき身に云ひ拔けても、猿ぼう眼で見拔いて置いた。生臭坊
　主め、馬鹿つくすな。
轟坊　いかに凡俗とはいひながら、知らずば云うて聞かさうか。
清玄　ム、聞かうワ。
轟坊　郁、東山の清水を、武藏の當寺に移したれば、この石塚を清玄坂、上なるは櫻姫の宮。
清戸　ヤア。
轟坊　卸る木花咲耶姫、富士淺間を勸請すれば、咲耶姫の宮、淺間坂、それを世の人誤まつて、清玄坂
　櫻姫の宮の神水。
松若　ハテ、珍らしき方言を聞くものかな。この石塚を誤まつて、清玄塚と申すゆゑ

櫻姬　上なる洞の櫻姬は、咲耶姬さまとや。

轟坊　當寺の鎭守は富士淺間、今も武藏の高田在、練馬の道にあれば、尋ねて見やれ。

淸玄　そんなら不義とも、叛逆ともいはれぬのか。

松若　詮議おしやれ。

戸田　サアそれは

松若　慮外な下郎め。

ト戸田平を引ッ捕へる。立廻りにて松若、懷より御朱印を落す。戸田平取つて

戸田　こりや御朱印

ト取つて下座へ逃げて入る。松若驚き、追ひかけ入る。

轟坊　神酒頂戴は阿闍梨が役。イザ

ト杯を取上げる。

櫻姬　ヤア申し、この神酒には

ト手を押へる。

轟坊　ハテ面妖な。神酒頂戴を、なぜ止め召さる。

皆々 その御神酒には
清玄 何とかうした。
皆々 閻魔堂様には、その御神酒を
清玄 飲まぬは矢ッ張り破戒か。
皆々 サアそれは
清玄 但し食ふか。
皆々 サア。
ト此うち花子、ツカ〳〵と出て、森坊の持つてゐる杯を取つて、ぐつと飲む。皆々驚き
駒屋 清玄さまには、その御神酒を
花子 頂戴いたしてござりまする。
森坊 閻魔堂が代りに清玄尼が、御酒頂戴。清玄どのには、彼れこれと申さるゝが、何と致した。
清玄 ム、、ハ、、、、、。甘口な云ひ譯なれど、清玄が身を捨てゝ、破戒の身となつたれば、それで
ちつとは腹が癒えた。
森坊 合點のゆかぬ。清玄が御酒頂戴なしたるを、破戒なりとお云やるは

清玄　さう云ふ阿闍梨のうつそりだ。最前婚禮の杯に、妹脊を結ぶ好き鳥と、鴛鴦の血汐を絞り、酒に入れ、それを飲んだる清玄尼、云はずと知れた破戒の比丘尼。

轟坊　すりや、愚僧の代りに飲んだる神酒は、アノ鴛鴦の血酒とや。

ト大きに驚く。清玄、櫻姫へこなしあつて

清玄　これにつけても櫻……イヤ、櫻姫どのと、常陸之助どのゝ婚禮も相濟み、郡領どのもさぞかし喜び……イヤナニ櫻姫どの、明日對面いたすでござらう。

ト唄になり、清玄思ひ入れあつて向うへ入る。櫻姫、花子の側へ行き

櫻姫　申し、姉上樣、なんと致しませうぞいなア。

トこの時、下座より尾上出て

尾上　お供揃ひに取紛れまして遲れましたが、何かの樣子承りまして、尾上が當惑。清玄尼さま、是非もない事でござります。

花子　捨てかねし、身を捨てゝこそ浮かむ瀬と……とてもこの身は、諦めてゐるわいなア。

轟坊　知らぬ事とて婚禮の杯を、叛逆と云ひなせしは、清玄が役目の權威。咲耶姫の神酒なりと云ひくろめたが、妄語の佛罰、折角染衣の身となりし、清玄尼に破戒させたる、阿闍梨が心は未來永劫

地獄へ落つる苦しみでござるわいなう。

ト思ひ入のこなし。花子思ひ入れあつて提子を取り、前へ出す。靜かなる合ひ方。

皆々　これは。

花子　清玄尼が破衣のお祝ひ。

轟坊　すりや、鬱金の釿酒を飲みたる印にて。

皆々　おいとしい事でござりますなア。

轟坊　無常の風は時を待たず、盛りの花も嵐と散る。たま／＼受けがたき佛體を得て、佛の御弟子となつたるに、方便の妄語に煩惱を救はんと、女心の淺はかに、早まつた事いたされて、殺生飲酒の、二戒を破り、これまで積りし經文もこれ限り。思へば阿闍梨は魔王の思ひ。南無大慈大悲の觀世音菩薩。

皆々　とは云ひながら清玄さまを、此まゝには。

轟坊　アイヤ、その儀は命惜しき慈悲心あれど、破戒の身となる僧尼には、情をかくるは却つて佛罰。

櫻姫　すりや、御身をいとふは

皆々　佛罰とや。

轟坊　思へば不便な。
ト花子を見て思ひ入れ。
毒龍諸恩念彼觀音。
ト唄になり、轟坊、下座へ入る。風の音、雨車、花散る。

尾上　雨を誘うて花吹雪。イザ、姫君樣。
ト風音にて、最前の一卷吹き落される。尾上取つて
こりや最前の都鳥。エヽ、忝い。
ト懐中する。花子、思ひ入れ。

花子　形見こそ、今は仇なれその一卷。

尾上　アイヤ、慥にお納め申すでござりませう。

櫻姫　思へば〳〵姉上樣

花子　お師匠樣の教へに任せ、矢張り此まゝ。

櫻姫　そのお嘆きに引かへて、自らは思ふ殿御と、嬉しい添ひ寢も、皆あなたのお情ゆゑ。

関屋　是非もなき淸玄尼さまの御有樣……アイヤ、お局はじめ俱廻りは、眞珠院に相殘れば、淸玄さま

にはお跡から。

[illegible] イヤ様これは跡から。

ト花子思ひ入れ。

自らはお先へ。

関屋 松若様の

皆々 お供を。

ト三重になり、櫻姫に女中皆々、向うへ這入る。花子残り、こなし。本釣り鐘、櫻散る。

花子 あすも見んと、思ふ心の仇ざくら、夜半に嵐の吹かぬものかは。

ト時の鐘、合ひ方になり、下座より松若、觀音像を持ち、出て来て、行かうとする。

モシ、松若さま。

松若 ヤア。

ト思ひ入れ。

花子 お懐かしうござります。

松若 其方は常陸之助殿。松若さまとは人違ひ。

ト花子思ひ入れあつて

花子　エヽ、人達ひとはお情ない。あなたへ操を立てゝの剃髪。入間の家を妹に立てさせ、その云ひ號けのあなた樣に、最前フッとお目もじなせしに、お姿繪の松若さまに生寫し。ハテ、よい殿御と思ふは仇と、觀念すれど勿體ない、普門品を讀みあげ申す其うちに、松若さまと添ひ寢した夢。とても生きてはゐられぬ身と、覺悟きはめて舞臺より飛び、死んだと思ふに又も御介抱、お口うつしの水の情に助けられ、賴國さまと添はうと思ふきづなを、切らうと思へど胸の炎。迷ふも道理矢ッ張りあなたは、誠の〳〵松若さまであつたもの。

松若　アヽ、コレ〳〵、松若とはそりや何事。某は常陸之助。

花子　アレマア、矢ッ張り憎らしい。最前婚禮の杯ごとのその中にて、松若さまと知つたれど、叛逆人の惡名を受け給ひ、鎌倉よりコレこの如く

ト繪姿を出し

お姿繪を以てお尋ねのお身の上。知つてもわざと申さぬは、人目を憚かる清玄尼が、云ひ號けの貞節と、思うてゐるに知らぬお顏は、そりやあんまりぢや、つれなうござりまする。お姿繪と、これほど生寫しのあなた樣が

松若　そりや心得違ひ。億兆の人同じからず、烏は烏、鷺は鷺に、似たる物はいくらもある。して花子、いよ〳〵以て、松若といふには

花子　證據のこの裂れ。これが有つては

ト最前の袱紗を出す。松若取つて思ひ入れあり

松若　これが何と致した。

花子　何としたとは、誰にも稀れなる、赤地錦の富田裂れ。云ひ號けのしるしに上げた裂れなりやもの、これをお持ちなされては

松若　ハテ、松若でなければ、どこがどこまでも

花子　すりや、此やうに申し上げても

松若　常陸之助國雄。

花子　アノ、これほど慥かな證據があつても

松若　知らぬわい。

トきつとなり、袱紗を打返し。

花子　サア、大切なる袱紗まで引裂いて……エヽ、胴慾な。たとへあなたがお名乗りなうてゐ、松若さま

に違ひない。松若さまぢや〳〵、松若さまでござりますわいなア。

ト取りつくを、没義道に振り拂ひ

松若　知らぬといふに。

トこの時、戸田平出て

戸田　その御朱印を

ト松若にかゝる。戸田平を當てる。これにて、タヂ〳〵として花子に行きあたり、倒れる。花子は松若の羽織の袖を摑みしまゝ、袖を引切り、トン〳〵と上の方へ行き、瀧壺の中へ落ちる。水の音。羽織の袖は瀧壺の縁にかゝる。松若、ツカ〳〵と花道へ行き、振りかへり

松若　ヤア、清玄尼には瀧壺へ……わしがつれないばつかりに、可哀さうな……はッつけ坊主。

ト思ひ入れ。唄になり、向うへ入る。雷の音になり、下座より隅田平出て來り

隅田　いま〳〵しく追ッかけやアがる。暫くどこぞへ

トあたりを見廻し

ヨシ〳〵、この合羽籠の中へ

ト隠れる。下座より惣太出て來て

惣太　一貫は吹き飛ばされる。あの野郎は、どこへうせやアがつた。

戸田　ドッコイ、この合羽籠を

ト擔ぎあげる。惣太、ウロ／＼尋ねる。下座より牛島軍次出て來て

軍次　ヤイ／＼、怪しき合羽籠。そりや此方の

トかゝるを、戸田平擲り切る。

惣太　ナニその中に

ト閉じくかゝるを、三人立廻り。戸田平先に合羽籠を擔ぎ、軍次跡より、一散に向うへ入る。此うち花子、瀧壺より、水に溺れ、苦しみながら、枝垂れ櫻に取附き、這ひ上がらうとしてゐる。惣太これを見て

溺れたか瀧壺に

トきつと見る。雷の音、雨車すさまじく、惣太、花子をやう／＼引あげる。花子、苦しみながら惣太に取りつき

花子　松若さま／＼。

惣太　ヤア、こなたは先刻の花子の娘。有り難い、しめたぞ／＼。

ト花子を抱く。花子、狂氣のやうになり、あちこち尋れる心。立廻りよろしく

花子　胴慾なは松若さま。恨めしいは櫻姬。

ト向うを見詰め、思ひ入れ。惣太は花子を捕へる立廻り。以前舞臺より落ちたる傘を取つて立廻り。花子行かうとするを、惣太、傘をひろげたるまゝ花子が肩先へ引ッかけ、とめる。立廻りにて兩人引合ひ、これにて傘の柄抜けて、惣太の脇腹へあたりし體にて、撞と倒れる。花子、傘の頭をかむりしまゝ花道へ、ツカ〳〵と行く。この時、雷きびしく鳴り、ガラ〳〵と落ちたる體にて、本鐵砲の音する。途端に花子、花道へバツタリこけ、かむりし傘を前へ投げ出す。この時、花帽子取れて、青坊主になり、この雷の音に驚き、耳を押へ、頭を撫でゝ、惘り思ひ入れして、右の傘の頭を持ち、スツと立ちながらこれをかむる。爰にてチヨンと木の頭、よろしく、ひやうし

幕

幕の外、本釣り鐘にて、花子思ひ入れあつて向うへ入る。跡シヤギリ。

第一番目　四建目

入間館の場

役名——中老、尾上。藪坂元庵。奴、隅田平。北條四郎義澄。侍女、關屋。奥女中、綾瀨。同

花形。同、梅田。同、侍乳。同、宮戸。同、淺茅。同、柏尾。同、築地野。同、七浦。同、霧島。
清水平馬之助清女、奴、戸田平。侍女、藤崎。家の平内左衛門長盛。尾上召仕ひ、お初。局、岩藤。

本舞臺、一面の御殿、見通しの長廊下、すべて入間の館、奥庭前の體。幕の内より管絃の合方鼓をおふし、戸田平これを聞いて居る。都、侍乳、兩方より取卷いて居る。上の方に霧島、手燭を持ち、宮戸、花形、梅田、下手を取り圍ひ、詰め寄せて居る。この見得、少しばた〳〵、管絃にて幕明く。

女皆　動くまいぞ。
戸田　こりやお女中、何とさつしやります。
霧島　何のふとは、合點の行かぬ、清女さまの下部戸田平、入間家のお庭先、まだ明やらぬ春の夜に、閒見をいれしその仔細。家來が轉り此ところへ。
都　狼藉しる町奴、入込みしには様子があらう。
侍乳　殊には今日鎌倉より、御上使様のお入りといひ
梅田　様子を聞かぬ其うちは、滅多に奥へは

三人　やる事はならぬ。

戸田　これは又迷惑千萬。清水のお供歸り、大部屋の角内めが、どぶろく酒に他愛なく、お供を缺くのが氣の毒さ、奴同士に相身互ひ、急いでとつぱ合羽籠、擔げて來ても餘所のお屋敷、勝手を存ぜず、うか〳〵と、お庭先まで參つた麁相、お女中方、免さつしやれて下さりまし。

關屋　お供先より頼まれて來たとあつても、陪臣の入る事ならぬ奥座敷、殊には他家の奴戸田平、其ままには捨て置かれぬ。

戸田　すりや、どうあつても下郎めを。

關屋　お錠口まで伴うて、役人中へこの由を

三人　屆けし上にて兎も角も。

戸田　エ、まゝよ、どうするものだ。女中を相手に云ひ譯しても、役に立たぬ水掛け論、役人衆に云ひ譯をしませう。

ト鷄鳴く。

關屋　ありやもう夜明の

三人　あの鷄。

戸田　エヽコレ、夜が白んでは。

　ト合羽籠へ思ひ入れ。女形皆々取卷いて思ひ入れ。

關屋　サア、一緒に

三人　歩みやいなう。

　ト唄になり、戸田平合羽籠に心を殘し、關屋先に女形五人跡より附いて上の方へ入る。三味線入りの下り葉になり、向うより尾上、衣裳、裲襠にて、岩藤同じく、跡より綾瀨、淺茅、常流しにて桃の花を筒に活け、持ち出づる。跡より七瀨、[illegible]、柏屋、桃の花を持ち出る。

尾上　岩藤さまにはお早いお上がり。今日は鎌倉表より、御上使のお入りとあつて、先程衆の平內左衞門さまよりのお達し。何かと一入お心遣ひに存じ上げまする。

岩藤　これは／＼御挨拶。この局より其許樣、姫君樣へ御內意の御上使とあれば、定めし御心配にござりませう。例年三月十五日は、桃園山王權現の祭禮、とりまぜた御向きの賑ひ。

綾瀨　それゆゑ桃の一枝を獻上。

三人　各自持參いたしましてござりまする。

尾上　合點の行かぬ。奧御殿のお庭先に、雨具を入れしあの籠の、何か樣子のあるべき事。綾瀨さま、

淺茅さま、とくと樣子を。

綾瀬　成る程、お供の衆の麁相なら、お表にあるべき筈。

淺茅　この奥庭にござりまするは、合點が參りませぬ。

尾上　その籠の蓋を開いて御覽なされませ。

兩人　畏りました。

ト蓋を明けようとするを、岩藤とめて

岩藤　アヽ、コレ〳〵、開いて見るには及ばぬわいの。サア〳〵待つた。

尾上　お局樣、合點の參らぬあの籠の、詮議を待てと仰しやりまするは。

岩藤　さればいの。下部どもが麁相で、取忘れたその籠、別に仔細のない事。咎め立ては、それ〴〵の役人もあり、奥向きで詮議は、無用になされませいの。

尾上　サア、その奥向きのお庭先、怪しい事と存じまするゆゑ。

岩藤　ハテ、怪しうあらうが、あるまいが、此方の不念にはならぬ事。

尾上　でも又、後日に。

岩藤　奥向きの事は局が取計らひ、お案じなされぬがようござります。

ト奥より都出て

都　尾上さま、これにお入りなされますか。最早御上使のお入りゆゑ、さき程お召しでござりまする。

尾上　御前のお召しとあらば、直ぐさま御殿へ。

岩藤　この品は、兄帝内左衛門どのゝ出仕を待ち受け、話しもあれば

綾瀬　私しども、御一緒に

尾上　それに及ぶまでござりませう。

ト眼にて知らせ、尾上こなしあつて、綾瀬、濃茶、都附いて奥へ入る。岩藤、七浦、柏尾、筑波根残る。

跡合ひ方。

柏尾　お局様、兎角何事に依らず、あの尾上が取立て。この合羽籠を怪しんでの今の詞。

七浦　お局様の御聞で、それなりに済んだれど、この奥に断うしてあるのも不思議の一つ。

筑波　蓋を開いて見たならば、様子が知れるでござりませう。

岩藤　早う開いて見や。

ト三人して立寄り、蓋を明けると、中より元成縛られた形で出る。


三建目切


四建目

柏尾　ヤ、こなさんは。

七築　藪坂元庵どの。

ト縛りを解いてやる。

元庵　ヤレ〳〵、窮屈な目に遇つた。

ト岩藤を見て

ヤ、あなたはお局様。

岩藤　合點の行かぬ。どういふ事であの中に。

元庵　イヤ、かねてあなたのお頼み、件の藥を調合いたし、お手渡しと存ずる内、御歸館觸れの混雜に奴が擔げる合羽籠、如才もなく支へるところを、つい打こまれたこの仕合せ。併し、好い所でお目にかゝりまする。

岩藤　ムウ。して局が、頼み置いた藥は。

元庵　お頼みに依つて調合いたした、拙者が祕方の啞藥。

ト懐より袱紗包みの疊紙を出して渡す。

岩藤　ムウ。すりや、これが件の祕方、啞になる藥かや。

元庵　その妹蟹を、酒に浸し服ますれば、心の臟を閉ぢ塞ぎ、啞ころになる稀代の妙藥でござりまする。

ト下座より霧島、三方に神酒德利を載せ、持つて出て

霧島　お局樣の仰せに依つて、神前に飾りある桃の酒、密かに持參いたしましてござりまする。

岩藤　よい〳〵。今日山王權現の神酒の中へ、これを密かに入れ置いて、あの尾上に用ゐれば、向後は明日もならず、御奉公も直ぐにお暇。

霧島　日頃からつべこべと口きいて、わしらを嗜ませる返報せに

七面　啞ころにしたら、何でも此方から言ひすくめて、發句には御殿をお拂ひ箱。

柏尾　仰もせたら見せて、罪に取つて消せば、お局樣の心の儘。

篠地　お神酒の中へ混へてあるとは、なんぼ賢い尾上でも、夢にも知る事ぢやござりますまい。

元庵　それに付いても、肝腎の事がござりまするぞや。

四人　肝腎の事とはや。

元庵　この毒消しが肝腎でござりまする。

ト懷より出す。

四人　何ぢや、毒消しとは。

元庵　ハテ、その啞になる藥を、どういふ機みにお前方が、服むまいものでもない。そこで前方に、この藥さへ用ゐて置けば、啞になる氣遣ひはござりませぬ。

岩藤　成る程、それも、用意は無けりやならぬ藥。

元庵　この金の色が毒消し、銀の模樣が啞藥、二種ともにお渡し申しまする。

ト渡す。この時後へ尾上出かけ、樣子を窺ひ、下座へ入る。

岩藤　成る程、神酒頂戴の折柄、念に念を入れる尾上、毒味などと云うた時はこの毒消し

霧島　差詰め鬼役のこの霧島。お流れ下さるゝは知れた事。こりや用心に、わたしが服んで置きませう。

岩藤　人目に立たぬ内に。

霧島　畏りました。

ト管絃になり、德利の口を拔き、兩方へ二種の藥を入れ

先づ斯うして、一つは毒消し、一つは毒。

岩藤　イヤ〳〵、それでも如何やら紛らはしい。それには幸ひ。

ト生簀に入れし桃の花の白と赤とを取つて二つの口へさし

白い目の白いは毒消し、赤いは毒になる藥。かんがへて、取違はぬやうに、合點か。
霧七　白いは毒消し。
柏元　赤いは毒藥。
岩藤　コレ〳〵、密かに〳〵。
　ト九つの時計鳴る。
四人　ありやもう、九つの土時計。
岩藤　この岩藤は御前へ相詰め、何かの手番ひ。この御酒を元の所へ。
元庵　して、私への御褒美は。
　ト岩藤懐中の袱紗こより包みの金を投げて遣る。元庵取つて
　こりやお金。有り難い。
　ト此時、岩藤「エイ」と懐劍を打付ける。元庵「ウヽヽ」と死ぬ。
四人　これは。
岩藤　後日の妨げ。死骸は直ぐにその瀧へ。
四人　心得ました。お局樣。

岩藤　ドリヤ、御前へ上がりませうか。
　　ト唄になり、岩藤こなしあつて下座へ入る。
霧島　成る程、抜け目の無い岩藤さま。
築地　コレ、人目にかゝらぬ様に、早う死骸を。
　　ト霧島、七浦。元庵が死骸を合羽籠へ入れる。此うち下座より尾上出て、徳利の口の花を、あちらこちらにさし替へ、懐より金の香包みを出し、毒消しの藥と摺替へ、持つて入る。此うち四人、合羽籠を元の様にして
霧島　さて、これから用向きの毒消し。
七浦　赤い方が毒ぢやぞや。
霧島　合點ぢや〳〵。一ツついでおくれ。
　　ト土器に受けて呑む。柏尾、元の様にして
　　サア、これで氣遣ひ無い。この毒消しはわしが方へ。
　　ト摺替へられし香包みを懐へ入れ
七浦　この啞藥は尾上さま。

梅尾 お神酒は、もつと元の所へ。

七浦 サア、霧島どの。

霧島 サア、ござんせ。

ト唄になり、梅尾は神酒を持ち、霧島、繁野、七浦、奥へ入る。トばつたりと寄し、下神楽になり、正面の襖を切り破り、戸田平、頬冠りをして出て、あたりを窺ひ

戸田 在所にも在る吉田の家に出ては來たが、これから直ぐに奥にも傳へ、合物籠のお旦那を、腰元の寝間さて、忍びこませるこの切り穴、この館の執權職、粂の平内左衞門さまから、云ひ附けられた廻文だ。

ト懐より廻文を出し、また袱紗に包みて、三度目の鯉魚の一軸を出し

まだその上に、お旦那清玄さまから鯉魚の一軸、これも盗うして持つては居るが、もうそれよりは欲しい状、平内どのに手渡して、褒美の金にしたいものだが。

ト懐へ入れ、下座より入寄するゆゑ身を隠すと、管絃になり、下座より静頭、袱紗に包みし宮島の一巻を持ち出で

綾瀬 これここは吉田の家に傳はりし、松若さまの御形見、宮島の一巻、尾上さまの云ひつけにて、則

殿より持ち參れと密かの仰せ。ちつとも早う。

ト行かうとするを、戸田平これを聞いて居て、つか〳〵と出て、都鳥の一卷を取らうとする。

ヤ、こなたは清玄さまの御家來戸田平、大切なこの都鳥の一卷、手をかけて何とするのぢや。

戸田　知れた事、その都鳥の一卷、おれが方にも入用だ。きり〳〵此方へ渡して行け。

綾瀨　ムウ、奥庭近く忍び入り、この一卷を奪はんとは合點が行かぬ。尾上さまへ申し上げて、其方の詮議。

戸田　ハヽヽ。うぬ等に詮議されるやうな、奴だと思ふかい。こま言吐かさずその一卷、此方へ渡せ。

ト手を掛ける。

綾瀨　イヤ、其方を。

ト管絃になり、ちよつと立廻りあつて、戸田平、都鳥の一卷を引ツ奪る。綾瀨「それを」と寄るを、立廻りにてちやつと當てる。綾瀨「ウン」と倒れる。

戸田　ソレ、都鳥の一卷だ。

ト手早く合羽籠の蓋を明け、一卷を打込み、行かうとする。綾瀨心付き

綾絹 その一卷を。

ト戸田平を捉へ、懐ろより鯉魚の一軸を引出す。

戸田 ヤア、それを。

トやるまいとするゆゑ、兩人一軸を奪ひ合ひ立廻り。この時下座より、尾上、つか〳〵と出て、戸田平を支へて一軸を取る。

綾絹 ヤア、尾上さま。

尾上 これ持つて早う。

ト綾絹へ渡す。

戸田 ヤ、此を。

ト行かうとするを留めて

尾上 爰はまかせて。

綾絹 心得ました。

ト花道へかゝる。向うにて

呼び [illegible]平内左衞門殿は。

ト呼ぶ。中の舞になり、綾瀬一軸を持ち、花道へ走り行く。向うより粂の平内左衞門、衣裳裃にて、菖蒲革の侍ひ二人附き出る。綾瀬、つかつかと平内に行き當る。平内手早く一軸を引取り、綾瀬を下の方へ突廻す。侍ひ二人綾瀬を圍ふ。此うち戸田平、ちやつと立廻つて、尾上を振り切り、花道へかゝる。平内と行逢ひ突退けやうとして、平内、戸田平が利腕を捻上げ、きつとなる、尾上見て

尾上　平内左衞門長盛さま、只今御出仕でござりまするか。

平内　この長盛が出仕の先、狼籍至極のこの振舞ひ、何さま樣子のあるべき事。それへ參つて逐一に、仔細つぶさに承るでござらう。

ト矢張り右の鳴り物にて、戸田平を捻上げながら、じりじりと、綾瀬も家來に圍はれ本舞臺へ來り

家來、女を取逃がすな。

侍ひ　ハツ。

ト戸田平振り切り、逃げうとして顏見合せ

戸田　ヤ、こなたは。

ト平内ちやつとあてる。戸田平「ウン」と倒れる。

平内　慮外な奴め。

ト思ひ入れあつて、綾瀬に目を附け

見ますれば局の中の、何か下部と立ち爭ひ、携へ持ちしこの一品、様子あらんと某が、取上げて
はござれども、尾上どの、其許、様子御存じかな。

尾上 成る程、あれなる綾瀬さまは頼まれ手。その品は私しが所持の一品。あれなる下郎、奪ひ取らん
と致せしところ、折好くも長盛さまの御出仕にて、恙なうこの場の仕合せ。

綾瀬 心急くまゝ無體の段、眞平御免下さりませ。

平内 ムウ。すりや、この一品は尾上どの、其許の御所持ある

尾上 大切な品でござります。

平内 然らばちよつと。

ト袱紗を取らうとするを

尾上 アイヤ、大切な私しが守り、御覽は御容赦下さりませ。

平内 何か様子のあるべき一巻、若しや吉田の都鳥。

尾上 エ。

平内 イヤサ、よし守りにもせよ、この場の仕儀、身共が役で

ト解かうとする手を留め

尾上　強つて御覧と仰せあらば、今あの者があなた様に、詞を交せしこの場の様子。

平内　ヤ。

尾上　引起してお表の、役所へ連れ行き、糺しませうか。

平内　アヽヤ、奥向きは格別、非道の沙汰は女中方の指圖に及ばぬ。家來に云ひつけ、身共が詮議。

尾上　左樣ござればその一品、御覧あらずと、この方へ。

平内　左程に云やるこの一品、押して開くも何とやら、先づ此まゝに

尾上　お渡し下さる事ならば、この場の事は如何やうとも、後しての御詮議、兎も角も。

平内　守りとあらば返上申す。

ト尾上に渡す。

尾上　慥かに落手いたしますれば、御用も繁き今日の奥殿。

平内　後刻出仕の節までは、然るべきやう尾上どの。其方達も次で休息。

綾瀬　御免を受けて私しも

尾上　何彼は御前で、長盛さま。

平内　尾上どの。

尾上　後程お目にかゝりませう。

ト管絃になり、尾上思ひ入れあつて、綾瀬、侍ひ二人跡に附いて入る。戸田平起きて

戸田　長盛さま。

平内　コリヤ。

ト管絃になり、戸田平あたりを見廻し

戸田　かねておことの言ひつけ申す、諸國への回文連判を手渡し致さんと、この奥庭まで忍び入り、見咎められて今の仕合せ。

平内　して、いま尾上が持ち行きし、あの一卷は。

戸田　拙者が所持の鯉魚の一卷、と心得て尾上めが。

平内　すりや、鯉魚の一軸を。

戸田　持つてるとてもあやうき物。それよりは預かり置いたこの連判。

ト回文取り出し、渡す。

平内　北條殿の諸武士を初め、縁ある方へ送る三十人の名前、事成就のその上は、恩賞進上。喜べ〳〵。

戸田　近國他國を歴巡つて、人を集めたその廻文、一廉の褒美と思つたに、事成就した上の事とは。

平内　いかにも。平内左衛門が詞に二言は無い。その時其方が望み次第。

戸田　ア、コレ、平内どの、そりやァちつと料簡違ひ。云はゞ大事の働きして、命がけの密事の使ひ。骨を折つたるこの戸田平、早いが徳の今の世の中、氣の長い事を云はずと、當座の褒美が今貰いたい。

平内　ムウ。して、其方が望みは如何ほど。

戸田　ハテ、千両でも萬両でも、多いとは云はぬ貰ひ次第、とサア、斯う云つたならお定まり、褒美をやらうと抜討ちか、ころりばつたり古いやつ。それを一倍新しく、その廻文を此方へ取り、貴様の首を一ツにして、鎌倉へ訴人すれば、一廉の褒美の金、それが近道。平内、われを。

ト抜いて切り附ける。平内突廻す。この時後の合羽籠より隅田平飛び出て、戸田平が抜身を取つてポンと切り

隅田　罰あたりめが。

ト管絃になり

平内　其方は。

隅田 疾くよりあれに隠れ居、合羽籠に身を忍び、様子を聞いて飛んで出て、後日の邪魔にと一討ちに討つて捨てたも彼奴めが最期、お指図待たず拙者めが、無礼の段は御家老様、御免なされて下さりませ。

平内 すりや、彼の中に最前より。

隅田 忍ぶ間に只今平内めが、申し聞きし一品は、吉田の重宝、都鳥、イザ、お受取りあられませう。

ト渡す。平内取つて

平内 誠にコリヤこれ都鳥の一巻、忠進でお家安泰、猿島惣太に預け置きしが、この図形に巡り来るは心得ぬ。

隅田 その猿島惣太めが、花子の絵の色香にうつゝ使れ、松若どの、形見だと、花子の絵に盗したも、おのが化かける鍵の段、重ね重ねて文元の、平内さまのお手に入つたも、別様の幸ひ。

平内 下郎ながらも親心と、彼奴が遣ひ見込みしゆゑ、預け置いたる都鳥、花子の絵の艶色に、心奪はれ、うかうかと、人手に渡せし猿島惣太、果報なき下郎に大切なも、一登汪調に預けしは、この平内が不覚の至り。様子承け貴殿が力へ、良う来る隅田平を働き、出来したく。

ト懐へ入れる。隅田平思ひ入れあつて、平内が顔にとつくと居て

隅田　平内どの、サア、すつぱりとやつて下さい。

平内　なんと。

隅田　いま戸田平めが吐かした通り、褒美は何時でもお定まり。大事を聞いたこの隅田平、下郎は口のさがなき者、どうで生けちやア置きはしまい。さすればこなたの寢覺めも氣樂だ。斯う云ふからはこの體、野へ出した死人も同然。念佛なしにすつぱりと、一思ひにやつて下さい。

平内　韓信はせう夫を害し、佐々木は浦の男を殺す。千丈の堤も蟻の諺。

隅田　血祭りがてらだ、今爰で。

平内　粂の平内が、刃の錆となしてくれう。

隅田　サア、すつぱりと。

　　ト合ひ方になり、合掌する。平内、刀を抜き、隅田平が目先へずつと差出す。ヂツと思ひ入れ。また刀の背な襟元へ當てる。構はず思ひ入れ。平内振上げて打込むを、かい潜つて緊りと留め

隅田　ドツコイ、そんなら奴が願ひの通りに

平内　身が手にかけてこの世の暇。

隅田　下郎が首を平内さまに、慥かに遣らうと覺悟の奴。

平内　それの為この場で、われが命は。

ト切つてかゝる立廻り。

隅田　進上いたさう、その代り、その懐中の

ト證文へかゝる立廻り

平内　身共に命をくれながら、この證文に心をかくるは、さてはおのれは。

隅田　せめて冥途へ行がけの

平内　駄賃に持つて行きたいか。

隅田　なんでもない事。

平内　すりや、一巻を隠したも

隅田　その證文を

ト立廻り、平内が證文を引出し

さてこそこれに。

ト平内引取る。

荷擔しませう。

平内　ヤ、なんと。
隅田　吉田の重寶を渡した奴、及ばずながらあなたの片腕。
平内　一味同心いたすぢやまで。
隅田　心置き無く腹心の
平内　ハテ、不敵の魂ひ見屆けし上からは
　　ト廻文を投げやる。隅田平取つて
隅田　すりや、この廻文を。
平内　後日のそくたく、しかと汝に。
隅田　お預けあるか。
平内　いかにも。この上猶も大望の
隅田　成就いたさば
平内　入間の家國押領なし。器量次第で
隅田　二合半から
平内　武士に取立て

隅田　槍一筋も

平内　咲かせてくれう。

隅田　然らば此まゝ。

平内　期して参會。

隅田　盛長さま。

平内　コリヤ。

ト兩人よろしく、唄になり、隅田川向うへ走り入る。平内跡見送り

下郎ながらもあの隅田平、手なづけ置かば、まさかの時の

ト思ひ入れ。戸田平心附き、よろぼひ寄つて

戸田　俺の長吏の平内長盛、企みの一々。

ト行きかゝるを引留め

平内　助け置かれぬ、下郎は口の本。

戸田　ヤ。

ト逃げやうとするを、平内抜討ちに切付、墨繩にて血刀を拭ふ、この見得、管絃にて道具廻る。

本舞臺、一面の高二重、見附金襖、上の方に九尺の亭屋體、此うち結構なる御堂に注連を張り、三方に蒔繪の箱を載せ、机に飾り、この前に幕明の神酒徳利供へあり、二重舞臺の前側、一面に御簾上下ろし、すべて入間の館奥殿の體。管絃にて道具納まる。

ト三味線入りの亂れになり、向うより清水清玄、長杜杯、大小にて、跡より關屋、待乳、都、淺茅、綾瀬續いて出て、花道に手をつかへ

關屋　清水清玄さまには、お役目とあつて當館への御入り、お出迎ひ申しましたる私しども、お案内申し上げまするでござりませう。

清玄　武將の御内意を蒙り、罷り越したる入間の館、君殿原に引替へて、物柔かき女子ばらが出迎ひ。流石大家の奥床しさ。櫻姫の館の物好き、疊觸りも無骨の清玄、役目なれば、免してくりやれ。

ト矢張り右の鳴り物にて、清玄、本舞臺へ來て、上の方床几にかゝる。女形皆々並好く列ぶと、御簾の内にて

尾上　鎌倉よりの御上使、義澄さまのお入り、いづれも御挨拶あられませう。

ト三味線入りの樂になり、一面に御簾卷上げると、二重舞臺上の方に、北條四郎義澄、長杜杯上使の

拵へにて床几にかゝり、尾上、手をつかへ居る。關屋皆々下の方へ並び

關屋 義澄さまには今日の御役目

皆々 御苦勞に存じ上げまする。

清玄 義澄どのにはお早いお越し。拙者も御同伴と存じながら、思はぬ遲參、御容赦下され。

女皆 清玄さまには、先づ〳〵これへ。

義澄 今日御上使を蒙り、當家に傳はる關八州の御朱印、並びに清玄どのゝ家の寶、鯉魚の一軸、父義時の名代として、若輩の私、内見の役目、相役の其許、萬事よろしく賴み存じまする。

清玄 何がさて拙者とても、相役とは申しながら、某が家へ傳はる鯉魚の一軸、其許が御内見、この清玄は入間家の御朱印の御内見、いづれ疎略ならざる役目、故無く相濟む上までは、心遣ひな儀でござる。

尾上 御兩所に申し上げまする。櫻姫は折惡しく風邪に冒され、引籠り居りますれば、憚りながら名代として、中老尾上、お受け申し上げまするでござりませう。

義澄 すりや櫻姫には、風邪に冒され、病氣とな。

尾上 左樣でござりまする。

清玄　エヽコレ、折悪い姫の病氣、今日の役目が丁度好い首尾……イヤサ、首尾好く内見濟むまでは、櫻姫にも心遣ひ召さらうな。

尾上　當館の鎭守、桃園山王の祭禮は、即ち今日にござりますれば、古例を以て御朱印の御内見は、入間家の古例、御内見よろしく願ひ奉りまする。

ト　この時上座にて

岩藤　憚りながら御内見、暫くお待ち下されませう。

ト管絃になり、岩藤出て來て、好き所に手をつき

先づもちまして御兩所様とも、今日のお役目、御苦勞千萬に存じ上げまする。

義澄　當館の局頭岩藤、何ゆゑあつて内見を相待てとは

清玄　仔細ばしあつての事か。

尾上　岩藤さま、御内見をお咎めありしその仔細は。

岩藤　憚りながら御兩所様へ申し上げまする。今日は當館の氏神たる、桃園山王の神事に付き、御朱印御内見は入間家の古例、即ちあれなる神前に、供へ奉りし桃の酒、その神酒を頂戴あつて後、御内見を相願ひまする當家の古例、それゆゑこの岩藤、お止め申し上げましてござりまする。

清玄 成る程、例年一月五日は、入間の鎮守山王の神事、神の酒と號し、神酒櫻盃を頂戴の上、吉凶をたゞすは古例とかねて聞き及ぶ。申さば入間の古例。

岩藤 大切なる今日の式法、その辨まへも無う只管に、御内見を願ふ尾上どの、なんぼ町家に仕へたとて、お館町の格例を、御存じないと申すもの〻、近頃麁略なお取扱ひかと存じられまするわいの。

尾上 成る程、神酒頂戴の儀も、お館の古例と存じてはありながら、折悪しき櫻姫さまの御病氣、これゆゑ名代の、この尾上なれば。

岩藤 ヲヲ、その御名代なれば、即ち姫君に成り代り、神酒頂戴あるが、古例外さぬお前のお役目。

清玄 イカサマ、神酒頂戴の古例は、鎌倉殿より定め置かれし入間家の古例、武將より下し置るゝお流れも同然、それをあだくは上への恐れ。名代とあらば中老尾上、急いで神酒を頂戴おしやれ。

岩藤 殊勝ならぬ今日の式法、遲なはつては御上使への無禮。誰ぞお次の衆、御前へ早う。

女三 ハアヽ。

ト管絃になり、下座より七瀬、柏尾、露野出て來て

二人 御用でござりまするか。

岩藤 御前に供へある神の酒、今日の御名代尾上どのへ。

三人　畏りましてござりまする。

ト柏尾、三方の徳利を其まゝ二重舞臺より持つて下りる。築地野、七浦、三方の箱を一ツづゝ持つて下りて平舞臺へ置き、下がる。

築地　御内見の二つの箱、當家の御朱印。

七浦　清玄さまお預けありし鯉魚の一軸。

柏尾　神前に供へし桃の酒。

三人　持參いたしましてござりまする。

ト岩藤こなしあつて

岩藤　サア、尾上どの、神前の神酒、急いで御頂戴。

尾上　お免しを受けまして、それへ參つて、神酒頂戴いたしませう。

ト始終此うち管絃にて、平舞臺へ下りる。

岩藤　尾上どのには姫君さまの御名代、その神酒を……十分に心を着けて。

ト柏尾に呑みこます。柏尾思ひ入れあつて

柏尾　お酌いたしまするでござりませう。

ト尾上が前を通り、下の方へ行かうとするを、尾上わざと柏尾が裾を押へる。柏尾はつたり轉び、態
利な打轉かす。

七築 ヤア、大切なその神酒を

女皆 柏尾どのが

ト柏尾倒りし狼狽へ

柏尾 イエ〱、これやわたしが粗相もやござりませぬ。アノ、尾上さまが

尾上 アイヤ、たとへ神酒はこぼれても、お土器さへ頂戴いたせば、古例外れぬ御上使の御前。

ト土器を取つて戴き、飲む眞似して

神酒頂戴仕りましてござります。

ト三方を取のける。岩藤こなしあつて

岩藤 尾上どの、見すく〱知れた今の仕儀、古例の神酒を打明けしは、柏尾どのゝ粗相にも致せ、神酒頂戴を濟んだとは、御上使の御前、この岩藤を阿房になさるゝか。但し又別に様子の有つての事か。味に依つては岩藤が、その儘には捨置きませぬぞ。

尾上 さう仰しやれば上使の御前、包むも詮無きこの場の仕儀。この神酒は怪しいと存じますゆゑ。

岩藤　ナニ、この神酒が怪しいとは、

七浦　神前に供へありし今のお神酒、怪しい事とは何が怪しみ。

柏尾　それ〳〵、大切な今の酒、我が麁相を人に塗らうと思うて、怪しい酒とは、どういふ仔細。

築地　しなに依つては御中老でも、わたしらが屹度糺さにやなりませぬ。怪しい酒と仰しやるは、何ぞ確かな

三人　證據でもござりまするか。

尾上　成る程、その證據をお目にかけませう。

三人　ナニ證據とは。

尾上　庵崎さま、霧島さまを早うこれへ。

　　ト下座にて

庵崎　ハア、。

　　ト管絃にて、庵崎、霧島をしごきにて縛り連れて出る。皆々悧り。

皆々　ヤア。お前は庵崎さま。

三人　霧島どのを縛めて、この體は。

岩藤 合點の行かぬ尾上どの、奥向きの政道事は、この局役の岩藤が支配、それに何ぞや理不盡に、縛しめの仕置立て。その上慥かな證據とは。

剛崎 イヤ、偽りながら尾上さまよりお指圖。今日おれたる神前に、供へ置きたる桃の酒、その中に毒を浸し、尾上さまを喰ころの酒にせんと工み事。只今爰にて白狀ゆゑ、何者に頼まれしか、その儀は御前で問ひ糺さんと、それゆゑの、この仕儀でござりまする。

ト岩藤ちやと思ひ入れ。清玄も思ひ入れ。

啟三 そんなら露島どのが何も知らぬ。

露島 サア、云ふまいと思へども。

ト岩藤の方へ寄るを、清玄ツカツカと行て、露島を刀の鐺にてあてる。

皆々 これは。

剛崎 詮議のある露島どのを。

清玄 ハテ、ザワザワと見苦しき、大切なる御朱印の改め、内見も許さぬうち無益の詮議、詮議は跡で。

尾上 すりや、この場にて御内見。

清玄　役目の某、義澄どの。

義澄　清玄どのにも共々に。

　　ト始終管絃にて、清玄こなしあつて二重舞臺へ上がる。

尾上　打捨て置かれぬこの場の樣子。

岩藤　ハテ、御內見遲なはつては、御上使へ無禮、上への恐れ。

　　ト三方を一つづゝ義澄と清玄が前へ直す。

尾上　イザ、御內見下されませう。

義澄　入間家の御朱印は清玄どの。

清玄　拙者が所持の鯉魚の一軸、イザ、とくと。

兩人　內見いたすでござらう。

　　トこなしあつて義澄、箱の蓋を明けて思ひ入れ。清玄同じく蓋を明け、思ひ入れあつて兩人顏見合せ

義澄　清玄どのゝ所持の箱、中老尾上預かりと聞く。それにて一應改め見よ。

清玄　入間家の御朱印も、岩藤尾上立合うて、とくとそれにて改め見よ。

岩尾　すりや、我れ／＼に。

ト きつと云ふ。岩藤、尾上、二つの箱を持つて來て、蓋を明けて、侮り思ひ入れ。

清玄　入間家の御朱印。

義治　鯉魚の一軸、我れ／＼が内見いたすは

兩人　その品々。

岩藤　このやうな御朱印と思ひの外

尾上　一軸ならぬこの草履。

岩藤　二つの箱に片しづゝ、ヤア／＼／＼。

ト驚く、尾上、中より草履を取出し

尾上　大切なる一品の、箱に入れたるこの草履は。

岩藤　青蓮を以て作りたる、佛足守護と號す草履、慥かに昨日清水にて、花子の前さま御剃髪の折柄、お用ひありし金剛草履、片しづゝ入れあつては、すりや御朱印と云ひ、一軸までも、みな清玄さまが

清玄　盗み隱してその跡へ、草履を入れしは女の淺智、見當つたる二品の紛失。

岩藤　清玄さまのこの草履、箱の中にあるからは、正しく二種ともに清玄さまが、お隱しあつたに違ひ

は無い。

尾上　岩藤さまのお詞なれど、佛足守護の金剛草履、お用ひありしは人も知る。その清玄さまがお隠しある程ならば、我れと我が身の罪科を、顯はし殘すこの草履、箱にあるべき用はなし。科を負せんその爲に、入れ置いたりと、憚りながら、この尾上は存じまする。

義澄　剃髪染衣の清水清玄、佛體受けたる尼法師、何とてかゝる仕業やあらん。よし再應の詮議もなく一圖にそれと岩藤が詞、ハテ、頼もしい局じやな。

岩藤　御上使の仰せなれど、清玄ならで用ゐぬ草履。よし又外の盗賊ならば、似寄りの、品か拵へ物、入れ置くべきを取急いで、中へ入れたる金剛草履、疑ひもないこれが證據。但し又、御朱印も一軸も奪ひし者が、外にあつてか、尾上どの。

尾上　成る程、その盗賊は外にござりまする。

岩藤　ムウ、外にあるとは、そりや何者。

尾上　關屋さま、最前の艶書を早う。

關屋　ハツ。

ト懐より三建目に清玄が持ちし文を出し

昨日清水の門前にて、御祈念終りしその折柄、御朱印の箱の傍らに、落ち散りありしこの艶書、合點行かずと持ち歸り、尾上さまにお目にかけしも、この場の幸ひ、證據の一通。

清玄　して、その文の宛名は何と

關屋　「櫻姫どのへ、清水清玄。」

清玄　ヤア、、その文は。

ト悔りするな

義岳　ハテ、何か證據の手筋とある一通なれば、清玄どの、立騷がずとお控へなされ。

尾上　關屋さま、その文箱を、この場で早う。

關屋　ハツ、

ト封じな切り

「面影の忘らるゝ間無き戀衣、淺ましき心から、常陸帶の解けやらず心を苦しめ、音羽の瀧の露はかり御聞きなされて、好しなの御返事を願ひあげ候。目出たくかしく、櫻姫どのへ、清水清玄」

清玄　サア、その艶書は。

尾上　詮議の手がゝり、櫻姫どのへ清玄と、記した名宛が證據の一通、二品の盗人が外にあると、申し

上げたこの尾上が、誤りではござりますまい。

清玄　サアそれは。

尾上　サア。

清玄　サア。

尾清　サア〳〵〳〵。

尾上　なんと確かな證據でござりませうが。

トきつと云ふ。清玄赤面して思ひ入れ。此うち岩藤、いろ〳〵こなしあつて

岩藤　成る程、その宛名が確かな證據、その文これへ。

ト取つて見る。

清玄　コレサ〳〵、お局、そりや何を云ひ召さる。その文の宛名が證據になつては。

岩藤　いよ〳〵科は、清玄さまに違ひござりますまい。

清玄　ヤ、なんと。

尾上　その文が落ちてあれば、清玄さまのなされた事とは、どういふ仔細、慥かに名宛の清水清玄。

岩藤　イヤ、こりや清玄ぢやない、訓聲が違うた。

尾上　訓聲が違うたとは。

岩藤　中の文體は、今の通り、讀むに及ばぬ。名宛は即ち、櫻姫どの、清水清玄。

尾上　エヽ。

岩藤　新清水の、照坊にて、御剃髪ありし花子さま、菩提の門の御寺をば、直ぐに御法名清水清玄さま
その清玄を讀み違へ、清水清玄とは、マア、大きな間違ひ。

尾上　でも、その文體は慥かに艶書。

岩藤　艶書とは何が艶書。コレ、とつくりと御覽じませ。

ト披き

我が身の無戒淺ましき心とは、流石輪廻を捨てかね給ふ凡夫心、云ひ號けありし松若どのゝ御事を、音羽の瀧の露ほどにも、忘るゝ間無き御心の内を、櫻姫さまへ御述懐のこの文體、艶く手爾波は女の常、認め置かれし其まゝに、取落されし清水の、内陣前の側にあつたとあれば、疑ひも無い御家寶の盗賊は、清玄さまに違ひござりますまい。

清玄　いかにも局の申す通り、その文は清水清玄、表向きは道心堅固で、内證は謀叛人の松若丸と云ひ合せ、二品ともに取隱し、入間の家を押領する、その下心に極まつた。

岩藤　殊には鯉魚の一軸は、尾上どの、こなたの預かり。さすればこれもこなたに詮議、其まゝには捨て置かれぬわいの。

尾上　この尾上にお疑ひとあれば、この方からも詮議の筋。最前供へし神酒の中に、薬を浸し入れある事は、あの霧島に問ひ狀かけ聞きたる上は、こなた樣の胸に覺えの一々も、承らねばなりませぬ。

岩藤　ナニ、この局が胸に覺えの一々。

尾上　今日上使のお入りにつき、御朱印の詮議に及び、事をくろめん其ために、桃の酒に薬を入れ、その手筈とも首尾ならず、證據の艶書を剰へ、清玄さまの仕業と云ひなし、詞を飾り、しなを付け、云ひ曲げうとなされても、お家の大事、上使の御前、打捨て置かれぬこの場の仕儀。今この場にて彼の者に、一々問はゞ事明か。一句一言岩藤さま、御返事がござりますか。

岩藤　サアそれは。

尾上　サア。

兩人　サア〳〵。

尾上　何とでござりまする。

ト詰めかけて云ふ。岩藤赤面して「ムウ」と思ひ入れ。

尾上　この上は、簪へ置いたる證據の詮議。

三人　イヤ、霧島どのは。

ト寄るを關屋隔て

關屋　御上使の御前、お控へなされませ。

ト庵崎、霧島を引起し

庵崎　最前奥にて云うた通り、お局様の計らひぢやと、早うこの場で云うたがよい。

ト霧島前へ出て、物を云はうとして、ぎよく／＼と物の云はれぬこなし。

女皆　サア、早う云はしやんせ。

トいろ／＼云ふ。霧島物云はれぬゆゑ、さては藥を間違へて飲んだと愕りしていろ／＼あり、築地野、七浦、柏尾も立寄り

柏尾　ヤア／＼、これや霧島どのは、啞になつてぢやわいの。

七浦　そんならアノ白の方を

ト三人顏見合せ

築地　こりや、ひよんな目に逢はしやんしたの。

ト霧島べそをかいて泣くこなし、岩藤ぢつと見て居る。

尾上　問じやうかけんと思ひの外、物云はれぬは庵崎さま。

庵崎　顔色とても常とは變り、一言さへも云ふ事ならぬは

關屋　合點の行かぬこの場の様子。

尾上　證據に立つべきその人が、一句も出でぬ俄の啞ころ。

庵關　何と致したのでござりませう。

ト當惑のこなし。岩藤こなしあつて

岩藤　サア、問じやうかけて云うたとは、この岩藤が事何と申しました。あの霧島が殘らず何も彼も云うたと仰しやるが、どの様な事申しましたえ。ホヽヽヽ、この岩藤が局役を嫉んで、皆さん方が、いろ／＼との拵へ事。そりやモウ、女中方の中へ入つては、不束な局役、一から十まで無調法勝ち。そりや云はいでも、いづれも様が御存じでござりますわいの。役にも立たぬ事を問はずと大切な二品の行くへ、どなたもお智恵お揮ひなされて、御詮議なさるがようござんす。

清玄　ヤア、役にも立たぬこの場の論議、二品の盜人は、清玄尼に違ひあるまい。

尾上　たとへ如何やうに仰せあるとも、清玄さまが、何ゆゑに左様な事を

岩藤　無いとあつてもこの通り。殊には昨日清水にて、松若丸のお跡を慕ひ、そゝる心にお行くへも、定かならず、聞くに及ぶ。さすればいよ／＼清玄さま。

尾上　イヤ、たとへ行くへ知れぬとて、松若さまはこの世になく、その證據に御形見、三形見のしるしたる、都鳥の一巻を、清水寺へお納めある、清玄さまの御貫心、それが即ち確かな證據。

清玄　イヤ、都鳥の一巻は、吉田の家の重寶なれば、それも矢ッ張の松若へ、密かに返りやつたであらう。

岩藤　松若どの、仕舞うへ、分明ならぬかねての取沙汰、都鳥の一巻を、何しにお寺へお納めあらう。このや、こなたが當座の云ひ譯であらうわいの。

尾上　そのお疑ひあらうかと、都鳥の一巻も、この尾上が所持いたして居ります。

清玄　すりや、都鳥の一巻は、中老尾上、其方が。

尾上　もしも紛擾の事あらんと、沖好、最前手に入れしは、清玄さまのお身の明り、疑らぬしるしのこの一巻、即ちこれに。

ト懐より出して一巻を抜き見て、觸りして

ヤ、、、こりや都鳥の一巻ならで

岩藤　ほんに、そりや鯉魚の一軸。

清玄　ナニ鯉魚の一軸とは、ドレ。

ト取つて

誠にこりや某が預け置いたる鯉魚の一軸、懐に隠し持ちたるは、さては一軸奪ひ取り、御朱印の紛失も、この清玄に負せんといふ企みであらう。何ゆゑあつて一軸を、奪ひ隠して所持なし居つた。

尾上　サア、この一軸は

岩藤　どういふ事で、その懐に持つてござつた。

尾上　サア、それは。

岩藤　こりや、御朱印の疑ひも、こなたにかゝつてあるわいの、

トこのうち霧島また前へ出て、懐ろより香包みを出して、これを呑ませてくれと仕方する。築地野見て

築地　何ぢや、薬の包みを出して見せるは。

ト取上げ見て

ヤア〳〵、この香包みは尾上さまが、姫君より拜領の香包み。

柏尾　彩色の結び柳、尾上さまの香包み。

七浦　どういふ事で持つて居さんした。樣子を早く、と云うたところが物云はれず。

柏尾　その上常から一字一點物書かぬ、無筆同然なれば

敵三　ほんに難儀な事ぢやわいな。

ト岩藤こなしあつて

岩藤　成る程、これや覺えある尾上どのゝ香包み、これをアノ懷に持つて居たは、ハア、聞えた、大事を聞かれて詮方無さに、毒を吞ませて物云はさぬやうに、啞にしたのであらう。

尾上　エヽ。

岩藤　コレ、あの尾上どのとした事が、さうであらうが。

ト霧島頷く。

尾上どの、アレ、こなたの業と知らせるわいの。

ト庵崎前へ出て

庵崎　憚りながら、お局様、その香包みの事は

岩藤　すりや、尾上どのに頼まれて、こなさんが

庵崎　イエ〳〵、最前奥庭で。

岩藤　ハテサテ、何をくど〳〵。大切な詮議の場、こなさん達の口出しする處ぢやない。扣へてござんせ。

敵三　お局様の仰せ、扣へてござんせ。

　　　トきつと云ふ。

岩藤　柏尾どの、霧島どのをば、マアお次へ。

柏尾　畏りました。サア、霧島さん、ござんせ、

　　　ト合ひ方になり、柏尾、霧島を連れて奥へ入る。岩藤こなしあつて

岩藤　尾上どの、ちよと御意得たう存じまする。

　　　ト尾上前へ出る。岩藤こなしあつて

マア、何からお尋ね申さうやら。品が多うて口へも出ませぬが、この藥の事はマア私し事。第一は二品の紛失、有やうに云うておしまひなされませ。

尾上　有やうに申せとは。

岩藤　穏ないと仰しやつても、眼前證據は鯉魚の一軸、何の為お前の懐に持つてござんしたえ。

尾上　サア、これは。

岩藤　紛失の一品も、あるとばかりで何處にござんす。一品を取隠し、この薄服を入れ置いたも、満さまと馴れ合うて、そんなこなたの術へ抵。何も彼も顕はれてしまうたからは、云ひ譯はあるまい。日頃からこの岩藤を差措いて、此君のお氣に入り、中老職が憎いわいの。根が町人の娘ゆゑ、重い奥向きの御奉公、冥加ない事とは思はず、お年の行かぬ若君様を、かさに着て、お御家の差出口し、其處は若君様といふ元があるゆゑ。ほんに喩へに云ふ、狐が虎の威を假るとは尾上どの、こなたの樣なお人を云ひますわいの。狐といふ獣物が、虎の後に山へ行つて云ふには、この身は神通力を得た獣物なれば、いろ〳〵の獣物が、我れを見ては恐れをなす、その威勢を見せませうと囁いて、虎の前に立つて行くと、外の獣は猛獣の虎が後に來るやに依つて、我れを恐れるとは知らず、狐は怖らなけれども、虎に恐れて逃げる、虎は正直なやに依つて、我れを恐れるとは知らず、狐は怜悧いものなや、いろ〳〵の獣が、あの様にたつぱひして恐れるは、ナント、けゝといふものなやと思ふ。サ、これが喩への今云うた、狐が虎の威を假りる、お姫様の威を借りる

アイ、こなたは狐畜生ぢや。併し畜生の悲しさは、人を僞り騙つたと思うても、獵人といふ捕へ人があつて、正直の罠にかゝれば、ソレ、その首筋に繩を懸けて里へ送る。跪いても、あせつても、とんとそれきり。ほんにどうやら、こなたも畜生顏して、ホヽヽヽ、狐どの、狐ち狐、卑しい野狐、獸畜生ぢやわいの。

ト尾上口惜きこなしあつて

尾上　岩藤さま、大切なる御上使の御前、憚りも無きその詞。

岩藤　云はいでかいな。二品の紛失、この一軸の出所、啞藥の企み事、箱に草履の入れあつたは、こなたの仕業であるまいか。賢さうに、この岩藤に詰め寄つて、但しは外に云ひ譯があつてか。

尾上　サア、それは。

岩藤　まだ／＼そればかりぢやない。大切な御朱印は、姫君のお手から常陸之助賴國どのへお渡しあつたといふ事も、この岩藤が聞いて居る。さすれば櫻姫さまもお上のお咎め。大切な御朱印、こなたが附添ひありながら、迂濶に人手に渡さうやうはない。それも大方拵へ物。眞の御朱印は何處ぞに隱してあるであらう。この場に無ければこなたの仕業。御朱印の在所知つてか。

尾上　サア、それは。

岩藤　云ひ譯があつてか。

尾上　サア。

兩人　サア〳〵。

岩藤　云ひ譯無ければ

ト草履を取つて散々に打つ、皆々思ひ入れ。

尾上　こりや、草履にて

女皆　尾上さま。

岩藤　言つたらお耻かしい、岡惚をやがる。

女皆　サア。

岩藤　まだ〳〵腹の癒るほどに。

トまた散々に打つを、尾上その手を留め

尾上　こりや、草履を以て。

岩藤　打つたがどうした、叩いたが何とした。

ト尾上口惜しきこなし。岩藤草履にて尾上の額を突きながら

この岩藤を差措いて、つべこべと日頃から、最前折角仕込んだ……イヤサ、しこなし顔の中老役、大それた企み事、この岩藤が草履の折檻、カウ〳〵。

ト又た散々に打つ。尾上詰めかけ、岩藤、草履を振上げ、きつと見得。

尾上　差當つたこの場の越度、云ひ譯無さに、じつと蟄して居る尾上、滿座の中で打ち打擲、品もあらうに、草履の笞、餘りと云へば

岩藤　打据ゑても大事ない。以後の見せしめ。

ト又た打据ゑ

なんと骨身に徹へたか。

ト草履を打付ける。尾上取上げ

尾上　ハアア。

ト泣く。

七浦　ハア、笑止や〳〵。中老役もお勤めなさる尾上さまが、草履を以て、あの様に打たれても、叩かれても、一句一言云ひ譯はならぬとは、よく〳〵お身の過り。

築地　こりやいつそわたしらが、お表へ引立て

清玄 イヤサ、直ぐに引立て、詮議糺明。

ト立ちかゝるを、義澄留めて

義澄 イヤ、今日は若君が誕生。この旨鎌倉へ申し達した上、後日の御沙汰。

清玄 でも。

義澄 ハテ、謂れざる他家の仕置は、御無用に存じまする。

岩藤 すりや、錦上使様には。

義澄 この詮議[illegible]、イザ、清玄どの

清玄 然らばこれより。

岩藤 錦上使様。

清玄 イザ、[illegible]

岩藤 この岩藤はこの由を、松若様へ●

清玄 岩藤どの。

ト岩藤へ思ひ入れ。

岩藤 錦上使のお見送りを。

女皆 ハア、、。

義澄 大儀。

ト唄になり、義澄、清玄、關屋、岩崎、奥女中皆々附添ひ、岩藤、七浦、築地野は奥へ入る。跡合ひ方、尾上差俯向いて居て、やう〳〵と顏を上げ

尾上 この身に覺えない事ながら、云ひ譯ならぬ御朱印の在所。あの局岩藤は、執權衆の平内左衛門が妹、かね〴〵兄弟心を合せ、當家の御朱印に心をかけると思ふゆゑ、大切な御朱印は、この尾上が肌身離さず守護なしてはありながら、岩藤が一味の清玄、上使を功に詞を巧み、御朱印を取上げんとする彼れ等が企み、それと察せしゆゑ、この程より箱に入れ置く御朱印は、わざと拵へ置きたる似せ物、果して昨日清水にて、奪ひ隠してその跡へ、この草履を入れ置いて、清玄さまの罪なりと、この尾上までを無實の有樣、云ひ開かんも大切なる、この御朱印を、彼れらが手へ若し奪はれなば、これまで盡せし忠義は水の泡、又二つには櫻姫さまの御身の上、いかなる大事に及ばんかと、ぢつと無念を怺へしこの場。爭はんにも一軸の、我が手より出でたれば、却つてこの身の越度となり、今の恥辱の口惜しさ。お家の大事はこの時と、怺へ〳〵る胸の內。

ト草履を取上げ

とは云ふものゝ、思へば〳〵、チエヽ、口惜しい。

ト草履を見詰め、きつとなる思ひ入れ。管絃になり、チヨン〳〵にて道具廻る。

本舞台、三間の間、二重舞台、長局のかゝり、上の方、鼠壁、腰張り中仕切を入れ、次の間の見附袋戸、鏡台、手拭掛、箪笥など並べ、上の間に鏡台本箱など直しあり、花道向ふ揚げ幕に杉戸を建て、長局下の模様、二重舞台すつと下の方に、かな行燈をともしあり、すべて尾上部屋の體。右二重舞台にお初七輪に土瓶をかけ煽いで居る。好き程より唄になり、道具とまる。

ト右唄の間、かすめて時の鐘打つと、お初七輪を煽ぎながら

はつ　もうやがてお夜詰め前であらう。旦那様のお下がりに程もあるまい。お夜花は仕掛けてあり、大方お顔もお直しなさるであらう。ドレ、鏡台を直して置かうか。

ト鏡台合せ方にて、鏡台を直し、真鍮に火を入れる。この内かすめて時の鐘打つて、ト向ふより黒羽織の侍ひ、丸に八重菱の紋付きし箱提灯を燈し、出て来て

侍ひ　念入れ〳〵。

ト ぶつ〳〵、本舞台の下の方まで来て、下の方のかな行燈を見て

ヤレ〳〵、かな行燈が消えかゝつてある。今を限りの様子ぢや。
　ト　お初次の間にてこれを聞きつけ、氣にかゝるこなし。
お夜詰ひきました。お庭廻り御念入れられ。
　ト　大きく呼んで花道へ引返しながら
念や念や念入れられ。
　ト　火の番を呼びながら向うへ入る。お初こなしあつて
はつ　今日は何やら晝から胸痞へがして、氣にかゝつてあるに、今を限りぢやの、何のと
　ト　云ひながら七輪を煽ぐ、ト團扇の柄折れる。トまた心にかゝる思ひ入れあつて
そこねてもないこの團扇、どうしてマア。
　ト　土瓶を上げて火を見て、消えてあるゆゑ
いつの間にやら、消えてある程にの。
　ト　火箸にてあちこちする。ト向うより七浦、築地野、柏尾出て來て
三人　コレ、初、まだ尾上さまはお下がりはないかいの。
はつ　これは皆樣、お夜詰めがひけましたか。まだ迎ひにも參りませぬが、マア〳〵、お煙草でも上が

りませ。

七浦　ドレ〳〵、一服喫べませう。

はつ　サア〳〵、こちらへお出でなされませ。

ト三人上へ通り

三人　コレ、初、昨日は、ようひどい目に逢はしやつたの。

はつ　あれは、ほんの時の張合ひ、跡で存じますれば、いつそもう、お氣の毒に存じまする。御勘忍なされて下さりませ。

七浦　其方がさうでやれば、此方も何も云ふ氣はない。アヽ、築地野さん。

築地　それいなア。もうこれから中を直せば、矢ッ張り心安いお初女郎。

増尾　その代りに、わしらが頼む事を聞いてたもるか。

はつ　そりやもう、尾上さまの御部屋のお局様方、矢ッ張の旦那様と同じ事、何なりと承りませう。お誂へ物ならば麁相ないやうに、下村か、住吉町の松本でなりと、調へまして參りまするわいな。

二人　なんの、其やうな事ぢやないわいの。

はつ　宮様ならば、おどりでも燒きまするか。お仕事のお手傳ひでも。

三人　イヽヤ、わしらが頼みと云ふはの。
はつ　お頼みと仰しやりまするは。
三人　色事の取持ちぢやわいの。
七浦　好い男を持たしてやるからの、返事を頼むわいなう。
はつ　モシ〳〵、其やうな事を、冗談にも仰しやつて下さりますな。さうしてマア、御覧じまする通りの私しがやうな、ついにマア、白粉も付けました事も、洗ひ粉も使うた事もござりませぬ。色氣も何も存じませぬ。旦那様の事ばつかりかゝつて居ります私し、其やうな御挨拶には、困りますわいな。
三人　そんなら色事は。
はつ　きつい、嫌ひものでござりまする。
三人　嘘ばつかり。
はつ　たとへさう存じましたればとて、尾上と申しまする旦那のござりまする身の上、自由には成りませぬ。
築地　何ぞと云ふと旦那〳〵と云やるが、一生奉公はしやるまいし、ほんの一季の奉公人。

栢尾　今にも死ぬか、顕はれ出れば、他人ぢやないか。

七浦　明日をも知れぬ身を以て、堅うして居るのは損ぢやぞや。

はつ　イエ〳〵　死ぬるの、別れるの、イヤ明日をも知れぬ何のと、其やうな忌はしい事は仰しやらぬものでござります。鶴亀々々。

三人　そんなら如何でも否ぢやの。

はつ　只今も申しまする通り、御奉公の内は、自由には成りませぬ。

栄増　そんならもう何にも云はずと、死んだやうにして行きませう。

はつ　鶴亀々々、萬々年々々々。

七浦　尾上さんが下がられたら、先刻の悔みに来たと云うて下さんせ。

栢尾　死ぬ程惚れて居る男を嫌ふとは

三人　アヽ、ほいない事ぢやなう。

ト捨ぜりふにて下の方へ入る。お初耳を塞いで

はつ　鶴亀々々……ほんにマア、あのお方々は、何やら気にかゝつて居る中へ来て、ほいない事ぢやの、死ぬ事のと、悪い事ばつかり。それはさうと、もうお下がりであらう。ドレ、お錠の口まで行て

見よう。

ト唄になり、お初、勝手元より尾上の上草履を持ち、花道へかゝる。此うち向うより杉戸を開き、尾上、思案のこなしにて出て來て、花道よき程にて互ひに行逢ひ、顔見合せ

はつ　旦那樣でござりますか。

ト尾上、お初を見て

尾上　オヽ、初か。

ト思ひ入れ。

はつ　只今お下がりでござりますか。今お迎ひに參るところでござりました。サア、お草履をお召しなされませ。

ト尾上が前に直す。尾上、草履を見て、ちつとこなしあり。お初、尾上の顔を見て

見ますれば、お目に涙をお持ちなされてお出で遊ばしまするが、お心持ちでも惡うござりますか。

尾上　アイヤ、どこも惡うはないわいの……サア、行きませう。

ト合ひ方にて、尾上、草履を見て穿き、お初と入れ代り、本舞臺へ來る。お初茶を汲んで

はつ　お点茶でござりますが、直ぐに御膳を上がりますか。

尾上　イヤ、まだ欲しくない。

はつ　ほんにお、お前さまを相居させまがお出でなされて、気にかゝる事ばつかり仰しやつて

尾上　そんならアノ、辞退の様子を

はつ　イエ〳〵、何も承りませぬが、御辛そうでござりましたわえ。

尾上　イヤ、何にも案じる事もないわいの。

はつ　見れば、あでしが、いぎうそこねて居りまするが、どう遊ばしましたか。

尾上　これはこれは、それ〳〵、観音様がお留守へござなを運ばしたゆゑ、御介抱申し上げて、いかい
みんな心配び。それでわしも、いかう案じ過ごして

はつ　ナニお顔でござりまする。それなれば、早う仰しやつたがようござりまする。いつもの気付薬を
上げませうか。

尾上　イヤ〳〵、夫よりは、ちと寝ていたら。

はつ　ハイ〳〵。お寝りでござりますか。

ト此うち尾上仕合にて、尾上お寝りながら

ほんに、きつうお肩がつかへて居りまする。左様でもござりませう。毎日々々の御前勤め、お心遣ひが多いので、お癪も發らいで何と致しませう。それについても、輕いものは氣散じでござりまする。私しはモウ、あなた樣が旦那樣やら、御家來やら、お友達の樣にお心安う遊ばして下さりますゆゑ、大抵達者な事ではござりませぬ。

尾上　云やればそんなものかいの。したが、其方の父御は侍ひとの事。世が世の時であらうなら、どのやうな結構な、奉公もしやらうに、町人の娘のわしに使はれて居やるは、さぞ物憂い事に思やらうの。

はつ　勿體ない事仰しやつて下さりますな。西も東も存じませぬ私し、御殿向きの御奉公、あなた樣が御面倒御らうじて下さります有り難さ、今この樣な身になつて居りまするは、却つて氣兼ねが無うてよろしうござりまする。人間は七轉び八起きとやら、何事も、みな時節でござりまする。

尾上　成る程、其方が其やうな身になるも時節、わしが又、此やうな身になるのも時節ぢや……オヽ、時節であらうわいの。

はつ　ハイ、時節でござりまする。

尾上　アヽ、わがみの樣に氣を持つたら、煩ふといふ事はあるまいの。

はつ　左様でござります。病人は養生が第一、物に屈托さへせねば煩はぬものぢやと、アノ私しが存じました功者なお醫者樣が申されました。氣を晴らすが何よりの御養生。物見遊山も氣が晴れてようござりますが、旦那樣はアノ、芝居はお好きでござりますかえ。

尾上　まゝ、芝居はわしも好きぢやわいの。

はつ　左様ならあなたも、御贔屓の役者がござりませうな。

尾上　まゝ、贔屓が無うてかいの。其方は誰れが贔屓ぢや。

はつ　私しが贔屓はアノ……此やうな事を旦那樣、お前で

尾上　ハテ、大事ないわいの。誰れぢや／＼。

はつ　そんなら申しませうが、私しはアノ、市川團之助、三國屋が強い贔屓でござりますわいな。

尾上　ハテ、變つた者が贔屓ぢやの。團之助ぢやあるまい。幸四郎か、アノ、團十郎であらうがの。

はつ　ハヽヽ、それも贔屓でござります。さうして旦那樣は、誰れが贔屓でござりまする。

尾上　わたしはこれでも片贔屓で、あの幸四郎が居る芝居でなけりや、見た事がないわいの。杜若が贔屓ぢやわいの。

はつ　あの杜若は、私しは強い嫌ひでござりまする。併し、旦那樣がお心意氣なら、葺屋町へ三日に連

ばさでござりませう。何でもこの宿下がりには、芝居は見たいものぢや。嬉しい事ぢやわい。

尾上 アノ宿下がりに……わしが宿下がりを

ト涙含み

オヽ、樂んで居や。

はつ ハイ、樂みに致して居りまする。いつぞやお宿下がりの折お供いたして、アヽ、羽左衛門の芝居を見ました時、丁度このやうに團之助が、誰れやらの肩を撫りまする所を致しましたが

尾上 成る程、そんな所もあつたかいの。

はつ ほんに、ありや半四郎が、八百屋お七の狂言でござりました。團之助はお杉になりまして、肩を撫りながら、吉三とお七の事で、旦那の手前、主人の事を苦勞に致しまする。あの樣な所は嘘ながらも、どうぞして遣りたいと存じまする。可哀さうに八百屋のお七も、いろ／＼苦勞いたしまする。それもみんな惡方の致しまする事ぢやけれど、後にはその惡方も、實な人が出まして、たうとうきつい目に合はせまする。お七やお杉が苦勞いたしまして、何事もヂッと怺へて居りまするも、親御樣への御孝行、二つには御主人への事を思し召して……ほんにわたしとした事が、八百屋お七にお主は無いもせぬもの。また無調法申しました。拍子にかゝつて旦那樣へ、御意見の

やうに。お氣に障りましたら、御免なされて下さりませ。

ト こなし。此うち尾上思ひ入れ。

尾上 なんのいなう。其方の話しに氣が紛れて、快うなつたわいなう。

はつ そりやマア、ほんまにお快うござりますか。

尾上 おいなう。さつぱりとしたわいの。

はつ それはお嬉しうござりまする。

尾上 ほんに初、其方に何やら用があつた。オヽ、それ／＼、次の間に硯箱があらうほどに、ちやつと取つて來てたも。

はつ ハイ／＼、畏りました。

ト お納戸へ入る。尾上こなしあつて

尾上 年に似合はぬ、あの初、まだ馴染もないこの尾上を、今も今とて煩ひでも出やうか、ちつとひよつとした事もあらうかと、案じてたもる志、若しや今日の仕儀を

ト 此うちお初、硯箱を持つて出て

はつ ハイ、お硯を取つて參じました。

尾上　オヽ、初か。

はつ　ハイ。

尾上　オヽ、まだ何やらぢやわいの。序に革文箱を取つて來てたも。

はつ　ハイ〳〵、畏りました。

ト入る。また尾上跡見送り

尾上　あの樣子では、御殿の譯を聞いたか聞かぬか知らねども、コレ初、わしや局岩藤に、コレこの草履で

ト懷より最前の草履を出し

どうも腹が立つわいの。おのれやれ岩藤と、心は逸れど、大切なる御殿と、ヂツと辛抱したわいの。我が身にせまるこの身の上、とても生きても居られねば、この樣子を親達へ、申し送るが臨終の孝行。お家の爲、さうぢや。

ト誂への獨吟になり、尾上、硯を引寄せ、書置を書くと、唄一くさりあつて、奥よりお初、革文箱を持ち出て

はつ　ハイ、お文箱を取つて參じました。

尾上　オヽ、初か。

　　ト吃驚り、書置を隠す」

はつ　ハイ、初でございます。

尾上　オヽ、マア、序に小刀を取つて来てたも。

はつ　お小刀は確か、お硯箱にござりましたが。

尾上　イヤ、この内には無い。大方文庫の内であらう。とつくりと尋ねて取つて来てたも。

はつ　ハイ、畏りました。

　　トまた奥へ入る

尾上　初が来ぬうち、それ。

　　トまた思案になり、書置を書き、草履を文箱へ入れ、封をする。咽いつぱいに詰まると、お初出て

はつ　ハイ、お小刀を持つて参じました。

尾上　ヲヽ、初か。

　　トお初吃驚りして

はつ　初でございまする。

尾上　コレ、初や、其方は大儀ながら、この文を本町まで持つて行てたも。
はつ　エ、あなたのお宿へ參りますのかえ。
尾上　サア、急に云うて上げねばならぬ、大事の用。どうぞ、大儀ながら
はつ　お使ひに參りますのでござりますかえ。
尾上　行てたもらずばなるまいわいの。
はつ　イエ／＼、このお使ひばつかりは參りますまい。
尾上　なぜ行くまいと云やる。
はつ　サア、イエ、參りますまいではござりませぬが、もうやがて五ツでもござりませう。いつそ明日の事に遊ばしませぬか。
尾上　初とした事が、エヽ、何ぢやの、わしが使ひに行く事は否ぢやの。
はつ　左樣ではござりませぬけれど、ひよつと又私しが留守に、お積が發りました時はと存じまして、それで明日の事と申しましたのでござります。
尾上　イヤ／＼、もう行かいでもよい。アノ、初、斯うしや、モウ／＼、其方の樣に云ふ事を聞かぬらのは、いつその事、宿へ下がりや。

はつ　エヽ、旦那様、御免なされて下さりませえ。

　　　　トおろ〳〵しながら

　　　ハイ、参りまするでござりませう。

　　　ト尾上も涙を隠し

尾上　参りさへすりやよいわいの。

はつ　参るまいと申しますれば、宿へ下がれと仰しやるゆゑ、参りまする。

　　　トふり〳〵帯を締め直す。

尾上　サア、早う行きや。

　　　ト思ひ入れ。

はつ　ハイ〳〵、畏りました。

　　　ト文箱を持ち、花道へかゝる。よき程に尾上こなしあつて

尾上　アヽコレ、初。

はつ　ハイ、御用でござりますか。

　　　トお初揚幕へ戻り掛るを見る。尾上、お初をぢつと見て

尾上　隨分まめで

はつ　エ。

尾上　怪我せぬやうに、行ておぢや。

はつ　ハイ、參りまする。

ト思案しい〳〵花道へ行く。尾上思案しながら、もう行たかと思ひ入れ。お初立ちとまり、ぢつと思案ながら跡へ戻つて來る。尾上は向うを見る。思はず顏を見合せ

尾上　まだ行きやらぬか。

はつ　ハイ……行て參りませう。

トよろしく拍子

幕の外、お初思ひ入れあつて向うへ入る。

幕

第一番目　五建目

辻番屋の場

尾上自害の場

家根仕合の場

役名――中老、尾上。侍女、岩崎。同、関屋。奥女中、綾瀬。同、梅田。同、侍乳。同、宮戸。同、浅茅。同、柏尾。同、築地野。同、七浦。同、霧島。吉田梅若丸。奴、隅田平。清水平馬之助請之。中間、可助。足軽、門八。石浜官蔵。夜番、五左八。粂の平内左衛門長盛。猿島惣太。局、岩藤。吉田の下部、軍助。大友一法師丸。

本舞台、三間の間、うしろ板塀、忍び返し見越しの松、上手辻番屋、九尺に飾り、辻行燈、練塀[illegible]折廻しの作、[illegible]の時付け、[illegible]流れの捨板、すべて忍ヶ岡寄りの辻番、爰に足軽[illegible]太、かんてらの灯にて草鞋を作り居る。ほめ板には売り物の草履二三足吊しあり、侍ひ、[illegible]を着て居る。供の中間、鉄砲にて社杆を畳み居る。[illegible]に凭り扇を交ぜたる囃子の稽古、時の鐘、五ツの拍子木にて幕明く。

中間　アレ、もう五ツでござります。大分長うかゝりましたね。

侍ひ　されば、思ひの外手間取つた。

ト中間は社杆を風呂敷へ包み、侍ひ、羽織を着て裾を掲げ

これは大きに御世話になりました。忝うござる。

惣太　アイ、お易い事でござります。

中間　サア、參りませう。

ト矢張り稽古の囃子になり、中間箱提灯を灯し、二人とも捨せりふにて下座へ入る。矢張りこの鳴り物、五ツの鐘、向うより門八、木綿やつし、一本ざし辻番侍ひにて、六尺棒を持ち、町の夜番五五八、割り竹を持ち、七軒町夜廻りといふぶらを提げ、門八に引立られ、出て來る。

門八　うぬ、太い奴だ。度々の事だ。屋敷へ連れて行く。うせろ〳〵。

五五　モシ〳〵、親方、御免なされませ〳〵。

門八　ナニ、うぬ、如何するか見ろ。

五五　モシ〳〵、あやまります〳〵。今度から捨てませぬ。御免なされませ〳〵。

ト詫びるを、門八こづき廻す。惣太これを聞いて番屋より出て來り

惣太　門八ぢやァないか。アヽ、見れば町の夜番を捕へて、どうするのだ。何を腹を立てるのだ。

門八　オヽ。惣太か。聞かつしやいな。此奴は七軒町の夜番だが、この間度々捨て物があると、此方の持ち場へ掃きつけたり、送つたりして、苦厄介をかけるを、見つけたら〳〵と思ふうち、今夜きつと見屆けた。うぬ、その分には濟まさぬぞ。イケずるい奴だ。

五五　イエノ〵、今度から決して捨てませぬ。御免なされませ。モシ親方、お頼み申します〳〵。

惣太　そりやアてまへ、悪い所を見つかつたな。道理こそこの間中、おいらが持ち場に、ごもくが捨てであると思つた。して、今夜は何を捨てたのだ。

五五　ハイ、今夜はツイお前、私しが番屋の前に、炭俵に入れた鉄屑がございましたゆゑ、思はずお廻り場所の新へもなく、捨てましたのでござります。御免なされませ〳〵。

門八　うぬ、御免で済むものか。屋敷へうせろ〳〵。

ト棒にて打たうとする。惣太この棒を無理にとらへ

惣太　ハテ、好い加減にしやれな。

ト棒を無理に取る。

門八　ハテサ、癖になるわな。

ト捨ぜりふにて五五八が持つて居る割り竹を引ツ奪くり、したゝかに打つ。五五八うろたへ花道へ逃げ行き

五五　うぬ、折助め、覚えてうせろ。

門八　また減らず口を





ト割り竹を振上げる。

五五　べら坊折助エ。

ト惡體を吐きながら向うへ逃げて入る。

惣太　成る程、口がうしやな野郎めぢや……ほんに門八、おれが廻りに出た跡へ、誰れぞ尋ねては來なんだか。

門八　オヽ、來た〳〵。來た段ではない。アノ平内さまとやらからお手紙が來て居た。コレ〳〵。

ト懷より狀を取出し

この狀をこなたが留守ゆゑ、ツイ懷へ入れて夜廻りに出たが、今の樣な事があると、落さうも知れぬ。ヤレ〳〵、あぶない事〳〵。

ト惣太に狀を渡す。

惣太　エヽ、この御狀は平内さまから

ト受取つて見る事。此うち門八こなしあつて

門八　時に惣太や、先刻おつな話しを聞いたわえ。アヽ、京の北白河とやらいふ所で、吉田とやらいふ屋敷が、だりむくつたけなの。

惣太　エヽ、忝けのござりました。

ト懐中する、思ひ入れ。

門八　コレサ、この人は、何もさう吃驚する事はない。その吉田とやらばかりでもない。アノ何よ、まだ、そのアヽ、九州の大友常陸之助どのとやらいふ家も退転して、その子に一法師丸とやらいふ子があるげな。その餓鬼がこの吉原へ来たとやら云うて、訴へて出せば大きな褒美になる事だと、廓中の立番へ配付が廻つたが、なんと、その一法師やらを捕まへて、褒美を貰ひたいものだな。

ト この話の内、惣太、手紙を讀み、以前の紙入れへ畳込み、懐中して

惣太　成る程、そんな噂を聞かねえでもないが、いよ／＼違ひのない事なら、その餓鬼を訴人したいものだの。

門八　そりや知れた事よ……時に惣太や、今夜は酒の買つたのがあつたか。

惣太　ほんの五合ばかりあつたぞ。

門八　そいつは奇妙だ。肴は無いか。

惣太　目鰈のよいのを買つて置いた。

門八　奇妙々々、切つてやらうか。

惣太 さうすべい。サア、來やれ。

ト時の鐘、稽古の小鼓になり、兩人番屋の内へ入り、戸を閉てる。この時、割り竹は好き處に捨てゝある。矢張り鳴り物、向うより、ばた／＼にて、柿の脚絆、旅奴二人取卷き、大友の一法師丸、凜々しき扮裝にて、石濱官藏、大小黑股引、草鞋、旅扮裝、袢天の形、一法師丸と立廻りながら出て來り、本舞臺へ來て

官藏 家來め、召捕れ。

奴 心得ました。動くな。

一法 旅疲れの某を、召捕れなんどゝ下知なすは、仔細ぞあらん有やうに、とつくりと申し聞かせよナ、なんと。

官藏 仔細じさいを聞かずとも、その身の上に覺えがあらう。お咎め受けたる九州の領主、大友家の一子、一法師丸といふ事は、つけ廻して見屆けた。われを詮議の石濱官藏、東海道を見え隱れ、つけて下つたこの東路、出會せたが百年目、きり／＼腕を

奴 廻せエゝ。

一法 小癪な一言、某が素性を、とくと見極めし上からは、包むに詮なし。いかにも汝が推量違はず、九

州の領主たら、大友常陸之助賴國が一子、法師丸とは我が事だわやい。

官藏　うぬこそ違はぬお尋ね者、急いで召捕れ。

軍　捕つた。

トかゝるを投げ退け

一法　知られし上は、小腕の試み。

ト拔いて切り付ける。家來二人立廻つて、切り立てられ、ばら／＼に逃げる。官藏後より十手にてかかる。一法師丸立廻つての見得。これより鳴り物を冠り、兩人少し立ある。此うち門八、番屋より身拵へして窺ひ出て、六尺棒を持つて一法師を引捕へんとする、見び入れ。兩人とゞ切り立てられ、ばら／＼に下座へ逃げて行くと、一法師運び退けて入る。あと、時の鐘。惣太、番屋より顔を出し、思ひ入れあつて

惣太　なんだ、生醉か、盗人か。番屋の前でどつさくさ。あの門八めも同じやうに、棒を持つて行きせたが……ア丶、たしか一法師とやら聲がしたが、もしや其お尋ね者の一法師が、このあたりへうせたのか。ア丶、そんなら何も探すにに、捕まへればよかつた。エ丶、跡の祭り、惜しい事をしたわえ……併し、捻ねえ仕事にかゝつて、生兵法大疵の基、矢を張り仕かけた草鞋を作つてしまはう

か。

ト時の鐘、合ひ方、小鼓の稽古聞える。惣太、番屋の内へ入る。向うより軍助、旅奴の拵へ、脚絆、草鞋にて、廣袖、丸ぐけの前帯、脚絆、中ぬき草履、紫の頬冠りせし、おしよぼ褰げ旅疲れの吉田の梅若丸が手を引き、介抱しながら出て來り、本舞臺へ辿り來り

軍助 申し、若君様、押してお徒歩なされずとも、軍助めが肩を當座の腰車、決してお心遣ひは御無用に遊ばされませう。

梅若 忝い其方が志、世にない吉田の梅若を、家來も多きその中に、はるか下部の其方が、長の旅路を様々と、殊に病に悩む身を、斯程にいたはる嬉しさは、家來と思はぬ某を、守護なし給ふ氏神とも、朝夕忘れはせぬわいやい。

軍助 これはしたり、御勿體ないそのお詞、決して左様な儀は、假にも仰しやらぬものでござりまする。申さばあなたは御主人様、殊には旅のお疲れ、御家來の奴めが、どの様に御介抱申したとて、誠にこれは當り前でござりまする。少將さまの御最期より、三郎さまも御切腹、お家の敵は源吾貞景、廻り逢はんと思ふうち、長の旅路にあなたの御所勞。モシ、必ずきな／＼思し召されまするな。これより遙か陸奥へお供いたすも、惟貞卿へのお知るべを、便りましての道すがら、あなた

り御不憫ナア、コレ、どうぞ今宵の宿りを

ト心遣ひの思ひ入れ。

梅若　アヽ、イヤ〳〵、わしが病は氣遣はずとも、行くへ知れぬ兄君、松若さまの御在所を早う尋ねて、吉田の家を再興なし、父上の敵を討つてたもいなう。

軍助　お氣遣ひなされますな。松若さまの御行方へも、お尋ね申して、めでたう

トあたりを見て

幸ひのこの番屋、爰へ賴つて、用意いたしたお薬を。

ト思ひ入れあつて

南無三、薬の包みも名替へも、同じ包みに背負ひしと思ひしに、そんなら跡の接待場へ、不調法な、忘れて参つたと見えたわえ。

梅若　そんなら最前のあの薬も

軍助　取違して参りました。ト師の上へ走り、あの包みを取つて参るその間、あなたは暫く

ト思ひ入れあつて番屋に向ひ

ハテ、なんとお頼み申しませう〳〵。

惣太　アイノ〳〵、誰れだ。

ト顔を出し

何を聞かつしやる。どこを尋ねさつしやる。

軍助　アノ、私しどもは旅の者でござりまするが、同道いたしました若旦那が、急に病氣疲れまして、途中と申し、殊に持參の品を、跡の接待場へ忘れて參じました。取つて參るまでこの子をどうぞ、お邪魔ではござりませうが

惣太　頼んで行きたいと云はつしやるのか。

軍助　左様でござります。少しの間。

ト思ひ入れ。

惣太　心得ました。案じさつしやるな。病氣となれば、夜風に吹かるゝ事も惡からう、番屋へ入れて置きまする。お前は氣遣ひなしに、早く行つてござりませ。

軍助　それは有り難うござります。左様なら直に行つて參ります。モシ〳〵、直に戻りまする程に、何方へもお出でなく、あのお方の側を離れずに、お出でなされませ。

梅若　そんなら爰に、わし一人居るのかや。どうやら心細うて

軍助 これはしたり、直に戻りまする。

お吉 ここであらうか少しの間に、其方に別るゝのが

ト思ひ入れ。軍助こなしあつて

軍助 成る程、仰しやれば長の道中、寸の間も妹めがお離れ申さぬあなた様、御尤もでござります。イヤ/\、このやうにしませう。お前様を負ひ申して、お包みを取つて参りませう。サア/\、これへお出なされませ。

ト傾城を背に負はんとする。

惣太 これはしたり、此お人は、御機嫌の悪いといふ若衆どのを、夜風に吹かせて歩くとは、そりやア悪うござるわな。何も世話な事はござらぬ。茶屋へ預けて、ちよつと取つてござりませいな。

軍助 イカサマ、ハテ、夜風に彼方此方お連れ申すも如何。左様なら急ぎ行つて参りまする内、少しの間このお人の方に

お吉 そんなら待つて居る程に、早う戻つてくれいやい。

軍助 ハイ、直に行つて参りまする。モシ、茶屋のお人、少しの間お預け申しまする。

惣太 アイ、早く行つてござりませ。

軍助　ドリヤ、一走り取つて來ようか。
　　ト捨て鐘になり、逸散に向うへ入る。梅若跡を見送り、ほいなき思ひ入れ。
梅若　コレ、どうぞ早う戻つてくれ。何やらわしや賴り無う思うて
　　ト心苦しき思ひ入れ、氣色の惡き體。惣太窺ひ見て
惣太　コレ、兄イどの、氣合でも惡うござるか。お供の人は今直に戻りまするわな。なんなら白湯でも
　一つ進ぜうか。ドレ〳〵。
　　ト番屋の內へ入る。梅若胸を押へて
梅若　どうやら又胸苦しう。アヽコレ、早う來て介抱して
　　ト苦しむ。惣太土瓶と茶椀を持ち來り
惣太　サア〳〵。白湯でも進ぜう。これを飮まつしやい〳〵。
梅若　アイ、忝うござるの。
惣太　案じさつしやるな。供の人も、今に歸りまするぞ〳〵。
　　トいろ〳〵介抱のうち、梅若が衣服を撫で廻し見る事あつて
　身の廻りもたゞならぬ扮裝。賤しき者の御子息とは覺えぬ物ごし。コレ、兄イどの、こなたは何

何処から同道いたさるゝ盗人だ。

梅若　アイ、都よりはる／＼と、陸奥へと志し、参る者でござりまする。

惣太　ムヽ、上方から下り奥州へ

ト思ひ入れあり。

先刻に噂のあつた大友家の身内、そんなら若しや。

梅若　エ。

ト思ひ入れ。惣太もこなしあつて

惣太　モシ、吉田どの、若殿は若しや九州の大友家の公達、一法師どのであらうがの。

梅若　イエ／＼、左様な者ではござりませぬ。

惣太　なにさ、隠さつしやるな。今は旧主の身分ゆゑ、その名を云はぬも聞えたが、情ない事には、道行く人も見咎めまするわな。只者ならぬ子供の道中、疑ひもない一法師丸、コレ、隠立てはござらぬ。いよ／＼左様か。その大友家の公達なら、わしが聞きまする事。今も今とて、これの婆。コレ、婆／＼は聞かれませぬか。お身わしに心を置かずと、一法師丸ぢやと名乗つて聞かさつしやりやせよ。

トいろ〳〵といたはる顔にて裏問ひかくる。

梅若　そりやモウ、頼もしき志、この身に取つては喜ばしい。嬉しうござる。さりながら、今お前の云はしやる、一法師丸とやらでは

惣太　ないと云はつしやるのか。

梅若　アイ。

惣太　そりやお前、悪い合點だ。併し浮世を忍ぶお身分ゆゑ、隱さつしやるも聞えたが、わしに於て決して其やうな、胡亂な者ではござらぬ程に、隱さつしやらずと、一法師丸と

梅若　サ、どの樣に問はしつても、一法師丸とやらではござりませぬ。

惣太　アノ、これ程に欺し賺し、いたはつて問ひかけても

梅若　一法師ではござらぬわいの。

ト胸苦しき思ひ入れ。惣太きつと氣を變へ

惣太　手溫く問へばいつまでも、その名を隱す小童め。古金買ひに見せたとて、そのうづ高い顏色は、疑ひもなき一法師、名乘らないとて其まゝに、それなりにして置かうか。云はにやア惣太が今爰で

ト あたりを見廻し、捨てゝある割り竹を取つて

これで苛責み名乗らせろと、天道さまよりお授けの、この割り竹で苛責むが、一法師と早く名乗れ。

梅若 アレ、どの様に問ひやつても、その一法師とやらでは

惣太 ないと吐かせば割り竹で、斯うして云はせる。カウ〳〵。

ト 散々に打ち倒し

一法師だと早く吐かせ。

梅若 エヽ、情ないこの打擲、たとへこの上どの様に、打ち叩かしやつても、身に覺えなき事なれば、どうしてその名を

惣太 云はずば外に名があらう。その名を云へ。

梅若 サヽ、その名はどうも。

惣太 そりや外に名はあるまい。一法師だと吐かしやアがれ。

ト 散々に打つ。 梅若竹に縋つて

梅若 そりや胴慾ぢや、コレ下部、病に冒され只ならぬ、苦痛の我れをこの打擲。アヽコレ、なぜに

歸つてくれぬぞいなう。

ト向うの方を見遣り、軍助を待ちかねる思ひ入れ。

惣太　供の野郎が來ぬうちに、名乘らせて訴人する。殊に下部と大風な、その詞の遣ひやう、平人の餓鬼ぢやアない。訴人されて金になれ。われを訴へ、褒美にする。その名を吐かせ。

梅若　サアそれは、

惣太　云はねば手酷く

梅若　サアそれは。

惣太　吐かせ。

梅若　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

惣太　云はねば、カウ〳〵〳〵、吐かせ〳〵〳〵。

ト割り竹にて重れ打に打ち据ゑる。此うち時の鐘、凄き合ひ方。梅若丸氣を失ふ。

うぬ、空死をひろぐのか。太い餓鬼めぢや。その手を食ふものか。サア、起きやアがれ。

ト引起し見るうち、梅若の頸にかけたる錦の守り袋ぶらりと下がる。惣太見て

さし／＼こそ結構な掛け守り。この中に證據があらう。

ト守りの内を探し見て、書き物を取出し、辻行燈の明りに透し見て

承元　元卯年九月十日誕生の男子吉田の少將惟貞の二男梅若丸。

ト讀み

ヤ、この中コレ一法師丸と思ひの外、そんならあなたが

ト駈寄つて介抱なし、白湯を與へ

モシ、梅若さま〳〵、心がつきましたか、梅若さま。

トこれにて梅若、心のついたるこなしにて

梅若　わしが事を梅若と、その名を呼んで介抱なすが、その梅若といふ事を

惣太　サア、存じましたは、コレこの書き物。

ト見せて

年恰好の見寄りから、一法師と思ひの外、かゝる證據があるからは、疑ひも無き吉田の公達、

梅若　今更名乗るも面伏せ、されども疑ひ受けし身の、疑ひ晴らさすその爲に、父が御名名乗り聞さん。

我れは都の北白川、父は吉田の

ト云ひかけて苦しき思ひ入れ。

惣太　モシ〳〵、お心を慥かにお持ちなさりませ〳〵……コレ、そんならいよ〳〵吉田の少將、惟貞卿の御公達、松若君の弟君

梅若　我れぞ吉田の梅若丸。

惣太　エヽ。

ト驚く。

梅若　かゝる非道のおのれらに、名乘るまじとは思へども、所詮病のその上に、今打つ杖に身内の惱み最早存命思ひも寄らず。今の家來が來りなば、最期のこの由詳しく語り、せめて兄君松若さまへ傳へてくれよコレ下部、慈悲ぢや、情ぢや、頼むぞよ。

トうんと反り返るを、惣太介抱して

惣太　モシ、お心を慥かにお持ちなさりませ。知らぬ事とて私しは、お家の忠臣、粟津六郎俊兼が弟、若年の砌りより、勘當受けて流浪のこの身、粟津の七郎俊次と申す者。あなたの御誕生なされぬ前に、お館を立退き、あなたを始めお供の人も、誠に知らぬが間違ひの始り。一法師どのと心得て、ひよんな事を致しました。モシ、私しは御家來でござります。御免なされませ〳〵。

[illegible]　すゝ、家老粟津が弟にて、聞覺えたる七郎俊次。すりや某が家臣となる。

惣太　左樣でござります。御家來でござりまする〳〵。

ト抱きかゝへて介抱する。梅若苦痛の思ひ入れにて

梅若　世になき梅若、よしなに頼むぞ〳〵。

ト手を上げて惣太を撫で廻す。惣太、梅若が顏をよく〳〵見て

惣太　流浪の身となる、吉田の少將惟貞卿、御母君は班女御前、御二方のいつくしみ、寵愛深きに淺からず、お乳やめのとに傅かれ、御運全き梅若君、世の果てとはいひながら、お家の亂れ情なや、この東路にさまよひ給ひ、旅の疲れの面やつれ、まだ稚き御方を、うち打擲は何事ぞ。それも何者在の、御家來粟津の七郎が、覺打つ杖の咎にて、落命あるか梅若さま、約束事とはいひながら、思ひ廻せば廻す程、御果報拙き

ト顏見詰め、守りの鏡を引つけ、じつと面を詰める。

顏見めたなア。

ト峰の嵐、鐘の音、忍び三重。梅若苦しみ絶え入る。思ひ入れあつて

あの世で親の少將どのに、廻り逢ふのはこの若君、このやア矢つ張の待つてござるがよい。

ト頸へかけさせ

サア、これからはおれも侍ひ。主殺しと云はれぬ先に、潔く腹を切つて死ぬがよい。さうだ〳〵

ト刀を拔き、大肌脫ぎになり

モシ、梅若さま、お前ばかりはやりませぬ。私しも跡から參つてお供いたします。待つてござりませ。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

ト二三度切らうとして氣を變へ

イヤ〳〵、こりやア死ぬがものはねえわえ。主を殺したといふ事は誰れも聞かねえ。この樣子を知つた者は、廣い世界に、あのお月樣とおればかり。そんなら別してうろたへて死ぬがものはない。お月樣がこれまで物を云つた例も無し。イヤ〳〵、こりやア生害思ひ止まりませう。

ト肌を入れ、刀を納め

併し、この死骸をこゝらへも置かれまい。幸ひと忍ケ岡の御池から、流れの末は宮戸川、爰から直ぐに水葬と仕らう。

ト梅若が死骸を抱上げ、前の流れへ打込み

さて、これからは今の奴のうせぬ内、爰を隨德寺と出ようか。所詮この所の住居はならねえ。駈

落ちなする位なら、箸片しても置いて行くは損だ。ドレ、早く諸道具を纏めて行かう。

ト時の鐘、惣太は番屋へ入る。矢張り時の鐘、向うより中間可助、箱提灯を持ち、お初、件の革文箱を持ち、出て來る。

可助　モシ、ちとお急ぎなされませ。今日は十四日で月夜の筈だが、曇つて來たゆゑ、今にも泣出しさうな空でござります。

はつ　アレ、この人わいの。ちと心にかゝつて案じて居るところへ、泣出しさうぢやの何のと、そんな事云うて下さんすな。

可助　でもお前、よくなる方は、心許なうござります。

はつ　これはしたり、嫌な事はかり云ふ人ぢや。其やうな事云はずとも、早う行かしやんせいの。

可助　ハイ／＼、行きまする。コレ、ひよつと提灯の火でも消えて御覽じませ、六道の辻を迷ふやうなものだ。

はつ　エヽ、いろ／＼な事ばつかり云うて。サア／＼、默つて行かしやんせ。

可助　ヘイ／＼、畏りました。

ト云ひ／＼行きかゝる。空には鴉二三羽飛び頻りに鳴く。お初思ひ入れ。この時提灯の火消える。

はつ　南無阿彌陀佛々々々々々々。たうとう火が消えて脈があがつた。

はつ　又かいな。ほんに氣にかゝる事ばつかり。そしてマア、この胸騷ぎのする事わいの。

ト思ひ入れあつて

コレ〳〵、斯うして下さんせ。こなさん、もう行かいでもよい程に、これから直ぐにお屋敷へ歸つて、庵崎さまの女中衆に、わたしがお使ひから戻るまで、なんぞ尾上さまの御用があらうも知れぬ程に、氣を着けて下さんせと、こなさん、頼んで下さんせ。

可助　ハイ〳〵、畏りました。したが、お前一人で

はつ　ハテ、大事ない程に、こなさん歸つて、さう云うて下さんせ。

可助　そんなら、これでお別れ申しませうか。

はつ　エヽ、また氣にかゝる事を。

ト耳を塞ぐ、可助心付かず

可助　アヽ、いま降られると未來だ。

ト禁句ばかり云ひながら向うへ入る。鴉頻りに鳴く。

はつ　折も折とて、今日に限りてこのお使ひ、先へと云うては一足も行かれぬのみか、今の人の心にかゝ

る云ひ事。先刻にお部屋で皆様の詞といひ、いつに變つて何ぢやゝら、そわ／＼とした御殿の様子、尾上さまのお身の上に、どうやら仔細が。アヽ、行きともない／＼。思ひ切つて宿からお屋敷へ歸らうか……アヽ、したが又、どの様な急な御用のお使ひかも知れず、ハテ、どうしたものであらうな。ドレマア、一走り行て來ようか。

ト行かうとして、石に躓いて爪を離したる思ひ入れ。

アイタヽヽ。ほんに急けば廻れとやら、躓いて爪を離したさうな。これも氣にかゝる……ちやつと結へて

ト番屋の辻行燈の灯を借り

モシ、御免なされませ、ちやつとお貸しなされませ。

ト鼻紙を出し、足の小指を結び居る。この時番屋より惣太、三布蒲團を天とくじに包み、これを脊負ひ、煙草盆の隣と辻番火鉢を縄にて絡げ、提げて出て來り

惣太　穿き物をこゝらに置いたが

ト尋ねる思ひ入れ。

はつ　アレ／＼、怪からぬ鶏鳴き、お使ひに行くを否ちやと思ふ矢先へ、アレ／＼、鶏鳴きの悪さ／＼

もうコリヤお里へ行た振りをして、直ぐに歸るがよいわいの。併し、跡で知れたらお叱りなさるであらうし、と云うて思はぬこの怪我、鴉の鳴く音、行くに行かれず。オヽ、それ〳〵、何かの様子は、この文箱を開いて見たならば

ト文箱を開いて見んと解きかゝり

此やうに封のある物を、解くもどうやら、と云うて今日の仕儀。アヽ、心がかりな……アイタヽタヽ。

トまた小指を結へる思ひ入れ。時の鐘、向うより軍助、風呂敷包みを提げ、息せきと出て來り

軍助　アヽ、思はず手間取つて、さぞお待兼ねであらう。殊にあの鴉嗚きが、一倍氣にかゝるわえ。

トこの臺詞云ひながら、すた〳〵と舞臺へ來り

爰だ〳〵。モシ、番屋のお人え。大きにお世話でござりました。

トこの聲を聞き、惣太悔りして尋ね當りし履物を穿き、諸道具を持つた儘、つか〳〵と行きて、行燈の灯を借り小指を結へて居る、お初を突退け、灯を吹消さうとする。お初驚く拍子に革文箱をばつたり落して

はつ　アヽコレ、滅相な。

軍助　コレ、お預け申したあのお方を

ト惣太二重舞台へ行かうとする。軍助見咎め

軍助　貴様が誰か。

ト言ふを振り切る。

合點の行かぬ。

トまた行かうとするを、お初は文箱を取つて行かうとする。惣太思はず交り花壁にされる仕組み、軍助は惣太が提げて居る道具を捕へ留めんとして、お初が文箱の紐を捕へ引くはずみに紐が解けて、内より片しの草紙と書置落ちる。お初手早く取上げる。三人立廻り、行燈の灯に透し見て

はつ　ヤヽヽヽ「書置の事。」

惣太　草紙は慥か。

ト見ようとする。

軍助　若君様は。

ト惣太を引付ける。

はつ　こゝや斯うしては居られぬわえ。

ト書置と草履を持ち、時の鐘にて向うへ走り入る。兩人殘つて

軍助　爰を逃ぐるは仔細ぞあらん。若君樣は。

ト引捕へんと立廻りの內、惣太が腰に挾みし狀の入りし莨入れ、軍助が手へ納まる。門八窺ひ出て

門八　合役、どうした。

ト思はず出るを、軍助引退ける。この間に惣太蒲團を脊負ひ、辻番火鉢を提げ、花道へかゝり、莨入れを落せしを心付きし思ひ入れ。軍助門八を引付け

軍助　あなたのお行くへ。

惣太　エイ。

ト花道より小石を打付ける。軍助、門八にて受ける。

門八　アイタヽヽヽ。

ト面を押へる。

軍助　合點だ。

ト莨入れを啣へ、裾を端折る。門八中返りする。惣太向うへ入る。この見得、時の鐘の送りにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、前幕の尾上の部屋の道具。爰に尾上、白無垢のしごきの形、珠數を持ち、机の上に三方に袋入りの御朱印を載せ、香爐を直し、硯箱引寄せ、文庫など取散らし、行燈を照し、辭世を書き居る見得。時の鐘、靜かなる合ひ方にて、この道具を好き所まで押出す。

ト尾上こなしあつて

尾上「藤の花長き短き世の中に、なり行く今日の思ひ知らるゝ」……アヽ、今日は人の身明日は又、我が身の上と知らぬが浮世、廿五年は夢の夢。アヽ、思へば果敢ないものぢや。……計らずも御殿にて、意趣ある岩藤が、草履を以ての

ト口惜しきこなしあつて

局の兄たる平内長盛、かねてお家を窺ふ侫人、花子さまの御懷妊、櫻姫さまに申し含め、御家督までを失うて、越度は姫へ負せん企み、紛せし印を人知れず、似せを拵へ入れ置きしも、お家を思ふ心より、眞の御朱印この如く、尾上が守護しある事を、悟り知つたる局岩藤、わざとこの喧嘩か僞氣儘、いかに町人の娘なればとて、勤め方一通りを存ぜずに、コレ、お役目が成らうと思ふか、不忠者めが。コリヤヽく、おのれが樣な人面獸心なる者を捉へてな、一々爭ふものならば理を以て邪に落入り、御恩を受けし御前樣をも、勿體ないが自然とお怨み申し上げる儀も出來やう

かと、ぢつと無念を怺へてな、面を和げ居ながらも、心の中の口惜しさは、ほんに寢た間も忘れた事は無いわいやい。よしそれとても御奉公ぢやと、胸を撫り、恥辱とは思はねどな、今日の恥辱は捨て難き草履の恥辱、とても生きては居られぬこの身の命。アヽ、さうとは知らずあの初が、さぞや今頃はとつかわと、急いで行きやるであらうに、可哀さうに。コレ、其方が部屋に居やつては、快く自害もならず、又よもや殺しもしやるまい。留める其方に氣後れして、若し見苦しい死を遂げなば、アレ見よ町人の娘ゆゑと、笑はるゝが口惜しいわいやい。ほんにこれまでわしお大事に、勤めてたもつた優しい其方、眞の兄弟といふたとて、其方が樣に氣を着けてくるゝ者が二人とあらうか。死後までわしや忘れぬ〳〵、忝い、と、サ、其方の聞く前で、この禮が云ひたいわいの〳〵……可哀や蟲が知らせてか、使ひに行きともない素振りを見たに依つてな、とても、思ひ詰めた今日今宵、妨げあつてはなるまいと、泪の胸をも鬼に持つてな、いつにない大きな聲をして叱つたを、さぞ腹が立つたであらうな。叱られたとて顔へも出さず、お使ひに參りまするど、悄々立つて行きやつた後影を見た時には、これがこの世の別れかと、思へば思ひ廻す程、八寒地獄の泪の氷柱、大焦熱の苦みより、コレこの胸が、張裂く思ひであつたわいなう。これも誰れゆゑあの岩藤、今に思ひ知らさいで置かうか……申し御兩親樣、先だつ不孝は御免しなされて

下さりませ。萬々年の御壽命すぎ、未來でお目にかゝりませう。

ト思ひ入れして

さはさりながら、大切なるこの御朱印、どうぞ忠義の侍ひへ手渡ししたい。せめては初に渡してなりと、心知れざる者どもの、若し手に入らばお家のお爲に。これが末期の心がかり。

ト思ひ入れあつて

とても部屋へは誰れあつて。

ト思ひ入れあつて御朱印を緊りと懐中して

南無阿彌陀佛。

ト懐劍を二三度咽喉へ當てる事あつて、トゞ机の上へ柄をすゑ、ぐつと突き立て苦む。時の鐘、この時後へ岩藤窺ひ出て、尾上が懐へ手を差込む。尾上その手を執へ

ヤヽヽ、誰れぢや、何者ぢや。

ト苦痛のこなし。

岩藤　オヽ、わしぢや、岩藤ぢや。

尾上　ナニ、岩藤ぢや。

ト透ひ寄る。

岩藤　オヽ、先刻にから後に居て、もう死ぬか〳〵と、其方のよまひ言を聞いて居たが、なか〳〵哀れに面白う、好い慰みであつたわいの。サ、持つて居やる御朱印を、局に渡して、早う往生しやいなう。

尾上　ナニ大切な御朱印を。やわか其方に。

岩藤　エヽ、死損ひが、御朱印持つて行つて何にする。コレ、ようマアおのれ、櫻姫どのに盗ませた、その御朱印と摺替へて、あの似せ物を渡しやつたの。コレ、此方にあればわしが兄、長盛どのに手渡して、櫻姫も逐まくり、姉の花子は捨坊主、入間の家はわしら兄弟、濡手で粟より手もなう納まる。其方の自害も自業自得、御朱印よりは善光寺の、御印文なと大切に持つて、冥途へ迷はぬ樣に、きり〳〵死んで行きやいなう。

ト尾上を蹴飛ばす。

尾上　エヽ、聞けば聞く程恐ろしい、大惡人の岩藤兄弟。その御朱印は、渡さぬ〳〵。

トよろめきながらしがみ着く。

岩藤　死かゝつても執念深い。放し居らぬか。

ト引ッ摺り、二重舞臺より蹴飛ばす。尾上「アッ」と苦しむ。岩藤御朱印を持ち行きかゝる、ト上口
ひより取付き

尾上　たとへ死んでも此まゝに、渡さぬ〳〵。

ト縋るを振り切る。尾上倒れる。岩藤思ひ入れあり、懐劍を執つて尾上に乘りかゝり刺殺さうとする。
向うより、ばた〳〵にて、お初出て來るゆゑ、思ひ入れあつて藩間へ隱れる。尾上よろばひながら

おのれ岩藤、いづくまでも

ト行かうとしてよろ〳〵。此うちお初足早に舞臺へ來る。岩藤藩間より上がり、忍び足にて向うへ入る。お初この體を見て

はつ　ヤヽヽヽ、こりや旦那樣、尾上さま〳〵。

ト呼び生け介抱する。尾上岩藤と心付

尾上　おのれ岩藤。

はつ　旦那樣、お心が付きましたか。初でござりまする〳〵。

ト介抱する。尾上これを聞いて

尾上　初か〳〵。

はつ　初でござります〳〵。

ト尾上縋つて

尾上　遲かつた〳〵。

ト云ひながら反りかへる。

はつ　モシ、旦那樣。お心を確かにお持ちなされませ。日頃からお情深いお心に相違して、合點の行かぬ今宵のお使ひ、是非なうお屋敷を出ながらも、どうも途中の胸騒ぎ、行くも行かれず後髮、物のはずみに文箱の、中より出でし草履とお文を、見ればあなたの書置、ハッと思うて氣もそゞろ、どうして戻りましたやら、取つて歸りし效も無う、思ひ切つた事なされて下さりましたなア。マア第一お宿へ私しが、申し譯がござりませぬ。モシ、旦那樣、元の起りはこれでござりまするか。

ト草履を差出す。尾上取つて思ひ入れあり

尾上　局岩藤、無念な。口惜しい〳〵。

ト思ひ入れ。

はつ　御尤もでござりまする。お道理でござりまする。

尾上　まだその上に大切なる御朱印、アノ〳〵

はつ　どうなされましたぞ。

尾上　この部屋へ踏込んで、岩藤が持つて行つたわいなう。

ト又のりかへる。お初抱緊めて

はつ　モシ〳〵、お氣遣ひなされまするな。その御朱印も取返し、きつとあなたのお恨みは、私しが晴らさせまするぞ。

ト耳へ口寄せ思ひ入れ。尾上お初が手を執り

尾上　嬉しい〳〵。

ト云ひながらがつくり落入る。

はつ　モシ〳〵、旦那さま〳〵。

トいろ〳〵介抱して、草履を取上げ、きつとなつて

おのれ岩藤。

ト無念の思ひ入れ、この見得にて道具横へ引いて取る。

本舞臺、三間の間、正面より下の方へかけて奥深く折廻したる高足の障子屋體、前通り萩垣、山吹の

盛り、舞臺前も土手板の山吹、奥の方に枝折戸、石燈籠、手水鉢、ふりよき櫻の大樹を取附け、日覆より一面の枝垂れ櫻の吊り枝、奥御殿庭の景色。雨車烈しく蛙の聲、時の鐘にてこの道具納まる。

ト向うより糸の平内左衛門、社杯、半股立、足駄、蛇の目の傘にて、跡より清水清玄、赤合羽、中間笠をかざし出て來り、小石を探り取つて礫を打つ。これを合圖に枝折門より岩藤、下駄、蛇の目の傘にて手燭を持ち出て來り、兩方見やつて思ひ入れあり

岩藤　兄御樣か。

平内　妹岩藤、かねて尾上の隱せしと、察せしところの當家の御朱印、首尾よく其方が。

岩藤　お氣遣ひなされまするな。心憎きは尾上めと、部屋へ忍んで窺ひしに、草履の遺恨を根に持つて彼奴は自害、その座にあつた御朱印は、私しが奪うて參りました。

平内　それは重疊。して、尾上は。

岩藤　直ぐにその場でのたれ死。これさへあれば、わしら二人が願ひも叶ふ。さりながら、尾上が下女めが戻つた樣子、私しが方には危ない物。こりや幸ひと兄上樣へ

平内　長盛しかと受取つた。

ト懷中して

まだ其方に談じたき旨あれど、奥表と隔たる兩人、心に任せぬ事どもゆゑ、委細は詳しく認めた一通、内見の上、必ず火中いたしてよからう。

ト懐より密書を出し渡す。岩藤取つて

岩藤　心得ました。密かに内見いたすでござらう。御同心の清玄さま、必ずともに、この沙汰他聞へ。

ト懐中する。

清玄　氣遣ひ無用。某とても、二人が手引に當家に入り込み、心かくるは櫻姫、いよ／＼兄弟ぬかりなう、この清玄に

岩藤　今宵の内にあなたへ、しかと。

清玄　然らばそれまで庭先に、雨を忍びて相待たん。

平内　盗み出すは庭傳ひ。首尾よく姫を渡しなば、連れ行く出口は。

岩藤　堀へ續きし水門より。

清玄　盗み出さば引撤け

平内　丁度そこらが通路の拔け道。

清玄　首尾よく忍んで

大詰



二番目序幕



平内　必らずともに。
清玄　心得ました。
平内　御油斷あるな……必ずともに。
ト岩藤へ目顔にて知らせる。
清玄　承知いたした。
平内　併し他聞を憚る大事、蟻の穴から
岩藤　堤の崩れ。
清玄　必ず隱密。
岩藤　氣遣ひなさるな。
平内　押つけ姫を
清玄　ヤ。
ト立上がるを岩藤、手早く清玄を、刀を引拔き見事に切る。反し板にて首は好き所へ出る。これをきつかけに時の鐘、下の萩垣を押分け、お初窺ふ。岩藤手燭を吹き消す。此とたん三方一度の仕組み、兩人よろしく思ひ入れ。爰にて鳴きつれし蛙一度に聲を止める。平内思ひ入れ。

平内　大事を知つたる清水清玄、断様いたさば

岩藤　互ひに安堵。

ト思ひ入れ。時の鐘になり、平内、そゝくさ下座へ入る。岩藤聞き耳立て

岩藤　ハテ、心得ぬ、今まで千草に鳴きつれし、耳喧ましい蛙の聲が、一度に止みしは

ト あたりを見廻し、お初窺ひ〳〵出る。岩藤ためらひ見て

それにゐるのは誰れなるぞ、何者ぢや。

はつ　ハイ、私でござります。

岩藤　私しとは誰れぢや。

はつ　ハイ、初でござりまする。

トきつと見る。岩藤思ひ入れあつて

岩藤　夏らの、足踏み叶はぬこの奥庭、誰れが許して

はつ　ハイ、私しはお局様へ、もとお節ひをこそりまするゆゑ、お下がりを待ちまして、お部屋へ上がりまをしとおじきましたれども、急な事ゆゑ、お館の御法度を破りまして、これまで参りましてござりまする。

岩藤　この岩藤に急な用があるゆゑに、それでアノ、奥庭まで

はつ　やう／＼の思ひで、參りましてござりまする。

岩藤　して、其方が願ひといふは。

はつ　サ、その儀は。

岩藤　きり／＼爰で申さぬか。

ト思ひ入れ。これより琴六段入りの合ひ方になる。

はつ　お局樣。ひよんな悲しい事が出來ましてござりまする。

岩藤　ひよんな悲しい事とは、そりや何を云ふのぢや。

はつ　ハイ、主人尾上は、癪が差込みまして、一向心付きませぬが、若しもの事がござりましては、私し一人で心細う存じまするゆゑ、あなた樣へお願ひに上がりました。憚りながら尾上が部屋まで、お出で遊ばされまして、病氣の樣子、御覽なされて下さりませうならば、有り難う存じまする。

岩藤　なんぢや、尾上どのには持病が發つて、氣が着かぬと云やるのか。そりやマア氣の毒な。早う藥なと服ませて進ぜやいなう。

はつ　ハイ、それに如才はござりませぬが、一向心が着きませぬゆゑ、あなたへお願ひ。承りますれば

あなた様には、結構なお守りを、お持ちなされてお出でなさるゝとの事。それを水に寫して、お上げ申したうござりまする。どうぞお貸しなされて下さりませ。

岩藤　ハテ、そりや心得難い願ひぢやが、わしや其やうな守りは持たぬ。そりやわしぢやあるまい。間違ひであらうぞや。

はつ　何を仰しやりまする。あなたが有り難いお守りを、お持ちなされてお出で遊ばす事は、私しがよう存じて居りまする。

岩藤　ハテナア、何とした事が、なんのマア、持つて居る程ならば、人の爲になる事ぢやもの、貸さいで何とせうぞいなう。

はつ　サ、その人の爲になる。お慈悲深いお局様、どうぞお貸しなされて下さりませ。

岩藤　エヽ、アタしつこい。無いと云ふに。

はつ　イヽエ、此度ある筈でござりまする。

岩藤　そりや何が。

はつ　あの大切な御朱印が。

岩藤　ヤ。

ト思ひ入れ。

はつ　サ、それを何卒お借り申したう存じまして、わざ〳〵これへ參りましてござりまする。

岩藤　すりや岩藤が御朱印を、隱し持つたと推量して

はつ　お庭傳ひに參りましたも、あなたのお側へ近寄つて、尾上が病氣のいろ〳〵を、きつとお話し申した上、御檢分を受けませうと、夜中も厭はず參りました。お局樣、主と病、又これも卽ちお家の御奉公かと存じまする。

トこの臺詞の內、ぢり〳〵詰め寄る。岩藤思ひ入れあつて

岩藤　それ程に云やるもの、友朋輩の病氣とあるを、見舞はぬも後日の無念。いかにも樣子を見屆けに行きませう。

はつ　サ、御一緒に參りませう。

ト身拵へする。岩藤見て

岩藤　アイヤ、今は行かれぬ。

はつ　そりや又なぜでござりまする。

岩藤　わしや持病の頭痛が發つて、折惡う、アイタヽヽヽ。サ、これぢやに依つて、マア、其方ばかり先

へ行きや。

はつ　それや、あなたにはお頭痛でござりますか。

岩藤　持病の頭痛で心悪うて、

　ト思ひ入れ。

はつ　これは御難儀、それには幸ひ私しが、好い守りを持つて居りまする。

岩藤　して、其方が所持の守りは。

はつ　即ち、これでござりまする。

　ト草履を出して差付ける。岩藤見て

岩藤　こいや草履ぢやないか。

はつ　そのお頭痛のお守りには、この草履が相應でござりまする。

岩藤　黙りや。最前よりの慮外緩怠、それと云ふのも、まだ年若でありながら、わしが勤むる局役、足はぬ故と侮つて、おのれは阿房にする氣ぢやの。そりやその、おのれが阿房にしをらいでも、上上様の思し召し、あなた方のお蔑みにも、わしが様な局役か、どのお屋敷にあらうぞいの。これといふも、御贔屓強う、永久しう局役を、勤めさんしたわしが首尾さん、ぬしさへ乳母の果報な

や。たとへ尾上が病氣であらうが、それを何の構ひだて。ヤイ初め、自體おのれが差出て、いつぞやも清水で、この岩藤にようも後れを

ト　お初を引付け

取らせたな。

ト　髻を執つて捻ぢ廻し、きつとなる。

コリヤ、イ、大切な御朱印を隱し置き、姫を科に落さんと企んだも、あの尾上。云ひ譯なさの自害であらう。盜んで持つてうせをつた、眞の御朱印、最前わしが取戻し、忠臣の長盛どのへ手渡して置いたからは、何として〳〵、わいらが手にはもう戻らぬ。御朱印盜んだあの尾上、おのれも同じ同類ぢやぞ。

はつ　アヽモシ、滅多な事を仰しやりますな。

岩藤　殊更草履を持つてうせをつたは、おのれ、尾上が仕返しにうせたであらう。いかにも、コレ〳〵、この草履で、あの尾上めを岩藤が、打つた、叩いた、此やうに。

ト　草履を取つてお初を散々に打ち据ゑ

ぶちのめした。

ト突き一ぱいに懐中の書置落ちろ。お初手早く取つて燈籠の明りに透し

はつ　密事とばかり記せし一通。

岩藤　ヤ、それを。

トかゝるを立廻つてきつと留める。

はつ　目出たくこりやコレ、長局どのより内意の密書、文言詳しく見る時は、悪事の手がかり、お上へ差上げ、御詮議願ふ好き証拠。斯うした品もあらんかと、こなたの自由になつたのに、怪しき密書の手に入るも天の惠み、この上は主人尾上が最期の恨み、今こそ晴らさん、覚悟しや。

岩藤　それ戻さねば、われから先へ。

はつ　イヤ、こなたから。

トちよつと立廻りあつて

両人　ドツコイ。

トこれより大太鼓早めの合方、両人よろしく立あつて、ト、岩藤を仕留め、立ち身にて決る。

岩藤　エヽ、残念な、下郎めが手にかゝるか。たとへ死んでも岩藤が、恨みは残つて人間の身寄り、花子を詰め瓔珞、なに安穏に置くべきぞ。エヽ、口惜しい。

ト苦み倒れる。

はつ　主人尾上が恨みの草履、思ひ知つたか〳〵。

ト草履にて散々に打つ。この時切戸口より以前の奥女中、殘らず手燭を照し、長刀かい込み、つかつかと出て

女方　狼藉者。

皆々　動くまいぞ。

ト取卷く。お初書置と密書を出し

はつ　お騒ぎあるな各々方。主人尾上が自害の書置、殊に岩藤長盛が密事の一通、憚りながら

ト差出す。敵役の女中一度に

皆々　ドレ。

ト寄るを、お初ちやつと扣へて

はつ　イヤ、あなたがたへは

庵崎　然らば取次ぎ。

ト寄るを、お初見上げて安堵の思ひ入れあつて

はつ　御前へ御披露。

　ト木の頭。

お願ひ申し上げまする。

　ト平伏して差出す。これをきざみにて拍子

幕

　幕引付けると、ドンチャンの鳴物にて引返し、丈度よき知らせにつき、ドンチャン早めて打あげ、長よんくとなり、向う揚幕より捕手七人、白鉢巻、黒具足の衣裳、各自宮殿付きの出立で、十手を持ち、寛ひくく出て来り、舞台前幕の外へ居並び、中に頭一人、襷鉢巻、大小、草鞋に十手並びに縄を持ち、控へ居る。

捕一　當家の執權役の不破長藏こそ、謀叛家の張本たる

捕二　田を奪はれた蔵國當主、當家を押領なさんず爲

捕三　入込み窺ふ陰謀者。彼奴は現在妹にて

捕四　兄に劣らぬ不敵の女。尾上が白拍の書置より

捕五　事顯はし上からは

捕六　不敵の平内召捕れと、郡領どのゝ仰せを受け

捕七　出口々々の門戸を閉し、組子をすぐつて圍みし上は

捕一　どうで遁れぬ籠の鳥、なれども手だれの平内長盛。

捕二　油斷大敵御油斷無く

捕三　繩打つ手段が肝要ならん。

捕頭　館に見えぬと訴へは、必定屋根へ切り拔けしか。各々御油斷なさるゝな。

七人　心得ました……捕つた／＼／＼。

トどん／＼／＼早めになり、捕り手殘らず幕の内へ入る。捨て鐘、早拍子木、アリヤ／＼の聲烈しく幕明く。

本舞臺、三間の間、誂へのこけら屋根、天水桶、舞臺前忍び返し付の黒板塀、上の方を見せ、向う打拔き、空には星現はれ樹木の梢所々に見せ、貝鐘、アリヤ／＼の聲、早拍子木と時の鐘、聞え、かすめて、どん／＼、正面よき所を切り破り、平内、大童、拔刀にて、御朱印の袋入りに一卷を卷付け、これを啣へ窺ひ出づる。跡より捕り手六人、窺ひ／＼出て來り、「捕つた」とかゝるを立廻つて切り捨て、そ

れより日限の捕り手組子、段々と平内にかゝつて見事なるタテ。此うち跳へる懸り物、抜き合ひ方。平内この人数を相手に、いろ／＼切り廻し、御朱印の包みを出し、しつかりと懐中せんとする。この時隅田平、捕り手の後にて忍び寄つて

隅田　長盛、捕つた。

ト懐にある捕縄を取つて投げる。平内切つて捨て、きつとなる。

平内　ヤ、わりや隅田平。思ふに違はず、いよ／＼裏切りのひろいだな。

隅田　下郎も一味はするものゝ、こなたの悪事を見限りて、反り忠せしこの隅田平。こなたの金八の遺文を、この方へ奪ひ取らんと、お使に渡せし神祇官、御朱印もろとも速かに、奴に渡して戻さしやれ。

平内　小癪な、そこ退け

隅田　縄かゝれ……捕つた。

ト立廻り、好き所にて十手にて眉間を打つ。打たれて、たぢ／＼とたぢろぐ機みに、隅田平に、御朱印を奪ひ取り、内へ隠して思ひ入れ。平内起上がつて、つか／＼と行く。續いて奪はんとする。この時舞の内御殿前へ高張り大勢一度に出づる仕かけ。金剛に役の打役さへも小張りに舞へし高張り一度に出で

て、下家にて大勢の聲する。

大勢　動くな。

ト取卷きし體。平内白刃を構へ、下の方をきつと見て

平内　エヽ、殘念な。

ト無念の思ひ入れ。この見得、カケリ、どん／＼にて幕引付けること知らせに付き、打込み、二番目の呼び。

幕

第二番目　序幕　梅若塚の場

役名――軍助女房、綱女。息女、櫻姫。道心者、無緣坊。庄屋、杢郎兵衛。百姓、嫁菜のつと作。同、野びるの玉六。同、たんぽゝの太郎八。同、田螺の傳助。同、田芹の治右衛門。雁金屋若い者、權七。判人、勘六。松井源吾貞景。奥女中、綾瀨。葛西太郎龜成。雁金屋新造、釆女。猿島惣太。清玄尼實ハ花子の前。吉田の松若丸。下部、軍助。

本舞臺、三間の間、うしろ淺黄幕、土手、正面に柳を植ゑし梅若塚、卒塔婆建てあり、所々に稻む

ら、娑の花は盛り、善悪業報、上の方に隅田川隅田堤とやら、梅若丸さ。好き所へ座を敷き、踊の輪へ孤を出し、これに香爐、燈明、花筒、柳樽に百銭子とてを手向け、袈裟衣、よい／＼の白経木、蹴出しに乗りて鉦を打ち、百萬遍の数珠繰り、たんぼ〻の念仏、外に百姓二人、百萬遍をくり廻し、薄墨半四郎、野火を焚き、数珠をかけ、素人の下の女、相手の浪花良妻、百日紅の室、京ぐ綿、袷、白張引、世話六部にて、寝かし、煙草のんで居る。てんつゝ、百萬遍にて幕明く

ト鉦をかすめたる百萬遍の鉦の拍子木にて

無縁　南無阿弥陀佛。

皆々　なむあみだんぶつ。

ト二三遍あつて

無縁　願以此功徳平等施一切同発菩提心往生安楽国、南無阿弥陀佛々々々々々々。

皆々　南無阿弥陀佛々々々々々々。

ト納まる。

本郷　ヨイ／＼、此の衆、御苦労々々々、サア／＼、茶を進ぜませう／＼。

ト丸盆に茶碗を載せ、皆々に出す。

皆々　これは庄屋樣、憚りでござります。

坊主　どなたも御大儀〳〵。併し、野天で繰る百萬遍、天氣が好うで、佛も仕合せ、わしらも仕合せ、春めいた土手の景色。一入好い〳〵、ハヽヽヽ。好い見晴らしだの。

杢郎　左樣々々、云はつしやる通り、イヤ又、この隅田川の風景は、他國にはあるまいて。

治右　京都のお公卿樣も爰へ來ては、歌とやらを詠まつしやると云ひまするてな。

苞作　公卿の歌なら、潮來節や、そゝり唄でもござりますまいて。

太郎　それは大方、天智天皇秋の田のなぞとやるのでござらう。

玉六　イヤ〳〵、わしが思ふには、猿丸太夫奥山に、紅葉踏分け鳴く鹿なぞと歌ひませうて。

無縁　成る程、剛氣に物識でござるわえ。聲聞く時は秋は悲しきと、丁度この佛の樣な悲しい事を、歌に作つて詠みませうて。ハヽヽ……イヤ、どなたも茶をまるつたら、もう一遍やりませうぞや。

杢郎　さうしませう〳〵。殊にアレ〳〵、三社樣のお祭りの太鼓も聞えまする。念佛を片付けて、若い衆はお祭りへも行かずば成るまい。もう一息、やりませうぞ〳〵。

皆々　サア〳〵、やりませう。

ト念佛にかゝらうとする。

貞成 アヽ、モシ〳〵、ちつと尋ねたい事がござる。わしは上方から廻つて參つた六部でござるが、見れば標の塚に向つて、念佛供養さつしやるが、こりや何人の墓でござるな。

無縁 オヽ、六部どのか。こなたは好い處へござつたの。今日は志の佛がござつて、村方の衆が百萬遍を繰るのぢや。こなたも共々念佛を上げさんせ。その代り澁茶でも進ぜませうワ。此また塚には、哀しい話しがござるわいの。ハヽヽヽヽ。

ト よい〳〵の思ひ入れ。

貞景 アヽ、哀しい話しとは、どの樣な事でござるの。

無縁 サア〳〵、その話しは、誠に光陰矢の如し、去年三月十五日、その年頃は十二三の、小兒の死骸が流れ着き、所の衆が打寄つて、證據に無いかと搜すうち、懐に守り袋、その内に書いた物がござつたの。

ト貞景思ひ入れあつて

貞景 エヽ、その書いた物が。して、何と書いてござつたの。

無縁 サア〳〵、聞かつしやりませ。守りの内にあつたのは生れた年月、素性はたしか吉田の少將、そ

の次男にて、梅若丸と書いてござつた。

ト貞景惘りして

貞景 ナニその死骸に梅若と、肌に添へたる書き物に。

ト思ひ入れあつて

すりや、吉田家の滅亡の砌り、軍助めが供せしが、梅若丸はこの世を去り、心がゝりも段々と……

……アヽコレ、坊様へ。して、その死骸の由縁の者もござらぬのか。

無縁 イヤ〱、あります〱。若い男の夫婦連れ、あの佛の由縁かゝりかは知らぬが、朝夕爰へ香花手向けて。

貞景 それこそ正しく軍助夫婦、見付られては。

無縁 アヽ、コレ〱、知る人でござるか。今日は取わけ一週忌の逮夜、茶の子を拵へ、來る筈ぢや。こなさん待つて、逢うてござらぬか。

貞景 アヽ、らつちもない。知る人でなければ、逢うたというて用も無し。これから寺島近所を修行しませう。コレ、坊様、今の話しの男が來ようとまゝ、必ずわしが噂をさつしやるなよ。

無縁 オイ〱、呑みこみましたが、コレ、茶の子まゐつてござらぬか。

貞景　アイヤ、修行の歸り又來ませう。大きに御報謝になりました。
皆々　ドリヤ、百萬遍にかゝりませうか。

ト鋼鉢坊始め、皆々念佛にかゝる。貞景思ひ入れあつて、笠を擔いで下座へ入る。また百萬遍に被せ、てんつゝになり、向うより綱女、やつし女房の拵へ、高褄げにして、軍助、木綿やつし一本差しにて、提げ籠の内に、大重箱へ團子煮しめの類を拵へ、線香、樒の花なぞを一つにして、太き竹にてさし荷ひ、軍助は前の巾袋と土瓶をくゝし、これを提げ、兩人、こそ／＼と出て來り、花道にて

軍助　アレ／＼、綱アや、向うに百萬遍の聲がするわ。もう村の衆が寄らしつたと見えるわえ。
つな　さうでござんす。大きに遲なはつたわいな。
軍助　サア／＼、早く來やれ／＼。

ト てんつゝにて舞臺へ來り

さて／＼、どなたもお早うござりました。手どりなゆゑに、大きに遲なはりました。
つな　どなたも御苦勞でござりまする。こちの人も隣の外せなれましたが、何かの拵へ、大きに遲うなりましたわいな。
杢郎　これはお若いの、ござつたか……女房や、夫婦ながらござつたぞや。

無縁　オヽ、御亭主もお内儀もござつたか。御苦勞々々々々。今日は天氣も好いゆゑ、お念佛も早う始めましたわいの。ハヽヽヽ。

軍助　それは有り難うござります、私しもお間に合ふやうにと、殊の外急ぎましたが、何を申すも無調法な私しども……コレ、嚊アや、あなた方へ早く出しやれな。

つな　さうしやんせう。手傳うて下さんせ。

軍助　合點ぢや〳〵。

ト持參の物を好き所へ出して

つな　ハイ〳〵、これはもう、夫婦の者が心ばかり、おいしうも無い此いし〳〵。粗末な煮しめも耻かしうござりまする。お氣に入らずと、お替へなされて。

軍助　たんとまゐつて下さりませ。煮染といふもお定まり、苞豆腐に芋と蒟蒻、嫁菜の浸し物、お珍しくもあるまいに。御馳走には貳百茶を買つて參りました。煮花でも拵へて、緩りとお念佛をお願ひ申しまする。

太郎　これは〳〵、叮嚀な事でござるの。

治右　さうでござる。そしてマア、大分拵へさしつたの。

太郎　わしらはお百花には氣があり申すわえ。

治右　佛もさぞ悦ばるゝでござらうて。

杢郎　取分け團子は、わしらが好物でござるて。なう、坊樣。

無縁　コレヤ庄屋樣、いし／＼といふは、何十貫目ござるな。どんな石をか持つて來て、力持ちを始めるのだ。愚僧も若い時は廿十貫目も擔いだが、今は少しよい／＼かゝつて、心許ないて。ハヽヽハヽ。

杢郎　ハア、この坊樣とした事が、あの菜夫婦が拵へた團子でござるワ。石ではござらぬわいの。

無縁　團子の事を今では、いし／＼と云ひさするか。ハテ、流行いたせば、いろ／＼と變りまするな。併し、あの夫婦なら、團之助に團十郎、その二人が拵へたのだから、團子……成る程、物事は爭はれぬものぢやての。ハヽヽヽ。

皆々　何を云はつしやる。

杢郎　御夫婦は、この噂の緣者といふ樣な事かな。

軍助　ア、イヤ／＼、別して左のみな緣もござらねど、痛はしい事ぢやと存じ、それで此やうに、夫婦の者が閼伽の水。

つな　さうでござんす。野に咲く花を手折り來て、手向けまするも若君樣……アイヤ、若君樣ともいふ樣なお方ぢやと、聞いて思はずおいとしう、思ふがゆゑに此やうに、なう、こちの人。

軍助　さうサ、心ばかりのこの品々、サア〳〵、替へて參つて下さりませ。

杢郎　それは御報謝。坊樣、皆の衆も、サア〳〵、辭義無しに始めませう〳〵。

無緣　愚僧は煮染を引取りませう。

ト見て

ハテ、惜しいかなこの煮染には、田螺がござらぬわえ。

皆々　お坊樣は田螺をまゐるか。

無緣　ハテ、田螺は海川へ出來はしまいし、田へ出來るから米も同然でござる。ハヽヽヽ。

皆々　口強情な坊樣だ。サア〳〵、御馳走になりませう。

軍助　どなたもよろしくお上がりなされませ。

ト三社祭りの鳴り物聞える。皆々重箱を引寄せて、捨ぜりふにて團子を食ふ。この鳴り物をかりて向うより、雁金屋若い者勘六、羽織やつし、ばつちの形。權七、同じくばつちの形にて捨ぜりふにて出て來る。東の口より葛西太郎龜成、旅侍ひの拵へ、股引草鞋にて、脚絆旅體の侍ひ三人連れ出て來り、

両方より箱屋へ来る。

勘六　コレ〳〵、権七どの、火があるさうだ。一服吸ひつけて行かう。

権七　さうしませう。ハテサテ、何處へうせたであらうな。

鵜成　コリヤ〳〵、家来ども、例の者が大勢居る。尋ねて見よう。コリヤ〳〵、われらは最前からこれに居たか。

杢郎　爰に居たが、どうしましたな。

鵜成　イヤ、別の事でも無いが、只今このあたりへ、十七八な女は参らぬか。身はその女を尋ぬる者ぢやが、見えぬか〳〵。

杢郎　イエ〳〵、見かけませぬわえ。

勘七　アレ、権七聞いたか。あのお侍ひが、十七八な女が爰らへ来る筈とは、どうか怪しいではないか。

権七　成る程、これやア面妖、好いところへ探り當てた。その女を引出した奴は、町人とも侍ひとも、ここは分らぬワ。格子先の色事、俺が一本差しとも聞いたて。

トこの間しのうち寝鶏皿ひ入れ。

勘六　何でもこりやア、あのお侍ひを詮義して見るのが、早手廻しだわえ。
龜成　ヤイ〳〵〳〵、ナニ身共を詮義する。何を詮義するのぢや。
勘六　イエ〳〵、別して詮義と申したのではござりませぬが、今お前樣が、十七八な女がこゝらへ來た筈ぢやと仰しやつたは、ちと耳寄り、お名を聞かば夫の本名、明すまいものでもない、ナ申し、
と問ひかけられて。
ト淨瑠璃を語る。
權七　エヽ、この人は何を云ふのだ。
勘六　ツイうか〳〵と、島物語を語り出した。ハヽヽヽ。時にお侍ひ樣、して、あなたのお尋ねなさるるは、何と申す女が、爰へ參る筈でござりまするな。
龜成　ハテ、この男は樣々な事を聞きたがるが、他聞の聞く前、その女の名は申されぬワ。
權七　そりやこそ、云はぬワ。怪しいぞえ〳〵。
勘六　成る程、こいつは聞きどころだ。隱さんす程その女の、わしらは名が聞きたうござんすて。
龜成　そりや又なぜに。
勘六　ハテ、わしらは吉原の雁金屋から驅落ちの新造、こゝらに心當りがあるゆゑに、尋ねて來た出合

ハ亜、年格好の似寄りの女を、尋ねてござつたお侍ひ、コリヤお前、その新造を釣出したお侍ひでごんせう。サア、有やうに云はつしやりませ。

トこれにて紙金屋と聞き、軍助は思ひ入れ。侍ハ顔を潰し

綱成　イヤ、此奴が〳〵。身は女の逃げたを尋ね、ご致せ、ナニ連れて逃げるものだ。さういふ体はまた知らぬわ。

権上　エヽ、そんならお前様も、逃げた女をお尋ねなさるゝのかえ。そりやァ大きな間違ひだ。して、お前様のお尋ねなさるゝ女といふはえ。

綱成　身が尋ねるは人間の息女櫻姫、云ひ例けある常陸之助惟國が、行くへを尋ねてこの程の家出、その惟國こそ朝敵の輩、變名なせしと沙汰あれば、綱を提へて詮義なさんと、さてこそ尋ぬるこの道筋。して、わいらが尋ねる女といふは何者だ。

勘六　アイ、紙金屋の養女といふ、新造の駆落ち者でござりまするて。

トこれを聞いて綱の者へ軍助は思ふゝこなし。綱女、軍ニ聞いて思ひ入れ。

綱成　アヽ、其方は女郎の駆落ちか。其方は大名の姫の駆落ち。何でもこゝらへ来たに違ひはない。コリヤ〳〵、百姓ども〳〵。今申した年格好の姫が来たら、早速に身共に知らせよ。但しその代り

に、差置くに於ては、屹度曲事に申し付くるぞ。

　　トこれを聞き、無縁坊主こなしあつて

無縁　なんだ、其まゝに差置くと食事に申し付くると。それは御馳走だわえ。折角大事の百萬遍の最中、様々な事を云ふ侍ひだ。食事なら早く出さつしやい。わしらに精進は御無用、魚類でなりと、食事にお目にかゝりたいな〳〵。ハヽヽ。

皆々　それ〳〵、わしらも茶の子腹だ。食事とやらに、與かりませう〳〵。

亀成　ヤイ〳〵〳〵、こいつ等は武士を嘲弄いたすか。

無縁　長老とは出家の事でござるワ。大笑ひだ。ハヽヽ。

皆々　精靈とは佛の事でござるワ。

亀成　イヤ、うぬ等は侍ひをきよくるか。片ッ端から目に物見するぞ。

杢郎　ナニ二本坊、痴言を吐くと打ッ挫くぞ。

無縁　愚僧が尻持ちだ。叩き伏せろ〳〵。此よい〳〵めらが。

皆々　しめてやれ〳〵。

　　ト立ちかゝる。

權七　トレサ〳〵、この衆は氣の強い手合ひだ。向うは二本差しでござるわな。

ト留める。

無縁　措かつしやい、この人は。差した物が怖くつて、隅田川に住はれるものか。田螺でも蒟蒻でも、田樂はどれでも差して居るワ。おつな事を云ふ人だ。飛んだよい〳〵だ。

權七　ナニ、よい〳〵だ。この坊主めは、うぬがよい〳〵だワ。エヽ、飛んだ亡者だ。

無縁　エヽ、間抜けの亡者は、去年二軒勤めて年は明けたワ、間抜け奴め。ハヽヽヽ。

權七　なんだ、間抜けだ。

無縁　間抜けと云つたが如何したえ。

權七　此よい〳〵坊主め。

ト立ちかゝる。

勘六　コレサ、高が坊主だワ。その上、よい〳〵だワ。打ッちやつて置きやれな。

無縁　ナニ、よい〳〵坊主とは誰れが事だえ。

龜成　ハテ、お坊、不請しやな。

皆々　イヤ〳〵、突ッ張れ〳〵。

勘六　マア來やれな。

皆々　和尙、合點するな〳〵。

無緣　否だ〳〵、よい〳〵と吐かしちやァ濟まねえぞ。

龜成　ハテ、いゝわな〳〵。

ト念佛太鼓になり、兩方の喧嘩ごつちやになりて、皆々捨ぜりふにて下座へ入る。

軍助　さて〳〵、騷がしい手合ひだわい。

つな　コレ、こちの人軍助どの、今の噂を聞かしやんしたかえ。すりや、賴國さまのお行くへを尋ね、櫻姬さまにはお館を、お立退きなされし樣子。今にも爰へお出であらば、成りたけ彼方のお力になつて下さんせえ。

軍助　そりや氣遣ひしやるな。おぬしが鎌倉扇ケ谷に居やつた時は、入間家の御息女花子さまの召仕ひさすればそのお妹御の櫻姬さま、外ならぬお方といひ、御剃髮のその場より、花子さまもお行くへ知れず。若し惡者の手へ渡り、君傾城の勤めなどなされはせぬかと、夜に入れば吉原三界うろついて、お尋ね申すも、あなたのお行くへ。

つな　よう心付いてお尋ね申して下さんす。云はんす通り花子さまには、松若さまのお行くへ知れず、

どうもこの世にはお出であらぬとお聞き遊ばし、清水にての御剃髪、お名も節々法女さま。どういふ事だ、直ぐにその日よりお行くへ無く、指折り見ればもう一年。ア、いづれに御座ある事おやら。

軍助　一年跡のこの月は、お痛はしや梅若君、下部がお供にありながら、見失ひしと思ひの外、この淵へ浮き死骸、直ぐに腰の刀、申し譯いたさんものと思ひしを、女房の貞方にとめられて、生き存へるもその爲め、手に掛つたることの手紙。

ト貫入れとろりとも出し

何ふお取りに戻る内、預け置いたる辻番の、その侍ひが落した品、粂の平内兵衛と、内通の密書の文言、彼奴は正しく吉田家にて、御勘當受けし粟津の七郎、此奴を捕へて若君の、敵を取らない其うちは、死ぬに死なれぬ家來が、只口惜しきはその夜の誤ひ。面を覆へすうかうかと、預け置いたがこの身の過り。

つな　おゆくへ知れぬ御若も、御手の者の噂では、若しや今にもこの邊へ、お出であらうに疑ひあるまい。どうぞ人目にかゝらぬやうに、すゝ、これとても心がゝり。

軍助　既に所の者どもが、尋ねて來たは既道家を、あの吉原を■落ちとは、若しやつれない心ゆゑ、ゑ

れに逢はうと逃げたのか。かてゝ加へてこれも氣遣ひ。

つな　エヽ、その新造の驅落ちが、どうしてお前が氣遣ひぢやえ。

軍助　サア、氣遣ひと云うたは、あのお姫様、サ、あなたの事を氣遣ひと。

つな　それでお前が。

　　ト思ひ入れ。

軍助　何の役にも立たぬ餘所の噂を。サヽ其方も共々。

つな　アイ。ドリヤ、御回向申しませうか。

　　ト兩人、塚に差寄り、軍助鉦打鳴らし回向する。綱女線香を立て、水むけを汲替へ居る。此うちかすめて三社祭りの鳴り物聞える。これをかり、向うより新造采女、しごきの形、手拭にて顔を隠し、跣足にて出る。跡より櫻姫、綾瀬、兩人とも道に迷ひし體にて出て來り、花道にて

綾瀬　申し、女中さん、爰はもう、隅田川でござんすかえ。

采女　サア、わたしも始めて來いしたゆゑ、今來る道で聞きんしたが、慥かさうでありんすわな。

綾瀬　エヽ、そんならお前も、此あたりのお方ぢや無いのかえ。

采女　アイ、わたしや吉原の者でありんすが、尋ぬる人があるに依つて、廓を脱けて來いしたわいな。

綾瀬　エヽ、吉原のおかがえ……モシ／＼、お姫様、あの女中さんは、ありや吉原の廓の女郎さんと見えまする。あのマア派手やかな形を、御覧遊ばされませいな。

ト櫻姫へ思ひ入れ。

櫻姫　ナニサア、武家の女子と事變り、一際目立つあの風俗、自らも、繪に書く姿は見たれども、おめもじ致すは始めてぢやわいの。

采女　ナヤノ＼、お前さんのお名は、自らさんとかえ。馬鹿らしいお名たねえ。

綾瀬　ホヽヽヽ、あれお聞き遊ばしたか。物ごしも變つて居りまする。

采女　エヽ、なんだな、ついぞねえよう。

ト大小の鳴り物にて、二人とも舞臺へ來る。軍助フッと采女を見て

軍助　ヤ、采女ぢやアないか。

采女　ヤア、主は長にかえ。ようマアわつちを騙しなんしたの。エヽ、怨みだによう。

ト軍助に縋る。綱女偏りする。軍助氣の毒なる思ひ入れにて

軍助　アヽ、コレ／＼、爰では何にも云すナ、云つては悪いぞ／＼。

ト術なき思ひ入れ。

つな　モシ、こちの人え、そんならあの子は、吉原の女郎衆かえ……コレ、來なさんせ。

ト軍助を執へて

こなさんは〳〵、お姫樣をお尋ね申す手がゝりにて、夜に入ると吉原三界、毎晩々々ござんしたは、あの樣な色が出來ての事かいな。お前は〳〵。

軍助　アヽ、コレ〳〵、何をおれが浮氣らしい。さういふ心は、コレ〳〵、これ程も無いがナ。

つな　イエ〳〵〳〵、無いものが、あの樣な女郎さんが、なんで又、お前を尋ねて來たのぢやえ。

軍助　サア、これには段々。

ト云ひ譯せんとする、釆女驅寄り

釆女　コレ、お前は〳〵、毎夜さ廓へござんして、女郎衆に用ありさうに格子から、というて素見の若い衆でもなし、氣前の好さゝうなお方ゆゑ、勤めの身の此方から、耻かしい事云はせて置いて、ようマア返事をして下さんせぬ。それぢやに依つて驅落ちして、お前を尋ねて參りんした程に、サ、女房に持つて下さんせえ。

軍助　コレ〳〵、釆女どの、何しにおれは、浮氣で廓へ通ひはしねえ。ちつと尋ねる女中があるゆゑ、毎晩格子をうか〳〵と、コレ、志は忝いが、おれには現在女房が

釆女　サ、あらうとまゝよ、わたしが一分立てゝ下さんせえ。

つな　これいな／＼、ほんにマアこちの人が、女房のある身ぢやと斷り云ッても聞入れぬは、なんぼ年がゆかぬと云うてあんまりな。マア、そんな事が吉原で流行るか知らぬが、わたしが聞いては、さうはさせぬ。サ、來なさんせ／＼。

釆女　イエ／＼、わたしが亭主にしんすよ。來なさんせ／＼。

つな　エヽ、なめ過ぎた。サ、來なさんせ／＼。

ト兩方より軍助を引ッ張る。

純潮　コレ、物が聞ひたいわいの。

ト櫻癖が手を引き、うか／＼寄るを綱女、釆女と心得

つな　エヽ、なめ過ぎた。退かしやんせ。

ト手荒う突退け、軍助に立ちかゝる。こつちやの立廻り。てんつゝ、祭りの鳴り物になり、向うより迎ひ、木綿袷、船頭の拵へ、菅笠を冠き、頬冠りにて、網袋に入りし鯛を肩へ掛けて、づか／＼と出て來り、舞臺へ來り、この中へ入る。綱女、釆女、兩端より軍助が手を引ッ張り、五人とも手を取交し、彼方此方へ引ッ張り草臥れて皆々坐り、ほつとして、顔見合せ

綱采　ヤ、こなさんは。
惣太　コレ、何にも知らねえわしを、彼方へ引ッ張り此方へ引ッ張り、一枚袷を揉くちやにしたわな。ざつと一本値が下がつたわえ。
軍助　これはしたり、悪い所へござつたばつかり。こなさん、わしが身代りに立たしつたの。
惣太　飛んだ長屋へ引ッ越して、剛氣な目に逢ひやした。したが、この上お心易くお頼み申しやす。
軍助　イヤモウ、お互ひでござります。
惣太　アヽ、かう見たところが、こりやアお前方は、燒餅喧嘩だの。この若い人の下ばと見えるが、モシ、かみさん、油斷しなさるな。併し、内の年増ばかり守つて居る亭主は、誠に煎豆に花サ。男で苦勞するは、ほんの事だが、女の當りまへサ。
櫻姬　あれ聞きやつたか。男で苦勞と云やるからは、いづれの浦でも殿御には、女子は苦勞せにや成らぬかいの。
綾瀨　左樣でござりまする。こゝれにつけても、戀詫び給ふお方の、早う所在を。
ト　その聲に綱女、二人を見て
つな　此あたりには見馴れぬお二人、殊にあなたはうづ高さ、高位の姫ともいふべきお姿、若しや入間

の
綱瀬　アモシ、左様な者では。
惣太　まんざら無いとも云はれまい、いつぞやちよつと見かけたる、大家の姫の御相は、慥に櫻
軍助　ヤ。
惣太　姉さん、この短冊を覺えてござるか。
ト貢入れの内より出し
「見事にたつ白雲と見えつるは。
櫻姫　大内山の櫻なりけり。」ヤ、そりや自らが詠みたる歌、認め給ふは櫻町中納言の御手跡、ほんにい
つぞや
惣太　覺えがござらう。さすれば違はぬお尋ねの
ト寄らうと引退け
軍助　アイヤ、決してさういふお方ぢやござらぬ。この娘御も吉原へ、この頃目見えの奉公人、女郎じ
みない素人サ。
惣太　アヽ、吉原へ目見えに来て居る姐エどのか。それで解つた。廓の手合ひが先刻から、騙な者を

尋ねると云ふが、そんならこの子が、廓を走つた

軍助　なにサ、この子は其やうな胡亂な者では

惣太　ハテ、この男は、どう云へば斯う云ふと、抜けつ潜りつ云ひ廻すが、して、貴樣はこの娘の身寄りの人か。

軍助　サ、身寄り知るべで無けれども、つい居合せて口を出すが、貴樣も又、要らざる事に氣を揉む男だ。殊にどうやら物ごしも、聞いたやうなる

惣太　サ、おれも先刻からさう思ふが、こなたも何處でか逢つたやら、詞の五音が、どうやら聞いたやうでもあり

軍助　して、こなたは何商賣だ。

惣太　わしかえ、わしやア船乗りサ。

軍助　名は何と云ひます。

惣太　わしが名は惣

軍助　ヤ。

ト思ひ入れ。惣太こなしあつて

惣太　イヤ〳〵、さうぢやアねえ。まだわしは名は無いよ。
軍助　ナニ名が無い。ハテ、こなさんは不自由な人だの。どうやら覺えのその五音。
惣太　おれもいつぞや手に入つた、歌の書いたるこの短冊、筆にどうやら見覺えの、正しく筆。
軍助　ほんに思へば、ヤ、それ〳〵、忍ぶ國の暗縞れ、桐油仕立ての紙入れ、内に究名の
　　ト以前の状を出す。惣太恟りして
惣太　ナ。
　　ト思ひ入れ
軍助　覺えがあらうの。
　　ト立ちかゝる。惣太紛つて
采女　アヽ、コレイナア。
　　ト思ひ入れ。惣太こなしあつて
惣太　エヽ、此あとは
　　ト采女が顔を見て、また顔を見へ
アイサ、あとはついた上で、イヤモ、顔へ言をきつて置かうか。

ト唄になり、ツイと入る、軍助思ひ入れあつて

軍助　今の船乗り。

ト行からうとする。釆女綱女執付き

釆女　アヽモシ、わたしをどうぞ。

軍助　慥か覺えの

ト振切らうとする。

つな　アヽコレ、お前は急いたるその顏色、譯はあらうが折角に、めぐり逢うたる姫君樣。

軍助　成る程、心急かるゝあの船乗り、引ツ捕へんと思ふより、姫君樣と存じたなれど、粗忽の段は幾重にも、御容赦なされて、下さりませ。コレ、釆女、おれも其方の志、必ず無下にはせぬ程に、マア〳〵暫くが内扣へて居やれ……して〳〵、姫君には、何れを當とお館を。

櫻姫　サ、立退き出でしも、常陸之介さまのお行くへ尋ぬる心より。

綾瀬　して、姫君のお身の上、存じた二人のお方は。

つな　御尤ものお詞、私しことは、花子の前さまに宮仕へ仕りましたる、綱女と申す者。これに居りまするは私しが連合ひ

軍助　アコレ、女房、他ぶんの聞え。

ト采女へ摺寄り

色懸ならねど、廓を毎晩待付いて、格子の先でむくつけな、心にも無い贅言も、何を隠さう女房が御主人、尼御とおなりなされたる、花子さまが敵の手がゝり、聞出させる手段もあらうかと、浮世そめきに交つて、勝手の知れぬ廓の噂、聞きたい為におぬしまで、らつちもない事云ひ出したり、また云はれたりお互ひに、コレ、それを誠とおぬしが親切、忝い。何を隠さうおれが素性は、吉田家の二合半、軍助といふ奴らさ、實ある心と知りながら、小ッ恥かしくて一度でも、嫌味の無いのは愛の道理だ。必ずともにさう思やれよ。

ト采女始終様子を聞き、こなしあつて

采女　よりや、お前さん御夫婦が、吉田の家に譜代の御家來。

つな　わたくしは鎌倉扇ヶ谷、花子さまに仕へたる綱女といふ者、即ち主の女房がやわいな。

采女　エヽ、そんならお前が鎌倉の、扇ヶ谷に居やしやんした、アヽ、綱女さん。

ト思ひ入れあり、懐より守りを出し

お前、これを見て下さんせ。

ト投げやる。綱女取上げ、内より文を出す。

南無阿彌陀佛。

ト軍助が一腰へ手を掛けるを留めて

軍助　コレサ、釆女、何でわりやア死なうとする。

釆女　わたしが死ぬるは姉さんへ、身の詫び事の申し譯。

軍助　ナニ姉さんへいたづらの

つな　ほんにこりや私が手跡の文。

ト見て

コレ〳〵。いつぞや別れし妹へ、便り無きまゝ認めて、贈りて文の指折れば……はや一昔し跡の事、音信不通に東路へ、養子に行きやつた、そんなら妹の

釆女　お光といふはわたしが事。養子の先の二親も、五年以前に世を早う、一人殘つたわたしをば、世話する人が吉原へ、預けたなりについそれなり。お前のお文は二親の、まだ息才の其うちに、來たのをわたしが大切に、守りにかけて居やんしたも、兄弟側に居る心。モシ、お懐かしうござりまする。

つな　ヱヽ、そんならそれがみんな汁粉のおかげ、どうぞ二親過ぎし跡、今は聞ひ愛う鮮が。

軍助　ヱヽ、さては此方ゆゑ様子。さうとは知らず頼君の、お行くへ求むる手がゝりと、悴子思ひ止
　やらくらを

栗々　益も世ひ顕はれの、そのいたづらが今更に、恥かしいやら大胆な、どうでわたしはお前へ不詳
　ぼうを致して。

　ト　腰にて死なうとする。軍人留める。この時艶次、勘ち、軍助を伴ひ出でより窺ふ。

軍助　不思議な縁に廻り来て、兄弟思はぬ名乗り。何とぞしても悲ひ殺ふ、頼国さまのお行くへ、探し
　捜れて尋ね出て

綾　お頼は聞かこの経判、時に親共奥様へ小遣にされし、大切な、頼国さまのお目見えありし

軍助　郡兵衛がいふこの一巻、誰かに一度盗まれたりしを、やう／＼取り得て有る。

　ト　懐中の一巻を出す。軍助手に入れあって

軍助　ハテ、合点ゆかぬ頼国さまのお使、下司専次の私しが、なに見覚えござらねど、郡兵衛一巻と
　は、吉田の家のお宝なるを、常陸之助頼国さま、どうして御所持なされしぞ。

つな　おはしやみすればその一巻、頼国さまが郡兵衛へ、お渡しありしは確かなり。

軍助　これには仔細が無けりや叶はぬ。

ト思ひ入れあり。

これについてもたつた今、この所で、姫の短冊所持の曲者、正しく若君梅若さまを、害せし奴に極まつたわえ。

ト下座の方を見て思ひ入れ。

龜成　さてこそ櫻姫。家來、召捕れ。

家來　心得ました。動くな。

ト取卷く。軍助圍つて

軍助　お待ちなされませ、お侍ひ樣、櫻姫とは何を證據に。

龜成　ヤア、證據といふはたつた今、あの女めが吐かした。後で聞いた地獄耳、遁れぬ所だ、姫を渡せ。

軍助　して、櫻姫なら何科がござつて。

龜成　科と申すは、鎌倉降參の賴國こそ、誠は僞り紛れ者。それにどうやら櫻姫、捕へて拷問なすならば、素性知れんと疑ひかゝり、姫を詮議し、某は、葛西太郎龜成、きり／＼姫を渡すまいか。

軍助　見升に此さゝ、見遁しくれなばその通り、さなきに於ては軍助が相手になる。お侍ひ、さりゝゝ
安ゐ通しやれな。

亀成　面倒な。皆を搦れ。

家来　心得ました。動くな。

トかゝるを、軍助立廻りて

軍助　女房、彼方に心を着けて、必ずお側を。

つな　心得ました。

亀成　そりや。

家来　捕つた。

トかゝるを、軍助投退け〳〵、鋒のツトメになり、向うへ追うて入る。亀成は下座へ逃げて入る。三人残つて

つな　コレ、軍助どの、必ず長追ひして下さんすないな。

綾瀬　モシ、禰女さん、どうぞお静様を。

つな　お案じなされますな。さりながら、今の追手お尻へ、引返して来る時は、女子ばかりで、ア

コレ、どうぞ仕様が。

トいろ〳〵思ひ入れ。此うち采女こなしあつて

采女　申し、姉さん、わたしが着て居るこの小袖、憚りながらお姫様へ、召させ申して下さんせいな。

つな　ヤ、なぜに其方の、小袖をあなたへ。

采女　召替へさせ申しまするも、又ぞろや今の追手が爰へ參つて、若し自然叶はぬ時には、彼方の召し物わたしが着て、我れこそ入間の妹姫、櫻姫ぢやと嘘云うて、捕へられて行けばとて、ツイ口先でつべこべと、云ひ拔けて來やんす程に、どうぞ彼方のお小袖と、わたしが小袖を、召替へさせ申して下さんせいな。

トこれにて綱女思ひ入れあつて

つな　オヽ、妹、出かしやつた、好う云やつた。さりながら、捕へられて行く時は、其方がどのやうに云やつても、廓の勤めと事變り、手荒う拷問ある時は

采女　アヽモシ、わたしもお前の妹でござんす。此やうな時に姉さん御夫婦、忠義の端ともならうかと、そればつかりで

つな　流石は妹、好うマア其よな。

ト思ひ入れ。この時向ふ、ばた〳〵と人音する。

采女 イヤ〳〵、あの人音は慥かに殿下、爰へ来るぞ。

つな 姫君様の上着のお小袖、少しも早う。

ト采女、裲襠の上着を脱ぎにかゝる。

縫殿 アヽコレ、いかに理不尽な殿下なればとて、采女が親切者ゆゑに、代はらん心は嬉しいが、どうもそれでは。

采女 イエ〳〵、大事ござりませぬ。どうぞわたしが願ひの通り。

縫殿 あれ程までに頼むに、暫しも代はらんとは、あなたを暫しも御預け申し、私しはこれより直ぐに、綱国さまに御縁なれ、藤崎殿とあるからは、聞いの来るまで御所在を

つな お身代りとなされまするな。姫君様はわたしがお供仕りまする。お前は早う御館さまのお行く方へ。

采女 姫君様と申す御方は、暫しが間その一着、わたしにお預けなされませいな。

縫殿 大切な品ながら其方に。

ト一着を采女へ渡す。

縫殿 然らばわたしはひとまづ早う。

櫻姫　必ずあなたの御所在を。
綾瀬　畏まりました。
つな　姫君様も妹も、あの木母寺のお座敷を借りて、小袖を召替へて。

ト　よき時分より杢郎兵衞、小袖櫃を脊負ひ、菓子袋を提げ出かゝり居て、この時

杢郎　コレ、お内儀。

ト大きな聲にて云ふ。

つな　エヽ、悧りしたわいな。
杢郎　ハテ仰山な。
つな　サア〳〵、入らつしやりませう。

ト念佛太鼓になり、綱女、櫻姫をいたはり、采女附いて下座へ入る。綾瀬向うへ入る。杢兵衞殘つて

杢郎　何だか大分美しい、たぼどもが見えたわえ。どうでも春先はお屋敷が出るて……ハテ、それはよいが、この惣太はマア、何處へ行つたやら、汐時の好い内、早くやりたいものぢや。

ト捨ぜりふにて待ち居る。矢張り念佛太鼓になり、治右衞門、誂への高札を持ち、惣太が手を引ツ張り、跡より太郎八と以前の百姓二人、鐘を載せし地車の綱を引き出て來り

惣太　コレサ、何の用だよ。
皆々　ハテ、庄屋どのが尋ねて居られた。
治右　モシ〳〵、庄屋樣、惣太を見付けたから
三人　連れて來ました〳〵。
幸郎　それは氣が付き申した。コレ、惣太、おぬしはこの樽を、龜井戸の巴屋まで、積んで行つて下さい
コレ、おらが娘が、あの巴屋に目見得が濟んで、明日引越して行く。おぬし、今夜の汐に、この
樽と十番の菓子袋を、先へ屆けて下さい〳〵。
惣太　エヽ、何かえ、お前の娘御が引越してござるから、その先へその樽を積んで行くのかえ。
幸郎　左樣々々、降らぬ内、早うやつてもらはう〳〵。
惣太　アイ〳〵、承知しやした……して、お前方はその、鐘を何處へ持つてござります。
太郎　サア、この鐘は知つての通り、木母寺樣で新に出來るこの釣り鐘。
治右　土手の櫻へ掛けて置き、御供養がござります。
惣太　アヽ、それで、その云ひ譯を書いたこの高札かえ。
治右　イヤ〳〵、これは今隣村から定使ひが持つて來て、この土手へ建てゝ置くのぢや。庄屋樣へ渡し

て下されと置いて行きました。モシ、庄屋様、讀んで見さつしやりませ。

ト杢郎兵衞に渡す。

杢郎 何ぢや、隣村から廻つて來たとか。そりや大方お觸れ書であらう。

皆々 ハテ、讀んで見さつしやりませ〳〵。

杢郎 ハテ、この書き物が讀める位なら、なに庄屋役をするものか。祐筆とやらになつて、御奉公を勤めるワ、馬鹿々々しい。

四人 それでもお觸れだ。讀んで見さつしやりませ〳〵。

杢郎 ハテ、面倒な。今日は親の日だから、書いた物は讀まぬ日ぢや。コレ、惣太、おぬし讀めるか。ちよつと讀んでくりやれ。

惣太 ドレ、見せなせえ。

ト高札を取つて

「此度鎌倉武將へ降參の願を立てし常陸之助賴國とは、上を僞る變名にて、誠は朝敵のきざしある吉田家の松若丸、この東路に忍びこれある由、所在をしかと訴へ出でし者には、莫大の褒美下し置るゝものなり、月日。」

ト讀み、思ひ入れあつて

ヤ、すりやそれ程に行くへ知れず、死んだと世上に噂ある、あの松若どのが存命にて、さては天女右門之助と、變名して、このあたりに。

ト思ひ入れある。

皆々　アヽ、そりやアお尋ね者かの。

惣太　左様さ。〳〵さう見えまする。

本郎　お觸れ書なら、上手縁へ立てゝ置きませう。

四人　さうさつしやりませ〳〵。

ト無造作に高札を本郎呉竹立てゝ

本郎　これでよし〳〵。これからお兄、上手の縁へこの鯛を掛けねば成らぬ。さて〳〵重い物ぢやいゝのさ。

四人　サア〳〵、行きませう〳〵。

ト右の鯛を縁に結び、右の鯛を縁先に四人、寄つてふたて鯛を引いて向ふへ入る。この時吉野、向ふへ通り、件の高札を覗いて、よく〳〵讀み居る。

惣太　アヽ、そんなら吉田家の松若も、頼國と變名して……道理で先刻に櫻姫、あの頼國の行くへを尋ねて。それにつけても去年三月、忍ケ岡で暗がり紛れ、餓鬼を預けた侍ひは、たしか先刻の。

貞景　すりや、今日の今までも、魔道に入つてか但し又、落命せしとか沙汰ありし、松若どのは存命にて。

惣太　ヤ、こなたは慥かに。

貞景　朋友松井の源吾貞景。粟津の七郎、ハテ、久しうて逢うたわえ。

惣太　成る程、貴樣は源吾貞景。さては都を立退いて。

貞景　諸國を窺ふ廻國修業。過ぎにし吉田家滅亡の砌り、少將どのも身が手にかけ、まつた小伜梅若丸、下部の軍助伴うて、行くへ知れず。兄松若は魔道に入り、行くへ知れぬと思ひの外、コレ。

ト高札を差付け

この如くに觸れ書は、常陸之助と變名して、此あたりにとあるからは、日頃某心をかけたる櫻姫と緣談整ふ。さすれば願ひも水の泡。

惣太　サ、その櫻姫に、上より疑ひかゝりし身の上、先刻に爰へ頼國が、行くへを慕うてうせたる樣子こなたも吉田の滅亡なり、同じ日陰の源吾貞景。搦め出さば一度の

貞景　案じと聞いて、倍憎しん不敵の七郎。殊に吉王の少将惟貞、身が手にかけし上からは、主人の敵と討たねすは成るまい。七郎、見事、身共を討つか。

惣太　貞つた子より抱いた子と、今おちぶれた七郎が、この身のしがくに深山との、不憫でおりやる、下手になつて下さい。

貞景　ハテ、大丈夫がその一言、して、われやどうして聞かける。

惣太　マア、こなさんを、わしが斬うして。

ト斯つくし、組付しつゝ貞景振鉾を、腕を執つて

貞景　友情篤の貞景に、猪打たんとは、ハテ不敵な。

惣太　ところを、わしぢ。

ト組着くを立騒りて

貞景　いらざる咒誡、生け置いたとて益なき七郎。

ト持つたる鋒杖の仕込みを抜いて切り付ける、惣太手早く雨乱にてしやんと受ける、この拍子の鍔切り折れて、庭の川へ、折れは落ちて流れ行く、惣太ハタとへたば、貞景身をかはして斬り付ける、惣太驚き、飛ぎる。

惣太　ア、コレ〳〵、滅多な事をさつしやるな。危ねえわな〳〵。コレ、あやまつた〳〵、もう〳〵貴樣に指でも差す事ではねえ。あやまつた〳〵、その白刃を、納めて下さい〳〵。

貞景　イヤ、さう云ふは僞りならん。甘き詞に欺いて、油斷を見濟まし貞景を、吉田の家の敵ぞと、そちや某を討つ心。

惣太　コレ、源吾どの、そんならこなたの目からも、それ程までに七郎は、忠義の武士と見えまするか。

貞景　おんでもない事。われも吉田家譜代の侍ひ。

惣太　さう見えるとは有り難い。柳の塚に埋んだる、吉田の公達梅若は。

貞景　不便や人手に横死と聞く。定めて小悴梅若は、敵を尋ねに。

惣太　敵といふは誰れあらう、コレ、卽ちわしでござる。

貞景　ヤ、日頃不敵と知つたれど、よもや主人の梅若を。

惣太　去年三月、しかも今日、忍ケ岡の辻番屋、現在家來が打つ杖に、脆くも彌生十四日、風に落花の梅若は

貞景　いよ〳〵七郎、アノ其方が

惣太　長田この方……磔刑道具サ。

貞景　ハテ、丈夫な魂ひだな。

　　　ト思ひ入れあり。

さすれば吉田家の者どもは、敵たふ七郎、同氣求めし其方は、この貞景に、同心なすべき心は無いか。

惣太　何しに出世の手蔓とならば、今からこなたと合體して。

貞景　すりや、其の片腕と。

惣太　我はやなれど。

貞景　其の上は謀逆。

　　　ト向う、ばた／＼と人音する。惣太きつと見て

惣太　ヤ、こりや先刻の……モシ

　　　ト貞景に囁く。

貞景　すりや軍助が、

惣太　ソレ。

　　　ト件の態になり、兩人とも[illegible]し、こなたへ寄つて下座へ入る。向うより軍助、いきせきと

軍助　アヽコレ。女房に逢うて、ちつとも早く姫君を、夫婦の者が隠れ家へ、お供申して。

駈け戻り來り

ト云ひ〳〵、舞臺へ來る。この時下座より櫻姫、采女が形な着替へ駈けて出て來る。無縁坊追駈け出で來り

無縁　コレサ〳〵、姐エどの、貴樣は吉原の女郎衆であらう。迎ひの人が見えて、采女とやらいふ女を尋ねると、あの木母寺に來て居た。サア〳〵、來さつし〳〵。

ト櫻姫が手を執る。

櫻姫　アヽコレ、自らは、その采女とやらぢやないわいなう。

無縁　ハテ、ないかあるか知らぬが、話しに聞いた着物が、どうか似たやうだ。マア〳〵、ちよつと來なよ。

ト寄らうとする。軍助留めて

軍助　アヽ、コレ〳〵、その女中は、吉原の女郎ではござらぬが、コレ〳〵、お前、ござらずとも可いわえ、可いわえ。

無縁　ござらずとも可いとは、何の事でござる。

軍助　いゝ牛島の延命寺のお所化が、葬式が來たが、手が足りぬというて、たつた今尋ねて來たぞえ〳〵。

無縁　ナニ、延命寺へ葬式が來た。

軍助　しかも闘氣な好い葬式だ。お前がこさらねば成らぬと言うて、尋ねてゐたが、ハテ、忙しいことだ。

無縁　そいつは行かねば成らぬ〳〵。遠くはあるまいかの。

軍助　僅か七つの葬式だ。早く行きなさい〳〵。

無縁　これや斯うしては居られぬ。エヽ、氣が急くわえ〳〵。急けば急くほど、頭はつかり先へ行くやうだ。アレ〳〵〳〵〳〵。

トよい〳〵の鳴物になり、すた〳〵と向うへ入る。軍助跡を見送り、

軍助　ヤレ〳〵、勝五様、あなた様には、こりやお小袖を。

櫻姫　サテ、承女とやらが情にて、追手の者を見遁る爲にと、その身の上着を脱いで。

軍助　成る程、これや好い處へ某が着きしが、何を申すも眞中に、お顔を存じた今の傍び、取つて返せば

ト小袖を着せ、目で知らせ

幸ひ〳〵天の與へ、暫くこれへ。

卜蓋を明け、内の品を取捨て、櫻姫を隱し、宜しく思ひ入れ。以前の雁金屋若い者二人出かゝり窺ふ。

軍助　お氣詰りではございませうが、少しの間。

卜引擔ぎ行かうとする。二人は駈け寄り。

權七　待ちやアがれ〳〵。抱へた釆女を引出して、連れて逃げる關破り。見付けたぞ〳〵。

軍助　コレ〳〵、滅多な事を云はつしやるな。どうして釆女とやらを。わしはそんな事は知りませぬぞ知りませぬぞ。

勘六　イヽヤ、知らえねとは云はさねえ。コレ、雁金屋の若い者勘六だワ。毎晩〳〵格子先へ、素見ぞめきの二本棒、知らねえとは云はさねえ。いよ〳〵知らぬが定ならば

權七　この蓋を押ッ開き、中をおいらが改めた、その上ではいざ知らず、此なか見ない其うちは、やらない〳〵。

軍助　コレサ〳〵、何も貴樣達に改められる覺えは無い。爰を放さつしやいよ。

兩人　覺えが無くば中を見ようか。

軍助　サア、この中は。

懼七　見咎むるは猶々怪しい。

勘六　此ア儀は、おいら二人が。

ト引摺り行けんとする。軍助是をまいとする。捨ぜりふにて争ひ居る。惣太上手より出て、これを見て、駈け寄り、この状を奪ひ行かうとする、二人見つけて、惣太を捉へ

両人　コレ／＼、それを何処へ持つて行く／＼。

惣太　ハテ、これやァおれが頼まれた、紛失みにする品物だワ。

軍助　や、わりやア先刻の。

惣太　自体は手紙の……こりや斯うしては。

ト駈け出す。

軍助　やる事は成らねえワ。

両人　マア、改めて。

ト両人、こつちやの立廻り。懼七軍助に執付く内、惣太状を掴み、花道へかゝり、中の間にあゆみを渡り、向ふの方へ来て留まる。懼七勘六、惣太を追ひ駈け、捨ぜりふにて向ふへ入る。軍助続いて行かうとする。ぱた／＼にて下座より磯六、采女を引立て出て来る。軍助見て

軍助　ヤ、そちや釆女ぢやないか。

ト驅け戻る。

釆女　アヽコレ、自らことは櫻姫、滅多な事を云ふまいぞ。

鶴成　さてこそ自分の白狀といひ、面はそれと覺えねど、道にて見付けた小袖の模樣、櫻姫に極つたり。

軍助　すりや、姫君と云ひ立てゝ、あなたに代つて。

釆女　サ、捕へられなばわたしが直ぐに……アイ、自らは疾うから覺悟ぞ。モシ、せめて不便と。

軍助　サ、出來したなれども情なや、隱し置きたる姫君を、奪ひ取つたる曲者め。

釆女　そんならあなたを。

軍助　跡追ッ駈けて。

釆女　わたしも一緒に

ト行かうとする。

鶴成　ドッコイやらぬ。

ト引付ける。軍助振り返り

軍助　アヽ、御口に代つて。

采女　早うござんせ。

軍助　ソレ。

ト時の鐘になり、座敷に向うへ入る。遊太これを窺ひ居る。鐵成、采女を引付け

鐵成　慳貪、うせろ。

ト引すてんとする。采女懐中より一巻を落す。鐵成手早く取つて

こりやコレ、一巻を。

采女　アヽコレ。

ト采女を鐵成引付ける。この時百蔵窺ひ出て、一巻を奪ひ取る。鐵成かゝるをきつと見上げ

百蔵　最期の一巻を所持なすは、さてはいよ〳〵曲者

鐵成　うぬ、修行者め。

ト掴みかゝるを蹴返し、刀を奪ひ取り、見事に首打落す。時に鐘、采女呆れて見上ぐ。人これを見

て、猿のあゆみを本舞臺へ來る。

百蔵　御覧じませと知らざれど、思はず忍びし有様の事、遂れぬ間の働きせん。ト、曲者

釆女 エヽ、源吾と云はんす修行者は、正しく松井の

ト手に執る。

貞景 いかにも源吾貞景だワ。

釆女 さては吉田のお家を亂せし、アノこなさんが。

貞景 いかにも。一卷を所持なすからは、疑ひも無き入間の姫たる

釆女 アイ、櫻姫でござりまする。

ト思ひ入れ。

惣太 イヽヤ、貞景御油斷あるな。姫といふのは僞りにて、浮川竹の下素女、その名も釆女といふ新造。誠の姫を軍助が、隱し置いたるこの櫃を、宙で攫つて、コレ爰に。

貞景 すりや、この女は某を、僞る爲の似せものとな。して又誠の櫻姫、其はんがへに入れ置いたか。

惣太 汐入村の隱れ家へ、埋んで置いて、こなたの思ひを。

貞景 晴らすばかりか松若が、行くへを尋ぬる好き手がゝり。

惣太 姫が手跡のこの短册、これも何ぞの役に立て。

貞景　苔の花の閻魔殿、われが埴生で。

惣太　待つて居るぞよ。

采女　いやその中にはお姫樣、それと聞いては、其方はやられぬ。姫君樣を。

ト振りほどくを、貞景引捉へ、

貞景　此奴に構はず、ちつとも早く。

惣太　合點だ。

ト時の鐘になり、惣太逸散に下座へ入る。采女續いて追駈けんとするを、貞景しごきを取つて引付ける。はづみにしごき解ける。

采女　アヽコレ、丁稚が。

貞景　ソレ〳〵、鈍くと乳母、それでも行くか。

采女　エヽ、惡い事。

ト此間よりつかみに、上に着たりし紫の小袖脱げて、下着下帯ばかりになり、貞景が摑みし小袖に縋つて

お姫樣から拝借り申したこのお小袖、外手へやつては。

貞景　エヽ、面倒な、寝言やアがれ。

ト蹴飛し、小袖を奪ひ取る。

エヽ、この小袖があるばつかり、紛らはしい櫻姫、見違へぬやうに小袖は川へ。

ト前の流れへ投げ込む。小袖、川の面を流れ入る。

釆女　ヤヽヽヽ、お姫様よりお願ひ申し、預かり置いたるあのお小袖、隅田川の渦く波間へ。オヽ〱

ホイ。

ト思ひ入れあり。

申し譯にはこなたの實名、吉田のお家に敵對し、源吾貞景といふ事を、軍助どのへ知らせた上。

ト行かうとする。

貞景　べら坊め、それを云はれてたまるものか。

釆女　そんならわしが持つて居た、その一巻を返さんせ。

貞景　一旦手に入るこの一巻、要らざる賣女め、口外するとぶッ放すぞ。

釆女　どうぞ一巻を。

ト縋るを

貞景　エヽ、面倒な。邪魔をひろげば、うぬもこの世の。

ト采女を引付ける。足下に踏へ、仕込みを抜かうとする。この時ばた／＼にて、綱女走り來り、この中へ入り、采女を圍ひ、貞景を見て

つなヤ、こなさんは、たしか松井の

貞景　おのれは卜部軍助が

つな　女房の綱女。源吾との、さてはこなたは姿を變へて

貞景　隱れ窺ふこの樣子、見られた上は、うぬも生けては。

ト切り付ける。綱女走り廻り、この時貞景懷中より一卷を落す。采女手早く取つて

采女　こりや縁者の捕かりし

つな　お家の重寶、都鳥。

貞景　その一卷を。

ト切り付ける。綱女在合ふ傘こそを取つて白刃へ打かけ、きつと留める。采女一卷を持ち行かうとするを、貞景、采女が襟をきつと踏へる。この見得よろしく、入相の鐘、雨車の音烈しく、道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う遠目に見たる隅田川の體。兩脇に葭の茂り、ところ〳〵小薄板などをせり上げ、

所々に野桃の盛り、本雨頻りに降り、入相の鐘、蛙の聲、上にありし渡し場の榜示杭、下の舞臺先へ來る。道具とまる。

ト爰にて誂への唄淨瑠璃になり、好き時分雨は止む。唄の內、向うよりやつれし法玄比丘尼、墨の古法衣、松若の羽織を淺黃の大袱紗に包み、これを斜に脊負ひ、素足にて安下駄を穿き、網代の市女笠やうの古きを被り、竹杖を突き出て來り、花道にて思ひ入れ。此うち蛙の聲、藪鶯囀る。空には雁金四五羽飛び、清玄こなしあつて

清玄　アヽ、身は雲水の定めなき、佛に仕へ奉り、來世を願ふも何ゆゑぞ。云ひ號けせし御方の、この世に亡きと聞きしゆゑ、望み無き身と尼法師、只情なきは淸水にて、初に逢うたる賴國どの、過行き給ふ松若さまの、その姿繪に生寫し。アヽ、好い殿御振りと思はずも、迷ふは卽ち凡夫心悟りの胸も花曇り。

ト思ひ入れ。此うちトヨヒにて空には雁がねの聲、鶯の鳴く音にこなしあつて

藪鶯は法華經と、經誦む鳥の花を戀ふ。盛りの花を仇事と

ト我が姿へ思ひ入れあり。

見捨てゝ歸る雁がねの。アコレ、心々の世の中ぢやなア。

ト思ひ入れあつて廻り來る。唄淨瑠璃の文句一ぱいに切れる。清玄舞臺へ來り、川の面を見廻し見る。此うち誂への合ひ方、時の鐘、雨は小止みの體、あたりを見

とやかうする内、實はもう隅田川の渡し場。アヽ、もう春雨もやんださうな。この間に早う。

ト向ふを見て

渡し守も居やらぬ樣子、暫く爰で、舟の便りを待ちませうか。

ト川端の石に腰打掛け、鉢卷をなする。捨て舞臺になり、向うの方へ惣太、[illegible]

惣太 エヽ、今の一降りでづぶ濡れになつた。殊に肝を冷やした、今の奴等がうるさくつて堪らない。

ドレマア、この樽を舟へ打込んで、しづむ所は渡入れの、それがよい／＼。

ト舟の内へ入り、樽をよき所へ置き、手拭を絞り出す。清玄これを見つけ

清玄 アヽモシ、その舟に乘せて下さりませぬか。

惣太 ナニ乘せてくれろ。貴樣は往來の人か。

清玄 アイ、往來の者でござります。渡し舟と見受けました。渡して下さりませ。

惣太 成る程、これやア渡し舟だが、おらアもう一つ川上へ乘り出す所。して、貴樣は何處へ行く人だえ。



清玄　アイ、淺茅が原の庵室まで參る者でござりまする。どうぞ乘せて下さりませ。

惣太　アヽ、淺茅が原へ通る人か。そんなら滿更乘せずにも置かれまい。エヽ、小面倒な。

ト棹をさし、船を花道の方へ乘りつけ

サア〳〵、乘らつしやりませ〳〵。

清玄　これは忝うござりまする。南無阿彌陀佛。

ト舟へ乘る。惣太、じろ〳〵見て

惣太　アヽ、坊樣だの。

清玄　左樣でござりまする。

惣太　おらア又、女の聲だと思つたが。

清玄　アイ、尼でござりまする。

惣太　アヽ、比丘尼か。どうか若い聲だの。なにか、小梅の尼寺へ行かしつたのか。

清玄　ハイ。

惣太　ソレ出すよ。

ト棹をさし、舟は出る。此うち清玄、小袖櫃へ腰を掛け居て、東の方を見て

清玄　コレ、渡し守どの、あの灯は何の爲に、舟で篝を焚きまするぞ。

惣太　エヽ、あの灯か。ありやア白魚を取るのサ。この頃はモウ白魚が、陽氣に尾久へ下がるで、ほんに、爰の川を漕いで、様々な事を聞かれるよ。名代の隅田川の渡しだ。爰の船頭は、ちつとは謡も覺えて居ねば成らぬ。

清玄　アヽ、アレ／＼、流れて行くあの白い物は。

ト鱗に見たる心。

惣太　ナニ、流れて行くなら、わしが綿だが、川を流れて行くのか。なにサ、ありやア鷗……イヤ、こゝらが謡で教へるところだ。エヘン／＼、あの白く流るゝは都鳥にて候ふ。また此方に黒く流るゝは、鵜が鰻を呑むのにて候ふ。ハヽヽヽ。

清玄　ホヽ、ホヽ、風雅な人ぢやわいの。

ト この時によき處へ、最前の切り落せし高札流れ來る。清玄ふつと目を着け

何やら文字の記したる

ト札にて揺留め、引上げ讀まんとして、月に雲かゝりし體にて、闇に見えぬ分かの仕組み。惣太これを知らず、舟は段々と東の方へ漕ぐ心にて、鐘ヶ淵の標示杭、渡板、樋、水草、花道のあたり引いて取る。

正面の張り物うち返しにて、川中になる體。此うち始終誂への合ひ方。東の方より小舟に棹し、松若丸、深き竹の子笠、古き藁簑を結構なる衣裳の上へ引掛け、さでを持ち、篝火を焚き、白魚くみの思ひ入れにて出で來り、眞中にて舟行逢ひ、松若、さでにて汲む。この時最前川へ落ちたる櫻姫の小袖、さでに懸つて上がる。松若取上げ、篝火にて見る事。清玄も篝火を幸ひと高札を讀む。

松若 いとも派手なる模樣の振り袖。

ト これを聞き、櫃の內の姫、そろ〳〵と內より蓋を差上げて窺ふ思ひ入れ。尤もこれは吹替なり。

清玄 賴國とは變名にて、誠は吉田の松若丸。

ト 讀み〳〵、愕りして

ヤヽヽ、さては違はぬ松若さま。

ト 愕りし、持つたる高札を川へ落す。この聲に松若心得ずと清玄に目を着け

松若 その面相は似寄れども、形は雪に墨染の、破れ衣に破れ笠。

清玄 それも誰れゆゑ。

ト 小袖に目を着け

ヤ、櫻姫が慥か着替への

惣太　エヽ。

ト戀の内と心得愕りする。松若、清玄が物ごしを窺ひ

松若　さてこそ運に叶。

清玄　お聲は正しく。

トよろ／＼と立上がる。惣太思はず枠にて向ふの門を突く。逆艪くる／＼と廻つて西の方へ靡く。清玄は東の方へ寄く。目の見えぬ清玄、たゞ／＼として小柄杓の淵へ手を突く事

惣太　當ります。

トこれを木の頭、

靜かに上がりなさい。

ト白にて錦なきす。清玄は淵へ手を突き、はいなき體。内の階段々と隠れる。松若は小袖を持ち、笠にて顔を隠す。暮れ六ツの鐘、三方一度のとたん、この仕組み、さざみの拍子木よろしく拍子　幕

第二番目　中幕　　妙亀庵の場

役名――軍助女房、鋼女、息女、櫻姫。道者、無縁坊、庄屋、太郎兵衛。野伏り、百姓の三。

同、骨箱の又。雁金屋若い者、權七。判人、勘六。小比丘、妙林。百姓、汐入の彌藏。猿島惣太。
淸玄尼實ハ花子の前。局岩藤の亡靈。下部、軍助。

本舞臺、三間の間、上の方小高き藁葺の屋體。佛壇に誂への厨子佛具よろしく飾り付け、床の下出入りあり。正面反古貼りの明り障子を立てたる竹緣つき、下地窓、鼠壁崩るゝ仕かけ、雲手の手水鉢、門口竹の簀戸、外輪の生垣、石地藏、石塔など建てあり、上に浪板、鏡が池といふ高札。よき所に圍爐裡、欄間より自在の竹に鑵子を懸け、妙林、黑木綿比丘の頭巾、鼠木綿布子、尼の拵へ、圍爐裡に藥鍋を掛け、こしを煎じ居る。門口に汐入の彌藏、ぼつとせ鬘、手拭を鉢卷にして木綿袷、百姓の拵へ、啣へ煙管にて薪割り臺へ麁朶を集め、鉈にてこなして居る。すべて淺茅ヶ原妙龜庵の體。三味線入りの禪のツトメ、誂への鳴り物にて幕明く。

ト彌藏は麁朶をこなして居る。矢張りこの鳴り物彈流しにて、向うより前幕の無緣坊、梅若山大權現敷石建立と染めたる勸化幟を持ち、鈴を振つて、すた〱と出て來り、門口へ來て、

無緣　隅田川木母寺梅若塚敷石建立。

ト鈴を振る。

彌藏　これはしたり、通らつしやい〱。

ト見て

イヤ、こなさんは隅田村の無縁坊ぢやないか。

無縁　オヽ、こなたは汐入の彌藏どのぢやないか。

彌藏　彌藏どのどころかいの、氣を付けさんせ。いかに修行ぢやというて、この庵室へ手の内貰ひにござんすとは、コレ、此方から貰ひに出る、本家もやわいの。

無縁　成る程なア、ツイ、うかうかと爰へ來て、尼御の庵へ修行とは、其處が彼の博學多才の無縁坊、孔子も時に逢はずなア。

ト内へ入る。

彌藏　措かんせいの。こなさんの様な、よいよい孔子が、何處の國にあるものかいの。

無縁　これはしたり、御叮嚀な御挨拶。ハヽヽ。時に庵主はどうぢや、病氣は快いかな。

妙林　イエイエ、またいつもの通りにぶらぶら煩ひ。その病身な清玄尼さまが、毎日々々御修行に出ておやわいな。

無縁　ハテ、そりや出がらうに、暖まつてござればよいになア。彌藏どの、さうぢやござらぬか。

彌藏　サアサア、わしもさう思ふわや。今日も見舞ひに來て見れば、アレ、あの小比丘が、彼處へやら

藥の世話やら、可哀さうに手一ッと思ふから、來合せたを幸ひと、薪もこなして置きました。コ」レコレ、妙林比丘、あの御庵主は毎日修行といふ事ぢやが、昨日もアノ出られたのか。

妙林　アノ、昨夜はとりわけ雨に逢うて、濡れて戻りなさんした所爲かして、今朝から枕が上がりませぬ。

無緣　何ぢや、濡れて歩かれたとか。エヽ、滅相な、そんな不養生があるものか。愚僧が逢うて、よう云ひませう、どこに寐てござる〳〵。

ト立上がる。障子の内にて

清玄　アイヤ、それへ行て逢ひませう。コレ、妙林、枕許の障子を明けてたも。

ト誂への合ひ方になり、妙林差寄りて障子を明ける。清玄病氣の體。絹の蒲團の上に地味なる絹の夜具に凭れ、括り枕、二枚折りの屛風を建て、床につき居る體。

無緣　オヽ、清玄さま、どうぢや、無緣坊でござる。修行のついでに見舞ひました。

彌藏　今日は快い方かの。ちよつと見舞うて行かうと來て見れば、薪もアレ〳〵、枝おろしたまゝ。妙林比丘が手には行くまいと、ようわしがこなして置きましたぞや。

清玄　それはマア忝うござります。殊に毎日々々お前方のお見舞ひ、ようマア心にかけて、嬉しうご

ございまする。今日は師匠の一周忌にあたるゆゑ、氣晴らしながら、閑屋から綾瀬のあたり、野に咲く花も一えだ、線香に門に燈明、忘れて居つたせいかして、昨夜から気が塞いで。

ト思ひ入れ。

無縁　イヤ、もつともぢや、其ままふらく\病に、風に吹かれてよいものかいの。知らつしやる通り、去年までこの庵で、一緒をつて居られた清玄とやらが、あの桜を植ゑし天神様を建立しかけて、ぶらく\病ひ、放逸もすに亡くなられた。この世に運は無し、アヽ好いお比丘さと無いことかと、願ふに否。

禰宜　イヤ、それく\よ。尼衆、こなさん去年の、アヽ、衣様は時分でもあつたか、何がマア氣になるやら、隅田川のあの深みへ、すんでの事にどんぶりと、身を投げられるを見たゆゑに、訳は知らぬお兄弟の事、そのやうな事でもあるまいと、留めて見たれば訳も多い、世に親子果てゝ死にたいと、若い身空で埒もない。殊に良い私の身さへなど、村中寄つて世話に、この庵室の無住を幸ひ、あの桜様をここは後のにして、この庵を開けましたが、その時分からぶらく\病。コレく\く\、野に見舞と、樒に咲いたこの櫻、へし折つて来ました。サアく\、飾つてさんせく\。

ト櫻の枝を出す。

清玄　これは何より好い花を、忝うござります、南無阿彌陀佛々々々々。

彌藏　イヤ〳〵、まだござる〳〵。尼御へ進ぜうと思うて、コレ〳〵、わしが手づから引いた引きわり氣に入つたらいくらも取りに寄越さんせ。これは又、旨うも無いが干し蕪、病氣見舞に持つて來ました。

ト引わりの袋、丸盆に載せて干蕪を清玄が前へ持ち行く。

清玄　何よりの品々、佛前へ献げ、その花も筒へ生けて置いてたも。南無阿彌陀佛々々々々。

妙林　アイ〳〵。

ト櫻を竹筒へ生け、品々を片寄せる。

彌藏　アヽ、こりや尼御のぶら〳〵病は、こりやてつきりと、ものでござらう。知れましたわえ。

ト云はれ、清玄恟りして

清玄　エヽ、アノ清玄が病の起りが。

ト思ひ入れ。

彌藏　サヽ、てつきりわしが思ふには、先の庵主が辨天の、建立しかけて死なれたゆゑ、お前もそれが出來ないでは、心にかゝるといふ樣な、それが病の基でござらう。

ト云はれ、清玄落付きし思ひ入れ。

無縁 エヽ、それなれば氣が小さい。愚僧も、コレ〳〵

ト勸化帳を出す。清玄見て

清玄 稚若山王と染めたる幟、それをお前が。

無縁 おいなう。稚若様といふを、山王權現に勸請して、塚の建立を始めたのぢやわいの。

清玄 すりや、世を去りし稚若丸の

ト思ひ入れあり。

ア、これもこの身に縁ある御方、よくマア奇特に……南無阿彌陀佛〳〵〳〵〳〵。

ト思ひ入れ。

無縁 サ、その序に辨天樣の建立を、してやりませうわいの。

猫蔵 コレ〳〵、坊樣、こなた、幟を持つて歩いたら、どうやら半田稻荷と云はれうぞや。

無縁 ハヽヽ、この人わいの。よう物を譬へて見さつしやい。葛西金町半田稻荷といふ所を、岩井金蔵半四郎、こいつ芝居には稻荷とはどうぢや。

猫蔵 こりや奇妙ぢやわい。ハヽヽ。時に妙林比丘や、よう嫌があるまいが、どうぢや。

妙林　アイ、藥を煎じて、炭は皆になりました。どうぞ買うて來て下さんせ。

彌藏　合點ぢや〳〵。晩にわしが擔げて來ませう。そこらにわしの棒が有つた筈ぢや。

ト天秤棒を尋ね、麁朶割臺、鉈なぞを片付け

サヽ、坊樣、歸りませうぞや。

無緣　さうしませう。併し、歸りがけぢや。尼御のお見舞に一ツ、につこり笑はせて行きませうか。

彌藏　そりや何よりのお見舞ぢや。サヽ、始めさんせ〳〵。

無緣　ドリヤ〳〵、笑はせ踊を始めうか。

トこれより地へ取り

かさい金町半田の稻荷、疱瘡も輕い痲疹も輕い、芝居繁昌念願成就、敬まつて申す。

ト納まる。

彌藏　イヨ、よい〳〵樣〳〵。

淸玄　氣輕なお方ぢやわいの。

ト思ひ入れ。

無緣　そりや尼御が、につこりやられたワ。何よりは氣の藥。

彌藏　これをお前のはなむけにして。
願人　イヤ、相變りませぬ儀右衛門をお目にかけます。
彌藏　何をぬかさい。いゝ、ゝゝ、ゝ、連れだちませう。
　　ト合ひ方になり、願人坊、半田稲荷を踊りながら、彌藏、天秤棒を持ち、捨ぜりふにて向うへ入る。
清玄　アヽモウ、氣合の惡いたゞ中へ、心ないあのお方。
　　ト思ひ入れ。妙林、藥を茶碗へ上げ持ち行き
妙林　ハイ、お藥を上げませうか。
清玄　まゝ、もう藥はこれぎりかや。
妙林　左樣でござりまする。わたしや一走り、汐入村のお醫者樣へ行て、お藥を取つて參りまするぞや。
清玄　アヽコレ、お藥はもう捨てゝ置きやいの。
妙林　ハテマア、その難病で、どうしてまあ藥を捨てゝ置かれませうぞ。つい行て參りますわいな。
清玄　それもやとふて、もう暮れるぞや。
妙林　アイ、提灯を付けて參るから、お案じなさりますな。

ト盆提灯に三界萬靈と書いたるを出し、灯を燈す事あつて、やす下駄を穿き

ハイ、行て參りまするぞえ。

ト門口へ出る。

清玄　オヽ、早う戻つて來や。

妙林　アイ〳〵、必ずお冷なされまするなえ。

清玄　心得ました。早う戻りや。

妙林　畏りました。

ト暮れ六ツの鐘、すた〳〵と向うへ入る。清玄殘り、思ひ入れあり。

清玄　ありや暮れ六ツ。ドリヤ、佛前へ御燈明を。

ト木魚に伏せ鉦の入りたる誂への合ひ方。蛙の聲聞える。清玄立上がり、氣合の惡き思ひ入れ。やうやうと圍爐裡の際より燧箱を取寄せ、火を打つて佛前へ燈し、行燈へも火を燈し、こなしあつて簀戸を立て鐶を懸け、此方へ來るとて、よき所にある竹筒に生けたる以前の櫻を見て、思ひ入れあつて、取上げ、きつと眺め

浮世の人は花と見ん。この清玄が眺むるは、廣い世界に。

ト佛間の方を振りかへつて思ひ入れ。鳴り物變り、こなしあつて、そろ／＼と佛間へ上り、厨子を開き

内より四理目の羽織を出し

申し、松若さま。

ト羽織を抱しめ、いろ／＼あつて

モシ、松若さま、あなた樣とは親々の、お許し受けし縁定め、また輿入れの無い内ゆゑ、お噂ばかり聞くものゝ、早うお顏が拜みたい。逢ひたい見たいに、あなたのお姿、繪に書かせ、恥かしながら朝々に、肌身に付けて居りましたわいなア。その效も無う松若さま、お行くゑ知れず剰さへ、敢なくお果てなされしと、聞いて身も世もあられませうか。モシ、あなたの後世を弔はんと、去年彌生の花の頃、新清水にて剃髮の、その日に至つて年頃も、松若さまに似寄りのお方。お名を問へば常陸之助賴國さまとて、櫻姫とは俄の緣組み、妾が爲にも妹が聟かね。アヽ、我が大望えよしさらば、丁度あなたの年齒と、松若さまの姿繪に、合はせて見れば生寫し、勿體ない事ながら好い武士ぢや、きつとして、立派な殿御を妹は、夫に持ちやる仕合せな。それに引替へこの姉は身は埋れ木といふものゝ、一生殿御の肌知らず、せめて一夜さ、あのやうな、殿御と枕をはしなば

ト思ひ入れあり。

サ、思はずわたしは迷ひの心。勿體ない〳〵。未來にお出で遊ばさるゝ、松若さまへ操が立たぬと、心で心取り直し、忘れたう思ふほど、夢幻といひながら、お情受けし正夢も、尼となる身に天魔の魅いりと、思ふも理り、モシ。

ト羽織をきつととらへ

エヽ、お情ない松若さま……現在あなたの御菩提に、尼となる身の花子にさへ、お名をおつゝみ遊ばされ、この清玄が見る前で、櫻姫とまなびの祝言。その時妹が懐中より、落ちた袱紗は富田裂れ。さてこそ實名松若さまと、存じたなれどあなたには、云はゞ天下のお尋ね者、口外なすは御身の大事と、他聞の無きを幸ひと、いろ〳〵お尋ね申しても、現在連れ添ふわたしにさへ、明し給はぬその上に、つれない邪見なお心は、お氣に叶はぬ事あつて、嫌はしやんすと思へども、どうした事にや胴慾な、つれないあなたが、わたしやどうも忘られぬ、因果な事ぢや、忘られませぬ。

ト羽織を取つて、いろ〳〵あり。

いつぞや隅田の川水に、身を沈めんと思ひしを、里人に助けられ、この庵室に今日と待ち、明日と數へて暮らすのも、命の内に今一度、お顔を拜んで死たうござんす。モシ、夢になりとも隱れ

家を、尋ねんものとさまようて、昨日黄昏隅田川、あいろもそれと分らねど、水にせかれて流れ寄る、文字も怪しき捨札に、あなたの素性を記せしは、さてはいよ／＼この者に、お恩ひあると思ひしも、来かゝる舟に供守りのお聲、近寄らんにも情なや、お姿さへも水隔れ故、心急くことも旅路の別れ、猶更いや増す心の内を、推量なされて下さりませ。

ト涙ぐみながら、しみ／＼思ひ入れあつて

つれないお方と思ふ程、因果にいとしや思はるれ、もし、忘れたうござりますわいなア。

ト思ひ入れ。兼之介、うつゝになつて人倚する。あつと目を背け

また情けの思ひぞ、神や仏へ手を合せ、心の迷ひ、晴るゝとも、道ならねども今一度、どうぞあなたに。

ト羽織を捻へ、思ひ入れあつて

さうおや。

ト調べの合ひあ、そろ／＼立つて、障間へ上がり、衝立の障子をさす、網ハットメに寄り、向うより惣太、以前の拵へ昔風をかけ、二本差し、見り出て来て、顔を見合ひ拾ひ、とつし膝に手挟ぎりふあり、立留りさへしりありて

勘六　ヤイ〳〵、盗人め。どこへ持つて行きをる。やる事は成らねえぞ〳〵。

惣太　何を吐かしやァがる。おれが櫃をおれが持つて行くを盗人とは、さう云ふうぬが盗人であらう。放しやァがれ〳〵。

勘六　コリヤヽイ、櫃はおのれが道具にもせよ、其うちには此方の抱へ新造の釆女。どこへ擔いで走るのだ。やる事は成らぬぞ〳〵……エヽ、あの權七めは、どこではぐれたやら。

ト跡を見やつて思ひ入れ。

惣太　何を吐かしやァがる。此うちに新造の釆女とやらが入れてある。コレエヽ、そんな覺えは無いぞ邪魔をせすと、退きやァがれ〳〵。

勘六　イヤ〳〵、退かぬ〳〵。われが其やうに、覺えが無いと意地張るなら、サ、その櫃を明けて見せろ〳〵。

惣太　サ、蓋を取る事は、どうもそりやァ。

勘六　そりやこそな。いよ〳〵釆女は櫃の內。きり〳〵見せろ。

惣太　イヽヤ、どうあつても見せる事は成らねえが、強つてと吐かしやァ、コレ、一本差しで來たぞ。うぬ、ぶつた切るが、放さねえか。

勘六 ナニぶつた切る。さう吐かせば、うぬをぶッ挫くワ。

惣太 おれが又ぶッた切るワ。

勘六 叩き挫くワ。

惣太 ぶッた切るワ。

ト惣太[illegible]する[illegible]立廻りよろしく、惣太、勘六を見事に投げる。起上がるを、白刃を抜き、振上げる。

勘六 ヤ、抜きやアがつたな〳〵。

ト飛退いて

今にどうするか、待つてうせろ〳〵。

ト[illegible]張り捨て[illegible]にて、向うへ走り入る。惣太白刃を納めて

惣太 飛んだ奴に[illegible]つて、大きに隙取つた。ト[illegible]て、一足[illegible]。

ト行かうとして

イヤ〳〵、今の野郎めが又引返して、ひよつと[illegible]やアがつちやア……ア、コレ、どうぞ。

ト[illegible]を見て

實は[illegible]千兩の[illegible]、[illegible]の[illegible]。[illegible]、さうだ〳〵。

ト門口へ來て

モシ、ちとお頼み申しませう〳〵。惡者に逢つて難義する者でござります。モシ、ちつとの間お貸しなすつて下さりませ。エ、モシ〳〵。こりやアどうだ。もう寢さしつたか。

ト門の簀戸を、いろ〳〵して、竹の間より手を入れ、鎹を拔き、ずつと內へ入り

ヤレ〳〵、用心のよい內だ。モシ、ちつとの間置いて下さりませ。エ、モシ〳〵。

ト云うても淸玄構はず、一心不亂に佛間に向ひ、お經を讀誦して居る。

なんだ、あの人は聾ださうな。ア、コレ、また今の奴がうせねばよいが。

ト向うの方へ心遣ひする。揚げ幕より、ばた〳〵と人音して、わや〳〵人聲する。惣太氣を苛ち

南無三、うせるワ〳〵。サア〳〵〳〵、斯うしては居られぬ。エ、コレ、せめてこの荷を。

トいろ〳〵して、佛間の緣の下の崩れあるを見つけ

ちつとの間この床下へ。さうだ〳〵。

ト壁の崩れへ櫃を捻込み　半分出かゝりし所へ、着て來たる物を脫いでぶつかけるところへ、向うにて頻りに人音近付く事。惣太、門口より向うを窺ひ、思ひ入れあつて、門口の生垣を破り逃げ行く。時の鐘になり、勘六先に權七、雁金屋といふ弓張りを燈し、野伏り三、又、賴まれし體。捨ぜりふに

て出て來り

三　モシ〳〵、親方、そりやア今、櫃を擔いで通つた男でごんせうの。

勘六　オヽ、それだ〳〵。

又　しかも面構へが、高麗屋に似て居やしたよ。

勘六　其奴だ〳〵。脊負つて居た櫃の内には、新造の采女といふを隠して置いたワ。

權七　何でも、てまへ達も骨を折つて、頼む〳〵。

又　そいつはおつりきな話しでござりやす。角の八本生へた奴だとて、ナニ怖いものか。なう三や。

三　骨つきり働らいて上げやせう。その代り、庵が彼のに間違ひはあるまいね。

ト思ひ入れ。

權七　呑み込んで居るワ。併し、あの庵室より外に行く道はあるまいな。

三　イエ〳〵、道は無いが、それともくねを破つて。

又　なにサ、荷を擔いでは垣を破つて行けまいて。何にしろ、あの庵室に違ひないワ。

權七　さうだ〳〵。三、開けて見さつし。

ト四人門口へ來る。竹伐り二人、割り木なぞを拵らへて、唄ひ〳〵、用心して居る。籠戸開けてある。

ゑ、勘六ずつと入り、うそ〳〵見廻し

勘六　モシ、ちとお賴み申しませう。只今これへ荷を擔いだ男が參りましたらう。エ、モシ、その男は何處へ參りました〳〵。

トいろ〳〵云うても、佛間には清玄一心に經を誦み居る。

權七　エヽ、この坊様は、人にばかり口をきかせて。コレサ、挨拶をさつしやれよ。イケ馬鹿〳〵しい。

ト大聲に云ふゆゑ、清玄恟りして

清玄　ヤ、其方衆は何でこの庵室へ。何の用で來やつたのぢや。

勘六　モシ〳〵、たつた今荷を擔いだ男が、玆へ來た筈でござんすが、どこへ隱しやりました。

權七　その野郎を、爰へ出してもらひませう〳〵。

清玄　ヤ、何と云やる。荷を持つた男が、この庵へ來たと申すのか。

勘六　來た筈ぢや。出して下さりまし〳〵。

清玄　イヤ〳〵、左様な者は爰へは見えぬが、そりや其方衆、間違ひであらう、外を尋ねて見さつしやれいの。

権七　ても／＼、そんなしらをきられねえものだ。たつた今爰へ駈けて來たに違ひない。隱し立てをせずと出しなさい。コレ、年のある女郎を櫃へ打ち込んで、爰へ逃げて來たのだな。

助六　コレ、坊さん、聞きなさい。人誘拐しだよ。そいつは關破りだよ。隱し立てをすると、こなさんも同類。詞の甘い內に出さつしやい。出しやれな／＼。

三　親方、家捜しをさつしやいな／＼。

ト口々にわめく。

濟立　ヤイ／＼待て。見れば賤しい者どもまで、同道なしてのこの狼藉、此方に覺え無き事ながら、それ程までに申す事なら、よもや其方衆は僞りもあるまいが、此方も又、御本尊を誓ひにかけ、毫頭左樣な者を隱まうた覺えは無いが、左程までに云やる事、疑ひ晴らすは苦うない。僅かな庵室、遠慮無う、詮議して行きやいなう。

助六　面白い／＼、詮義しませう。毀れかゝつたこの庵室、佛壇から湯灌場まで、こりや家捜しして見ようワ。

権七　そのお詞の出るを待つて居た。わいらは緣の下や、墓場の隅まで尋ねてくれろ、

三　呑みこみました／＼。

勘六　マア〳〵、佛壇の方から尋ねべいか。

ト佛間へかゝるを、清玄うろたへ、羽織を見られじと思ひ入れありて、佛間を圍うて

清玄　滅相な。何でマア、この佛間に左樣な者が。

勘六　なんだ、大分膽を潰したの。猶々怪しいわえ。探せ〳〵。

ト行燈を提げて、障子の內なぞを尋ねる。權七、提灯にてそこらを尋ねる。二人の非人、墓所生垣を尋ね廻る。清玄はこの間に人に見せじと件の羽織をそつと出し、袱紗包みの儘抱へ居る。權七ふつと古簑を見付け、引退けると小袖櫃出かゝつて居る。

權七　コレ〳〵、この緣の下に、たしか先刻の小袖櫃が。

勘六　ナニ櫃があつた。

ト見て

オヽ、これだ〳〵。引出せ〳〵。

非人　合點だ〳〵。

ト皆々寄つて櫃を引出し

勘六　コレ〳〵、これだ〳〵。これ程隱して置きながら、知らぬ〳〵と、よくマアこなたは、しらをき

つたの。

清玄　イエ／＼、どの樣に云はしつても、決して覺えの無いその品が、どうして其處に。

勘六　どうしても凄まじい。内を明けろ／＼。

三人　合點だ／＼。

ト立ちかゝつて戸を明ける。内より櫻姫、新造の振り袖を冠て走り出る。清玄驚く。

四人　そりや出たア。

ト騒ぎ拍子に、權七、引窓の灯を思はず消す。勘六は持つたる行燈を投げて追ひ駈けるゆゑ、灯消える。

勘六　エヽ、何をする、灯が消えたワ。

權七　おぬしも消したワ。暗がりで逃がすな。

兩人　合點だ／＼。

ト清玄を捕まへ居る。

勘六　暗いとて大事ない。櫃の中から飛びだしたは、釆女に違ひない。小袖の模樣をちらと見ても、やるものではないワ。

權七　コレ〱、二人の者、此あまめを、つらまへて居ろ〱。

兩人　呑みこみました。動くまいぞ。

ト清玄をつゝき飛し、探り寄つて櫻姫を引付ける。

勘六　これ程マア、あのあまめを隱まつて置きながら、知らぬ〱と坊主の癖に、よく噓を吐きをつたな。エヽ、こゝな噓つき坊主め、

ト清玄を蹴飛ばす。

權七　コレ〱、そりや尼だよ〱。

勘六　尼でも比丘尼でも坊主に違ひない。その釆女を預かつて置くからは、預けた奴があらう。サア、それを吐かせ〱。エヽ、吐かしやアがれ。

トくらはす。

權七　比丘尼の癖に驅落ち者を預かるとは、たけの知れない賣主め。預けた奴を、吐かしやアがれ〱。

ト割り木を探り取つて、清玄尼を二人して打据ゑる。櫻姫氣の毒がり、立上がるを、非人兩人引付け、動かせぬ仕組み。清玄尼は二人が打擲の割り木に縋つて

清玄　そりや無體であらう。いつの間に、どうして其やうな怪しい女子を、尼の身で何のマア預からう

ぞ。とは云ふものゝ、この庵室に、女子を隠してあつたのも合點の行かぬ……そんなら若しや最前、御經讀誦のその内に、誰れやら伴れて

勘六　サ、、その誰れやらを吐かしやアがれ。

清玄　サア、これ覺えて居る程ならば、なんでうかく隠さうぞ。

権七　隠さらぬものが、なぜあのあまが爰に居たのだ。

清玄　サアそれは。

又　サアそれでもすまさない。吐かさぬ内はふんのめすワ。斯うして掴けた男めを。

権七　斯うして云はせるぞ。斯うして〱。

ト二人にて清玄を折り木にてしたゝかくらはす。清玄御經の上に手痛く打たれ、苦痛の思ひ入れにて、うんと倒るゝ。勘六窺ひ見る。権七これを知らす

此奴は物を吐かさないか。

ト打ちにかゝるを、勘六留めて

勘六　コレ〱、待て〱。とうか責めては、目でも廻しさうなぞよ。あんまり打つな〱。

権七　ナニ目を廻した。そいつは死んだ血筋だらう。鬼頭の起して掴けた奴を

勘六　コレサ〳〵、釆女さへ取戻せば此方は充分だ。懸り合ひにならぬ内、早く行かう〳〵。

非人　さうしなさい〳〵。この女は、わしらが引擔いで行きやせう。

勘六　さうすべい〳〵。ぶちはなしにして行かう〳〵。

權七　逃がすなよ〳〵。

非人　合點でごんすよ。

權勘　サア、行け〳〵。

ト時の鐘、禪のツトメになり、兩人は櫻姫を引立て先に立ち、勘六、權七、捨ぜりふにて向うへかゝる。揚げ幕より彌藏、捨ぜりふにて棒を擔ぎ、道を敎へながら、綱女、小提灯を持ち行く、櫻姫がゆくゑを尋ねる心にて出て來り

彌藏　眞直にござれば、淺茅が原に出ますぢや。

つな　忝うござりまする。

ト花道にて行き逢ふ。

櫻姫　アレ〳〵アレ。

ト聲を立てるを二人の非人、口を押へ手荒く行きかゝるを、綱女彌藏窺ひ見て

つな　ヤ、順禮様ぢやござりませぬか。

櫻姫　ヤ、わがみは綱女、コレ、助けてたもいなう。

つな　御勿體ない、どうしてあなたを。

權藏　コリヤ、女中を捕へて、どうするのぢや／＼。

ト立ちかゝるを四人は隔てゝ

勘六　寄るなえ。そんならわれらは、新造の釆女を上げた奴め、身寄りだな／＼。

三人　指でも付けると、同類だぞ／＼。

つな　アヽコレ、待たしやんせ。大切なあのお方を、新造の釆女とは……アヽ、そんなら小袖の門違ひから。

四人　ナニ、どうしたと／＼。

つな　アヽそれ、お前方も麁相な。その子を捕へて釆女とやらとは、そりや間違ひであらうぞえ。

皆々　何が間違ひ。

つな　それ見さんせ。

ト提灯を差出す。皆々見て

權助　ほんに、こりやァ釆女ぢやァないワ。

彌藏　ソレ見をれ。此奴等は、こりや誘拐しか、盗人か。村人へ觸れ廻つて引ッ縛るぞよ。

四人　ナニ、この在郷めが、どうしたと。

彌藏　ソリヤ、盗人ぢや〳〵。

ト棒を無性に振り廻す。四人これに驚き、捨ぜりふにて向うへ駈出す。

彌藏　盗人ぢや〳〵。

ト棒を振り廻し、向うへ追うて入る。櫻姬、綱女に縋り居る。この騷ぎ紛れに綱女の持つたる提灯のあかり消える事。

つな　モシ、お姬樣、おなたの在所を軍助もろとも、尋ねて參りました。殊に源吾に奪はれし、一卷も取返しました。サア〳〵、この間に少しも早う。

櫻姬　アヽコレ、自らは格別いとしいは、あの庵室の尼御と見え、自らゆゑに思はぬ災難、撲ち打擲に氣絕して。

つな　それはマア氣の毒な。見捨てまするも本意ならず。夫軍助ことも、お尋ね申しにこの邊りへ參る筈。マア〳〵、左樣ならあの庵室へ參りまして、介抱いたして一禮も。マア〳〵、斯うお出でなされ

ませ。

ト時の鐘、蛙の聲。櫻姫が手を執り、伴ひて内へ入り

アヽ、こりや暗うござりまするぞよ。

ト云ふうち、圍爐裡の火自然とたれさし燃上がる。その明りにて櫻姫、清玄が倒れ伏したるを見て

櫻姫　コレ、爰に庵主は氣を失うてゐやわいの。

つな　此處にてござりまするか。アヽコレ、折悪う藥も無し。

ト爐に掛けし鑵子の湯を汲み持ち行き

申し、御庵主さま〳〵。氣を確かに持ちなさんせえ。

ト呼び生けて介抱する。清玄心付いたるこなしにて

清玄　アヽ、もう心がつきました。病の上に手荒う打たれ、身内の痛みが、アイタヽヽ。

つな　何か樣子は存じませぬが、憎い奴等でござりまする。

清玄　何人かは存ぜねど、忝うござりまする。

つな　ハイ〳〵……ほんに爰に行燈がござりました。私しが灯をつけまする。マア〳〵、お前は冷えては惡うござりませう。殊にマア、また今日の寒さう、アノマア、焚火へ。サア〳〵、お庵様、介

抱なされて。

櫻姫　サア、爰へお寄りなされませ。

トいたはる。

清玄　モウ〳〵、心は確かになりました。お優しい女中の、忝うござりまする。

ト此うち行燈を灯し、圍爐裡へ差寄り

つな　私しどもは道行く者でござりまするが、御難儀の様子を見受けましての儀。マア〳〵、焚火へお寄りなされまして。

櫻姫　殊にわたしは狼藉者に出逢うて、思はず爰へ参つたゆゑ、あなたの今の御難儀も、皆みづからより起りし事。

清玄　すりやアノ、何者が床下へ、隠し置いたる半がいの

櫻姫　アノ、あの内に居りましたは。

清玄　アノ、お前か。

ト櫻姫を見る。この時焚火ぱつと燃え立つ。明りに三人顔見合せ、思ひ入れありて

つな　ヤ、あなたは慥か、花子さまぢやござりませぬか。

清玄　さう云やるは、綱女かいなう。

櫻姫　なに、姉上樣とや。

清玄　ヤ、其方は櫻姫。

つな　思ひがけなう御息災で。

清玄　其方も無事で。

櫻姫　姉上樣にもお變りなう。

清玄　イヽヤ、變りしこの姿、恥かしいわいなう。

つな　花子さま、お懷しうござりました。

櫻姫　戀しいながらも、御堅固のあなたの御樣子、お行くへ知れぬ姉上樣、この所に御座あらば、お文の使ひもあるべきに、悟りきつたるあなたの御心。モシ、お懷しうござりまする。

つな　御尤もでござりまする。モシ、花子さま……アイヤ、只今にては清玄尼さま、私しがお附き申した其うちより、お云ひ號けの松若さま、この世に亡きと沙汰ありし、その砌りより剃髮の、お望みありし事なれば、新清水の御弟子となり、殊には人間のお家には、惡に凝つたる局岩藤、彼れらが企みも氣遣はしく、櫻姫さまへ幸ひと、常陸之助桂國さまと、御緣談の取結び。昨日不思議

に姫君様へ、お目見え致したこの綱女、何かのお話し聞きし内、清玄尼さまにも新清水にて、お逢ひなされし頼國さまが、今に於てお行くへ知れぬと、それを苦勞に遊ばして、お隱れ家を尋ぬる爲、お姫様のこの程家出なされしも、御尤もでござりまするわいな。

櫻姫 殊更あなたは、この處のお住居、戀しと思ふ頼國さまの、隱れ家を御存じあらば、どうかお教へなされて下さりませ。

ト此うち清玄、心苦しき思ひ入れにて

清玄 オヽ、尤もぢや〳〵。其方ばかりか清玄も、頼國さまのお行くへを、尋ねたうて〳〵……サ、尋ね逢うたら其方と仲好う、添ひ遂げるであらうと思へば、一倍コレ、この胸が、苦しいわいの〳〵。アヽ、これにつけても、忘れたい〳〵、忘れんものと思ひ直して居るものを、其方があなたを尋ぬると、聞いては一倍この胸が

ト思ひ入れ。

つな 申し清玄さま、何とやらあなた樣には、しどろ勝なるそのお詞、殊にお顏も面やつれ、こりや御所勞でござりまするか。モシ、お館の事お案じあらば、申し〳〵、お氣遣ひはござりませぬ。お家の惡人岩藤は、人手にかゝつて相果てました上からは、入間のお家は萬々歳。

清玄　サ、その一門家の詰まりも、わしに代つて其方こそ、再び館へ立歸り

ト思ひ入れ。

つな　お行くへ知れぬ頼國さまと、めでたうお添ひなさるれば。

清玄　エヽ、又かいの。その頼國さまを、忘れたうてく、心も心ならぬもの。又そのやうな……南無阿彌陀佛々々々々々。

ト耳を塞いで思ひ入れ。櫻姫こなしあつて、綱女心付かず

つな　これはしたり、何を仰せられますることぞ。そのお姿であるからは、松若さまの事ならば、忘れたうも思し召しませうが、モシ、あの頼國さまは、櫻姫さまのお添ひ遊ばす、お聟樣でござりまするわいな。

清玄　エヽ、まだ云やるかいの。その妹が添はうと云やる頼國さまを、早う忘れて見たいわいのく。

つな　これは又、怪しからぬ儀を仰しやりまするが、何でマア、お妹御の聟がね樣を。

ト思ひ入れあり。

ア、左樣に思し召しまするも御尤も、花の盛りを思ひ切り、以前のお姿引替へて、女なるお身もいつしかに、身は墨染めの尼法師、かゝる野末の庵室に、佛に手向くる阿伽の水、手馴れぬ業も

おいとしい。

櫻姫　殊に窶れしお顔ばせ、松吹く風の軒洩りて、御寢所とても大方に、思ひやらるゝ。

トこなし。

清玄　イヽヤ、浮世を捨てし身の、佛の御弟子となるからは、この世に望みは無けれども、叶へて欲しいは今一度。

ト袱紗包みの羽織へきつと思ひ入れありて

エヽ、忘れたい〳〵、忘れたうござりまする。

トきつとなる。この時持つたる袱紗包み解けて羽織落ちかゝるを、櫻姫見つけて

櫻姫　ヤヽヽヽ、こりやコレいつぞや清水にて、頼國さまがお召しなされしこの羽織。

つな　エヽ、頼國さまのお羽織を、清玄さまが、どうして御所持なされしぞ。

清玄　サアそれは。

ト思ひ入れあり。

エヽ、忘れたい〳〵、二人の手前、こればかりは。

櫻綱　エ。

ト兩人見上げる。清玄目を明き

清玄　南無阿彌陀佛々々々々々。

ト持つたる珠數にて拂ふ。火どろ／＼になり、虚空より飛び下り、好き所へ下がる。閻魔堂の火の内より櫻姫火立ち、清玄發心する。これより段々、笹原の片隅、四谷の乙甲里にある。

櫻姫　サ、姉上さま／＼。

つな　これはしたり、己が御樣、如何なされました、清玄さま……モシ／＼、お姉様、お目覺なりとも。

櫻姫　心許ないの。

ト閻魔堂に有合ふ銚子の酒を汲み、清玄が側に持ち行き

モシ、御持病でござりまするか。姉上様、お心を確かにお持ちなされませえ。

ト差出す。清玄、櫻姫をヂロ／＼と見やり、茶碗を差出したるその手をしつかと執つて

清玄　コレ、姫、よもや、この持藏は松若さまの

櫻姫　イヽエ、松若さまぢやござりませぬ。いつぞや清水にて、賴國さまがお召しなされた

清玄　イヽヤ、さやうな。賴國さまとは、わが身もわしへ白々しい。吉田の松若君、姫が連れ添ふ夫を、ようも其方は寝取つたなう。

櫻姫　ヤ、、モシ、どうしてわたしが。

清玄　イヤ〳〵、頼國さまとは變名にて、誠は吉田の松若さま、わしが殿御と不義密通、思へば其方は大それた。

トきつと云ふ。

つな　エ、、さてはあなたの御立腹の起りといふは、お云ひ號けの松若さまを、頼國さまと云ひ立て、櫻姫さま戀詫び給ふ、それ疑うてのそのお氣色。モシ、どうしてあなたが御存じあつて、左樣な儀を。

清玄　イヤ〳〵、其方も同じ樣にわしを僞り、そりや噓ぢや。證據は卽ち茶碗の中の

つな　サ、そりや姫君がたつた今、あなたが放心なされしゆゑ、お白湯なりとも差上げうと。

清玄　それで妾に妹の身で、毒害しやる心ぢやの。

綱櫻　エ、。

櫻姫　何であなたへ左樣な事を。

清玄　イ、ヤ、其方はこの毒を、姉に與へる心であらう。頼國どのとは自らを、僞る爲の變名にて、誠は妾が云ひ號け、過行き給ふと沙汰ありし、松若さまといふ事を、知りつゝ床しと戀慕ふ、道知ら

すとも不義者とも、譬へ少き姉妹、殊更世に亡きこの姉を、毒害なして、誰れ憚らず語やる心か
證據は即ちこの白湯は、仕込みし毒に相違ない。證據を見せう、これを見や。

ト茶碗なおたけにあて櫻の枝へ打付ける。薄ドロ〳〵、焔硝火と共に、櫻の花ぱつとたち、色變つて落花する。皆々驚き

つな　ヤヽヽヽ打あけ給ふ茶碗の内、櫻も共に焔となつて。ホヽヽヽホヽ。

ト驚く

清玄　島に違ひはあるといひの……もうこの上は何さゝ倫し、一旦は我が云ひ懸け、松若こゝには、この姉か、未來を掛けて語り進ぐる。

つな　エ、すりや其お寺にてありながら、松若さまとお聞きあり、娣姒にはどこまでも、あなたは語はさぬお心か。

清玄　イヤ、姉でも、語はせはせぬ。

つな　アノ、比丘は出家の御身にて。

清玄　勿論した。

つな　エ。

清玄　破戒の尼と云はゞ云へ、今日といふ今日清玄が、願ひ込んだる御經も、皆仇事となり果つる、墮落のしるしは今目前、爪繰る珠數も。

ト思ひ入れ。薄ドロ〳〵にて、後に現れし岩藤、珠數を引切る思ひ入れ。同じく清玄

かう〳〵。

ト引切り、あたりへ投げ捨て

これで心も晴れたわいなう。

トきつとなる。綱女詰め寄り。

つな　エヽ、お情ない清玄さま、それ程までにもお心の、變れば變るものかいな。現在の姉上樣に、何の僞りを仰しやりませうぞ……よし又櫻姫さまが、松若さまと御存じなう、枕をお交しなされしとて、あなたの爲には眞實の、妹姫樣ぢやござりませぬか。お前樣は只今にては御剃髪、浮世を捨てしお姿にて、それをあらはに仰しやるは、そりや下世話に申す悋氣とやら。

清玄　默りや。悋氣と云やるが、コレ、わしも女子の端ぢやもの、悋氣妬みもせいでかいの。いかに世に捨てられし清玄ぢやとて……コレ、わしや其方の爲には主ぢやないか。時代につれゝば其やうに、家來にまでも。

つな　アヽモシ、御勿體ない。なんの私しが、御姉妹お二方に、分け隔てを致しませう。そりやあなたのお廻り氣と申すもの。

清玄　ムウ。すりや分け隔てはせぬと云やるのか。

つな　どう致しましてマア。

清玄　それに僞りのないならば、わが身勸めて松若さまを、思ひ切らせてたもいなう。

つな　ナニ、私しにあなたへ勸めて。

清玄　思ひ切らせて取持つてたも。コレ頼む、手を合す、どうぞ、願ひを。

櫻姫　そんならアノ、松若さまを姉上様。

清玄　エヽ、何おやぞいの。其方に構ひはせぬわいの。詞を出さすと押へて居や。

トきつと云ふ。

櫻姫　それ程までに自らを、惜しと、思し召して。オヽ、さら〳〵無理とは思はねど、存せぬ事はどこまでも、松若さまとは露知らず、軸國さまとのみ心得、枕交せし申し譯、淵川へなと身を沈め、冥途で云ひ譯いたしませう。おさらばでござりまする。

ト立上がるを綱女引留め

つな　こりや御短氣な姫君樣、死ぬる命を存らへて、姉上樣へお願ひあらば。

櫻姫　イヤ〳〵、あなたへ申し譯、この身を捨てゝ。

トまた立ちかゝるを留める。清玄簀戸をたてゝ

清玄　すりや妹には、妾へ云ひ譯無きまゝに、その身を沈めて、死んで云ひ譯しやるのか。

櫻姫　サ、死ぬるより外、この身となつては

清玄　イヤ、そりや嘘ぢや。

櫻綱　エヽ。

清玄　さも眞實に見せかけて、この場を逃げて我が思ふ、松若さまと快う、添やる心とこの姉が、見た目はよもや違ふまい。

櫻姫　エヽ、お心解けぬ姉上樣……さうぢや。

ト綱女が差して居る一腰を手早く取つて自害せんとする。綱女あはてて留めて

つな　こりや逃つた。マア〳〵、お待ち遊ばされませ。

櫻姫　イヽヤ放して。

ト互ひに引合ふ機みに白刃抜けて、清玄が方へ持ち行く事。

猜立　アヽ、白刃を女の身で、こりや、わしを殺す氣ぢやの。

ト綱女心づき

つな　アヽモシ、勿體ない、お主様をどうしてマア。夜道と申し、追手の者に逢うてはと、夫の一腰は威し、ほんの怪我でござりまする。

猜立　イヤ〳〵、此わしを其方達二人は切る心ぢや。オヽ、切る心ぢや。所詮破戒の清玄尼、松若さまの事は、どうあつても思ひ切られぬ。それが心に叶はずば、サア、わしを切つてたも〳〵。いつそ切られて死んだなら、今の苦患はあるまい。サ、切りや〳〵、切らぬかいの〳〵。

つな　モシ〳〵、假にも左様な事を、仰しやつて下さりまするな。姫君様の爲には姉君、私しには御主人様、たとへ無理……サア、如何やうな事がござりませうとも、お手向ひなど致す心がござりませうか。

猜立　それほど姉を大事に思はゞ……サ、櫻姫、松若さまの許嫁の縁で、僞りならぬ、神も誓ひの誓紙を書きや。

ト料紙硯を突きつける。

櫻姫　あなたの疑ひ晴るゝなら、なんの厭はう、成る程、誓紙を、

ト書かうとする。ドロ〳〵になりて、岩藤筆を留める、櫻姫書かれぬ思ひ入れ。

淸玄 サ、妹、どうぢや。誓紙の文言。

櫻姫 お前の見る前。

ト また書かうとする。ドロ〳〵。岩藤留める仕組み。

淸玄 書かぬは、いよ〳〵僞る心か。

つな アモシ、御勿體ない。

淸玄 そんなら其方取持つて。

つな サ、それは。

淸玄 コレ、手を合す、どうぞ妾に。

つな サ、どうもその儀は。

淸玄 成らずば妹、誓紙を書きや。

櫻姫 仰せに任せて。

ト書かうとする。ドロ〳〵、寐とり、岩藤筆を留める。

どうもこの手が。、

清玄　唐紙が書けぬか。エヽ、こゝな偽り……アヽレ、取持つてたも。
つなサ、それは。
清玄　思ひ切つたと、たつた一筆。
櫻姫　サ、書かんとなせばこの手の痺れ。
清玄　そんなら綱女、コレ、取持つてたも……コレ、手を合す〳〵……コレ姉、唐紙を書いて……コレ
手を合す、賴分けて……コレ、其方はどうぞ取持つてたも。手を合す……コレ、妹。コレ、綱女。
願ひを叶へてたもいなう。
ト兩方を拜み、いろ〳〵思ひ入れ。
櫻姫　左程の仰せ、唐紙はこれにて。
ト書かうとする。ドロ〳〵鳴り、行燈書かせぬ思ひ入れにて、持つたる筆を後にて二ツに折つて捨てる思ひ入れ。その通りに櫻姫思はず折つて捨てる。清玄これを見て
清玄　唐紙の筆を折つたるは。
櫻姫　サ、、
ト恟りするを、清玄顏色變つて櫻姫へ立ちかゝる。頭髮摑んで引寄せる。綱女留めるを同じく引付け

清玄　エヽ、顳顬はせ腹の立つ。其方はなう。

トきつとなり

心柄とは云ひながら、かゝる姿の清玄が、世に落ち果てし身と侮り、妹ばかりか現在の、家來の其方まで僞り表裏、時代に作るゝは人心かと、思うて見ても妬ましさ。思ひ詰めたる松若さま、よも仇人に添はさうか。我が戀叶はぬ上からは、憎しと思ふ櫻姫、妹ながらも世上へ見せしめ、せめて面へ傷なりと、姉が恨みの刃を受けよ。

トよろぼひ廻り、在合ふ鉈を執りて櫻姫へ打つてかゝる。綱女驚き

つな　アヽ、モシ、狂氣ありしか清玄さま。

清玄　オヽ、狂氣した。物に狂ふも誰れゆゑぞ。

トよろめき寄るを綱女縋つて

つな　アヽ、モシ、お危なうございます〱。マア〱、この刃物を

ト執付いて持ちたる鉈を取つて捨てる。清玄、圍爐裡の火箸その他有合ふ物を取つて、投げつけ〱立ちかゝる。櫻姫逃ぐるはずみに、懷の一巻を落す。清玄取つて

清玄　こりや神祇官の正しく一卷。

つな　アモシ、その一卷を。

ト取らんとする。清玄一卷を離かさず。ドロ／＼、岩藤思ひ入れあつて書面見る。

清玄　さてはこれこそ吉田の重寶、都鳥の一卷ならん。松若どのへの面當てに、いま引裂いて。

つな　アモシ、滅多な事を。

トすがつて取らんとする。清玄放さじとせり合ふ。立廻りにて、櫻姫を奧へ突きやり、一卷を取返し

と、怪我の無い内お姫樣、少しも早う。

櫻姫　ぢやと云うて、この儘どうして。

清玄　姫はやられぬ、櫻姫、姉が懐へ。

ト櫻姫へかゝる。綱女さゝへる。立廻りのうち、行燈を突きこかし、暗がりになる。と、岩藤、櫻姫を押分

け、惣太、窺ひ／＼出づる。

つな　櫻姫さま、サア／＼、この間に早う。

清玄　イヤ／＼、姫はやられぬ／＼。

トこの聲を聞いて、惣太、さては姫を逃がすと心得、内へ入り、暗がりゆゑ

惣太　姫といふのは、櫻姫か〳〵。

ト引捕へんとする。綱女、櫻姫を連れ、逃げんとする。清玄捕へんとする。暗がりの仕組み。綱女、櫻姫を連れ門口へ出る。惣太は清玄を櫻姫と思ひ捕へる。綱女門口にてほつと思ひ入れ。早三重になり、櫻姫が手を引き、向うへ走り入る。清玄外へ行かんとするを

ドッコイ〳〵、櫻姫なら逃がしはせぬぞ。

ト捕へる。立廻りに焚柴を踏みつけ、これを取つて捨てる事。この柴、圍爐裡の内へ落ちて、ぷすぷす燻り出す。惣太また鉈を踏みつけ

アイタヽヽ。エヽ、いま〳〵しい。イケ邪魔な。

ト鉈を執つて、打つてかゝる。清玄避けるはずみに、惣太、手水鉢へ切りつける。これにて、桶ばらばらと破れ、本水さつと溢れる。此とたんに圍爐裡の柴ぱつと燃えあがる。兩人恟りする。時の鐘のかしら。清玄は下の方、惣太は上手にて、兩人圍爐裡の左右に別れ、顏を見合せ、きつと思ひ入れあつて

清玄　ヤ、怪しい男子。

惣太　コレサ、わしか。

清玄　其方もどうやら。

惣太　ほんにいつぞや清水で、逢つた今日の花子の前、今は剃髪清玄尼、庵主といふはこなさんか。

清玄　サ、その清玄が願ひの妨げ、娘ながら〳〵。

　　ト門口へ走り行かんとする。惣太立廻つて褄をきつと執へ

惣太　コリヤ、逃がしはしねえ。姫を失ふその代り、不思議に爰で花子の殿、よもや忘れもさつしやるまい。松若どのゝ幽霊話しの證據にと、都鳥の一巻を、こなたの縹緻にうか〳〵と、渡して歸つた猿島惣太、その時こなたにうつ惚れたが、どうせ及ばぬ色事と、一年暮かして今爰で、逢うたは誠に結ぶの神。コレ、清玄さん、尼でも比丘でも根が女、色になつてはくれまいか。

　　トしなだれ寄るを、清玄きつとなりて

清玄　エヽ、穢はしい。おのれらは、館にあれば花子の前、なんの身近う寄付けうぞ。おのれら如きに賤しめらるゝも、これも誰れゆゑ櫻姫。

　　ト振切つて行くを、惣太ひつ捕へて

惣太　ドコへ〳〵、折角逢つたこなたを、外へやつていゝものか。否でも應でも、おれのまゝだ。

清玄　エヽ、穢らはしい。只の女子と思ひ居るか。剃髪染衣の尼の身を、慮外しやると免さぬぞ。

中幕



大切浄瑠璃之場



惣太　アヽ、そんならこなさん、五戒を保つ尼法師か。コレ、その尊い清玄比丘が、松若どのには迷つても大事ないか。イヤサ、わしが樣な者には從はいで、松若どのなら大事ないか。

清玄　サア、それはな。

トいろ〳〵あつて

オヽ、大事ない〳〵。コリヤヽイ、松若さまは自らが云ひ號け、すりや何の大事があらうぞいやい。

惣太　それ〳〵、そこがお前は大名の懷中子、松若どのと櫻姬が、あの睦じさを知らないのか。

清玄　サ、その道ならぬ櫻姬、それぢやに依つて跡を追ひ驅け、恨みの丈を云はにや成らぬ。

ト行くを引留め

惣太　コレサ、その恨みを云ふ心があらば、二人の者へ面當に、男を持つのが何よりだ。身不肖ながらこなさんの、色の男になつて進ぜう。コレ、斯うばかり云つては、僞り者と思はつしやらう。こなたの色になるといふ、證據は卽ちこれ。

ト刀を拔く。清玄恟りして

清玄　白刃を拔いて、どうしやるぞ。

惣太　コレサ、驚く事はない。謂ひ甲斐はない証據には、こなさんへの心中に、指を切るとも、腕を切るとも、拜郷下次郎の惣太が心中、見せたら上は必ずわ——と。

清玄　慮外な下部め。たとへ心中見すればとて、おのれしも如き何の匹夫に

惣太　ハテ、さう云はすとお前の手で、お望みの次第の心中を、腕でも指でも、サ、切りなさい〳〵。

ト清玄に刀を持たせて、我れも摔へ、いろ〳〵あり。清玄耳にもかけず向うばかり見つめ

清玄　エヽ、汚けがすな。アノ櫻姫を。

ト跡を追ひ行かうとする。惣太白刃を無理に持たせて

惣太　コレサ、櫻姫ばかりの男でもねえ。心中見せる此わしに、マア爰で心中に。

ト捨ぜりふにて、いろ〳〵揉み合ひ、トヾ清玄刀を取捨てんと扱取るはずみに、脇腹をしたゝか切り込み、「アツ」と云うて倒れ伏す。惣太驚き介抱する。

ヤ、こりや怪我だ〳〵。サア〳〵〳〵大怪我だ。

トいろ〳〵いたはる。清玄のたうちまはつて

清玄　ヤヽヽヽ、コリヤおのれ、何ゆゑあつて我を手に掛け

惣太　されば〳〵、何もこなたを切る気もやねえが、こりやア間違ひ。大怪我だ〳〵。

清玄　イヤ〳〵、おのれ、手にかけて。

惣太　コレサ〳〵、毛頭おれが何で切らう。惚れたこなたに心中を、見せん心のこりや怪我だ。併しおれ手だ、氣遣ひない。養生した上、わしが心に隨はつしやい。その代りには、憎いと思ふ櫻姫、わしが存分こなたの代りに、どうなりとして進ぜる。こなたは心を取直し、コレ、清玄どの。

清玄　イヤ〳〵〳〵、たとへ死すともおのれら如きに、なんで妾が隨はうぞ。

惣太　すりや、どの樣に云つても、こなたは。

清玄　否ぢや〳〵。これにつけても松若さまに。

ト行かうとするを引ッ捕へ、傷口を見て

惣太　これ程云へど聞入れなく、耻を與へし清玄比丘、殊に大傷、どうで命は危ないもの、毒喰は皿。

ト切り付ける。清玄驚き逃げ廻り

清玄　アヽコレ、どうぞ助けて、松若さまに逢ふまでは。

惣太　未練な根性、もう叶はぬワ。

ト切りつけ、清玄逃げ歩く。惣太追ひ驅け、トヾ正面の屋體へ上がり、兩人立廻りよろしく、清玄を

暗く、突當りて、突かうとする時、この障子ばらばらと破れ、清玄仲へ落ちかゝる。惣太思はずさしよく小屋根より落ちかゝりたる見得。一つ鉦の合方、忍び三重、雨の音、時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、正面庵室の體を見せたる道具、所々に石塔あり、破りよき柵、よき所に藪塚と云ふ小高き土への塚、卒塔婆、生垣、物淋しき御庵の體通りになる。文張り破れ壁より清玄、惣太、組合うて出かゝりて居る見得にて道具とまる。

ト矢張り只雨の鳴り物にて、両人立廻りになり、惣太が切りつけし白刃を、清玄、両手にきつと握り、こなしあつて

清玄 こりや、どのやうに頼んでも、其方はわしを殺すのか。

惣太 應、松若に頼まれた。

清玄 やゝ、なんと。

惣太 櫻姫と祝言の、邪魔になる清玄尼、殺してくれろと松若と、櫻姫に頼まれた。こなたを手にかけ姫と松若、心よう祝言させる。邪魔なこなたは不要で。

ト切つて行くを、かい潜つて立廻りある。

清玄　すりや妹と松若どのが、頼んでわしを殺すか。エヽ、怨めしい。さりながら、こなたに恨みは無いほどに、二人に逢うて、この恨み、云はねば成らぬその間、どうぞ命を助けて下され。存分恨みを云ふまでは、死にともないく。

惣太　オヽ、尤もだ。併しわしが知つた事ではない。今云ふ通り松若と、櫻姫に頼まれた。證據と云ふはコレ。

ト以前の短册を出し

清玄尼、覺えがあらう、この短册、櫻姫に頼まれた、これが慥かな證據だワ。

ト見せる。清玄取つて

清玄　こりやコレ達はぬ姫が手跡。すりや、この姉を妹の身で。

惣太　清玄こなたを生け置いては、二人が連添ふ邪魔にならう、そんなら殺すがよからうと、相談づくし頼まれて、こなたを殺しに來た程に、わしが刀で往生さつしやい。

ト白刃を引く。清玄握り詰めて思ひ入れあり。

清玄　エヽ、聞けば聞く程、無得心とも邪慳とも、大悪人とも何とマア、譬へ少き二人が頼み。殺さすのみか此やうな、匹夫下郎にいひつけて、我れも入間の胤なるに、賤しき者の手にかゝり、淺茅

ケ原の草の露、風を巷に晒すか。エヽ、浅ましや、口惜しいわいやい。

ト思ひ入れ。

惣太　イヽヤ匠太下郎でない。心得こそ落ぶれて、雇ひ侍ひ時節は、覚えた某の船乗り惣太、氏も吉田の家を離、粟津の六郎俊兼が弟、同苗七郎とはおれが事だワ。去年三月主人たる、梅若丸をふと殺し、今年も三月十五日、爰でこなたを殺すのは、梅若丸が一周忌、その追善に殺される、誠に供養だ。コレ尼御、追善供養に殺すのだ。怨みがあらば櫻姫、松若どのを取殺せ。こなたは早く往生して、死出の山のだら〳〵下りで、待つてけつかれ。

清玄　どうで存命叶はぬからは、刃にかゝつて死ぬるとも、魂ひは宙宇にとゞまつて、憎しと思ふ二人とも、なに安穏で置くべきか。思へば〳〵エヽ、怨めしい。

ト白刃を握つて向うを見詰め、無念の思ひ入れ。薄ドロ〳〵になり、焼酎火燃え、清玄が胸元より白き蛇現はれ、下の方よき所にて消える。焔硝火立つ。惣太悔りして

惣太　恐ろしいこの動揺。

ト見て

コレヤ、この白刃を放さつしやい。放さぬ時は十本の、ソレ、指が切れるが、コレ、放さないか

放さないか。エヽ、放さないか。

・トいろ／＼しても放さぬゆゑ、白刃を手酷く引き、清玄を蹴飛ばす。これにて清玄、十本の指切れし體にて、兩手は血紅になり、うんと倒るゝ。惣太立寄りて

それ／＼、指が皆切れたワ。いつその事に一思ひ、この世の暇を。

ト襟髪掴んで引起し、とゞめを刺さんとする。薄ドロ／＼にて、清玄が十本の指殘らず蛇となつて鎌首を上げて動く。惣太恟りしてためらふ。

清玄　エヽ、怨めしい櫻姫。

ト向うを見詰める。

惣太　一念凝つて十本の、指も殘らず蛇の、形と見えるもこの世から、無間に沈む清玄尼。コレ、恨みは妹櫻姫、憎しと思はゞ取殺せ。

清玄　つらからば只一筋につらからめ、斯る非業も妹ゆゑ、今にも思ひ知らさで置かうか。サヽ、早う手にかけ、この世の暇を。

惣太　とらせてやらう、成佛しろ。

ト清玄を引寄せ、抉る。清玄苦み

清玄　口程のしきは憎悪、思ひは同じ恋若ども、チエヽ、口惜しい、

惣太　くたばれ／＼／＼。

ト扶あゝ薄ドロ／＼、清玄苦しみ、ばつたり落入る。惣太乗りかゝり

南無阿彌陀佛々々々々々々。

トとゞめを刺す。時のアトメになり、向うばたばたにて軍助、一腰差し、いきせきと出て来り

軍助　大願を話しにて、成就なされし清玄さまの隠れ家は、慥かに聞きし法界庵、お経様に掛し置き、

法師に逢うて御意見を

ト本舞台へ来り

たしか草庵、この辺り。

ト鍬口見る。惣太この声を聞き

惣太　すゝ、さういふ上野は、隅田の渡しで慥かに逢うた。

軍助　すりや、その時の渡守り、惣太といふは、實名粟津の。

惣太　出家の其の。

ト行かうとするを、軍助、惣太をやらじと立廻りありて

軍助　梅若君の敵は七郎。

惣太　われは吉田の下部の軍助。

軍助　尋ねて居たに、ハテ好い處で

惣太　悪い處で。

　　ト立廻りありて

兩人　逢つたなア。

軍助　お主を殺せし天罰は、この軍助がこの場でうぬを。さはさりながら清玄尼、あなたのお行くへ。

　　ト尋ぬる思ひ入れ。

惣太　われが尋ぬる清玄尼、以前花子のその砌り、心あつたるこの惣太、爰で逢つたを幸ひと、口説けど聞かず松若と、姫を恨むる破戒の清玄、この世の暇を取らせたワ。

軍助　ヤ、、。すりや尼君まで手にかけしか。天罰知らずの極悪人、目前敵は軍助が

　　ト立ちかゝる。

惣太　さう云ふうぬも冥途の道連れ。

　　ト抜いて切り付ける。これより鳴り物を借り、兩人立廻りありて、トヾ惣太を一刀切る。惣太「ウン」

ト倒れる、ドロ／＼になり、蛇塚の上へ心火燃ゆる。軍助きつと目を着け

軍助　這子は眞に古猫たる、この蛇塚へ怪しの心火。さては刃に果て給ふ、清女尼の一念なるか。ハテ淺ましきお心ぢやなア、

ト思ひ入れ。大ドロ／＼になり、向うより櫻姫、連理びきの様に、櫻姫が振り袖へ白き蛇吸付き一緒にて、この蛇、振り袖のよき所を囓へし思ひ入れ。櫻姫、しるりと／＼と引かれて出て來る。軍助見つけ、[illegible]寄りて介抱なし

こりや櫻姫には、何ゆゑ爰へ。

櫻姫　其方の庵に忍びしを、いづくよりかは蛇の、袖に纏うて此やうに、思はず爰へ引かれ來る。

軍助　ナニ蛇がアノ袖に。

ト振り袖へ手をかけるとドロ／＼にて、蛇は袖を囓へ、放さぬ思ひ入れ。軍助蛇を捕へ、放さんとする時、蛇は袖を囓へ放さぬを無理にもぎ放す。振り袖を啣へし儘舞ふ。

蛇の袖こそ喰切つたるは。

ト思はず蛇を放す、と、袖を啣へし儘手の裏に入ると等しく、燐火立つて蛇、袖を啣へて消える。

軍助思ひ入れありて

かゝる椿事も果て給ふ、さては姉君清玄さまの。

櫻姫　ナニ姉君は果て給ふか。

軍助　只今これにて、人手にかゝつて。

櫻姫　すりや姉上には。

軍助　せめて死骸に暇乞ひ。

櫻姫　ドレ。

ト兩人、清玄が死骸に立寄り

變り果てたる姉上樣。

ト兩人手をかけ引起す。薄ドロにて清玄、蛇の啣へし振り袖を啣へ、口の端血流れし體。櫻姫慴りして立上がるを、清玄かよわき手を差伸べ、櫻姫が結び下がりしごきの先を執へ、顏を上げて兩眼を開き、怨めしげに見詰める。櫻姫立ち身にて顫ふ。軍助駈寄らんとするを、惣太よろぼひ寄つて白刃を振り上げ

惣太　おのれ、野郎め。

ト切り付けるを、軍助白刃を捥取り、惣太が太腹へ突立て、立ち身にて抉り、清玄が有樣を見て

軍助　ハテ、恐ろしい。

ト木の間、斧太郎と入、軍助の顔の上へたら／＼と滴く血、たら／＼と流れ、軍助の顔へかゝる。この時雲に稲妻、サツと風まじりの雨に、軍助みつゝしこその縄を引切る。両手を放す。この時節間の木の上へ心火燃え、縄を持ちて、引切りししこその縄、心火となりて蛇のやうに動きて、軍助へかゝる。

軍助　執念だやなア。

ト立ち廻りにて軍助を捲き、清玄顕れ出でて、軍助をと轉げる。これを木のきざみ、薄ドロ／＼、
鍬の役ヂアー／＼と鳴く仕かけ、この模様よろしく、拍子

幕

第二番目大切浄瑠璃　都鳥名所渡　常磐津連中

[illegible]

役名——軍助女房、國女、荒川忠藤太妹、捕り手、大勢、清玄尼の亡霊、吉田の松若丸。

本舞臺、一面の浅黄幕、上の方に柳の立木、これに網の釣り掛けてあり、所々に山吹の咲き、
端打つてゐる後幕、これに茅葺の蘆、葦、柳を打交ぜたる吊り枝、すべて隅田川の堤、なる體の

ツドメにて幕明く。

ト頭取、浄瑠璃の名題役人觸れあつて、その爲口上チョンと、淺黃幕切つて落す。うしろ高土手、爰に常磐津連中居並び前彈きにかゝる。此とたん舞臺先へ波板出る。これに都鳥大分漂ふ。直ぐに浄瑠璃。

〽流水飛禽自ら、彌生の眺め一入に、あれ都鳥はれ櫻、及ばぬ筆に隅田川、寫して爰に船の内。

ト一せい面白き鳴り物になり、舟の上に松若丸、誂への形、病鉢巻にて、肩へ前幕の振り袖を掛け、笹に閨の扇をつけ、これをかつぎ、上の方に立ち身。此方に綱女、染やつし袖無し羽織にて水棹を持ちて扣へる。兩人この見得よろしく、舞臺の眞中へせり上げる。鳴り物打上げ、直ぐに浄瑠璃になる。

〽浮きて漂ふその人の、行くへ何處と白糸の、亂れて名をや流すらん。〽流れ渡りに一日を横に暮すや渡守り、棹に雫にこしかたも、啼くは雲雀が妻戀ふ雉子、ほろゝけん／＼戀ひしと慕ふ、我れも戀ひしと一筋に、焦れて〽指して向島、いつか汀に着きて候ふ。

ト兩人よろしくあつて、綱女舟を岸へ差寄せる。前の波板せり下りる。

つな　サア、モシ、舟が着きました。疾く／＼岸へ御上がり候へ。

〽如渡得船と彼岸に、川ぞひ柳立出でゝ。

松若　なう舟人、あれに白き鳥の見え候ふが、名をば何とか夕汐の。

つな　いゝ、あれかえ。ありや沖の鷗でござりまする。

松若　よし千鳥とも、鷗とも。

〽宴に隅田の鳥ならば。

など都鳥とは、云ひもせで。

〽嘘を鏡波の山笑ふ、夕せはしき村千鳥、はつと立つ名も厭はぬものを。

つな　ほんに、それ〳〵船長が。

〽名所に住めど心なく。

今仰しやつたあの鳥を。

〽都鳥とは云ひもせで、沖の鷗と夕波の、昔に歸る業平も、いかいすの字であればこそ、遠き東へ來てまでも、いざ事問はん都鳥〽げにや舟競ふ、堀江の川の水際に、來いつゝ鳴くは都鳥、それは難波江これは又、隅田川原の千鳥足、竹屋待乳や呼子鳥、猪牙で洒落てエヽサ

ヤサ、ヤツサ藪ほしの棧橋手を引かりよ。

松若　ハヽヽヽ。

ト倒るゝ。

〽正體も無く伏し沈む。

つな　道理こそ、こりや氣の違うたお方と見ゆる。アヽ、お氣の毒な事ではある……幸ひ〳〵、此方の隣りの法界坊が御祈禱を、聞き覺えたも勿怪の調法、てんぽの皮にやつて見よう……エヽ、肝腎の錫杖が。

ト櫻の枝を折りて、錫杖にして

ドレ、一祈り祈らうか。

〽まづ筑紫には戀すてふ、君が袖褄彦の山、返事四王寺きたさのさ、讃岐に今かと松山を、先ぢやしら峯伯耆に御苦勞、大山ならば京近き山衆の、地色は膝で愛宕山、首尾を横川に中宿へ、山上大峯釋迦ヶ嶽、こけの行者が御祈念に、謹み給へと加持しける。〽イヽヤ〳〵我れは物に狂はねど、風に櫻の物狂ひ、ちらり〳〵ちら〳〵〳〵と、花の振り袖うつゝなや。

ト振り袖を打捨てゝ、どうと下に居て思ひ入れ。綱女最前より、よく〳〵見て

つな　どうやらあなたは、御幼少の折お目見え致した、アノ、吉田の松若さまぢやござりませぬか。

松若　ヤ。

ト思ひ入れ。

つな　オヽ、けんに線香ささおや〳〵。モシ、私し事はお家の下部、軍助が女房霜女と申す者、お云ひ聞けの入間家に、御奉公いたして、この東に帰りましたれば、御存じないは御尤も、こんな事云うたとて、お狂氣では……アヽ、どうぞお正氣に……それ〳〵、お館に居た折から、花子の前さまに戴いた、髪がけのこの一炷。

ト懐より香包みを出して

香は心を澄ますとやら、肉の火壯で、さうおや〳〵。

ト傍よりじんじやうなる石の火在を持つて来て、松若が前に置き

サアモシ、一炷この香を。

ト香を火生へのせると、火ドロ〳〵になり、甫入ヤツと悶絶する。此うち煙硝火立つと、今の振り袖しぐんと書間へ消える。とたんに魂がドがりて花道の切り穴へ落つる。ドロ〳〵打上げる。向ふに時鳴りになる。

〽眠戒き落ちて松若が、かいやり捨てし彼の袖を、駐に寒の寒稀し、文も一本の松若が。

ト又ドロ〳〵になる。今の振り袖を亡魂、松若の取りの件へにて、お振り袖を肩へかけ。

笹に扇を付け、擔ぎし見得にてせり上ぐる。ドロ／＼打上げ、淨瑠璃

へうはの空なる青柳も、いとし／＼に亂れ髮、降るは涙かイヤ春雨か、晴れて逢瀬のあらならば、亂れはせまじ我が心、眞葛ヶ原の露の野に、嫁菜土筆はありながら、葛はうけし俤も何を歎きの物狂ひ。

トかけりになり、狂ひながら、舞臺へ來り、よろしくあつて、どうと下に居る。鳴り物打上がる。この時松若心附き、淸玄を見て思ひ入れ。

松若　ムウ、何時の間にかは狂人の……コリヤ、さうして其方は。

淸玄　サア、我が名はアノ松

松若　松とは。

淸玄　ハテ、氏も、吉田の待乳山。

松若　夕越る人に

淸玄　言傳てゝ。

へ歸らぬものを雁がねの、翅交して咲く花捨てゝ、戻り道かや戻り路か、行こか戻ろかさりとは憎や、蝶は何時でも菜種の床に、よれつ縺れつわりなき妹背、アヽ嫉まし小夜の睦言も

我れは自惚の局さへ、今は形見の仇名草。

トこの文句にて兩人振りあつて、トゞ花を捧げて立ち並ぶ。この時綱女心付き、兩人を見つけ、

つな　アヽ、この松若さまがお二人に……モシ／＼、どちらが眞の松若さまで。

松若　イヤ／＼、綱女、我れこそ吉田の松若ぢやわい。

班女　イヤ、我れこそ吉田の松若ぢやわい。

つな　そりや、そりやマア何とこざりまする。さうして今のお詞は、正眞の確な物ごし。すりや花子さまの名香。

松若　イヤサ松若、狂氣ならせねば、花子が名香何のしるし。

つな　でも、御し出での時には、松若さまには、狂亂めいし班女さま、また花子さまの折檻には、お定ひ續けの事のゆゑに、萬をさまお果てなされしと、お聞き遊ばし、お心が。

松若　ハヽヽヽ、天下を望む者、ナニ女に心を奪ひ狂氣なさんや。狂ふと見せしは大望の、便りとなすべき所爲は似せ物、それゆゑ再び狂ひし、都鳥の一卷を、詮議の手段、似せ氣違ひ。

つな　エヽ、すりや大望の便りにと、アノ都鳥の一卷を

ト思ひ入れ。

松若　今にも手に入るものならば、忽ち武將はこの松若。

つな　アノ、今にも都鳥が……ても恐ろしい其お望み、それゆゑあなたを鎌倉より厳しい御詮議、もう
もう〳〵、左樣な事はおやめ遊ばし、暫くお身を私しが在所にお忍びありて、折を見合せ、櫻姫
さまとお睦じう。

松若　ヤア、いはれぬ女の横合から。

つな　すりや、どうあつても。ムウ……さうして此方の松若さま、あなたは何でお心が。

清玄　ハテ、知れた事、あの者が云ひし詞は一々に、この松若が心の大望。

松若　イヤ、似せ者めが小ざかしい。

清玄　其方こそ似せ者、小ざかしい。

松若　然らば證據は吉田の重寶……卽ち爰に楊柳笛、これでも其方が松若か。

ト懷中より袱紗に包みし笛を出す。綱女見て

つな　成る程、承りしお家の重寶……モシ、あなたもお家の

清玄　サア、楊柳笛は所持なせしが、盜賊の爲に失ひし、その名笛を所持する男子、さては彼れこそ我
が笛を。

松若　ナニ、思つて我れを露顯とは。
清玄　云ふにや及ぶ、その名前、この松若に。
松若　何を。

ト兩人思ひ入れ。綱女これを支へて

つな　アヽモシ、何方も最の松若さまと、云ふに云はれぬお二人樣……ほんに好い事がござりまする。松若さまと花子さま、お幼少いから云ひ號け、睦まし御縁も去年の春、音清水で、お逢ひ遊ばし。
松若　いづれにもそれより一瞬の、夢に契りを結びしとは、花子が我れへ物語り、おことは。
清玄　知らいでならうか。お身覺えしなら松若が、相手となつて。
松若　さうや云ふまでもない。幸ひ爰に櫻姫がこの家の娘。
つな　そんならあなたが、花子さまにおなりなされて。
清玄　この松若と。
松若　その夢の
つな　アノお話しな

清松　話さうか。

トこれより松若、振り袖を着て女方の振りになる。

〽御法の庭に初櫻、ふつと見初めて幻の、夢に心の亂れ秋、〽所は野路の玉川に、秋の螢のちら／＼と、一村雨の雨宿り、誰が墨染か軒のつま、又も不思議に近江路を、そろ／＼しかけ引寄せて、我れをも共に有り難い、所へ是非といたづらな、手先を執れど一心に、普門品第大事ぞと、讀めど刀尋段々と、心うつろふ色衣、爪繰る珠數もどこへやら、勿體ながら下紐を、佛の罰もなんのその、ツイ手枕に極樂の、思ひ重なる嬉しさに、假寢に結ぶ物語り。

ト兩人よろしくあつて納まる。

つな　成る程、私しが承りし、話に違はぬお二人樣の其お話、矢ツ張りどれが松若さまやら……それぞれ、思ひ付いた事がござりまする。惟貞さまの御知行は、いま仰しやつた近江の國、定めしお國の名所古跡、名にふれてある事どもを、爰でお話しなされませい。

松若　そりや何よりもいと易き。

清玄　父が御領のあらましを。

つな　比良のと聞いて三井石山、八景ならぬ名所は。

松若　昔ながらの山櫻。

〽抑人の皇傳へ來て、三十九代天智帝、都を爰に滋賀の宮、今は名のみに冬つる、籬はそれと自然居士、〽漣や、志賀辛崎の松の上葉を、さらり〳〵と殊更鞨鼓と望まれて〽面白の春なれや、梅に來傳ふ鶯の、花の木の間に木の間に花の、ちよいと飛んではホヽ、ホ法華經も梢に暮るゝを惜しむ、花巾上に散りぬれば、二月の雪の思ひあり、元より鼓は波の音、撥と打寄せ打寄せて、波の花咲く志賀の浦船。

松若　浮いた姿の賤の女が。

〽摘みやれお摘みやれ信樂の、茶は廿の人の木と、書いて茶といふ文字と讀むといな、伊豫簾下ろしてちやとつまれ、ちや〳〵ちやつきりちやつと摘む手の品者。

清玄　知るも知らぬも逢坂の。

〽關には一人蟬丸が、肩に琵琶せつたら負うて、戀ひしき時はべれつ〳〵、ひつひいてもかんなできないべい座頭の坊、按摩けんぴき膃胕津海津の泊り宿。

松若　苦み數寢に伽するよねの。

〽三味線見世をゆり〳〵もん、もり〳〵雜喉を引く浪に、しな付振りも高宮の、晒つく〳〵掛

子取り。

ト綱女舟の内より隅田川の五升樽を持つて來り、これを臼に見立て、櫻の枝を束ね、杵として三人晒しになる。

〽さても見事な、晒しぢよん女郎衆ぢやよの〳〵、とんと突きやれ、月に晒の上るまでもえ。夜妻可愛の露ほどなりと、親を思はゞ末よかろえ、さいな〳〵近江晒え。

ト拍子事あつて納まる。

つな　お二人ともに近江のお話。これでもそれと松若さまが……ほんに、松若さまと云や、去年三月十五日、お果てなされし弟君、梅若さまの御一週忌、また清玄さまも御追善にと、思ひ付いた接待の渡し舟。繋がる御縁もあなたがた、お二人様へ。

松若　手向けの念佛。

清玄　追善菩提のその爲に。

つな　幸ひ先刻に木母寺の、御講中からこの樽や、鞨鼓と共に預かつた、鉦鼓が船に。

ト云ひながら舟へ包みを取りに行く。この時綱女が跡に都鳥の一卷落ちてある。松若手早く取上げ

松若　こりやコレ慥か都鳥の。

ト清玄袖を翳して思ひ入れ。

つな　イエ、こりやお經でござりまする。

ト ちやつと取つて懷中する。

松若　經とは殊勝。

ト思ひ入れ。清玄これを隔て、

清玄　ハテ……す、經文よりは證文佛。

つな　皆同音に。

ト松若思ひ入れあつて、

三人　嘆息。

ト此間地になり、めいめい思案の體、撞木を持ち、網女房、左右松若清玄と立ち並ぶ。

〽時雨は〳〵、逝けき程と聞きしかど、つとめて到る所なりけり、なまいだ〳〵南無阿彌陀佛なんまいだ。

ト松若清玄撞木を持て、鐘のほうが、清玄が撞木の上の釣り鐘に當る、ボンと鳴る、これをキツカケに時……ト……頭を合せる、これにて松若、きつとなつて向ふを見て思ひ入れ、これより…

チャン。此うち合ひ方。また浄瑠璃になる。

〽西方の〳〵、佛の誓ひと聞くなれば、雪や氷と何隔つらん、なまいだ〳〵南無阿彌たん佛なんまいだ、鉦に浮かるゝ歌念佛。

トこの浄瑠璃の内、松若、向うへ行かうとするを、清玄振りにて引留むる模樣。薄ドロ〳〵。綱女は鉦撞木にて向うへ支へる。矢張りドンチヤン、また松若綱女が懐の一卷を取らうとする。清玄、松若が懐の笛を取らうとする事。すべて合ひ方、今の浄瑠璃の内にてよろしくあつて、納りに松若一卷、清玄笛を引出して

松若 こりや都鳥。

清玄 楊柳笛。

松綱 それを。

ト兩人渡すまいとする。立廻りに松若、綱女、一卷をさつと開くと、ドロ〳〵になり、たぢ〳〵となる。

これは。

ト清玄思ひ入れ、浄瑠璃になる。

〽ナヽヲ恐ろしの都鳥、神の神秘の神威に恐れ、我が陽炎も忽ちに、消えろ消えゆる陰の帝

引摑いでぞ失せにける。

トよろしくあつて、高安鐘の内へ飛び入る。鐘どん／＼落ちて響き凄じく、招術火ぱつと立つ。兩人思ひ入れ。

松若　さてこそ怪しと思ひし彼れは。

つな　若しやこの世を去り給ひし、清玄さまの亡き魂ならずや。

松若　何はともあれ家の重寶、楊柳軸もろともに、あの掛幅へ、

ト立ちかゝるを綱女引留めて

つな　モシ、あの畫よりはその一巻、あなたのお手へ入れ置いては、却つてお身の仇なる品。それゆゑ深くも隠せし綱女。サア、私しへお渡しあれ。

松若　ナニ、我れへ隠せし綱女、とつくの謎。

ト叉かゝるを綱女支へる事もやつとあつて、兩人トやんとこまる。この時ドンチヤンばけ／＼、向うより荒川兵衞太、甲冑なる體にて走り出て來り、直ぐに舞臺へ來り、松若を見て

兵藤　そこにござるは吉田の松若、所の者へ言ひつけて、幸ひあれなる建立の、鐘を合圖と定めしところ

ろ、知らせに依つて義時が、即ち郎等荒川鬼藤太。走せ向ひし上からは、最早遁れぬ尋常に、松若腕を廻すまいか。

松若　ヤア、小癪なうづ虫め。大義を戴く吉田の松若、おのれ如きの手に合はうや。

鬼藤　不敵の一言。いで時澄が。

　　ト松若へかゝる。

松若　なにを。

　　ト突退ける。綱女支へ、

つな　サ、これだに依つて。

松若　エヽ、面倒な。

　　ト綱女を引退け鐘へかゝる。鬼藤太邪魔する。綱女、鬼藤太を引戻す。松若、鬼藤太を見事に投げ退ける。これにてばつと都鳥たち、中空に舞ふ。トヒヨ、此うち矢張りかすめドンチヤン。松若これを見上げ、きつと思ひ入れ。鬼藤太起上がるを綱女支へる。

ヽ、怪しや。

　　ト思ひ入れ、鬼藤太抜きかけるを、綱女在合ふ高札にてしやんと受留め、所作立になる。

ヘ色は互ひの氣ぜんの車。

ト合ひ方になる。此うち松若、都鳥に目をつけながら肌を脱ぎ

松若　風あらぬに都鳥、怒る空に立上がり、北方さして飛び廻るは。

ト此うち綱女、鬼藤太立廻つて

ヘ心行合ひお顔をこはね、さりとは好いた肩摘。

ト此うち松若肌を脱ぎ思ひ入れ

つな　是は陰にしてこれ女、又水鳥の目々は兌の卦、足なき時といふきは離の卦、共に女にかたどる。

ト文句よりこれより浄瑠璃の間に、綱女鬼藤太立廻り、松若をすかし隔れる。浄瑠璃。

ヘ何のお前を世話し。

松若　われは卿も色に變ふ、これ雷なり、離變は雷ふが作するを以て、雷地豫の象となる、變易なして。

ト相にて肌をさつと思ひ入れ、また浄瑠璃。

ヘ人目の關にわしや戀車、ほんに冷たい戀車、人の噂はさはれ、二人寢るのが山下風。

名高う、露す高雄に上、さゝゝゝ。

ト思ひ入れ。

〽柔で投げの。

すりや、大望も徒らに、今の亡者に。エヽ〳〵。

ト無念の思ひ入れ。

〽情知り。

殘念な。

トたぢ〳〵となる。鬼藤太を見事に投退け、きつと見得。これをきつかけに、ドン〳〵烈しく、向うより北條の家來寺島村助、請地の畑平、汐入船藏、尾久の里介、綾瀨の川平、荒木田土藏、洲崎の道すち、牛田の土手平、いづれも目立つ程なる破れ鱗の四天、鋲打の白鉢巻、胸當、手甲、脚當にて逸散に走り出で來り、直ぐに舞臺へ來り

村介 吉田の松若ぶつちめんと、北條が手の者寺島村助。

畑平 請地の畑平。

船藏 汐入船藏。

里助 尾久の里助。

川平　綾瀬の川平。
土蔵　岸本田土蔵。
道筋　洲崎の道筋。
土手　さてどんじりは牛田の土手平、松若魂に
八人　かゝれエゝ。
松若　ハヽヽ、束になつて隅田川原の真砂の数は蒐くるとも、われらが刃の立つ松若ならず。これより亡
　者があの名號。
つな　取隠せしは、何か仔細の有明の
松若　擾騒こそは。
　トすわ／＼騒ぐの鳴になり、松若、鐘の側へ行かうとするを、皆々遣らじと支へる。松若、鐘の側を
　持つて皆々「アヽナム／＼」の声、鐘の音凄じく
あれ見よ蛇體は現はれたり。
　ト始終大摩しく立つて、松若、鐘を引上げる。ト内より新吉原の亡魂、[illegible]の形にて現れ出る、鐘
　縁を指を出て来り、本行の通りの振り留にて、新吉花道へ行く。皆々驚いて見る。松若これな

見て立ち、かゝるか、綱女ぢつと押へて居る。鬼藤太詰め寄る。此うち清玄、いろ〳〵あつて、好き所まで行き、下に居る。皆々「ウヌ」と立ちかゝる。清玄すつくと立上がる。この時薄衣を撥退け、衣裳引抜きにて派手なる振り袖娘の形にて、持つたる鐵杖仕かけにて櫻になり、清玄これを翳し、振り袖を顔へ當てる。ト鐘に怨みのやうなる淨瑠璃になる。

〽花と鐘とは怨みて暮らす、咲いて最中を知りもせで、あだに入相つきやるで散らす、これが怨みぢやあるまいか。

ト文句のうち花道より振りにて皆々を追ひ戻しながら舞臺へ來り、千鳥になり、松若「ウヌ」ト拔きかける。清玄皆々を櫻にて打ち、構はず、松若が胸倉を執る。八人見事に中返りする。直ぐに淨瑠璃。

〽今更云ふに効も無き、縁を結ぶの神さんが、聞えぬ胸を幾度か、女心は辛氣なものぢやえ。

トこれより毬唄にて立廻り。

〽戀の譯知り鴛鴦の衾の、比翼枕で中も嬉しき二人寢色の媒、鹿の卷筆、ちよつと文して、何時と逢瀬を知らせ參らせ、それでほんに濡れた、一イ二ウ四イ四ウ、夜つの雪にも忍び通うて、二世も三世も變るまいぞと、起請誓紙は誰が水さすと、思ひ斷らぬが眞實の。

へ誠や嘘といふ事も、知らず過ぎにしなか／＼に、見てあこがれて、くよ／＼と、迷ひの種に

松若さん、エヽ、妬ましや櫻姫。妹ながらも現在の、惚れた殿御を睦じ／＼、添はせてよそに

清川、胸に湛る思ひの淵、淺いは緣し、深いは怨み、怨みは人をも世をも思ひ思はす、且その

の人こそ憎くし辛し、情ないぞと夕影に、立寄りたる怒りの形相、譬ても又あらん。

ト引拔きにて火炎の姿になる。鬘は變つて立上がる。大ドロ／＼、皆々思ひ入れ。

松若　最前といひ今といひ、合點行かざる女の有さま。

鬼藤　さては狐つきは。

皆々　何奴だエヽ。

ト鼓唄になる。寢鳥のあしらひ。

へなう怨めしや我れはこれ。

清玄　御身ゆゑ邪道の刃にかゝり、この世を去りし清玄尼、これまで浮れ來りしぞや。

ト薄ドロ／＼。

へ清淨觀に入りながら、魍魎の雲の立覆ひ、暗き闇路に迷ふなる。

松若　ハテ、心得ぬこの松若、何ことを怨しに寄さんや。

つな　すりやアノ、あなたの

清玄　イヤ〳〵、妹櫻姫と云ひ合せ、人にいひつけ刃にかけ、殺せし恨みを報ぜんと、御身が大望業通にて、知つたるゆゑに妨げなし、楊柳笛も自らが。

松若　ヤア、その詞にて是非はともあれ、大望挫きし憎くき亡者め、この松若が一睨みに。

清玄　愚な事を。

つな　成佛あれ。

鬼藤　ソレ、松若めを。

皆々　やらぬワ。

〽やらじと此方も立ちかゝるを、ひらりと見せし刀の稲妻、ひら〳〵と業通の、破戒の罪の淺ましや、水責め火責め三十六度、等活地獄は一萬由旬、眞逆さまに遠近の、奈落へともに連れ行かん、焦るゝ焔に嗔恚の炎、吐く息猛火を吹き來る、筑波颪のとう〳〵〳〵、隅田の川波さら〳〵〳〵、更に浮む瀬亡き魂も、解脱の雲に法の道、清玄あらしと橘の、櫓にその名殘りけり。

トこの文句にてよろしくあつて、トゞ眞中岩臺の上に、清玄、櫻の枝を持ちて立ち身。松若同じく岩

臺の上に白刃を構へ差寄せ、上の方に綱女、下の方に鬼藤太詰寄せ、八人は棒に並び取巻く、

皆々 ドッコイ〳〵、

ト見得よろしく

松若 まづ今日はこれぎり。

とろん〳〵とん〳〵

打出し

於染久松色讀販

おそめひさまつうきなのよみうり

お染久松色讀販

序幕

柳島妙見の場
橋本座敷の場
小梅莨店の場

役名═油屋娘、お染。同丁稚、久松。奥女中、竹川、喜兵衞女房、土手のお六。油屋番頭、善六。同丁稚、久太。同手代、九介。鈴木彌忠太。刀屋勘吉。中間、權平。廻しの源太。百姓、寺島の彌五兵衞。箱廻し、源六。藝者、小糸。油屋太郎七。油屋多三郎。仲居、お卷。同、お熊。竹川召仕ひ、お勝。同下郎、三平。髪結ひ、中の郷の龜。丁稚、三太。油屋下女、お園。非人、市。百姓、五百崎の久作。松本屋佐四郎。鬼門の喜兵衞。

本舞臺、向う淺黃幕、上手に石の大鳥居、眞中に松の大木、これに注連繩を張り、下手に水茶屋、眞中に額堂の書割り、日覆より前へ差出でたる松の吊り枝、すべて柳島妙見堂の模樣、三味線入り大

拍子にて幕明く。

ト竹出し大時百度参りなして居る。鈴木弥忠太、田舎侍ひの拵へ。小糸、鉄子の拵へ、おまき、おくま、仲居の拵にて、矢張り百度参りなして居る。向うより多三郎、花道よき所にて小糸に行違ふ。小糸、懐より文を出し、そつと多三郎に渡し、右左へ別れる。この時源六、箱廻しの形。三蔵、茶船の船頭の形にて弥忠太に付いて、同じく百度参りしてゐる。此うち、お園、下女の形にて、お染に日傘をさしかけて出る。捨ぜりふ云ひながら上手へ入る。ト直ぐに早替りにて、二役久松にて、甲斐絹の帛紗包みを持ち、上手より出て、お染にはぐれたる體にて、後先を見ながら向うへ入る。また向うより、三役奥女中竹川にて日傘をさし、跡よりお腰元の供にて、これもお百度をうつて居る心にて、両人体に上手へ入る。トお染に替り、お園付いて向うへ入る。直ぐに久松に替り出て急ぎ上手へ入る。

ト竹川にて、お腰付いて、上手より出て

かつ　申し、旦那さま、これに茶屋がござりまする。暫く御休息遊ばされませ。

竹川　さうしませうわいの。

ト水茶屋へ入る。ト向うよりお染に替り出て、捨ぜりふ云ひながら上手へ入る。始終件の百度参りこの間々ときれぬやうに、お染に行違ふやうにあるべし。此うち源六、手代の形、跡より久太、丁稚にて、紙に包みたる團飯を喰ひながら出る。源六、呼びとめ出て直に上手へ入る。この件出しの

中に彌五兵衛、百度參りをして居る。ト向ふより久作、田舍者の形、嫁菜賣りにて荷を擔ぎ出て、直ぐに舞臺へ來る。此うち百度止む。彌五兵衛床几にかゝる。久作も腰掛け

久作　オイ、姐さん、茶を一つ下さい。

彌五　オイ、爰へも一つ。そして煙草の火ぢや。

ト久作、彌五兵衛を見て

久作　イヤ、お前は寺島の彌五兵衛どのぢやござらぬか。

彌四　オウ、わがみは久作ぢやないか。コレ、おれが此やうにお百度をうつて居るも、こなたの弟、久松から起つた事ぢやわいの。

久作　久松からとは、久松がどうぞしましたかな。

彌五　イヤ、何ともせぬが、こなたも知つて居る、あの權四郎が娘のお光が、久松にうツ惚れて、生きるはの死ぬるはのと、命生害にもかゝる事ゆゑ、當座遁れに云ひ號けぢやというて置いたが、コレ、聞かしやれ、その久松が勤めて居る、油屋の娘と譯があるといふ事をお光が聞いて、それから、ぶら〱と戀煩ひ、思へば〱不便の事ぢやが、そなたに逢うたは幸ひぢや、その油屋の親方に斷はりいうて、暇を取つて下されぬか。さうせぬと、忽ちお光は氣が觸れますぢやによつ

て、どうぞ暇を取つて下され。久作どの、頼むわいの〳〵。

久作　成る程、その事なら儘にもなりませぬ。マア、暇の願ひ致して見ませう。

彌五　そんならこなたを頼みます。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。これといふも妙見様のお庇、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。そんなら久作、頼みましたぞや。

久作　そんならモウ歸らしやりますか。

彌五　オヽ、早う仕舞はつしやれ。

久作　夜さり話しにござりませ。

ト唄になり、彌五兵衛向うへ入る。久作跡を見送り

あの人もめつさうな。なんぼ弟とは云ひながら

トあたり見て、

武家の御代との御子息を、どうしてマア、百姓つれのアノ娘と

ト此せりふの内、竹川にお鶴、三平付いて水茶屋より出て

竹川　其方は五百崎の久作ぢやないか。

久作　ヤ、あなたは竹川さまでござりますか。先づはお前様にも御機嫌の好いお顔を拜しまして、何よ

りかお目出たう存じます。

竹川　其方も無事で、めでたい〳〵………久作に密々に話も有れば、二人の者は神主に逢うて、願うたお札を

かつ　戴いて參りませう。久作どの、後ほど逢ひませう。

ト　お勝に三平付いて上手へ入る。

竹川　久作、其方はわしが親達に、勤めて居やつた乳母が悴。其方も知つて居やる通り、父樣がお預りの牛王義光の刀、紛失ゆゑに情ない

久作　千葉の御家中多い其うちに、誰れあらう石津久之進さまともあらうお方が、刀紛失ゆゑに御切腹。あなた樣には奥勤め、御次男の久松さまは、乳母の悴の私しが引取りまして、勿體ない、躾付けぬ業の御奉公、根が水際のたつ若旦那、娘子供が目をかけて、袖褄引くに困り果て、一寸遁れの云ひ號け。

竹川　その在所の光とやら、疾うに噂も聞いたれど、樣子を聞けば久松が、勤めて居やる油屋に、獨り娘のある樣子。今も今とて參詣の、道行く人が弟の噂、十六七な振り袖の、供して居やるを見かけたが、そんなら彼れが油屋の

久作　成る程、左樣な事もござりませう。世間一統評判の、こしやく娘のある内へ、同じこしやくな若旦那、差置きまするも正眞の、井戸端の茶碗とやら、危ないものとは思ひますれど、程がお刀を詮議の爲の御奉公、よもや、うか／＼左樣な事も

竹川　サア、わしもさう思ふゆゑ、今日お百度を上げるのも、且はあの子の身の畏難、又は刀の恙なう、手に入れる爲の大願も、それが苦勞になるわいの。其方に逢うて姉が傳言。

久作　お目にかゝらば猶しも、お話し申すでござりませう。さうしてあなたはお屋敷へ

竹川　イヤ、また用事も有れば、何かはアノ巴屋と申す方にて。

久作　お目にかゝつたその上に、御詮議なさるゝお刀の

竹川　手懸りあらば、早速姉に知らするやう、其方をよきに頼んだぞや。

ト此せりふの内、お勝三平出て來て

かつ　旦那樣、お札を戴いて參じました……見受けますれば、御家中の鈴木彌忠太さま、遊里の女中をお連れなされ、只今これへお出でござりまする。

三平　遊山がてらの物まゐり、御用も有らば下郎めが。

竹川　イヤ、改たてゝは何かの譯。諸事は巴屋の座敷にて





久作　左樣ならば竹川さま。

竹川　久作、その內。

　　ト唄になり、竹川お勝三平、捨ぜりふにて入る。久作跡に殘り

久作　竹川さまの今のお詞。すりや娘御の供をしてアノ爰へ。

　　ト流行り唄になり、上手より鈴木彌忠太、藝子小糸が手を執り、仲居お巻、お熊、源六、三藏、皆々捨ぜりふにて出て來て

彌忠　暫く爰で休んで參らう。イヤモウ、今日の參詣は、これなる糸の手を引いて歩きたい望みぢやに、なぜ糸は身共が手を引く事は嫌ひぢや。否ぢや〳〵と申すが、ありやどうした譯ぢや。

いと　それぢやと云うて、晝中に其やうな事を。

彌忠　なんの成らぬ事が有らうぞ。今にも跡金の二百兩を、親方に渡さば、女房ぢやないかいやい。

くま　申し〳〵旦那、今時藝子の手を引いて歩くと、人が野暮ぢやと申しまする。

彌忠　何と申す。手を引いて歩くを野暮と申すか。

まき　左樣でござります。手を引かずに歩くを粹と申しまする。

彌忠　すりや、手を引かぬが粹ならば、手を引かずに連れ立つて參らうか。

まき　どうなとなされませいなア。

彌忠　サア〳〵、これから土手で、摘草をして樂しまうではないか。

くま　これはようござりませうわいな。

三次　申し〳〵、摘草よりは、爰に嫁菜賣りが居ります。これをみんな惣じまひにしてお遣りなされませ。

源六　ハイ、それがよからう。コレ〳〵、嫁菜や、みんな買ふが、いくらだ。

久作　エイ〳〵、みんな賣つてしまつて、嫁菜の包が一つ殘つて居りまする。

源六　たつた一つか。よいワ。買ひかゝつたものだ。いくらだ〳〵。

久作　ナニお前、たつた一把ばかり、只でもようござります。

源六　イヤ〳〵、商人の物を只取つたと云つては濟まない。錢の五十も遣らうか。

ト懐さげを探り見て

ヤイ、これはしたり、今門前で皆ど錢に遣つてしまつた。よし〳〵、いま巴屋から錢を持たして取りに寄越すから、暫く待つて居たがよい。

久作　アイ、持つてござつてもようござりまする。そんならこの荷を爰に預けて置きますから、お前好い時分に取りにござりませ。姐さん、暫くこの荷をお頼み申します。ドリヤ、行て來よう。

ト唄になり、久作上手へ入る。ト油屋多三郎下手より出かけ、小糸と顔見合せる。

小糸　ヤアお前は、

ト云はうとする。多三郎茶店へ隠れる。

彌忠　お前とは、誰れぞ來たか。

小糸　サア、それはな。

まき　イエ〳〵、いま糸さんがお前と云はしやんしたは……オヽ、それ〳〵、くちなはでござんすわいな。

ト竹の先に火繩の括り付けたを、彌忠太の足許へ抛る。

彌忠　ナニ、くちなはぢや。身共大嫌ひぢや。

源六　モシ〳〵、くちなはぢやない。こりや火繩でござりまする。

彌忠　何を馬鹿な。

皆々　ハヽヽヽ。

ト捨ぜりふ云うて居る内、下座より巴屋の新八出て

新八　これは〳〵旦那、糸さまをお連れなされて妙見参りでござりまするか。お樂みでござりまする。

彌忠　オヽ、巴屋の新八、忙がしいか〳〵。
新八　忙がしい段ぢやござりませぬ。旦那、ちとお出でなされませぬか。
彌忠　オヽ、只今参るところだ。サア糸、行かうか。
小糸　イエ〳〵、わたしや好い序、吾妻さまへ詣つて来るわいな。
彌忠　吾妻の宮へ詣るなら身共も詣らう。
小糸　イエ〳〵、女子ばかりで詣るのが、わたしが願でござんす。
源六　これはしたり、糸さま、如何したものでござります。旦那と一緒にお出でなされませ……モシ、旦那、わたしは些と用事もござりますから、跡から参ります。
彌忠　然らばさうしやれ。サア、糸、行かうか。
ト手を執る。
小糸　見やうに手を執つておやと、わしやモウ行かぬぞえ。
彌忠　然らばお手を執らずと、お供いたしませうか。
新八　大概なら旦那様
彌忠　[illegible]ら来やれ。

小糸　又しつこい。マア先へ。
彌忠　オツト閉口。然らばお先へ。
ト流行り唄になり皆々入る。ト茶屋より多三郎出て、最前の文を懐より出して見ながら
多三　そんなら糸を身受けする侍ひとやらは、あの彌忠太。どうぞ善六に逢ひたいものぢやが。
ト斯様な事云うて居る。トばた〳〵にて久太、三太、丁稚の形にて竹の皮の強飯を争ひながら出る。
三太　ヤイ久太、その強飯をおれに寄越せ。
久太　誰れがおのれにやるものか。
三太　人の強飯を引ツ奪つて太い奴だ。寄越せ〳〵。
ト兩人捨ぜりふにて爭ふ。トド摑み合ふ。多三郎中へ入り
多三　これ〳〵、われは久太ぢやないか。
トこれにて三太、多三郎を見て
三太　お前はこの頃わしが内へ來てござる、油屋の若旦那。久太と喧嘩した事は、内の旦那へ沙汰無しに賴みます。
多三　オヽ、云はぬ程に、早う去んだがよいぞや。

三太 サイ久太め、覚えて居やアがれ。

ト橋がかりへ入る。久太見送り

久太 間抜けやい〳〵。

多三 イヤサ〳〵久太、どうしたものぢや。よい加減にせぬか。

久太 若旦那、さうしてお前は、この頃どこへ行つて居なさつた。お袋様が案じて居なさるぞえ。

多三 イヤ、おれは常時松本屋の内に居続ぶちや。さうして、わがみは誰れと来やつた。

久太 ハイ、わしは番頭の吾六さんと、伊勢八の出ひに来たら、あの三太めが、わしが強飯をくれろと云ひやす。太い奴です。

多三 オヽ、そんなら其方に頼まう。

ト懐より折り紙と小糸より来た状を出し

アノ、これを吾六に見せて、わしが云うて居るこの間頼んだ事、この訳のお急に頼むと云うて。

渡してたも。

ト渡す。

久太 そんならこれを渡して、この間頼んだ事を頼むと云へばよいのぢやな。

多三　さうぢや〳〵。わがみは賢い者ぢや。そんならアノ巴屋に待つて居る。早う頼んだぞや。ドリヤ行かうか。

ト流行り唄になり、多三郎上手へ入る。久太殘り

久太　何の事ぢや。折角爰で樂まうと思うたに、いろ〳〵の事をいひ付けをる。

ト捨ぜりふ云うて居る内、大拍子になり、上手より善六に源六出て

善六　源六か、好い所で逢うた。

源六　わしもお前に逢ひたうごんした。

ト此うち久太見付けて

久太　オヽ、番頭さん、最前からお前を大きに。今から尋ねるところだ。

善六　何を阿房め。

久太　何のそれを叱る事があつて。

善六　さうして尋ねると云ふは、そりや何の用で。

久太　何だか多三郎さまが、お前にこれを渡して、頼んで置いた事を頼むとさへ云へば分ると。何とよく覺えて居やうがの。

善六　そんならこれを

久太　慥かに渡したぞえ。サア、これから強飯ぢや。

ト床几の上に強飯運び、遠見しながら強飯を食つて居る。

源六　善六さん、そりや何でござります。

善六　これは牛王義光、刀の折り紙ぢや。小糸が身受けの金に詰り、これで工面してくれろと、わしへの頼みぢや

源六　そんならそれで、金の工面してやる心かえ。

善六　なんの因果にそんな世話をするものか。あの野良息子の多三郎を、何それ彼それ科を拵らへて、油屋を抛り出して、娘のお染をおれが女房にするヮ。そこであの清兵衛を、若隠居の貞昌どのと、譯が有ると世間へ披露する。是非に破談にならねば成らぬ。それ、跡式はおれが物。その時は源六おぬしを引取つて番頭ぢや。えらいか〳〵

源六　奇妙〳〵、まつ祝ひに、ちよつと一杯呑まうぢやござりませぬか。

トこの云ひ合せを久太覗いて聞いて居て、この時手を叩き

久太　よい事聞いた〳〵。番頭さんと、どこやらの人と、好い事聞いた〳〵。





ト手を叩き踊り歩く。善六源六慌てゝ押留め

善六　コリヤ〳〵、久太よ〳〵、われは賢い者ぢや。今云うた事をば、誰れにも云うてくれるな。その代り、おれが好い事云うて聞かす。

久太　番頭さん、好い事とは、そりやどの様な事ぢや。今聞いた事は誰れにも云はぬから、好い事を云うて聞かしなさい〳〵。

善六　サア、その好い事は

久太　何ぢや〳〵。

善六　オヽ、さうぢや〳〵。われに惚れて居る女がある。

久太　エヽ、おれに惚れて居る女とは、そりや誰れぢやえ。

善六　サア、その女は

久太　誰れだえ。

善六　サア、その女は……オヽさうぢや。アノ内の若隠居様が、おぬしにえらう惚れてござる。

久太　何ぢやっ。そんならアノ隠居様が

ト思ひ入れあつて

番頭さん、嘘ばつかり。

　　トはにかむ思ひ入れ。

源六　若隠居が惚れて居るとは、エヽ、あやかり者め。

　　ト背中を叩く。

久太　エヽ、おきなんし。

源六　エヽ、果報者め。

久太　イヤ〳〵、こりやァおれを、嬲るのだ〳〵。なんのお隠居様が、おれに惚れるもので。

源六　ハテ、疑ひ深い奴。コリヤ〳〵、嘘ぢやないぞよ。この間隠居様がおれを呼んで、コレ源六、おれはアノ久太に首だけ惚れてどうも堪らぬゆゑ、其方が世話して逢はしてたも。と云うて江戸で逢ふ事はどうもならぬ。幸ひ彼れが在所は葛西の栗文村。まづ久太を在所へ駆出させ、その跡からおれもついて行く。それ、在所で二人が揃ひの浴衣で、團扇持つて、チン〳〵〳〵、暮らしたいのが願ひぢやと云はしやつた。

久太　そんなら何かえ、おれが在所へ行つて居ると、跡から隠居様が髪を生して……イヤ〳〵〳〵、いや嘘ぢや〳〵。

善六　コリヤ〳〵、ハテサテ疑ひ深い奴ぢや。嘘でない證據はコレ、其方に遣つてくれと云うて、隱居が金を壹歩。

ト紙入れより金を一歩出して

これをわれに路銀に遣つて、駈落ちさしてくれいと云うて下さつた。早くこれを持つて駈落ちせい。

ト金を渡す。

久太　よし〳〵。そんなら今からこの金持つて駈落ちぢや。そして、この金で世帶を持つのだな。イヤイヤ、世帶よりは、おれは鰒を喰ひたいから、思ひ入れ鰒を喰ふ。イヤ〳〵、世帶も持ちたし鰒も喰ひたし、鰒にしやうか、世帶にせうか。鰒か世帶か世帶か鰒か。オヽ、どうでも鰒ぢや。世帶は元服してから何時でも持たれる。何でもこれだけ鰒を喰はう。

ト行きかける。

善六　コリヤ〳〵、鰒はよいが、最前強飯を喰つたぢやないか。鰒と強飯は食ひ合せぢやわい。

久太　なんのお前、鰒に餅は悪いが、強飯は大事あるまい。

善六　成る程、われは賢い者ぢや。コリヤ、必ず江戸へ戻るなよ。

久太 承知々々。

ト花道へ行く。雪駄を脱いで腰に挟み

番頭さん。

善六 何だや。

久太 御座る。

ト云ひながら揚幕に向うへ駈けて這入る。

善六 大べら坊め。

源六 さうして、久太を駈落ちさせる心は。

善六 これも逸鷹有馬山、多三郎が渡した狩の繪を、久太めが持つて駈落ちしたとなるわ。そこで此奴を盗にするわ。多三郎は早速内を叩き出される。二人とも跡はおれが物。

源六 天晴れ、流石は大阪の番頭様。

善六 智恵者と見えるわ。

源六 イヤモ、孔明さゝ。

善六 イヤ、それ程にもあるまい。

源六　ハヽヽヽ。時におれは多三郎を、段々深みへ引入れる工夫が第一。

善六　そんなら首尾よう

源六　ドリヤ、行て來やうか。

ト唄になり、橋がゝりへ入る。

善六　これもよし〳〵。時に、これを持つて居るも危ないもの。

トあたりを見る。久作が置いて入つたる嫁菜の荷を見付け

オヽ、爰に好い物が有る。この嫁菜の藁苞、これへ入れて、土産の顔で持つて戻るワ。ところで内でおれが取るワ。よし〳〵。

ト捨ぜりふ云ひながら苞の中へ折り紙を隠す。この内廻しの源太出て

源太　モシ、番頭さん……コレ、番頭さん。

ト脊中を叩き微酔のこなし。善六、悔りして、苞を荷の中へ入れ、飛退き

善六　エヽ、悔りしたわい……オヽ、廻しの源太か。さうして、どこへ行つたのだ。

源太　御免なさいやし。わつちやァ開帳へ参りやして、矢大臣で五ンの字ぐいときめ、あんまり好い心持ちなので、ふら〳〵と参りました。

善六　まゝ、それはさうだが、時に、いつやら頼んだ事は如何だ。

源太　さりやァ呑込んでござります。中の郷の蔓結びの鶴を頼んで置きましたからは、如才はござりませぬが、跡でこれはよいかね。

善六　そりや胸にあるわえ。そんなら明日、清兵衛が来て居る時分に頼む。必ず間違へまいぞや。

源太　そんならようござりますが、ほんに間違ひはないかね。

善六　気遣ひするな。善六だわえ。

源太　それさへよければ、戯ひに叉左官。

善六　まだ呑むか。

源太　あて呑みぢや。

ト流行り唄になり、上手へ入る。善六捨ぜりふにて床几へ腰を掛けると、向うより油屋太郎七、旅商人の形、九介、手代の形にて、風呂敷包みを背負ひ出て来て、直ぐに舞台へ来る。

太郎　まゝ、其方は善六ぢやないか。

善六　まゝ、伯父御太郎七さま。九介も今戻つたか。

九介　お懐かしうござります。松戸の市は大雨で、馬に付けて行つたものも皆売つてしまつて、残

つたのを、こればかり脊負つて歸りました。

善六 オヽ、それは好かつたゝ。大儀々々。

九介 マア、お休みなさいまし。

太郎 オヽ、さうせう／＼。

ト三人腰掛ける。

太郎 時に善六、わがみに云はうと思うて居たが、いつぞや刀屋の勘吉が方から、質に取つた牛王義光の刀、ありや餘りあやの拔けぬ物ぢやほどに、月が切れたら、早く流してしまや。

善六 ハイ／＼、畏まりました。

太郎 さうして、折り紙はしまうてあるかの。

善六 サア、その折り紙は多三郎さまが

太郎 ヤ。

善六 イヤ、貞昌さまが簞笥へしつかりと、おしまひなされてござりました。

九介 モシ／＼、伯父御樣、もう晝でもござりませう。どこぞで支度をなされませぬか。

太郎 オヽ、それがよからう／＼。

九介　橋本で田樂を燒かせませうか。

太郎　田樂もよからう。善六もおぢやらぬか。

善六　成る程、私しも參りませう。

　ト嫁菜の籠を提げて、捨ぜりふ言ひながら行かうとする。この時久作出て、背の中に籠が無いゆゑ、そこらを見廻して、善六が持つて居るのを見付けて、奪つて取らうとする。善六振りして

善六　ヨイサ〳〵、人の持つて居る物を、斷り無しにどうするのだ。

久作　ハイ、この嫁菜は私しのでござります。

　トこれにて善六心付き

善六　そんなら此の嫁菜は貴樣のか。ハヽヽヽ、ハヽヽ、ヘヽヽヽヽ。こりやおれが惡かつた。斷らせう。この嫁菜、おれが買はう。

久作　イエ、この嫁菜は人樣に賣つて置きましたから、お前の所へは賣られましない。

　ト持つて行かうとする。善六しつかり持つて放さず

善六　ハテ、人に賣つて置いても實の處買ひ主だ。人が二十四文ならおれは五十、人が五十ならおれは百と買ひさへすればよいではないか。

久作　イエ〳〵、それでは義理が濟みませぬ。矢ッ張り返して下さりませ。
善六　それでも是非買はねばならぬ。
久作　どうぞ御免なされませ。

ト藁苞を引合つて居る所へ、下手より中間權平出て

權平　善六々々、お旦那が急の用事が有るから、早く來さつしやれ〳〵。
善六　イヤ〳〵、今ちつと用事が有つて
權平　イエ〳〵、此方は彼の牛王義光の刀の事に就いて。
太郎　何ぢや、義光ぢや。
善六　サア、その義光ゆゑに、この嫁菜を
權平　ハテ、それに嫁菜が入るものか。早く來やれ〳〵。

ト腕くを無理に引立て行く。

善六　コレ〳〵、九介々々、何でもその嫁菜を、買うて置いてくれ〳〵。

ト腕き〳〵引摺られて入る。

九介　何だか氣違ひの沙汰だ。

太郎　九介、權六は何ぞつきはせぬかの。

九介　されはサ。

久作　イヤモウ、今の旦那はどこへござつた知らぬ。

九介　モウ〳〵嫁菜屋、今のはおれが内の番頭さんだが、その嫁菜を買つてくれろと、くれ〴〵の權六だから、わしに賣つて下さい。

久作　わしの願ひござりまするが、これは外の旦那へ賣つて置きまして、又あなたへ上げましては、松藏へ義理が濟みませぬ。

九介　義理が濟むも濟まないも、高が嫁菜ぢやアないか。何でも頼みやす。そんな事を云はずと賣るがよい。

久作　いえ〳〵、又あす好いのを摘んで來て上げますから、これはマアお通りなされて下さりませ。

九介　そうでもあらうが、あす嫁菜を又まで買ひに來られるものか……斷うするがよい。この嫁菜をおれに賣つて、そこらにいくらも生えて居るのを摘つて、外へ賣るがよいではないか。どうでも聞き譯の惡い男だ。

久作　イエ〳〵、それではわしの心が濟みませぬ。

九介　成る程、強情な男だ。この嫁菜が唐からでも來やアしまいし、土手縁にいくらも生えてゐるものを、成る程田舍者といふものは解らないものだ。

ト此せりふの内久作ムッとして

久作　モシ〳〵、この嫁菜は外へ賣つたから、賣られないと云ふに、イヤこの嫁菜が唐からでも來はしまいの、田舍者は解らないのと、賣られないから賣られないと云ふに、餘り其やうに云はつしやりますな。

九介　なんだ〳〵、大分むつとするな。コレ、解らないから解らない田舍者だと云つたがどうした。この猿唐人め。

久作　猿唐人とはわしが事かえ。

九介　うぬが事だ。悪く洒落やアがると撲り挫くぞ。

久作　撲れるものなら撲つて見さつしやれ。

九介　撲らないでどうするものか。

ト九介久作摑み合ひ、久作亂髪になる。仕出し大勢出て、わや〳〵云ふ。太郎七分ける。この中へ三藏醉ひたる體にて出て

三藏　九介、相手は此奴か。

ト手に持て居る下駄を脱いで久作が頭を打割る。久作の額に疵付く。この内向うより松本屋佐四郎、好提灯付、げつこ、一本差しにて出て来て、この體を見て中へ入り、分けて

佐四　待て〳〵。見りやア油屋の太郎七さまぢやアござりませぬか。

太郎　モシ、佐四郎さま、九介と両人が喧嘩ぢや。止めて下さりまし。

佐四　九介、一體こりやアどうしたのだ。

九介　イエサ、あの野郎めが、この嫁女を買はうと云ふを、賣らないからの事でござります。

佐四　賣らないなら買はないがいゝぢやアないか。

三藏　エヽ、撲き殺してしまえ。

ト下駄を振上げる。

佐四　なんだ、市川屋の三吉ぢやアないか。われもまた喧嘩の彌次馬だな。なんだ、下駄を振上げやアがつて、肌でも入れやアがれ。

三藏　アイ。

トしまげる。

佐四　見りやアお前は田舍の人だの。

久作　ハイ、田舍の者でござります。僅かの事でこの鬪爭、どうぞよろしうお賴み申します。

佐四　見りやアお前、頭に疵が付いた。オヽ、さうして半纏も破れた。

ト この内仕出し捨ぜりふにて久作を見て笑ふ。

三藏　エヽ、此奴等、見る物ぢやアない。通りやアがらないか。

皆々　そりや怒つた。

ト 逃げて入る。

三藏　此奴らア。

ト 同じく追うて入る。

佐四　御覽じませ。あの通りだ。

太郎　若い者といふものは、困つたものでござります。

ト 佐四郎思ひ入れあつて

佐四　伯父御樣、ちよつと。

ト 太郎七を上手へ招き

お前、何と思ひなさるか知らぬが、見ればあの膳の絵を付く。半襟も穢れたからは、此まゝに捨されもせまいが、何ぞこざりませぬか。

太郎　ハイ、わしも松戸へ商ひに参りました帰りがけの、古着を持つて居りまする。何で見て遣りませうか。

佐四　さうしなされば、わしも物を云ふからは礼も置かれまい。古着代にわしも融通やりませう。

太郎　それではどうも。文助もそれも礼しが

佐四　ハテ、こりやアわしに出させて下されませ。

文助　そうく、佐四郎さま、それではどうもお気の毒でござります。

佐四　なんだ、お気の毒だ。べら坊め、たかゞ古着位をさせやアがる。

ト文助七輪を持ち風呂敷より鍋への物を出して佐四郎に渡す

佐四　そうく、前の人よ。さてわが気の毒だが、お前も思はぬ災難で、顔にも疵が付き、半襟も穢れたが、顔のコレ疵りがましいが、半襟の穢れた替りこの古着。そこでこの疵は、この金で膏薬でも付けなさるがよい。ほんのこれが、わしが挨拶したといふ印、これを取つて、話なしにしまして下さりませぬか。

久作　モシ〳〵、そりやア何でござります。こんな汚い半纏が破れたといつてその袷や、又これはかりの疵に、大まい壹歩の金を貰ひましては、私しの心が濟みませぬ。これは矢張りお前樣の方へ、お納めなされて下さりませ。

佐四　成る程、お前は田舍の人で正直だから、さうでもあらうが、これはわしが寸志だから、平に取つて下され。

久作　イエ〳〵、どの樣に云はつしやりましても、これを取ります事は否でござります。

佐四　そんなら何故かえ。わしが挨拶が氣に入らないのか。それでそんなに云ひなさるのか。

久作　何のお前、そんな事では。

佐四　イヤ〳〵、さうだらう〳〵。折角口をきいたが、この挨拶は退きませう。

太郎　モシ〳〵それでは

佐四　それ下ものの人が、わしが挨拶を聞入れませぬから、是非がござりませぬ。

ト此うち九介思ひ入れあつて

九介　モシ〳〵、もうようござります。これ程に云つて聞き譯の無い奴なら、どうするものか。乘り掛つた船だ、あの野郎を撲き殺して、わつちが解死人に出りやアようござります。退いておくんな

さいや／＼。讃て致してしまふぞ。サア、解死人はおれだ／＼。

ト九介久作に立ちかゝる。これにて久作顫へて

久作 アヽ、申し／＼、ようございます／＼。貰ひましよ／＼。

佐四 そんなら貰つて下さるか。

久作 貰ふまいと云へば殺さうと御しやるし、お氣の毒ながらお貰ひ申して置きませう。

佐四 そりやア嬉しい。そんならそれで納つたと云ふものだ。併し物は禮れだ。一つ〆めてもらはうか。

丈九 それがようござります／＼。

久作 モシ、〆めるとはどう致しまする。

佐四 〆めるとは手を打つ事だ。

皆々 よい／＼／＼。きまつてシャン。

ト手を打つ。久作不拍子に手を打つ。

佐四 まづ／＼これで極つた。ヤレ／＼、よく料簡して下すつた。

久作 イヤモウ、大きに御世話樣でござりました。左樣ならばもう歸りませう。

佐四 なにか、モウ歸るのか。それもよからう。ついで、江戸へござつたら、住吉町の松本屋へ寄はこ


大当り
浄瑠璃塚

ざるがよい。時分時には遠慮無しに、飯でも喰つて歸らつしやるがよい。

久作　ハイ〳〵、有り難うございます。

ト捨ぜりふにて荷をしまひ、花道へ行きかける。

九介　コレ〳〵、若いの。今のはほんの間違ひだから、堪忍さつしやれ。

久作　ナニお前、お互ひでござりやすワ、お前。

ト唄になり、久作向うへ入る。

九介　佐四郎さま、大きにお世話様でござりました……時に太郎七さま、晝食に致しませうか。

太郎　オヽ、さうせう。序に橋本で、舟を云ひ付けてたも。

九介　畏りました。そんなら私しはお先へ參ります。

太郎　さうぢや〳〵。

九介　佐四郎さま、お話しなされませ。

ト唄になり、九介上手へ入る。

太郎　佐四郎さま、何かといかいお世話樣でござります。何ぞといふと皆お前樣の御苦勞、有り難うございます。

佐四　イヤモウ、それや互ひの事。併し気の毒なは与三郎、この四五日はわしが内に居ますが、これもほどきを付けて、深川の盛者も、わしが親分になつて、事ゆゑなく内へ戻してやりたし、又お園ばうも山家屋へ、早く片付けてしまひたいものぢやて。

太郎　イヤモウ、盗といひ、与三郎まで、いかいお世話。山家屋へ嫁入つて行けばお染が仕合せ。

佐四　サア、それが仕合せか何だか、わしもひよんな仲人仕かゝつて、今では聟の清兵衛へ、云ひ訳ならぬだわ。

太郎　そりや又何の事、清兵衛どのへ。

佐四　サア、その気の毒なは……詳しうは云はれない。ちよつとお出でなされませ。

　ト両人舞台前へ出て、下に居て

知つての通り、貞昌どのは堅い気質、世間知らずのあのお染、仲人しかけたこの佐四郎。昨夜わざわざ清兵衛どのが、わしを呼んで、云ひ約束したあのお染、内の子飼と断う〳〵と。

　ト此うち公屋に忍付いて出かけて居る。太郎も思ひ入れあつて

太郎　ムウ、内の子飼とあるからは、もしや久松

それサノ、久松がどうぞしてかゑ。

太郎　オヽ、そたなはお染、貞昌どのも參詣か。
その　イエ〱、今日は妙見樣へ、お百度にわたしが付きまして
太郎　アノ、女子ばかりで
その　イエ〱、內の丁稚どの
そめ　あの久松を供に連れ
佐四　サア、その久松が今も噂を
そめ　久松が何で噂を。
佐四　イヤ、久しき松の今も噂を……コレ、お染ばう、この老松へお百度か。
そめ　アイ、この久松の若綠
佐四　風にもなびく柳島、一木の松も若葉して
そめ　振りよき松は
太郎　子飼の久松。
佐四　まつには苦勞を
そめ　エ。

佐四　嘘ではあるまい。

ト拵中を叩く。三味線入りの大拍子になり、この道具廻る。

本舞臺、眞中に九尺の屋體、大和葺藪寄屋がかり、左右障子、正面伊豫簾かけてある。下手障子屋體この間廊下があり、上手切り戸口、上下ともに山吹の花盛り。爰に彌忠太、小糸、お熊、お巻、酒盛りして居る。流行り唄にて道具納まる。

彌忠　なんと糸、この山吹の盛りは、見事な事ではないか。

小糸　知らぬわいな。

まき　モシ、糸さん、旦那があの樣に云うて居やしやんす。ちつとは氣を浮き〳〵持たしやんせいな。

くま　ほんに、それ〳〵、睡りそれでは愛想がござんせぬわいな。

小糸　イエ〳〵、それでも花を見たうもござんせぬものを。

ト此うち權平、勘六、善六を引ッ張り出る。善六橋がかりへ思ひ入れ。

勘權　善六を連れて參りました

彌忠　大儀々々。コレ〳〵善六、何をうか〳〵致して居る。

善六　イエ、最前の嫁菜賣り

彌忠　なんと。

善六　多三郎が折り紙を

小糸　ナニ多三郎さんとはえ。

ト善六無性に橋がかりを苦勞する思ひ入れ。此うち下の障子屋體より、多三郎顔を出し、小糸を招く。

小糸　ほんに美しい山吹、見て參ぜう。皆さまも一緒に。

まき　モシ、わたしも參りますぞえ。

くま　彌忠太さま、後にえ。

ト皆々下座へ入る。

彌忠　コレサ善六、何を其やうに、うか〳〵致し居る。して、義光の刀は

勘吉　イヤ、その義光の刀の儀は、萱屋喜兵衛に頼まれ、これなる善六どのへ百兩の質に入れ、その金は喜兵衛に渡し、即ちこれが受取でござります。

彌忠　成る程〳〵。こりや喜兵衛めが受取。こりやアあの百兩、横取り致したなア。ナニ勘吉、大儀ながら身が家來と同道にて、喜兵衛をこれへ連れて來やれ。

助吉　畏りました。

ト助吉權平兩人入る。

彌忠　コレ〳〵吉六、最前よりの身共にはかの喋言らして、刀は如何いたした。

吉六　サア、その刀ゆゑにアノ嫁菜賣めが

トツイと奥へ入る。

彌忠　あの吉六めは、どうでも狐でもついたと見えるわい。

ト内にて

かつ　サア〳〵、お出でなされませ。

トこれにて彌忠太片脇へ寄つて居る。ト久松にお勝付いて出て

マア〳〵、よい所でお目にかゝりました。

久松　さうして、竹川さまには。

かつ　今日は梅島へ御代參にお出でなされ、お前樣をお見受けなされ、尋ねて參れと仰しやるゆゑ、唯今參りまする所でござりまする。

久松　左樣なら、げしも大事でござりませぬか。

かつ　サア〳〵、ちやつとお出でなされませ。

ト正面の屋體横の障子を明けて入る。

お履物はわたしが

ト取らうとするを久松取つて土を拂ひ

久松　イエ、これが不斷でござります。

ト唄になり、兩人入り障子さす。彌忠太こなしあつて

彌忠　そんならアノ前髪めに、アノ屋敷の女が取持ちで、コリヤ出逢ひを致すと見える。

ト捨ぜりふの內、ばた〳〵にて下の障子屋體よりお染逃げて出る。跡より善六追へ出て、後より

善六　申し〳〵お染さま、お前は〳〵、胴慾な人ぢやぞえ〳〵。常々わしが目顏で知らせて居るに、知らぬ顏は胴慾でござります。

そめ　でも、知らぬわいな。

善六　なんの噓ばつかり。わしが云ふ事は知らいで、なぜ久松の云ふ事は知つて居なさるえ。

そめ　ナニ、久松がどうしやつたや。

善六　どうもせぬがお前、あの久松に、何をお賴みなされましたな。申し〳〵、ほんに〳〵お前ゆゑに

この善六、如何やうになつても離やせぬ。どんな山家の奥でも、二人一緒に暮らすなら、飯も炊かうし、水も汲もう。

ト善六捨ぜりふの内、お染は抜けて屋體の内へ逃げて入る。此うち彌忠太始終氣の惡きこなし、ふなふなして段々前へ出るな。善六お染と思ひ、さまざまの事をいうて彌忠太に抱きつき、兩人始めて顔を見合せ

彌忠　善六ッ

善六　彌忠太ッ。

彌忠　ようえらい目におはしたな。

　ト可笑しみいろ〳〵あり

善六　さうして今の娘は、どこへ參りました。

彌忠　オヽ、今の娘は即ちこの内へ入つた。

善六　すりやこの内へ。

　ト入らうとするを

彌忠　コリヤ、待て〳〵。この屋敷の内には、まだ外に氣の惡い事がある。

善六　氣の悪いとは、ドヽどんな話しでござります。
彌忠　その話しは、十六七の前髪と、綺麗な屋敷の女と、この内へ入つたが、あれは何でも、てつきり出逢ひと見えるわえ。
善六　モシ〳〵、その前髪誠に心がかりでござります。その前髪の年恰好、どの様な顔ぢや。イヤ、どの様な面でござります。
彌忠　顔立は瓜實顔で、目許が凉やか、口元の尋常さで、色が白うて鼻筋が通つて、譬へて云はヾ半四郎、大和屋に生寫しぢや。
善六　エヽ、そんならアノ半四郎に。イヤ杜若に似ては大騒ぎぢや。モシ、その前髪の着物は竪縞で、帶は小倉ではござりませぬか。
彌忠　いかにも着物は竪縞、帶は小倉。
善六　そんなら、いよ〳〵久松め。口惜しいわい〳〵。
彌忠　尤もだ〳〵。
善六　もう料簡が
ト行きかゝろ。彌忠太留める。内より知らせ次第に屋體の横より踏込み

お染、久松、出やアがれ。

　ト内にて竹川

慮外な町人、なぜ屋敷へ踏み込みやつた。

　ト舞臺一面に上がる。竹川善六が手を捻上げゐる。

彌忠　ヤア、こなたは屋敷の奥勤め、竹川どのか。

竹川　彌忠さまにも、天滿宮へよう御參詣。

　ト善六を下へ見事に返して

遊ばしたな。

彌忠　身も當社へ參詣は上意でござる。

竹川　それは近頃御苦勞千萬。私しとても今日は、櫻島への御代參、歸宅の間暫くも、借りきり置きし巴屋の、女子ばかりのこの一間へ、何で其方斷りなしに、慮外者め。

善六　慮外か未熟か存じませぬが、私しが踏みこみましたは、不義間男の詮議がござりまして。

竹川　默て町人、變つた事をおちや申すが、なぜ又わしがこの座敷へ、左樣な淫らな、不義がましい。

善六　イヤ、隱しやりますな。今宵へは入りましたはわたしが主人の娘、則ち主有る身を以て、密の了

と乳繰り合うて居りまする。アヽ、こりや何か、お屋敷の取持ちで、間男の仲人なされますか。

彌忠 こりや善六が申すが皆尤も。何か様子は知らねども、若い男を引入れて酒の相手。それでも屋敷の奥勤め、御代參の役目でござるか。

竹川 これは又改まつたお詞、それではどう掛け構ひない、町人の肩持ち顔な今のお詞。殊更只今見受けますれば、派手な女中をお連れなされ、色めいたる物詣り、これも矢ッ張り主命でござりますか。

彌忠 サアそれは。

竹川 誠に主命默し難なう見えまする。

彌忠 イヤ、誠に主命默し難なうござる。

善六 イヤ、お屋敷様のつめ開きは跡での事。わしが主人の娘、きり／＼爰へ出さつしやりませ。

竹川 イヤ、そりや成らぬ。

善六 とは又なぜな。

竹川 女ながらも武家勤め、借りきり置きしこの一間は、即ち武士の城郭同然、町人風情に踏みこまれ、此まゝに差置いては屋敷への聞えも有り、殊に御家中彌忠太さまもお聞きの上は、猶以て捨

て置かれぬ。大儀ながらわしと一緒に。

菅六　イヤ、さうきめ付けられては

トうな〳〵する。ばた〳〵にて源六、多三郎小糸兩人を引立て出て來て

源六　うしやアがれ〳〵。

小糸　コリヤ多三郎さまを

多三　どうするのぢやぞいの。

源六　どうするとは、爰にござる彌忠太さまが、身請けをなさるゝ糸さまを、なんでコリヤ横ばいん切つた……申し〳〵彌忠太さま、お館様の揚詰めのアノ糸さまを

ト此せりふの内、始終悪い〳〵。ト云ふこなし、源六始終心付かず

モシ〳〵、旦那、その身請けは何でござります。さてはお前は、癲癇でも發りましたか。

彌忠　成る程、身共は癲癇々々。ム、それ、そこらへがつてん、かんてん、てんかん〳〵〳〵ッナ。身共は癲癇ぢやぞ。

トいろ〳〵答ふこませるこなし。

源六　何の事ぢや。とんと解らぬわえ。

ト此うち多三郎、善六の側へ行く。

多三　コレ〳〵善六、最前久太に持たせて遣つたあの折り紙、それを金にして糸が身請けを

善六　モシ〳〵、久太に折り紙とは何でござります。

源六　それ〳〵、向うは折り紙で身請けすると云ひます。それぢやに依つて

トあせる、彌忠太困り、源六を押へて

彌忠　こりや〳〵源六、われが其やうに云うてくれるは嬉しいが、ちと差合ひが有るゆゑ

ト懐より紙入れを出し、中の金を遣り

コレ〳〵、これを遣るほどに、こりや南鐐丸と申して、こりやコレ奇妙な藥ぢや。これを口へ入れて、融けるまで何にも云ふな〳〵。

源六　これは〳〵、不斷このやうにお金を貰ひますに付きましても、アノ多三郎めを

トまた行かうとする。彌忠太留めて

彌忠　コリヤ〳〵、情ない奴ぢや。南鐐で利かずば

トまた金を出し

この度は、萬金丹々々々。

トやる。

源六　ハイ／＼、有り難うござります。これ程御恩になる旦那の、身請けなさるゝ糸さまを。これなやに依つて

トまた来るな、彌忠は、源六を花道の方へ押して行く。

彌忠　コレサ／＼、それできかすは武士の金子。

トまた金をやる。

源六　ハイ／＼、これなやに依つて、猶々捨てゝは

彌忠　ハテサテ

源六　それでも身請けの

彌忠　エヘン／＼

源六　現在お二郎が傾城

彌忠　エヘン／＼／＼。

ト押へながら向うへ入る。

善六　何の事たや、源六が物を云はうとすると、エヘン／＼、とんと解らぬ。これは格別、お家久様、

渡して下さりませ。
多三　そんなら座敷に妹の
小糸　お染さまが。
善六　お染さまばかりぢやない、丁稚の久松。
多三　ナニ久松をお屋敷様が
竹川　その久松は、今にては、縁は切つても實の弟。
多善　エ。
竹川　いかに世に落ち町人の、たとへ子飼ひとなればとて、主人の娘と不義がましい

ト思ひ入れあつて

町家の人の聞く手前、必ずともにお心に、おかけなされて下さりますな。
多三　左樣仰しやるあなたこそ、すりや召仕ひの久松が
小糸　實のあなたが姉御樣。
善六　たとへ以前は侍ひでも、今は町人、丁稚の久松、折檻するは番頭の役、引摺り出して

ト善六立ちかゝるを

竹川　重ね〳〵の

ト扇にて頭を打つ。

慮外者め。

トきつと云ふ。鳴物下りる、善六捻となる。多三郎小糸こなしよろしく、道具廻る。

本舞臺、九尺の二重舞臺、上下に納間、欄間に草履草鞋など吊してあり、古き板塀、門の入り口の傍に杭あり、下手置看を飾り、早桶を一つ据ゑ、白張りの提灯を吊してあり、二重の上に鬼門の喜兵衛、手拭を米屋冠りにして、切り臺を直し、煙草を切つて居る。側にお六、煙草の葉巻きをなして居る。早桶の前には非人の市、番をして居る見得にて道具とまる。四ツ竹の合ひ方。

ト上下より仕出し大勢出て草鞋を買ひ、煙草を買ひなどして入る。仕出し、早桶の札を見て

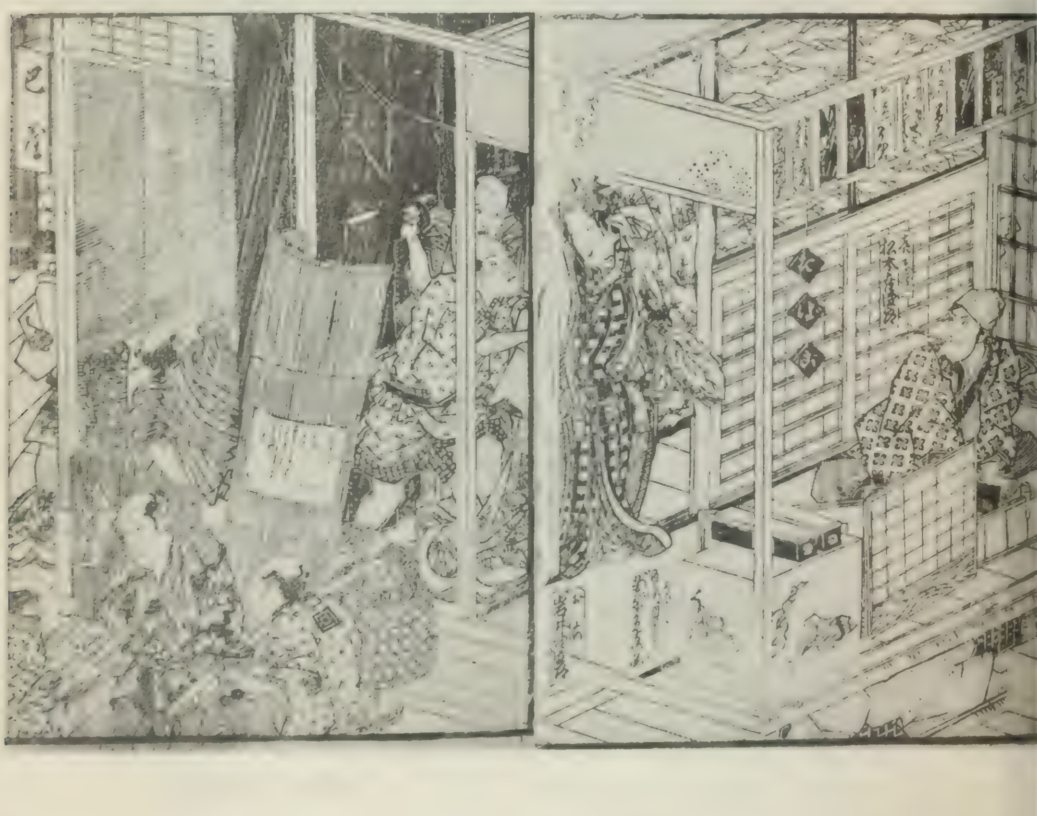
仕一　なんだ、年の頃十六七の丁稚體の者としてある。

仕二　なんでも尋ねて居るであらう。

ト捨ぜりふにて見て居る。ト上手より髪結ひの亀、嵩箱を提げて出て來り

亀　市や、倒れ者は男か女か。





市　アイ、十六七な前髪だが、腹が痛い〳〵と云つて居たが、ツイ死にやした。なんでも食傷と見えます。

龜　可哀さうだの。

ト二重に向ひ

どうでございます。やりませうか。

喜兵　髪は今日は、モウ遲い、明日早く來てくれ。

龜　アイ〳〵……モシ〳〵姐御、わたしが仕事單物が油染みたが、どうぞ振り出しておくんなさいな。

ろく　急がずば、夜なべ仕事にでもして置かう。

龜　さうして、厚袍の肩も切替へてもらひたい。

ろく　なんだ切替へろ。日濟しぢやァあんめいし。

龜　違えねえ。ドレ、行つて取つて來よう。

市　アヽ、退屈した……モシ旦那、ちよつと一杯ひつかけて來るうち、ちつとの間、死人をお頼み申します。

喜兵　なんだ、おれに死人の番をさせるのか。
ろく　あやまるの。
市　直でござります。ハヽヽヽ。
鶴市　ドリヤ、行つて來ようか。
　　ト四ツ竹になり、上下へ入る。
喜兵　嘸ア、もう何時であらう。
ろく　されば、もう亥付け暮れるであらうよ。
喜兵　いまいましい。今夜もまた夜なべといふ番だ。併し、人といふものは、どこでどんな暮しをするか知れぬものだ。この本所のはづれへ來て、夫婦差向ひで、刻み煙草を賣らうとは、狼狽へた細工も知らない事だ。
ろく　ヲヽ、わつちも千葉の屋敷の、竹川さまにお部屋を勤めて、末々はどこへでも片付けて遣らうと仰しやつたを待たないで、彌忠太さまの中間のお前と、あのゝものゝと、終には屋敷を駈落ちして、様々な目にも逢つたの。
喜兵　まだしも旦那方の受けの好い口が仕合せ。今まで此時は又御無心と出かけるが。併し、これが主

の彌忠太どんは、酢でも酒しほでも行かねえ人だ。

ろく　なんの、人の事より各自の身上が、ろくでもない癖に。さうして、この頃は剛氣に呑むの。

（卜壺を伏せる眞似をして）

えて吉もやるさうだ、よしねえよ。彼奴にかゝつちやァお終えだ。さうして、この頃は彌忠太さまから、度々人が來るが、また何か借りたの。

喜兵　何のそりやァ、この中旦那と深川へ行つた時の、その割り前を出せと云ふのだ。押しの強え、誰れが遣るものか。

ろく　イヤ〳〵、さうぢやァあるまい。何でも餘ツほどの物を借りたと見えて、強い催促だ。何でも義理の惡い物と見えるぜ。

喜兵　なんの、借りてもいゝワ。先は主なり、おらァ家來だ。借りてもいゝワ。それよりやァ竹川さまから、てめえの所へ度々人が來るが、てめえも何ぞ借りたか。

ろく　ヘン、よしてもくんねえ。何のそんな義理の惡い事をするものか。竹川さまからお人の來るのはわつちに頼みてえ事があるから來いと仰しやるけれども、何を云つてもこの形だ。晝日中は洗湯へも行かれねえ。嬶ァの南瓜とはわつちがこつたらうよの。

ト此うち宮兵衛仕事をやめ

宮兵　アヽ、よくお喋舌りなさるおかみ樣だ……時に、日の暮れねえうち、洗湯へ行つて來よう。

ろく　湯へ行くなら、上つ張りは脱いで行きねえ。

宮兵　ほんに、斷つていふ間の悪い時は、袂の間でも掏かれてはつまらねえ。

ト半纏を脱いで、

嚊ア、五合取つて來ようか。

ろく　肴が何にも無えよ。

宮兵　承知だ。錢をくれろ。

ト　お六、錢百五六十と油さしを出して

ろく　序に油が無かつた。

宮兵　よく人を使やアがる。

ろく　早く歸んねえよ。

宮兵　何處へ行くものだ。

ト四つ竹になり、油さしを持ち、向うへ行きかけるところへ、向うより權平勘右出て來て

權平 お前は喜兵衞どのぢやねえか。

勘吉 好い所で逢つた。

喜兵 誰れかと思やァ、刀屋の勘吉どんに、鈴木の仲間權平どのか。相も變らず又催促か。ありやァ根が盗み物だ。おれに質に置いてくれろと云つたから、貴樣と一緒に油屋へ百兩の質にやつて、その金はおれが使つてしまつた。ありやァ返さねえから、それとも六かしく云やァ、盗み物の尻割りだ。歸つてさう云はつせえ。馬鹿な人だ。

勘權 それぢやアこなた、濟むめえが。

ト袖を引留めるを拂ひ退け

喜兵 エヽ、知るものかえ。

ト四ツ竹にて向うへ入る。兩人跡を見送り

勘權 イヤ、呆れたものだ。

ト向うを見送り

コレ、コレ、喜兵衞どん〳〵。

ト云ひながら向うへ入る。ト引違へて向うよりお勝、三平付いて出て來り

三平　彼處がお六さんの所でござります。
かつ　お前は不斷來ておやに依つて、先へ行て案内して下さんせ。
三平　ハイ／＼。

　ト門口へ來る。此うちお六そこら片付け、みご箒で掃いて居る。

三平　お六さま、お宿でござりますか。
ろく　まゝ、お前は三平どの、よくお出でたね。
かつ　お六さま、お久しうござりまする。
ろく　まゝ、お前はお勝さんか。マア／＼お珍らしい。サア／＼、マア爰へお掛け。ヤレ／＼よくマア

　トそこらを拂ふ。お勝腰を掛ける。三平表に立つて居る。

この通り狹い内で

　ト火鉢にかゝつて居る土瓶の茶をついで兩人に出し

サア／＼、お溫いが一つお上がり。
かつ　イエモウ、お構ひなされますな。
ろく　さうして、今日はお宿下がりかえ。

かつ　イエ〳〵、今日は旦那様には、柳島への御代參。

三平　お歸りは舟とござりまして、大川橋から直ぐにお屋敷へ。

かつ　私しが此方へ參りましたは、お六さまへ賴みたい事がある、委細はこのお文箱にと申す事でござります。

ト文箱を出す。

ろく　そんなら旦那様からこのお文。

ト取つて

何にもお愛想が無いねえ。マア、煙草でもお上がり。煙草はお手前物だ。

ト煙草の抽斗を出す。兩人捨ぜりふ。この內お六文箱より文を出し、戴いて讀む。

成る程、此お文の樣子……畏りました。其うち私しがお屋敷へ上がりまして、委しくお話し申し上げませうと、憚りながら仰しやつて下さりませ。

かつ　畏りました。御用は何か存じませぬが、お前樣がお出でとあれば、その通り申しまするでござりませう。

ろく　よろしうお賴み申しまするぞえ。

かつ　左樣なれば、もうお暇申しませう。

ろく　もうお歸りか。マアよいではないかえ。

一平　イヤ、また遲なりましては危なうございます。

ろく　さうかえ。それはおそう／＼だねえ。

かつ　左樣なれば、近うちお目にかゝりませう。

ト行きかけるを

ろく　アヽ、モシ／＼。

ト呼び返し

どなたへもよろしくえ。

ト唄になり、お勝三平捨ぜりふ云ひながら向うへ入る。お六跡見送り、こなしあつて

そんなら治部の久松さまも、今では町家へ御奉公。それに付き、尋ねる刀の所在は知れたれど、百兩の金が無ければ手に入らぬ。その金貸し手はあるまいか、世話してくれいと旦那のお賴み。あなた方さへ出來ぬ金、まして此方がその日暮し、どうしてマア大枚の

ト文を讀み泣く、向うを見る。向う時鐘になり、向うより喜兵衛、油さしを持ち、德利と竹の皮を提げ

て出て

喜兵　嚊ア、油の値が上がつた。

ろく　大分早い湯だの。

喜兵　イヤ、いま湯屋で、若い奴等が喧嘩をして居たから、小面倒だから入らずに來た。

ろく　そりやアよかつた。こんな時、板の間でも挊がれちやア、それこそ大變だ。

喜兵　酒は買つて來た。

ろく　肴は何だ。

喜兵　あそこの内に何があるものか。

ト竹の皮を廣げ

いつも變らず田螺の木の芽サ。

ト火鉢へ德利を突きこんで燗をして居る。四ツ竹節になり、上手より久作、以前の形、荷を擔ぎ出て

ろく　久しいものだの。

久作　アイ、廿四を五匁おくんなさい……なんだ、酒が始りますな。肴は何だな。

喜兵　肴は田螺の木の芽あへサ。

久作　田螺よりは、嫁菜のおひたしが何よりだ、如何だね。

喜兵　ナニ嫁菜か。嫁菜も[illegible]見せな。

久作　たつたこれだけだ。

ト喜兵衛取つてちよつと見て

喜兵　このやうにいけねえ、こんな青ッ葉は、向うの土手にいくらも生えて居るワ。

久作　その代り値が[illegible]。

喜兵　只でも否だ。

久作　アヽ、御縁が無いね。

ト荷をしよふと、上手より[illegible]、[illegible]を地へ出て来て

[illegible]　姐さん、先刻頼んだのはこれだ。御面倒ながら、着られるやうに直しておくんなさいまし。

ろく　オイ／＼、明日の晩取りに来ねえ。

ト久作、顔を見て

久作　モシ／＼、[illegible]さん、髪ばかりだが、お二つと一つやつておくんなさい[illegible]。

[illegible]　もう日暮れたが、[illegible]親方、ちつと爰を貸しておくんな

さい。

喜兵　オイ〳〵。

久作　それは有り難い。暫くお借り申します。

龜　さうは云ふものゝ坐る處が無い。

ト見廻して、早桶の上に懸けてある筵を取て來て敷いて

久作　モシ〳〵、そりやアノ行倒れの上に、かゝつて有つた筵ではないかな。

サア、この上へ來なさい。

龜　何でもいゝ、日が暮れるわな。

久作　それでもどうか氣味が惡い。

龜　エヽ、よくいろ〳〵な事を云ふ人だ。早く來なさい。

ト無理に坐らせ、髮を解かすとて、よく〳〵見て

お前、田舍の人だの。そして見りやア、頭に疵が付いて、オヽ、さうして半纏も破れてあるし、

こりやお前、如何したのだ。

久作　こりやアお前、今日柳島で、江戸の人といさかひをして、打たれましたのサ。

[illegible] そりやア又どういふ譯で。

ト數を繰りながら云ふ。

久作 その譯といふは他でも無い事さ。わしが持つて居る嫁菜を買はうと云はつしやるから、嫁菜は外へ賣つてあるから、賣られないと云ひましたら、それが曲事だと云つてお前、此やうに打たれました。

[illegible] ハテ、無法界な奴があるものだ。さうして、打たれたの[illegible]も破られたりして、只齒ぎしりして歸つたのかえ。

久作 イエサ、そこが人に人鬼は無いもので、後接に入つた人が金堂歩と、打たれた所の日影の楠を出してわしにくれた。それを貰つては氣が濟まないからお前、段々辭退したらば、わしを打つた男が、なんた貫はにやア叩き殺すと

ト仕方する。鶴、被綿ひの中から見ひ入れ。

[illegible] コレサ、靜かにしないさ。聲が聞はれない。

ト引摺入る。

久作 聞きなすと云ふに依つて、一兩な貫つて來ましたが、

ト此うち喜兵衛お六、酒を呑みながら聞いて居る。

龜　そんなら半纏の破れた代り袷を貰つて、頭の膏藥代に壹歩か。そりやアよかつた。その金で思ひ入れ、膏藥を買つて付けるがよい。

久作　何を云はつしやるやら。壹歩が膏藥貼つたらば、面中が膏藥だらけになりますワ、ハヽヽ。今聞けば爰のおかみ樣は、針仕事をなさるさうだが、さうかな。

ろく　よい物は出來ないが、木綿物ならしやすよ。

久作　そんなら、わしが貰つた袷を、わしが身に合ふやうに、縫ひ直しておくんなさいまし。

ろく　急ぎでなくば置いてお出で。

龜　ソレ、髮も出來た。

久作　忝うござります。

ト端錢を出し

髮結ひさん、これで負けておくんなさい。

龜　なんだ、錢が十七八文はかない。

久作　田舍者だ、負けて置いておくんなさい。

鯰　イヤ、飛んだ目に逢はせるぜ。

久作　時に、わしが貰つて來た袷を見せませう。

ト荷の中より袷を出して

これだ〳〵。

ト鯰取つて

鯰　イヽ、ドレ〳〵。こりやア好い縞だ。そして、まだ符牒が付いて居るヮ。

トよく〳〵見て

鯰　ハヽア、こりやア淺草の瓦町、油屋の流れ物だ。

久作　淺草の油屋とは、アノ瓦町の油屋太郎兵衛さまの事かな。

鯰　さうだ〳〵、油太の流れ物だ。

久作　瓦町の油屋ならば、若旦那の奉公先、さうとは知らず氣の毒な。

鯰　ほんに、瓦町といへば、善六どのに頼まれた事、明日は是非とも仕かけて行つて……モシ、親方、鬢盥を明日の朝まで置いておくんなさいまし。

喜兵　そこらに置かつし。

久作　わしもその袷、早くお頼み申します。

ろく　二三日中に取りにお出で。

久作　出がけに來ます。

ト兩人左右へ入る。四ツ竹節、喜兵衞お六思ひ入れあつて

ろく　この半纏の破れたも

喜兵　額に疵のあの男。

ろく　打ち叩かれたその代り

喜兵　貰つて來たるあの袷。

ろく　これを證據に強請つたなら

喜兵　催促受ける百兩の

ろく　金のあがきも

ト兩人顔見合せ

喜兵　灯りを付けや。

ト、ゴンと時の鐘響き、合ひ方になり、お六奥へ入る。喜兵衞こなしあつて、鬢盥抽斗より剃刀を出

し、合せる事あつて、下へ下りて冠つたる手拭を取り、肩にかけ剃刀を口に啣へ、尻をからげてきつと見得。これより棺桶を轉ばし、中より久太が死骸を引出し、前髪を剃り落し、合せ砥にて額へ疵を付けるところへ、お六灯りを付け出て

ろく　アヽ、用心の悪い、頼まれ物の袷、ドレ、仕事にかゝらうか。

喜兵　イヽヤ、そりやアいゝからこうして置け。

　　トお六これにて死骸を見付け

ろく　そりやお前、死んだ人ぢやアねえか。

喜兵　やかましいわえ。

　　ト押へる。この時非人市、上手より出かけ、窺ひ居し

市　死人をどうする。

　　ト出るを突廻して早桶の蓋にてポンとあてる。且また早桶へ入れ

喜兵　喝ア。

ろく　喜兵衞さん。

喜兵　氣を付けろ。





ト繩さばきをする。お六行燈を吹消す。とたん、木の頭、喜兵衞、柝か繩にてからげる。お六あたりを窺ふこなし。

よろしく拍子　幕

二幕目

瓦町油屋の場
同奥座敷の場
同裏手の場

役名――油屋娘、お染。同丁稚、久松。喜兵衞女房、土手のお六。お染母、貞昌。山家屋清兵衞。油屋太郎七。同番頭、善六。同手代、九介。同丁稚、久太。同下女、お園。鈴木彌忠太。百姓、五百崎の久作。鬼門の喜兵衞。

本舞臺、三間の間、常の二重、上の方落間、正面暖簾口、帳箱、狀差質札を夥しく結び下げ、押入れ帳簞笥など書割りよろしく、下の方落間に油樽澤山並べ、この後より藏の鉢卷、丸に油といふ字の印を見せ、よき所門口、本庇をかけ、山形に油といふ暖簾一面にかけ、蹴込みは鐵物打つたる上り框、

鐵網の蹴込みにして、二重上手は障子屋體、すべて淺草瓦町油屋の店。爰に二重上手に太郎七、帳場格子の内に帳簿を控へ、勘定をして居る。舞臺に善六、前垂れがけにて帳を扣へて居る。九介、質を絡げたりして居る體。角兵衛獅子の鳴り物にて幕明く。

善六　その次。

太郎　三千百七十壹喜助九八棧留縞給元金壹歩と四百文。

善六　アイ。

　　ト合判する。

太郎　七千四百六十五番傳兵衛久七元金貳分蚊帳と單物三品の口。

善六　アイ。

　　ト判を捺す。と仕出し出て

仕一　オイ、油を一合。

九介　アイ〳〵。

　　トつぐ。

仕一　價の錢二十四文、下さい。

九介　アイ〳〵、ソレ、先の一合。

仕一　ソレ、三拾四文。

ト置いて入る。

九介　ハイ、荏の油。

仕一　おつとしよ。

ト持つて入る。

善六　コリヤ〳〵、九介、大儀ながら、おぬしは油會所まで行て來てくれ。

九介　畏りました。そんなら行て參りませう。

ト合ひ方になり、橋がかりへ入る。

善六　伯父御樣、ちと代りませう。

太郎　最前からほつとした。ちと休まうか。

善六　茶でも入れさせませう。

ト唄になり、向うより山家屋清兵衞に丁稚付いて出て來り

清兵　わがみは大儀ながら、一ぺん歸つて、後方迎ひに來てたも。

丁稚　畏りました。

　　ト引返して入る。清兵衛門口へ来て

清兵　イヤ、山家屋清兵衛でござります。

　　ト入る。

善六　これは〱、旦那様にはようこそ。マア〱あれへ。

清兵　御免なされ。

　　ト二重へ通る。

太郎　ヤレ〱、清兵衛さま、ようこそ〱。マア〱、お変りも無うておめでたうござります。

清兵　ハイ〱……これは番頭どの、精が出ます。ナニ伯父御様、この間は勝れぬので、暫く御無沙汰いたしましたが、貞昌さまにも、変りなうお暮らしなされまするか。

太郎　有り難うござりまする。随分息災で居りまする。

清兵　店の方には番頭どの、貴様のいかいお世話でござるの。

善六　これは旦那様の痛み入りました御挨拶、女儀はかりのこの内、後見なさるゝ伯父様は別宅なり、内を預かるは私し一人、それにアノ玄三郎さまも深川通ひで

太郎　これ／＼善六、清兵衛さまの手前、云うても云はいでもの事を。

ト思ひ入れ。

善六　イヤモウ、一向厄體でございます。

太郎　コリヤ／＼、清兵衛さまのお出での樣子を、貞昌どのへお知らせ申せ。あのお染も、御挨拶に連れておぢや。

若者　ハイ／＼、畏まりました。

ト若い者奧へ入る。三人捨ぜりふの内、合ひ方にて、奧よりお染、猫を抱いて、お園付いて出て

その　清兵衛さまのお出で。ソレ、御挨拶をなされませ。

そめ　清兵衛さま。ようお出でなされました。

清兵　これは／＼お染どの、いかう顏の色が惡いが、風邪でも引きはさつしやらぬか。但し持病か。

善六　イエ／＼、お染さまは御持病でもございませぬ。この頃は、いかうさかりが付きまして……イエサ、あの猫めに、あの女猫がぐう／＼／＼／＼と鼻を鳴らせば、内の子飼の男猫めが、ぐう／＼と云うて、藏の二階や物干で、間がな隙がなさかります。あの猫めが、ハヽヽヽ。

ト お染に當てゝ云ふ、皆々思ひ入れ。

清兵　イヤ、こりや番頭の云やる通り。併し鼠の爲には、あの猫が居ぬと、第一用心が悪い。番頭の善六は、中々はこの家の白鼠ぢやて。

善六　左やう〳〵、この番頭の善六は、お家一番の白鼠でござります。

清兵　イヤモウ、その鼠にも油斷がならぬ。昔と違ひこの頃は、いかう白鼠が殖えて、家内の中を暴れ歩き、藏の網戸や金箱の錠などを、齒ぶしにかけて齧り居る。よもや飼ひ置く白鼠ではあるまい。こりやたゞの鼠であらうと油斷させ、悪さをするが白鼠、後には主人へ損をかけ、引きおひ取込み駈落ちして、身のたゝずみの成らぬ時は、命も終に梯落し、極樂落しも天の網、主ある女に大膽な……イヤサ、厭味銀山食はぬ用心、白鼠ほど油斷がならぬて。

善六　成る程、聟様の鼠の講釋、お染さま、何と面白い事ではござりませぬか……ほんに、お前様の御病氣の樣子、清兵衛さまに、見ておもらひなされませ。

その　ほんに、聟様に、ちよつと見ておもらひなされませ。

そめ　それでも清兵衛さまが、お醫者様でもあるまいし。

清兵　イヤ〳〵、そりや大事ない。この清兵衛は藥問屋、醫心もあれば、ドレ〳〵、脈を見て進ぜう。

太郎　それ〳〵、みておもらひ申したがよい。

ト お染否がるを、お園無理に此方を向かす。お染是非なく手を出す。清兵衛脈を見る。

善六 よう〳〵、聟様に脈を見てもらうて、嬉しさうな顔わいの。エヽ、アタ腹の立つ。

トこなし。清兵衛こなしあつて

清兵 右の陰脈小弱にして、寒熱無き時は慥かに妊娠。

トお染悧りして手を取る。皆々清兵衛へこなし。

アヽイヤ、伯父御様、何にも變つた事はござりませぬ。貞昌どのにもお話しなされ。決してお案じなされる様な事ではない。ほんの時候のあたり、差したる儀ではござらぬ。

トお染を見て

たゞ朝夕の忌み物差合ひ、云はゞ婦人の大役ゆゑ

ト思ひ入れ。

そめ 緩りとお話しなされませ。

ト唄になり、ツイと奥へ入る。お園も奥へ入る。直ぐにこの唄にて向うより、髪結ひ龜、廻しの源太序幕の役、三味線を擔ぎ出て來て

龜 コレ〳〵源太、てまへとおれと行くはいゝが、跡でれこさはいゝか。

源太　それは細見の香園の、善六が承知して居るから、氣遣ひ無いわえ。

總　それさへよけりやよいが。

源太　マア、行きやな〳〵。

　　ト兩人本舞臺へ來て、思ひ入れあつて內を覗き

奇妙だ〳〵。今が講兵衛の家に居るところだ。

總　やらかせ〳〵。

　　ト源太少し聲高さになる。

〽おゝん戊亥の天王なり、これはこの度評判の、生丁稚の色事を、委しくこれを尋ぬるに。

　　ト此うち善六思ひ入れあつて

善六　コリヤ〳〵、商人の店先で、門が違ふ。通れ〳〵。

　　ト總こなしあつて

總　それでもお前が下さいと云つて

善六　ハテサ、サア、すつと通れ〳〵。

　　ト目交ぜ。兩人行かこみ

龜　成る程、通れと云ふなら、ずつと通らうかい。

源太　さうだ〳〵。物貰ひを通れと云ふからは、通れ〳〵。

龜源　御免なさい〳〵。

ト内へ入る

善六　コリヤ〳〵、此奴等は何だ。物貰ひが内へ入るとは、こりや外を通れと云ふ事だワ。

ト突出すやうにして引入れる。

龜　何の事だ〳〵。通れと云ふから通つたのだ。

源太　何ぞお好みかな。

龜　知れた事だ。通れとあればお好みだ。一番やらかしやせう。

源太　始めろ〳〵。

龜　調子はいゝか。

源太　合點だ。

ト合す。

龜　これはこの度の新文句、お染久松浮名の白絞り、四ツ竹節の始まり〳〵。

ト四ッ竹節になり、始終太郎七、清兵衛へ気の毒なる思ひ入れ。清兵衛知らぬ顔してこなし。善六思ひ入れ。

〽変に虫の町の名も、瓦町とや油屋の、独り娘にお染とて、年は二八の振袖に、内の手代は久松と、思ひ〳〵の寝油に、親たちや夢にも白絞り、紋の重なたる振りの袖、藤花の蓮の玉の露も、やがて消え行く有明の、どう辛抱をして見ても、どうでしまひは心中物、南無はんと謹み敬つて申す。

ト読みしまふ、太郎七こなしあつて

太郎　これはしたり善六、清兵衛さまも聞いてござるに、あの様な物貰ひ、早う去なしてしまやいの。

清兵　イエ〳〵、申し伯父御様、大事ござりませぬ。折も折とて、この清兵衛が来合せたこの店先、これ聞けがしの祭文は、定めしこれは私しへ、馳走でも呼ばれた人か。なう、番頭どの。またあの謎を聞きませうか。

善　へイ〳〵、またこの謎が、面白うござります。

太郎　コレ善六、早う去なしてしまはぬかいの。

源太　お前のなさるやうに。

善六　イヤ、もうよい。

龜　それでも跡を。

善六　ハテサテ、もうよいと云はゞ、行け〳〵。

ト爭ふ兩人を門へ突出し

ドレ、手の內と巾着の、錢は一錢二世の緣。

ト淨瑠璃を語りながら錢を一文やる。

龜　何だこりやア。

善六　ハテ、何も彼も胸にある。行けと云うたら、歸れ〳〵。

ト龜、ぼやき〳〵花道へ來る。

源太　龜公、番頭がいくら寄越した。

龜　いくらのかくらのと、二人にあの位ゐ喋舌らして

源太　いくらだ。

龜　たつた一文。

源太　なんだ、二人の中へたつた一文。そんなら二つに割ると一人前が、きなか宛にはか當らないな。

[illegible] 解つた。こりやアてめえやおいらを、江戸ッ子だと思はねえのだ。
源太 そりや又なぜ。
[illegible] ハテ、きたない者だと云ふのよ。
源太 おきやアがれ。
　ト喧嘩になり、両人向うへ入る。九介出て
九介 只今帰りました。申し番頭さん、会所から云ふには、お前が来てくれぬと解りにくい事があると云うて居りました
喜六 ヤレ〳〵それは難いとか。清兵衛さま、御覧じませ。何ぞと云ふと番頭々々と、明しい隙はござりませぬ。左様ならば行て参りませう。清兵衛さま、緩りとお話しなされませ。
　ト喧嘩になり、羽織を引つかけ出て、暖簾へ入る。奥よりお園出て
その 清兵衛さまへ貞昌申しまする。少とお話しもござりますれば、居間へお通りなされて下さりませ
　との事でござります。
清兵 左様なら奥へ参つて、お話し申しませう。
太郎 左様なされませ。

清兵　そんなら伯父御樣。

太郎　清兵衞さま。

清兵　サ、御案内賴みます。

ト唄になり、清兵衞お園奥へ入る。この唄にて向うよりお六、風呂敷包を提げて出て、直ぐに門口へ來て

ろく　瓦町で質商賣をなされまする油屋さんは、こなた樣でござりますか。

九介　ハイ、油屋は此方でござりますが、お前はどなたでござります。

ろく　ハイ、私しは少と用事がござりまして

ト思ひ入れ。

九介　ハア、、なにかえ、質でも置きにお出でなされましたか。また出しにでもお出でなされましたか。

ろく　イエ、左樣なものではござりませぬ。少と見てもらひ申したい品がござりまして、參りました者でござります。

九介　ヘイ、左樣でござりますか。

太郎　エヽ、何を麁相を云ふぞい。

九介　これは大きに無礼を申しました。マア〳〵、お通りなされませ。

ト　お六よき所へ居る。

ろく　左様なれば、御免なされて下さりませ。

九介　さうして見せる物とは、どの様な物でござります。

ト　お六風呂敷より袷を出し、

ろく　この品は、あなたのお店から、出ました品でござりまするか。ちよつと御覧じて下さりませ。

ト　九介ちよつと見て心得ぬこなし。

九介　モシ〳〵伯父御様、こりやア昨日柳島で、田舎の者に遣つた袷ぢやござりませぬか。

太郎　ほんに、このやア昨日の嫁菜売りにやつた。これを持つてお出でなされたお前は。

ろく　これはマアあなたには、初めてお目にかゝります。私しは葛西領に居りまする者でござりますが、お話し申せば長い事、何を隠しませう、私しには正直な弟が一人ござりまする。この頃は江戸へせんざいを催ふて出商ひ、夜前帰つて申しますには、今日柳島でツイした事が云ひがゝり、僅ながらも前に貰、古半纏も此やうに、引裂かれたはほんの災難、先のお方もよく〳〵に、気の毒に思し召してか、この袷と金子を百疋、當座代ぢやと仰しやるゆゑ、事無う済して帰つたと申し

ますれど、姉のわたしが存じますには、イヤ〳〵さうではない、ひよつとした出來心で、人樣の物橫道に、身貧なゆゑにツイふつと、盜む所を見付けられ、もし打擲に逢うた事かと、いろ〳〵と尋ねますれど、コレ姉樣、どうしてマアそんな事をと申しますれど、有やうはこれが苦勞になつて、夜の目もろく〳〵臥りませぬほどの事。御存じならば御遠慮無う仰しやつて下さりませ。

太郎　エヽ、その事でござりますか。それはお前の弟御の云はれる通り、少つとも違ひはござりませぬ成る程昨日柳島で、爰に居るこの九介、田舍の若い人に、ツイした事が云ひがゝりになつて、何か通りの人と一ツになり、ぶつと云ふも仰山なが、少つとばかり叩きましたゆゑ、その袷と金子を進ぜましたは、私しでござります。

ろく　左樣でござりましたか。さうとは存じませず、まだ御挨拶も致しませぬ。その節はいかいお世話樣でござりまする。

太郎　イエ〳〵なんの。それと云ふも、この九介が短氣ゆゑ。

九介　時のはずみと云ひながら、云ひ募つたが喧嘩の始り、それで思はずツイ疵を

ろく　付けなされたはほんの災難。そんなら少しは打ち叩きも

九介　サア、打つぢやアないが分けるとて、肩の破れた半纏も

ろく　その代りおやしと弟へ、遣はされたるこの袷、何やら符牒が付いて居りまするが、これはお家の御印形でござりまするか。

太郎　成る程、これでござります。

ト判箱より仕切判を出し

これ〳〵、即ちこの判でござります。

トお六取つて見て

ろく　左様なら念の爲、ちよつとお見せなされて下さりませ。

ト引合せ、符牒と較べて見て

左様ならば、いよ〳〵この判は、お前のに違ひはござりませぬか。

太郎　なんの違ひがござりませう。さて〳〵お前の弟御は、若いが正直な人でござる。

ろく　その正直と申しまするゆゑ、常から多病なあの弟、打ち打擲に逢うたもの。

トきつと云ふ。兩人思ひ入れ。お六氣を替へ、こなしあつて

お禮に連れて參りやしたから、ちよつくら逢つて遣つておくんなさいまし。

太郎　エヽ。

暑



中



ト思ひ入れ。トお六門口に倚りかゝり、向うを見

ろく　オイ、此方の內だよ。

ト招く。向うより喜兵衞、厚袍の上へ木綿羽織、素足の尻をからげ、頰冠りをして、跡より四つ手駕籠を吊らせ、出て來て

喜兵　嚊ア、爰の內に違えねえか。

ろく　符牒の判とこの印形が同一だと、向うに居なさる番頭さんか、旦那か知らねえが云ひなさるから、まんざら違えもあんめえわな。

喜兵　コレ、駕籠の衆、大儀ながら、その駕籠を舁込んでくんねえ。

駕舁　合點だ〳〵。

ト內へ舁込む。此うち太郎七九介悄りし、呆れて居る。

太郎　コレ〳〵、滅相な、人の內へ

九介　駕籠を舁込むといふが

喜兵　やかましい。ぶちまけろ。

ト駕籠を橫にする。中より久太の死骸出る。

五九　ヤア／＼＼。

ト捫り、駕籠の者門へ出る。

喜兵　御苦勞さま／＼、また後に迎ひに來てくんな。

駕籠　ハイ／＼、駕籠は置いて參ります。

ト兩人入る。

喜兵　御免なさい。

ト門口を入り、草履を取る。

サヽ、好い内だ。

ト四枚の屏風を繞らして居る。太郎七、丸合羽へ入て居る。

娘ア、茶を一杯貰つてくれ。

ト草履を脱ぎ置き、上り端にて坐る。

ろく　ヲヽ、お前、御主人でも茶を一つお淹れ申し。モシ、序に煙草の火も點えよ。

ト兩人を見り返へ回る。

喜兵　嬉しや、この年寄りは、まよみマタ／＼ですと、茶を一つくんなよと云ふ所から。火は貰ふのかな。

ト煙管を抛り出し

エヽ、火の用心の好い内だの。

九介 ハイ、お茶莨盆。

ト顫へながら莨盆を直す。太郎七思ひ入れあつて

太郎 モシ、弟御を連れて來たと云はつしやりますが、こりや死んで居る人ぢやござらぬか。

ろく アイ、死んで居りやす、死んだのサ。あんまり死にたくもあんめえが、お前方が寄つてかゝつて、撲き殺しなすつたのだ。人間一人ぶち殺して、アノこれかえ。イヤサ、人を一人殺して置いて、古袷たつた一枚、金ならたつた壹歩と、爰のお店ぢやアどなたが相場を極めなすつたか知らねえが、そのお方に逢ひやせう、お目にかかりてえね。サア、爰へ出なさい、逢はうわな。エヽ、イケあつかましい手合ひぢやアねえかの。

喜兵 コレ、靜かに云へ。爰の内は質屋だから、くどきが利かねえで、何の彼のと云ふやうで外聞が悪い。靜かにしろえ。

ろく それだつて、わつちが大事の弟を殺されたから、悔しくつて〳〵、いつそ腹が立つてならねえわな。

喜兵　いゝわえ、てめえの敵し、弟なら、おれが敵にも敵だ。敵はおれが取つてやらア。

ト煙管をしまひ

モシ、家の町内にも五人組があるだらう。家主は何處だえ。逢ひたいものだ。呼んでおくんなせえまし。但しはおれが方から行くか、どうするのだ。

太郎　ハイ〳〵〳〵、この町内にも、家主もお役人もござりますれど、まづ家内の者にも相談に及び、それからあなたへ御返事に。及びまするでござりませう。

喜兵　なんだ相談だ。こいつはもつと解りかねる。喚ア、ちよつくら行つて來るから、何處へも行かずに待つて居ろ。

ろく　何處へ行くものかな。

喜兵　ドリヤ、行つて來やうか。

ト出かける。奥より清兵衛出かけて

清兵　アヽ、イヤ〳〵、ちよつとお待ちなされませ。

喜兵　わしが事かえ。

清兵　御様子は解りませぬが、町役人へ願ふ程の事あらば、其の様子を聞いた上、でんどへ出すとも

出さぬとも、そりやお前方の料簡次第。裏店小店の獨り者、輕い身分の者でもなく、店を預かる油屋太郎兵衞、今は後家ぢち女主、相手にならぬか知らねども、斯う云ふわしも遁れぬ親類、何か樣子をとつくりと、わしに聞かして下さりませ。

喜兵　成る程、お前はちつと譯が解りさうだ。嬶ア、此方へ來や。

ト　お六と入り代り

その譯といふのは、こりやアわつち等に聞きなさらねえでも、あの手合ひに聞きなさりやア解る事た。高で斯うだ。昨日柳島で菜賣りの野郎を、打ち殺したが喧嘩の始りサ。

清兵　すりや昨日柳島で

太郎　イヤ、その譯は斯うでござります。昨日柳島で、爰に居る九介が、其お方と、些細の事の云ひ上がり、何が通りの者が一緒になつて、その菜賣りどのを、打つと云へば仰山なが、一つ二つも打合ふ所へ、佐四郎どのが來合せて、膏藥代と金壹歩、また半纏の破れた代り、あの袷を遣りました。その時には隨分達者な若い人が

喜兵　モシ〳〵、そこがあの野郎が間拔だから、打たれた時に死にもせず、内へ歸つて苦しいと云つたが、この世のお暇乞ひサ。

清兵　盧る時、ボッテ下闇の入りましたが、申さば一旦事を済まし、その跡での事なれば、こりやァ稍
　死いにすればこし目黒、それみな今夏見や斯う云はつしやるは、どうやら猥語がましう聞えて
ろく　キッ〳〵御供だえ、猥語がましいよ。エヽ、よしてもおくれ。なんぼしがね、暮らしでも、小商講
　讃りをするやうな、そんなわつちぢやァねえよ。これでもお職吉原の、土手に住つたその時に
　やァ、小見世の客を引手茶屋、土手のお六と云はれたやァ、素見手合ひに立引いたか、今でこそ
　それも不仕合せ、小商代に丸尺見世、夫主は江戸へ手間仕事、嬶ァは内で洗濯や、嬶ァ理早
　と洗濯の、云はゞ真田打ち同人だ。そんな嫌味のあるのぢやァ無えよ。宮兵衛さん、こりやァ、
　出る所へ出にやァ済らねえぜ。
宮兵　黙つて居ろ……キヽ、そんなら如何でも、済らねえと云ひなさるのかえ。
清兵　それはさ、打たれて死んだ事やら、又は病死した事やら、その儀には医者どのにも
宮兵　ナイ、かけやしたぁ。そのやすその、嬶ァが大事の命だものを、まつ不意外科鍼醫、しかも御殿
　醫だ。おらが内はひつくの迷子様だ。みそでもたつ〳〵お断りだ。
清兵　それに就の事、さりながら、わしも商売に寄説、疑心もあれば、念の為死人の臓を
宮兵　よしなせえ。冷え固つて居るものを、ふたつてどうなるもんだ。

清兵　サア、そこが野夫にも功の者、心ゆかしに、ちよつと見せて下され。

喜兵　そんなら如何なりと勝手にするがよい。

清兵　ドリヤ、脈を見ませうか。

　　　　ト清兵衛こなしあつて、死骸の傍へ坐り脈を見る。此うち太郎七、帳箱より金の包みを持つて出て

太郎　段々のお腹立、重々御尤もでござります。今更どのやうに致しても、あの弟御の蘇生さつしやる事はあるまい。又この上でんどへ出して下さりますと、この油屋の身代にも係ります事でござります。誠にこれは甍りがましうござりまするが、この金、とサア云へば御山なが、これで石碑なと買うて、弔ひでもして進ぜて下さりませ。

　　　　ト出すをお六見て

ろく　なんだ。金かえ。

喜兵　默つて居ろえ……さうしてこりやア、いくらござります。

太郎　ハイ、十五両ござります。

　　　　ト喜兵衛思ひ入れあつて

喜兵　マシ、十五両位な目腐れ金で、人の命が買はれますかえ。

太郎　成る程。

ト太郎むちむち\/しながら、また帳箱より金を出して来て

左様ならば都合三十両で

ト喜兵衛思ひ入れあつて

喜兵　待ちなさい、百両の元にして、利が四月でカウツ……イヤ\/、こんな事ではナア嚊ア。

ろく　さうさ、わつちが方にもざつと百両いるよ。

喜兵　ヤレ旦那、とても三十や四十の端金で、人の命が買はれますかえ。また買はれるならばわつちやア買ひ人だ。ほんの事だが仕込ンでおいて金儲け、命の問屋の口開き、始めてこんな商賣を、きいて鬼門の喜兵衛といふ、しらきらやうめんな商人だ。此奴はあんまり儲りさうもねえ。此處には一番惚れながらも、喰はさにやならねえわえ。

ト下座より善六戻つて来て

善六　只今歸りました。

ト入る。

太郎　コレ\/善六、わがみの知つて居やる嫁の實家が、死んだというてあの衆が

ト善六悄りして、

善六 何ぢや、嫁菜が死んだ。嫁菜が死んでは大變々々。それでは肝心の折り紙が道なし。ヤアく。

ト慌てる。九介始終顫へて居る。

九介 番頭さん、お前ゆゑに喧嘩をしたが、此奴が死んだら、わしは解死人に出にやァ成らぬわいの。

ト慌てる。此うち清兵衞脈を見て居る。

清兵 アヽ、イヤく、善六どの、其やうに慌てまい。今の樣子では、ろくく死切つたとも云はれぬ。

わしが祕法の大寶丹、屆かぬまでも用ひて見やう。

ト印籠より藥を出して久太が口へ押込み

斯うやつて、灸がよいく。

善六 お頼み申しますく。此奴が死ぬると肝心の、藁苞の行くへも……灸を据ゑませう、九介手傳へ。

九介 合點だく。此奴が死ぬと、わしやァ解死人だ。

喜兵 コレく、死んだ者に灸をするたつて何になるものだ。疵を付けずとよしにしなせえ。

ろく 喜兵衞さん、打つちやつて置きなさい。灸をするて生返らねえ時は物が云へるわな。

ト太郎七清兵衞善六九介捨ぜりふにて、久太が腹へ大きな袋艾をすゑる。善六扇にて煽いで居る。

在郷唄になり、向うより久作、籠に梅と桃の花の咲さしを挿し、持つて出て来て、門口にて

久作　御免なさいまし〳〵。

ト太郎七これを聞いて

太郎　ヤア、[illegible]が来た。

九介　[illegible]明日来さつしやい。

ト又[illegible]をすゑて居る。

太郎　ヤア〳〵、何と[illegible]、買つて上げい。

九介　滅相な、[illegible]。

ト門口へ出て久作を見て、恟りして、

ヤア〳〵、お前は昨日の[illegible]売りではないか。

久作　ハイ〳〵。左様でござります。

九介　違ひなし〳〵、其方を向いて見たり。

ト久作に後向かす。九介[illegible]がり

[illegible]〳〵、[illegible]……[illegible]〳〵、[illegible]

ト内へ入り

モシ〳〵、來やした〳〵〳〵。

ト無理に引ッ張る

善六　エヽ、やかましい、何が來たのだ。

ト矢張り煽いで居る。

九介　イエサ、昨日柳島で打ち殺した嫁菜賣りが、また一人來ました。

ト無理に引ッ張つて表へ連れて出る。喜兵衛お六思ひ入れあつて、片脇へ寄つて煙草をのんで居る。

善六、久作を見て

善六　ヤア、こなたは昨日の嫁菜賣り。ヤア〳〵、そんなら達者で……好く來てくれたな。ソレ〳〵、九介、お茶を上げい〳〵

九介　ハイ〳〵〳〵。

ト茶を出しながら

ハイ、お茶をおあがりなされませ。

ト久作思ひ入れたこなし、門口にて茶を取り思ひ入れ、善六内へ入り

善六　ヤレ〳〵、嫁菜が生きてさへ居れば、薬包の行くへ。それに何ぢやと、この牛の骨か馬の骨を、
嫁菜賣りおやの何のと

ト この時久太の顔をよく見て

待て〳〵、此奴が面は、どうやら見たやうな面ぢやが。

太郎　さう云やいは、おれも見たやうな。

九介　わたしも覺えのあるやうな顔ぢやが。

清兵　家門の衆が見たとあれば、わしもどうやら覺えの死人。

ト 考へて居る。此うち久作うちへ入り

久作　さてはや昨日は段々と、お世話様になりました。

ト 云ふ内太郎七、久作を見て

太郎　まア、こなたは昨日の嫁菜賣のどの、好う來て下さつたの。

久作　ハイ〳〵、昨日は油屋の宿で御亭様とも存じませず、段々のお世話様、お買ひ申しました値も、頂戴を
話しに逢はしまして、出來ましたなら引ッ張つて、お禮に參りませうと存じましたが、此方のお内と
いふ事を、宿に付けた言葉から聞きまして、昨日お買ひ申しました嫁菜、松本屋の旦那へお返しな

されて下さりませ。知らぬ事とて私しは、子飼の丁稚久松が、受け判を致しました、五百崎の久作でござりまする。

ト此せりふの内お六思ひ入れあつて

ろく　子飼の丁稚久松とは、そんなら爰が若旦那の

ト久作、お六を見て

久作　お前は昨日袷を頼んだおかみさんだの。

トお六術なきこなし。

ろく　アヽ、コレ〳〵。

久作　それでも

ろく　エヽ〳〵……通らねえ煙管だの。

ト灰吹をバタ〳〵と叩く。久作袷を見て

久作　ヤア〳〵、こりや昨日おれが貰つた袷だが

トまた死骸を見て

「ア〳〵〳〵、おいらが破れた半纏を、寐て居る人が着て居るワ。

清兵 アヽ、コレ〳〵、麁相云ふまい。爰に寐て居るは田舎者、昨日これなる丸介が、柳島で喧嘩して、大睨じさまがこの村と、よて身請代の金子、貰つて歸つて可哀や江戸、人といふ者は何時死ぬうも知れぬ。用心さつしやれ。

ト久作、いろ〳〵思ひ入れあつて

久作 最前からの様子は、昔取しが手に懸るのこともとするか、もしや死んだ者の亡といふは、わたしぢやないか。よく見て下さりませ。

ト種々云ふ。

清兵 氣遣ひ召さるな。息引取らぬ死人の體、その上、家情の整明ひたれば

眞六 それ〳〵、生きれば此奴を仕合せ。たとへ死んでも主義の、嬢奕賣りが來たからは、あの香包の行くへも知れて……好う來て下さつた。それに付けても此やうな奴を、嬢奕賣りたの弟らやいのと、大勢の物等、太い奴だ。きり〳〵連れて行きやアがれ。

ト死體を見る。久作ヤツと驚く。皆々偶りする。

皆々 ヤア、死人が唸るワ。

ト引越す。久太郎ずき、目を開き

ヤア、目を明いた。

ト久太、キヨロ〳〵見廻して

久太　ヤア、番頭さん。

善六　ヤア、わりや久太ぢやないか。

久太　番頭さん、エヽ、怨めしい〳〵。

ト頭を撫でて思ひ入れ。

善六　コリヤ久太よ、われは昨日駈落ちしたに、どこを如何して戻つたぞ。

久太　どこをどうとは番頭さん、お前はナア〳〵。昨日お前が駈落ちせいと、金を壹歩下んしたその金で小梅の酒屋で時ならぬ、鰒を思ひ入れ食うた上、葬ひ先の強飯が、よもや餅米であらうとは、知らぬ凡夫の淺ましさ、鰒と餅米戰うて、終に久太は御落命。それから跡は知らねども、撫でて見たれば前髪を、誰が仕業やら剃り落し、野郎頭を見やんしたら、兄と賴んだ番頭さん、定めし愛想が盡きやうかと、それが悲しい〳〵わいの。

ト泣く。

善六　エヽ、措きやアがれ。

太郎　そんならわれが駈落ちは、心から出た事ではないか。

久太　さいの、昨日若旦那の云ひつけで、あの折り紙を

善六　コリヤ／＼久太よ。何にも云ふな。委細は番頭、胸にあるぞ／＼。

久太　それでもお前、食傷をした時は、胸にある物を残らず吐いてしまふと、さつぱりするといふから胸に覚えて居る丈は吐いてしまひやす。

善六　エヽ、いま／＼しい奴ぢや。今の思ひをするならば、先刻の時殺してしまへばよかつたに、生中灸をするたゆゑ

九介　彼方は仕合せ、此方は後悔。

久太　いかいお世話にあづかりました。

太郎　そんならわれが駈落ちは、心から出た事ではなく、殊に今云うた折り紙とは、もしや鎌倉のあの内の

喜兵　その折り紙は牛王義光、三百枚の折り紙か。

太郎　ハテ、こなさん委しうそれを

喜兵　知つて居るのす。知つて居るからあの野郎を、玉に使つたこの仕事、しくじつたら、ナア帰ア。

ろく　ソレ見ねえ。どうでしまひは、こんな事たらうと思つたよ。

太郎　この事を詮議すれば、家内の縺れぢや。われには暇を遣るほどに、九介、請け人へ引渡し、引取りを取つて來てたも。

九介　ハイ／＼、畏りました。

久太　そんならおれは暇が出るのかえ。何の事だ。同じ丁稚でも、あの久松は仕合せ者、おかみ様には可愛がられ、その上アノお染さまと

久作　アヽ、コレ／＼、その久松のおれは請け人、滅多な事を云ふと、子供とは云はしませぬぞ。

久太　そんならお前は久松の請け人か。何にもそんなに叱る事は無い。

九介　サア／＼、歩め／＼。

ト兩人門口へ出て

どうで暇の出た所に、ぐづ／＼して居る事は無いワ。

久太　さうぢや／＼。なんのおれぢやとて内の無い者ぢやなし……とは云ふものゝ

九介　ハテ、くど／＼と斯う來やれサ。

久太　ハクサメ。

ト唄になり、兩人向うへ入る。喜兵衞思ひ入れ。

喜兵 噂ア、しくじつた所にまごついて、暗い所へ行かうより、無駄にして歸らうか。

ろく 大方こんな事だと思つた。夫婦は夫婦でつまらねえ、狂歌を詠んでも引ツ込まれめえ。

ト此うち喜兵衞、最前の三十兩の金を取つて立ち上がる。

太郎 コレ〳〵その金は

ト手を出す。

喜兵 なんだ、この金を如何した……この金はおれが借りて惡いか。

太郎 ムウ。

トつかへる。

喜兵 借りちやァ惡いのか……野郎め、どきやァがれ。

ト久作を睨み倒し、門口へ出る。

久作 そんならそのお前方はお歸りか。ちつとの事で、わしが來やうが遲かつたら、お前方二人の仕事にならうもの。惡い所へわしが來たはつひに大きいの

ろく 金のおがきも

ト駕籠を見て

オヤ、まだ駕籠が有るよ。

喜兵　置いて行くのも盗人に追ひ銭だ。嚊ア、片棒擔げ。

ろく　なんだ、おれが片棒擔ぐのか。あやまるの。

ト喜兵衛先棒を擔ぎ花道まで行く。

喜兵　折角うまく〳〵やつたのに、人の仕事を邪魔家屋の清兵衛とやら、この禮は重ねてきつと。

清兵　云ひ分あらば何時でも尋ねてござれ。夫婦が夫婦で、ハヽヽヽ。

喜兵　コレ〳〵、笑やアがるな。併し岡目から見たならば、飛んだ間抜けな戻り駕籠。

ろく　ととオかかアが辻駕籠を、擔いで入る引込みは、今まであんまり無いてんだ……併し、知らぬ事とは云ひながら、竹川さまの弟御が、奉公先の店とも知らず

喜兵　どうしたと。

ろく　サ、行きねえな。

喜兵　飛んだ判じ物だ。

ト唄になり、向うへ入る。

太郎　これは〱清兵衛さま、お世話様でござりました。併し、いま久太めが云ひをつた、与三郎が折り紙と云うたが、もしや箪笥の内の。アヽ、これにつけても使ひに遣つた久松、もう帰りさうなものぢやが。

清兵　ほんに、先刻にからお店に見えぬあの久松。

善六　イエ〱、使ひに行くと大抵では戻りませぬ。コレ、貴様、久松の請け人なら、少つと云ひつけさつしやれ。これは格別、こなたにはちと折入つて頼みたいと云ふは、昨日の嫁菜位を

久作　嫁菜とはな。

善六　サア、よめ〱、嫁入りなさるゝお染さま。

久作　お染さまが、何とぞなされましたかな。

善六　何ともせぬがアノ久松と……イヤ、斯様の事は縁中にて申さぬ事にて候ふ。

ト謡にて云うて居らす。ト向うより若い者、手紙を持つて出て来て

若者　お頼み申します。私しは松本屋佐四郎から参りました。即ちこの手紙を渡し、同道いたせと申し付けました。

太郎　これは〱御苦労に存じまする。暫くお待ち下され。

トロの内にて讀み

この文言では、多三郎が事について急に逢ひたいとの事。久太が最前の詞といひ、アヽコレ、久松に逢うてから行きたいものぢやが。

ト唄になり、向うより久松、文箱を持つて出て來り

久松　只今歸りました。

太郎　オヽ、待ちかねた。さうしてお屋敷は、まだ退けずにあつたか。

久松　左樣でござります。先樣にもお取込みゆゑ、暫く待ちましたゆゑ、大きに遲くなりました……これは〳〵清兵衞さま、好うお出でなされました……お前は兄の久作どの、何と思うて。

久作　久松さま……イヤ久松、お使ひかは知らぬが、なぜ早う歸らぬのぢや。最前から番頭樣が、戻りが遲いと云うてござつた。なぜ早う歸らぬぞいの。

久松　それでも先樣で、暫く待てと仰しやるゆゑ。

久作　ハテサテ、云ひ譯する手間で、なぜ早く歸らぬ。

清兵　アヽ、コレ〳〵、其やうに云はいでも大事ない。コレ久松、どうしたものぢや。云はゞ兄なり判がかり、請け判の云はるゝ事、たとへ叱られても大事ない。武家方但し、町家でも、内の主の口眞

訳するが番頭の役、この上共に、兄には云ひ譯するとても、必ず番頭の善六には云ひ譯しやんな。

太郎　久松よう／＼、これや／＼久松、清兵衛さまの仰しやる事、必ずともに、よう聞いたがよいぞや。

久松　これは／＼有り難い御意見、この上ともに、嗜みまするでござりませう。

清兵　流石は久松、ハア、聞き譯のよいものぢやな。

喜六　大様でござります。聞き譯のよい者でござります。表は子供のやうに見せかけて、大きな事を仕出し、後には旦那に損をかけ、清兵衛さまの顔まで、立たぬやうにさらすでござりませう。

清兵　コレ／＼喜六、お家の為の清兵衛は、この油屋の主同前、丁稚子供に贔屓の顔、汚されるやうな事があつてよいものか。ナカ／＼と番頭の、いらざる事を云やんないの。

喜六　これは／＼旦様の、お氣に障りましたらば、番頭あやまり入ります。

太郎　コレ／＼久松、この文箱を貞昌どのへ渡して、お屋敷からの返事と云うて持つて行きや。

久松　ハイ／＼畏りました。

太郎　ドレ／＼。わしもこれから行て来ませう。

清兵　聞けば／＼お嬢中しをするところなれど、松本屋から金の催ひ、殊に今評しやつた折り紙とやら

久松　その久判は贋筆の、この久作は存じませぬが、昨日思はず街の門へ、手紙を添へた書き物は、も

しやお店の代物かと、それでわざ〳〵今日爰へ、手紙の名宛ら善六どのへ、多三郎との名宛ゆゑ

善六　それこそ慥かに折り紙に、付いて來たその手紙、そんならいよ〳〵折り紙は……ハヽヽ、これ
久作どの、こなたには少と折入つて

久作　ハヽヽ、この手紙から番頭樣、俄ににこはか御機嫌は、わしが土産のこの藁苞、庭に咲いたを
むくつけに

久松　久作どのが手折つて見えた、藪の椿に庭の桃。

久作　サア、藪の椿も千代八千代、清兵衛さまへ嫁入りの、その花嫁を大膽な……イヤ、花と嫁菜をわ
ざわざと、お袋樣へ。

久松　畏りました。

太郎　わしは今から

清兵　太郎七さま。

太郎　行て參りませう。●

久松　サア、ござりませ。

ト唄になり、太郎七は下座へ、清兵衛に久松付いて奥へ入る。久作藁苞を見せびらかす。善六付いて

廻るをツイと奥へ入る。

善六 何の事だ。昨日は一日あの嫁菜で苦勞をして、今日は嬉しや持つて來たと思うたら、あの久作が久松の請け人なれば、定めてお客様へ渡しをるか。エヽ、いま／＼しい。此奴は一思案せねばならぬわえ。

ト凄き合ひ方になり、時の鐘鳴る。向うより喜兵衛、以前の形にて、思案しい／＼出て來る。跡より彌忠太、着流し大小にて付けて出て留る。

喜兵 いま／＼しい。折角野郎を玉に使ひ、鼻元を取らうか、大金くれるか、二つ一つと思つたに、虻も取らず蜂も取らず。併しあの番頭の善六めは、根生は役に立たねえが、悪い事には抜目の無い奴。彼奴を抱込んで、よし／＼。

ト舞臺へ來やうとする。彌忠太つき廻し

彌忠 おのれ、喜兵衛の大盗人め。

喜兵 なんだ、おれを盗人だァ誰れだ。

彌忠 誰れでもない、彌忠太ぢやワ。

喜兵 オヽ、旦那か。

彌忠　ト逃げやうとするを花道へ捻付け
こゝな大騙り。微なれど元身共が家來、不和なる中の竹川が、召使ひの六と不義いたしたゆゑ、既に手討に致すところなれど、惡い事には念の入つたおのれ、助けて置けば何ぞの役に立つと、助けて遣はしたは大恩だぞよ。その後石津久之進が預かりの、牛王義光の刀を云ひつけて盜み取らせ、質入れいたせと申したれば、その刀を百兩の質に入れ、その金子を横取り致したな。度々人を遣はせば無法の挨拶。サア、その百兩の金はどう致した。只今渡せ、何とぢや。

ト きつと云ふ。喜兵衛面目なきこなし。

喜兵　旦那、段々あやまり入りました。成る程、その金は私しが遣つてしまひました。併し、そのまける中から、善い時も惡い時も、五兩や十兩宛と質屋に積んで置きましたれば、もう僅かでございます。どうぞとてもの事に、斯うなされて下さりませ。お前樣の腰の物を、暫くお貸しなされて下さりませ。

彌忠　何ぢや、身共の大小を貸せ。おのれ、義光を返さぬのみか、また身が腰の物まで取らうとは、うぬ、憎い奴。

喜兵　イエ〳〵、左樣ではござりませぬ。そのお刀と義光の刀と、入れかへと申すにやりますと、義光

い刀を出て参りまする。暫くの間お貸しなされて下さりませ。

彌忠　ムウ、それ程に申す事、よもや間違ひもあるまい。よいワ、貸して遣はすから、偽りはならぬぞ、身が待ッて居るぞ。

喜兵　サア〳〵、お出でなされませ。

ト彌忠太が刀を腰にさし、舞臺へ來て門口を覗き

喜兵　御覽じませ。油屋は大きな住居でござります。

彌忠　成る程〳〵。

喜兵　ちやうど好い間で、喜六一人何か考へて居ります。

彌忠　ドレ〳〵、成る程〳〵。

ト覗くところを喜兵衞、彌忠太を切り下げる。彌忠太聲を立てるところを、口に手を當て抉る。この音にて喜六、戸の隙間より覗いて見て、慄り慄へて居る。喜兵衞、彌忠太を前の井戸へ打込み、刀を納め、窓の方へ廻して、門口を明け、喜六と顏見合せ

喜兵　番頭さん。

喜六　エヽヽヽヽヽヽ。

ト顫うて

こなたは先刻の

喜兵　騙りの喜兵衞だ。

善六　其また喜兵衞が何の用で。

喜兵　請けに來やした。

善六　そりや何を。

喜兵　刀屋の勘吉から、質に入れた牛王義光を。

善六　アノ百兩の利足を添へて。

喜兵　イヽヤ、金は無い。入替へだ。ソレ。

ト尻を向けて刀を見せる。善六取つて

善六　アノ百兩の代物を、これで貸せとは餘ッぽど太い。その太い性根を見込んで、この善六が力と頼み、何かの相談。

善兵　お前さへその氣なら、そんなら是から兄弟同然。

善六　互ひに内外打明けて、頼む手見せは娘のお染。

喜兵　引ッ攫つてくれろと云ふのか。

善六　いかにも左様ぢや。

喜兵　頼みとあれば合點だが、おれもこなたに。

ト囁く。

善六　すりや義光を盜み出し、外でこつそり大金に。

喜兵　首尾よく行けば三分割り。それに付けても誂へてある

善六　その折り紙は多三郎、首尾よく取りは取つたれど、嫁菜の苞で行き方知れず。

喜兵　たとへ折り紙は無くつても、正眞正銘義光の

善六　所在は則ち奥藏に

喜兵　その案内は

善六　番頭受け合ひ

喜兵　盜んで後を

善六　庭に隠のあのお染

喜兵　埋めるしがくの

善六　路用は義光。

喜兵　祝ひに一つ

善六　打つて置け。

二人　ヨイ〳〵〳〵ヨイ。

喜兵　シイ。

ト善六口を塞ぎ、喜兵衞あたりを見る見得。時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、中足の二重舞臺、眞中　中じきり障子を立て、上には床の間、違ひ棚の書割、下は柱際より一尺四五寸の小壁、暖簾口尤も狭くして、柱の見限りにて綟子張り障子二枚立てあり、この障子の内二尺ほど奥へ入れて、箪笥の書割り、尤も抽斗抜ける事あり、屋體は大和葺本庇本絛側付、上手に奥藏の戸前口、石段、戸前に錠卸しあり、尤も人出入り、藏と二重の間丸き柴垣、中に何なりとも冬木をこんもりとさして植込みの體。ずつと下に切り戸口、すべて油屋奥座敷庭先の模樣、爰に六枚屛風立廻してあり、唄にて道具納る。

ト暖簾口よりお園、行燈を提げ出て、あたりを窺ひ、屛風を明ける。内に誂への床を敷き、この上に

　お染、衝立の蔭にて聞いて居る。

その 申し〳〵、お染さま、今宵またお寝間を致しましたは、あのお方に

お染 そんなら首尾して、今宵久松に

その わたしが逢はせます。暫くお待ちなされませ。

お染 何にも云はぬ、その大明神様。

その 滅相な。わたしに罰が当ります。

お染 どうやら恥かしいわいの。

その なんの恥しい事がござりませう。暫く待つてお出でなされませ。

　ト屏風を引廻し、縁側へ出る。ト納戸口より久松、庭下駄を穿き出て

久松 お園どの、わしに用とは、誰れが呼んでござるぞいの。

その 彼のお人が。

久松 滅相な。今宵は家にない、在所の兄貴久作どのといひ、山家屋の旦那も来てなり、それより恐い番頭どの、こんな事を見られたら、大抵の事ではあるまい。怖やの〳〵。

その これは初心らしい。先刻にから待つてぢやわいな。

久松　それでもどうやら。

その　ハテマア、行かしやんせいな。

ト屏風の内へ入れる。

その　靜かにおしげりなされませ。

ト奥にて

貞昌　お染や〳〵。

ト久松屏風より顔を出し

久松　ありやお袋樣の聲。

その　大事ない。わしが好いやうに云うて置くほどに、默つて隱れて居やしやんせ。

久松　それぢやと云うて。

その　ハテ、よいわいな。

ト久松引込むと奥にて

貞昌　お染〳〵。

ト暖簾口より母貞昌、着付羽織にて頭巾を冠り出る。お園、慌てゝ行燈を吹消す。貞昌手燭にてあた

りな見て

これはしたり、その、なぜに灯りを消しやつたぞいの。

その　ハイ、この灯りの消えましたは……ヤ、、、それ〳〵、鼠がたんと油つぎ、行燈が鼠について、そこらだらけが鼠だらけ、怖い油でござりまする。

貞昌　何を云やるぞいの。さうしてお姫はどうしやつたや。まだ起きて居やるこや。

その　ハイ、お姫さまはアノそれ、お腹が痛みまして、私しが只今まで押へて居りましたわいな。

貞昌　なんぢや、お姫は腹が痛い。それなれば早うさう云やればよい事を。そりや大抵の事ぢやない。コレ、其方大儀ながらお醫者樣まで行て、御苦勞ながら只今お見舞ひ下さるやう、たまつてと呼びましておぢや。

その　そんならお醫者樣へ。

貞昌　わがみも一日さぞ疲れたでもあらうに、人使ひの惡いやうにも思やらうが、外の事とは違ひ、病の事は捨てゝは置かれぬ。早う行てたも。

その　イエ〳〵、このお使ひには行かれませぬ。

貞昌　そりや又なぜに行かれぬのぢや。


岩井半四郎


岩井半四郎
松本幸四郎

その　わたしが參りましたら、また跡で、お癪を押へる者がござりませぬ。

貞昌　そりや大事ない。其方の代りに、わしが癪を押へて遣るほどに、早う行て、何なら一緒に連立つて來てたも。

その　それでもわたしは

貞昌　ハテ、行きやと云ふに。

トきつと云ふ。お園、うぢ／＼して納戸へ入る。此うちに喜兵衛、切り戸口より窺ひ出て藏の内へ入る。貞昌屏風を明ける。内に吹替へのお染、搔卷にもたれて居る。

お染や、どうぢや、痛みはちつと快いか。これはしたり、目が覺めて居やるか。アヽ、矢ツ張りさうして居や。なんの母に遠慮があらう。どうでもまだ冷える加減があらう。今お醫者樣へも人を上げたゆゑ、やがてお出でに間もあるまい。その内あれに代つて、わしが撫つて遣りませう、どこぢや、爰か／＼。

そめ　イエ／＼申し母樣、わたしやアノ癪は

貞昌　治まりましたか……コレ、お染や、いつぞはわしが、云はう／＼と思うて居たが、今夜は爰で其方とわしが差向ひ、外に他人も聞く人も、よもや爰には居やるまい。結納濟んで主あるお染、子供でか

らが頼みいしたものとては、何の遠慮でどうるやら。殊に其方の心には、味方のすると請まぬ様子。それとても、無理ではない。さういふ事なら其方の好いた男を持たせ、我は顔を見たけれど、叩を云うても、嫁ぎ遊ばれし夫の遺言、断うばかり云ってては合點が行くまい。いと我が見せい事である。これ見て晴ひ晴らしてたも。ナナ〳〵、冷えぬやうに、

ト師匠やすみ早鐘に時々で暗闇口へ入る。此時、衝立への白出、襖子の内へ出て、当さにて、様の衝立を明けて売り出し、お染を連れて出る。出るも師匠の内より、衝立への衣紋出て、其の衝子を明け、其の内へ入る。此内より手を出して、三方の方を見て、ホッと思入して隠れる。ト床、唄の口切、暫時より衝立の蔭にて静に出て来て

ありました〳〵。染や〳〵。

ト襖を明けて

これや其方も知つて居やる通り文殊の香子、これを其方に見せて、改めて其方の婿を――何じやまで其方に、それ〳〵せずと、大事の事なるや。わしが云ふ事諾いて、とつくりと聞いてたも。其方も知つて居やる通り、わしやこの家へ後妻。兄は聞き及其方が為し先妻の腹、わしとは生さぬ仲ゆゑ、今迄其方のともわしとは、心と心が違うてあれば、其方の人が打寄つて試すれ

るは内の爲、その相談がよからうと云うてなれど、成人した二人の子供へ、氣も知らぬ繼親持たすが見得でもなし、後家を立つるも、また生若いわしゆゑに、年頃したあの多三郎と……得てそんな事云ひたがる、世間の口には戸が立てられぬ。去年の秋このやうに髪をおろしたは、世を樂に早う其方を嫁入らして、初孫の顔見やうぞと、それ樂みに暮すうち、持病の癪と締めて居やる、こりや五月のいはた帶。

ト吹替へのお染ハッと顔を隠す。

サ、何ぼうわしに隠しやつても、娘の其方の事ぢやもの、知らいで何とせうぞいの。そりやモウ、互ひに思ひ思うた仲ぢやもの、添はしてやりたいが、そこが今云ふ浮世の義理、隔てた仲のわしぢやゆゑ、邪慳な者とも思やらうが、家を立てねば先祖へ立たず、清兵衛どのへ娘をと、その遺言も破られず、中に立つ身のわしが悲しさ……と云うて人に騙されて、怖い藥やなぞ服んでたもるなや。其方も、そこらに聞いて居る人も

トこの臺詞の内、切り戸口より久作、網戸口より清兵衛出かけ聞いて居る、吹替への久松、垣根の内より出て、そつと藏の内へ入る、久作も貞昌もちよつとこれを見ぬ事あつて

よう聞分けてたもや。めでたう身二つになつたその上、わしが頼みぢや、山家屋へ行てたも。コ

レお松、なる事ならばこの様に、何の如才があらうぞいの。

清兵　その嫁入りの晴衣裳も

貞昌　お前は聟どの。

久作　清兵衛さん。

貞昌　久作どの……そんなら様子を

清兵　聞いては今では気の毒……イヤサ、気合ひの悪いお聟どの、所詮の中は山家屋の、座敷の奥へ引取つて、出養生も早九月……イヤサ、但し十月がその間、婚礼沙汰も延びたとて、それを否ともいはれぬ訳、とは云へ世間の取沙汰に

久作　お前に逢うて久松に、たとへお暇下されても、更々恨みと存じませぬ。その言葉は、

ト縁先にある錠の鍵を持つて行つて百姓へ渡し

サア、斯うして置けば、これでお家の御用心。

貞昌　誠しやこれで互ひの安堵。

久作　もし久松に今にても、お暇が出たならばと、書いて参つたこの引取り。

ト折り紙を出す。

貞昌　こりやコレ折り紙。

清兵　わしも幸ひ持ち合した、癪に奇妙なこの藥。

ト守りを出す。貞昌取つて見て

貞昌　何から何まで……ヤヽヽ、こりやコレ子安の

清兵　サア、安々めでたう身二つに

久作　ヤモ、流石は大家の旦那樣、藏の弟も

貞昌　娘の染も

清兵　久作どの。

久作　旦那樣。

清兵　もうお暇申しませう。

貞昌　もうお歸りなされますか。

清兵　アヽ、それに付けても今に迎ひが。

久作　お歸りならば私しが、どうで道までお供いたして。

清兵　そんならお賴み申さうか……イヤ、貞昌さま。

貞昌　[illegible]。

ト木作が金の包物を出す。藤兵衛胴巻の内へ押入れる。貞昌脇差を引寄す。チョンと木の頭。

ようござりました。

トきざみよろしく引ず

幕の内、藤兵衛下手へ入る。ツナギにて引返し。

幕

本舞台、上手へ寄せて、九尺の土蔵室、瓦屋根、これより下の方一面の黒板塀、見越しの松の木、柿の実などへし、真中取れる仕掛け、この内に三間の本屋作りの二階を見せ、本庇に葭簀囲ってあり、一面に障子さしてあり、松の木の見越し、下に外なる用水入れ、総より繰りる仕掛けあり、すべて藤兵衛屋敷の裏手よろしく、時の鐘にて幕明く。

ト[illegible]西の方より見る。上手より中間[illegible]、酒に酔ひたる体にて出て来て、よろけながら[illegible]にて行き過る

[illegible]　ハイ〳〵、頼みます〳〵。

ト行かうとする[illegible]を押へ

權平　ヤイ〱、待ちやァがれ。
駕舁　なんだ、どうするのだ〱。
權平　どうするとは、うぬ、人に棒鼻を當てゝ置いて、頼みますとは何を頼むのだ。
駕舁　夜道の事だ、料簡して下さい〱。
權平　料簡ならない。駕籠をおろせ〱。
ト引据ゑる。
駕甲　コレ〱、奴さん、行き當つたから料簡しなさいと云ふのだ。
駕乙　第一其方はから身、此方は荷を擔いで居る者だ。
二人　行き當つたのは五分々々のせりふだ。
權平　此奴が〱、太い奴だ。コリヤ、鈴木彌忠太さまの御家來權平さまだ。人を見損やァがつたか。うぬ等より駕籠の客が相手だ。爰へ出ろ〱
駕舁　駕籠は女中だ。よい加減に料簡さつしやれ。
ト此うち駕籠より頭巾を冠りし女逃げて上手へ入る。三人これを知らず
權平　エヽ、面倒な、曳摺り出すワ。

獵昇　さう云やアうぬな

ト　ちよつと摑み合ひ、兩人立杖にて打つてかゝる。龜平根笹の忍び返しを外して、撲き合ひ、立廻りながら、下手へ這入る。ト琴唄の調子になり、唄一くさりあつてきれる。眞中の障子を開く。お染、硯箱を引寄せ居る。合ひ方になり

その　いゝ久作が云やるを聞けば、久松の暇を取り、明日は早々五百崎の在所へ行きやれば、云ひ號けのお光さまとやらが、定めし神好う待やるであらう。さうなる時は我が願ひも叶ふまい。淵川へも身を投げて、死ぬる覺悟とは云ひながら、……勿體ない、義理ある仲を親達の、事を分けてあのお詞。その時には嫁入らにやならず、殊にお腹のやゝまでも、共に生きては居られぬこの身。コレ久松、わしや先へ行く程に、必ず實意に諾つてたもや。人目を忍び、やう〳〵書いたこの書置ちよつとなりとも久松に……イヤ〳〵、斯う云ふ内も、人目にかゝれば恥の恥、人の見ぬ内、さうぢや〳〵。

ト　書置を持つて入り、下手の障子を明け、吹替へのお染、風鈴へ書置を結び付ける。久松、鼠の窓より半身を出し

久松　それにお出でなされまするは、お染さまではござりませぬか。

浄瑠理大切





そめ　其方は久松、逢ひたかつた。逢ひたかつた〳〵わいな。

ト久松窓より入る。吹替へ跡へ裏向きにて出る。吹替へのお染此方へ入る。お染上より二枚目の障子を明けて、尤もこの前にお高祖頭巾を被る事あり。

久松　オヽ、道理でござります。逢ひたい見たいは私しとても同じ思ひ。逢ひたかつた〳〵わいの。

そめ　なんの、其方は殿御の事ぢやゆゑ、心強うも思やらうけれど、女子の果敢ない心では、死ぬるが高と覺期して、やう〳〵書いたこの書置、今取つて來る程に見てたもや。

ト入る。藏より久松出る。下手へ吹替へのお染、裏向にて風鈴の書置を解いて居る。

久松　申しお染さま、義理有る中のお袋樣の、段々のあの御意見、所詮添はれぬ二人が惡縁、矢ツ張りあなたは山家屋へ、お出でなされて下さりませ。

ト此うち吹替へのお染、文を取つて足音をして此方へ來る。久松の吹替へと代つてお染にて上手へ出て

そめ　そりや胴慾な久松、其方を除けて何のマア、たとへ嫁入りするにもせよ、世間の人の口の端に、あのお染は可哀さうに、久松を捨てゝ外へ嫁入りするとは、大身代の山家屋で、榮耀がしたさち

中間部屋まで、世間の人に指さされ、兄はけうより一日も、早う死にたいわしが願ひ。マア、二
の言葉。

ト蔵の口へ入れ、探りながら出す。懐への久松も探りながら取る。

エヽ、情ない。この蔵から。死ぬる今際に兄弟の顔、見る事さへも叶はぬか。コレ久松。

久松　お染さん。

そめ　顔へは見離さない

久松　モシ、もうお目にはかゝりませぬ。

ト蔵の戸を閉てる。

そめ　ハアヽ。

ト泣き伏し思ひ入れあつて、そろ〳〵と見舞との縁の枕より、庭木履を伸び降りて来る。これ上一腰に鍵の錠前を、内よりキチヤと卸し、この文を首尾善、只暗の庭にて、義光の刀にて封じ、番ひ出て、刀を納め腰にさす。このうち部下へ廻りて、前へ行かうとする。（下座音楽）見て

善六　サア、おのれ今お染にさ、はめたし〳〵。善六お手上げた上、わたしを捕へて、穴に落す。おのれ
かれ。

そめ　イヤ、わしやそんな者ぢやないわいの。
喜兵　やかましいわえ。幸ひのこの駕籠へ。
ト無理に駕籠へ入れて、外より繩で絡げる。ト藏の破れより久松出て、窺うて又入る。下座より以前の駕籠舁二人出て來て
駕甲　コレ〱、駕籠は爰にあつた。
駕乙　お待遠でござりませう。サア、行かう〱。
喜兵　コレ〱、この駕籠は借りた〱。
駕舁　なんだ借りた。途方もない、お客を乘せて居るワ。
喜兵　べら坊め。こりやアお染だ。
駕舁　エヽ、やかましいわえ。
ト擔ぎ上げて行かうとする。喜兵衛支へる。兩人砂を摑んでめつたに打付ける。喜兵衛目に砂の入りし思ひ入れ。うろ〱する内、兩人は向うへ走り入る。
喜兵　ヤアイ〱、そりやアお染だわえ。オヽイ〱。
ト言ひながら向うへ行かうとする。藏の破れより久松出て、喜兵衛を後より抱きとめる。喜兵衛振り

解いて見せ。

久松　ヤア、お六に連れる喜兵衞とやら、藏を毀つて此やうに、見れば覺えのこの一腰、すりや質入れの義光を

喜兵　われや久松、悪い奴に見付かつたわえ。そこ放しやアがれ。

久松　義光返せ。

ト喜兵衞「何を」と鳶口にて打つてかゝる。立廻り見得よくきめて

云はゞ女房の縁につれ、主の娘の久松を、ようも打擲いたしたな。

喜兵　ぶつてもいゝワ。叩いても大事ねえワ。

ト散々に打つて

こりや、この刀を詮議する石津が伜、竹川が弟の久松だな。こりやヤイ、この義光は根が盗み物、さる人に頼まれて、この油屋へ百兩の質に入れ、その金も山で擲つた博奕も、天道あつてか、から負けてしまつた。そこで思ひついて、この藏の矢尻を切り、持ち出す所を見付かつちやア、寢覺めが悪いと思ふから、われを突き殺し、後腹やめないおれが目論見。待てよ、併しわりやアおれが殺さいでも、どうで死なにやアならねえ。なぜと云へ。主ある娘と不義をすりやア、云は

ずと知れた間男だ。なんと死なにやアなるめえが。可哀やお染は先馬だ。うぬも跡から馬で行く、駒も驛鈴の鈴ヶ森、三尺高く安房上總、向うに受けて磔刑だワ。

久松　その義光の刀ゆゑ、家の斷絕、親の切腹、この油屋に質物に、入つてあれど荒立てて、詮議を願はば親方の、難儀にならうと思ふうち、盜みに入つた橫道者。おのれに義光盜まさうか。今こそ町人、以前は侍ひ、石津が次男のこの久松、サア、義光を渡すまいか。

トこれより捨ぜりふ、兩人花々しきタテあつて、喜兵衛轉げるはずみ、最前の忍び返しの竹、橫腹へ立つ。これより苦みながら立廻り。久松、喜兵衛を一かせ切る。喜兵衛苦しみ

喜兵　人殺し。

トこれにて、久松喜兵衛の口を押へながら抉る。喜兵衛立ち身にて抉られ、苦みながら久松が髻を摑む。久松、刀にて切拂ひ振り上げる。喜兵衛ギクリと苦しむ。久松愕りして撞となる。チヨンと木の頭。久松刀を拭ふ。喜兵衛落入る。兩人よろしく、拍子

幕

大切　隅田川道行の場　淨瑠璃「心中翌の噂」常磐津連中

役名――油屋娘、お染。同丁稚、久松。久松云ひ號け、お光。賤の女、鶴土手のお作。猿廻し、

佐次兵衛、山家屋清兵衛、番頭[illegible]、庄六、猪、又。

本舞臺、下手へ寄せて、淨瑠璃臺、上の方三重、網代、松の書割、日覆より松の吊り枝、淨瑠璃臺に常磐津連中居並び、雨のカケリにて幕明く。

ト同じく鳴物カケリにて向うより、若い衆大勢、法被、山家屋と記したる提灯をともし、鉦太鼓にて出る。跡より清兵衛尻をからげ、一本ざしにて出て來り

皆々 久松ヤアイ。

清兵 お染ヤアイ。久松ヤアイ。

皆々 迷子のく\お染さまヤアイ。

ト舞臺へ來て

清兵 なんと皆の衆、此やうに尋ねても知れぬといふは、どうしたものであらう。これから向島の方を尋ねやうか。

皆々 それがようござりますく\。

ト行きかゝる。ト破れ笠落ちてある。

[illegible]く\。[illegible]す。

清兵　何だや、書いた物ぢや。何ぞ辻占になるものか。

ト拾つて

何ぢや「心中翌の噂」淨瑠璃太夫。

トこれより太夫連名を讀んで

こりやコレ、狂言の役割りぢや。アヽモシ、此やうな事にならねばよいが。

ト禪のツトメになり、皆々わや／＼云うて入る。直ぐに前彈きにかゝる。

〽いとしいと可愛いといふ二人連れ、相合傘の手と／＼手、いつも嬉しき風呂敷に、包む人目も今日は又、離れてひとり久松が。

トばた／＼にて久松、着流しおしよぼからげ、一本差し頬冠りにて、一人出てきつとなる。

〽蛇もつ足の片葉さへ、そよぐも若や追人かと、胸にあたりの一腰を、流石にいとふ頬冠りひろ朧夜の今の身は

久松　餘儀なき事に喜兵衛めを手にかけ、義光のこの刀持つて、立退く道々も、心がゝりはお染さま、慥か駕籠にと思ふゆゑ、見えがくれにお供したが、小梅の方へ廻つたか。その行く道を知りたいものぢやが。

ト向うを見て

向うへ慥か四つ手駕籠、爰へ忍んで、さうぢや。

〽あたり見廻し稲村の、蔭にしばし身を忍ぶ。

トこなしあつて稲村の蔭へ入る。

〽こんな仕事にあたらぬ端か、昨夜行燈の丁子が出来て、内の嚊めが験なき、しよんがいな、

オツト照らした月の間に。

トこの浄瑠璃のうち、庄六、又、揃ひの浴衣、脚絆にて、四つ手駕籠をかつぎ出て、振りよろしく

両人　モシエ。

〽旦那の御器量を、褒めて酒手を常の癖、今夜めしたる御殿さまの、腰の重荷のよい御器量で、定めしようにほつありと、草鞋の紐でふしめてやれ、仇口いふに付けてさへ、惚れし人の氣にかゝり。

ト花道よき所にて駕籠の垂れを上げる。内にお染乗つて居る。

そめ　そんなら其方衆、アノ久松に

両人　いとふが逢はしてあげやんすよ。





そめ　早う逢ひたい、逢はしてや。

〽せかゝる心やるせなう、見かへる雁の女夫づれ、アヽうらやまし、此方も馴染のえてきちに、オヽ合點と五百崎の、立場をさして急ぎ行く。

トこの淨るりのうち、よき所にて垂れをおろし舞臺へ來る。ト稻村の蔭より久松出て

久松　待て。籠の内なはお染さま、此方へ渡せ。

庄六　面倒なこの前髮め。このお染は善六どのに頼まれて

又　おいら二人が連れて逃げるのだ。

久松　さう聞けば猶ならぬ。此方へ渡せ。

兩人　たゝんでしまへ。

ト禪のツトメになり、ちよつと立廻りあつて三人見得。チヨンと淺黄幕を切つて落す。内の道具出來次第ふり落す。

本舞臺、中遠見、三圍土手の景色よろしく、所々に山吹の盛り、日覆、松の吊り枝を引上げ、一面に櫻の吊り枝見事にとまる。

〽憂き事に我が在五輪を狂ひ出で、菜種にひとり蝶々の、夢ともわかず道菜に、露のたはなるかこち草、男ゆゑにや狂ふらん。

ト、なかゞにになり、向うよりお光、結び鉢巻、振り袖肌をかけ、竹に間の扇をつけ、狂氣の體にて走り出て來て、花道にとまる。

〽結びてし、かひや嵐のいたづらに、巾を櫻のうたてやつらや、行くへいづくと白地の、お光が心亂れ髪、むしや／＼虫にわく方も、なくは雲雀か鶯の、やほとやらおやと突上は花の、八重に思ひて一重に開く、こちの心は汲みもせで、わきへかはした仇名草、盛りも待たで散るならば、共に連れてはくれもせで、エ、憎いほどなは川の面、水に巾よき都鳥〽あれ都鳥なゝ、なれも戀路のあるやら君の、比翼をはして何おややら、面白さうに粋な浮世に、隅田川おやと辛氣らし、焦れ焦うてあろも、かん／＼鷗が、なぶりくさるも道理千萬、恥を吞捧るやないかいな、こちの思ひは猶更に。

みつ 聞えぬわいな、久松さま。

〽はでな噂を聞いてから、綿といふもののァイ覺え、在所生れのわたしでも、云ひ甦けすりや女房たやらの、悋氣の仕やうは知りながら、云はで月日をくよ／＼と、待つに時雨のお松さま、

連れてとも〲駈落ちと、聞いて身もよもあらにくや、我が夫かへせ憂き人を、そこか爰かと追ひ風の、姿しどなく伏し沈む、〽谷の淸水は夜の間に增して猶やさし。

ト合ひ方鳴り物入りにて、佐次兵衞出て來て

〽めぐりくるくる曲輪ぢやないが、こちの大事の太夫でござる、これさ子供衆わるさをせまい、きやつは手とりで、お情知りで、赤い所へごんばう燒いておつ付けろ、浮きに浮かれて來りけり。

ト舞臺へ來て、お光を見て

佐次 なんだ、美しいものが寢て居るワ、コレサ〱、氣を付けなさい〱。

ト お光あたりを見て

みつ 何ぢや、わしに氣を付けい。何ぢや、男を持てとかえ。オヽ。

〽床の鼠があいたし小皿につまづいて、ぐわら〱ぴつしやり何ぞいの。

佐次 ハヽヽヽ。なんだ、こいつは氣ちがひだな。よし〱、そんなら兎角逆らはぬやうに、氣を慰めて遣りませう。

ト猿を連れて出て

〽瓦町とや油屋の、ひとりの娘にお染とて。

佐次　お染というたら立つたりな。

〽年は二八のはそ眉に、内の子飼ひの久松と。

サア、こゝからが口舌の段。

〽あれ見あんな無理いひな、昔思へば逢はぬがましぢや、ましかましらの恥じや、それより
この世の物狂ひ、愛しき人を都鳥、ありやなしやと見なく、とけるが掃ひふり切つて、あて
ども浪の川岸を、狂ひ狂うて走り行く。

ト佐次兵衛もめるめる袖を切らし、右の側の袂を投げつけて、一散に下座へ入る。

佐次　ハア、ヘー、こてはあれが評判の久松この、、いひ聞けのお光とやら。昨日二人で、顔背け一間、
ての色競ひ、そんなら今度はアノ浄瑠を。

〽聞いて野崎の角と成し、両髪櫛の赤い結び、色の命に帆を揚げて、二人はどこへ走り舟、
うつろ舟やゝゝ浮こえたか、二人が中に取残され、独り寝ふどきの上座して、ひとり思ひに狂ふ
小棲。

ト振りよろしくあつて

よし〳〵、誰れぞ來るのを待ちかけて、ちえもながらや猿とおれ。ドレ、夜櫻と出掛けやうか。

〽若いざ花の夜櫻や、しばし眺むる折からに、月を友なる氣散じは、調子違ひの田舍ぶし。

ト合ひ方になり、鶴土手のお作、かい卷にて、だき子を背負ひ、褄をからげ、手拭ひを冠り、手に茶の袋と、持ちあそびの風車、獅子など結ひつけて、出て來る。

〽瓜や茄子にやくねかきもなろが、むすめ豆には垣やならぬえ、初ものしめよとて夜這人がうせたなら、なんとしよかと、しよんがいな、江戸の戻りと見えにけり。

ト舞臺へ來る。

佐次 オヽ、誰れかと思へば、鶴土手のお作どんぢやないか。

さく オヽ、お前は猿廻しの佐次兵衞さん、きつい精の出しやうぢやな。

佐次 イヤ、おれは今とんだ所へ來て、氣違ひの守りをして居たのサ。

さく ナニ氣違ひ。さうしてその人は、女か男かえ。

佐次 女とも〳〵、十六七な可愛らしい女、しかも色氣違ひぢや。

さく それは氣の毒な事でござんす。今年は色の出來がよいやらして、こちの村でも聞かしやんせ。

〽庄家のおちやうが新田村の、杢藏男にうつ惚れて、いつかみゝずと釘の折れ、取りかはし

てもお酌すてい、しかくがなては手はずして、巳待ちの夜さをかこつけに、おちやらしやつて青柳の、硯に木積でせうねおやえく、我れらそさまに三國の、その時あから首つたけ、中の御前ののろくなり、口説かほどうやらつい時が、秋葉と思ひ見初めした、小倉仲頭の如の誼、やつても何のお曲じや、ないぞそこでもとこく、と、金こゑくねんくころねんと、おい小腕で抱きつけば、〳〵ヤレアこうらは此やうな、蛇蟲見るよな手まである、則なるけてそれさまに、まア泣くなよいかや、こんな物をやるな、お帰りばくく遣るく風車、戦ひかおせなでねんねこせいく、〳〵そのねんねこが故郷の、御ていかこれさで年なに、晴みひめにたる十田へ、われらもよつといれ傍に、種ものおるして見たいのさ。

さく　コレ、わる冗談な、おかしやんせいな。

佐次　これく、何もそんなに、ぴんくと拗ねる事はない。猿囃しはして居るが、これでも元は武士
　といふ色があるわい。

さく　何ぢや、お前に色があるえ。こりや可笑しい。その色さへを當てゝ見せうかえ。

佐次　さア、當てゝ見たのく。

さく　あのウ、お前の色ならす、さうよ。大な江戸の吉田町、夜の高尾といふよだれ。

〽ちがら／＼と足曳の、山下駄さげてちよつぴりの、茶碗の酒のさめがはし、もんし／＼と呼子鳥〽ゲエイ君はド、どうした、やつめはとつかひの、身にはしみつたれ中間ぼう、うそうそと月の明りにそれと見て。

〽チ、ちくるゐカ、かんとんびめ、今夜もどいつが口開けをと、ぐつとせき込み行きかける竹みつ取つて。

さく　カウ、待ちねえな。

〽折助さんにナ請け出され、明日から草鞋の毛はむしる、それを心の樂みに、辛い勤めの辛抱も、わたしばかりが生眞面目で、主は女房にせうびんな、世帶持つてと云うたのを、忘れてかいな、オヤ／＼／＼、どうせうなう、馬鹿らしい、男の爲なら共挊ぎ、三十振り袖四十島田〽草のエ枕も主ゆゑならば、北風吹くともなんとしよがえ、雨にも露にもまきやせまい〽石のお地藏と思うてもするがえ。

さく　しつかい身體は金こほり、冷たい寒いもなんの事たえ。

〽三十振り袖四十島田、その氣で／＼その氣の金ぴら大權現、あすの緣日樂みに、手ぐらまぐらに在所から、一村さして急ぎ行く。

ト おゝ子を抱いて下座へ走り入る。

作次 ホイ〳〵、お作〳〵、ホイ〳〵、なんだ、おればかりおいて行つたな。いま〳〵しい。おれも浮かれて、やらかせ〳〵。

〽爰棧や隅田川原へ棹さして、舟の中には何とおまるぞ、苫を敷き寝の梶まくら、晩の泊りは御油赤坂か、吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子の振の袖が、奴島田に丈長かけて、先の器量やるふりこめき、色めく飾りのかけ道具、更けぬうちにとゆふまぐれ、土手を彼方へ急ぎ行く。

ト捨ぜりふにて下座へ入る。土手の道具引いて取る。後の黒幕切つて落す。ト遠見に土手を見せ、秋葉山常燈若叢の遠見、打抜き羅紗大小二つ誂へあり、爰にお染、お高祖頭巾にて、吹替への久松、縁廻りして組合傘にて立ち身。この唄にて押し出す。

〽せめてもの思ひも今は春雨に。

そめ いとし久松。

〽忍び〳〵の露油に、帯さへ解かぬなか〳〵に、未来へ行たらしつぽりと、ねて叱られ人のない頼も、あの云ひ譯けのお光さんが、ござんせうともこの噂と、譯って袂の白絞り、これが

心の花の露。

トこの節落にて、傘の内にてお染久松にかはり、吹替へのお染、小き稲村の内より出て、吹替への久松は大きなる稲村へ入る。

〽思へばとても大恩の、お主の娘と不義の科、一緒に死ぬる悪縁と、思ひお染も好いた同士いく久松となる所へ。

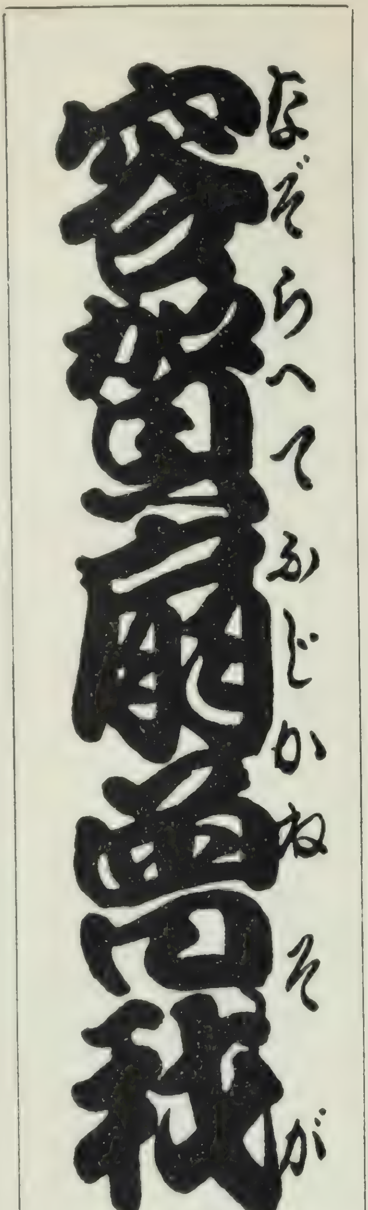
ト一腰へ手を掛ける。所へ、ばた〱にて清兵衛、若い者大勢出て、ばら〱と取まき

清兵 待つた〱。死ぬるに及ばぬ。お光は本妻、お染は妾、折り紙が手に入れば、千葉の家へ差上げ、久松は帰参、元の侍ひ。めでたい〱。

久松 エヽ、有り難い。

頭取 まづ今日はこれぎり。

打出し


なぞらへてかじかねそが

容賀扇曾我

三建目

砥上ヶ原の場

役名――曾我の團三郎。仁田四郎忠常。工藤犬坊丸祐友。梶原平次景高。梶原源太景季。新貝荒次郎。安西彌七郎。愛甲三郎。近江小藤太成家。伊豆次郎祐兼。曾我の禪司坊。箱根の稚兒、閉坊丸。吉祥寺日玄。百足屋手代、次郎七。三浦の片貝。茶見世のお鷹實は八幡三郎妻眞弓。錦畫賣りのお春實は監物太郎妹小雪。雲助、お馬の六。曾我の十郎祐成。

本舞臺、三間の間、見附け一面の草土手の上に柾木垣、此うち馬場の模様、誂らへの通り。うしろ淺黄幕。上の方、葭簀張りの出茶屋。下の方、揚弓場の横を見せ、土手講釋の看板掛けあり、よき所に浪板。すべて鎌倉砥上ヶ原的場の景色よろしく、右の馬場の内に梶原平次景高、出島の拵らへ、ぶつ裂き羽織、馬乘り袴、鞭を差し、腰附け馬にて、乘込の思ひ入れ。新貝荒次郎、安西彌七郎、愛甲三

鐘、時の鐘、鐘は大名にて、思ひ〳〵の鉦附け鳥にて入り亂れ、おそこそ掛け聲にて囃子の拍子入れ、御命に守に紅葉傘太夫拵、藪細の上に拵緞、縁引、おかげにて、顔に墨を塗さ、頭の紙を取り、早物、五寸ばかりを取らせ、比叡し皆畳立ちさゝり、双方掛けぶよろしく、下手に太郎も、芸版に手拍の鉦、鼓をはげし、遠藤殿の龍を着取りたうかゝて、井川、伽り鉦、石と鼓し、紅葉鉦、若衆鉦、雛流し、一番別にて、鋼入双紙り、しめくぬるやよき両に出端、此見の神へ上にて、家の雛稲、雛共にかあり、鐘と白木の犯田丸の鐘を鉦り、飲にみる、この風情、辻杉で、雛の市にて賑銀

義助　すて、よく言ふりよ、籤代に雪な鉢籤も雛の雛、八ツあつて四文、糸字紙でも上手でも。

仕出　家へ下さい。

同　このうんは、吉継けと言つた。

同　おれも五三宮着言にやァてならない。

ト名作札を買ふ。

義助　これはおいに鑑いたら、お鑑が前めば、ソレ早い。

ト枕箱の蓋を鑑り落し

ソレ、當りの的だ。

トよろしくある。これに構はず

次郎　さゝ、放さつしやい〱。

禪司　マア待つて下され。

片貝　いま少しのところを

次郎　なりませぬよ。

閑坊　コレ〱、そなお人。なんの構はぬ事ながら、最前から鎧の日延べを待つ待たれぬとの云ひ合ひ聞くも氣の毒。そりやマアどういふ

次郎　譯といふは手もない事サ。わしやア雪の下の質屋、百足屋金兵衛が手代、次郎七といふもの。爰に持つてゐるは、大切な鎧。三百兩貸して、疾に月が切れて、急に外樣から持つて來い、買つてやらうといふ口があるゆゑ、置き主に、今出すか、外へやらうかといふ斷りに行く所を

禪司　サヽ、理不盡であらうが、詳しい譯を申さぬゆゑ、合點は參るまいけれど、私しどもは遁れぬ係り合ひ。

片貝　それ〱、その品を外へ渡しては、つゞまるお家の難儀と聞き、あるにもあられず、彼のお方のお目にかゝり、及ばずながらお話しをと、實が屆いてこの場の樣子。

ト景季かまはず捨ぜりふにて鬮を買り

景季　鬮を掻きまはす

ト枕の鬮を撰る。

仕出　待つてもらはう。

ト綱を取り直す。景季、鬮を引出し、ひろげ

景季　藪から棒だ。

仕出　また當つた。

ト筆硯を取る。景季思ひ入れあつて

景季　あのべら坊め、先刻種を取りにやつたが、まだうしやァがらない。これほど賣れるに、先づ暫くだ。

ト片附ける。これにて仕出し、捨ぜりふにて下座へ入る。此うち構はず

次郎　そんな悠長らしい家業ぢやァない。流すか、請けるか、一口返事。

閻坊　三日兩の質物、鎧といひ、その置き主は

次郎　外でもない、鎧は源氏八領のうち。置き主は村我の

ト云ふを消して

禰司　アヽ、モシ〱、それを爰で明らさまに

片貝　どうぞお慈悲にその事ばかりは

ト景季、此うち聞き耳立て、思ひ入れあつて

景季　云つてもいゝ〱。次郎公、久しいな。

ト出る。

次郎　ヤア、お前は源太景季さま。お前にも口説きを聞いた、一兩二分と捨利の溜りが、十貫あまりござりますぜ。

景季　馬鹿を云へ。その口説きが病つきで、たうとう親仁に勘當され、こんな態だ。いま取らうと云やア喧嘩だ。

次郎　そんな横を云ふ大名が、あるものでござりますか。

景季　横を云はうが、縦を云はうが、ほんの事だ。食ひ方からして出にやアならない。

ト閉坊こなしあつて

閉坊　これは〱梶原さま、お見外れ申しました。御勘氣と承りましたが、誠に怪しからぬお姿、さ

ト評議[illegible]てさせう。

景子　これやア御丁寧なお情け、面目次第もござらぬ。して、閑坊には

閑坊　箱根山の麓へのござりまして、別當行實が名代に

次郎　此方には名代では埒も明かねえ。

景子　言はずと知れた[illegible]。

閑坊　隠れもない困窮屋敷。

禪司　心得ぬ其方の云ひ事。富家といへど貯へに調あり、身貧なれど富めるに時あり

片貝　慥しの證據もあるそれば、屋敷へ戻り、仕やうもやうも

次郎　解らぬ話しを、エヽ、面倒な。

　ト振り離す。

[illegible]　構はずと、行きやれ。

　ト禪司坊片貝をとへる。次郎も、花道へ行かうとする。禪司坊、片貝留めかける、次郎も留めにかから

[illegible]て聞いて居る。此の[illegible]の兩人、其に乗りなる。よき時分、二人とも、[illegible]、[illegible]、[illegible]

留めけり、胸[illegible]、やらし[illegible]、[illegible]を[illegible]にかけ、[illegible]、[illegible]





振り頭巾、長合羽の旅形、左の手へめりやすを掛け、杖を突き、いやらしき振りにて、供の中間、同じく旅形、兩掛けの旅挾み箱を擔ぎ、江戸駒込吉祥院荷揚といふ繪符を差し、附き出で來り、皆々花道にて出會ひ、お鷹思ひ入れあつて次郎七をとめ

たか　これはマア〳〵、わたしとした事が、思はず知らず行き會ひまして、水でもかゝりは致しませぬか。御堪忍なされて下さりませ。

次郎　その挨拶より、急ぎの物だ。

ト行かうとするを

たか　マア〳〵、お急きなされまするな。

トこなしにて支へる。

日立　モシ、お女中樣、砥上ヶ原の馬場といふは、このあたりでござりまするかな。

たか　ハイ、向うに見えまするが、砥上ヶ原の的場。あの側の水茶屋が、わたしの見世で、水を切らし向うの星ヶ井へ、一釣瓶、汲みに參りました戻りがけ

日立　ハテ、よい女中にお目にかゝつた。

次郎　ハテ、悪い所で行き會つた。御免なさい。冷え物でござい。

トまた行かうとするを

錦司　モシ、花ひなお女中

片貝　どうぞお留めなされて

ト次郎七に思ひ入れ。

たか　ハテ、斯う行會ひもお客にせふとの、今日の縁にし。

日玄　そんならお見世へ

次郎　イヽや、わしやア

たか　ハテ、一夜明くれば日延は格別。お二人さん

日玄　その日延より直貝寺……金次郎、荷物はよいかな。

中間　隨分心を附けて居ります。

日玄　なんでも金次郎に事なかれなア。ハヽヽヽヽヽ。

たか　サア、皆さん。

ト女郎、右の囃り鳴にて、お客、次郎七を押し戻し、皆々舞臺へ來り

日玄　御免なされ。

ト床几へかける。お鷹よろしくあつて、景季見て

景季　コレ、お鷹さん、なぜ百足屋の手代を留めたのだ。

閑坊　あの人は急用がある筈だ。譯も知らずに押し戻して

次郎　どうするのだ〳〵。

ト突つかゝつて云ふ。

たか　ハテ、仰山なお方々。たかゞわたしは出茶屋の女子、その花香さへ白菊の、きせんを選ばず一もりと、お客を留めるは折鷹の目、マア一服と汲み出す、山吹色に宇治川よ、信樂相良ほど〳〵に濃茶じかけに薄茶にも、甘茶の別儀かはらぬは、地味な事ぢやが商賣に、精を出すのぢやござんせんかいなア。

景閑　ハテ、よく茶かす奴サ。

日玄　これがほんの、茶なしの種サ。

次郎　イヽヤ、おらァ茶にやァされない。急ぎの用だ。ドリヤ、一走り

ト行かうとするな

轡田 ハテナ、良うとは云はぬ。今日明日のところな
次郎 否だよ。
片貝 其うちには金子を調へ、戻さねばならぬ品ゆゑ
次郎 もう聞かない。
日在 コリヤ〳〵、さな人。出家沙門に、謂は諭へど、いかなる因縁か知らねども、若い方々が愚かな闘を働くを聞き入れず、ヨイ、短慮功をなさず、既に法華護戒経にも説かれたが、進むに戒あい相の為に受ありと、或る時は進んでよいやら、待つて宜いやら、とんと和僧に解らぬ事。
景岡 南無妙法蓮華経。
口玄 勝手におしやれ、
たか 師を押しやります。
次郎 寄つてたかつてチヤツチヤ遊ばされたので、どうも酔が抜けたやうだ。
景岡 そこをひるんでたまるものか。
たか これはしたり、お前さんから小腕の悪い。わたしが何やら囃子つたり、あなたのお武識で、新刑
ぬしの和らぎ口。

禪司　左やう〳〵、此方の折入つての賴み、聞き屆けてさへ下されば
片貝　其方にも難儀はかけず、皆の喜び。どうぞ聞き分けて、明日までのところを
次郎　イヽヤ、さうは待たれない。なんでも今日中、解るお方に逢ふまでは
たか　それはマア〳〵お嬉しい。一寸伸びれば
禪司　また思案も
閑坊　そんならたうとう
次郎　面弱いね。
禪司　エヽ、忝い。
次郎　そんなら一遍
たか　ソレ、お二人さん
片貝　成ふ程、暫しのうちは
禪司　附き添つて
次郎　とんだ附き馬だ。
禪片　お世話になりました。

ト辻打ち、揚弓の音にて、次郎七先に聞司坊、片貝附き、下座へ入る。

聞坊　さて、あの手代も、たつとのろいね。

日女　時にお女中、今日この所に御用があつて、仁田さまや工藤家も、お出でと聞きましたが

たか　いイ、右様でござりまする。今日はこの馬場に、乘馬の御検分や、富士の御狩屋へ通用の、切手のお改めやらで

景季　それ〳〵、工藤や仁田どのが來さつしやる。それを當にわしらも、商ひをするのサ。

聞坊　手前も御検所のお出でを待ち受けまする。

日女　それは好い所へ來合せましたわいの。

ト向うより足輕一人走り出で、花道にて

足輕　仁田の四郎、只今入來。

ト云ひ捨て、引き返して入る。これにて下座より、景高、荒次郎、彌七郎、三郎、めい〳〵轡を取らし只今下馬したる思ひ入れにて出で來り

景高　兄貴、御検分のお出。見苦しいその形。遠慮さつせい。

景季　今だと思つて、剛氣に來てゐるな。

彌七　勘當の執成しも
荒次　折を見合せ
三郎　我れ〲が承知いたし居れば
三人　矢張り其まゝ。

ト皆々こなし。通り神樂、揚弓の音にて、向うより仁田の四郎忠常、上下衣裳、大小にて、足輕二人を連れ、出で來り、花道にとまる。

荒次　仁田の四郎忠常どの
彌七　御入來御苦勞。
三郎　まづ〲、これへ。
忠常　各々の招待。滿足の至り。御免下されい。

ト舞臺へ來り、眞中に直る。四人よろしく皆々下手に扣へ、お鷹、忠常に茶を差出す。

見馴れざるこの女子は。
たか　お馬見所をお預かり申しまする、定見世の者。
四人　蓮葉の段は、御免下さりませう。

忠常　そしうござりまする。まつ以て承知の如く、皐月下旬頼朝公、富士の御狩の御催しにつき、諸家の質を集め、山神を祀り、源氏八幡の鏑を以て地神を鎮めんと、質から主へ差上べき趣き、奉行たる工藤左衛門祐経より申し渡さる。まつた斯く申す仁田の四郎忠常は、御馬前の騎馬の街を支配を御免下さるによつて、斯くの如く馬術に出精、検分として罷り越す。

景高　何がさて、この景高は、兄者が宇治川の魁を守ぐは二の時と、一生懸命の技味を御覧に入れんする。

荒次　それ〳〵、この新貝などは、祥介を第一と、野山岩石を心がけ、野ざらの荒駒を調言の仁義にまする。

弾七　この安西は、まだ〳〵そんな事ぢやござらぬ。あまり稽古に身が入り過ぎて、屋敷へ帰つても畳の上で乗りよする。

三郎　左やう〳〵、この曾我は、寝ても心の離れぬやうに、新田の壇の嬉ひたく、達者な奴を召しかかへ

四人　夜書なしの修行でござる。

　ト皆々、打ち〳〵そこへ出て

忠常　忠常どの、まて面白からぬ無で貴殿を守ります。どうぞ親仁へ

忠常 詫びの執成し段々なれど、物堅き景時どのなれば、一つの功の立ち次第とある。定めて艱難うんじやうさつしやれたでござらうな。

景季 そこに如才はござりませぬ。斯く落ちぶれて徘徊なすを幸ひ、世上の風聞、木曾や平家の殘黨を嗅ぎ出す犬。

景次 我れ〳〵が呑み込んでゐれば

景高 又しても兄貴、見つともないその形。

景季 おれよりは、われが態は。斯ういふ所へ來るにやア、なぜお定まりの柿の素袍で、突ッ張つて出ないのだ。

景高 ソレ、さう氣が利かねえ。もう今時梶原が、素袍でもあるまい。馬の稽古でひねつたのよ。

ト此うち日玄、お鷹、互ひに思ひ入れあつて前へ出て

たか ハイ〳〵、御免なされませ。何かこの御出家樣が、あなたへ御訴へがござりますとて、わたしの見世にお待ちなされてゞござります。

ト日玄思ひ入れあつて

日玄 ハイ、私しは江戸表、駒込吉祥院の日玄でございまするが、急に寺寶の紛失物ゆゑ、松葉ヶ谷の

本寺へ届けに出ましたるところ、直ぐにお掛りへ申し上げますとあるゆゑ、お屋敷へ下がりました
が、折からこの所へとお指圖に依りまして、先刻より

ト此うち閉坊も思ひ入れして、刀の箱を持ち、そこへ出て

閉坊　へイ、私しもお待ち受け申しましたる趣意は、箱根山に於きまして、奉納の一品紛失。別當行智
病氣につき、名代として稚兒閉坊丸、罷り出ましてござります。

忠常　是は寺社の掛り、一方ならぬ兩所の訴へ。寶物とあれば、先達て三老よりお下知あり、前記取扱
ふ寶もあらん。幸ひ今日この所にて、狩場通路の調手燒印、改めにつき人來あれば、立會ひの上
詳しく聞かん。

日を　左樣なれば、工藤家のお入りを待つて

たか　それまでは、お馬見所の勝手口に

四人　扣へてお居やれ。

日閉　畏りました。

景季　時に、最前から合點がゆかないは、和尚の左の手へはかり、めりやすをはめてゐるは

六弥　はんに、それ〳〵、どういふ事でござりますぞいなう

日玄　問はれて語るも恥かしい、いはれ因縁がござるなれど、この席であらはには

　ト恥かしき思ひ入れ。

閉坊　然らば御一緒に

景季　坊主と稚兒は危ないもの。

日玄　イヤ、愚僧は顔の赤いがいとしい。

　トこなし。

四人　ハテ、嫌らしい出家だな。

日玄　コリヤ、金次郎、荷物はよいか。

　ト中間、兩掛けを見て

仲間　ハイ、傘を落しました。

日玄　エヽ、金次郎功に立たずぢやなア。ホヽヽヽヽ。

　ト通り神樂、揚弓の音、鳥追ひ唄になり、日玄に供附き、閉坊は箱を持ち、下座へ入る。直ぐにこの鳴り物を借りて向うより、曾我の十郎祐成、紙子仕立ての拵へ、着流し、一本差しにて、編笠を持ち、出る。跡より六、好みの鬘、雲助の拵へにて、草鞋を片々穿き、片々の緒を通しながら出て、花道

にて

六　これサ旦那、あのマア大門口の危ない所を切り抜けて、首尾よく早く此処へ来たは、真直な鑑で
でござりやせうがね。

紺屋　イヤ、きついものぢや。何を隠さう、虎がこれまでの揚げ代の滞りの上に、かういふ理由めの暇
貰ひで、やかましういふを、あの喜瀬川が聞き入れて、常座しのぎを聞きすまし、補伏せにさうと云
ふ、是非今日は宝へ顔出しさせねば済まぬ事があるゆゑ、やう／＼逃げて出た矢先。忝い／＼。

六　そりや難儀しろ。その金を取つたばかりも、自二つがものにござりやす。それに大蔵から安まで
アの女で南一丁出る揃ひはありやせん。

紺屋　皆様をいふな。また明日の晩、虎がところへ行けば、直ぐに望みほど取つてやるワ。

六　それほど虎さんの深間といふは、ハテ、そんならお前はアノ曾我の

紺屋　エヽ、むだまき／＼。

六　なめるこ實、曾我十郎を寄せた。

紺屋　何と云やる。

六　イエ、なんでも旦那、分けて下さい／＼。

ト云ひながら、右の鳴り物にて兩人舞臺へ來り、皆々を見て、姿を見比べ、會釋してゐる。

忠常 待ちかね申した、祐成、サヽ、これへお來やれ。

ト祐成、ウザ／＼と眞中へ直る。

早速ながら、逆澤瀉の儀は如何召された。あまり延引、御前の言上も定かならず、昨日も御催促として某罷り越せど得逢はず。取分け某は、祐信、祐經とも懇意ゆゑ、何とも氣の毒。この上遲々に及ぶ時は、嚴しくお咎め。最早今日につゞまる鎧、祐經どのへ差上げ召されたか。

祐成 サア、その儀は先日嚴命を蒙むりしより、早速修覆申しつけたるところ、折惡しく養父祐信は、御存じの通り富士のお均しの爲、三原那須野の狩倉に、鬼王まで召連れ、勤仕の留守ゆゑ何かの手遲れ。段々の御厚情にあまへ、この上願ふはあなたばかり、何卒修覆中、いま兩三日のところを。

景高 イヽや、某は成らない。仁田どのが執成さうと云つても、お父さんのお預かり、着衣は疾に差上げ

景次 その外、家々のお預かり、七領の鎧は揃へど

彌七 逆澤瀉の延引ゆゑ、地祭りが缺ければ

三郎 先へ上げた面々の規模がない。今日中に

四人　上げさつしやい。

結成　サ、それは。

景季　そりやア無理だ。修覆といふは一寸遁れ。最前百足屋の手代を頼み、待て待たれぬの端末を、口説くは片貝、禅司坊、金の高は三百両。貧乏屋敷の代物は、外にやアあるまい。結城が大磯通ひの揚げ代に、鎧は疾に質屋の蔵。人こそ知らね沖の石、南嘯で流れてしまつたか。まして行つてから帰つたい、口にやア明日の間に合ふものか。

六　目水晶、違ひなし。昨日も今日も居続けの、金さへ無くつて人質の、補伏せになるところを、お馬の六が働きで、大門口の難を遁れ、宴まで中を飛んで来た、お駕籠の代をたつた二朱、お茶屋らやんごろ無し。大枚の質請けとは、こいつは直に解りやせう。

たか　コレ／＼、雲助どの、少つとはあたりの気を汲んで……たとへ何処から乗せてござんせうとも、当座のお客のお身の上、嗜んだがよいわいなア。

六　イヤ、お茶屋のおかみさん、お女郎衆の。金を貰つたらお客だが、無い時には背高人、騙りたわえ。その上、今あなた方の道楽ゆゑに、質も置くと仰しやる。現在知つた事ゆゑに、大磯通ひの路銀を宛てる、、、放埒の極めを附けるサ」

たか　さう潔白に云はしやんすは、何ぞ慥かな

六　證據といふは

たか　證據といふは

六　サヽその證據は

たか　ござんすか。

六　有る。

たか　その證據は

六　金が證據だ。

ト二朱銀を一つ出して見せる。

たか　エヽ、默りなさんせ。

ト六、贄して納まる。

祐成　たとへどのやうに申す者がござりませうとも、昨日も今日も修覆の催促に行きまして、あんまり馳け歩き、途中より脚氣が起り、據なく辻駕籠に乗りましたのでござりまする。何を申すも、威し直しの間に合はぬに、僞り虚言は申し上げませぬ。各々方もお執成し、一兩日の間

忠常　そりやハヤ、念に念を入れ、清浄を以て差上ぐる鎧、さる事もあらんが、昨日の御催促を承る
　忠常、執成しは何うも當惑。
景季　いやさうもござるまい。なれば肩を持つて引立てゝも、さう〳〵横には通るまい。
景高　今日中に差上げにや、諸家の腹いせ
荒次　金で解らぬ問答より
彌七　工藤の館へ引ッ立てゝ
三郎　黒い白いを鏡にかける。
祐成　サそれは。
四人　祐成、お立ちやれ。
　ト引ッ立てにかゝる。この時、向うバタ〳〵にて、揚げ幕の内より
團三　待つた〳〵。
　ト云ひながら、曲舞にて團三郎、木綿やつし、草履取引、尻からげにて、揚の前へ出て、千両箱を
　入れ、兩掛けにして擔ぎ出で來り、花道にとまり、荷を下ろし
　暫らくお待ち下さりませう。

ト平伏する。

景季　待て〳〵。脈のあがつた野良息子を、とめて出た奴を見れば、おれが荷擔ぎの長まだが

六　閫の上のごたつきか。地ッ子地廻りをあやすとは違ふ。

たか　お上に係はるお家の大事、口出しならぬその所へ

景高　下素下郎の身を以て

荒次　樣子を知つて支へるのか。

彌七　筋が立たにやァ慮外者。

三郎　以後の見せしめ、ぶッ放す。

皆々　キリ〳〵仔細を、吐かしやァがれ。

ト團三郎こなしあつて

團三　申し上げるも烏滸がましく、年々歲々相似たる、貧は諸道の妨げも、賴み得ならぬひつじいね、二番生えとの世の許し。主人の困苦を助くるとは、重荷にあらぬ身勝手に、梶原さまと共挊ぎ、種を仕込みの戻りがけ、遠目にそれと鎧の切端、若旦那の手詰めの難儀。しばし商賣取措いて

ト手早く荷の中より一腰を出し、差して

ボンと抜けたる團三めが、魂ひこめたるこの場の訴訟、お取上げ下さるやう、偏へに願ひ奉りまする。

景季　すりや、日雇ひの荷擔ぎは

四人　曾我の團三。

忠常　鑓の儀につき願ひとあれば

たが聞いてやらうと仰しやるほどに、早うこれへ。

團三　御免下さりませう。

ト荷を擔ぎ、いそ／＼と舞臺へ來り、下の方に扣へてこなし。

祐成　よい所へ團三、わが身に申しつけた鑓の修覆、今日も催促に行き參れどナ、ソレ、どう嚴しう云ひつけても、いまに兩日たゝねば、直しが出來ぬゆゑ、その日延べを仁田どのへお願ひ申せど

景季　古手な云ひ譯、聞く耳ない。修復といふは三百兩か。」

景高　七騎の鎧、揃ふ上は

四人　曾我の滅亡。

團三　イヤ／＼、憚りながらそこが御訴訟。いかにも外様のお預かりは揃ひまして、逆澤瀉の延引は、

重々の不調法。せめて兄鬼王でも居り合さば、早速お請けも相成りませうが、祐信はじめ狩倉の留守に甲斐なき團三と月小夜、心は矢竹にいらだての催促に、是非今宵中か明早朝までには、上納仕りませうほどに、曾我の一家をお救ひと思し召し、あなた方樣にも、何卒お腹立ちを直され、月小夜團三が千辛萬苦を汲み分けられ、明朝までの御宥免。

ト皆々をよろしく頼み

偏へに願ひ上げまする。

六　ぶつなく。大筒をくらはせるな。主人が二三日間があるといふものを、おのれ一人で呑みこんで、今夜か明日の朝までとは、いゝむほん勝負は跡が病めるぞ。

團三　何者なれば見苦しい態をして、大切な場所へ口出し。すツ込んで居らう。

六　イヤ、すツ込むまい。おらアあの人に、一分貸しのある駕籠舁き樣だ。たかコレく、又しても性懲りない。御用が濟めば直ぐでも取れる。マア押し默つてござんせ。

景季　成る程、淺瀬の譬へ、云ひ出しどころ。

四人　僞り吐かしやア宥さぬぞ。

團三　勿體ない。この期に及び、なに僞りを申し上げませう、身貧には育ちますれど、祐成も大名の嫡

子、細かなところへ行き屆かす、只今立寄り、職人どもを增し加へ、割り普請同然に急がせ、きつと明朝には差上げまする。

四人　もし間に合はぬその時は。

團三　この身の刑罪、曾我へのお祟の皆合點。今宵の首尾明朝まで。

祐成　コレ〳〵、團三、其やうに堅く請合うても

團三　ハテ、團三は元より姉月小夜、身を粉にしても差上げまする。

忠常　出かした、團三。既に名家の廢せんとなすを、主從の誠心にて、明朝までとあるからは、各々方にも朋友のよしみ、執成し致して遣はされいサ。

景季　仁田どのがあゝ云ひ出しちやァ

四人　まんざら成らぬと……承知でござる。

祐團　エヽ、有り難うござりまする。

ト思ひ入れ。

六　其方が濟んだら、せたつせい。

ト祐成にかゝるを、團三郎とめ

團三 尾籠な。何する。

六 一分を取るのだ。

ト振り切り、かゝるを、團三郎引廻し、見事に取つて投げ、起上がるところを、手早く飴の箱の中より四文錢四本出し、六に打ちつけ

團三 それ持つて、うせろ。

ト六、錢を取上げ

六 これさへ取りやア云ひ分ない。

たか どうなる事と案じるより、納まり易いお慈悲のお裁き。

四人 仁田どのには馬見所へ。

忠常 暫時休息いたすでござる。

祐成 拙者も工藤のお出でを待つて。

六 おいらも一杯まん直し。

たか ドレ、御案内いたしませう。

ト辻打ちになり、鳥追ひ唄にて、お鷹先に忠常、祐成附き、跡より六、下座へ入ると、あと通り神樂、

揚弓の音。

景季　コレ／＼、團三、てまへマア滅法界な。曾我の御家來なら、ちつとは侍らしい形をしたがよい。

景品　これ／＼、人もあらうに、お兄イさんと共稼ぎ。

荒次　いつもならいぢり合つたり

彌七　隱し合ふ事もあるもんだ。

三郎　世間へは飛んだ狂言だ。

團三　イヤモウ、それは昔の事、いまの當世は、なんでも錢儲けが肝腎。とても屋敷では食へぬ團三、惡くいふと主人の方へ借りられまする。

四人　それも矢ッ張り貧乏の罪だな。

團三　時にモシ、今日はいよ／＼矢場の切手とやらの、お改めがござりますかえ。

景季　イヤモウ、それや馬術の檢分で、團氣に今日は團が賣れて種切れだ。もう少つと早く取つて歸ればいゝに。

團三　隨分參りましたが、この所の稼ぎといふも、貴き半分、有やうは、その切手……切つてもらつて來ましたよ。

景季　そいつアよかつた。

ト以前の荷より錢五六本出し

ソレ、昨日と今の間の割合ひだ。

ト團三郎にやる。

團三　こいつは素敵だね。

四人　それぢやア鎧も出來るだらう。

團三　また惡口を仰しやります。

景季　サア、種が來たなら、横手で一精

團三　サア、お出でなされまし。

ト辻打ち、揚弓の音にて、景季、臺を持ち、團三郎、荷を擔ぎ、下座へ入る。

景高　サア、いづれも、少と欝したではござらぬか。

荒次　左やう〳〵。

彌七　何ぞ氣晴しを

三郎　致したうござる。

ト向う揚げ幕の中にて

小雪　にしき絵草紙、御用はござんせぬか。

帖兼　扇々。

トてんつゝ、通り神楽になり、向うより小雪、やつし袖無し羽織、手拭をかむり、行李の中へいろいろの錦絵を入れたるを、風呂敷にて首へかけ、跡より帖兼、同じやつし袖無し羽織、柿の頭巾、行李の中へ、いろ〳〵の扇を入れたるを風呂敷にて首へかけ、出て来り

モシ〳〵、姐さん、時折ふしは跡になり先になり、流して歩くが、なんと商ひがござんせうの

小雪　ハイ、なんと云うても繁華の鎌倉、随分御用もござんす。お前さんのも時分がら

帖兼　それサ、分けて今年は扇の入船、当り年、大抵売れる事ぢやアござんせぬ。して、これから、こなさんは。

小雪　ハイ、雪下通りを柴地のお屋敷へ。

帖兼　或る所、美しい女商人、屋敷町はいゝ思ひ込み。そんなら一緒に

小雪　にしき絵草紙。

帖兼　扇々。

ト呼びながら兩人舞臺へ來る。四人立ちかゝり

景高　ヤア、待つに幸ひ、美しい女商人。

荒次　錦繪賣りとは色氣がある。

彌七　ヤツトコトンの手もあらう。

三郎　二人ながら惣仕舞ひだ。

四人　やつて見せろ〳〵。

小雪　ハイ〳〵。商ひ物さへお求めなされて下さんすなら

祐兼　それ〳〵、差詰め爰らが二人のツラネ言だが、今の御見物はお氣が短かい。てんぽの皮、やりかけまするでござりませう。

四人　こりやア一段のよい慰み。

景高　先づ錦繪から買つてやらう。

祐兼　イエ〳〵、先づ扇からお願ひ申しまする。

荒次　扇も承知だ　錦繪は何にしような。

小雪　いろ〳〵ございまする。お望み次第。

ト皆々立かゝり

彌七　おれは傾城と武者絣に致さう。

三郎　自共はし縮緬の寶結に致さう。

ト捨ぜりふにて、四人それ／＼に選り出すうち、褄絣に包みし鐵形を落す。結重取上げ見て

結重　ヤ、このヤコレ兜の鐵形。しかも舞扇蝶。

小雪　アヽモン

四人　ナニ舞扇蝶の鐵形とや。

結重　いつぞや出合ひしその時より、附け廻しつ樣子を見るうち、その鐵形を所持するからは

四人　怪しい女め。

小雪　イヤ、この鐵形は拾ひました。

四人　なんと。

小雪　七里ヶ濱の下道にて、思はず拾うたこの鐵形。女子一人を御山に、怪しい者とはお目違へ。

景晶　いよ／＼女、商人に。

花次　違ひがなくば今宵で

彌七　錦繪の由來の荒まし

三郎　扇賣りの相手になつて

四人　潔白立てるか。

小雪　サアそれは。

祐兼　詮議は流々。それを

ト懷へかゝるを

小雪　モシ。

トとめる。

〽云はぬは云ふにまさごなる。

トこれより地へ取り、拍子舞、誂らへの所作、兩人よろしくあつて

〽雪も吹雪と散り亂れ、花々しくこそ

トちらしの納まりに祐兼、小雪を引附け

祐兼　動きやアがるな。

ト揚げ幕の内にて

呼び　犬坊丸参上。

四人　ナニ犬坊丸の入来とや。

ト皆々向うへ思ひ入れ。この間に小雪、裾衣を振り切り、花道へ駈けて行く。此うち太鼓謡ひ、遠寄せになり、向うより犬坊丸、長上下、小さ刀にて出る。小藤太、麻上下、股立にて、足軽二人附き出て来り、花道にて行合ひ、小雪、犬坊丸と入れ違ひ来るところを、小藤太突き廻し、繪姿を出し、サア〳〵とひろげ、小雪と引合せ、キツと思ひ入れ。小雪こなし。犬坊丸構はず舞臺へ来る。両人此まま思ひ入れにて舞臺へ押し戻し

小藤　人相書に似寄りの女。

ト下手へ引廻す。

足軽　動くな。

ト きめる。小雪ヂツと抱へる。犬坊丸、上へ通る。皆々よろしくあつて

景高　犬坊丸殿には

三人　御入来御苦労に存じまする。

犬坊　今日は当国に於て、市場の切手改め。まつた逆澤潟の鐘の儀につき、仁田どのもお出でと聞き、

小藤　父祐經參るべきところ、御狩の御用繁多のあまり、名代として犬坊丸祐友。
家の執權、小藤太成家、介添として罷り越す、途中に於て怪しき女、詮議を仕拔く。覺悟ひろげ。

景高　その詮議は我れ〳〵も

荒次　氣轉の男に申しつけ

祐兼　やはらで探れば附け上がり、この場を逃げ出す身の曇り、舞扇蝶の鍬形を、所持なすからは平家の餘類。

小雪　エヽ、滅相な。生活にせまる女商人。お目立ちまするこの品は、どこまでも拾ひました。お免しなされて下さりませ。

小藤　そればつかりぢやァ疑ひ晴れぬ。目にかゝつたが、うぬが不運。

祐兼　證據の鍬形、引摺り出して

ト小雪にかゝるを、ちよつと立廻り、とめて

小雪　女子と思ひ、手籠めにして、拾ひし品を證據とは、あんまりな無成敗。どうぞ此まゝ

ト振り放して、こなし。

景高　手向ひすりやァ

トかゝる立廻り、行りおふ錦絵を蹴返す。この時、風の音して、寶船の錦絵、前の流れへ落ちる。

三人シヤンととまる。小藤太これを見て

小藤　ハア面白き上風に、吹き散る畫面は寶船、水に漂ふ有様は、八島を寫す船内裏。

小雪　ナヽ、なんと。

ト肥前節の合ひ方になり、皆々思ひ入れ。

宿禰　一の谷の落城より、安徳帝を初めとして

四人　浪に浮みし二十四騎。

犬坊　陸には源氏の功に、名だゝる平氏は皆討死。

小雪　思ひやるさへ味氣なき、運つき弓の知盛どの、諸の敵を拂はんと

小藤　結み切つたる家の子たる、能登太郎に竹馬乘らせ、眞一文字に切り入つて

ト拔きかけるを小雪とめ

小雪　とてもゝ叶はぬ戰ひに、大將軍と刺し違へんと

ト小藤太を突き放し、行きかけるを

彌七　白鞘を中に取りこめて

ト隔てる。立廻りながら

小雪 馬を取られて詮方なく

トとめる。

荒次 ためらふ所を

ト立廻りとまつて

祐兼 臆病未練な頼方が、主の討死よそに見て

小藤 その場を逃げる末世の恥辱。

小雪 サア、その汚名と主の仇。思へば〳〵

ト兩人を突き放し、無念の思ひ入れ。

小藤 問ふに落ちず語らせる、手目はあがつた平家の殘黨

小雪 なんと。

祐兼 知盛の討死と、頼方を無念の樣子。監物太郎が餘類の女。

四人 腕まはせ。

ト安西、愛甲かゝる。この時お鷹、ツカ〳〵と出て、兩人を引退け、小雪を圍ひ

たか　皆さん、マア／＼待つて下さりませ。

四人　茶見世のお國、なぜ支へる。

たか　あれから様子は聞きましたが、お前さん方もマアあんまりな。女子一人を寄つてかゝつて、雜言の餘類のと、そんな怪しい女中さんではござりませぬ。毎日／＼わたしが見世へ、寄りなさんす得意のお馴染み。女子は女子同志、怪しい者でないといふ、證人はわたしでござりまする。

帖兵　いらざる女が横合から、おれが手柄を支へても、拔差しならぬは八島の戰ひ、無念は顏に現はれて、隈形の極めまで、所持なすからは知盛の、餘類の者に違ひない。

たか　サ、それが大きな間違ひ。ぬしは講釋が好きで、こゝの側のアレあの講釋場、丁度八島の合戰毎日／＼聞かしやんしたゆゑ、二つには又隈形も、證據にはなりますまい。

四人　そりやなぜ。

たか　ハテ、拾うたとある品に、古主の形見といふしるしも、附いてはござんすまい。お前も又、身に大事を抱へ……イヤ、身の大事を思ふ者が、不審の立つ品を拾ふといふ事が……その邊には、わたしに預けなさんせ。

小守　ヤ、これは

たか　お前が持つては疑ひ晴れぬ。ハテ、わたしが預かれば、いつ何時

ト小雪へこなしあつて、鍬形を受取り

これさへ無ければ、お疑ひもござりますまい。若殿様、お慈悲に此まゝ

犬坊　父在す時は格別、犬坊が初めての名代。小藤太、よきに。

小藤　ハツ。實に栴檀は二葉、御仁情に依つて見遁し遣はす。

四人　でも、見す〳〵知れた

祐兼　殘黨餘類を。

小藤　ハテ、茶屋の女が悧發、若殿の仁情。面を見知れば、天下の内を放し囚人。

たか　エヽ、有り難う存じまする。

小雪　これといふのもお前のお庇。

たか　禮には及ばぬ。この場を早う

小雪　重ねてきつと。はやお暇。

トこなし。通り神樂、辻打ちにて、小雪、下座へ走り入る。

四人　折角手に入る網の魚。

紬兼　茶屋の女が口先で。

小藤　お騒ぎあるな。某が執成しを幸ひに、一旦この場を見遁せしも、同類徒黨を見出さん計略。

紬兼　それこそ願ふに幸ひな、拙者が仲間に申しつけ。

小藤　抜からぬ男子。何かの手番ひ。

紬兼　この界隈を忍びの犬。

四人　萬事首尾よく。

紬兼　さうだ。

ト辻打ち、胡弓の音にて、紬兼、下座へ入る。お嶋、こなしあつて茶の下へかゝる。風にて

忠常　いづれも、お來やれ。

ト合ひ方、通り神樂になり、下座より忠常先に、紬成、團三郎、日玄、團坊は月の輪を持ち、出て來る。

大坊　忠常どのにはお早いお出で。

小藤　御苦勞千萬に存じまする。

忠常　これは／＼御挨拶。今日は切下と銘の一件。御進退の急行を受けしところ、大坊どの名代として、

小藤　執權小藤太介添への上は、お係りゆゑ、訴への儀まで承り、判斷の上、演舌めされい。

祐成　委細承知仕る。先づ御催促の逆澤瀉の儀は。

團三　だん〴〵延引のところ、忠常どのへ御訴訟の通り

四人　職人どもを增し加へ、今宵中か、明朝までには。

忠常　一圓我れらは呑みこめぬ。

小藤　默りめされ。一日番ひしお預かりの主從、只管の願ひ。その身は元より、忠常も覺悟の上。

祐團　よもや異變もござるまい。今宵中が時移れば、曾我は滅亡。

小藤　委細承知仕る。

日吉　して、外に訴へと申すは。

ト日玄、閑坊、にじり出て

小藤　愚僧は駒込吉祥院の、日玄と申す僧でござりまするが、先達て工藤さま仁田さまより、差上げよと仰せありし、寺の重寶、菅家の御正筆、松竹梅の一軸紛失。

閑坊　やゝ、なんと。

　　私しめは、別當行實病氣ゆゑ、名代としてお屆けに出ましたるは、この度嚴命下りし御奉納の友

切丸、昨夜曾藏を切り殺し、刀の詮議ありながら、中こは何夫仕つてござります。

ト箱を差出す。

四人 相も違はぬ同時の拵へ。

大坊 曾藏口上に、公作梅の一軸、この庭下轉孫右衞門が、御手許めの御手本と定め給ふ、大切なる御用なるに

小龍 紛失とばかりやア什麼の錢度、まつた又切丸に、ここの庭を含龍なし、山神を祀る社の御用了掛りなけりやア蛇度お祟り。

丹次 さう所、その盗賊の心當りと申しまするは、袖僧が弟子に、學山と申すがござりますが、とろろの轍めを働かし大殿前で、この程出奔、人が疑ひ受と存じますれば、何卒お慈悲を以て、詮議の日延べふ。

小龍 主を持てならの延への願ひ。叶はぬ事だ。

四人 して、安田は不憫ではは。

開坊 ここすこすら、きつと盗んだ盗賊と申すは、御太刀の紛失と同時に、箱王を宿根で下山、その上この品は由内に、覺のある一品。

ト箱を目通りへ出す。

祐成　ナニ、箱王には下山とや。

團三　折悪しき劍の紛失。ムウ。

ト互ひに思ひ入れ。此うち小藤太、箱の内より文を出し

小藤　「箱王さま参る、化粧坂の少將」

祐團　ヤヽ、なんと。

ト皆々思ひ入れ。

閉坊　好い手掛りでござりませう。

小藤　何れも樣。それ。

ト思ひ入れする。

四人　祐成、動くな。

ト立ちかゝる。

祐成　すりや、一書の名宛ゆゑ

小藤　知れた事だ。貧之神を助けの爲、取逃がした箱王と、見抜いた眼力、成家が、どつこいそつこい

　やりやアしない。

團三　イヤ、憚りながら、そりや目の附け所が違ひまする。盗みを致す程の者が、跡で詮議の證據に
　なる、書き物を殘しませうか。

結城。こりやおや〳〵。可哀さうに、また色氣も無い雛王が、どうしてマア傾城狂ひ。先からの附け文な
　ら、手に觸れたやら、知らぬやら。

忠常　イヤサ、二人が申すところも一理あり。扨て盗賊は外にあり、主も知れぬ證據を殘し、罪を塗
　らんと古手な企み。

　　ト團助思ひ入れ。この以前より後へ景季出かゝり、窺ひゐて

景季　イヤ、企みでない。その文は雛王が、持つてゐた證人はおれだ。

景高　お兄イさん。

四人　そんなら少將、雛王は。

景季　色で圍ふに違ひない。いつぞや落ち合つて、樣子を見りやア相惚れ深間。

忠常　さすれば古戰の證據となるか

團三　何を申すも

祐成　下山の箱王。
景季　盗賊に違ひあるまい。
小藤　宛て名の本人出るまでは、祐成滿江當座の人質。工藤の館へ引ッ立てる。
四人　祐成、立たう。

ト引ッ立てにかゝる。團三郎取附くを、よろしくあつて、きつとなる。この時下座より片貝、禪司坊ツカ〳〵と出て

兩人　何れも、待つた……私しどもがお願ひ。

ト皆々を引退け、祐成を圍ひ、思ひ入れあつて

禪司　友切丸の盗賊は、私しでござります。
片貝　イエ、この文を入れ置き、劒を奪ひ取りましたは、私しでござります。
禪司　イヤ、私しをいかやうとも
片貝　イエ、わたしを
兩人　御成敗なされて下さりませ。

ト並ぶ。皆々思ひ入れ。

小藤　待て〜。いま評議の最中へ、名乗つて出た若衆を

お奈　三浦の片貝、譚司坊。

園　モシ〜、まだ定まる落着なきうち、名乗つてお出なされては、猶と疑ひを引くの道理、三婦も工風も附きませぬわいな。

結城　たとへ偽となればとて、覺えなき罪は、天の照覽、どうして二人が爲になるとは

譚司　イヤ、たとへ明りは立つにもせよ、今名乗つて出ぬ時は、引かゝる錦は日頃の思ひ……イヤ恨めしきは錦木どのゝ下山、お二人の兄さに固事ある時は、柔道立たず。好からぬ怪我の噂を聞き、先づを出て、落ちつく間もなう、鐘の手詰め、劍の紛失、身に降りかゝる災難を、等閑と見てゐられうか。名乗つて出るは望むところ

片貝　思ひは同じ片貝も、結城さまと云ひ談け、不埒のゑに縛はれても、結婚の御難儀と、あなたの心汲み分けて、瀬江さまの代りとも、錦王さまの家名を、守る様は八裂きとも

譚司　この身を捨てればお咎めなし。

片貝　サア、いかやうとも

両人　御成敗。

景季　コレ成家、大分味に搦んだな。
景高　銀か鉛か、目利きが知れない。
四人　替へ玉つかまぬ用心おしやれ。
小藤　ハヽヽヽヽ、見す〳〵知れた狂言も、名乘つた褒美に首ぶッ放し、箱王めは跡での詮議。
忠常　イヽヤ、さうはなるまい。一旦刑罰の表を立つれば、餘人に科は及ばさず。
小藤　仰せではござれども、彼れらは同類。本人を引ッ捕へ、劒の白狀。
禪司　さある時には我れ〳〵が
片貝　心づくしも水の泡。
忠常　然らば彼れらの兩人は、お構ひはないぢやまで。
小藤　どこへ〳〵。自身の白狀、遁れはない。
祐成　チエヽ、情ない。望みある身の未練にも、一先づこの場の期を延し、また云ひ譯もあらんかと、口をつぐんだ其うちに、いかに若氣に逸ればとて、我れ〳〵を救はんと、實意が却つて仇となり名乘つて出たばつかりに、義理ある片貝、弟まで、死鳥にかけてやみ〳〵と、思ひも遂げず此ままに、どう見殺しになるべきぞ。思へば〳〵、團三郎。

團一 御尤もだ、お道理だ。拙者めも先程より、思案も途方に暮れ果てゝ、貧すれば鈍すると、譬への節も今の身の上。そが〳〵したる悲しさは、云ひ事は嘘になり、悪い事なら目くじら立て、寄つてかゝつて大概は、くぼい處へこめられて、誠となる人心。四百四病の病より、貧と悪事と混雑と、がんじ搦みの目つまりに、一方救へば又片々。お主に分ちは無けれども、左つや三つの頭よりも、屏風を突いては當の敵、障子を打つては仇人と、小弓に小矢の音を設めば、脅に腹は代へられず。とは云へ此まゝ犠牲を、双方無難にお救ひ申す、智慧才覺の廻りかね、血を吐く思ひの團三郎、すた〳〵に切り前なみ、どうぞお慈悲にお二方を

景季 不埒な野郎。

四人 取上げないヤ。

祐成 すりや、いかやうに申しても

四人 叶はぬ事だ。

祐剌 ムヽ。

ト思ひ入れ。

土常 いや、是非もなき二人が所存、實とや云はん、義とや云はん。これを救ふに詮方なく、思ひ出せ

ば文治の春、箱王丸まッこの如く、由井ヶ濱邊に引出だされ、堀の彌太郎云ひし如く、いづれにいづれ刃を當つべきと、切兼曾我ともいッつべき、思へば便なきこの有樣。

日立　アヽ、今日はいかなる悪日か。同じ月日に同じ訴へ、それゆゑにこそ無情なる、物の哀れを見る事も、一方ならぬ宿世の縁。爰らが差詰め頭役、命乞ひといふ所なれど、願つたところが所詮叶ふまい。さすれば傘一本、最前落したれば、持つて開く物は無し。先づだんまり。

閑坊　日頃心のよからぬ箱王、師の坊の意見も聞かず、放蕩惰弱が報ひ報つて、ハテ氣の毒な。

ト空うそぶく。

小藤　未練の繰り言。イザ、成敗。

ト立ちかゝる。祐成、團三郎立ちかゝるを、四人引附ける。よき時分より祐兼、以前の形、一腰を差し出かけ、窺ひ、この時ツカ／＼と前へ出て

祐兼　科きはまりし罪人なら、小藤太どのゝ手を下すまでもなく、拙者が成敗。

ト立ちかゝるを

忠常　見馴れぬ下郎、尾籠千萬

小藤　遠慮に及ばぬ。

結城 手の内御覽。

ト言ひ立ちかゝる、みな、善光、片貝、身を固いてきゝ、へ

碑川 汝等は受けたか、この太刀を待て

片貝 なんと何も匹夫の刃は受けぬ

ト言ひかける、結城思ひ入れあつて

結城 ナニ、匹夫でない、下郎でないとは

碑川 なんと。

結城 汝等の土産に名乗つてくれん。本國に鯨鐘と云ひ立てゝ、姿を變へし其こそ、結城左衞門、伊豆の次郎結城なるワ。

ト頭巾を脱ぎ、思ひ入れ。

結城 ナニ、汝等が

皆々 結城とのとな

小藤 面體知らぬをさひに、早と云ひ合せ

結城 其名を聞けば不足はあるまい。南無、覺悟。

ト立ちかゝる。皆々思ひ入れ。この時、茶屋の内よりお鷹、ツカ〳〵と出て祐兼を支へて、兩人を圍ひ

たか　イヤ、御成敗は成りますまい。

小藤　最前の茶屋女

祐兼　又ぞろおぬしが口車で

景季　罪人を助ける心か。

たか　イヤ、預かりまする。

祐成　すりや、科はそれと心得て。

たか　ハテ、本人を詮議より、名乘つて出た同類を、糺明なすが近道ゆゑ、この御書で預かりまする。

ト立文を出す。

忠常　ヤヽ「八幡の三郎行氏が妻、眞弓へ

四人　祐經判」

祐成　すりや其許が

小藤　八幡が妻とな。

たか　御存じなきは御尤も。石清水八幡にて云ひ號け。この高館へ下りしところ、工藤祐經さまの御內意にて、姿をやつし隱し目附。無成敗の事あらば、言上せよと、しるしの御判。

祐成　して、仲人を預ければ

犬坊　其方がよしなに。

たか　富樫が部屋にて、きつと糺明。

祐成　ア丶、運命つたなき籠鳥も

團三　富樫どの丶お情のふ……主從、忘れは置きませぬ。

祐成　とは云ふもの丶

團三　工藤の館。

たか　ハテ、お身の曇りも晴るゝ時は、奥や申さぬ手渡し。

禪司　重ね〴〵の御恩。ア丶、忝い。

月さ　この濟ぬ日に愚僧めを、詮議の日數、今年日日。

小藤　野太い事を。鎧師の越度。

月さ　イヤ、小林の朝三に申しつけ、陶器には入れましたが

忠常　その吉三こそ聞き及ぶ、安達の家中、佐藤定七が弟よな。
日女　左樣でござりまする。
小藤　まだも日延べを願ふなら、其方が檀家に、八百屋久兵衛と申すがあるか。
日女　如何にも、ござりまする。
小藤　その久兵衛が娘、八百屋お七、いつぞや片瀨參りの節、忝くも賴朝公の御舍弟、阿野の法橋全盛公
景季　江の島御參詣の折から、お目にとまり、殊の外の御懇望。
小藤　お七を勸め、全盛公へ差上げなば、それを功に百日の、日延べを願つて遣はさう。
日女　委細畏つてござりまする。
たか　左樣なれば、犬坊さまには
犬坊　鎧の儀、兩所の訴へ、父上へ。
小藤　切手は成家、計らひまするでござりませう。
忠常　忠常も立合ひ申さう。
四人　我れ／＼は兩人が警固。
禪司　左樣なれば

片貝　計まゝに
結城　一腰の明り立つまで
團三　萬事覺ふし直弓さま。
たゞ　必ずお案じなされまするな。
忠常　然らば何れも、結城、來やれ。
日女　馬衛もお供。
結城　サヽ、團三。
團三　まづ、ござりませう。

ト唄、時の鐘になり、皆々こなしよろしく、大壻丸に片貝、輝司坊、景時、荒次郎、儀七郎、三郎附き、跡よりお鷹、向うへ。忠常に結城、團三郎、日女附き、下座へ入る。小弥太、おそれ入ぐな、皆々こゝろ、ツイと入る。小弥太、團坊、結城残る。ト送り鳴物、時の鐘。

小弥　結城さま。
結城　近う。

小藤　この度我れ〳〵、全盛公の御謀叛に與みなし、皐月下旬の狩倉の留守を幸ひ

祐兼　事を計らん其ために、姿をやつし味方を集むる、手筈は上首尾。

小藤　して、その品は。

閑坊　そこは拔からぬこの閑坊、昨夜箱王下山を幸ひ、中ごを奪ひ取り、かねて申し合せし通り、差料にこしらへ、刀の箱へは似せ文を入れ置き、どうやら斯うやら科は箱王。イザ

ト右の刀箱、二重底より差し料にて拵へたる友切丸を出し、小藤太に渡す。

小藤　出かした閑坊。某、この友切丸を望むは、最前の如く、曾我の奴等に難癖附け、祐經を早く討たせ、所領を望まん我が計略。

祐兼　吉祥院にお七を上げさせ、全盛公を放蕩になし、とゞの詰まりは天下も我が物。

閑坊　肝腎の事を申し上げなんだ。その友切丸の目貫の金鷄、血をあやせば音を發す。心を附けて

小藤　合點だ。奇瑞といへば安達の寶、天國の短刀は、雨を呼ぶ稀代の劍ゆゑ、狩倉の節、狩場の篝を消し、賴朝を失ふ第一の道具。全盛公より金銀を以て、中間伴助といふ者を賴み、同家中の堀の彌藤次まで、渡し置けと奪ひ取らせる手段、この安否を聞きたいものだが。

トこなし。この前より六、出かけ、聞きゐて

六　その儀はお氣遣ひなされますな。即ちその伴助より、上首尾の手紙、ことづかつてござります。

イザ

ト書状を差出す。小藤次、口の中にて讀み

小藤　この文通では、首尾よく奪ひ取り、約束の如く、堺の彌藤次へ渡し置き、褒美の金にて、今は鶯の谷の太左衛門といふ町人……よし〳〵。

帖東　して、其方は。

六　下郎めは、堅い事には抜け目の無い、吉祥院の所化、學山といふ者でござりますが、色と酒とに身を持ち崩し、什物の當家の正筆、松竹梅の一軸を盗み出し、研屋の傳三へ質に置き、その金も四引に取られ、江戸のたゝすみならぬの為、髮を生やして當地へ上り、お馬の六と變名して、雲助様がなれの果まの。

帖東　すりや、吉祥院が所へ〳〵

六　ナニ、吉祥院が所へ

ト悄りする。

小藤　騒ぐな〳〵。なか〳〵見所のある奴、褒美をくれやう。まだ頼みたい仔細もある。

六　そこらが附け目、何なりと。併し、當地に足はとめ惡い。
祐兼　江戸へ行きがけ、駄賃の仕事。
小藤　この手で行かにやア、まだ外に
　ト友切丸へ思ひ入れ。
祐兼　祐兼は今日の樣子を
小藤　全盛公へ。
祐兼　急いで言上。
閉坊　拙者も御一緒。
小藤　然らばこれにて
六　重ねてお目見得。
祐兼　さらば。
小藤　來い。
　ト時の鐘の送りにて、祐兼、閉坊、向うへ。小藤太、六、下座へ、双方はひろ。直ぐに下座、パタ〳〵辻打ち、通り神樂にて、景季、小雪を連れ出で來り

景季　コレ、女性、なんでもマアおれが云ふ事を、承知してくれ〳〵。

小雪　イエ〳〵、そんなどころぢやござんせん。

景季　それも承知だ。聞けば君は、謀叛の兆があるさうだが、おれもその謀叛勝負大好きよ。随分承知だ。おぬしも、承知してくれ〳〵。

ト抱きつくを振り拂ひ

小雪　なんのこつちやいなア……これまで心を盡したる、お主の仇、兄の恥辱を晴らさんと、形見に持ちし蹴鞠まで、やみ〳〵奪ひ取られし上は、一旦この場を落ちのびて、頼朝どのを只一太刀

景季　尤もだ〳〵、さぞ口惜しからう。おれも腹が立つて堪らねえわえ。たつた一度、云ふ事をきいてくれたら、全盛公を味方に附け、其方の謀叛はおれが勝負する。エヽ、命取りめ。

トしなだれるを

小雪　エヽ、措きなさんせ。アレ、悪い事を

トいろ〳〵して拂ひ

これやモウ、鎌倉に足もとめられず。東の平氏を語らはん。

ト行かうとするを

景季　コレ、東の平氏を語らうとは有り難い。即ちおれだ。もう堪へられぬ。

　ト しがみつく所へ、日玄出て、この體を見て引離し

日玄　コレ、野郎、いかにおのれ性を變へたといつて、あらう事か、あるまい事か、眞晝間の無理口說き。頭こそ丸けれ、最前チラと見るよりも、顏の赤いに現なう、ストトントンと七草の、拍子を取らせる氣になつた。心を推してコレ男、顏の色よい返事が聞きたい。

　ト いやらしきこなし。兩人悄り。

景季　べら坊め、脚氣の藥は大嫌ひだ。それよりは、このお娘を

　ト また小雪にしなだれる。日玄、景季の胸づくしを取つて

日玄　コレ、間拔け、蝙蝠のやうな面で、あの子を取つて食はう、さうして愚僧を嫌ふのか。コレ、よくよくおのれ、物食ひがよければこそ、顏見世には幽靈を女房に持つて、素敵な御利生で生返らせたその報ひ、死替り、生替り、性は變へても惡緣深し。出家の望み、なんでもおぬしを

　ト こなしあるを

景季　エヽ、小ぢれつたい。

　ト 突きはなし

コレ、たつた一度

ト小寺に取りつく。此うち下座より六、何心なく出で、出合ひ頭に日文、六に取りつゝ見て

日文　ヤ、其方はどこで見たやうな。

ト六も日文を見て

六　さういふ御顔は古郡院、こりや堪らぬ。

ト振り引放して下座へ入る。此うち黒手、小寺にしなだれる。日文振り離し、三人ゴツチヤになる。

この時、六、向がいにかりかゝりし捉馬を見き出で、この體を見済まし

ハイ〳〵。

ト馬を追ひ放し、息杖にて尻をくらはせる。騒動になり、馬は離れて駈出し、三人の方へ來る。これに驚き、三人避け廻るな、馬追ひ歩き、トゞ黒手日文夢中になり、小寺と思ひ、黒手、日文の手を引き、花道へかゝり、小寺、獨りのあゆみになる。

黒手　お嬢、來なせ。

日文　アイ〳〵。

小寺　此まゝに、さうなやく〳〵。

ト曲撥、早三重になり、馬に追はれながら景季、日玄、嫌らしき振りにて向うへ入る。小雪、東の揚幕へ入る。六殘り、跡を見送り

六　思はず知らず吉祥院、早速の智慧で……あぶない事の。

ト切手を出し

今のドサクサに、こんな物を拾つたが。

トよく／＼見て

御狩場通用の切手二人。

トよき時分、後へ祐成、團三郎出かけ、窺ひ、これを聞いて思ひ入れあり、前へ出て

團三　卒爾ながら、拾つたとある品、ちやつと見せておくりやれ。

六　最前の旦那方。わしにやアとんと解りませぬ。

ト右の切手を團三郎に渡す。此方へ來て、兩人見て

祐成　裏には三老の名前。しかも二人。日頃望みの

團三　モシ。

ト喜び云ふな。

ト押へる。六、思ひ入れ。

貴様入用かは知らぬが、無心ながら買つて下さるまいか。

六　わしが持つて、何の役にたゝぬ代物。随分上げませう。

輔成　折角其方の拾つた品、只貰うては。

團三　得心の上は、最然受取つた一貫六百に

六　ナニ酒手がありやア。

ト喜ぶ。

輔成　サヽ、遠慮なしに。

ト錢を六に渡す。

六　ドレ、一杯ありつかうか。

ト通り神樂になり、行きかゝり、舌を出し、こなしあつて下座へ入る。跡に兩人、イツ〱と思ひ入れ。

輔成　イエヽ、悉い〱この切手さへ手に入らば、兄弟揃うて忍びこみ、最早望みを達せし心。

團三　いつぞや上日最早に奪はれるも、今日の月日を待ちうけ、いかにもしてこの切手を手に入れ、

願念晴らさせ申さんと、團三が一心、諸神の感應。チエ、、忝い〳〵。
ト喜び勇み思ひ入れ。始終通り神樂にて、下座より次郎七、以前のまゝ出で來り、兩人を見
て

次郎 ヤヽ、祐成さま、團三どのか。ヤレ、好い所で逢つた。逆澤瀉を持つて、今朝から尋ね歩いたが、どうさつしやる。サア、いま請けさつしやるか。どうさつしやる〳〵。
ト急いて云ふ。

祐成 あれ程昨日も、今宵までと得心ではないか。

團三 知つての通り手詰めの切端。明早朝までに差上げねば

次郎 措かつせいな〳〵。お株は利かない。此方にも手切れの模樣を急ぐは、今日中に祐兼さまが、買はうと仰しやるゆゑ、もう負けない。

祐成 すりや、祐兼がその鎧を

團三 さう成る時は曾我の滅亡。祐信さま、且は鬼王も留守のうち、滿江さまの思し召し。月小夜、團三は、生きても死んでも

祐成 どうしてなりと今宵が絶命。きつと調へ、請け戻すほどに

團二 どうぞそれまで。

次郎 なりませぬ〳〵。今日が今までも待たれぬなれど、片貝どのや鐡田坊どのが、たつての詫び。お紺に逢ふまでと、口説きを聞いておいた。いま請けざア置かりました。この足で治書さまへ、持つて行きますよ。

ト行きかゝるを

術成 それではどうも

ト取りつくを突きはなし

次郎 ドレ、金にして來ようか。

ト拍子神樂、向ふの鐘に合せ、次郎七向うへ走り入る。團三郎、切手を持ち起き上がり、跡見送り見かへりの所へ

小藤 うしやアがれ〳〵。

ト云ひながら、バタ〳〵、右の鳴り物にて、下手より小藤太、六を引つ立て、出會所へ、上手の台所、

貝次郎に傳兵衛を仕掛けたるを持ち、出で來り

切手の證文。置きやアがるな。

ト祐成、團三郎これを聞いて

祐團　ナニ、切手の紛失とは。

ト思ひ入れ。

忠常　今日當所に於て、狩場の切手改めの、燒印を据ゑんとせしところ、二人通用の切手一枚紛失。

小藤　場所をさまよふ怪しい匹夫、察するところ切手の盗人。出さぬに於ては眞二つ。

ト思ひ入れ。

六　アヽ、モシ／＼、どうしてマア、そんな惡氣がござりませう。と云つたところが、一通りぢやア疑ひは晴れますまい。云ふまいとは思ふが、斯うなつたら背に腹だ。

忠常　すりや、盗賊は、いよ／＼おのれ。

六　イヤ、盗み手は曾我の主從。

忠常　ナニ、祐成團三があの切手を

小藤　野太い奴等、動きやアがるな。

團三　ナニ、我れ／＼が切手を盗みしとは

祐成　この身に左樣な覺えはないぞ。

六　論より證據は懐を

ト祐成にかゝるを、團三郎引退け

團三　慮外者めが、いかにも切手は持つてはゐれど、こりやたつた今其方が、拾ひし由にて價を遣はし

祐成　買ひ調へたに違ひはない。云ひかけ致すと免さぬぞ。

六　ハヽヽヽ。仰しやつたり踵の皮。いかに身に火が附いたとて、ナニおれが拾つたを買つた。さうは人を抱きこまないものだ。さう云やア、おれが潔白を立てにやアならない。いかにも買つたら賣つたにしてやらうが、それにやア慥かに證據があるか。

團三　證據といふは鳥目を渡し

祐成　買ひ求めたが

六　べら坊め、錢はいくらも持つてゐるワ。

ト五六本出し

ソレ、この中に、證據があるか。

祐團　サア、それは。

三人　サア〳〵〳〵。

六　おいらぢやァないよ〳〵。

トこなし。

祐成　もうおのれ。

ト立ちかゝるを、團三郎ヂツと押へ

團三　こりや、やり事にかゝつたわえ。

ト引据ゑ、こなし。

忠常　言語に絶せし曾我殿原の境涯。せめて切手に極印据らば、憂き恥さらす甲斐もあらんが、無益の品を所持なすも、運のきはまり。何ともハヤ。

トこなし。祐成團三郎これを聞いて、思ひ入れ。手早く切手を出して見て

祐成　すりや、極印なきゆゑ

團三　この切手は……ホイ。

ト切手を捨て、兩人ヂツと思ひ入れ。すかさず小藤太、ツカ〳〵と寄つて、兩人が襟髪を摑み、ぐツと引据ゑ

小藤　大盜人め、動きやるがるな。何故あつて盜みをひろぐ。貧乏神の本社ゆゑ、食ふ事がならないで

兄弟主從云ひ合せ、盗み騙りをはたらくか。さういふ腐つた魂ひで、祐經さまを親の敵と覗ふけなが、盗賊夜盗のなまくら刃金、痩浪人の腕先で、殿の五體へ刃が立つものか。身の程知らぬ大べら坊め。

ト兩人を蹴倒す。起上がつてキッと無念の思ひ入れ。

なんだ〳〵。無念なか。口惜しいか。コリヤ、ヤイ、怪我と工藤は一家中、願が叶ふなら逆ひかがみ、お臺所へ無心に來い。犬坊さまのお召し古し、祐經の頭ぐらゐはくれてやる。立ち寄らば大樹の陰、長い物には卷かれろだ。見りやア見るほど。以後の見せしめ。

ト有あふ割り木にて、兩人を散々にくらはす。此うち團三郎、祐成をかばふ心あるべし。ト、兩人、衣類破れ、引拔きなり、ザッと無念の思ひ入れあつて

祐成　いかに日陰の我れ〳〵とて、斯くまで運命拙なきものか。願ひある身と何事も、愼しむ甲斐も兄弟主從、無實の罪におちいつて、人の前にて面恥も、元は本意の

團三　モシ、そのお悔みもさる事ながら、これ皆孝を基とする、家來は忠に、腸も裂かるゝ恥辱もいとはねど、この身の甲斐が廻りかね、する事なす事くひ違ふ、この世の苦患、末世の笑ひ。諸佛薩埵の冥加にも、盡き果てたるか。この態は

祐園　思へば〳〵、口惜しい。

ト無念の思ひ入れ、立ちかゝるを、忠常押へて

忠常　コリヤ、短慮は功をなさずぢやぞ。

トぢつと引据ゑる。小藤太、有あふ焼印を取つて立ちかゝり

小藤　まだ〳〵、イケまだ〳〵したしやつ面へ、盗賊ひろいだ後日の極印。

ト團三郎を引寄せ、顔へ焼印を捺しかける。忠常、小藤太を引廻し、落ちたる切手を手早く取つて、團三郎が顔へ當て、又來る。小藤太が手を持ち添へ、右の切手へ焼印を捺す。皆々思ひ入れ。

ヤ、團三が面と思ひの外

六　忠常さまの計らひで

祐園　切手に焼印据りしは

忠常　今こそ揃ふ狩場の通用、仁政の表を立てゝ、面へ捺したる極印は。それ

ト投げてやる。團三郎取上げ

團三　すりや、此まゝに

祐成　この切手を

小藤　さうは成らない。焼印すれば定まる切手。

ト　それを。

ト取りにかゝるを突き廻し

祐成　イヤ、團三が顔へ

團三　据りし極印。

忠常　お咎めあらば忠常が、馬の日取り減ずるばかり。

祐團　チエヽ、忝い。

ト戴く

小藤　然らば此まゝ。

忠常　今日の次第を言上なさん。

六　下郎もそれまで

祐成　何から御礼を

忠常　イヤ、成家大儀。

四建目



建目



小藤　ハツ。

ト こなし。唄、時の鐘になり、皆々思ひ入れよろしく、忠常、六、向うへ、小藤太、下座へ入る。祐成、團三郎残り

祐成　エヽ、忝い〳〵。誠の切手が手に入る上は

團三　逆澤瀉の鎧の才覺。

兩人　少とも早う。

ト 行かうとする。この時上手より車力四人、地車を曳き出る。同じく下座より四人、地車を曳き出て双方より一時に兩人を留め

八人　兩人、動くな。

ト 取かこむ。

團三　こりや、何とする。

車一　斯う取巻いたら知れたこと

車二　さる人に頼まれて

車三　うぬが持つたる狩場の切手

軍四　望むは定めて狩倉に

軍五　紛れ込まんといふ企み。

軍六　渡して置いちやア夜の目が合はぬ。

軍七　油斷大敵、おいらが寄つて

軍八　取返しに來た。

八人　キリ〳〵渡せ。

祐成　さては成家が頼みよな。

團三　あなたには少つとも早う。

祐成　でも、此まゝ見捨てゝ

團三　ハテ、覺悟はすと

ト思ひ入れ。祐成行かうとするを、八人とめる。團三郎ちよつと立廻りあつて、祐成連れて花道へかかり、振りかへる。

これ持つて、ござりませ。

ト切手を投げる。祐成取上げる。

祐成　さうぢや。

ト早三重、時の鐘にて、向うへ走り入る。あとは立廻りほぐれて

車一　切手を吐きやア、團三を疊め。

八人　やらぬワ。

團三　ほざいたりなガラクタめら。牛頭馬頭めら。所は砥上の地車で、ふんぢがつたる大八車、團三が腨は糸車でも、御所車の用ひある、丁子車の威を借りて、相手欲しさに火の車、憂目を見せる、覺悟なせ。

八人　やらぬワ。

トちやつと立廻り、見得。これより誂らへの鳴り物になり、團三郎、八人を相手に面白き車タテ、存分にあつて、トゞ八人を切り散らすところへ、小藤太窺ひ寄り、切りつけるを、受けとめて見得。また鳴り物變つて兩人、草土手をカセに花々しき立廻りあつて、よきキツカケに車力一「うぬを」と團三郎にかゝるを突き廻す。小藤太、團三郎に切りつけるはずみ、思はず車力一を切り倒す。ト薄ドロ〳〵にて、目貫の金鷄一聲を發する。團三郎思ひ入れ。

團三　あの鷄は。

ト刀へ目を附ける。小藤太悧り、袖にて隱す。關三郎キツと思ひ入れ。この見得、ツケヨにて、よろしく

幕

四建目　城前寺の場

役名——工藤の奥方、梛の葉。祐信妻、滿江。鬼王女房、月小夜。甘縄彌太夫實は赤澤十內。奥女中、宇佐美。同、久須美。同、小由留木。同、袖浦。同、星の井。百足屋の手代、次郎七。中間、ぶる平。同、眼八。

本舞臺、三間の間、正面、曾我中村城前寺の外がまへ、誂らへの築地塀、內より見越しの梅、咲亂れし體。双盤にて幕明く。

ト揚幕より、ぶる平、よい〳〵の中間にて、鋲打ちの至つて古き女乘り物を擔ぎ、後肩は眼八、これも生醉ひの中間にて、擔ぎ出で來り花道にて

眼八　これサぶる平、よい〳〵の癖に、もちつと靜かに歩かぬかえ。

ぶる　エヽ、よくこの男は動き泣きをする。こんな輕い仕事を、精出して歩かぬかい。アヽ、また醉つたな〳〵。

眼八　醉つてもよい。われが醉て吞ンはしまひし。コレ、腹がへつた。靜かに步け。

ぶる　エヽ、埒の明かねえ。步けと云ふに。

ト此うち矢張り双盤にて、兩人捨ぜりふ云ひながら、やう〳〵本舞臺へ來り、眼八肩をよけて乘り物をハアヽヨリ下ろし

眼八　おらアもう否だ。擔がない〳〵。わればかり、擔いて行け〳〵。

ぶる　こら坊め、獨りで擔かれるものか。城前寺はもう向うだ。サア、擔げ〳〵。

眼八　いや〳〵、否だ〳〵。駕籠を擔ぐのも、腹がへつて成るものか。今朝から飯も食はせないで、なんで重荷が擔げるものか。それだから脅我さまの仕事は、否だと云ふが無理か。

ぶる　それだといつて、われが歸つて、おれ一人で舁かれるものか。コレ、お供にごさつた月小夜さまが、花を買ひに戾らしつたゞ、いま來さしつたら、大福餠でも食はせるから、もう少つとだゞ擔げ擔け。

眼八　否だ〳〵。大福餠でナニ腹がこたへるものか。あんまりひもじいから、跡の門前で濁り酒を、十二がとゞろ吞んだら、一體ヒヨロ〳〵するワ。もう擔がない〳〵。われ一人で、舁いてゆけ〳〵。

ト小言を云ひながら、花道の方へ行くを、ぶる平とめて

ぶる　これサ、さう云つたとて、一人で擔けるものか。もう少つとだワ、やつてくれ〳〵。

眼八　否だ〳〵。飯も食はせないで、仕事が出來るものか。モウ〳〵、曾我さまの雇ひは、今度から、お斷りだ〳〵。

ぶる　ハテマア、今日はやつてくれろよ。

眼八　否だ〳〵。腹がへつて、どう重荷が擔げるものか。

ト捨ぜりふ云ひながら、振り切つて向うへ引返し入る。ぶる平、思ひ入れあつて

ぶる　あゝ、情の強い間抜け野郎め。うぬがやらずは、おれ一人で擔いで行くわえ。

ト捨ぜりふにて先肩を入れたり、後より乘り物を押して見たり、先棒を引ッ張つて見たり、いろ〳〵して困る思ひ入れ。

あゝ、月小夜さまが來たら、擔いでもらはうか。こいつは一人ではやり憎いわえ。

トいろ〳〵してゐる、この時、行列三重になり、揚げ幕より侍ひ二人、庵に木瓜の紋附いたる花色の絹羽織、袴にて、『片寄れ〳〵』と出てくる。次に別の侍ひ一人、同じ形にて、猩々緋の袋をかけし長刀、次に菊壽の紋附いたる對の挾み箱二行並び、次に彌太夫、老けたる拵へ、麻上下、股立ちにて出でくる。次に菊壽の模様染めたる看板の陸尺四人、結構なる鋲打ちの乘り物を

撞ぎ、跡より宇佐美、久須美、小由留木、袖浦、岩の井、いづれもひらり帽子、奥女中にて駕籠に附き、跡より茶辨當持ち、手代りの侍四、中間大勢附き、出てくる。舞臺にはぶる平、駕籠をおろしにしてゐる。此の侍ひ口々に

侍ひ　乗り物を片寄せぬか。脇へ寄らぬか〳〵。片寄せぬか〳〵。

　ト口々に云ひながら、兩人駕籠へ寄つて

片寄れと申すに、片寄せぬか〳〵。

　トこれにて、ぶる平、うろたへる。

彌太　おゝ、侍ひ中。片寄せさつしやい。

侍ひ　ヤイ、退き居らぬか〳〵。

　ト駕籠へ手を掛け、片寄せんとする。ぶる平、腹を立て

ぶる　ヘヽ、この衆は、いま退くわな。イケせわしない。

侍ひ　道の邪魔だわ。早く退けと申すに。

ぶる　それでも、一人でさう手が廻るものか。

彌太　田舎侍だ。この駕籠を[illegible]がよい。

侍ひ　エヽ、片寄せろと申すに、片寄せぬかく。

ト ぶろ平を突き飛ばし、駕籠を手荒く取つて片寄せんとする。この時誤まつて、駕籠の底抜け、中より滿江、襠裲衣裳、老母の拵らへにて、ころくと轉げ出る。側にありし切れくの、繼ぎにて縫ひたる米袋と、錢三百の紙包み、駕籠より落ちるを、滿江これを取集める思ひ入れ。皆々見て

皆々　アレく、駕籠の底が抜けて、婆アが落ちました。ハヽヽヽヽヽ。

ト 笑ふ。

宇佐　これはしたり、お武家方のお局と見えるお方。

久須　嘲り笑ふは却つて慮外。

小山　奧樣のお聞きに達し、いかなる仰せあらうやら。

袖浦　お氣の毒なこの災難。

星井　お供の面々、高笑ひは何事。お笑止にはござんせぬか。

女皆　鎭まりませうぞ。

彌太　イヤく、大事ござらぬ。大道をふさげ、往來の邪魔をひろぐ奴、取除ける駕籠の底、抜けても

損じても、大事ござらぬ〳〵。

ぶる　コレ、旦那様。なぜ大事ない。駕籠の底を抜いても済むか。元のやうに直して返せ〳〵。太い奴等だ。

彌太　ヤア、過言を吐かす。ぶち据ゑさつしやい。

侍ひ　心得ました。うぬ、慮外を吐かすか。

ト駈け寄つて駕籠を踏みのけ、ぶる平を打擲する。満江驚き、縋つてとめるを、彌太夫、引退けるはずみに、抱へゐたる袋の米こぼれ、紙包みの錢もみだけて落ちる。満江は、いろ〳〵心遣ひ。皆々ぶる平を打つ。此うち矢張り双盤。向うより月小夜、樒の花を四五本持ち、葛手桶に水を汲みしを提げて出て来り、この體を見て、ツカ〳〵と走り来り、皆々を引退け、満江を囲ふ。ぶる平は打たれたまゝ、這々に下座へはひる。侍ひ立ちかゝるを、月小夜キツと締めあげる。満江見て

満江　すりや〳〵、月小夜、おちやつたか。

月小　ハイ。御老母様、お怪我はござりませぬか。見ますれば駕籠も損じた様子。いかに御大家のお供ぢやとて、この我まゝは何事でござりまする。もし、お侍ひ様、なに誤まりにこの狼藉。様子が

あらう、譯がござりませう。小身なれども、此方も武家の御母公、女ながらも、私しも、お供いたした役目でござんす。様子に依つては免しませぬぞ。

ト侍ひを見事に投げ、キッとなる。

彌太　ヤア、武士の家來に慮外な女め。

ト立ちかゝる。

月小　イヤ、此方も武家の御老母。

彌太　して又いづれの

月小　小身なれども

ト云はうとする。

滿江　アヽコレ、かゝる途中のこの仕儀にて、屋敷のその名を出すのも、却つて夫の、ナ。

ト家名を包む思ひ入れ。

彌太　屋敷を云はぬは、そんならうぬ等は僞りもの。矢張り町家の騙りだな。

滿江　アヽイヤ、全く以て。

彌太　武家の妻なら、家名を聞かうか。

滿江　サアそれは。

彌太　云はねば僞り、侍ひ衆。

侍ひ　心得ました……女め、おのれ。

　トかゝるを、月小夜立廻り、よろしくあつて、

月小　すりや御主人の御家名を、申さぬ時は我れ〳〵を、僞り騙りと御意なさるか。

彌太　おんでもない事。紛れ者め。

月小　左様ござらば御老母樣。

滿江　是非に及ばぬ、我が夫の、家名をとくと……サヽ申すもいはゞ面ぶせ。

月小　包むと仰せあるゆゑに、云はねば却つて僞りと、悪口あるに是非なくも、明かさにやならぬ主人の御家名、昔と違ひ只今は、時代につれて御小身、曾我の太郎祐信の奥滿江、この城前寺へ御參り

彌太　すりやアノ當時小身の。

皆々　曾我の太郎祐信さまの

女皆　御老母樣でござりまするか。

滿江　恥かしながら、妾は滿江。
月小　此方家名を名乘る上は、申さずとても各々方の、主人の御家名、女ながらも私しが、承りたう存じまする。
彌太　聞いたら定めて膽玉がでんぐり返らう。コレ、女、身共が主人は誰れあらう。當時鎌倉表にて、一𦾔職を賜はつたる、
月小　エ。すりやアノ曾我と。
滿江　一家のちなみ。
彌太　お覺えめでたき。
ト云はうとする、乘り物の中にて
梛葉　彌太夫、扣へい。それへ參つて自らが、とくとお目もじ致すであらう。
ト替つた合ひ方になり、乘り物の戸を手廻りの女中さし寄つて開き、中ぬきを直す。中より梛の葉、襠裲衣裳にて出て、兩人を見て思ひ入れ。
駕籠の中にてあらましを、承つて驚き入る。さてはあなたが曾我の御老母、滿江さまでござります るか。私しことは祐經が妻梛の葉、絕えて久しき御一家の、疎遠の程は幾重にも、サヽ、御母

公様には、まづ〱あれへ。

ト満江が手を取り、上座へ敬まふ。満江、思ひ入れあつて

満江　アイヤ、憚りながら御挨拶。さてはあなたが、工藤の奥方、梛の葉さまでござりまするか。

梛葉　いかにも左様。申さば近しき御一家を、これまで疎遠の申し譯。

満江　イヤ、その儀なら此方も、同じ疎遠に致せしも、曾我と工藤は敵同士。

彌太　ナニ敵とは。

ト立ちかゝる。

月小　アイヤ、敵とは方々の、並みゐる中に誰れあらう。近しき一家祐信の、妻満江が佛参の、供も僅かに取分けて、見る甲斐もなき私し風情。女子一人を杖柱。大勢お連れ遊ばせし、梛の葉さまの手前と申し、御寺にあぐる布施物まで、取散らしたるこの體裁、面目ないと申しませうか。これが以前は河津の妻、兄弟二人の御母公の、御有様かと存じまして、思はず涙が

ト思ひ入れあつて、こぼれし米や布施物をソツト隠して涙を押へ

お恥かしう存じまする。

ト思ひ入れ。梛の葉もこなしあつて

椰葉　見ればあなたに附添ふ女子、曾我のお家に由縁の者か。ハテ、奥ゆかしい。

ト思ひ入れあり

して又、其方は何者の

月小　ハイ、お尋ねござつて私しが、夫の家名、この身の上、申し上ぐるも何とやら。河津の三郎祐安が、譜代の家來も只今は、曾我のお家へつけ渡り、お聞きもあらん小身の、お家の束ねも仕る、小祿ながら家老職、その名も鬼王新左衛門、鬼の女房に鬼神とも、姿も辻の厄神に、等しき形の月小夜が、思ひがけなきこのお目見得、憚りながら椰の葉さま、お見知り置かれ下さりませ。

トきつと思ひ入れ。

椰葉　さこそと妾が推量に違はず、曾我の忠臣鬼王とやらへに連れそふ月小夜、聞き及びしに違ひなう

ハテサテ、悧發な女子ぢやの。

月小　奥様のお詞、冥加なき身の仕合せ、有り難う存じまする。

滿江　いはゞ左衛門祐經さまのお連れ合ひ、聞き及びたる椰の葉さま。

椰葉　あなたが曾我の滿江さま。附きそふ女子は忠義の月小夜。

滿江　思ひがけなう初春に

椰葉　ハテ、珍らしう

月小　御對面仕りました。

ト椰の葉目を附けて思ひ入れ。

宇佐　いま奥方の仰せにて、承つたる御一家内。

久須　舛我の御因果、滿江さま。

小山　左樣と存せず。この場の御無禮。

袖浦　附きそひましたる私しどもまで、近頃以てお氣の毒。

鳥井　ひとへに御容赦

女五　お詫び申すでございませう。

ト手を下げて敬ふ。滿江、氣の毒なる思ひ入れにて

滿江　これは／＼、女中方、詫もないその御挨拶。却つて胸の痛み入る。殊に今日菩提所たる、この城前寺に參詣。それも年明けやう／＼と、命日ゆゑにこの佛參。

椰葉　その今日の御佛參、命日と仰せあるは、申さずとても過行き給ふ、河津の三郎祐安さまの、お墓へ參詣遊ばさるゝ、路次に於てのこの狼藉。

彌太　アイヤ、奥方、別に狼藉な儀はござりませぬ。申さば曾我の駕籠の者、過言を申したばつかりに斯樣な事が出來いたした。毛頭身共が存じた事でない。御老母樣、サ、キリ〳〵歩んでお歸りなされい。お腰が拔けたら彌太夫が、お腰を立てゝ

滿江　母が老眼なる上に、それとは定かならざれど、なにさま覺えの其方の面體。

ト滿江へ立ちかゝるをキツとなつて、滿江よく〳〵見て

ト思ひ入れ。

彌太　覺えがあらうが、あるまいが、キリ〳〵立つて

ト引ツ立てんとする。月小夜立ちかゝる。

椰葉　彌太夫扣へい。

彌太　ハツ。

椰葉　申さば今日の供廻り、下郎を預かる其方が、かゝる無禮を働くは、女子と思うて椰の葉を、そちや蔑らに致すのか。

彌太　アイヤ、全く以て。

椰葉　左樣でなくば、扣へてゐや。

彌太 ハツ、誤まり奉つてござりまする。

椰葉 コリヤ、手廻りの宇佐美、久須美、手箱を持ちや。

兩人 ハツ。

ト兩人乘り物の中より誂らへの亂れ箱を持ち行く。椰の葉、中より三百兩を出させ、宇佐美に囁く。心得て、三百兩を紫の袱紗に包み、扇の上にのせ、滿江が前へ持ち行く。亂れ箱は久須美、乘り物の中へ持ち行く。宇佐美、手をつかへ

宇佐 主人椰の葉申しつけましたるは、御隱居樣とも心づかず、家來が斯樣の御無禮と申し、見ますれば御乘り物も損ぜし體。申し譯もなき事ども。何とぞ粗末なれども、此方の乘り物に召され、又この品は、お附き申せし月小夜どの、そこねし、お駕籠の

ト思ひ入れあり

サ、その繕ひと申せば、どうやら改まりまする間、何卒御受納下さるやう、偏へにお願ひ申し上げまする。

ト差出す。滿江、月小夜、思ひ入れあつて

滿江 これは〳〵、お心づかれましたる椰の葉さまのお詞。コレ、月小夜、其方も詳しう聞いたであら

うの。

月小　左樣でござりまする。申さばお出合ひ頭とは申すものゝ、御家來同士の口論より、駕籠の損じにお恥かしい、布施物までも取散らされ。

ト思ひ入れあつて

誠に申さば珍事ちうやう。それをあなたの此やうに、金子を以ての御挨拶。近頃以て

ト思ひ入れあつて

この儀はどうも、ナ、申し、御老母樣。

滿江　そりや月小夜が云やる通り、駕籠の損じを云ひ立てに、ねだり事云ふ妾でもござりませぬ。それにいはれぬ贈り物、身貧な曾我と侮つて、大枚金も三包みの、これ見よがしの賜物は、工藤のお家は兎も角も、身貧な曾我は受けませぬ。

椰葉　サヽ、その御立腹は御尤もながら、御老母樣のお乘り物、損ぜさせしは家來が誤まり。

ト滿江へ立ち寄つて思ひ入れ。

月小　イヤ、憚りながら椰の葉さま、そりやお詞が違ひまする。誠あなたの御胸中。この月小夜が恐れ多くも、申して見ませうものなれば、曾我と工藤は敵同士、その恨みある不仲ゆゑ、何をか恩に

着せんすと、金で面はるなされ方、それに相違は、憚りながらござりますまい。

椰葉　月小夜、扣へや。下々の身を以て、个の詞は何とやら。近しき一家のその中を、敵同士とはそりや何事、サ、その敵同士の譯聞かう。

月小　アイ、お尋ねならば申しませう。云はゞあなたのお連れ合ひ、左衛門さまには

滿江　コリヤ〳〵、月小夜、其方が何の譯知つて。存じた者はこの滿江、コレ、扣へてゐや。……椰の葉さま、連合ひの河津の三郎どのを、遠矢にかけしは左衛門さま、イヤサ、祐經どのでござらうがの。

椰葉　ハテ、存じも寄らぬそのお詞。して祐經が河津さまを、遠矢にかけしと申すには、何ぞ證據が

滿江　ござりまする。敵の證據は即ち爰に。

ト懐中より袱紗に包みし澤瀉形の矢の根を出し

曾々がこういふ椰の葉どの、矢の根作りに澤瀉形、平家の身内に銘打と、人も知つたる鍛冶どの名、その銘號を學ぶもの、金石どのより外に無い。その時、それゆゑ敵と申したが、この滿江が誤まりでござるか。椰の葉どの、これでも證據になりませぬか。

ト矢の根を差付け、キツとなる。椰の葉、思ひ入れあつて

梛葉　證據とござらばその矢の根、この梛の葉が、拜見いたしたうござりまする。

滿江　卽ちこれが慥かな證據。

ト渡す。梛の葉取つて思ひ入れあり。

梛葉　無銘なれども澤瀉形、仰せに違はぬ能登どの流、

滿江　なんと違ひはござりますまい。

ト思ひ入れ。よき時分より次郎七、鎧を擔ぎ、後へ出かゝり、窺ひゐて

次郎　月小夜さん、いゝ所で逢ひました。

月小　ヤ、其方は百足屋の手代

ト術なき思ひ入れ。

次郎　アイ、次郎七でござります。モシ、どなたも御免なされませ。コレ、月小夜さん、先刻も弟御の團三さんに逢つて掛け合つたが、いつも解らぬ御挨拶。モシ、このマア鎧は、どうでも曾我では請けさつしやりませぬか。

トこれにて滿江、月小夜、心づかひあつて

月小　アヽ、コレ、それを爰で其やうに、聲高に云はれてはナ

次郎　ハテ、ようござりますわな。今度この度請けさつしやらいで、いつ請ける折があらう。いはゞ高金の百兩、祐成さまが大磯で、虎が揚代入用に、差詰まつてのお頼みゆゑ、フイと乘つたはこの鎧、申さば上から曾我さまへ、お預けあつた品ゆゑに、さう延引もあるまいと、思ひの外にべんべんだらり。請けさつしやらねばお好みの、祐兼さまへ上げまするが、どうして下さる月小夜さま、三百兩は出來ませぬかな。

ト此うち櫃の鎧へ思ひ入れ。月小夜、こなしあつて

月小　尤もぢや〳〵。請けねばならぬその品ゆゑ、いろ〳〵苦勞してゐれど、金が先立つこの手詰め。殊に大金三百兩。

ト前なる金へ思ひ入れあり。

見す〳〵金がありながら、どうもあの金はつかりは。

椰草　お召しなされたお乘り物、損じましたる修覆のため、お詫び申して差上げる金、何卒御受納下されて。

満江　サ、その金あれば月小夜が、鎧の難もあるまいに、遣ふ事さへ心に任せず。

次郎　ハヽ、見れば目先に二包みの、金は慥かに三百兩。あの金借りたらこの鎧、無難に曾我の手に入

るに、なぜあの金をあの儘に。

月小　サ、工藤のお家のあの金は、よし其まゝに遣へよと、仰せあつても譯あつて、曾我に由緣の者どもが、御恩をうけては草葉の蔭、祐安さまへ。

梛葉　ヤ。

ト思ひ入れ。

月小　サ、祐成さまの放埒に、お遣ひなされたその金を、どうマアお家と由緣ある、祐經さまの奥方より、義理と致して月小夜は、命にかへてもその金は、決してお借り申しませぬ。

梛葉　すりや梛の葉が御母公へ、慮外いたしてお道具の、損ねた詫びに御修覆の、その代金と差出すを斷り云やるを此方から、是非にと申すも何とやら。左樣ござらば其まゝに、成る程お貸し申しませぬ。併し一旦差出した、包みのまゝの三百金、此方とても引かれぬ譯。幸ひ參つたその町人、聞けば連れ合ひ祐經どの、役目を受けて八領の、鎧を集むるその一つ、今に揃はぬ逆澤瀉、この梛の葉が求めるほどに、鎧は卽ち自らへ。金子を持つて、爰を立ちや。

次郎　エヽ、すりや私しのこの鎧を

滿江　梛の葉どのゝ手に入らば、賴朝公へ申し譯、いよ〳〵夫祐信の

月小　御難儀重なる逆澤瀉、何とあなたが仰しやるとも、鎧はどうも

次郎　エヽ、おかつしやい。眼前に耳を揃へて三百兩、これを見て、どうして變替へが……ヘヽヽヽ
これは近頃有り難い。奥方樣のよいお裁き。然らば鎧は差上げます。お金は即ち私しが

ト取らうとする。月小夜支へて

月小　アヽコレ、その鎧を他家のお方へ渡しては、曾我の御難儀、是非とも此方が請ける樣に、長いと
は云はぬ、僅か四五日

次郎　イエ／＼、待たれぬ／＼。ハイ／＼／＼、鎧はこれへ差置きます。お金は私しが受取りまして

月小　イヤ／＼、どうも外へ遣つては

滿江　祐信どのゝ難儀といひ、月小夜、是非とも譯云うて

月小　外手へ何しに遣はしませう。必ず氣遣ひなされますな。

椰葉　月小夜、待ちや。外手へ決して渡さぬと、立派に其方は今云やるが、コレ、外手とはそりや何事
連れ合ひ左衞門祐經に、譜家に傳はる八領の、鎧を集むるこの度の役目。外七領の鎧は揃へど、
曾我どののばかり延引ゆゑ、側で見る目の笑止さに、この椰の葉が買ひ取るを、外手と云やるは心
得違ひ。集むる役目の工藤の屋敷。それを其方いまの挨拶。詞が違ふぞ。コリヤヤイ、女子と思

うて自らを、陪臣づれが心から、阿房にしやるか。サ、それ聞かう。

月小　イエ、全く以て。

梛葉　然らば其方は扣へてゐや。

月小　サ、左様あつては此方の

梛葉　難儀とならば、なぜ差上げぬ。

月小　サ、その儀は何とも

梛葉　云ひ譯無いか。

月小　サアそれは。

葉　サア

月小　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

梛葉　ア、誠に譬へに云ふ通り

彌太　貧を致せば鈍するとは、これを申すか。ハヽヽヽヽ。

ト嘲笑ふ。滿江、思ひ入れあつて

滿江　アヽ、四百四病の病より……月小夜
月小　御と母樣。
　　ト思ひ入れあり
　幸いは茲でござりませう。
　　ト兩人ヂツとなる。
標平　町人、その金子も歸れ。
次郎　左樣なればこの鎧、いよ／＼あなたが
　　ト鎧櫃の前へ持ち行く。
標平　詞は違へぬ。早う立て。
次郎　エヽ、有り難い。
　　ト金を取上げる。
侍皆　立ちませい／＼。トがりませい／＼。
次郎　ハイ／＼／＼、御免なされませ／＼。
　ト此の科白になり、三百兩を懐へ、嬉しさにうろたへ、向うへ走り入る。滿江、月小夜、木[illegible]

なし。

梛葉　鎧を受取る上からは、この梛の葉が祐經どのへ、差上げまするに、誰か批判を

ト兩人を尻目にかけ、鎧の包みをほどき、よく〳〵見て

ヤヽ、こりや逆澤瀉の鎧なれども、慥かに似せ物。

滿江　エヽ、ナニその鎧が似せ物とや。

月小　いつの間にかは摺りかへたか。思へば企みしあの町人。

彌太　者ども、追ひかけて捕へ參れ。

皆々　心得ました。

ト立ちかゝるを

梛葉　ヤレ、騷ぐまい。皆扣へい。

皆々　ハツ。

梛葉　かゝる企みを致すもの、いつまであたりにうろたへ居らん。女子のわしとあなどつて、申し譯なきその似せ物、館へとては持參はならぬ。世上へ聞へぬ其うちに、鎧はあたりへ其まゝに。コリヤ、宇佐美、久須美の兩人は、その鎧、あれなる方へ。

ト揃調する。

兩人 畏りました。

ト矢張り合ひ方にて、二人寄つて鎧を荷ひ、月小夜の前のあたりへ差置き、扣へる。

榛葉 今騙られたは此方の不調法、咋なきうるその鎧、捨てゝ歸らば心が殘らぬ。それゆゑ直ぐさま鎧は捨てゝ。

ト思ひ入れ。月小夜目を附け

月小 すりや、その鎧は似せ物ゆゑ、あなたは御持參なされませぬか。

榛葉 ハテ、持ち歸つたとて、正銘ならねば何の益。此方は、巷へ捨てゝ立歸る。

月小 お捨てなされたお道具は、通りかゝりし私しども、拾ひましても

榛葉 何しに此方、構ひござらぬ。誠に捨てたあの鎧、好み手あらば拾うたとて、工藤の家に構ひはない。

月小 左樣ござらば明樣の、お捨てなされたこの鎧。曾我の陪臣新左衞門に、連れ添ひまする月小夜が取上げましても

滿江 捨てたとあれば

榛葉 いづれの誰れが拾ふとまゝ。

月小　左樣ござらば月小夜が、暫く鎧は、慥かに拾ひ
梛葉　曾我の難儀を
滿江　アヽ、重々あつき
月小　御恩のほど、敵ながらも
梛葉　回向の戒名。

ト懷中より結構なる扉表具の戒名を出し、廣げ見せる。滿江、月小夜、目を附けて思ひ入れ。

滿江　母が老眼なか／＼に、定かならねど慥かに法名。
月小　玄峯院殿芝劍提霜居士……ヤ、それぞ御主人
梛葉　河津の三郎祐安さま。
滿江　その命日は
梛葉　安元二年神無月。
月小　中の十日と記せしは、さては跡とふ
梛葉　心ばかりの今日の佛參。

蒲江　アヽ、奇特といはんが、敵の同胸は
櫻菜　見ごろ敵より、譯なき事を。
月小　丁も最前の矢の根の證據、
櫻菜　すりやアノこれを

ト矢の根を出す。

彌太　鏃は匠銘、彌太夫が

ト立ちかゝる。月小夜、ちやつと立廻り。

櫻菜　エイ。

ト矢の根を打つ。彌太夫に當り、立ち身にて苦しむ。月小夜見て

月小　この手裏劍は花笠どの流。
蒲江　夫を射とめし
櫻菜　矢の根の證據は即ち家來に
月小　打ちかけ給ふは
櫻菜　これぞ二心の、河津の馬盗ひ。

月小　さては赤澤十内が

滿江　古主に刃向ふ人面獸心。

梛葉　柏ヶ峠を眼前に

滿江　その時手引きの

梛葉　慥かに曲者。

彌太　それ知られたら

ト拔いて滿江へ切つて行くを、月小夜立廻つて刀を打ち落し、取つて押へる。

女皆　彌太夫どのに

皆々　刃向ふ女。

ト皆々立ちかゝる。

梛葉　者ども、扣へい。あの者こそはその以前、河津に仕へし二心の武士。當の敵は、月小夜其方へ。

月小　御辭退申さず御家來は、月小夜、申し請けました。

ト彌太夫にとゞめを刺す。

滿江　オヽ、夫の敵を

ト思ひ入れあり

天晴れ働き。

トこの時、入相の鐘鳴る。

椰葉　最早黄昏。

女九　灯の用意。

中間　ハツ。

ト奥に木瓜の箱提灯六張、左右より出す。

満江　然らば此まゝ。

椰葉　付花へよしなに

月小　椰の葉さま。

椰葉　月小夜、無事で。

月小　ハツ。

ト錦へ思ひ入れあり

御恩の程は

梛葉　ア、コレ。
ト木の頭。満江こなしあつて、立上がらんとして老足の、よろ〱となる。月小夜立寄り
月小　サ、お立ち遊ばされませう。
ト木のキザミ、よろしく、この引ッ張りにて、ひやうし　幕

五建目大詰　箱根山對面の場　淨瑠璃　大磯驛の全盛 化粧坂の新妓　人來鳥箱根兒髷　常磐津連中

役名――工藤左衞門祐經。曾我十郎祐成、化粧坂の少將實ハ曾我五郎時致。近江の小藤太成家。八幡の三郎行氏。小林の朝日丸。大磯の虎。手越の少將。箱根の稚兒、閉坊丸。

本舞臺、三間の間、向う一面の金襖、揚げ障子の高二重。上の方に誂らへの大衝立、左右網代の袖垣。下の方、大柱、梅の立ち樹。日覆より紅白の見事なる吊り枝。上の方よき所に振りよき松の登り木。舞臺先、雨落より綺麗なる松板の並木梢を見せ、すべて箱根山の宿坊、奥殿のかゝりよろしく、幕の内より閉坊丸、八丁笠、手拭にて顔を隱し、密書の一通を口に咬へ、菖蒲革の、羽織袴の足輕が引附け、絞め殺してゐる見得、本神樂にて幕明く。

ト立廻りあつて直ぐに死骸を蹴返し

聞坊 可哀やひよんな出會ひ頭、見かぎられたるこの密書は、友切丸を奪ひ取つて、小藤太へ渡した出世の種、うぬに知られてなるものか。幸ひ今日は頼朝公、工藤祐經御供にて、當社箱根へ忍びの御社參、阿野の法橋全盛さまの、大望成就にこの山へ、立歸つて來たら小藤太に、どうぞ首尾よく逢ひたいものだ。

ト笠を脱ぎ捨て、あたりを窺ひ、小聲にて『今様始まり』と呼ぶ。これにて思ひ入れ。

さてこそ石橋山で頼朝公を、饗應の今様。一山の搦手は覺えた宿坊、裏へ廻つて、よい、うふだ。

ト骨組になり、聞坊丸、嬉しく思ひ入れあつて、上の松ヶ枝を傳ひ、奥へ入る。トキ「今様始まり」と呼び、正面の障子を開けると、此うちに當時菲道中居並び、直ぐに頭取出て、淨瑠璃名題役人觸は口上あつて、前彈きにかゝる。

〽歸正藏主客人の、宮居ましますで箱根山、明けたつ春は一しほに、二しほ三しほ重ねの
かりの色も御贔屓の、江戸繪姿や春の興。

ト賑やかなる謠らへの鳴物になり、舞臺先眞中に大磯の虎、當時衣裳、傾城の拵へにて、打掛衣と見せたる謠らへの染め小袖を掛けさへたる立ら身の上の方に手鏡の少將、下の方に化粧坂の少將、いづ

れも着流しの傾城、うしろ帶、角頭巾、腰簑の形にて、化粧坂の少將は誂らへの釣竿に松明、手越の少將は箱置きの目籠に松明を携へ、能がゝりの『羽衣』に『夜討曾我』を兼れたる見得。よろしくセリ上げる。

〽君を儲けの今樣に、廓の蓮葉を隱し裏、天津乙女のそれならで、海道市川虎が許、その夜は寒く千鳥立つ、三保の白龍ツレワキと、馴染重ねし化粧坂、手越も同じ少將の、雨にも雪にも通ふ神、濡れた仲ほど人目も瀨川、粂の岩橋絶えやらぬ、思ふ願ひを打つけに、云はで忍ぶは裾野の暮れの、その本望をまつの火に、焦れあこがれ假家の軒端、立舞ふ蝶の忘れめや、山路を分けて清見潟、恨みて泣いてその人の、いつか逢瀨を待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝凪に、釣人多き沖津船、實にも見飽かぬ眺めかな。

ト三人振りよろしく、音樂になる。矢張り能がかりにて

化粧　これは、三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候ふ。

虎　ソレ、少將さん、お前の臺詞ぢやわいな。

手越　アイナア、もし少將さん、お前の臺詞ぢやといな。

化粧　エヽ、何を、同じ手越を化粧坂、少將さんとはお前の事。

手越　オヽ、ほんにさうかいなア。エヽ、何とやら……オヽ、さうぢや。浦の景色を眺むるところ、虚空に花降り、音楽聞え

虎　色香妙なるこの色衣。

化粧　いかなる人の物好きにて、肩に乙女の天衣。

手越　裾は假家の紋づくし。

化粧　皐月下旬の狩場の風情。

虎　この羽衣が望みかえ。

化粧　いかにも、持ち歸りて人にも見せ、家の寶になさばやと存じ候ふ。

虎　イヤ、この衣を與へなば、舞曲もなさで其まゝに、里にや歸り給ふべき。

化粧　イヤ疑ひは人にあり

手越　間夫に僞りなきものを。

〽あら恥かしやさらばとて、天の羽衣風に化し、雨にうるほふ花の袖、乱れも数ある廓の花苦界の月日いたづらに、廓通ひの仲の町、紋日忘れず曲輪とて、酒には客も浮島ヶ原吉原と名づけん、大門口は清見ヶ関、せかれては逢ひたさの、色の意気地か面白や、面白や。

爰も妙なり居續けの、屏風にふせぐ天津風、雲の通ひ路、禿が合圖、しばし留め木の袖香爐くゆる思ひは間夫ゆゑほんに、愚癡に恨みも駿河舞、さうさ〳〵さつさつの、花をかざしの舞ひの袖。なびくも返すも勤めの習ひ、東遊びの數々に、宵の口舌も一座の譯も、さつとさばいて大盡舞、七寶充滿の寶を降らし、幇間にこれを施し給ふ、その名も月の色上戸、腹立ち上戸すね合うて、身仕舞ひ部屋の陰言も、浮氣同士のはらけ髪、ゆふが無理では内證へ、洩らさぬ機轉姉女郎、吸つけ煙草の中入りや、天津御空の霞さへ、いとゞあどけき春遊び、なまめかしさよ可愛らし。

ト虎、羽衣の舞を崩したる所作もやう。手越の少將、化粧坂の少將を相手にして、トゞ、化粧坂の少將、ツイと立つて行かうとするを、手越の少將とめ

手越　イヤ待たしやんせ、少將さん。氣色を變へて、こりや何處へ。

化粧　サア、わたしはナ

手越　イヤならぬ。奥の一座の首尾、思ふお方に逢ひたうても、まだ今樣も濟まぬうち、急いては惡いナア、虎さん。

虎　さいなア。折角願ひに願うて來た、今日の幸ひ。少將さん、お前はほんに誰れやらに。よう似た

氣儘な座敷つき。温なしい手越の少將さん。化粧坂では其やうな、わやくな事が流行るかえ。

手越 ソレ見やしやんせ。虎さんの云ひなさんすに違ひなう、疊蹴立てゝ荒くましい。聲のはつれも腕白かい、マア顔直してあげうかえ。

化粧 エヽ、それおやとて、面倒な。

虎 ハテ、花飾る廓の里。

手越 マア下にゐて、とつくりと。

虎 髮も形も手越さん、ゆるりと直してあげなさんせえ。

化粧 エヽ、悠々と氣の長い。ほんに呑氣とやらおやわえ。

ト不精々々に下にゐる。虎、鏡臺を持つて來て、化粧坂の少將が前へ直す。手越の少將、これに立ちかゝり、化粧坂の少將が、髮を撫でつける。「[illegible]見曾我」のめりやう。

〽春風に柳の髮のむすほれて、梳りて解いて結綿に、おくれは見せぬ岩井櫛、互ひの胸を時致に、晴れた仲とて通ひ路、いつぞや和田の大寄せに、讃めた杯さゝ事の、悪いは常と寐衣のまゝよ、鶏は笑ひになりしかど、褒めた事ではござんせぬ、嗜しやんせとありければ氣儘わやくの癇の蟲、顔おつ取り立ちかゝる、むつとむいきの向う風、里の庭の雪なれや。

トこの文句のうち化粧坂の少將腹を立て、手越の少將へ立ちかゝる。虎さゝへる。化粧坂の少將追ひかけ、鏡を振りあげる。この時、ドロンになり、この鏡へ稚兒髷を振り亂したる朝日丸の顔うつる。三人思ひ入れあつて

虎　コレ、待たしやんせ、少將さん。いかに荒氣が病ぢやとて、派手にもならぬ朋輩仲。

手越　お前の氣隨を其まゝに、寫す鏡のその面影。

化粧　ほんに誰れやら、オヽ、わたしが日頃仲のよいお稚兒さん。

虎　わやく仲間の

兩人　オヽ笑止。

ト三人向うを見る、

〽かゝる所へ小林の、愛嬌惠方萬よし、和田が三男おちやッぴい。

ト大太鼓入り、誂らへの鳴り物にて、揚げ幕の内より稚兒の一、振り袖、刺貫、稚兒髷にて、中がへり、見事に投げられて出る。稚兒の二、三、同じ形にて、逃げて出る。跡より朝日丸、誂らへの稚兒髷、鶴の丸の紋散らしたる、短かき振り袖の稚兒衣裳、着流し、丸括けの帶、自墮落なる形にて、手習草紙を腰へ挾み、机文庫を棒縛りにくゝりつけられたるまゝ、三人を蹴飛ばしながら出る。跡

より稚兒の四、同じく振袖、刺眉、稚兒の拵へにて、割り竹を持ち、附いて出て來て、花道にてよ
∴くあつてとまる。

〽のつと朝日の初霞、顔にいろはの清書を、お師匠さんに叱られて、消しつぺいの八當り、投げたら大事か、すつぽん、大騷、河童の子、足の冷たさに草履隱し隱れんぼ、目どつつき鬼事か。

朝日 いんにや。

〽人真似小真似は酒屋の猫の、弱蟲毛蟲、さいたら子を取ろ、どの子が目すき、脊負つた机をサア解いてくれやれ。

稚皆 合点だわエヽ。

〽意地の惡さに兄弟子を、睨みこくらも負きやせねど、そこが堪忍御萬歲、めでたう三人蹴る蹴る／＼と蹴飛ばされ、ゆるせ御免も追ひすてに、惡さ草髮ふりかゝる、花の、山道辿りくる。

ト花道にて立廻りの振りよろしく、稚兒の一二三みな逃げて揚げ幕へ入る。稚兒の四本舞臺へ逃げて、下手の柴垣へ小隱れする。始終鳴り物あつて、文句一ぱいに朝日も、机を脊負ひながら本舞臺へ來る。虎、手習の師匠立ちかゝつて

手越　朝日丸さん、こりやをかしい。ひよんなお前の形わいなア。

虎　てつきり惡戯が過ぎたゆゑ、お師匠さんの御折檻。

兩人　笑止なお方ぢやないかいなア。

朝日　おらアいたづらアしもせぬものを、鐵砲に云ッつけて、ちい〳〵に噛ませると云つたア。

手越　それ見やしやんせ。どこやらにも、わやくなお方へ好い懲らしめ。

化粧　アイ、わやくとは、わたしが事。

手越　云ふたらお氣に障るかえ。

虎　これはしたり、又かいなア。朋輩喧嘩もよい加減に、嗜ましやんせ、少將さん。

化粧　アイ、わたしかえ。

手越　わたしかえ。

朝日　オヽ、どちらも丁度與勘平。コレ、あかんべい。

ト手越の少將を、化粧坂少將が方へ膝にて突きやる。

〽ヱヽ措かしやんせ何ぢやいなア、わしがお前か、お前がわしか、現ないほど惚れさせて、今さらぞん氣な女子同士、ほんにお前を殿御に仕立て、色で逢ふたら二世三世、無理な願ひの鹽

断ちも知つてゐながら憎らしい、怖い顔すりや正月と、思はせぶりの仇心、せめて人目も止中に、画で顔見る嬉しさと、また辛気さの片うづら、心で泣いてゐるわいな へ おれも思ひは双子山、箱根育ちの野暮薦を、なぶる鸚鳥嘘らしい、口兒鳥の空涙、そりやどこやらの稚児櫻一重心の仇櫻、咲いた櫻につながれて、こまる両手のいた天神、二十五日のおからか過ぎてふんだる達磨の赤頭巾、かぶりすましたお師匠さん、それで怖いとあどなさの、いとしなけらに科をばいちやが、しよび参らせの假名手本、机文庫もほどいて解いて、揚羽のてうじ中座に、サアこれからはおれ一人、山の大將、熊でも來い、虎の伯母さん、少將さん、鬼が強いか金時の、手遊び人形首引拔き、石なご手玉の金こぶし、きさご彈きに無理云ふて、すねるやんちやの困りもの、相手はしさの我まゝは、笑止草紙も顔の隈、遊びに餘念なかりけり。

ト化粧坂の少將、手越の少將、口説き模樣のうち、朝日丸この中へ突き、虎、机文庫を備いてやる この文庫の中より人形を出し、始終邪魔になる振りよろしくあつて

虎　ソレ見なさんせ。両の手が自由になれば悪あがき。

手越　お師匠さんへ告げるぞえ。

朝日　そんならこれから、ぺいが数へた化け物話し。昔々あつたとさ。

〽爺は山猫、婆は河太郎、洗濯盥に目鼻が附いて、枕の中から嘗め小僧、によつと覗いた夜の道、へま蟲ころ〳〵、跡の〳〵千次郎、がん〳〵三つ口、一つ眼に一本足、ちん〳〵もぐらこや赤手拭で、狐の嫁入りぢやな〳〵、素足白無垢雪女、しよぼ〳〵雨のしつぼりは。

ト大小入りの合ひ方にて、朝日丸、閉坊が捨てたる以前の竹笠をかむり、手習ひ草紙と目籠を提げ、酒買ひのもやう。

〽笠が歩いて、酒屋の門へ、ひよつくらひよつと小坊主、宵にや合圖の腹鼓、たゝつぽ〳〵辛い胡椒つんで見や、面白や。

朝日　サア〳〵、これから角力だ〳〵。

化粧　ナニ、角力とは、奥野の狩。

虎　赤澤山の古へを。

ト　これより四人、物語りの振り。

〽聞くも目覺まし御大將、柏ケ峠に御座をしめ、關八州の大小名、左右にこそは居流れたり大場の三郎罷り出で、かゝる砌りの御遊には、角力にまさる事あらじと、申しもあへぬはやり男の、坂東勇士を召し合せ、百手を碎いて取つたりける、股野の五郎これにあり、イザお

相手と組み、手綱しごいて土俵へ出る。

ト大小入り角力の合ひ方になり、この時下の巻頭より稲見の四郎兵衛出し、化粧廻しで土俵へかゝる

立廻り。鶴丸彌七に稲見の四郎を責め懸けてト見得。

〽天晴れお角力力士なり、行司は土俵が要なれば。行司に代る揚げ團扇、なさけの情をあらし

こふんで、四十八手は名もたらし、けとり床かけ入れ黒子、無理な口舌に胸ぐらを、鳥一杯

くらで損せめ、どつこいその手をや投げられぬ、男自慢の肌ではり、深い突きを日本

あげて下ろした無双言、あの烏めが意地悪で、間夫に別れの土俵際、りゝこりだし〱喧嘩なけ、

あら面白の争ひや、悪魔を拂つて角兵衛獅子。

ト上るしき角力のよそあつて、トゝ稲見の四郎寄けて下座へ入る。これより角兵衛獅子の合ひ方にて、

鶴丸彌七、手鞠の獅子なかむり、立ちかゝる。

〽鶴後月旅を今朝出でくれば、お方招くも袖褄さら見える、それすら石にはなりやしまい、

さつもよりく、つくぜんべい、松渡のかゝる絵今朝出て行けば、相川宅助宗の腰に縋る。

それでも石にはなりやしまい、いさゞよや、鳥に別れのその夜風を、とめた枕のうら約束

に、手管目当に傾城は、長局の客と当はんせ、思ひ合ふたか縁でがな。

ト大太鼓入りにて草摺り模様よろしくあつて

へ劣り優りは嵐に花の、揉まれ揉まるゝ雌蝶と雄蝶、ひら／＼／＼、さつと心の春雨に、風に靡ける青柳、緑の褄のほら／＼／＼ただ／＼／＼、曳いつ曳かれつ松の梢に藤蔓、二重に搦む織帯の、切るゝばかりの爭ひは、目覺しかりける次第なり。

ト眞中に虎、羽衣の小袖に舞扇を逆さまに持ち添へ、上の方に手越の少將、下の方に朝日丸、この褄を曳きあひ、化粧坂の少將、下の方にてキツと見上ぐる見得にて、淨瑠璃納まる。奥にて

呼び　祐經さまのお入り。

ト呼ぶ。皆々思ひ入れ。

化粧　ナニ、祐經とや。

トきつとなる。

虎手　コレ。

トとめる。管絃になり、化粧坂の小將、兩人を突きのけ、勢ひこんで上の方なる下地窓を打破り、ツイと入る。虎、手越の小將、これを支へながら續いて奥へ入る。矢張り管絃にて、下の袖垣の後より、稚兒の一二三四出で來り

稚一　いたづら丁稚の朝日丸。

稚二　うぬアまだ爰にうしやアがるな。

稚三　誰れに断つて、棒縛りを解いてもらつた。

稚四　これから直ぐに、お師匠さまへそびいて行つて、云ひつけてやるぞよ。

四人　おいらと一緒にうしやアがれ。

　　ト ばら／＼と立ちかゝる。朝日丸、よろしく立廻りあつて、三人を突きのけ、稚児の四を引敷き、且前の乳文庫を稚児の四に脊負はせ、両手を括り、この縄のあまりにて、三人を一緒にグル／＼巻きにして。

朝日　おれが縄目を持つてやる。ソレ、云ひつけにうしやアがれ。

　　ト花道へ突き離す。四人道々に起上がり

稚四　エヽ、いま／＼しい。とんだ四谷の直風。どつちが風だ、ソレ、たぐれ。

稚一　オツと引いたり。

稚二　ナニ田町へなやアあるまいし。

　　ト風の音、幽霊になり、三人縛られたまゝ花道へ走り入る。稚児の四はこれに引かれ

稚四　ぶうん／＼。

ト唸りながら向うへ入る。また障子の内にて

祐經　大笑大喜、幼稚の戯むれ。

時致　花待ち得たる今日の優曇華。

虎手　コレ、御前ぢやぞえ。必ずともに。

祐經　近江、八幡、障子を上げい。

ト管絃になり、揚げ障子を揭げる。眞中に祐經、烏帽子下地、大紋の下はかり、小さ刀の形、中啓を持ち、床几にかゝり、左右に小藤太、剃りへがし、上下衣裳、大小にて、目錄を持ち扣へ、八幡の三郎行氏、剃り立て、同じく上下衣裳、大小にて、祐經が刀を持ち、控へる、下の方に時致、以前の化粧坂の小將の形を脱ぎ（化粧坂の少將實は曾我の五郎時致）角かつらにて立ちかゝり、この左右に虎、手越の小將、以前のまゝにてとめてゐる見得。祐經ヂツとこれを見て

祐經　ハテ、仰々しき今樣の役人、そちや化粧坂の少將ならずや。祐經が目通り推參なり。コリヤ、遊君は遊びもの、人を恐れぬ蓮葉よなア。

ト思ひ入れ。

小猿 ホンニサ、合點の參らぬ奴。進安寶女の高上がり、威惡千萬その上に、目に角立てる憎性男。

行氏 イヤモウ、小猿丈、彼れめは今日今様の役人、さま／＼に、変形も化粧坂、定めて何を巧み居る、

これも通例でがなござらう。

祐經 實にそれよ、猫をいさめの者どもに、詞を荒う咎めはせぬ。見ればそれなる朝日丸、例のわやくに引かへて、ハテ、おとなしう顔作つたな。

朝日 工藤の伯父さん、おらアいたづらはしねえよ。

トもぢ／＼行儀にて云ふ。

鹿 もし、見なさんせ、あのお子の、常のやんちやも温なしう

手越 行儀に習うて、ナア、鹿さん。

ト兩人、顏にて時致を留める。時致思ひ入れ。祐經も思ひ入れあつて

祐經 朝日丸といひ、鹿子殿、珍らしき對面、祐經もそれへ參つて挨拶せん。小猿丈、行氏の目録、これへ。

ト奏者の鞁にて、小猿丈、行氏、目録取つて、スル／＼と立上り、これに續いて行氏、三方へ載せ持ち、座上の前へしとやかに來て、立てふさがる。祐經、時致に目を附けながら、

又達目



大詰　二番目發端



氣の毒ながら虎少將、われ達も聞け。この目錄に記せし如く、皐月下旬の富士の御狩、祐經奉行を承り、地祭りに用ふる八領の鎧、お預かりの人々より、源太が産着を初めとして、七領の鎧は差上げしに、今一品の逆澤瀉の鎧、曾我の太郎祐信の預かりにて、今に於て有無の返答無く祐經の當惑、推量あれ。

行氏　尤もこの儀は先達て、祐信さまには鬼王もろとも、三原那須野の狩倉に、旅行のお留守といひながら

小藤　さればサ、曾我の祐成どの、滿江御前の祕藏子と、甘やかしが過ぎるゆゑ、斯樣に大事も延引いなす。放埓惰弱の大馬鹿者。

　　ト時致ムッと思ひ入れ。

祐經　コリヤ、朝日丸、おことに尋ね問ひたき仔細。なんと包まず話されうや……イヤサ、聞き及ぶ當山の稚兒箱王とは、定めて存じた仲の友朋輩。先達て友切丸紛失の砌り、下山なせしと聞きつるが、その箱王を存じて居るか。

朝日　アイ、箱王の兄イはの。

　　ト云はうとして時致を見て

何だかおらア知らねえよ。

祐經　ハテナア。子供は正直、知らぬが笑止、さりながら、おこども實は木曾どのゝ落胤、因の巴が胎内より、和田義盛が養子とはなれども、父義仲の最期の有樣、それも知るまい。サア、父の最期は安元二年神無月、赤澤山にて河津が最期。父を討たれて無念とも、口惜しいとも存せぬ曾我の奴ばら。兄は情弱の大磯通ひ、弟はこの稻當山に於て、友切丸紛失、盗賊の疑ひ。祐經が目通り、何として面出しならう筈もなし、現在敵は誰れ〳〵と、存じながらの臆病風。さいつ頃奥櫓の葉、富士御前に面目なし、持ち歸りたる澤瀉形の矢の根。卑怯未練に包みはせぬ。能登どのゝ一流用ひんもの、鎌倉廣き諸侯のうち、祐經ならで誰れあらん。

時致　ヤ、なんと。

小藤　ハテ、知れた事。痩せ貧乏の曾我殿原、祐經さまを敵なぞと、刃向ひ立てが大きな不覺。

行氏　元は一家の曾我工藤、御一門のよしみ親しみあらば、御兄弟の御爲め。敵なんどゝ手向ひあらば

小藤　お側に控へし近江の小藤太。

行氏　八幡の三郎なくば知らず

小藤　どつこい

行氏　そつこい

兩人　互ひの忠義。

時致　なにを。

ト きつとなる。

祐經　口惜しからうが討たれはせぬ。ハテ、なぜと云へ。斯く云ふ祐經は大大名。連れる時には百騎二百騎、連れざる時も五十騎三十騎、痩せ浪人の兄祐成、ましてや弟箱王とやらん、まこと河津が悴なれば、友切丸の盜賊なぞと、汚名を蒙むり逃げはせまい。柏ヶ峠の木の根に爪づき、落馬なしたる祐安が悴。河津は坂東八ヶ國の勇士などゝ、片腹痛い。ナウ、虎、少將、左樣ではないか。ハヽヽヽヽヽ。

ト笑ふ。これにて時致、三人を突きのけ

時致　もう堪忍の破れかぶれ。そのいけ口を

ト立ちかゝる。皆々立廻り、虎立ちふさがり、少將チツととめる。この時向うより

祐成　待つた〳〵。

ト ばた〳〵にて花道より祐成、懸け烏帽子、素袍の下ばかり、小さ刀の形にて、中啓を持ち、逆澤瀉

の繩を抱へ、ツカ／＼と出て本舞臺へ來る。

時致　兄者人。

祐成　アコレ、その名を滅多に。

ト時致を圍うてヂッと見得。祐經思ひ入れあつて

祐經　さもさうず、さもありなん、朝日丸に准へ、最前より祐經が、詞を荒く致せばこそ、兄弟揃ふ其が證は

祐成　お寫しの上は今更に、包むに詮なき我れ／＼こそ

時致　河津の三郎祐安が忘れがたみ。

祐經　兄の一萬成長して

祐成　祐信どの、養子となり、曾我の十郎祐成

祐經　弟箱王人となつて

時致　北條どの、烏帽子にて、曾我の五郎時致。

祐經　さてこそ汝ら曾我兄弟。

祐成　ト藤左衛門

時致　祐經どの。

祐經　ハテ珍らしい

三人　對面ぢやなア。

ト三人よろしくキッと見得。

時致　親の敵、祐經觀念。

ト立ちかゝる。朝日丸とめて

朝日　コレ、おつこてえろ、兄イやい、どんまれく。小林だアもさア。

ト きつと見得。祐成此方へ來り

祐成　急くな時致、鎭まれ五郎……イヤ、祐經どの、先達て仰せ越されし逆澤瀉の鎧、延引ながら祐成只今持參いたしましてござりまする。

ト右の鎧を祐經の前に置く。祐經引寄せ、改め見て

祐經　誠に正銘、祐信の預かり、逆澤瀉の鎧。さりながら、如何いたして只今まで。

祐成　イヤ、延引は身貧の我れく。鬼王が妻月小夜、甲斐々々しき女子の忠義ゆゑ。

祐經　ハテ、兄弟には頼もしき、家來を扶持し召さるゝ中に

ト小藤太に目を附けながら

コリヤ、祐王。われが不所存ゆゑ、草葉の陰の祐安にまで、恥辱を與へる友切丸の、盗賊の汚名なぜ着せぬ。

時致 サア、身にとつて覺えなき

祐經 イヤ、覺えないとは云はれまい。友切丸紛失の砌り、箱根を下山なしたる箱王。

時致 ムヽ、いま〳〵しい。それとても、敵が討ちたいばつかりに。思へば祐經、そのしやッ面。

ト立ちかゝる。朝日丸、祐成。トヾと留める。

小藤 ヤア、尾籠なり、祐經さまへ慮外の素丁稚。イデ、小藤太が

ト刀引き提げ立ちかゝる。祐經これを引留め、直ぐにその刀を取上げ

祐經 小藤太、其方は何いたす。

小藤 イヤ、友切丸の盗賊め。

祐經 詮議に及ばぬ、この一腰

小藤 エ。

ト何か思ひ入れ

祐經　阿野の法橋全盛に組みなす、小藤太、其方がこの一腰。

小藤　イヽヤ、全く存じもよらぬ

　トもぢ〳〵思ひ入れ。此うち上の松ヶ枝に閉坊窺ひゐる。祐經思ひ入れ。

祐經　その盗賊は、正しく爰に。

　ト手裏劍を打つ。これにて閉坊、直ぐに飛び下り

閉坊　南無三、ものした友切丸。

　トかゝるを、祐經、拔討ちに見事に閉坊を切り倒す。この時、鷄啼く。祐經キッとなつて

祐經　さてこそ鷄の一聲、血潮の穢れに唱ひしは、紛ふ方なき友切丸、盗賊の箱王こそ、箱根山なる稚兒育ち、いま祐經が手にかゝれば、汚名も晴るゝ五郎時致、對面の賜物、持つて行け。

　ト友切丸を投げてゐる。時致取つて

時致　ヤヽ、友切丸のこの一腰。

行氏　血潮に柄も、赤木作り。

祐成　賜はるのみか、弟が汚名。

祐經　心殘さず敵を討て。

祐時　エヽ、忝きお志し。

祐経　はや任官にも選挙の時刻。近江、八幡、供いたせ。

小藤　すりや、拙者も共々に

祐経　阿野の法橋全盛は、君の御連枝、なに賄か、小過は咎めぬ寛仁大度。

祐時　我れ／＼とても皐月下旬

唄　大津寮なる羽衣の

手越　紋にしるせし染め小袖。

朝日　霞の隈取りなぞらへて

祐経　富士を模す我の本望まで

祐時　この場は此まゝ。

祐経　重ねて見参……両人、供せい。

ト唄になり、祐経先に小藤太、行氏は鏡を抱へ、これに附いて花道へ行く。舞臺の者々、二重

ト見送り

時致　さはいへ祐経。

ト立ちかゝる。祐成、朝日丸、きつと留める。左右に虎と手越の少將立ちかゝる見得よろしく、祐經

キツと振り返つて

祐經　勇ましや時致……兄祐成へも何をがな。オヽ、幸ひ初春の引出物。

ト懷中より繪圖面を出し、舞臺へ投げる。祐成取上げ

祐成　ヤヽ、こりやコレ狩場の

祐經　イヤサ、繪圖面ならぬ繪双六。

祐時　エヽ、忝ない。

祐經　裾野で逢はう。

祐時　祐經どの。

トこの時稚兒の一出て

稚一　その繪圖面を

トかゝるを朝日丸捕へ、キツと見得。皆々よろしくあつて

祐經　兄弟。

三人　さらば。

ト双方よろしく

祐經　これより。番目始まり、左様に御覽下さりませう。

ト謡ひへ打込みやうの鳴り物になり、祐經、小藤太、行氏、三人向うへ入る。舞臺の皆々よろしく

幕

色一座梅椿（いろいちざうめのしらたま）

色一座梅椿

序幕　柳橋萬八の場

役名――遠山甚三郎。葛飾の十右衛門。中間、油の九平次。犬上團右衛門。長谷部蓮太夫。盗人、遠州の九助。木場の文藏。丁稚、長吉。澤屋金兵衛。辻屋多四郎。料理人、喜七。植木屋定六。大丸の手代、與茂七。丁稚、虎松。萬八女房、お藤。町人、七五郎。世話人、與四郎。同、半吉。藝者、お初。同、筆美代。同、富勝。同、お秀。同、民吉。萬八娘、お玉。與兵衛女房、お鶴。

本舞臺、三間の間平舞臺、見附け格子造り、玄關がまへ、萬屋八兵衛と記したる掛け札、この前に床几を直しあり、上手に柳橋の袂を見せ、よき所に萬句粹花の建て札。正面の入り口に、大々講神田講中、の下げ札、この脇に傳馬町名弘會の初札、すべて兩國柳橋萬八の表がゝりよろしく、幕の内より七五郎、町人の拵へ、喜七、料理人の形にて提げ籠を提げ、定六、町人の拵へにて、右三人狐拳して

ある。眞四郎、中吉、何れも羽織袴、町人の形、下の方に雛菱代、醫者なり、宮勝、同じく醫者の形にて、男に三味線箱を持たせゐる。この見得、通り神樂にて幕明く。

ト定六、七五郎、喜七、捨ぜりふにて拳を打つ。

三人　アーイ二ウ三イ。

トよろしくあつて

七五　オツト、あいかう〳〵。

三人　アーイ二ウ三イ。

ト七五郎負ける。

定喜　サア〳〵、七公が負けだ〳〵。

七五　たうとうおれを負かしやアがつた。

喜七　なんでも狐拳に負けたら、お初さんの迎ひに行くのよ。

眞四　今日はお初さんの名弘めの會日、達川の嬢様も、もうお出でなさんしたであらうなア。

宮勝　わたしも講に逢からうと思うて、大抵急いだ事かいな。

眞四　さう〳〵、お師匠は、この藏八へござる醫者衆かえ。

筆富　アイ、左樣でござります。

與四　此方の座敷からも、藝者を呼びにやつたが、もう來る筈ぢやが。

半吉　お前方は、どこの座敷へ、呼ばれてござります。

定六　モシ〳〵、この子達は此方の座敷に、義太夫の會があるので、わざ〳〵來なさつたのサ。

喜七　今日は太々講と淨瑠璃會と後ろ合せ。一倍急がしい事でござります。

與四　それに、葛飾の十右衞門どの、世話人、滿會の鬮取りなれば、賑やかにせねばならぬてや。

七五　何にしろ私しも、早くお初さんを呼んで來ませう。

喜七　わしはまだ、これから見附け前で、板を四五枚買つて來ねばならぬ。

筆美　七さん、早く行つて來なさんせいなア。

七五　ドレ、行つて來やせう。

ト通り神樂になり、花道へかゝると、向うより團右衞門、大小、羽織袴、用人の拵へ。九平次、渡り者の中間の拵へ、海鼠襟の合羽にて、風呂敷包みを提げて、供をして出る。花道にて行きあひ

團右　オヽ、おぬしは七五郎ぢやアないか。

七五　團右衞門さま、今お出でなされましたか。

九平　七五郎どの、急がしさうに、どこへござります。

七五　これは九平次さん、イヤ私しは、お初さんの迎ひに參ります。

團右　そんなら、まだお初は參らぬか。

七五　左樣でござります。肝腎の會主のお初が遲いといつて、殿樣が御退屈してゞござります。

團右　さうであらう〳〵、今日はお初が名弘めの、會主が居らねば極りが惡い。早く行つてくれやれ。

九平　御苦勞ながら、行てござりませ。

七五　そんならちよつと、呼んで參りませう。

ト七五郎は向うへ、團右衞門九平次は本舞臺へ來る。

平文　オヽ、團右衞門さん、今お出でなされましたかいなア。

團右　イヽ、平文代に冨勝、早く參つたの。

九平　定六どの、今日は大きにお心づかひでござりませう。あのお初は、知つての通りわしが妹、別してお世話でござります。

定六　なにサ、今日の名弘めは、殿樣が會主同然で、辻屋の彥四郎初め、あの七五郎も何かの世話やら

それで今朝から殿様も、疾からお出でなされて、お待ちかねでござります。

團右　さうであらう〳〵。おれも屋敷の用が多いので、遅くなつたて。

與四　コレ、喜七、最前云ひつけた膳札の外、二十人前、酒肴も合點であらう。

半吉　いうても神田の太々講、世話人は葛飾の十右衛門どの、隨分賑やかにせねばならぬ。

團右　そんならマア、早く二階へ行かうか。

九平　それがようござります。

喜七　わしも蒲鉾屋へ行つて來ませう。

團右　ドリヤ、殿様にお目にかゝらうか。

定六　サア、二人ながらお出で。

筆美　サア、ござんせいなア。

ト通り神樂、喜七は提げ籠を持ち向うへ、團右衛門、九平次、定六、筆美代、富勝、與四郎、半吉、みな〳〵玄關の内へ入ると、矢張り通り神樂にて、向うより文藏、着附け、羽織、町人の形。長吉、丁稚にて、供をして出る。跡より與茂七、大丸の男にて、風呂敷包みを脊負ひ、出てくる。虎松、附いて出て、花道にて

與茂　もシ、文藏さま、お前も萬八へお出でなされますか。

文藏　さア、大丸の與茂七どのか。わしは今日、ちつと用事があつて、三河島の方から、田中の方まで行きますが、あの奴が、こなたと一緒に來ますゆゑ、聞けば兄貴の十右衞門どのが、萬八に居られるといふ事。ちよつと逢つて行かうと思つて、道寄りをいたしましたのサ。

與茂　イヤ、私しも十右衞門さまが、お誂らへのお小袖、お宿へ持つて參りますところへ、いま小僧どのが使ひに見えまして、それでアノ萬八へ、持つて行くのでござります。

庄松　私しどもの旦那十右衞門さまは、今日太々講の世話人とやらで、あの萬八に、今朝から來てござります。

長吉　そんなら十右衞門さまは、あの萬八にお出でなさるか。不斷わしを可愛がつて下さるによつて、今日も廣小路へ行つて、三津五郎の凧を買つてもらひませう。

文藏　子供といふものは、凧の事ばつかり云ふものでござりますわいの。

與茂　誠に子供は風の子ぢやなア。

文藏　へ、、、、、、。

ト太鼓入り通り神樂、本舞臺へ來ると、奥より與四郎、中間出て

半吉　オヽ、これは木場の文藏さまでござりますか。

與四　今日は葛飾の十右衛門どのが、太々の世話人で、參會も大概。川端の二階座敷で、一つ上がつてお出でなされませ。

半吉　奥には參會の祝儀に、踊りがある筈。小僧どのも見物さつしやれ。

長虎　そりやア面白うござりませう。

與茂　左樣なら私しも、十右衛門さまにお目にかゝつて參りませう。

與四　サア、ござりませ。

ト始終通り神樂にて、與四郎半吉、與茂七を連れ、長吉虎松附いて奥へ入る。文藏殘り

文藏　さて〳〵、今日は都合の好い日であつた。この間白銀町の澤屋の御亭主が話しの、三河島の賣り屋敷、三百兩との事ゆゑ、手代の金兵衛が、今日この萬八へ來るといふ事。ドレ、爰に少しの間待ち合せて見ようか。

ト床几に腰をかける。また通り神樂になり、向うより七五郎先に三味線箱を脊負ひ、お初、藝者の拵へ、四つ手駕籠に乘り、出てくる。金兵衛、質屋の番頭にて、風呂敷包みを脊負ひ出てくる　花道にて

金兵　オイ〳〵、駕籠で行くのはお初さんではないか。

　　ト お初、駕籠の内にて振返つて

はつ　オヽ、澤屋の金兵衞さん、わすしや今日、名弘めの會日ぢやによつて、柳橋の萬屋へ行くわいな。

七五　イヤモウ、今朝早く來なさる筈を、遅くなつたで、わしがわざ〳〵迎ひに行つて、今日は藝者の總し明す。

金兵　ほんに、まアであつた。この間はお揃の物を、お忝うござります。わたしもあの萬八に用もあり、マア早う行きませう。

七五　サア〳〵、來なせえまし〳〵。

　　ト七五郎先に駕籠に附いて、金兵衞も本舞臺へ來る。

ヤレ〳〵、駕籠の衆、御苦勞でござりました。

　　ト お初、駕籠より出る。駕籠の者は下の方へ入る。文藏、金兵衞を見て

文藏　オヽ、金兵衞どのか、よい所で逢ひました。

金兵　これは來堀の文藏さま、お前も宴の內かな。

文藏　イヤ、わしはこの間、其方の親方に話し合つて置いた、三河島の寄り屋敷の相談、とつくり〳〵相

談極めようと、こなさんが今日は、この萬八と聞きましたに依つて、待ち合せてゐました。

金兵　それは丁度よい所でござりました。賣り屋敷の事も、マアゆつくりお話しがござりまする。時にお初さん、名弘めの會ならば、お前を贔屓になさる、あの遠山の殿樣は、今日爰の内へお出でなさるであらうの。

七五　サア、いま云ふ通り、わしがわざ〳〵迎ひに行つたも、殿樣がヤレ〳〵と、急かつしやりますからの事サ。

金兵　そんなら殿樣は來てござらつしやるか。なにかこの間中、ちら〳〵聞いたところが、お屋敷の工合が悪いかして、根岸の植木屋の定六の所にござるとの事。あゝいふ殿樣だによつて、屋敷附合ひが否で、若隱居などゝいふやうな事なら、それに附いての、いろ〳〵な話しもある。一體マア、お屋敷をしくじるといふ譯でもあるかな。

はつ　なんのマア殿樣は、一體あゝいふ穩當なお方ぢやによつて、お屋敷の事は、とんと御家來任せ。何も別に、不首尾ぢやの何のと、いふ事ではないわいなア。

七五　ハテ、遠山さまといつては、お高は相應なり、ほんの大名の懷子サ。

文藏　モシ、金兵衞どの、遠山さまといふのは、遠山甚三郎さまといふお大名か。

七れ　それ〳〵、よく折々、芝居の樂屋へもござつて、鰻を買ふのなんのと云ふ、殿樣の事さ。

文藏　それなら、わしが兄貴の、十右衛門どのゝお出入り屋敷、その殿樣の御贔屓になさる、藝者といふは

七れ　傳馬町の義太夫藝者、お初さんといふは、この子の事サ。

ト　お初こなし。

文藏　エヽ、傳馬町の……ほんに、お初にお目にかゝりました。

金じ　ハヽヽヽヽヽ。

はつ　そり、金兵衛さん、あなたわえ。

七た　お顔を知つてゐる、葛飾の十右衛門さんの弟御、今では深川の平野町、材木屋の德兵衛どのゝ養子、木場の文藏さま、お心安くするがよい。

はつ　ほんにそんなら、私しも十右衛門さんとはお近附きつ、ちとこれから、お心安うなされて下さりませ。

文藏　イヤもの、お礼ひでござります。私しも淨瑠璃が好きで、新道の宿屋のあつた時は、毎度聞きに行きました。今では深川に居ますから、久しく淨瑠璃も聞きませんが、誠にお序數で、しつぽり來

りませうか。

はつ　どうぞお聞きにお出でなさんせいなア。

文藏　金兵衛どの、わしはちよつと、兄貴に逢つて來ますほどに、後にゆるりと話しませう。

金兵　そんなら二階で、待ち合せてござりませ。

文藏　ドレ、兄貴に逢つて來ませうか。

ト合ひ方になり、文藏こなしあつて奥へ入ると、引違へて奥より團右衛門、淨瑠璃本を廣げながら出で、お初を見て

團右　オヽ、お初か、どうしたものぢや、何をしてゐたのぢや。殿様も身共も、待ち草臥れて居るわえ。

金兵　團右衛門さま、この間はお目にかゝりませぬ。

團右　オヽ、澤屋の金兵衛か。よく出て來てくれた。今日はこのお初が名弘め、そこでマアおれが「先代萩」の飯焚きを語るつもりだ。なんでもマア、一人も聽き手の多いがよい。ナウお初。

はつ　わたしやアノ殿さんの、「廿四孝」を彈く筈。お前の合ひ三味線は、植木屋の定さんではないかいなア。

團右　なにサ、定ぢやア、さつぱり思ひ入れが語り憎い。なんの彼奴が植木屋でも、……こちの裏の

ちしやの木にく＼……は、どうしてく。

むつ　エヽく＼、藤右衛門さんえ。あんまり意趣張つて、家業で聲を枯らすのぢやござりませんか。

團右　國書ぢやといふ「光代卿」は、おれが大事のおはこだわえ。

金兵　ほんにく＼、その大事のお國といへば、彼の大切な四方出の番頭、別冬から流れの事を、申してあ

げましたが、どうなされて下さります。

團右　ハテ、その事は、殿様も御承知の事。既に殿様も氣にござれば、彼にとつくり申し上げた事よい。

金兵　左樣ならば、さう致しませう。ハテ、今日は好い日に來合せて都合がよい。殊にお國様の浄瑠璃

を聞くとは、好い樂しみでござります。

團右　サア、お國、爰で彈き合せう。どうぢやく＼。

はつ　イヽエイチャ、わたしや殿さんと彈き合さにやならぬわいな。

團右　そんなら彈き合せなしに、行合ひでやらう。おれが雅者なところを聞かせよう。爰にしような。

はつ　エヽ、なんなと勝手にしなさんせ。わたしやマア、殿さんの所へ。

團右　ヲツトヽ、どつこいく＼、待つたりく＼。彈き合せが済みさへすれば、ちよつとおれが瞽目を聴いてくれ。

ト　お國を引とめ、四國屋を睨まへるに見て、

ア、、何にせうな。「琴責」はむづかしい。「妹脊山」か。イヤ〳〵、ちよつとしたカウ婀娜な物にしたい。オ、、「夕霧」がよい〳〵……まづ、門附けの氣でやつて見よう。エヘン〳〵。

金兵　待つてゐます〳〵。

團右　コレ、おれがのは、遊湖齋直傳だ。

金兵　さうでござりませう。

ト團右衞門まじめになつて、

團右　「逢ひそめたその日から、こんな緣が……

七五　チリガンツン。

團右　唐にもあろか。」

金兵　チンチリ、ツテ〳〵、チチチン〳〵〳〵。

團右　「派手な浮名が嬉しうて……

ト眞面目で語る。金兵衞、七五郎、うか〳〵拍子に乘つて聽く。此うちお初、ツイと拔けて奧へ入る。

團右衞門これな知らず

「人の譏りも世の義理も」

ト ふと心附き、お初が居ぬゆゑ

ヤア、お初〳〵、どこへ行つた〳〵。

兩人 ほんに、いつの間にか

團右 エヽ、折角骨を折つて語らせて

兩人 惜しいぞ〳〵。

團右 エヽ、おきやアがれ……時に金兵衞、今ちよつと話した四方出の香爐、遠山家の大切な寶物、この團右衞門が、あの馬鹿殿をそゝのかして、二百兩の質に入れさせたは去年の事。

金兵 これで內の親方も、月が切れてあれば、いよ〳〵外へ賣り物に出すといふ事。殿樣に逢うて、相談せいと、マア件の香爐も持つて參りました。

七五 そこで、團右衞門さま、その香爐は、元金は百兩、二百兩の質だといつて殿樣を騙し、百兩はお前が着服。

團右 どうで請け戻す事はならぬと見たゆゑ、內證で百兩上借りもし、また質請けが出來てから、元利加へて、あのゝものゝで、二百兩を引つたくりさへすればよいといふもの。

金兵 その上、肝腎の鑑定の書き物も、お前と云ひ合せ、この通り似せ物を拵へて突きつけ、正眞の鑑

團右　定書は、しつかり此方に
納めてあれば、香爐が殿樣の手に入つても、鑑定が無ければ、今戸燒の火入れ同然。
七五　それでは一生、殿樣は日陰者。
團右　首尾よく殿樣を、化かしおほせたその跡では
金兵　今までの骨折り、金は山分け。
七五　そこでお初を團右衞門さまが
團右　抱いて寢るといふものぢやて。
金兵　そこでお前も大喜び。
七五　前祝ひにワツサリと
團右　奥で一杯。
兩人　團右衞門さま。
團右　二人ながら、來やれ。
ト「慈童」の切れにて團右衞門、金兵衞、七五郎奥へ入る。ト通り神樂になり、向うよりお鶴、好みの世話女房、結ひ髮・手拭をかむり、金毘羅樽を下げ、喜七が手を引摺つて出る。跡よりお秀、藝者

の時、民吉、踊り子の形にて手を曳かれ出る。九助、やつし下男の拵へにて、三味線箱を脊負ひ出てくる。花道にて

つる　なんだな、この人は、きいた風な。味がよからうの、お神酒が飲みたいのと、酒が飲みたくば、振舞はうから、男なら飲みねえな。

ト喜七、提げ籠に蒲鉾を入れ、引摺られながら

喜七　アイ、コレ／＼、おかみさん、お前の事を云つたのぢやアござりやせん。いま通つた酒屋のかみさんの事を、云つたのでござりやすわな。

つる　イヤ、いま酒が飲みてえと云つたから、飲ませようと思つてよ。

ト引摺つて行く。始終通り神楽にて、本舞台へ来ると、九助分け入り

九助　マア／＼、おかみさん、腹も立たうが、見れば金毘羅さまへ上げるお神酒、神詣りの事なら、料簡してやんなさいまし。

つる　なにサ、わたしが薬研堀から、爰を通る度に、ヤレ下歯だの、蟲歯だのと、いろ／＼な事を云ひやすり、あんまり人を馬鹿にするから、酒が飲みたくば、振舞はうといふ事サ。

九助　サア／＼、さうであらうがマア、料簡して見なさいまし。りやう、お前もいゝやうに謝まつて、早

く内へ行くがよい。

トやう／＼に引分ける。

喜七　なにサ、間違ひならマア料簡しなせえ。わしも急な料理もあり、そして、太々の講中にござる衆が、あの子達を早く呼んで來いと云つたに、寄つて來はせで、ツイ冗談を云ひやした。

つる　女だと思つて、馬鹿にしてから。

トふと九助を見て

オヤ、お前、九助さんぢやアねえか。

ト九助も恟りして

九助　ほんに、お鶴さんだの。

つる　どうしてお前、そんな形で

ト云ひさうにして、思ひ入れ。

九助　アイ、今日はちよつと雇はれて來たのサ。

つる　ムウ、雇はれて來たのか。

ト思ひ入れ。

ひで　モシ、喜七さん、わたし等を神田の寄合ひの座敷へ、連れて行つておくれなさんせぬかいな。
喜七　アイ〳〵、わしが直ぐにお連れ申しませう。
九助　そんならわしは寝かな、もう歸つてもようござりませう。
ひで　アイ、もうようござんすわいな。大きに御苦勞でござりましたな。
民吉　歸りは遅いのかいなア。
喜七　なにサ、遅くなりやア、内から送らせてやりますわな。マア、内へお出でなされませ。ドレ、風呂敷と箱は、抱へて持つて行きませう。

ト喜七、提げ箱を床几の上に置き、三味線箱を抱へ、お秀、民吉を連れて奥へ入ると、跡にお鶴、九助残り、あたりを見廻し

つる　九助さん、とんだ所で逢つたなう。
九助　お鶴さん、どうした。マア、お前には、いろ〳〵話しもある。
つる　いつちも話しだらけだわな。なんでもお前に逢つたら、與兵衛どんの様子も知れるだらうと思つて、本所へも二度まで尋ねたけれど、どこへか行つて居ねえといふによつて、アヽ、又あげられでもしたか、どうしたかと案じたが、さうして、彼分の様子は聞かねえか、どうだ。

九助　さつぱり知れねえのサ。なんでも、いろ〳〵な話しがある。マア、爰へ掛けなさい。

ト喜七が殘して行つた提げ籠を下ろし、床几に腰をかけ

それから後の事は知るめえが、あの與兵衛どのが、いつぞや藏屋敷へ入つて、盜んだ三百兩。

つる　これサ、靜かに云ひねえ。

ト思ひ入れ。鳥追ひの三味線、かすめたる通り神樂。九助、あたりを見て

九助　盜んだ三百兩は、四つ石の極印のある金で、詮議がやかましいによつて、葛飾の卜右衛門といふ人のところへ預けて置いたと、わしにも話して置かれたが、其うちに、ツイ牢へ入つた與兵衛どの。同類の事だによつて、わしもちつとばかり金でも拵へて、當分仙臺の方へでも隱れて見るつもりで、今日淺草の八が所へ寄つたら、ちよつと今の子供の供をして行つてくれろと頼まれて、顏を隱して爰へ來たのサ。

つる　聞いてくんな。おれもマア、與兵衛どのが牢へ入つてから、彼方此方、いろ〳〵氣を揉んで、どうぞ早く出てくるやうにと思つて、淺草と藥研堀とへ日參するわな。いま話しの極印の金とやらがやア、なんでもマア、むづかしい鹽梅になつてゐるの。

九助　サア、そこが地獄の沙汰も金次第で、盜んだ金をソックリと、どうかして償ふといふやうな始末

にしたなら、出てくる事もあらう。マア、何にしろ、時分が時分だによつて、一月にでもならすば、譯も解るまい。

つる　マア、さうは思つてゐるのよ。併し、その盗んだ金は、葛飾十右衛門とやらいふ人に、預けてあると云つたの。

九助　さうさ。盗んだ事はこれ〳〵で、十右衛門に貸してやつたのよ。

つる　ムウ、その十右衛門といふは、内は神田の方ぢやないか。

九助　それさ。どうして知つてゐる。

つる　それなら、もと子供の時分、ちつとの間奉公してゐた事がある。その縁で、内でも心安く出入りをしたから、そこの内へ預けて置いたらう。

九助　マア、何にしろ、わしも暫く奥の方へ行くから、マア達者でゐねえ。併し、何かに困るだらう。

ト懐から財布を出して、金を二兩出し

お鶴さん、どうかしてえが、今云ふ仕儀だから、少つとばかりだが、小遣ひにでもしてくんねえ。

つる　なにさ、よしな。お前だつてもさういふ仕儀で行くのに、また金がいるだらう。

九助　ハテ、わしは又どうでもします。マア、取つて置きなさい。

つる　こりやァおかたじけ。そんならモウ直ぐに行くか。

九助　日よりのよいうち、行きませうよ。

つる　そんなら、達者でゐねえ。

トこの時奥より猫、魚を咬へて走り出るを、喜七、薪を持つて追ひかけ出で

喜七　この盗人め、逃げやァがるか。

トこれにて九助恟り、花道へ行く。喜七、そこらを追ひかけ廻り、猫、床几の下へ逃げこむ。

エヽ、盗人め。

トあちこち立れる。九助、お鶴と顔見合せ、思ひ入れあつて

九助　お鶴さん、

つる　早く行きねえ。

ト猫、お鶴の裾へ隠れる。喜七、お鶴の側へ来て、猫を叩かうとして、提げ籠の蒲鉾をぶち返す。

つる　エヽ、恟りするわな。

喜七　こりやァ御免なさい……エヽ、ツン逃がした。

つる　危ない事だの。

ト賑やかなる所作の鳴り物になり、道具廻る。

本舞臺、目附け格戸、上の方障子屋體、長押つくり、俳諧狂歌の額など掛けてあり、すべて萬八二階座敷の體。右平舞臺に民吉、所作よろしくあり、お秀附いて、肩など脱がせなどしてゐる。[illegible]、四郎、半吉、平次郎見てゐる。お藤、萬八の女房にて、酒の相手なしてゐる。町人三人、講中にて醉つてゐる。太々講座敷のもやう、賑やかなる所作の鳴り物にて道具とまる。

金兵　サア〱、もう一つ所望ぢや〱。

　トこれより地へ取り、民吉短かき所作よろしくあり

皆々　やんや〱。

　ト褒めると、奥より十右衛門、麻上下、町人の拵へにて出で

十右　これは〱、どなたも今日は御苦勞でござります。いろ〱取込みまして、ろく〱御挨拶も申しませぬ。

金兵　イヤモ、萬事御丁寧なる事。マア〱、一つお上がりなされませ。

ふさ　十右衛門さん、お一つお上がりなされませ。お前樣は、段々のお世話でござります。わたしも今

日は深川の、天滿屋の名代の鬮取り、丁度鬮に當りまして、大きに喜びますわいな。
十右　イヤモ、皆お出でなさるが、まづ内方へ鬮が當るとは、初春早々おめでたうございります。
與四　何よりめでたい事でございります。
十右　サア、これから賑やかに、めでたく酒に致しませう。
與四　それ〳〵、これから賑やかに、ちつと騷ぐがようございりませう。
十右　ほんにお前方、御苦勞ぢやの、爰に來て、お相手でもしなさい。
ひで　アイ〳〵、十右衞門さま、今日はおめでたうございります。
金兵　なんとお前さま、この子に、もう一つ踊つてもらつたらどうであらうな。
ふぢ　こりやようございりませう。お秀さん、そんなら何ぞもう一つ、あのお子に、御苦勞ながら
皆々　所望ぢや〳〵。
ト奥より定六出て來て
定六　コレ〳〵、お前さん、待つてくんな〳〵。涼み船に馬鹿囃子が來たやうに、さう騷がれては、おいらの方の淨瑠璃が語れない。ちつと氣を利かしてもらひたい。
皆々　サア〳〵、所望ぢや〳〵。

トおだてる。

定六　これサ／＼、所望ちや／＼と、祭に出たやうに。此方も名弘めの淨瑠璃。また遠慮もあるものだわな。

金兵　これサ／＼、其方が淨瑠璃の會だといつて、此方も肝腎の太々講だ。

定六　太々講でも裏白講でも、此方は借り切つてある座敷だ。

金兵　知れた事、此方こそ借り切つてあるから、騷ぎたいやうに騷ぐ。其方も勝手に、語るとも唸るともするがよい。

トお藤こなしあつて金兵衞をなだめ

ふぢ　申し／＼、お隣りは傳馬町のお初さんの名弘め、遠山の殿樣もお出でなされてござります。マアマア、また間違ひでもあつたら氣の毒。定さんも不請してあげなさんせ。ナア申し、十右衞門さま。

十右　左樣でござります。どうで大勢々々の事なら、マア／＼御免なされませ。

ト定六を見て

イヤ、誰れかと思つたら、植木屋の定六どのか。

定六　葛飾の十右衛門さま。そんならお前が、太々の世話人かえ。

十右　さればサ、町内の太々の取持ち役で、朝から來てゐますが、隣り座敷の淨瑠璃は、傳馬町の連中かえ。

定六　なにサ、お初が名弘めの會で、遠山の殿樣もお出でなされます。

十右　そんなら、殿樣もお出でなされますか。

定六　殿樣も當分は、わしが所に居候ふ。又わしは、人樣の世話をするが、きつい好きといふ内にも、また別して常から御恩になつた殿樣の事、百年ござつても、それに頓着は無けれども、どうぞマアお屋敷へ、お歸りなさるやうに、したいものでござります。

十右　イヤモ、わしもお出入り屋敷の殿樣、お大名の事ぢやによつて、なか〳〵平常は、お目通りさへ出來ねど、お遊びにでもござる時は、お心安う物も云ひ、御機嫌のよい殿樣ゆゑ、わしもいろいろと、心遣ひしてゐます。併し近々には、お屋敷へお歸りなさるであらうか。

ト奥より與茂七、以前の形にて、風呂敷包みを持ち出て

與茂　これは十右衛門さまでござりまするか。よい所でお目にかゝりました。

十右　オヽ、大丸の……ようござりました。最前ちよつと奴を遣はしましたが

関良　左様でござります。この節お手紙ゆゑ、即ちお誂へのお小袖を持つて参りました。

十右　それは大きに早う出来ました。ドレ〳〵。

ト風呂敷より小袖を出して見る。此うち、お藤金兵衛、皆々酒を飲んでゐて

金兵　モシ、十右衛門さま、見ればその小袖は、殿様の替へ紋が附いてござりますが。

十右　左様サ、こりや遠山さまのお替へ紋。

定六　十右衛門さま、お前も小袖をお買ひなされましたか。

十右　イヤ、このお小袖は、私しがお出入りのゆゑ、この正月お屋敷へお礼のとき、結構のお供揃ひの、人を入れる時分に着るがよいと、仰しやつて下さつた、小袖でござります。

ト風にて

團右　定公や〳〵、どこへ行つた。定や〳〵。

ト呼ぶ。十右衛門これを聞いて

十右　あの聲は、聞いた聲ぢやが。

ふな　御用人の團右衛門さんでござりますわいな。

十右　成る程、團右衛門さまか。また團右衛門さまが爰へござつたら、おれが顔かるの何ではない

殿樣に着てお目にかけぬ内は、オヽ、幸ひ〳〵、コレ、平次郎。

平次 ハイ〳〵、御用でござりますか。

十右 われは矢ッ張り、この大丸のお人と連れ立つて、直ぐに内へ、この小袖を持つて、先へ歸れ。

平次 左樣なら私しは、もう歸りましてもようござりますか。

十右 おれはどうで隙がいる。又これから、千住の問屋場まで、小ざしの用で行かねばならぬ。

與茂 私しも左樣なら、奴どのと一緒に、このお小袖を。

十右 御苦勞ながらお頼み申しまする。ソレ、平次郎、氣を附けて行けよ。

與茂 そんなら奴さん、一緒に行きませう。

ト合ひ方になり、平次郎與茂七、奥へ入る。また奥にて

團右 定公や〳〵。

ト呼びながら出て

定八 どうだ〳〵。聽き手が外へ散つては張合ひがない。

ト十右衞門を見て

オヽ、鬘飾の十右衞門、上下で、さては年頭の殘りか。

十右　これは團右衞門さま、開けましては、まだお目にかゝりませぬ。
團右　さうであつたの。そんなら今日の、太々講の世話人か。
十右　左樣でござります。それゆゑお前樣のお出でも、殿樣のお入り遊ばすも存じませず、御挨拶も申し上げませぬ。
團右　なにさ／＼、殿樣も身共も、屋敷とは違ふ。爰は格外の事。ときに、おれが淨瑠璃が、上がつた事を知るまいの。
十右　さア、御評判は承りました。大分うまいものになつたと申します。
團右　丁度よい所へ來てくれた。マア、おれが語るのを聞いてくれ。この間も芝の隱居が、強勢に褒めて行つた。
今兵　モシ、團右衞門さま、また淨瑠璃の切れるには間がござりませう。
團右　まだ／＼。いま殿樣の「廿四孝」、その後があの辻屋の多四郎、それからおれが「本町育」に、「梅川」と續けてやるつもりだ。
ふち　モシ、もう其方の參會が濟みましたら、いつも淨瑠璃の座敷で、みな御一緒に打交つて、聴き手になつてはどうでござりませう。

定六　こりやァ面白からう。これからおれが役場だわえ。
十右　私しも一段、承つて參じませう。
ふぢ　お秀さんも民吉さんも、一緒にお出でえ。
ひで　アイ〳〵、そりや面白い事でござりませう。
團右　そんなら皆、來やれ〳〵。
金兵　サア〳〵、お出でなされませ。
ト唄になり、皆々奧へ入ると、あと合ひ方になり、奧にて皆々褒める聲などよろしくあり。
皆々　イヨ〳〵、うまい事〳〵。
ト合ひ方にて、下の方より九平次出て來て
九平　ヤレ〳〵、今日は騷がしい日だ。下に居ては、酒もろく〳〵に飮めねえ。今日は妹のお初が來てゐるから、祝儀の溜つたのでも借りて、算段しようか。爰に硯蓋がある。酒もある。ドレ、一杯やつゝけよう。
ト胡座をかいて酒を飮むと、淨瑠璃の三重を彈く。奧よりお鶴出て來て
つる　淨瑠璃のある座敷はどこだの。モシ、淨瑠璃の會のある所は

ト　ふと九平次を見て

オヽ、お前は伯父さんか。

九平　わりやアお鶴か。どうして爰へ来た。

つる　お前に逢はうと思つて来たわいな。

九平　おれに逢ひに来たとは、何の用だ。

つる　無心に来たわいな。

九平　なんだ、無心だ。

つる　なんだとは気が強い。よくはける事があるものかな。コレ、伯父さん、お前ヤア、爰へ来ねえ。

ト　前へ連れて出て

なんぼわつちが気の好い者だといつて、それなりやア済むまいによ。わつちがな、年季奉公をしてゐる時、十二の年に、騙して祇園へ勤奉に売つて、それから與兵衛とのに添つてゐる内も、此方があゝいふ身の上を知つてから、度々の無心を云つて苦患して、いま與兵衛とのが牢へ入つてからといふものは、ナアナア、イアヤイ、歩びつけもしねえ。昔の事を思ふなら、どうだと云つて尋ねてくれても、よい義理だによ。何も云はねえから、五十両貸しな。

九平　なんだ、五十兩貸せ。

つる　お前、わつちを松枝へ、五十兩に賣つてしまつたらう。どうせ亭主は牢へ入つてゐる盗人の事なり。

九平　これサ〳〵、靜かに云へ〳〵。人が聞くわえ。

つる　云ふよ〳〵。人が聞いても、ほんの事だもの。なんでも今五十兩、工面してもらはにやア、わつちの身の立行きが出來ねえから、五十兩貸しておくれな。

九平　成る程それも、われの云ふのが尤もだが、おれだといつて、今は大名屋敷の渡り中間、五十兩の事はさておいて、二朱の工面も出來るものか。困るだらうが、當時のところは

つる　これサ〳〵、お前、さう云へた義理ぢやアあるめえによ。よいわな、出來ずば借りやすめえ。借りる所で借りるよ。これから代官所へ行つて、わつちを五十兩に賣つた事から、段々の始末を云つて、盗人の女房に借りがある、上前取りだと云つたならば、すぐ素直に行きやアしめえ。いつそ代官所へ駈け込んで、埒を明けよう。

ト行きさうにする。

九平　アヽ、コレ〳〵、マア〳〵待て〳〵。

つる 大きな聲でいふによ。
九平 これサ、そんな事を云つてたまるものか。
つる そんなら五十兩寄越しな。
九平 それだといつて、どうして五十兩。
つる 寄越されずば、訴人するによ。
九平 サア。
つる サア〳〵〳〵、どうとも早く、方を附けておくれよ。
ト九平次、いろ〳〵術なき思ひ入れあつて
九平 ムウ、よし〳〵、五十兩遣らう。
つる エ。
九平 な、お鶴、おれも知つてゐる通り、おれが妹のあのお初は、遠山さまといふ大名のお氣に入りで是非身請けをされる筈。よしんばそれが出來ねえでも、お初を五十兩に深川へやつて、金を借りて、その金をわれへ、遣りさへしたらよからうぢやアないか。
つる 成る程、それはおつるも知つてゐる事サ。そんならお初さんを、深川へやつて、

九平　オヽサ、五十兩の金を遣るわえ。
つる　そして、そりや何時の事だえ。
九平　ハテ、いま奥へ行つて、拵へてやる、といふ譯は、爰の萬八の女房と、深川の天滿屋とは一家内で、しかも今日太々講の鬮が當つて、金がある事は、おれが知つてゐる。そこで、爰の女房のお前に賴んで、直ぐに五十兩にしてやるワ。
つる　ムウ、マアどうか本らしいが、そんならわつちは爰の内に、どうかして待つてゐるから、後までに屹度拵へてくんなよ。
九平　オヽサ、違ひなく拵へてやる。
つる　そんなら、本の事だの。
九平　ハテ、爰の内へ來てゐるといつて、萬八を云ふものかな。
ト唄になり、九平次こなしあつて奥へ入る。お鶴殘り
つる　マア、いゝ鹽梅だ。なんでもマア、ちつとづゝでも都合して、金を揃へにやアならねえ。ドレマア、一服のんで
ト貸盆を引寄せ

アヽ、貧もない。

ト合ひ方になり奥より、十右衛門、着附、羽織の形、與四郎、半吉、跡よりお秀、民吉、附いて出る。

與四　サア／＼、今日はお心遣ひでござりました。

十右　まづ滞りなく、殊に團も内方に當り、一しほ悦びます。

民吉　お秀さん、わたしはモウ歸るのかいな。

ひで　アヽ／＼、わたしが一緒に送つてあげるな。ほんに十右衛門さま、今日は大きに有り難うござります。

ト　お鶴、これにて十右衛門に思ひ入れ。

十右　イヤ、二人とも大きに御大儀でござりました。お蔭で賑やかでござりました。さうして、供の人は待たせて置いたらうの。

ひで　イエ、頼んだ人は皆、先へ歸しましたわいな。

十右　それでは子供ばかりで氣の毒。此方の内から送らせてやりませう。どこであつたの。

ひで　いエ、駒形の河岸でござります。ツイ二人連れで參ります。大事ござりません。

十右　そんならば猶よい。わしはこれから千住の方まで行くほどに、駒形まで連れ立つて行きませう。

ひで　それは有り難うござりますわいな。
與四　そんなら十右衛門どの、千住まで今からござりますか。
半吉　遅うなるでござりませうぞや。
十右　イヤモ、是非日が暮れても參らねばならぬ商賣用。その支度で、袂に提灯も入れて參りました。
與四　それは御苦勞でござりますな。
十右　どうで歸りには、駕籠を取つて歸ります。

トこの時、お鶴を見て

モシ、女中　今日は大きに使ひ立てました。

ト又おいるを見て

オヽ、こりや内方の女子衆かと思うて、免さつしやりませ。

つる　アイ、内方の女子衆も同然サ。
十右　大きに無躾を申しました。
つる　ナニ、大事ござりません。
十右　どうかお前は、どこでやら。

つる　わたしもどうやらお顔をば

十右　見たやうにもあり、どうも思ひ出されぬ。また其うち、お目にかゝりませう。

ひで　十右衛門さま、そんなら御一緒に、

十右　サア、行きませう。

ト唄になり、十右衛門、お秀、民吉、向うへ入る。與四郎、半吉は下の方へ入る。お鶴、跡に殘り

つる　ハテ、今の人は、どうか見た顔だが、名は、十右衛門さま〳〵……もしや先刻の、十右衛門　といふ人か……ドレ、伯父御に催促して來ようか。

トついと奥へ入る。チョン〳〵、道具廻る。

本舞臺、三間の間、見附け襖、上の方、斜に取つたる床、簾。正面のところ鬼簾にて見えすくやうにして床の内の右出入りの口を附け、この脇に淨瑠璃の外題、役附け、いろ〳〵貼つてある。すべて淨瑠璃浚ひ會のもやう。右床の内に多四郎、町人の拵へ、鉢卷をしめ、淨瑠璃を語つてゐる。弟吉代、三味線を彈いてゐる。團右衛門、お初、七五郎、定六、酒盛りして飲みながら聽いてゐる。富勝、酌をしてゐる。三重にて道具とまる。

ト皆々捨ぜりふにて褒めると、多四郎「妹背山」の酒屋を語る。團右衛門はお初を捕へて、いろ〳〵嫌らしきこなし。

はつ　アヽコレ、賀調さん、惡い事ばつかり。

團右　これサ、マア、淨瑠璃前に一つ飲みやれ。酒は聲の藥だ。

はつ　エヽ、否ぢやわいな。

ト振向くと、杯を落す。銚子こける。

皆々　アヽ、それ〳〵、酒が溢れました。

はつ　それ見やしやんせいな。

ト皆々捨ぜりふよろしくあつて、多四郎淨瑠璃にて

多四　「動く拍子に呑み口拔け、酒は瀧津瀬びつくり敗亡、三人同じく後れじと、同じ思ひの跡や先、道を早めて。」

トよろしく語る。

皆々　イヨ〳〵、惜しいぞ〳〵。

ト褒める。多四郎、筆美代、床の内より出で來る。

定六　多四郎さん、きついものでござります。
はつ　筆美代さん、御苦勞でござんしたなア。
筆美　多四郎さんと、ろく／＼彈合せがないゆゑ、中途で難儀したわいなア。
多四　なにサ、眞中のサワリさへ巧くゆけば、此方のものサ。
七五　サア、これから誰れだ〳〵。
定六　賀諦さんの「小石川」ぢやアござりませぬか。
團右　中入りはおれが「小石川」。コレ、お初、一番彈いてくんな。
はつ　またおふてかいな。外のお方に頼みなさんせ。
團右　それでも「小石川」は、おぬしでないと巧くゆかぬ。そんなら殿樣のお聲がゝりで、彈いてもらはう。
七五　ほんに、殿樣はどこへお出でなされた。
富勝　殿樣は、いま内方の娘御と、下へお出でなさんしたわいな。
はつ　何ぢやえ。内方に娘御さんがござんすかいな。
多四　殿樣は兎角女好き、此方の娘を連れて、下へござつたが怪しいわえ。
はつ　ほんに、いつの間にやら、油斷のならぬ事ぢやわいな。

多四　なんでも殿様を呼び申すがよい。

皆々　モシ／＼、殿様え／＼。

ト皆々呼ぶと奥にて

甚三　オイ／＼、何ぢや／＼。

ト甚三郎、着流し、殿様の拵らへ、酒に醉ひしこなしにて、お玉、振り袖、娘の形、前垂れにて出る。

たま　申し殿さん、皆さんが呼び申してぢやわいなア。

皆々　サア／＼、皆待つて居ります／＼。

はつ　殿さん、お前もとつと、ソワ／＼としてばつかり、娘御さんぢやの何のと、お樂しみでござんすなア。

甚三　樂しみでなうてか。今日は大事の其方の名弘め、しつぽりと一段語るつもりぢや。

たま　申し、其やうに酒を上がりましたら、淨瑠璃が出來ますまいぞえ。

甚三　なにサ、師直ではないが、酒はたべてもたべいでも、語るところはキッと語るぢや。大事ない、お玉、てまへと道行を掛合ひに語らうか。

たま　イエ／＼、お前さんと道行をすると、お初さんに叱られますわいなア。

其二　ハヽヽヽヽ、まぜた事を云ふ。流石は萬八の娘おやや〱。

はつ　そんなら、内方の娘御さんといふのは、あのお方かいなア。

竹五　あのお子は、内方の娘で、大抵愛嬌といでござんすわいな。

はつ　わたしや又、大きい娘御さんかと思うて。ホヽヽヽ、ほんに可愛らしい、よいお子でござりますなア。

七九　なんと、これで落つきの吸ひ物で、酒はどうでござります。

其三　サア〱、酒々。

富勝　中入りが濟んだら、賀調さんの「小石川」かいな。

團右　サア〱、お初、ちよつとやつてくんな。

其二　賀調が「小石川」、こりや一段聽き事であらう。

七九　お初さん、殿様がお好みだ。一段彈いてあげなさりまし。

左門　これサ、團右衛門さま、幼稚つけますと、早くおやりなされまし。跡がつかへて居ります。

其二　お初、眞中のところを、一くさり彈いたがよい。

團右　殿様の仰せだ。否應はなるまい〱。

はつ　エヽモ、そんなら弾くは弾くが、どこを弾くのぢやぞいな。

團右　サア、「小石川」はどこからやらう。ナア、定公。

定六　小石川の方は、どうで霜解けがするから、道順をよくやるがようござりませう

七五　おきやアがれ。年禮に出やアしまいし。

皆々　ハヽヽヽヽヽ。

筆富　サア／＼、待つて居りますわいなア／＼。

ト團右衛門、お初の手を引いて、無理に床へ入る。此うち甚三郎、皆々を相手に、酒盛りをする。お玉、酌をする。床にてお初、三味線を弾く。

多四　サア、みんな、東西々々。

ト淨瑠璃にて

團右　「佗び住居には取分けて、哀れを添ゆる鐘の聲」。

ト此うち皆々褒める。床の内にて團右衛門、お初に嫌らしく寄添ふ。お初、摺りのく。外からは見えぬ心。

甚三　イヨ、三四々々。

團右「住み馴れぬ門かして、どうやら氣味の惡い内」。

ト語りながらしなだれる。

はつ　エヽモ、氣味の惡い。

ト又淨瑠璃にて

團右「女房顔してもよばかり、世帶めかすも可愛らし」。

ト又お初へこなし。此うち甚三郎、筆葉代を捕へ

甚三　コレ、筆葉代、この間云うた、あの投節のサヽリの間を、敎へてくれぬか。

筆葉　そりやお初さんが、よう知つてゞござりますわいな。

甚三　サア、そのお初がサヽリのところなれど、おれはてまへに習ひたい。

ト酒に醉はれるこなしにて、筆葉代が手を取る。

筆葉　それは有り難うござりますれど

トこなし。此の内よりお初見てムッとする。甚三郎、筆葉代を引寄せて戲れる。

甚三　晩に習ひに行かうか。

筆葉　いつでもお待ち申して居ります。

はつ　エヽ、何のこつちやいなア。

團右　「コレマ、ころぶ事はならぬぞや」。

ト甚三郎酒を飲む。皆々褒める。

團右　「アレまだあんなじやら〳〵と」。

ト お初にしなだれる。

はつ　エヽ、何をじやら〳〵。

團右　「お前をのけて仇枕、かはす心は無いわいなア」。

皆々　イヨ、うまい〳〵。

七定　イヤ、聴き手になるも辛いものだワ。

ト筆美代こちらへ逃げる。お初、床の内にて無性に三重のやうな三味線を弾く。團右衛門、ウロ〳〵して、出たらめに淨瑠璃を語る。お初、床の外へ出る。團右衛門、語りながら追ひかけ、外へ出る。お初、甚三郎を床の中へ連れて入る。皆々、ウロ〳〵して

定六　アヽ、絲が切れたか〳〵。

ト外の三味線を持つて行きさうにするを、團右衛門はフラ〳〵して定六を捕へ、嫌らしきこなし。皆

皆甚三郎を尋ねる。甚三郎、床の内にてお初にこなし。

皆々　賀調さま／＼。

ト團右衞門、フラ／＼して

團右　コレ／＼、誰れぞ湯を一つくれ／＼。

皆々　どうなされました／＼。

團右　イヤもう、据風呂へ入つたやうな心持ちで、のぼせ上がつた。

多四　何を云はつしやります。それでは梅川の「新口村」を、誰れか語る。

ト床の内にて

甚三　イヤ、太夫替りぢや／＼。

雀之　ほんに、いつの間にやらお初さんと

七五　二人しつぽり道行は、あの床の内で

ト定六手早く三味線を取つて弾き

多四　温められつ温めつ。

ト語る。床の内にて

甚三　イヨ、うまい〳〵。

ト　お初に寄りそふ。

團右　何の事だ、がつかりした。

トかすめたる通り神樂になり、多四郎、淨瑠璃を語る。定六は三味線を彈くと、此うち向うより運太夫、立役親仁の拵へ、袴羽織、大小にて、ツカ〳〵と出て來て

運太　遠山甚三郎さまと申す殿樣は、この所にお出でなさるゝか。

ト皆々捨ぜりふよろしくあつて、運太夫に構はぬ思ひ入れ。

コリヤ〳〵、殿樣を存ぜぬか〳〵。

ト淨瑠璃の床を見て

何ぢや、淨瑠璃の會があるか。

多四　「孫右衛門は老足の、休み〳〵に門を過ぎ、野口の溝の薄氷」。

トだん〳〵語るうち、運太夫、火鉢に爪づきころぶ。皆々惘りして

富勝　アヽ、申し〳〵、親仁樣がお轉びなさんしたわいな。

ト皆々介抱する。團右衛門、運太夫を見て

團右 ヤア、こなたは長谷、運太夫どの。
運太 犬上團右衛門か。これは〳〵、興がる仕合せ。
皆々 危ない事でござりましたなア。
運太 して、なにか、殿様には、いづれにお入りなさる。
ト床の中より
甚三 イヽ、運太夫か、よう參つたな。
ト床の中より出てくる。お初も出る。運太夫、甚三郎を見て
運太 これは〳〵、殿様、まづ〳〵御機嫌ようお入り遊ばされまして、恐悦に存じまする。
甚三 其方も達者で、寒氣の障りもないか。さうして、此許へは、何用あつて參つた。
運太 イヤ、運太夫罷り越しましたるは、甚だ恐悦な儀でござりまする。
甚三 ムウ、年頭の遲ればせか。イヤモ、當時は自分も遊民同様な體、きつとした祝儀などには及ばぬ。
マア〳〵、寒かつたであらう。コレ、皆、下へ申しつけて、何ぞ温まる物でも言ひつけて遣はせ。
金四 ハイ〳〵、畏りました。そんならマア、淨瑠璃は段切りかな。
たゞ今面白い所へ、お爺さんが來なさんして、わたしや恟りしたわいな。

七五　肝腎の孫右衛門の出にならうといふ所で、とんだ番狂はせであつた。
定六　鼻緒も切れぬ其うちに、浄瑠璃の鼻緒が切れてしまつた。
七五　殿様のお側には、あの子達を置いて、おいらは下へ行つて、膳札の残りで一杯やらうか。
定多　こりや好からう。
七五　左様なら殿さん
三人　團右衛門さま、私しどもは下宿へ下がります。
　　ト合ひ方になり、三人奥へ入る。跡に甚三郎、お初、團右衛門、運太夫、お玉、富勝、筆美代残る。
團右　運太夫どの、殿様へ恐悦な儀と仰せらるゝが、如何やうな恐悦がござるな。
運太　されぱでござる。お喜びなされ。殿様には一旦御惣領のぞき、お願ひなされたなれど、御本家のお指圖につき、この度又々御家督御相續の儀を申し參つた。まづ御本知へお歸りでござる。この旨、内々老臣の諸侯より申し參つたゆゑ、運太夫まことに天へも上がる心地いたして、直ぐさまこれまで罷り越しましてござる。
甚三　ムウ、すりや本家よりの指圖にて、自分へ家相續を申し參つたか。再び屋敷へ歸るのぢやな。
運太　左様でござります。これからは遠山の殿様、諸侯の列。なんと團右衛門どの、貴殿もお喜び下さ

れい。

團右　サア〳〵、イヤ〳〵、この團右衛門は、あまり喜びにはござらぬて。

運太　ハテ、殿樣御家督相續を、喜びでないとは。

團右　されば〳〵の儀でござる。殿樣御本知へ御歸參なさるれば、兼ねてお家重代の、四方出の香爐が無ければ、滅多に御家督が出來まいかと存じまする。

運太　ムウ、すりや、その四方出の香爐を、何とぞ致したかな。

甚三　サア、イヤ〳〵、運太夫、その香爐は無い。

運太　エヽ。

甚三　ハテ、自分屋敷の費い、不用な道具ぢやによつて、金子入用の節、團右衛門と熟談の上、質か余人に相渡し、預けあると申す事ぢや。

運太　ムウ、あの大切なる四方出の香爐、外へ參つてござるとは、團右衛門、すりや、なんと召された。

團右　ハテ、すりや、いま殿樣の仰せらるゝ通り、金子入用の節、この團右衛門の才覺に、質物に入れました、それゆゑの儀でござる。

運太　して、その質物に入れた金高は。

トこの時金兵衛出かけゐて

金兵 アイヤ、その金高は二百兩、即ち月も今月今日が日限り。二百兩、遣はされて下さりますか。

トずつと前へ出て云ふ。

はつ ヤ、お前は金兵衛さま。

甚三 お初、其方はこの者存じて居るか。

はつ アイ、白銀町の澤屋の金兵衛さんといふお方。

園右 あれが卽ち先達て、彼の香爐をお預けなされた、澤屋の金兵衛。

金兵 ヘイ、また七つ屋の金兵衛とも申しまする番頭職、先達て預かりました四方出の香爐、いよく
お請け戻しがござりませねば、今日直ぐに外樣へ手放しまする。お斷わりに參りました。

運太 然らばその香爐、爰へ持參しやつたか。

金兵 左樣でござります。金子さへ遣はされますれば、直ぐにお渡し申しまする。

運太 ムウ……園右衛門どの、申さば僅かの金高、今日を明日と、こりやおてまへの詞次第で

金兵 アヽイヤ、申しお爺さまえ、これまで段々引延ばし、モウノヽ、切端詰まつた今日只今、金子が
參りませぬ事なら、直ぐに外樣へ

運太　おやと申して、いま爰に。

金兵　無ければ直ぐに持つて歸りまする。

運太　サア、その儀は

金兵　どうでございます。

ト この時、奥より長吉出て來て

長吉　金兵衛さんとやら、その金は、いくらの事でござりますの

金兵　サヽなんだ　思ひがけない所へ、どこのかかへべい。その金はいくらでござりますとは、ハヽヽ、ハヽヽ、子供といふものは。大枚二百兩、てまへ達が知つた事ではない……ハヽヽヽヽヽ。

ト長吉默つて奥へ入る。金兵衛こなしあつて

旦那様なら申しお智様、ヲヽ殿様、お暇わり申しました。

ト行きかゝるを運太とめて

運太　待て、金兵衛とやら。某山本三郎とやらいふ、お歴々のお道具、いはゞ僅かの二百兩、たとへ爰に御上物はごいでも、仕事をはやへ申し出はし、旦那を頭はすぐの間、まつ前金は置いて行きやれ。

ト云

金兵　滅相な事云はつしやります。入替へもなくつて、ちよつと只貸せかい。イヤ、ずるい事を云ふお爺さんだ。相談は出來ますまい。お氣の毒ながら

ト奥へ行きかけると、長吉、財布を持ち、ツカ〳〵と出て

長吉　サア、二百兩、やりませう。

ト金兵衞に渡す。金兵衞見て

金兵　ヤア、なんだ、二百兩だ。

ト取つて

ほんに、こりやア二百兩。

ト皆々思ひ入れ。後へ文藏出て

文藏　質請けの金受取つたなら、四方出の香爐、置いて行きやれ。

ト金兵衞、文藏を見て

金兵　ヤ、木場の文藏どの、アノこなたが、四方出の香爐を

運太　アイヤ、人手に渡されぬ大切なお家の寶。

文藏　お氣遣ひなされますな。金子は卽ち私しが、殿様へ御用立てます。

運太　さういふ、おてまへは。

文藏　お見知りもござりますまい。お屋敷へお出入りの、葛飾の十右衛門が弟文藏、今日持ち合せましたる金子二百兩、差かゝつて殿樣の御迷惑なされますを、陰ながらも見てゐられぬが、私しの性得。何かの事は追つてのお話し、マア早急な二百兩、私しが御用立てますからは、お氣遣ひなしにお遣ひなされませ。

ト胴卷を取つて、運太夫の前へ持つて行く。

運太　ムウ。かねて〳〵聞き及んだ十右衛門が舍弟、今では深川邊へ養子と承つたが、すりや其方がこの金を

文藏　マア、御用にお立て下さりませ。

運太　忝い。然らば暫時借用申す。イヤナニ金兵衛、金子二百兩調達いたした。サア、その香爐、此方へ受取らう。

金兵　イヤモウ、お金さへ取りますれば、御身持參いたしましたこの香爐。

ト風呂敷包みより香爐を出し

又これは、彼の宗祇法師とやらが鑑定の書附け。しつかりとお渡し申しまする。

ト甚三郎、最前より始終見てゐて

甚三 寶を以て寶とせずなどゝ聖人も云はれたが、寶が無ければ、當時家督相續の差つかへ、當惑に及んだるところへ、十右衛門が弟の文藏、若いに似合はぬ奇特な者。團右衛門、蓮太夫も、文藏に厚く禮を述べてくりやれ。

團右 拙者も兎やかう案じ居つたところ、文藏が親切。ナウ、蓮太夫どの

蓮太 イヤモウ、禮は詞に盡されぬ。忝うござる。

はつ そんなら殿樣には、また元のお屋敷へ、お歸り遊ばしますかいな。

筆美 お初さん、お前もさぞ嬉しうござんせうな。

はつ 嬉しい段か。推量して下さんせいな。

蓮太 イヤナニ文藏、この香爐は、宗祇法師が鑑定の書附け、お家の重器と申しながら、香爐があつても、この鑑定書が無ければ役には立たぬ。文藏、この鑑定の書附けは、おてまへに預ける間、明日にもお屋敷へ、持參いたしてくりやれ。

文藏 左樣なら、この書附けを

蓮太 おてまへとても養子の身分、大金を故も無く、斯樣なる處にて人に貸したとも申されまい。殿樣

へ御用立つたと申す、實父への挨拶、又この運太夫が、おてまへへの挨拶に、この鑑定書は預け申す。

文蔵　これは又、御念の入りました事。併し、左様仰せられまする事ならば、この鑑定書は私しが、お預かり申しまする。香爐は殿様へ。

ト出す。甚三郎、香爐を取つて懐へ入れ

甚三　存じがけない世話になつて、文蔵、忝い／＼。

運太　殿様には、お微行にてお召されて、密かにお屋敷への御歸館がよろしうござりませう。

甚三　まゝ、歸らう／＼。サア、お初、行かぬか。筆表代も、富勝も、道まで供をして送つてくれぬか。

運太　ア、、モシ／＼、その儀は如何にござりませう。

甚三　なぜ／＼。

運太　久々にて御歸館の殿様、御供の者を召連れられまして、お屋敷へお歸りあれば、それでは矢張り御政道が、相やみませぬやうに、人口も如何。

甚三　なに大事ない事を。何様者でも遊女でも、一旦武士が召使ひにても致さうと申し交し、只今となつて打捨てになるか。殊に取つて氣前の素直なる者なるによつて、親類どもへ申して本妻にも

二番目序幕



二幕目



す契約。屋敷へ連れ歸つたとて、誰れが譏り笑ふものがあらう。よし又、如何申す者があつて、本家などより、彼れこれと申さば、只今までの通り、屋敷には居らぬ分ぢや。ナウ、團右衛門。

團右　ヘイ、如何やうとも、殿樣の思し召し次第。

運太　イヤ〳〵、左樣ではございませうが

甚三　これサ〳〵、運太夫、其方は頑なる性質ぢや。吉田の法師が文談にも、いとさう〴〵しくと書いてあるではないか。賢を賢としてといふ事も、幼少な時素讀いたして、隨分承知、辨まへて居る屋敷へ歸つて親類どもより、縁談の事など申し參り、妻室を呼び迎へたりとも、それはそれ、これはこれ、分相應の身が樂しみ。このお初は屋敷に引取り、差置いても苦しうない。コレ、お初、必ず心遣ひせまいぞ。

はつ　ほんにモウ、身にある殿樣のお詞、賤しい藝者の身すがらも、殿樣のお情は、眞實忘れは致しませぬ。もうこの三味線を持たぬ法もあれ

甚三　アヽ、これ〳〵、藝者が三味線を持たいでよいものか。屋敷へ參つても、いつまでも藝者のお初を忘れぬやう。それでなければ

はつ　アイ、三味線は藝者の魂ひと、あの五大力の狂言にもある通り、きつと心に

甚三　成る程、あの九太刀の狂言、あの女形が、何とやら云ふ……オヽそれ〳〵、藝者の魂ひはこの三味線。

はつ　お侍ひの魂ひは

甚三　刀にかけて、變ぜぬ心。

はつ　嬉しうござんす。

文藏　ゴヽ、イクサヽヽ、お大名の御氣性。

運太　それ程までに御熱心。然しながらハヤ

甚三　運太夫、わしと芝居でも見るがよい。

ト唄になり、甚三郎こなしあつて、お初を連れ、文藏附いて、運太夫、龜菊代、富勝、みな〳〵奥へ入る。あと合ひ方。金兵衞・團右衞門出て

金兵　團右衞門さま。

團右　金兵衞。

金兵　お前とわしが目論んで、百兩の質を二百兩で、まつ溜まり、その上、肝腎の證文書こそ、文藏に渡したのは嬉しい物、目論見は割る變に。

ト出して目でしらす

園右 よし〳〵。併し、あの文藏めが、今のやうにボッカリと、二百兩出す位だによつて、似せ物と知つたら跡で面倒。

金兵 イカサマ、それもそんなもの。ちつとの間、誰れぞに預けて。

ト七五郎奥より出て來て

七五 その鑑定書は、わしが預かつてやりませう。

園右 オヽ、七五郎か。成る程、てまへが持つてゐるもよからう。

金兵 おぬしが持つてゐたなら、氣の附く事ではない。

ト鑑定書を七五郎に渡す。七五郎取つて懷へ入れる。この前より後へお玉出かけてゐて、これを目て入る。三人これを知らず

園右 併しながら七五郎も、爰に居ては惡い。ちつとの間、どこぞへ。

七五 イヤ、わしは竹の塚の伯母御の所へ用があつて、五六日行きますから、幸ひ爰から直ぐに

金兵 遠ッ走りが、矢ッ張り近道。

園右 そんなら金兵衞。

金兵 ソレ、百兩。

團右　これやア、危い。七五郎に符牒分けは

七五　竹の塚から歸つた上で

金兵　三人寄れば

團右　千住の先まで、暮れぬうちに

七五　ドリヤ、隨徳寺とやらかしませうか。

　ト通り神樂になり、七五郎向うへ入る。

團右　まつ、あれで落ちついたが、兎角何につけても、邪魔になるはあの文藏、何ぞといふと罷り出て、邪魔をする。彼奴をどうぞして、脇へ片附けて置く仕様はあるまいか。

　トいろ〳〵思案して心づき

オヽ、ある〳〵、よい事がある。

金兵　よい事があるとわえ。

團右　おれが同仁が、もと長崎へ用があつて行かれたとき、當利散といふ藥を持つてござつたが、此奴は奇妙な藥ぢやて。

金兵　奇妙な藥とは、そりや毒藥のやうな物どえ。

團右　イヤ、毒ぢやァない。こりやァ今云ふ通り當利散と云つて、俗に云へば痺れ藥といふやうな物で
酒にでも入れて服ませると、一時か半時のうちに、臑腰が抜けて役に立たぬ。

金兵　ハテ、妙な藥だね。そんなら、その藥を

團右　あの文藏めにくらはせる……と云つたところが、どうして服ませたものであらう。

ト　この前より後に九平次出かけてゐて、この時

九平　モシ、お二人さま、その藥を、わしにも少つと下さりませ。

團右　オヽ、九平次か。この藥を、われは何にする。

九平　さればでござります。ちつと服ませにやならぬ奴がござります。その代り、わしにその藥を下さると、あの文藏めにも服ませてあげませう。

團右　成る程、九平次が酒でも飲ませるには、彼奴も氣の附く事はあるまい。

金兵　こりやァよい思ひ附きでござります。

團右　然らば包みのまゝ皆遣はす。鹽梅よくやつてくれ。

ト　藥を渡す。九平次取つて

九平　呑み込みました。時に團右衛門さま、妹のお初は、お前が兼ねて惚れてござりますが、ちつと

した事で、當分深川の仲町へやつて置きますが、いよ／＼お前があのお初を

團右　是非立て合して女房にするか、どういふ事で、あのお初を深川へ。

九平　イヤサ、やるに附いては、入り込んだお話しがござりまする。

ト奥にてお藤の聲。

ふぢ　團右衛門さま／＼。

トこれにて三人思ひ入れ。

團右　そんなら九平次、呑み込んだか。

九平　合點でござります。

團右　來やれ。

ト唄になり、三人こなしあつて奥へ入ると、下の方よりお玉、多四郎を連れて出て來て

多四　お玉さん、そんならあの七五郎が、この書附けとやらを

たま　アイ、竹の塚とやらへ、持つて行くと云うてゐたわいなア。

多四　よし／＼、よく知らせてくんなすつた。これからあの野郎を追ひかけて、引ツたくり返してくれる。

たま　そんなら跡から行くのかえ。

多四　コレ、誰れにも云つちやア惡いよ。

たま　默つてゐるわいな。

多四　ドレ、追つかけてやるべえ。

ト曲撥になり、多四郎は向うへ、お玉は奥へ入ると、合ひ方になり、奥より九平次、お初を連れ、出て來て

九平　コレ、妹や、いま奥で話す通りの入り譯。殿樣はお屋敷へお歸りなさるについて、藝者を女房にするといつて、大名がてまへを連れて、行かれぬとの事。そこでおれがマア、段々聞き合したところ、深川の仲町へ、當分行つてゐると、殿樣が、仲町の茶屋だによつて、お遊びにもござらつしやるし、さうした上では、お屋敷の鹽梅を繕つて、われをズッと入れるといふつもりにマア、御家老樣や用人衆にも申し上げたが、いよ〳〵得心で、深川へ行く氣か。

はつ　そりやお前の云はしやんす事、また殿樣のお首尾の直る事なら、深川はおろか、どこへなと行かいでかいなア。

九平　よし〳〵。われは聞分けのよい者だわえ。そんなら少つとも早く行つてくれろ。

ト奥の口へ來て

モシ〳〵、お藤さん〳〵。

ト奥へ出て来て

ふぢ　アイ〳〵、九平次さん、わたしをお呼びなさんしたは、お初さんの事でござんすかえ。

九平　その事でござります。先刻詳しく申しました通り、それでマア妹にも云ひ含めまして、直ぐにこれから深川へ、やるつもりに致しましたが、いよ〳〵先刻の金の理屈は、ようござりますかえ。

ふぢ　アイ、それでなんでござります。仲町の大満屋は、わたしが一家内の事なり、幸ひと今日、大事の金を預かつてある事なれば、直ぐに今お前に、百両お渡し申しませうわいな。

九平　それは有り難うござります。私しも急な事で、手詰めになつた金ゆゑこの仕合せ、証文も勝手で書いて参りました。

ト渡す。お藤取つて、懐より財布の金を出し

ふぢ　そんなら百両、慥かにお前に。

九平　受取りましてござります。サア妹、いま云つた事、承知であらうの。

はつ　随分合點でやわいな。そんなら直ぐに殿さんを、近いうちに、連れ申して来て下さんせえ。

九平　近いうちでなし、直ぐに明日お連れ申すワ。

ふぢ　九平次さん、早急なやうだが、わたしも預かりもの、話しが済んだ事ならば、駕籠でなりと、お

初さんを。

九平　左樣なされて下さりませ。殿樣へは沙汰なし、こつそりとお賴み申します。

ふぢ　そりや、わたしが呑み込んでゐるわいな……ほんに女子といふものは、男ゆゑには、さま〴〵な憂苦勞をするもの、併しながら、あゝいふ殿さんの事、マアお初さんは仕合せ。

はつ　お藤さんの何かとお世話。お禮はゆるりと。

ふぢ　又わたしも遊びに行くわいな。

はつ　必ず來ておくれえ。併し、深川へ行くと云つたら、また殿樣が

九平　ハテ、それも少つとの間。

はつ　女子の辛抱、月日の經つを待つばかり。

ふぢ　又お屋敷へでもござんしたら、

九平　氏無うて玉の輿。

ふぢ　ドレ、駕籠を云ひつけて來ようわいな。

ト唄になり、お藤こなしあつてお初を連れ、奥へ入る。跡に九平次殘り

九平　ヤレ〳〵、マア、妹めを口說にかけて、百兩は占めた。これからは、又、彼奴を團右衛門さまへ

やるといふ時、また百兩にはツカい、

ト財布を出して思ひ入れ。この時後へ、お鶴出かけて聞いてゐる。これを知らずに

五十兩お鶴にやつて、跡で藥を服ませて引つたくり返す。まづ當分この五十兩で、富の札を十枚ばかり試みに買ふハ。と當るハ。五百兩も占めるハ。その金を慥かな所へ廻すハ。と段々殖えて金持ちになつて、旨い物を食べて、妾でも置いて、思ひ入れ洒落る。此奴は妙だ。

つる　さう巧く行きやアいゝが。

ト ずつと前へ出る。九平吃驚りして、

九平　エ、、お鶴か、いつの間に來てゐた。

つる　何もかも、みんな聞いてゐた。サア、早くその金をおくれ。

九平　サア、やらうと思つて、拵らへた五十兩だ。

ト財布を解きさうにするを

つる　カウ／＼、それごとおくれ。

九平　エヽ……こりやア百兩あるわえ。

つる　百兩おくれ。

九平　これサ、てまへには、五十両やる約束だわえ。

つる　先刻は五十両だが、今また利が殖えたから、みんなおくれ。

ト財布を引つたくるを、九平次、紐をしつかり持つて

九平　イヤ、とんだずるい事を云ふ女だ。これをやつて詰まるものか。

ト紐を引ッ張る。

つる　エヽ、寄越しねえな。

トこの時、奥より運太夫出て來て

運太　コレ〳〵、九平次〳〵〳〵……コレサ九平次、用がある。

トこれにても九平次、無性に引ッ張る。

九平　ハイ〳〵、何でござります〳〵……これサ、放せえ。どうする〳〵。

ト引ッ張る拍子に紐をプッツリ切る。九平次、運太夫、一時に後へ倒れる。お鶴、財布を持ち、花道へ行つて

つる　おかたじけ。

ト財布を懐へ入れて向うへ入る。舞臺の二人よろしく、拍子

幕

誂の鳴物、時の鐘にて引返す。

序幕　返し　八町繩手の場

役名——菜賣り、曲り金の仁太。髙飾りの十右衛門。侍ひ、小源次。番の者、六。辻屋を四郎。町人、七五郎。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、正面に獄門臺、これに幸四郎似顔の首かけてあり、「盗人引窓與兵衛」といふ捨て札、上の方に石地藏、うしろ黒幕、榎、柳、生ひ茂り、すべて八町繩手の體。爰に仕出し大勢立ちかゝり、六、番の者にて、獄門の噂をしてゐる見得。禪のツトメ、入相の鐘にて幕明く。

ト禪のツトメになり、向うより小源次、提灯をつけさせ、野袴、ぶつ裂き羽織、大小にて、黒羽織の侍ひ二人、附き出て來り

侍ひ　往來の者、片寄れ〳〵

ト文藏もこの中へ交り、うづくまる。

小源　コリヤヤイ、其方どもに申し渡す事あり。一々承れ。

皆々　ハア、。

小源　この如く、獄門にかけしは、引窓與兵衛といふ盗人、多くの金子を盗み取り、同類あれども白狀いたさず、拷問こらへて病死なす。即ち首は巷に晒せば、殘るは盗みし金の詮議、大家へ忍び奪ひし金子を、町家へ預け置きしとの噂。尤もその金には、壹兩々々四つ石の極印。

文藏　モシ〱、お役人樣、左樣ならば、その盗人の金には、四つ石とやらの極印がござりますとな。

小源　いかにも。その金子を遣ふ者は與兵衛が同類。まだ〱尋ぬる夜盗もあれば、この近邊を詮議なさん。最早黃昏、番の者へ申しつけ、首は即ち埋めさせてよからう。

侍ひ　ハア、。

六　ドレ〱、そんなら爰らへ穴を掘つて埋めよう。

ト捨ぜりふにて穴を掘つて埋める。此うち文藏、心がかりの思ひ入れ。六、首を下ろし、穴へ入れる。

六　成る程、盗人にしては好い男だ。したが又、その盗人の金を借りるといふ奴は、上手を行つた太

い縁があるものだなア。

文蔵　ハテ、それは、どんだ者の金を借りたものでござりまするな。

小源　其方どもゝ四つ石の、極印の金使ふ奴と知らば、早速に訴へ参れ。

皆々　畏りました。

小源　猶も身共は同類の詮議。往來の者ども、この旨申し渡したぞ。

皆々　ハアゝ。

ト暮れ六つの鐘になり、小源次、侍ひを連れて、六に仕出し附いて下座へ入る。文蔵残り、思ひ入れあつて

文蔵　ハテ、心がゝりが出来たわえ。どうやら似寄りと思つたあの首、異名は知らねど、兄十右衛門どのゝ所へ、金を預けた旅人の名も與兵衛、割符の合つたあの獄門、兄貴がお覚、人参の金、今の親仁の與兵衛どの、渡した數も二百兩。先刻に殿様御入用、香爐を請けたあの金に、もし四つ石の極印あらば、仕置になつた與兵衛が同類、殊に死人に口無しでは、義理ある親仁に實の兄、殊に依つたらお屋敷まで、三方四方に掛まる災難。このやをゥこの身に

ト思ひ入れ。下座の方、バタバタと音するゆゑ、こなしあつて

さうだ。

ト捨て鐘になり、足早に向うへ入る。引違へて向うより七五郎、スタ／＼と出てくる。東の口より多四郎、これも息せきと出てくる。

多四　アヽ、日が暮れてくるが、お玉さんの話しでは、竹の塚へ逃げたと見えたわえ。

七五　なんでも五つまでに、竹の塚までぶッつけにやァならぬ。

ト兩人、本舞臺へ來て行きあひ、ためらひ見て

多四　ヤア、われやァ七五郎だな。

七五　オヽ、さう云ふは多四郎ぢやァないか。

多四　イヤ、いゝ所で逢つた。寄越しやァがれ。

ト取りつく。

七五　コレ、マァ／＼、寄越せとは、何を寄越せと云ふのだ／＼。

多四　しらを切るな。甚三郎さまが質にお入れなされた、袖香爐の鑑定書、似せ物を拵へて、正銘の物はわれが持つて、竹の塚へ逃げたといふ事は、萬八の内で娘のお玉に聞いて來た。サア、寄越しやァがれ／＼。

七五　ナニ、香爐の鑑定を、おれが持つてゐるといふのか、おらアそんな物は知らねえ。放しやアがれ放しやアがれ。

七四　イヽヤ、持つてゐる鑑定書を寄越しやアがれ。慥かに懐に。

七五　エヽ、知らねえワ。

ト捥げやうとするを、門番引とめ、此うち時の鐘、鉦のアトメリ、兩人、鑑定書を爭ひ、摑み合ひになり、捨て札の周圍を廻り廻し、捨て札を押し倒し、この板を取つて打ち合ひ、あたりへ捨て、追ひ歩き、兩人摑み合ひながら向うへ入ると、犬の聲、ぬ奏り捨て鐘にて、上の口より仁太、頰かむり、牛鐵漿引提賣りの拵へ、明き箱の中へ百茶一斤、干物二十枚、線香三把、風呂敷に包みし重箱などを入れて、鐵漿付の歸りにて、本舞臺へ來る。犬、鳴りに來る。

仁太　シイ〳〵、この畜生め、何を吠えやアがる。シイ〳〵。

ト捨て、ある札を取つて投げ附ける。これにて犬、吠えながら下座へ逃げし思ひ入れ。

イヤモウ、夏からの畜生とらは、薄氣味惡くつてならねえのおやアねえ。アヽコレ、厭い晩だぞ。山谷堀まで行く提灯と一緒に行きたいものだが、今戸へ行つたら、太郎兵衞殿も居るであらう。

ト木魚にて犬吠える。

エヽ、また吠えやアがるか。ドレ、此奴は通りを待つて一緒に行かう。

ト捨て札に腰をかけ、摺り火打ちにて煙草をのみゐる。矢張り五つの鐘、所々にて拍子木を打つ。向うより十右衞門、ぶッかぶり頭巾、羽織ばつち一本差し、藤倉草履を穿き、葛飾と書きし小提灯をともし出で來り、花道にて

十右 アヽ、もう五つだな。エヽコレ、思ひの外遲くなつた。問屋場で掛合つたら、歸りは四つか。併し、宿内に駕籠はあらうて。

ト云ひながら來て、思はず爪づき、草履の前鼻緒の切れしはずみに、提灯の灯消える。

南無三、鼻緒を切つた拍子に、提灯まで消した。アヽ、火が借りたいものだが。アヽ、暗い晩だ。

ト向うを見て

あそこに灯が見えるわえ。ドレ、行つて借りようか。

ト本舞臺へ來て、火皿の灯を便りに

モシ、御無心ながら、灯を一つお貸しなされませ。

仁太 アイ、お易い御用だ。煙草の火かえ。

十右 イヽエ、わしやア爪づいて、草履の鼻緒を切りました。その上、提灯の灯を消しましたから、蠟

燭の灯をつけたうござります。

仁太　エヽ、わしは何事をおつしやるのかと思ひました。蠟燭へ附けるには、もつと魂膽ものだわ・・・持ちなさい。鼻緒をすげるなら、わしが藁がありました。

ト藁切り鼻緒を探す。これより紙縒、一つ釘、凄き合ひ方。

十右　アヽ、なにかえ、お前は商人かえ。

仁太　なにサ、わしやア葛西の曲り金の、百姓でござるが、千住の問屋へ菜を卸しに來ましたよ。

十右　ハヽア、遠い所までござるの。

仁太　ナニお前、兩國へも四ツ目へも、毎朝持ち出しやすが、この頃は千住の相場がいゝから、一荷擔いだ歸りサ。

十右　そりやア御大儀だね。

仁太　サア〱、藁を進ぜませう。

十右　そりやア忝うござります。

ト探り〱藁を取つて鼻緒を直す。

仁太　サヽ、お前、跣足だからね。ドレ〱、この板の上へ、足を踏みかけてござりませ。

十右　ハイ〳〵。

ト捨て札と知らず片足を踏みかけ、鼻緒を直すとて

仁太　アヽ、暗い事だね。これにつけても、灯が欲しいものだ。

十右　さうサ、せめて寒念佛でも來さうなものだが。

仁太　何を云ひなさる。寒は去年明けたわな。

十右　イヽエ、寒念佛ぢやアねえ、なにサ、千日參りサ。

仁太　成る程、似たものだね。……モシ、もう少つと藁を下さいまし。

十右　進ぜませう。

ト籠の中を探し、思ひ入れあり。

仁太　コレ〳〵、待ちなさい〳〵。爰に少つと心當りがあるね。

十右　何がありやす。

仁太　なにサ、千住で買つて來た百茶が一斤、干物が二十枚、線香が三把。

ト一々探り見る。

十右　それが何になるえ。

仁太　イヽエ、これぢやアねえわな。爰に笠輪まで、焼き鯛と唐土餅を持つて行つた重箱がありやす。

十右　それがどうしたえ。

仁太　慥かにそのうつりに、重箱の中に、附け木があらうと思ひついたのサ。

十右　そいつは奇妙だ。ちよつと見せて下さいまし。

仁太　知れねえ、いま捜してゐやすに。

ト重箱の中より、附け木を一枚探り出し

あつた〳〵。古川に水絶えず、附け木が一枚ありやした。

十右　誠にそりやア、地獄で佛だな。いゝ、ゝ、こりやア大きにお世話になります。

ト仁太は附け木を裂き、煙管の火をうつして

仁太　サア〳〵、提灯を出しなさい。

十右　これは忝うござります。

仁太　そりや、明るくなつたワ。

十右　アヽ、夜が明けたやうだ。

仁太　お前、まだ縁組は出来ねえかえ。

十右　左様サ、暗くつて皆無だね。

仁太　ドレ、提灯を持つて進ぜよう。直して行きなさい。

十右　そりやア忝うございます」

ト捨ぜりふにて仁太、提灯を差出してゐる。十右衛門は板へ踏みかけ、鼻緒をすげるうち、仁太、灯にて、フト捨て札を見付け、思ひ入れあつて

仁太　「盗人引窓與兵衛」……ヤア、こりやア捨て札だが、そんなら彼奴はバッサリと。

十右　「この者所々にて金銀を盗み取りし上、人を害し、盗み溜めたる金子、同類に貸しつけ、白状に及ばず、病死なせども、極重悪人たるによつて、獄門に掛け置くものなり」……ムウ、去年の冬まで出入りした、旅商人の名も與兵衛、暮には是非とも來にやならぬ、それに今日まで便りなく。

仁太　二三百兩ある金を、慥かな所へ預けたと、聞いては居れど預かつた、先の所もその名さへ、どこのいづくの。

ト思ひ入れのうち、フト十右衛門を見て、もしやと思ひ入れ。十右衛門こなしあつて

十右　忝うございます。

ト提灯を取る拍子に又消える。

南無三、また消すやつサ。

仁太　エヽ、もう附け木もあるまい。ハテ困つたものだ。

十右　イエ、そこらで借りませうよ。

仁太　氣を附けてござりませ。

十右　ハイ、お世話になりました。

ト時の鐘、兩人互ひに思ひ入れあつて、仁太荷を擔ぎ、十右衛門も消えてある提灯を下げ、東の方へ

仁太は花道へ行きかけ、思ひ入れあつて

いま踏みかけた捨て札の、與兵衛といふ名が覺えある、旅商人の與兵衛なら、知らぬ事まで引合ひ、異名を取つた盗人か。

仁太　悪い奴でも根が弟、師を的の盗人も、身を捨てゝこそ捨て札に、今は形見と罪科を、書き殘したる悪事の、よつて顯はす高札。

十右　犬の餌食と野晒しに、なるも前世の約束事。アヽ、思へば不便な身の納まり。

仁太　辛子にむせても泣かぬ目に、木の下雨の一雫、あつたら涙か

ト思ひ入れ、十右衞門こなしあつて、兩人思はず取つて返し、舞臺へ來り、仁太、捨て札が足にさはろゆゑ、ちよつと手をかけ

十右　俗名與兵衞。

仁太　南無阿彌陀佛。

兩人　ヤア。

ト一度に悄りして、持つたる札を離し、バツタリと落す。ツケと一緒に木の頭。兩人ホツと思ひ入れ。これをキザミにて、捨て鐘、よろしく、ひやうし　幕

二幕目　巖隨寺の場

役名——葛飾の十右衞門。巖隨寺念譽上人。役人、小源次。見世物番、紋五郎。盜人、遠州の九助。油の九平次。德兵衞妹、お賤。同下女、お米。同、おふき。丁稚、兵吉。

本舞臺、向う誂らへの茶見世。お多福の人形、子供を抱いてゐる水がらくり、覗いてゐる人形、立つ

である入口を拵へつけ、正面暖簾、下の方、藪にて見切り、軒に擬宝提灯、孔雀茶屋と記したる木戸、孔雀金網の籠よろしく、丁度の日、寺の門、床几三脚直し、籠の内より右の屋體に、膳を盛つたる茶銚を設け、紋五郎、序幕の形、若い者四人、この中に九平次、序幕の形にて床几にかゝりゐる。囃勇みの鳴り物にて幕明く。

紋五　サア／＼、お入りなされて、お茶をあがりまし／＼。

若一　アレ／＼、雲の見世のお玉姫が子供を抱いてゐる人形、おつなところから水が出るのも、久しいものぢやアないか。

若二　それ／＼、あの皿を覗いてゐる人形も古いもの。

若二　隠れないものは、御亭主の鼻ばかりだ。

紋五　サア／＼、鸞鳥、名鳥の孔雀を御覧じて、お目取が附いて、お茶代が十二文、お入りなさい。

九平　サア、孔雀茶屋の云ひ立て、誰れだと思つたら、おぬしやア大評判の紋五郎ぢやアないか。

紋五　ムウ、こりやア三河町の九平次さん。わつちも今日社方へ遊びに来たら、亭主の留守に見世番を頼まれて、孔雀の云ひ立てもれも頼まれね。

九平　イヤ、どうでも太神樂だけ、口上もまんざらでもない。おぬしが居るこそ幸ひ、孔雀茶屋をかはかさう。

紋五　サア、入つて見てお出でなさいまし……サア／＼、あなた方も、お入りなさい／＼。

若一　イヤ、おいらもこれから、藏前の方へ廻つて行かう。

若二　サア／＼、行きませう。

ト輕業の鳴り物にて、九平次は内へ、仕出しは兩方へ別れ入る。矢張り右の鳴り物にて、向うより念譽上人、色變りの衣にて、法被を着たる男を連れてくる。跡より十右衞門、序幕の形にて附き出て來り、花道附際にて

十右　モシ／＼、お供の法被を見ますれば、それへお出でなされる御出家樣は、巖隨寺さまではござりませぬか。

念譽　成る程、いかにも愚僧、巖隨寺でござるが、さう云はるゝ其許は。

十右　ヘイ、今朝家來を以て、味た葬りものをお願ひ申しました。

念譽　すりやァノ、祈禱の爲とあつて、科人のこれを葬むられた、貴樣がお施主か。

十右　左樣でござります。何かのお禮がてら

念譽　これは御奇特。サア、排けさつしやい。

紋吉　サア〳〵、奧へお入りなさつて、お茶をあがりませ。

供男　イヤ、こりやア爰の地主、願龍寺のお住持樣だ。

紋五　ホイ。わしやア矢ッ張り見物かと思つた。

ト茶屋の内より九平次出て來り

九平　イヤ、繁盛は譬ほどよいわえ。

トドの床几に腰かける。此うち十右衞門、懷より金包みを出し

十右　これは僅の物ながら、今日の御回向料。

ト扇へ乘せて差出す。念譽上人取つて

念譽　これは御奇特の事に、このお包みに、御姓名がござらぬが。

十右　イヤ、矢張り何某とお記し置き下さいませ。

念譽　見るからに、お使ひの男は、隨分知る人でござれど、なろう事なら施主の名も。

十右　御用捨は相濟みませまいか。

念譽　ムウ。

トこの時九平次、十右衛門を見つけ

九平　ヤア、こなさんは、親分ぢやアごんせぬか。

十右　ムウ、こりやア九平次、おぬしもぶらつきに出たか。

九平　サア、今日は式日でないから、遊んでもよからうと、ツイ野良をかはきやした。

念馨　時に、今朝の葬むり物は、何の祈禱に召されたのぢやな。

十右　サア、親類内に大病人、どうぞ本復いたすやうにと。

念馨　成る程、首へ願掛けいたして葬むるも、在る事でござるて。

九平　モシ、親方、お前、親類衆に、病人のある事を聞かないが。

十右　サア。

九平　それに、首を葬むるとわえ。

十右　イヤサ、そりやア首ぢやアない、何よ、熊と云つた烏猫が死んだから、葬むつてやつたのよ。

紋五　イヤ、猫で思ひ出したが、あの犬上團右衛門さまから、九平次さん、お前に渡してくれろと、コレ、手紙が来てゐた。

十右　ナニ、犬上團右衛門どのから。

九平 エ、、氣のきかない……何も手紙の來る覺えもないが。

ト十右衛門へ紙を渡して、取つて懐へ入れる。

十右 千葉の御家中でも、あの團右衛門どのは、心立ての好くない侍ひ、それに親しむ九平次。

九平 エ。

十右 おれが名の出るやうな事を仕出かすなよ。

九平 なにサ、お前、こりやアてつきり、中裏へ行く文が入つてゐるのサ。

金藤 イヤ、時に愚僧は、爰に待ち合すにもあれど、折角旦那のお出で。マア／＼、寺へ御同道申さう。

十右 ハイ／＼、それは有り難うございます……イヤ、九平次、ちつとおぬしに聞きたい事もあれば、

おれと一緒に。

九平 そんならお供と云はつしやるのかえ。

十右 すりやサ。

紋五 九平次さん、そんならお前を待ち合せて、わしも一緒に歸りやせうぞえ。

十右 左様なら御住持様。

金藤 サ、愚僧に附いて

十右　九平次、來やれ。

トまた輕業の鳴り物になり、紋左郎は孔雀茶座の內へ、念譽上人先に十右衞門、九平次、供男附いて門の內へ入ると、また輕業の合ひ方、バタ〳〵にて、向うより九助、股引、尻端折りにて、一人出て來り、直ぐに舞臺へ來て、キヨロ〳〵あたりを見廻し

九助　いま〳〵しい。役人めにおれを、引窓が同類といふ事を、云ひつけた奴があるかして、追ひかけて來る樣子。ア、コレ、どうぞ隱れたいものだが。

ト思ひ入れあつて

ムウ、よい事がある。この茶見世の看板は、人も知つたあの人形。幸ひ着物もおれと似寄り。これがよい。

ト立つてゐる人形の風呂敷包みを取つて脊負ひ、手拭も取つて冠り、頭へ王子土產も差し、人形は緣の下へ蹴込み、向うを見て

これぢやア巧く行きさうなものだ。

ト手摺へ倚りかゝり後向き、人形のやうになつてゐる。始終輕業の鳴り物、又、バタ〳〵にて、向うより小源次、捕り手二人を連れ、走り出て來り、直ぐに舞臺へ來て、キヨロ〳〵見廻し

小源　いま逃げ出した奴は、盗賊引窓與兵衛が同類、遠州九助といふ奴。見失つたか、殘念な。

捕手　モシ／＼、あれに後向きになつてゐる奴は、九助ではござりませぬか。

小源　べら坊め、あれは孔雀茶屋の看板の人形。久しいものだ。知らぬか。

捕手　イヤもう、此の人間のやうでござりますゆゑ。

小源　馬鹿を云はずと、いま一詮議。續け。

ト小源次、捕り手を連れ、下座へ入る。九助、跡を見送り

九助　ひやいな事であつた。

ト云ふうち、奥にてバタ／＼とするゆゑ、また人形のやうになつてゐる。門の内より九平次、走り出て來て

九平　先刻國右衛門さまから寄越したこの手紙、封も切らぬうち、あの十右衛門めが見破つて、奥へ引附けて置くは、僅かに詮議をする手間。アヽ、どうぞコレ少つとのうち

ト九助を見て

すゝ、幸ひ。あの人形の背負つてゐる風呂敷の中へ。

トまた下座にてバタ／＼とする。

オイ〳〵、いま茶を一杯飲んでゆく。

ト門の方へ見い〳〵、九助が背負つてゐる風呂敷の中へ、以前の手紙を入れ　孔雀茶屋の中へ入る。

九助、あたりを見廻し

九助　この間に巌随寺の中へ。

ト矢張り右の鳴り物にて、九助、門の内へ入る。茶屋の内より九平次出て來り

九平　ヤア〳〵、たつた今まであつた看板の人形は

ト簾の中より紋五郎出て

紋五　モシ、九平次さん、今のを見たか。

九平　エ。

紋五　サア、たしか遠州九助といふ泥坊、お役人に追ひかけられて、人形になつて隠れた様子だが、泥坊といふが怖さに、小さくなつて見てゐました。

ト此うち下座より小源次、捕り手を連れ、出かゝりゐて

小源　すりや、九助は人形になつて隠れてうせたか。

紋五　たしか巌随寺の門の内へ

小源　逃げ込み居らば

ト行かうとするを

九平　アヽモシ、門の内なら籠の鳥、荒立てすと気を抜いて。

小源　イカサマ、彼奴も命がけ。

紋五　自棄を起して働いたら

小源　それでは却つて毛を吹いて

九平　きづかひござりませぬ。この九平次が……モシ、耳をお貸しなされませ。

ト小源次に囁やく。右の鳴り物にて道具廻る。

本舞台、上の方へ寄せて石の法橋塔、これより下の方まで玉椿の垣根、うしろ[illegible]、誂らへの通り、この道具にて納まる。

ト唄になり、向うより[illegible]、振り袖衣裳、品よき娘にて、水晶の珠数を持ち、お糸、およき、下女にて、樒の花を持ち、兵吉、丁稚にて、風呂敷包みを背負ひ、附いて出てくる。直ぐに本舞台へ来る。

後より下座より念仏上人、以前の形、国蔵二人附き出て来り





念譽　これは〳〵、お賤女郎、愚僧檀家へ道寄りござつたゆゑ、先へ罷り歸り、もうか〳〵と相待ち居つた。

しづ　お上人さま、今日は御苦勞に存じまする。

よね　申し、お賤さま、あの深川から遠い道を、お駕籠にも召しませず、定めしお御足が痛みませう。

しづ　何のいなう。遠いお寺へ歩みを運ぶが、矢ッ張り佛樣へ御奉公ぢやわいなう。

ふき　我折れ、嫁入り盛りの娘御が、假初めにも後生の爲、今日も今日とて、梅屋敷か芝居へ行くお供ぢやと思ふたに、當の違うたお寺詣りで、精も力も落ちましたわいなア。

兵吉　イヤモウ、江戸へ出てから、淺草々々といふから、草のたんとある所と思ひましたら、甘酒や燒芋、食ふものばつかり。これを思へば、わしが在所の田舍者より、江戸者は餘ッほど意地が汚ない。

ふき　何を。

念譽　時にお賤女郎、爰へござれ。授戒せぬうち、いま一應。

しづ　また御意見でござりまするか。

念譽　サア、蔭裏の豆もはじけるといふやうな年配で、男女の道も好ましう思ひさうなところを、養子

聟の文藏どのを、振向いて見る心も無く、たゞ尼になりたいの、出家しようのと云はるゝ由。今日、わざ／＼兄御の德兵衛どのが、愚僧を呼びに寄越されて、右の述懐。

ふき　さうでございます。わたし等なら、取り附いて返事する聟樣を、嫌ぢやとは、男冥加に盡きるお孃さま。我まゝ者ぢやと、旦那樣も腹立つて、そんなら坊主になと、尼になと、勝手次第にせいと。

よね　思ひ切つて、お住持樣をお頼みなされたも、仕樣が無さでございませう。

念譽　それ／＼、あれが弟子にしてやつて下されと、德兵衛どのゝ云はれたは、妹一人捨てた心。ま一度思案しかへて見る

しづ　心はさら／＼ございませぬ。少つとも早う、あなたのお弟子に。

兵吉　讀めた。こりやア斷うでございます。聟の男振りが氣に入らず、兵吉になされたいといふ。

ふき　何を……そんならどうでも。

しづ　花の吾妻に住みながら、浮世を捨てゝ深山木の、佛へ立てる心の誓ひは、どうしても破られぬわいの。

念譽　是非に及ばぬ。これも佛緣。

しづ　すりや、御得心なされまして

念譽　望みの通り、佛の御弟子。

しづ　エヽ、有り難うござります。

兵吉　アヽ、惜しいものだ。

念譽　ソレ、同宿ども、何をうつかり。授戒の用意。

同宿　畏りました。

しづ　米も、ふきも、サアおぢや。

ト唄になり、念譽上人先にお賤、皆々附添ひ下座へ入る。双盤にて、三方廻しに道具變る。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、眞中に石の井戸、綱釣瓶を下げ、石の龜の甲、傍らに妙法水といふ石碑。上の見切り柳の立ち樹、傍らに觀音堂。下の方まで玉椿の垣。この後、石塔の頭ばかり見せたる卵塔場。下の方、黒幕の脇、墓場の門。誂らへの通り、右の鳴り物にて道具とまる。

ト篳篥に木魚の入りたる合ひ方になり、下座より十右衛門、墓手桶に樒の入りたるを提げ、出て來て

あたりを見廻し

十右　まゝ、妙法水といふ石碑がある。爰ぢや〳〵。

ト井戸の側へ寄り、水を汲まうとして

アヽ、イカサマ、水の流れと人の行く末ほど知れぬものはない。念頃にした、あの東兵衛が盗人で、あまつさへ、この稲八町縄手の仕置場で、思はず讀んだ捨て札も、弔らうてくれとの事かと、手を廻して首を貰ひうけ、今朝早くに、爰へ弔つてもらつたも、旦那寺へはやられぬ佛。有り難いこの嚴隨寺へ弔らうたも、未來はどうぞ……アヽ、太い氣のある男とも見えなんだに、妙法水を手向けの水で、浮かむやうにさつしやい。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト數珠を手繰り、水を汲みかゝる。また右の合ひ方にて、下座よりお霜、樒を持ち、全隆上人、お米、おふき、手桶を下げ、同宿二人附き出て來り

よね　モシ〳〵、お上人様、その有り難い井戸は、これでござりまするか。

ふき　なんの有り難いといふて、水が甘露でもあるまい。爰にあれば、矢ッ張り草の井戸。

全隆　アヽ、勿體ない。これこそ開山龍女寺、高祖ありし妙法水、佛へ捧ぐる閼伽の水。相相云はすと

ソレ、お霜女郎。

しづ　形に墨に染めずとも、せめて心に五戒を保ち、お上人様のお剃刀を戴くが、わたしが本望。

念鸞　それ〳〵、五戒を保てば、出家得道いたしたも同然。法名は、貞心尼と附け申さう。

しづ　有り難う存じまする。おふき、その阿伽桶をたも。

ふき　ハイ〳〵。

ト手桶を渡す。

よね　モシ〳〵、斯様な事は、わたし等が役目。それにあなたが、お汲みなされやうとは。

ふき　それ〳〵、釣瓶縄で手々が荒れませうぞえ。

しづ　イヤ〳〵、水仕の業も手づからするが、佛様への御奉公。ドレ、汲みあげませうか。

トまた右の合ひ方にて、お賤釣瓶縄へかゝる。此うち十右衛門、前の水にて手桶を濯ぎ、樒の枯れ葉など取つて水を明け、この時左右より釣瓶縄にかゝり、思はず顔見合す。お賤恟りして

ヤア、お前は

ト手桶を井戸へ取落す。十右衛門は、どうか見たやうなと思案する。

ふき　モシ〳〵、手桶が落ちましたわいなア。

よね　矢ッ張り汲ましなさるとよいのに。

トおふき、井戸を覗き

ふき アレ〳〵、うは〳〵と浮いて居ります。お寺に鐘は無いかいなア。

ト聞く。

しづ 思ひがけなき俳藏さよ。

十右 そりや、わしが屋敷に居た時の名。それを知つた嬢御。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

しづ それいなア。千葉さまの奥に勤めてゐた

十右 讎次さまと云はしつたのかえ。

しづ それをマア、忘れてからに。

十右 最早七八年あとの事。ハテ、女子の子の成人するは早いもの。とんと見忘れ申した。

ト水を汲む。

しづ してマア、お名も變つた様子。町家で今では

十右 サア、その名は

ト念譽上人を見て思ひ入れ。

念譽　當寺へ、變つた佛を葬むられたお施主。大事なくば、愚僧もお名を

十右　アイヤ、どうで七日々々に參詣いたせば、それまでには、相知れます。

しづ　ほんにマア、不思議な御緣と云はうか、嬉しいと云はうか。どうぞマア、今おいでなる所を、米も、ふきも、お聞き申してたもいなう。

ト俄に我が形を見たり、苛を撫でつしてソワ／＼する。念譽上人、不思議な思ひ入れ。

ふき　我折れ、巖隨寺のお上人樣より、有り難いお方かして、佛いぢりのあのお子さんが、きつい御信心。

よね　どうぞマア、お前さんのお名や、おいでなさる所は

ふき　何といふお寺ぢやえ。

十右　ハヽヽヽヽ。イヤモウ、程なく日も暮れかゝるに、相手になつては居られぬ。ドレマア、墓へ詣つて

ト手桶を持ち、行かうとするを

しづ　アヽモシ

十右　何ぞ御用でござるかえ。

しづ　サア、その川はナ

ふき　四文一合持つて来や。

よね　何を阿房らしい。

ト　お賤こなしあつて

しづ　申し、お前さんはアノ、伊勢物語を御存じでござんすかえ。

十右　ハテ、變つた事をきく姫御。わしども風情が、そんなしやらツくさい事を知らう筈はござらないか。その伊勢物語とやらは、あの吉龍が講釈で聞いて、所々は覚えてゐますて。

しづ　昔いなかわたらひしける人の子ども、井の許にゐて遊びける……さう、お前とわたしと、丁度此やうに。

十右　それは彼の、うない子とやらの文段……男はこの女こそは得めと思ふ。

しづ　女はこの男をと思ひつゝ、親の合はすれどきかでなんありけるを

十右　ナヽ、何とやら。ナヽ、それ／＼……筒井筒、井筒にかけしまろがたけ……たしか、こんな事であつた。

しづ　くらべこし、振分け髪もかたすぎぬ、君ならずして誰れかあぐべき。

十右　講釋も矢ッ張り聞き書が下へ落ちるて。

ト下座より以前の寺男駈けて來り

寺男　モシ〱、たしかお前でござりませう、ちよつとお呼び申してくれと、どこのかお人が待つて居られます。

十右　ナニ、アノわしに。

寺男　サア、今朝弔つた佛のお施主といふから、外ぢやアござりませぬ。

十右　さういふ方なら

ト手桶を下げて行きかゝる。

しづ　アヽモシ、まだお話しが

ト伸びあがるな

ふき　アヽモシ、井戸へはまりますわいな。

ト抱きとめるうち

十右　おれに逢ひたいとは、誰れぢや知らん。

ト矢張り以前の合ひ方にて、十右衛門、手桶を下げ、寺男附いて下座へ入る。お賤、うつとりとして

見送つてゐる。

よね　モシ、あなたは、何をうつとりしておいでなさんすぞいなア。

ふき　アヽ、聞えた。こりや井戸へ落ちた、手桶の事が氣にかゝるのぢやな。

念譽　アヽ、イヤ〳〵、當所は狐狸が多うて、悪戯をしてならぬ。狐狸の障化も、愚僧の珠數先で……

南無阿彌陀佛々々々々々。

ト珠數を出して無性に拜む。

しづ　コレ〳〵、およね、わしが男持たうと云うたら、兄さんが叱りやせまいかいなう。

よね　なんの、その事で氣を揉んでおいでなさんした旦那樣、お喜びなされますわいなア。

しづ　エヽ、この髮も、こんなに結ばにやよかつたものを。

よね　でもお前さん、尼になるとて

しづ　なんの、坊さんは、わしや嫌ひぢやわいなう。

念譽　ヤア、いよ〳〵狸の業……南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト珠數を揉みかける。

ふき　お孃さまが男を持たうと仰しやれば、旦那樣のお喜び。いよ〳〵聟樣を

しづ　持たいでどうせうぞいなう。
念譽　コレ、お賤どの、愚僧を内まで呼んで、佛へ願うて五戒を保ちたいと、云はつしやれたではないか。
しづ　どこにそんな事を申しましたぞいな。
念譽　でも、貞心尼と名まで附けて
しづ　エヽ、穢らはしい。坊さんの名が附けられるものかいなア。
念譽　どうでも狐の所爲。おのれ、女中に見入るとも、念佛の功力を以て、落さいで置かうか。南無阿彌陀佛々々々々々々。
ふき　何ぢや知らぬが、めでたい〳〵。
よね　ちやつとお歸りなされませいなア。
しづ　今のお方は慥かにお寺に。皆、おぢや。
念譽　おのれ狐め、落ちおれ。ソレ。同宿ども、念佛々々。
よね　サア、お出しなされませ。
念同　南無阿彌々々々々。

ト矢張り右の合ひ方にて。お賤、イソ〳〵。念佛上人、珠數を採み、責め念佛、皆々心々に下座に入る。ト入相の鐘、只の合ひ方に變り、下の墓所の門より、九助先に、十右衞門出て來り

九助　サアハヤ、段々と頭の事を、御深切さまなお世話、有り難うござりまする。

十右　すりや、いよ〳〵貴様が遠州九助といふお人か。

九助　左樣でござります。イヤモウ、わたしも泥坊の仲間とお聞きなすつたら、恐ろしいやうにも思はつしやらうが、さうでない事は、頭の氣前でも知れませう。こんな身すぎをするも、生れついた因果。引窓與兵衞と云はれた頭でも、運が盡きれば

十右　コレ。

ト思ひ入れ。

九助　サア、しまはれさしつた首を、せめて葬むりたいものと、昨日仕置場へ行つて聞けば、祈禱の爲に葬むるとて、誰は知らねど、十右衞門さまといふお人が、貰つてござつたとの話し。ハテ、深切なお人もあるものと、頭の内儀に聞きましたら、そりや斯う〳〵いふ筋のお方と

十右　サア、あのお鶴は、わしが親仁の所に、子供の折は年季奉公。それが緣で、與兵衞とも知る人になり、世話もしたり、又なつたり。

九助　サア、そのお鶴どのも、お目にかゝつて禮も云ひたけれど、亭主の身の上面目なく、それゆゑ、わしに逢つて、よく／＼申してくれと、何やかや禮の手紙。

ト懐より狀を二通出し、よく見極めて一本渡す。十右衛門取つて開き

十右　「久々お目もじ致し申さず候へども、いよ／＼御機嫌よく、さてはこの度、與兵衛こと、お心にかけられ御深切に」

トいろ／＼透かし見て

こりやモウ日暮れで、黒白が判らぬ。内へ歸つてとつくりと……して、お鶴は、どこにゐます。

ト手紙を懐へ入れる。

九助　サア。

ト思案して

住所を云はぬもエテの習ひ。惡く思つて下さりますな。

十右　成る程、そんならこれで

ト立上がり、行かうとするを

九助　アヽ、モシ／＼、頭が働き溜めた金、方々へ散つてある噂。お前なぞに、よもや預けもしますま

いが、モシ、あの與兵衛どのゝ兄、曲り金の仁太といふ奴は、頭に似合はぬ悪い者。念頃にした顔も、彼奴にばかりは知らされませぬぞえ。

十右　ムウ。すりやアノ、曲り金の仁太

九助　心得の爲、云つて置きますぞえ。

十右　深切、忝い。

九助　また其うち。

ト只前の手拭をかむる。此うち下座より小源次先に、紋五郎尻からげ、弓張提灯を袖に隠し、捕り手附添ひ出て来り、九助を透し見て

小源　與兵衛が同類

捕手　捕つた。

ト九助へかゝる。早めたる双盤にて、ちよつと立廻り、十右衛門恟り、皆々を突きのけ、ちやつと観音堂へ入り、戸を締め隠れるうち、捕り手、九助を引据ゑ

動くな。

九助　アヽ、モシ／＼、私しはそんなものではござりませぬぞ。

小源　吐かすな、おのれ。引窓が手下、遠州九助。

紋五　ソレ、最前おらが見世の人形になつて、隠れた證據は、かぶせて置いたその手拭。

九助　アノ

小源　ソレ、引ツ縛れ。

捕手　捕つた。

トかゝるを、矢張り双盤にて九助、ポン〳〵と突きのけ、一散に墓場の木戸の内へ逃げて入る。皆々跡追うて同じ木戸へ入る。バタ〳〵にて下座よりお賤駈けて出るを、兵吉追ひ駈け出て來て、お賤にしなだれるを

しづ　アレ兵吉、悪い事しやんな。

兵吉　ナニよい事をしまする。お前が尼になれば思ひ切れど、いま聞けば、聟を取る心にならつしやる位なら、この兵吉、去年の九月、信濃から來て、十年二分の給金で年期に住んだも、お前に惚れて惚れぬいたから。モシ、一升の飯を一口に食はぬ法もあれ、思ひ切られませぬ。幸ひあたりに遠慮もなし、ツイちよつと

ト又しなだれるを突きのけ

しづ　エヽ、嫌らしい、穢ない。主に向つて不祥な事しやると、きかぬぞ。

兵吉　なんと云はしつても、爰は嚴隆寺の墓場。憖かにさう云はつしやるだらうと、お寺の臺所で盗んで來たこの出刃庖丁。

ト懐より庖丁を出し

エヽ、色になるが否なら、わしと一緒に心中して下さりませ。

しづ　アヽコレ、危ないわいなう。

兵吉　お寺の墓場で、一緒に埋められるがわしが願ひ。

しづ　アヽコレ、滅多な事を。

ト此うちおふき出て來て、この中へ入り

ふき　コレ〳〵、兵吉どの、滅相な、お嬢さまを、どうしやる。

兵吉　イヤ〳〵、所詮戀が叶はぬから、心中してしまふ。

ふき　さうはさゝぬ。わしが云ふ事きかぬうちは、心中はさせられぬわいの。

兵吉　いま〳〵しい狐め。そこを退かぬか。

ふき　イヤ、きかぬ〳〵。

ト此うちお賤、觀音堂へ逃げこみ隱れる。兵吉、おふきと爭ひ、おふき出刃を取るはずみに、兵吉の鼻をそぐ

兵吉　アヽ、痛い／＼。ふとのひん中／＼。

トわめく。おふき悄りして下座へ逃げて入る。兵吉、鼻くたせりふにて尋れ廻るところへ、バタ／＼にて下座より、九助逃げて出るを、兵吉、お賤と思ひ捕へる。九助立廻りに脾腹を蹴る。兵吉『ウム』と立ちすくみになる。九助きツと思案して、かむつてゐたる手拭を取り、兵吉にかむせ、そこら見廻し、井戸の釣瓶に取りつき、井戸へ下がり隱れる。矢張り双盤、バタ／＼にて、下座より小源次光に紋五郎捕り手附添ひ出て來り、兵吉を見て

小源　遠州九助、爰にうせたか。

捕手　捕つた。

ト繩をかけて縛り上げる。兵吉心づき

兵吉　ハア／＼、こや、ほうする／＼。

トわめく、紋五郎提灯にて

小源　鼻を揩りこはしたかして、面は血まぶれなれど

紋九　鰻との手拭。

兵吉　フナ〳〵。

小源　昆布巻ぢやあるまいし。

紋五　何を仰しやります。

小源　引立てい。

ト矢張り双盤、兵吉捨ぜりふにて引立てられ、皆々向うへ入る。此うち井戸より九助、綱をたぐり上がり来て

九助　でも、危ない事であつた……それにしても、先刻門前の孔雀茶屋で、人形になつてゐるうち、後の籠目籠へ押しこんで行つたこの手紙の、宛名の九平次とは、あのお鶴どのゝ伯父御、これも内へ持つて歸つて

ト出して見て懐へ入れる。此うち下の門より九平次、寺號の弓張提灯を灯し、ツカ〳〵と出て

九平　昔へ玉を握らせた遠州九助。その手紙を巻きあげてどうする。

九助　ヤア。

九平　あらぬ物まで盗人根性。取返した上逃がしてやる。マア、その手紙を

ト九助が懐へ手を突きこんで手紙を引出す。立廻りに提灯消えて闇の思ひ入れ。手紙を取落し、九平次探るうち、九助は向うへ入る。時の鐘、よき程に觀音堂の中より十右衞門、お賤、じだらくなる形にて、手を引きて出てくる。九平次、十右衞門を九助と思ひ、捕へる立廻りに、十右衞門が懐中の以前の手紙を引出し、これも取落し、互ひに探り合ひ尋れる。この中へお賤、慄へながら入り、トヾ十右衞門は九平次の一通、九平次は十右衞門の一通を、違へて取上げ、うなづく途端、チヤンと双盤の頭を打込む。お賤恟り、下に居て慄ふ。九平次、十右衞門へかゝるを取つて投げのける。お賤、十右衞門へ取りつくをキツと引しめる。九平次ホツと思ひ入れ。右の双盤にてよろしく拍子

幕

三幕目

仲町の場

役名——蓮由萬三郎。平野町の德兵衞。菜賣り、曲り金の仁太。木屋文藏。澤屋金兵衞。中間油の九平次。長谷部運太夫。植木屋定六、太神樂、紋五郎。同、三次。同、權八。侍ひ、里之進船頭、市川屋の三。天滿屋女房、お北。天滿屋のお初。同、お宮。藝者、お粂。同、梅吉。仲居

お倉。同。おさの。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見附け左右流れ竹障子、眞中打ぬき中庭の體。石燈籠、植込み。上の方、鼠壁の屋體。長持に仕舞ひ札貼つてあり、いゝいゝ天滿屋といふ掛け行燈。すべて仲町天滿屋裏へつき建、暖簾入り口の體。籬の内よりお北、着流し、女房の形にて、長火鉢にあたり、莨のんでゐる。[illegible]、抱への體、村人の拵へにて、提燈を消し、七輪に藥を煎じながら、柳樽の本を二三册置き、それを見てゐる。二重屋體におさの、お倉、着流し、前垂れにて、肌をぬぎ、鏡臺を二つ並べ、身じまひしてゐる。下の方に紋五郎、着流し、一本差し、手毬を頭にのせ、曲毬。三次、着流し、一本差しにて笛を吹き、權八、布子・股引にて、挾み箱の上にて太鼓を叩きゐる。仕出しの子供これを見てゐる。深川騒ぎ、曲撥にて[illegible]。

皆々　よい〳〵。

ト　荷擔ぎ、太鼓を持つてゆく。紋五郎、太鼓を打つて納まる。

紋五　おめでたうござります。

三次　鉦はお殿の要師

權八　お齒黑獅子か劍の舞。

紋五　劍の舞より、お客で急がしくつて、女中衆のとん〳〵舞が見たい。

三人　おかみさま後ほど。

ト通り神樂になり、太鼓を叩き、三人に仕出し附いて向うへ入る。

きた　今日は定さんの知らせで、珍らしいお大名のお客。それで大抵忙がしい事ぢやない。お倉も、おさのも、もうしまひかや。

二人　もうようございます。

きた　料理番どんの手廻しはよいかの。

ト奥にて手を叩く。

アレ、お手が鳴るよ。

女皆　アイヽヽヽ。

くら　梅吉さん、大分顏つきがよいね。

梅吉　この暇かで大きにいゝわえ。

さの　その本は、新板の敵討か、洒落本かえ。

　ト云ひ〳〵鏡臺を片附ける。

梅吉　イエ〳〵、こりやア本屋さんに借りた、川柳とやらの句だわいな。

きた　ありや柳樽といふて、大抵面白いわえ。

梅吉　モシ、おかみ様

　ト柳樽を見て

　爰にあるのがな「よいしめりなどゝ時平も初手は云ひ」。こりや天神記の時平の事かえ。

きた　天神様が、雷さんになつて、時平を引裂いたれど、初手のうちは時平も、よいしめりなどゝ云う
　てゐたらうわな。

さの　こりやアようござります。

　ト北、本を見て

きた「人に武士、なぜ傾城に嫌がられ」

　ト云はうとして口を押へ

　これはしたり、お大名のお客さんがお入りだやのに、わたしとした事が。ホヽヽヽ。

　ト笑ひ〳〵、煙草のんでゐる。曲獨、流行り唄になり、向うより金兵衛、着附、羽織にて、三、船頭に

て火繩箱を持ち、文藏、着附、羽織にて、三を捻ぢあげ出て來て

三　コレ、文藏さま、どうさつしやるのだく。

文藏　どうといつて、なんでおれが事を、勇みだの、傳法だのと云つたのだ。

三　それでも此ごろは、勇みなさるといふ事だから。

文藏　兄貴へ聞えても悪い。そんな事を云やるな。

ト突き放し

澤屋の番頭の金兵衛どの、先刻から呼ぶが、聞えないのかえ。

金兵　ナニ聾ではなし、澤屋の金兵衛、澤山に聞えてゐるよ。

三　この澤屋の金兵衛さまは、女郎買ひといふと、夢中になつて大急ぎサ。

文藏　そんなら仲町の女郎の中でも

三　誰れといつてきまらねえ情なし樣サ。

文藏　おきやアがれ。

金兵　文藏さま、さうして用でもあるのかえ。

文藏　是非こなさんに逢はうと思つて出かけたが、好い所で逢ひました。外の事でもない、正月中、

南國で、遠山の殿樣の御流浪。外ならぬお出入りの事ゆゑ、御歸參について、質請けしてあげた四方出の香爐。その時の二百兩の金はどうなつたか、それが聞きたさに呼んだのさ。

金兵　それが用かえ。それは質屋の事なれば、金銀出入り、丁度よい所で逢うたとはいふものゝ、その金は、今日大口の質があつて、靈岸島まで行つたが、相談が出來ずに持つて歸つて、この金がそれか知らぬて。

文藏　エヽ。

ト思ひ入れあつて

そんならアノ、その時の二百兩を、いま持つて居さつしやるか。アノ四つ石の極印の

金兵　イヤ、此方の見世の極印は、まだ打たぬか知らぬて。

文藏　なにさ、その極印なやすない、此方の尋ねる

ト云はうとして思ひ入れあつて

その金ゆゑにこそ、この頃中から、おれが心の亂騷ぎ。何の事も思はないで、小判あまぎれに喧嘩口論、斬れと云はれるも知らなんだが、エヽコレ、どうぞその金をちよつと

金兵　ハテ、質草さへ置さつしやれば、この金ばかりではない、土藏の内に澤山な金。外にいくらも

あるから、氣遣ひさつしやるな。
文藏　ハテ、外の金ぢやアないよ。
ト本舞臺へ來る。お北皆々、金兵衞の側へ來て
きた　これは金兵衞さん
さの　三さん、鳴子も叩かずに裏からかえ。
三　太神樂と入替つて入つたのサ。
きた　あなた、ようお出でなさんした。
さの　金兵衞さん、ぬしはお初かえ。
ト梅吉、文藏を見て
梅吉　ぬしは尾花屋で御一座申したがな。
金兵　平野町の徳兵衞さんの弟御で、文藏さんといふお方サ。
きた　そんならお前さんは、前々からお馴染みの、徳兵衞さんの弟さんかえ。
文藏　さやうサ。
きた　お倉、どうせうの。晝から徳兵衞さんが、二階へお出でさんしたによつて、それではお差合ひが

文藏　何と云はつしやる。兄貴が此方の内へ遊びに來てか。
きた　アイ。
文藏　そんな事もあらうが、兄貴はこの頃眼病氣で、日が暮れると、とんと鳥目。
きた　イヽエ、逆上がして、目が少しかすむとばかり云ひなさんした。
文藏　こりやア色里だけ、鳥目と云つては色氣が無いから、隱してだらう。金兵衞どのに内證で、用が
　あつて來たれば、必ず兄貴へ沙汰無しに。
きた　そりや合點でござんす。
文藏　そんなら金兵衞どの、いよ／＼今の金の事は
金兵　ハテしつこい。いくらなりとも、金はあるといふに。
文藏　小だれつたい。さうぢやアないわな。
女皆　ハテ、お焦れなさんせずと、マアお二階へ。
文藏　サア、行きやせう。
　ト騒ぎになり、皆々奧へ入る。チヨン／＼にて、上より格子の道具を引出す。

本舞臺、三間の間、向う一面の格子、直中に入り口、高ざし暖簾、梅鉢の紋、天滿屋といふ掛け行燈。仲町裏のかゝりになる。道具とまる。

ト直ぐに曲撥、行列三重になり、向うより十六、又内、紺看板の奴にて、對の挾み箱。雉平、槍持ち黒絹羽織の先徒士四人、二行に並び、陸尺四人、乘り物を擔ぎ、乘り物に甚三郎、大殿の着附、麻上下にて乘つてゐる。里之進、運太夫、袴羽織、股立ちにて、左右の駕籠脇に附きそひ、九平次、紺看板、幅廣帶にて草履取り。藤内、袋入りの長柄を持ち、門平、曳馬の口を取り、出て來て、揚げ幕の際まで並ぶ。入り口よりおさの、お倉、出でくる。よき程に乘り物より甚三郎覗く。運太夫、乘り物の側へ行き、何か承るこなしあつて

運夫　お乘り物、暫く。

皆々　ハアヽ。

ト乘り物を立て、供廻り平伏する。運太夫、乘り物を明ける。九平次、草履を直す。運太夫、合點のゆかぬこなしにて

運太　憚りながら今日は、御家督の先例にて、富ケ岡八幡へ御參詣。遠山家の重寶に御祈念あつて、直さまお歸りと思ひの外、只今お乘り物を立てられましたは、お小川でも遊ばされますかな。

甚三　今日八幡へ參詣いたし、重器の香爐に祈念相濟む上は、その次手として、當遊所の妓婦に、手前志す者あれば、家督の上は離れ憚る事もなく、本供での遊所通ひ。

運太　ヤア〳〵。

ト膽をつぶす。

くら　そんなら昨夜から、植木屋の定さんが、來なさんしてのお噂。

さの　お大名口におなりといふ事は聞いてゐたが、よもや此やうに、御本供でのお遊びとは存じませなんだ。

ト甚三郎そこら見て

甚三　この酒肴に相違ないか。

介さ　サア、入らつしやりませ。

ト騒ぎになり、おさの先に立ち、甚三郎、運太夫、里之進、九平太附いて入り口より入る。

又四　お供待ちの間、實にも居られまい。

十六　八幡山へでも行つて素見さうか。

雅中　お供供と一緒に、一の鳥居まで行つて待たさアなるまい。

供皆　サア、行くべい〳〵。

ト曲撥、流行り唄になり、供廻り皆々向うへ引返す。此うち向うよりお粂、藝者、お初、女郎の拵へ。男に三味線箱と襠裲の包みを持たせ、出て來て、供廻りと摺れ違ふ。

門平　いゝお供揃ひだぞえ。

藤内　いづれ〳〵、腰は柳の間の、大廣間手合ひだな。

皆々　堪へられないわい、畜生め。

ト云ひ〳〵向うへ入る。

はつ　あんな者ほど憎らしい事を云ふものは無いわいな。

ト本舞臺へ來る。

くめ　モシ、今のお大名の供廻りわえ。

くら　あれが定さんの噂の、お大名のお客さんのお供。お粂さん、口がかゝつてゐなさんすよ。お初さん、徳兵衛さんが待つてゞあつたよ。

はつ　そんならアノ、昨日の朝から、口をかけて今日來なさんしたが、平野町の徳兵衛さんとやらで、お大名のお客さんへは、わたしや後口。そんなら遠山の殿樣には、いよ〳〵御家督遊ばされて、

それで今日のお入り。折悪い昨日から、徳兵衛さんの先口、辛氣な事ぢやなア。

ト通り神樂、流行り唄になり、向うより仁太、頬かむり、刺し子、股引、籠へ小松菜を入れ、擔ぎ出て來て

仁太　大把小松菜。冬菜大把え。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來る。下座より下男一人出て

下男　菜よ、把はよいかな。

仁太　菜は大把で云ひ分なし。

ト籠を下ろし、菜を持つて來て見せる。

下男　いくらだえ。

仁太　二十づゝに賣るのだが、もう仕舞ひだ。十八づゝにしてあげう。

下男　この菜を十八だといつて、買へるものか。災難々々。

ト仁太、菜を持ち、ムツとして

仁太　この菜を災難とは、菜を買つた事が無いさうだ。とんだ猿唐人だ。

ト荷を擔ぎ、行かうとする。

下男　べら坊な商人ぢやァないか。賣り物買ひ物、いくらにでも附けるわえ。耄碌め。

仁太　なんだ、耄碌だ。うぬを

ト天秤棒でぶつてかゝる。皆々とめる。曲撥になり、お初お粂お倉、逃げて入る。九平次出て、これをとめて

四平　待ちやれな〳〵。

下男　エヽ、とめさつしやるな〳〵。

仁太　コレ、葛西の者はナ、麥飯は食はないワ。新米で育つてゐるわえ。うぬを叩ッ挫いて

トまた立ちかゝるを

九平　マア〳〵、待ちやれな。

ト双方をとめて

菜を廉く附けたといつて、喧嘩になる奴はある事だ。若ィ衆も、要るならば見倒さずと、買つてやればいゝ。こなたも葛西から來て、喧嘩をするでもない。

仁太　喧嘩をしたかァねえが、あんまりな附けやうをするから

下男　其方もあんまりな掛け値だから廉く附けるのよ。

九平　おれァ供部屋に居たが、斷う挨拶に出たからは、互ひに不請してもらはう。十八だといふのを、七つに附けたからの喧嘩だ。おれが仲裁だ。十二にまけておいて、若い衆、有りつきりだ。買つてやらつしやい。

下男　ようござる。お客のお供の衆の挨拶だ。

仁太　商ひさへ出來れば、わしも料簡するのサ。

ト菜を數へ

十三把ぎりサ。

九平　おれも油の九平次といはれては、仲間でも人に知られてゐれば、只も置くまい。仲直りに、供部屋へ來さつしやい。

仁太　わしも葛西の曲り金で、江戸へは毎日商ひにも來る。また鎌倉河岸や四日市へも來る事があるから、芝居の一幕も見て、幸四郎の聲色をもつとべいやるから、高麗屋の仁太〳〵と、そこで曲り金の仁太といふ菜賣り。在郷者にやァ、もつと氣のきいた野郎サ。

下男　そんなら菜賣りと仲直りに。

九平　わしが飲んだ一銚子で

仁太　引ッかけべいか。

ト騒ぎになり、仁太、籠を擔ぐ。チョン／＼にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、平舞臺、見附け下の方折廻し屋體。釘隱しの長押、黒塗り緣、極彩色の杉戸。上の方折廻し、塗り骨の障子屋體。花道に二階の上がり口。爰に甚三郎、酒盛りの體。お条、三味線、お倉、おさの、酌にて、下の方に運太夫、里之進、平伏してゐる。騒ぎにて道具とまる。

ト直ぐに「獅子とらでん」の「石橋」の切れ、鳴り物入りになり、花道二階の上がり口より、紋五郎、獅子をかむり、三次、笛。權八、太鼓にて出て來て、舞臺を舞ひあるく。

皆々　ヨウ／＼／＼。

ト賑やかに褒める。獅子は下座へ舞つて入る、三次、權八、行かうとするを

甚三　コリヤ／＼、太神樂の者、待て／＼。

二人　へイ／＼。

ト下の方へ來て辭儀する。

甚三　三尺の劍を以て、惡魔を拂ふとある太神樂の獅子舞ひ。

運太 餘の儀は格別、惡魔除けとござりますれば、先づは

運平 おめでたう存じ奉りまする。

さの ホヽヽヽ、嘸くろしい、例の事たやぞいなア。

ト太鼓入りになり、奥より定六、掛け盤に松竹梅の臺の物を飾り、これを持ち出て來て

定六 行く末守れとの託の、告げを知らせる松風も、梅も久しきためしぞめでたけれ。

ト甚三郎の前に直く。

甚三 これは定六、過分々々。

くめ 定さんは植木屋だけに、松竹梅の臺の物。

運太 時の獻上、殿にもお喜びであらう。

さの とんと石部金吉さん。

運太 イヤ、身共は長谷部運太夫と申す、側役の者だ。

ト おさの、杯を持ち、運太夫の側へ行き

さの 一つ上がりませんか。

運太 下戸でござる。

ト お倉も行つて

くら　お茶漬わえ。

運太　時分でござらぬ、欲しうない。

ト きつと云ふ。お倉恟りする。

定六　ハテサテ、運太夫さまには、堅いぞ〳〵。とんと太神樂の曲撥が、くツついて離れぬといふも、幇間に縁がある。藝者衆の見えるまで、太神樂の衆も、賑やかに、洒落た〳〵。

三次　洒落ろとあれば、鹿島踊りかお龜の粟餅。

權八　それ〳〵、その粟餅の拍子にて、餅になれこと〳〵。何餅にこと〳〵。

二人　イヤ、幇間にこと〳〵。

ト 笑ふ。樂の三味線ばかりになる。甚三郎こなしあつて

甚三　洒落いと申しつけたれば、幇間の名代、それに運太夫が汚い顏の不興。彼れにも洒落させい。

里之　イヤ、その儀は運太夫どのには

定六　ハテ、そこが殿樣の御意なれば、モシ、ちつとお洒落なされませ。

運太　馬鹿な事を。

　　ト睨みつける。

甚三　コリヤ、運太夫、忠義には身命も擲つてと申すではないか。洒落ぬか。

運奉　ヘイ、洒落奉るでござりませう。

定六　マア、わしが洒落れば口輕に、阿波座烏か籔鶯とは高麗屋、あの殿様は紀伊國屋。しやれ、厄體もない。

運太　その洒落しやらを、武士が申して濟まうか。ハレ、厄體もない。

皆々　アレ、矢ッ張の洒落でござりました。ハヽヽヽヽ。

甚三　して、當所の妓婦なる、初は如何いたした。

くら　お初さんは、この間からのお約束で、外のお客へ出なさんして、どうも此方へは見えられませんで

女中　お氣の毒でござんす。

定六　その御立腹もござりませうと存じまして、新子に美しい、お宮さんと申すのを、呼びにやつてござりまする。

甚三　イヽヤ、外の遊女妓婦には、なか〳〵手前目はかけぬ。定六、不埒であらう。

トきつと云ふ。

定六　へイヽヽ。

運太　然らば殿には、その初と申すさへ御自由になりませねば、お歸りでござりまするか。

甚三　元より。

運太　もし初が居りますれば

甚三　執心なれば、翠帳紅閨の枕も同じうする樂しみ。

ト運太夫摺りより

運太　殿には御幼少の砌りより、この長谷部運太夫が、乳人の役にてお育て申し、御家督と相定まれど、御本腹の御舍弟樣へ、お讓りあつたれども、又ぞろ今般御家督にて、近々御任官あれば、從五位下、朝散太夫とおなり遊ばさるゝ御身にて、この遊里へお入り。その初と申す女のみに限つての御執心は、如何の儀にてござりまするな。

甚三　運太夫が申す條、理りなれど、甚三郎浪々のうち、稀なる深切、下々に稀れな貞女、兩夫に見えずの本文。手前その志しもだし難く、誓紙まで渡して、未來永々刀にかけて、君子に二言なし

の揃ひ立てたれば、なか／＼約は變じられぬ。

運太　されば拙者も再勤を相願ひまして、御歸參のお迎ひ、併しながら、もと初が兄と申すは、甚三
て愚者ゆゑ、どうござつても身請け致し、お部屋樣には罷りなりませぬ。

ト獅子の鳴り物になり、下座よりお初逃げて出る。跡より太神樂の獅子追ひかけて、あちこちと追ひ廻す。お初逃げ廻り、思はず甚三郎の側へ行き、突きあたり、恟りする。

甚三　これは不躾千萬な。

ト　お初、顔見合せ

はつ　ヤア、甚三郎さん。

甚三　オヽ、初か。手前、其方に逢ひたうて／＼ならなんだが、外の座敷へ出てとの事。どうして爰へ。

はつ　さいなア、あなたのお入りも承つたが、わたしや德兵衛さんの座敷へ出てゐたれば、あの太神樂の獅子が追ひかけて、やう／＼と逃げ廻つて、爰へ來たところが、思ひがけない甚三郎さま。

女皆　そんならあの獅子が追ひかけて

運太　貴殿のお側へ來つた女が、お初女郎か。イヤ、呆れるワ。

ト思ひ入れ。

甚三　初が目通りへ參つたれば、甚三郎は、どつこへも動かぬく。

運太　イヽヤ、それでは相濟まぬ。

甚三　主命そむく不屆き者、下宿へ下がれ。

ト運太夫思ひ入れあつて立上がり

運太　下世話の譬へに主と病ひだ、是非がござらぬ。これといふのもお初女郎。おのれ憎くい。

ト刀に手を掛けうとして無腰ゆゑ

アヽ、大小は預け置いた。手持無沙汰もない事ぢやなア。

ト唄になり、運太夫思ひ入れあつて、里之進附いて梯子へ下りて入る。あと合ひ方。

定六　殿樣、まづお庭の毛蟲は拂ひました。

ト甚三郎こなしあつて

甚三　初がこれへ參るからは、打解けて席を同じうせねばならぬ。

ト懷より箱入りの香爐を出し

この袖香爐は大切なれど、帳中にあつては邪魔なれば、コレ、藝者のお粂とやら、其方に預くるほどに、大切にどこぞへ預けておいてたも。

くわ　アイ、合點でござんす。

　ト香爐を取つて

おなみさんへ、しつかりと預けて置きませう。

　ト合ひ方になり、梯子へ下りる。

甚三　先の何よりの出かしたは、太神樂の獅子舞ひ。

九平　その思ひつきは、わしでござりまする。

　ト獅子の中より九平次、紋五郎出る。

甚三　ヤア、其方は手廻りの草履取り、九平次ではないか。

はつ　ほんに兄さん

九平　コレヤレ／＼、滅多な事を云ふまいぞ。何にも知らぬ獅子、ナ、獅子の中へ入つて、運太夫さまの亡骸を運び、お初さんが殿樣の自由にならぬから、そこで太神樂と獅子を舞ひ歩き、お初さんを紛らして追ひかけたも、殿樣にお逢はせ申さうため。なんと、草履取りの中間が、中位ゐる忠臣でござりませうな。

甚三　そんなら初を家へ呼ぶ爲といひ

さの　堅造の毛蟲を拂ふばつかりに
三次　この獅子の後足とならつしやれたも
九平　お初さんの矢ツ張り心中。
甚三　すりや、獅子心中の毛蟲を拂うた忠臣ぢやなア。
　　ト お初を引寄せる。
女皆　お初さん、嬉しからうね。
甚三　サア〳〵、これへ參つて、酒を飲め〳〵。
九平　ヘイ、私しは恐れ多うござります。
甚三　ハテ、深川の遊里の事、貴賤の隔てはない。何なりと、肴を取らせい〳〵。
九平　左樣なら、お肴ばかりを戴きませう。
　　ト 思ひ入れあつて、お初の手を取つて行かうとする。
はつ　こりや、何なさんすえ。
九平　知れた事、肴に貰つて行くのだ。
　　ト 甚三郎驚き、キッとなつて

甚三 ヤイ、九平次、手前の草履を直す身分にて、執心たる初を手籠めに致す不届き者。

九平 お初といふはおれが妹、肴に買つて連れて行つて、外へ賣つて金にする。

ト甚三郎また憤りして

甚三 初といふ、初が妹といふからは、皆の者が包み居たれど、噂の悪者は其方であるな。

九平 亡者は御存じの事、お初が年季の立て金は、殿様から肴に貰つた妹だ。連れて行つて

ト お初にかゝらうとする。

甚三 ヤア、九平次め、目通り叶はぬ、下がらぬか。

九平 イヽヤ下がるまい。この深川へ来て遊べば、お大名でも町人でも折助でも、金さへあればお客の

色里。云ひ分があるか。

甚三 ヤア。

ト思ひ入れ。

九平 サア来い。

ト嫌がるお初を引つ立てる。この時下座より黒兵衛、吉助、井筒、材木屋の息子など皆〳〵にて、酒器

と見當ら持ち、ズツと出てお初を引退け、九平次を取つて投げる。皆々騒ぎし。

女皆　ヤア、お前は平野町の徳兵衛さん。

九平　なんでおれをば投げたのだ。

徳兵　水道の水は離れても、色と戀との流れの深川、その水で育つたからにやァ、こんな事は見て居られぬ。いま聞けば、この深川へ來て遊べば、大名町人、また折助でも、同じ事だといふからは、なんぼお初が兄とやらでも、この徳兵衛がさうはさせない。

九平　そりや又なぜ。

徳兵　お初が年季の立て金は、あの殿様の方から出て、酒の肴にお初を、おぬしが貰つて行かうとは、そりやァ其方の勝手づく、今日のお客は徳兵衛さまだワ。

九平　さう云へば、成る程さうだ。

徳兵　深川者で材木の、小口もきいてこれまでに、鋸屑出さず眞直な、柾な木目の平野町。向うが素直に杉丸太の、人と見たらばどこまでも、賴もし強いが一つの徳兵衛。いぢくね惡い松丸太の、曲つて來れはエンヤラヤッと、おれが鳶口ぶッつけても引摺り出す。お初は揚詰め角物の、水離れもさしやアしない程に、この女が河岸揚げは、マア成らないよ。

九平　野暮言を聞く隙は無いわえ。

ト お初にかゝらうとするを、徳兵衛また引退ける。九平次、懐より二枚目の手紙を落す。徳兵衛取つて見て

徳兵 「久々お目もじ致し申さず候ふ。さてはこの度與兵衛こと」……この與兵衛といふは。

ト 九平次悔りして

九平 その手紙を

ト 取らうとする、立廻り。徳兵衛、九平次を捕へようとする。ボンと暮れ六つの鐘鳴る。

女將 暮れ六つだや。灯をつけて。

ト 徳兵衛、ヤツテリと思ひ入れ。お倉、おさの、燭臺を運ぶ。徳兵衛、島田のこなし。九平次、合點のゆかぬ思ひ入れあつて、徳兵衛をトツクリと見て

九平 手紙の讀めぬ者は。

徳兵 ヤア。

ト 思ひ入れ。

九平 なぜ讀まない……聞えた。徳兵衛とやら。男は立派で、綺麗を飾つて、氣のきいた風俗だが、島田になァ、イヤサ、料簡でも惡くしたか。何の事はない、年季野郎の増長だ。日數に、縁の盃で

も食やれな。

徳兵　どうしておれが鳥目であらうぞ。

ト徳兵衛、あたりへ心遣ひのこなし

九平　それでも手紙の、跡は讀めるか。

徳兵　イヽヤこれは。

九平　ドレ、それを

トまた取りにかゝるな。徳兵衛拂ひのけ、九平次、身を引く。

ドッコイ、爰だ。

ト徳兵衛、九平次を捕へ損なひ、前へ轉ばうとして、思はず臺の物の掛け盤へ行き當り、ちやつと探りながら、梅の枝を取上げ見て、こなし。

徳兵　ハテ、この梅は好く咲いたなア。

ト思ひ入れ。合ひ方。九平次こなしあつて

九平　用の手紙を落したは、おれが誤まり。夜明までは徳兵衛が揚げ。明けたら直ぐに妹を

はつ　エ。

ト思ひ入れ。

九平 連れ立つて

ト徳兵衛の持つてゐる手紙を引ツたくる。徳兵衛「それを」と行かうとして、九平次と、すかたにゆく。

長居は恐れだ。

ト唄になり、九平次ツイと奥へ入る。徳兵衛、跡見送り、こなしあつて

徳兵 ハテ、理不盡な奴ではあるぞ。

ト甚三郎こなしあつて

甚三 平野町の村木商賣、徳兵衛といふは、文藏が兄にて、手前屋敷へ由緒ある出入りの町人。先達て歸參の節も、文藏が働きにて、金子調達によつて、四方出の香爐手に入り、めでたう家督も相濟む。殊に只今悪者の九平次を退けしは、甚三郎を大切と思ひ、遠山家の恩義忘れぬ致し方。過分々々。

女吉 徳兵衛さんのきつい働き。

はつ ほんにわたしや、嬉しうござんすわいな。

徳兵 知れた事。徳兵衛が揚げなければ、いはゞ女房。

ト甚三郎合點のゆかぬこなしあつて

甚三　ナニ、初を女房とは。

徳兵　殿様には、きつい御料簡違ひ。出入りは出入り、また色里の遊びは遊び。徳兵衛が揚げのお初。お大名でも殿様でも、指でもさゝしは致しませぬぞ。

甚三　コレ徳兵衛。

ト急いたるこなしにて徳兵衛の側へ摺り寄り

すりや、遠山家の事も思はずに、お初に惚れての事か。コレ、手前と初とは、並大抵の事ぢやと思ふか。

はつ　殿さんの御流浪の其うちにも、互ひに深う云ひ交して、二世と誓うたあなたとわたし。

甚三　見捨てまいと、誓言が起請。徳兵衛、其方は見下げ果てた者ぢやぞよ。

徳兵　イヽヤ、どこまでもコレ

ト お初を捕へようとして、バツタリとなる。お初逃げようとする。裾を捕へて

お初はおれが揚げだぞよ。

ト引寄せる。

甚三　それでは武士が立たぬわやい。エヽヽ。

ト口惜しきこなし、騒ぎになり、二階の上がり口よりお宮、新子の拵へにて出て來て、ツカ／＼と甚三郎の側へ行き、手を取つて

みや　サア、お出でなんし。

甚三　行けとは、どこへ。

みや　知れた事。わたしと寢に。

ト甚三郎恟りして

甚三　不躾千萬な。其方は何者ぢや。

定六　ぬしが、先刻申し上げました、お宮さんといふ、新子の女郎衆でござりまする。

甚三　この者が

トお宮を見て

ハテ、あでやかな女は女ぢや。

ト思ひ入れ。

みや　先刻からの樣子は、みんな聞いてゐやんすが、憎らしいは殿さん。わたしに口を掛けて置いて、



みや　アレ、矢ッ張りイケ好かん事を。

甚三　なんぼ好かれうと思うても、君子二言無しを守らねばならぬわやい。

外聞の悪い、揚げ干しにしなんして、お初さんの事ばつかり。エヽ、アタ好かん。

トこなしあつて

わたしや新子の事なれど、中裏へ来ては勤めの意氣張り。どうで板頭のお初さんに叶やすまいがまた初會ぢやというて、お客に嫌はれ、揚げ干しになつては、見番での笑ひもの。ぬしとちよつとでも寢ぬうちは、苦界の道の顔が立たんによつて、否でも應でも寢るほどに、マアさう思うておくれなさんせえ。

はつ　そんならわたしが、徳兵衞さんの揚げになつてゐて、殿様の儘にならぬゆゑ、お前が口を掛けられたによつて、殿様を是非お客になさんすのかえ。

みや　アイ。

甚三　それではどうも。

ト徳兵衞、前にある右の梅の枝を取上げ

徳兵　殿、甚三郎さま。

ト梅の枝を甚三郎の鼻の先へツイと差出す。甚三郎悔りして

甚三 これは危ない。

ト徳兵衛ちやつと枝を引取り、鳥目と見せのこなし。お宮、臺の物の松の枝を取つて、この宮左右より、梅松の枝を差出す。甚三郎キツと見る。太鼓入り。とつちりとんの合ひ方になり、二人思ひ入れ。

甚三 徳兵衛は梅の枝。お宮とやらは臺の物の松の枝、手前に差出した心は。聞えた、天満屋の縁によつての、こりや謎か。

徳兵 このお初天神の、御神木の梅の花でも、徳兵衛といふ揚げがあつては、花守りの目を盗むやうなもの、物云はねどこの梅が枝。

ト枝を折つて

思ひ切つてしまはつしやりませ。

はつ そんなら。

ト立上らうとするを、徳兵衛また裾を捕へる。

エヽ、辛氣な。

ト ぢつと俯向き、思ひ入れ。

甚三 ヤイ、初、今は勤めの身となれば、金銀づくにて儘にならねば、あの徳兵衛が申す通りか。イヤサ、其方が心は

ト急いたるこなし。お初、默つてゐて、鏡袋を出し、顏を直す。

手前が事は不承知か。どうだ。

トきつと立腹の思ひ入れ。お初こなし、お宮、思ひ入れあつて

みや 捨てる神あれば助ける神とは、天神樣の事であらうが、筑紫へ捨てられ、その腹立ちの、無念無念が凝り固まつて、雷樣とおなりなさんして、都の北野で助ける神。梅と松とは御神木。松は常磐の色かへぬ、位は太夫天神の、全盛さんでもアイ、板頭さんでも、今の勤めの宮が心は同じ事。まだお見立のお杯も、戴かねど口を掛けられ、呼ばれたがわたしが意地。千年をかけて變らぬ色の、よい返事を松の枝。ちつともお目にはとまらぬかえ。エヽ、腹の立つ。

ト甚三郎へ思ひ入れ。甚三郎キツと思ひ入れあつて

甚三 その志しは過分なれど、どうも今云ふ、君子二言無しが

みや アノ、どうでもかえ。

トぢれつたきこなしにて

エヽ、あんまりな〳〵、焦れつたいので、いつそ逆上せてほんにマア、大名さんもしく〳〵ないわいしよなア。

ト甚三もしのぶを取つて[illegible]ながら、[illegible]を引る。甚三郎思ひ入れあつて

其三 それ程までにか。

みや 呆れるよ。

ト甚三郎の顔面をヒッシヤリと叩く。甚三郎「ムヽ」と思ひ入れ。唖になり、お宮ヤイと奥へ入る。

甚三郎キツトなり

其三 おのれ、不届き千萬。武士たる者の面體を打ちたる狼籍。今にも從五位下、朝散大夫に任官いたす手前へ對し、言語道斷なる振舞ひ。うぬ、もう

ト[illegible]

大名持て〳〵。

女房 ハイ〳〵、わたしは、二階へは登りませぬ。

其三 ムヽ。

ト思ひ入れあつて

遊里の二階は女どもの慮外勝ち、刃物預けるも理り。貴賤の辨まへ無いのが、勤めの情でもあらうか……女に似合はぬ丈夫の魂ひ。遊里に稀れな

トお宮の跡を見やり

あの志しの

トまた思ひ入れあつて

愛い奴だわえ。

ト唄になり、甚三郎ツイと奥へ入る。

女皆　モシ殿樣

ト女形皆々續いて入る。跡に徳兵衞、お初殘り、こなしあつて

はつ　あの樣子では、慥かに殿樣がお宮さんに

ト行かうとするを徳兵衞、お初を捕へて思ひ入れ。合ひ方になり

徳兵　これサ、待ちやれな。いつぞやからの中裏に、お初といふ名に惚れ込んで、こなたを揚げに來た喜兵衞。樣子を聞けば弟の文藏と、天滿屋へ遊びに來て居るとの沙汰。それも構はず兄弟連れの

女郎買ひも、若こなたゆゑ、何も思ひはかけないが、かけられるほど深川の、遊びが嵩みねど内内の、心遣ひにこの鳥目。

ト云はうとして

とく／＼、わしに

ト お初を引寄せようとして、思ひ入れあつて手を取り

早く寝やれな。

はつ　成る程、徳兵衛さんのお志し、嬉しうござんすが、いつぞやより勤めの身とはなつたれど、まだしみ／＼と枕をも、かはしたお客の無いといふも、徳兵衛さんへ立てる心中。賃のところを聞分けて

徳兵　ハテ、思ひ切る私なれば、出入の屋敷の殿様と、橋を突いての云はゞ買ひ論。色といふ字をこの身の仇、仲間の者のあじやら詞に、大阪にある曾根崎の中、その名もお初徳兵衛と、浮名が立つたと噂され、仲間のお初を買はねば、徳兵衛ではあるまいと、酒の上での冗談から、買はねば済まぬ仲間附合ひ。

ト お初こなたへあつて

はつ　どうも、わたしや

徳兵　ようごんす。これ程に云ふに、靡く事がならずば、仲間附合ひの手合ひに見せる、ほんの見え坊だ。嘘でもいゝ、起證を書いてくんなさい。

はつ　エ……どうして起證が

徳兵　ハテ、勤めの身では空誓紙、工面の悪い時にあるやつサ。

ト　お初、徳兵衛の顔をヂツと見て

はつ　ぬしの鳥目では

ト云はうとして

ようござんす。書いてあげう。

徳兵　アノ起證を

はつ　アイ。

徳兵　忝い。ドレ、硯箱を

ト立たうとするを留めて

はつ　爰にわたしの、鏡袋に紅筆が

徳兵　それは幸ひ。

ト　お初、鼻紙袋より託宣の鼻紙を出す。

お定まりの、天罰起請文の事。

はつ　天罰起請文の事。

徳兵　そんなら様と二世の約束、致し申さず候ふ。

はつ　ト……ま……二世の約束、致し申さずとはえ。

ト　悔りする。

徳兵　コレ、その跡は。

ト　お初を引廻し、思ひ入れあつて泣く。チョン／＼、曲撥になり、道具廻る。

本舞台、三間の間、二重舞台、上様囲付き、屋根廻りの蛇腹、見附け風壁、床の間、茶立て口、出入り、上の方、九尺の二間、これも大和作き、高欄付き、植込み、柴垣、手水鉢、いつもの所に枝折り門。この茶寄屋に幔を切り、釜を掛け、側なりと棚物に水差し、薬茶入、柄杓、棚物飾りあり、夏に九平次出てして居る。時の鐘、合ひ方にて幕明くる。

丸平　こんな茶の湯座敷へは來つけぬから、入つて見たが、敵討の狂言に、よく毒を服ませるはこんな所。

ト思ひ附いたるこなしにて

こいつは好い事があるわえ。いつぞや團右衞門さまに頼まれ、何でもお屋敷の事といふと、ニユツと出て、さゝへこさへを云ふ木屋の文藏。これを服ませてくれろと云つたが

ト紙入より序幕の藥の包みを出し

これを服ませて、一時か二時の間に、五體惱んで死にもやらで、何となく苦しんでくる病になるは、當利散といふこの藥。たしか、その文藏も來てゐれば、好い間を見合せ、服ませたいものだが。

トまた思案して

爰にある茶の入れ物へ入れて置いて

ト飾つてある棗を取つて

イヤ〱、ひよつと文藏が來ずに、妹めでもくらふと亂騷ぎ。こいつも危ない。

トいろ〱思案の思ひ入れ。下座、バタ〱とするゆゑ、ちよつと奥へ隱れる。砧の合ひ方になり、下

ト 懐よりお余走り出て来て、ウロ〳〵してあたりを見て、胸算でおろし

くめ わたしが最屓の木屋の文蔵さんが、金兵衛さんの持つてゐる金を、何やら見たがつてぢやといふ事を聞いたによつて、どうぞ〳〵と思うたが、金兵衛さんが寝てぢやによつて、そつと財布のこの金を

ト 懐より金兵衛の金財布を出して

これを盗んで文蔵さんへ。

ト 持つて行かうとして

イヤ〳〵、丁度いゝ逢へばよいが、さもないと、また見咎められては

ト 思案して

マア、それよりは先刻の香爐の事。

ト 懐より右の香爐の箱を出して

この箱の中へ財布の金を

ト 財布より二百両の金を出して、箱より香爐を出して

斯う箱へ入れて

ト二百兩を箱へ入れて

斯うして置いて、香爐と云うてお北さんの所へ預けて置いて、間を見合せ、文藏さんに。また香爐を財布へ入れて

ト財布の中へ香爐を入れ

斯うやつて、金兵衞さんの寢てゐなさんす側へやつて置けば、ぬしが金と思うて……どうぞちつとのうち知れぬやうに。南無妙見さま、金毘羅さま〳〵。

ト拜む。此うち下座の柴垣より仁太、見てゐる。後に九平次出かゝり、兩人とも金の欲しきこなしにて、いろ〳〵思ひ入れあつて

九平　コレ、姐さん。

仁太　その香爐の箱の物を

トずつと前へ一時に出る。

くめ　エヽ。

ト恟りして、ちやつと財布と箱を懷へ入れる。仁太、九平次、顏見合せ

こなさん、先刻の

九平　茶賣いどの。
仁太　玉市殿。
兩人　ヤア。
　　　ト大きに悧りする。
くめ　お前方はわたしに
　　　トおど／＼して云ふ。
兩人　イヤ今の
　　　トへぼーとして顏見合せ
　　　用は無いよ。
　　　ト仁太、九平次、元の所へ入る。
くめ　マア落ちついたわいな。
　　　トまた仁太、九平次、うそ／＼出て來て、思はずお[illegible]三人顏見合せ
兩人　ヤア。
くめ　エヽ。

ト悧りする。また仁太、九平次入る。直ぐに九平次出てくる。この時、奥にて

文藏　誰れぞ茶座敷には居ないか。

ト九平次悧りする。

剛氣に醉つたぞ。茶が飲みたいく。

くめ　ヤア、ありや文藏さん

九平　ナニ文藏が茶が飲みたいと。しめたワく。

ト手を打つて喜ぶ。お粂ツイと下座へ入る。

なんでも文藏が爰へ來て、茶を飲むに違ひはない。爰でこそ當利散を

ト藥包みな出して袂へ入れ

斯うして置けば、文藏がくらつて、二時三時たつと藥が廻つて、五體惱亂、ぐなく。こいつは

巧いワ。イヤ、くらつたら旨くもあるまい。

ト下の方へ寬ひく入る。合ひ方になり、奥より文藏出て來て

文藏　誰れぞ一杯飲ましてくれないか。

ト下座よりお宮、庭下駄にて出て來て

みや　文さんかえ。

文藏　お宮か。

みや　きつう醉ひなさんしたね。

文藏　ナニ、さうでもないのサ。

ト此うち奥より甚三郎、矢張り上下にて出て來て

甚三　それに居るは、水屋の文藏か。

文藏　これは遠山の殿樣。

甚三　屋敷へは由緒ある、出入りの徳兵衞こと、手前執心の初を揚げにしての不埒、それに懸けて其方が實義。今日商賣向きも、文藏に申しつくるしるしとして、幸ひなる手前が上下、これにて拜領いたさせる。ソレ

ト上下を脱いでやり

早く着せ。

文藏　ハツ／＼、當座の御褒美、有り難く頂戴いたしまする。御免下さりませう。

ト上下を着る。

甚三　女郎買ひの座敷にて、上下とはこれも風流。

文藏　その風流とやらは、とんと知りませぬ武骨の文藏。

甚三　剛氣朴訥は仁に近しと、無骨が風流の第一。

ト　お宮を見て

その武骨にて、先刻手前の面體を打つて、慮外なしたるは其方ではないか。

ト此うちお宮、莨をのんでゐて、甚三郎をヂロリと見て

みや　慮外なしたがお腹立ちなら、どうなとなさんせ。

トつんとしてゐる。甚三郎思ひ入れあつて

甚三　ハテ重々の

ト云はうとして氣を變へ

アヽ、醉うたぞ〳〵。

ト思ひ入れ、始終合ひ方にて、奥より梅吉、矢張り掻卷の形にて出て來り

梅吉　お宮さん、見番から着替へが來たからあけるぞえ。

みや　着替へなら、其方へ置きなさんせ。

ト梅吉行かうとする。

梅吉さん、生馴染でゐなさんした、柳樽の本があるなら貸しなさんせ。

梅吉 爰に持つてゐるわえ。

ト懐より右の柳樽を二三冊出す。お宮取つて見て

みや「梅ヶ枝は、萬年青の實まで拾ひ込み」。どうも面白いね。

梅吉 懸張つた女郎衆ア。

甚三 文蔵、小夜石をまとうた、あれは何者だや

文蔵 あれは爰の内の抱へ藝者で、久しく煩らつてゐます。これも大方川柳に。

ト本を見て

「煩らうた、藝者三筋の絲と痩せ」。

梅吉 エヽ、アタ好かん。

文蔵 どうでよくなつたところが

ト本を見て

「見番は、みな俗名へお線香」。

梅吉　まだ其やうな事を。

ト向うより慾助、貸物屋にて、風呂敷を持ち、出て來て

慾助　お見世へ參りましたが、奥の茶座敷にござるといふ事だ。

ト云ひ〳〵甚三郎を見て

遠山甚三郎さま、これにお出でなされましたか。

甚三　損料屋慾助ではないか。

慾助　根岸の植木屋に居候ふの時、度々お貸し申した損料代。

甚三　その代金なら、なぜ屋敷へ取りに參らぬ。

慾助　ハテ、お屋敷へ參つたれど、出入りの外商人無用と、外の者を入れませぬ。そこで私しも

みや　「樊噲も、頼みませうと初手は云ひ。」

ト本を見てゐる。

慾助　なか〳〵頼みませうどころでは、お目玉を貰ひますから、お駕籠訴を致さうと思つて、借金乞ひの願ひ書。

ト懐より書附を出す。文藏取つて開き見て

文蔵「書附ける因て申し上げ奉り候ふ。御流浪の御身、御侘し申し上げ候ふ損料代、三十三両、御備仕申し上げ候へども、御拂ひ御用なく、その上御陣事これあり候ふても、御門留にて、雑作仕り候ふ。もし御拂ひこれなく候へば、御召し物なりと引剝ぎ申し候ふ。遠山甚三郎さま、損料屋慾助。」……こりや書附けでの借金乞ひ。

甚三 尤もな事なれど、供の者も離れ居れば、只今金子調達は。

慾助 イヤ、云ひ譯は聞きませぬ。損料代の三十三両、お屋敷へ參つて受取りまする證據の御紋附き。脱がつしやりませ。

ト甚三郎にかゝる。文蔵、慾助を引のけ

文蔵 うぬ、殿様へ慮外するのか。

甚三 イヤ、文蔵、苦しうない。手前浪々の砌り、借用いたしたに相違ない。慾助が望みに任せ、脱いでやらう。

慾助 知れた事サ。

ト甚三郎、上着白無垢を脱ぎ、長襦袢になる。慾助風呂敷へ包む。紙挟みを落す。

文梅 殿様のこのお形、ほんにお氣の毒な。

ト甚三郎、本を見て

甚三 「居候ふ、おゝくび形の餅を食ひ。」根岸に居つた浪々を、思ひ出せば殘念にもないわえ。

惣助 いつもの借金乞ひとは違ひ、無理に引剝ぎもしないから、憎まれもしない。したが、借金乞ひのお定まり、たつた一つは。

ト甚三郎を蹴る。文藏、直さま取つて拋り出し

文藏 罰が當るわい。

惣助 知れた事だワ。

トうろたへ、襠裲の包みと取違へ、持つて入る。梅吉、甚三郎を見て

梅吉 ほんにマアお氣の毒な。わたしが着たのでも大事なければ、この搔卷を憚りながら

ト搔卷を脫いで甚三郎に着せる。

甚三 過分。

トこなしあり、紙挾みを懷へ入れる。文藏、甚三郎を見て

文藏 名におふ一萬五千石の殿樣が、古借金の催促に、脫いでやつての素ッ裸。

甚三 これも風流、きつい侘ちや。

文藏　とんだ世話場になつて來たわえ。

甚三　この佗で、茶の湯はどうであらう。

文藏　茶の湯といふものは、むづかしいものぢやござりませぬか。

甚三　何もむづかしい事はない。手前がこの夜着を着たのと、其方が上下を幸ひに、佗びての薄茶。

文藏　どうして私しのやうな、傳法と同じ者が、お茶の給仕が

ト思ひ入れあつて

何もお厭ひだ。この沸る湯で、茶を一杯かき立つてあげう。こいつもおつりきだわい。

ト二重舞臺へ上がり、甚三郎は客座、文藏は亭主にて、茶を立てる思ひ入れ。甚三郎、紙挾みより香包みを出し

甚三　香を炷きたいが、そこらに香爐が

ト思ひ入れあつて

斯樣な時こそ、家の重器の四方田の香爐で、火加減よく炷きたいが……コリヤ〳〵、煩らうた妓婦、先刻お家に申しつけ、預け置いた手前の香爐がある。取つて來い〳〵。

梅吉　そんなら、おかみさんの所へ行つて

ト合ひ方になり、梅吉奥へ入る。下座、パタ〳〵にて金兵衛、お粂を引立て、財布を持ち出て來て

金兵　おのれ、太い奴ぢや。いつの間にやら、おれの財布をちよろまかしたな。誰れに頼まれて盗んだ。サア、有やうに吐かせやい。

ト　お粂をぶつて突きのめす。

くめ　なんのわたしが盗まうぞえ。お前が酒に醉うて、この財布を抛り出してゐたによつて……先刻文さんが、お前の金を見たいと云ふ事聞いたから

ト云はうとして

金兵　いらぬわたしが

ハヽア、そんなら相摺りは文藏か。

文藏　ヤ。

ト思ひ入れ。

金兵　イヤ、文藏どのゝ贔屓したのか。ハテ、物好きな。おのれ、叩いても同類を

トお粂にかゝらうとするをお宮、ツカ〳〵と行つて金兵衛を引退け

みや　何も其やうになさんすな。あの子はきつい團十郎贔屓ぢやによつて、文さんの事を

金兵 それで金を貸しかつたのか。きつい贔屓ぢやなア。
みや 江戸ッ子が團十郎贔屓は當り前さ。
ト金兵衛、お宮を見て
金兵 こなさん、美しい顏をして、わしを凹まさうとしておやが、わしが阿房らしい事を聞かんせ。今日靈岸島に質を見に行つて、相談が出來ぬから、この間から新子のお宮といふが出たと聞いて、廻つた途で文藏どのに逢うたら、先達ての二百兩の金、見せてくれと云ふが、合點がゆかぬ。その上、新子のお宮も出すに、この二百兩を取られてよいものかいなう。
みや そのお宮といふはわたしぢやから、何にも云はずに、わたしが云ふ事聞いて、料簡なさんせ。
金兵 何ぢや、宮といふは其方ぢや。ヤア、。
ト悔りして
道理で美しいと思うた。それについても、あのお粂め。
トきつとなる、又とめて
みや モシ、わたしが云ふ事
金兵 オヽ、きく〳〵。

ト ぐんにやりとなるこなし。此うち奥より梅吉、香爐箱を持ち、出て來て

梅吉 先刻お預かり申しました、あなた樣の香爐を

ト差出す。

甚三 それに置け〳〵。

ト梅吉入る。

金兵 時に、中がどうなつてゐるか知れん。ちよつと改めて

ト財布を明けて、香爐を出して恟りし

ヤア、こりや二百兩ではなうて、香爐ぢや……しかも覺えある四方出の

ト甚三郎文藏も恟りして

文藏 ナニ、四方出の香爐とは。

甚三 手前が所持たる

ト箱を明けて見て、恟りして

こりや金子ぢや。

文藏 殿樣え。

甚三　よろしう計らへ。

ト文蔵、金を取つて見て改め

文蔵　こりや四つ宝の極印の金二百両。

金兵　そんならおれが財布の金を、その香爐と、摺りかへたのはこのお袋め。

ト文蔵きつとなる

みや　モシ、わたしが挨拶わえ。

金兵　きく〳〵〳〵。

トぐんにやりとする。

文蔵　金兵衛どの、お家が相ずりの文蔵を、贔屓するのと云つたが、そんな事は構はないが、こなたの二百両が此方にあつて、香爐が其方にあれば、をかしなものぢやァあるまいか。

金兵　イヤ〳〵

ト考へて

イヤサア、いつぞや二百両で請けさせたこの香爐が、また此方にあつて、其方に金があつては、これでは太郎兵衛駕籠ぢや。

文藏　この金は此方に少つと

ト思ひ入れあつて

サア、さしかゝつて殿樣の、御重器の香爐と、どう間違つたか財布と箱。

ト金兵衞のみ込んだこなしにて

金兵　何にも云はずに取替へませう。

ト香爐と金を取替へる。

みや　それもわたしが云ふ事を

金兵　きいたから濟んだのぢや。

くめ　それではわたしに科は無いかえ。エヽ。

ト喜ぶこなし。

文藏　あの金を取戻すには

ト思案の思ひ入れ。時の鐘鳴る。

くめ　金兵衞さん、あの鐘聞いて時酒に

金兵　あの鐘よりは、わしが云ふ事コレきいて。

ト　お宮に取つく。

みや　エヽ、知らんわいな。

ト突きのめし、此方へ來て貰のんでゐる。

金兵　いま／＼しい。仲直りにお粂と時酒。

くめ　エヽ、せう事なしに

金兵　イヤ、山科ぢやない。

くめ　お宮さんが

金兵　だましたのぢや。

ト唄になり、お粂逃げるを、金兵衛追ひかけて下座へ入る。

甚三　大切な香爐を、たゞ慰みには遣はぬ事ぢや。

ト香爐を箱へ入れ、懷中する。

文藏　ドレ、茶を挽き廻してあげませう。

ト茶を立てる。これより尺八入りの合ひ方になり、甚三郎、お宮を見て思ひ入れ。お宮、甚三郎の方を見て、編笠の紐を解けて

みや　「大鳥毛、高尾立派に振り通し」……どうしても川柳といふものは情があるて。

ト甚三郎思ひ入れあつて

甚三　その柳樽といふは酒の事か。

みや　こりや俳諧の本サ。

ト文藏茶を立てゝ甚三郎に差出す。取つて飲みながら

甚三　大方、濃茶薄茶の事などもあらうな。

文藏　それも慥か、「青海苔を、搔き立つて飲む澁い面。」

甚三　これはお服加減。

ト飲みしまひ、舌打ちする。

文藏　ハヽヽヽ。

ト笑ひながら平舞臺へ下りて

この川柳ほど、馬鹿に面白く拵へたものはないよ。

ト甚三郎も下りて來て

甚三　ドレ〳〵。

ト そこにある本を取つて見て

俳風柳樽「松井屋には、奴一人をなぶり切り。」

文藏　こりやア居合抜きの奴を相手にする事だな。

甚三　いま云つた大島也の句が、どうも了簡解せぬ。

みや　こりやアお大名の頼兼さまを、高尾が振つて〳〵振りつけた句おやわいな。

甚三　どうやらこれは、宮

ト 思ひ入れあつて

其方と手前のやうなもの。

みや　どうしてマア、わたしやあなたに大抵

ト 思ひ入れあつて、ちやつと手前の本を取つて見て

「口惜しくば、尋ね来て見よ松ヶ岡」面白いなア。

ト つんとしてゐる。

甚三　ハヽア、色氣を思ひ切つたのだな。

ト 本を見て

「自惚れが、惚れねば誰れも惚れ手なし。」こゝらが滑稽ぢや。

みや　エヽ、憎らしい。

ト甚三郎へ思ひ入れ。文藏また本を見て

文藏　「木火土金水より先づ女房」……こいつは、竈より先に嬶アを持つ事だな。こいらが世話場の命かい。お宮さん、お前は差づめ引越し女房。

みや　どうして、わたしがやうな我まゝ者が、ぬしのやうな怖い殿さんに

文藏　そりやアほんの負け惜しみ。お互ひにまんざらでもない樣子。

ト本を見て

「六阿彌陀、元木にまさる裏木あり。」川柳めは野暮でないやつ。

みや　エ。

文藏　「三國の、廻しを取つた畜生め。」

トお宮の脊中を叩き

抱きつきなさい。

トお宮を突きやり、文藏、本を顏へ當てる。チヤン、と唄になり、奥へ入る。この時、二階の簾上が

り、お初、様子を窺ひゐる。お宮こなしあつて

みや　申し殿さん、先刻の慮外は、あやまりましてこの通り。

ト柳樽の本を出す。誂らへの合ひ方、甚三郎これを見て

甚三　この通りとは。

みや　「合羽箱、どろ〳〵とかしこまり。」

ト両手を突いてゐる。

甚三　ハヽア、跡者の下座ぢやな。

ト　お宮、甚三郎の側へ出て

みや　御機嫌がお直りかえ。

ト扇で突く。

甚三　「紂王は、きやん好宗はむくが好き。」其方は新子か。

ト甚三郎、お宮を引寄せる。

みや　左様サ。

オヤ、生娘ではあるまいし。

ト お初これを見て腹を立て、いろ〳〵あつて

はつ　そりやあんまりぢやわいなア。

ト きつとなるを、徳兵衛探り出て、お初を引廻し

徳兵　これサ、それでは

ト後向きに隔てる。甚三郎恟りして

甚三　それではとは、不承知か。

みや　どうして、ぬしの云ひなさんす事を

甚三　イヽヤ……「丈長の、鉢巻き殿をやりこめる。」恐ろしい奴の。

みや　エヽ、憎らしい、

ト甚三郎を抓り

勿體ない、ぬしは殿さん。

甚三　それも云はれぬ……「椎の木は、殿様よりは名が高し。」これでは閉口。

みや　まだ疑ひなんして

トまた木を見て

「添はせてえ、おくんなんしと神頼み。」オヤ、吉原になつたね、

甚三 アノ、道質か。

みや アイ。

　　ト お初堪へかね

はつ アレ、あれぢやもの。

徳兵 尤もだ。

　　ト ぢつと押へる。

みや アレ、どこやらで尤もと云ふわな。

甚三 互ひに惚れたをよく〳〵に、尤もと思ふから。

みや そんなら、あなたも

甚三 「色といふ字は思案の阿彌陀字。」

みや 御思案の外かえ。嬉しいね。

はつ モシ。

　　ト また行かうとするを引廻す。

甚宮　誰れやら二階に

ト二重舞臺へ上がり

甚三　思ひがけない春風に

みや　縁を結ぶの

甚三　柳樽。

みや　わたしが點で

甚三　書拔きにならうかいやい。

ト兩人色模樣のこなし。一面に簾下りる。お初、口惜しきこなしあつて

はつ　徳兵衛さん、爰放して下さんせ。わたしや腹が立つて〳〵、この身を捨てゝも

徳兵　成る程、女の身として、云ひ交した男を取られ、勤めの身でも腹が立たいで何とせう。先刻も頼む、この徳兵衛は、お家の爲に殿樣へ、不義者となつたではないか。爰の所を聞分けて、どうぞ辛抱してくれい。コレ、徳兵衛が、拜むわいやい〳〵。

ト手を合せて脇を拜むと、簾の内にて

甚三　ヤア、文藏の僞り者めが。

徳兵　あの聲は殿様。

はつ　エ。

トまた思ひ入れ。徳兵衛簾へ手をかける。ハラリと下りる。合ひ方になり、二重舞臺の障子上がる内に、甚三郎、煙管を振上げゐるを、文蔵とゞめゐる。

文蔵　只今も申し上げまする申し譯、何卒とくと、お聞済み下されませう。

ト奥にて

徳兵　遠山さま、殿様々々。

甚三　あの聲は徳兵衛。

文蔵　親仁の呼ぶは

甚三　合點がゆかぬ。様子があらう、まづ〳〵。

ト落ちつきしこなし。徳兵衛、探り〳〵出て来て、甚三郎の袖を捕へ、怪訝ゆゑ、それでないといふ思ひ入れ。

徳兵衛、手前に用があるか。

徳兵　モシ、暫く。

ト文藏の上下を探り、甚三郎と思ひ捕へる。文藏、違つたと云はれず、是非なくヂツと思ひ入れ。甚三郎奥へ入り、またお初、簾を上げて見る。途端に文藏顏見合せ、文藏ちやつと短檠の灯を吹消す。お初、獨臺の灯を吹き消し、窺ふ。

徳兵　モシ、殿、何方へもござらつしやるな。

ト時の鐘、蛙の聲、誂らへの合ひ方になり、徳兵衞思ひ入れあつて

殿には再び御家督遊ばされましたれど、御浪々の砌り、お初に迷はせ給ひしゆゑ、思し召し切らせ申さう爲、私しが、心にもないお初の客となり、鳥目を隱して女郎買ひも、お家の爲を思ひましての事。また折よくも、お宮と申す女郎が、あなたへ戀慕して、殿も又心を移されましたによつて、お初は愛想を盡かしましてござりまする。

ト思ひ入れ。文藏切なきこなし。此うち二階へお北出て

きた　お宮さんはそこにか。灯の消えたこそ幸ひの面伏せ。

ト探り／＼、お初を捕へる。お初默つてゐる。徳兵衞これに聞き耳立てる。

わたしやお前に話しがあるわえ。先刻座敷で、お初が語つた「重井筒」、樂しみなうては勤まらずむげなうせくではなけれども、必ず妻子ある人と、末の約束せぬ事ぞ。男の間男同然で、思ひゆ

かぬもの、とは面白い文句の淨瑠璃。殿さんにはお初といふ、深い馴染があるではないかえ。それに聞けば、口がかゝつて揚干しになつたが腹が立つと云うて、アノ殿さんと

ト こなしあつて、

よもやさうではあるまいが、又お初にも、云うて聞かさにやならぬ事があるわいな。

ト お初悄りして思ひ入れ。

德兵 二階に餘所の意見といへど、元はみんな殿様より。君を思ふも身を思ふ、病氣勝なるこの德兵衞養子合せにもらうた倅。殿様には御不調法に、文藏に成り代りて、お聞きなされて下さりませ。

ト 文藏ギックリと思ひ入れ。

この程の不身持。親が事も思はずに、浮氣になつての喧嘩好き。一體夜奴が心づかず、早く人様にあやまる事をせず、念の足らないばつかりに、餘所の喧嘩も大事に濟み濟ましてぬといふは不調法。段々をキット嗜めやい……サア、このやア文藏へ申す事。勿體ないあなた様。……サ、思ひは變らぬお客同士。

ト お北これを聞いて

きた 御亭を思ふ德兵衞さんの御意見。この淨瑠璃では、德兵衞ゆゑにお房、ではないお初に云うて聞

かす事。兄は悪者、それゆゑにこそ、殿さんと縁を切らそと、あのやうに御意見申すも、皆お爲め
したが、ひよつと其やうな事はあるまい。殿さんさへ思ひ切れば、外に男はいくらもある。この
頃の馴染なれど、外の子供衆とは違うて、わしや眞實に思うてゐて、豆腐取てこい、八百屋へ走
れ、駕籠呼んでおぢや、掃き掃除。

徹兵　小さい時からお屋敷にて、お目をかけて下されたお出入り。

きた　戸棚の鍵まで預けしと、淨瑠璃ほどでもないけれど、どうした事か我が子のやうに

徳兵　勿體なくも、思ひは同じ忠と恩愛。

きた　嫌な意見もどうぞして

徳兵　殿様、悴。

きた　お宮さん。

徳兵　聞いて下さりませ。

トよろしくこなし。此うち二階の後へお宮、茶立口へ甚三郎出かゝり、様子を聞いてゐる。お初、いろ／＼こなしあつて、

はつ　ハイ、おかみさんの御深切。わたしやいよ／＼、

ト思はず屁を立てる。お北悔りして

きた ヤア、鉦か。

ト立上がる。途端に二階の簾、バラ／＼と下りる。甚三郎ピツシヤリ。文蔵、徳兵衛の手を戴き、振り切り、ツイと花道へ行き、立ちどまり、思ひ入れ。合ひ方になり、直ぐに取つて返し、柴垣へ忍び、窺ふ。

徳兵 娘御には勿體ない、私しが手を取つて、御承知下されましたか。これにつけても忰が事、嫁の事二人の仲の悪いのも、心がゝりの病ひの元。思へば千ゆゑの鳥目の闇。

ト時の鐘になり、お北、ぶら提灯を持ち、出て来て

きた 徳兵衛さん、お歸りかえ。眞暗だから、お目にかけやせう。

徳兵 仲間の者が、五百ご所に居る筈だから、マアあそこまで

きた わたしが送つて

徳兵 とほく／＼と

きた 霰手に一日、はかなき眼で

徳兵 兩かれ色に離れて

ト下座にて

〽いなば橋まで送らんと、夕暮時の花街がよひ。

トこの唄にてお北先に立ち、徳兵衛思案のこなし。とぼ〳〵として爪づくを、お北手を取り

きた 醉うてぢやさうな。

ト徳兵衛を連れ、向うへ入る。文藏ツヽと出て、跡を拜み

文藏 養子といへど親仁樣の御深切、なか〳〵仇には存じませぬ。四つ石の極印の、金の事にて思はずも、この頃の短氣に喧嘩口論は、若氣の心づかざるゆゑ。また殿樣より拜領の、この上下に免じて、心をも取直して、極印の二百兩を取上げますには、それだけの質草を

ト思案のこなし。奥へバタ〳〵にてお初、甚三郎の胸ぐらを取り、出て來て

はつ 殿さん、聞へませぬ、聞へませぬわいなア。

甚三 こりや手前を何とする。

はつ わたしや何にも云ひませぬ。

ト懐より起證を出して

こりやお前より下さんした起證。緣の切れ目は、カウ〳〵〳〵。

ト起證を引裂く。甚三郎恟りして

甚三　なぜにそれや起證を破つたぞ。

はつ　わたしが方から上げた起證も

ト甚三郎の懐へ手を突こみ、紙挾みより袋入りの鑑定書を引出すを、捕へようとして

甚三　コレ、何をする。外に大事の書附けがある。

はつ　この起證も、カウ〳〵。

ト鑑定書を引裂く。甚三郎驚く。

女子の思ひが、有るものか無いものか。エヽ。

トお初、破れを打ちつける。合ひ方になり、ツイと奥へ入る。甚三郎氣を揉み

甚三　コレ初、これには段々譯のある事。其方と手前と縁を切らさうと思うて、皆が種々の事。手前、其方と縁は切らぬに、起證まで破るとは。腹がたつ、尤もぢや。

ト思ひ入れ。この時奥よりお宮、お象、おきの、お倉、大小手燭を持ち、出て來て

みや　文藏さん、首尾よく參つて、お二人さんの起證まで破つて

文藏　これでは思し召し切らさずばなりますまいがな。

甚三　文藏、ようも宮に申しつけ、手前に思ひあるやうに見せ、床の内にて段々の云ひ譯。ようもく僞つたな。エヽ、

　　ト腹を立ち、むしやぶりつかうとする。文藏とゞめ、平伏して

文藏　モシ、殿樣、親德兵衞が御恩を思ひ、種々に心を盡しまして、お上下の間違ひにての御意見、及ばずながら私しが、今日の計らひ。惡ざまに思し召し下されては、憚りながらお恨みに存じまする。

甚三　ヤ。

　　ト思ひ入れ。合ひ方になり

文藏　金兵衞と申す者に、用事あつて參りかゝつて、承りますれば、只今お聞きの通り、親ども德兵衞が、お初の客となりましたも、あなた樣へ愛想づかしを致させて、思ひ切らせ申さう爲。

みや　また文藏さんは、この間からのわたしが色客。今日殿さんの揚げになつてゐるこそ幸ひ、斯う斯うせいと賴ましやんすゆゑ、心にもないお轉變事。いとしなけにお初さんに、取交した起請まで破らせたも、あなたとお初さんの緣を切らせ申さうばつかりに、文藏さん親子の御苦勞でござんす。お初さん、堪忍して下さんせえ。

ト猿三郎思ひ入れあつて

猿三「それ程までに遠兵衛親子が、善となり悪となり、思うてくれるは過分なれど、どうも君子一言なしの……それも巴計が此やうに破れて

ト破れを取上げ、惜しさうに見て

「大覺和尚文の事」。こりや手前の手蹟。

ト また破れを取つて

「不來永く」血が附いてある。これも手前のおや。

ト鑑定書の破れを取つて

「遠州延年傳來たる四方出の香爐

ト胸をして

この破れは、合點がゆかぬ。

文蔵 エヽ。

ト驚き、外の破れを取つて

「本金五十枚。

ト お宮も破れたを取つて

みや 「相違これなく候。文龜三年三月十八日」。

ト甚三郎また取つて

甚三 「宗祇判」。ヤア〳〵、こりや香爐の鑑定書。

ト紙挾みより起證を出して見て

文藏 そんなら起證を取違へて破つたのか。ヤア〳〵。初が起證は爰にある。

ト大きに恟りする。

甚三 ホイ。

トぢつとなり、俯向く。

文藏 これでは香爐も埋れ木同然。

女皆 ほんに氣の毒な。

みや 文藏さん、どうしたらようござんせう。

ト甚三郎思ひ入れあつて氣を變へ

甚三　ハテ、大事ない。鑑定書は當時の香所、滋家より取れば濟む……サア〳〵、もう歸らう。

女岩　そんなら、わたしゝがお送り申して。マアわつさりと一つ上がつて。

ト酒と肴を出す。

みや　わたしや着替へて。

文藏　殿樣には、この形では。

トお宮、包みを明けて見て

みや　こりや殿さんのお小袖。

甚三　損料屋めが取違へたか。ドレ、それを

文藏　ハッ。

くめ　賑やかに、祭文なりと。

ト三味線を取上げる。大小入の「竹生島」の祭文になり、文藏お宮、甚三郎に着せる。

甚三　手前はよいから、宮も文藏も、もう行つて、しけれ〳〵。

文藏　これは又、怪しからぬ事を。

甚三　行かぬと手前、意見を言かぬぞ。

ト文藏つかへて

文藏 左樣ならば

みや あの二階へ。

ト お宮、文藏の手を取り、奧へ入る。直ぐに二階へ上がる。甚三郎トックりと着て、大小を差し、二
階を見て

甚三 手前は歸るぞ。

文藏 殿樣ゆゑに今日は

甚三 互ひに立腹する事もあり

みや わたしが辛氣も

甚三 そこでゆるりと

文藏 御免下さりませう。

ト色めいたこなし。合ひ方になり、簾下りる。甚三郎思ひ入れあつて

甚三 あの宗祇の鑑定書が破れては

女皆 エ。

甚三　小用を足しに。

ト ついと奥へ、皆々附いて入る。下座より九平太出て來て

九平　娘を連れて行つて、團右衛門さまへ上げれば、外へ賣るより金になる。それに道具屋めが支へこさへゝしたが、あれぢやア殿樣の緣も切れたわえ。なんでも彼奴を

ト 奥よりお初、剃刀を持ち、出て來て

はつ　浮世の義理にせばめられ、どうで譯はない殿樣の事、取交したる起請を破つて、わたしやあの世へ。さうぢや。

ト 死なうとするを、九平太とめて

九平　われを殺していゝものか。團右衛門さまへ連れて行つて金にする。來い。

はつ　エヽ、否ぢやわいなア。

九平　エヽ、面倒な。

ト 引立てるを突きのける。騒ぎになり、立廻りに鳴子 杯を打ちつける。チヨン〳〵にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、一面の黒塀、松の立ち樹、眞中に切り戸口。鳴子の札下げてあり、爰に仁太、頰かむりをして、塀際に立つてゐる。時の鐘にて道具とまる。

仁太 先刻見て置いた、香爐の箱へ入つた百兩、慥かに殿様が持つて歸るに違ひない。どうぞして捲あげたいものだが。

トそこらを見廻す。向うより三、富士屋といふぶら提灯を持ち、出て來て

三 海へ行つて遲くなつたが、金兵衛さまはまだか。ドレ、鳴子を曳くべい。

ト本舞臺へ來て、鳴子の札を曳かうと伸上がる。仁太、内を覗かうとする。途端に切り戸口より甚三郎ツイと出る。三、開きにあたり、「アイタ……」と云ひながら、ぶら提灯にて擲り廻す。立廻りにて甚三郎爪づき、香爐の箱を落す。仁太、三の提灯を引ッたくる。三、立廻つて摑みつき、揉合つて下座へ入る。甚三郎こなしあつて

甚三 皆々の意見もだし難けれど、初へ誓うた詞が立たず。とくれかくれの其うちに、初か悋氣に誤まつて、破つた起證間違つて、大切な鑑定書が破れたれば、香爐があつても役に立たぬ。所詮鑑定書が無ければ、この身の仇と思ひ極め。わざと皆には嘆きなき體に致し、密かにこれへ抜けて來たも、一旦この身を蟄居して、これより直ぐに龜井戸の下屋敷へ……誰れぞ參らぬか。供は居ら

ぬか……オヽ、居らぬ筈ぢや。

　ト思ひ入れあつて、そこらを尋ねる。下座より仁太、ぶら提灯を持ち出てくる。

仁太　ハテ、大束な。

　ト合ひ方になり、甚三郎そこらを探し、香爐の箱を取り上げる。仁太見て思ひ入れあつて

お供が無いさうだ。この提灯で送つて進ぜう。

甚三　それは大儀。

仁太　そして、お屋敷はえ。

甚三　亀井戸の下屋敷へ。

仁太　マア、尻でも端折つて行かつしやりませ。

甚三　よろしう致せ。

　ト仁太、我が手拭にて甚三郎に頬かむりなさせ、おちよぼからげにして

仁太　サア、行きやせう。

甚三　提灯やれ。

　ト花道の角へ来る。此うち三、出て来く

ト取りにかゝるを仁太、見事に取つて投げる。

三　その提灯を

仁太　ソレ、ぬかるみ。

ト提灯を差出す。チョンと木の頭。

甚三　承知。

トよろしく、ひやうし

ト幕の外、騒ぎになり、仁太と甚三郎、向うへ入る。時の鐘のツナギ、引返し。

幕

本舞臺。三間の間、向う黒幕、一面の藪疊、すべて中川筋の體。爰に蕎麥屋、蕎麥を拵へてゐる。

十太、船頭にて、蕎麥を食つてゐる。禪のツトメにて幕明く。

そば　お前は夜通しに、どこへ行かつしやる。

十太　わしやア中川の船頭だが、今日は晝から飲んで、剛氣に醉つた。そこで蕎麥を食ふのだわえ。

そば　ようごんす。小言を云はずと、蕎麥を食はつしやりませ。

十太　オヽ、食ふがどうしたえ〳〵。

ト蕎麥を食ひながら、そこへ眠りこける。

そば　ハテサテ、陽氣に醉つて、夢中で蕎麥を食はつしやるワ。いま／＼しい。此奴は食ひ逃げではなくつて、食ひ寢だわえ。

ト蕎麥の荷を肩へ上げ

そばイノ／＼。

ト向うへ入る。十六、大いびきにて稻村の蔭でころげる。ゴンと時の鐘、獨吟のメリヤスになり、向うより仁太、提灯を持ち、甚三郎、アラリ／＼と出て來て、花道にて

甚三　まだ龜井戸までは餘程あるか。

仁太　夜の道といふものは、はかのゆかないものサ。

甚三　家はどこぢや。

ト仁太そこらを見廻し

仁太　何だか眞暗がりで薄氣味の惡い。どうやら地獄の釜屋堀か。

甚三　ハテ、心ようない所ぢやな。

ト又メリヤスになり、向う揚げ幕より千日坊の幽靈、鐘を叩き、出て來て、本舞臺より花道へかゝ

る。仁太行きあひ

仁太　坊さん、早く參らつしやるが、淺草の觀音樣かえ。

坊主　イエ、方樂新田の燒場へ回向に。

ト甚三郎、腹の痛きこなしにて

甚三　こりや、どう致したか腹鹽梅が

仁太　エ。

坊主　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト鉦を叩き、向うへ入る。

仁太　ツイ地獄の釜屋堀と口が辷つたら、燒場へ行つた回向の坊主。これを思へば、庚申塚は六道の辻どうで三途の中川筋。

甚三　ハテ、いまはしい事。

ト又メリヤスになり、甚三郎仁太、本舞臺へ來る。また東の揚げ幕より、白無垢白帶、綿なかむりし女出て來て、花道の角にて行きあふ。仁太悧りして提灯を消し

仁太　アレ、幽靈だ〳〵。

ト逃げる。甚三郎見て

甚三　仰山な。白無垢を着た女おやな。

ト女も恟りして

女　骨あげに詣りまして歸ります者。どうぞお助けなされて下さりませ。

ト慄へる。

甚三　何も構ひはせぬ。

女　でも、お侍ひ様の、どうやらすつぱ抜き。

甚三　行けく。

女　劍の山を、オヽ怖々。

ト向うへ逃げて入る。

甚三　變つた辻占。

トまた腹の苦しきこなしにて

仁太　どうさつしやりましたく。

これは又ひどく腹が痛んで來た。疝氣のやうでもあり

ト甚三郎の側へ探りよつて、脊を撫つて介抱する。

甚三 グツと腹の力を押して

仁太 合點だ〳〵。

ト〆めたといふ思ひ入れにて腰から腹を撫りながら、懐へ手を入れて、香爐の箱を取らうとする。甚三郎押へ

甚三 こりや何をする。しつかりと介抱を

トいろ〳〵苦しみ

この苦しみでは、なか〳〵歩行は叶はぬ。何を飲んで身に當つたか。アヽ

ト苦しむ。仁太箱を持つて行かうとする。甚三郎、その手を取つて

コリヤ、介抱せぬか。

仁太 エヽ、面倒な。

ト莨婆屋の置いて行つた薪ざつぽを探り取つて甚三郎をぶんのめす。「ウン」と倒れる。三味線入り、褌のツトメになり、甚三郎、身動きならぬこなしにて

甚三 そちや、これまで介抱してくれたでないか。

仁太　欲しいから、ぶんのめしたのだ。

甚三　欲しいとは。

仁太　欲しい。

甚三　イヤサ何を。

仁太　これが欲しい。

トぶつてかゝるを、甚三郎苦しみながら刀を抜き、切り拂ふ。仁太飛びのき

抜いたな〳〵。

甚三　何か怪しき物を飲み合せ、腹の苦しみ、手足の痺れ、自由叶はぬ身なれども、與權ばたせば手前も只は。其方を一刀に

ト刀を杖に立たうとして、よろめきながら無性に切りまはる。仁太逃げ廻りながら、トヾ刀を叩き落す。甚三郎直さま脇差を抜いて切りつけうとして、立廻り、椽の端へ切りこみ、脇差抜けぬこなしにて口惜しきこなし。

仁太　室町から爰まで來たも、見かけつた懐の物。

甚三　ムウ、これか。こりや金ではないワ。

仁太　隱しやアがるな。

　トそこにある庭下駄を取つて打たうとする。甚三郎苦しみ、バッタリ落入る。ゴンと時の鐘。

なんだ此奴は、どうしやアがつた。

　ト探り見て、愕りして

こりやアどうだ。どこもかも冷たくなつた。此奴は骨折らずにくたばつたが、なんでも毒でも食つたと見えるわえ。

　ト甚三郎の懐より香爐の箱を出して、探り見て驚き

こりやア何だ。金だと思つたら香爐だ。さうだ。大方、墓場にある線香立ての香爐だんべい。いまく〳〵しい。

　ト稲村の方へ拋る。これにて香爐、寢てゐる十太にあたる。

十太　アイタヽヽヽヽ。

　ト起上がらうとして、よろめく。これにて仁太、下の方へ小隱れる。禪のツトメになり、東の花道より多四郎、序幕の形、ぱつちにて、行德德願寺といふ小田原提灯を持ち、出て來て、本舞臺より花道際まで來る。向うより七五郎、序幕の形、頰かむり、咬へ煙管にて出て來て

七五　早く今井まで行きたいものだが。

ト多四郎と行きあひ、悄りして

わりやア多四郎だな。

多四　うぬを捜がし尋ねてゐたが、よい所で逢うたわえ。

七五　おらア悪い所で逢うたと思ふ。

多四　さういふからは覚えがあらう。遠山さまの重器、本金五十枚の四方出の袖香爐の鑑定書、それを寄越せ。

七五　べら坊め、おらア知らないワ。

ト行かうとするを引っ捕へ、

多四　知らないといつて、香爐の鑑定書、取返さずに置くものか。マア、うぬが懐を

ト懐へ手を突こみ、鼻紙を引出す。

七五　それを遣つてたまるものか。

ト留めのアトメになり、兩人立廻りにて鼻紙を落す。

多四　寄越しやアがれ。

七五　南無三、書附けを落したわえ。

多四　ナニ鑑定書を

ト両人立廻りの中へ、十太、ノツ〳〵出て、三人立廻りにて、十太は香爐を持ち、下座へ入る。七五郎、鼻紙を取つて書附けを落し、向うへ駈け出す。多四郎、追ひかけ入る。仁太、香爐と聞いて恟りして

仁太　いま〳〵しいわえ〳〵。墓場の線香立てだと思つて、ぶツ抛つたが、あの書附けの事を思やア、大名の持つてゐた香爐だから、もしや本金とやらで、五十枚の香爐か。それだと猶腹が立つわい腹が立つわい。

トそこら中を尋ね

サア〳〵、無いワ〳〵。エヽ、いま〳〵しい。何にしろ、書附けを落した様子。大方爰らにあんぺい。

ト書附けを探り拾ひ取つて

よし〳〵、これからこれを持つて随徳寺とせう。さうだ。

ト書附けを懐中して向うへかゝる。時の鐘にて、向うより三重襷の提灯を附けたる四つ手駕籠を擔

ぎ、鷲昇早足出てくる。仁太、花道にて行きあひ、思ひ入れあつて摺れ違ひ、鷲昇は舞臺へ來て、死骸を見て、恟りして

鷲昇　ヤア、人が死んでゐる〳〵。

ト騒ぎ、駕籠を捨て、逃げて入る。仁太見送り

仁太　べら坊め。

ト ふり向く。チヨン。

恟りしたわい。

トきざみにて、扉のツトメになり、ひやうし

幕

ト仁太向うへ入る。シヤギリ。

四幕目

平野町の場

役名 ——平野町の雲兵衛、木屋文藏、雲兵衛妹、お雛、十右衛門女房、おさく。半ぎらの之助
下女、お六き。同、お米。丁稚、三太。同、寅松。同、徳松。町人、九兵衛。駕し男、八兵衛。

盗人、遠州の九助。

本舞臺、三間の間、上の方障子、その前に机の上に甲斐絹の風呂敷に前幕の上下を飾り、結構なる膳椀にて蔭膳据ゑあり、下の方、誂らへの黒格子、軒に初午の提灯吊し、門口の外、出入りの路地口爰にも長屋中といふ行燈。すべて平野町木屋の宅、初午の鳴り物にて幕明く。

ト爰におふき、お米、下女の體。布子、花色股引の三太、初午の繪馬と延喜の百兩を持つてゐるを、寅松、丁稚にて引附け、喧嘩してゐる。皆々捨ぜりふにて留めてゐる。

ふき　これはしたり、また朋輩喧嘩か。

よね　旦那樣へ聞へたら、大抵な事ぢやあるまいぞえ。

兩人　靜かになさんせ〳〵。

三太　この三太丁稚が差出をしたと、なぜ旦那へ云ひつけるといふのだえ。

寅松　云はいでは。若旦那のお使ひに出て、此やうな繪馬や、延喜の百兩を持ち歩いて、なぜ稻荷講を集めて歩くのだ。それで旦那へこの通りを、云はうといふのだが何とした。

三太　それが惡いわえ。打ッちやつて置きやアがれ。

寅松　まだそんな業態を

よね　ハテ、あの三どのには構はつしやるな。

ふき　したが、そりやこなさんが悪い。なぜお使ひ先で、稲荷講を集めるのぢや。ちと嗜まんせ。年にも恥ぢて

三太　ナニ年に恥ぢるものだ。調子はおらが親方だもの。

ふき　まだ減らず口を

寅松　それ〳〵、人をひよそらかしさんすわな。延喜の百開も、その絵馬も、寄越さつしやい。

三太　エヽ、否だい。

ト争ひゐる。矢張り初手の鳴物にて、向うより八兵衛、やつし股引、遊し男にて、スタ〳〵と出て来り、門口を窺ひ

八兵　モシ〳〵、若旦那様はお留守かえ。

ふき　アイ、文蔵さんかえ。

八兵　左様でござります。

ふき　アイ、今までお内であつたが

トおろ〳〵見廻す。

八兵　ヘエヽ、お留守かな。

ト寅松を見つけ

コレ、兄さん〳〵。

ト招く。寅松呑みこみ

寅松　アノわしか。

ト門口へ出る。八兵衞、ソツと文を出し

八兵　コレ、この文は、お宮さんから、急に若旦那へ屆けるのだ。ソツと頼みます。

寅松　慥かに受取りました。

八兵　兄いどの、頼みましたよ。

トまた鳴り物になり、引返して入る。寅松、文を懐へ入れ、内へ入る。おふきヂロ〳〵見て

ふき　コレ、寅松どん、ありや何處のお人ぢや。そしてこなさん、いま門口で、何を受取らんしたのぢや。

トこのあたりより障子を明け、お賤窺うてゐる。

寅松　サ、こりやアノ

トうぢ／＼して

ト、それ／＼、あの清川町の裔のお師匠様から、旦那へ謡講の事について、來たお手紙ぢやわいの。

ふき　そのお手紙なら、見せなさんせ。

寅松　イエ／＼、若旦那へ、このやわしが、渡しに申すわいの。

ふき　マア／＼、ちやつと見せなさんせ。

寅松　ハテ、わしがあけるわいの。

トおふき、手紙を見ようとし、寅松が懐より引出すを、捨ぜりふにて見せまいとする。お米もこの中へ入り留める事。トヾおふき、手紙を取つて

ふき　お殿さまへ、ふやし……ヱヽこれは……これをアノお嬢さまへ

ト行かうとして、フツとお嬢と顔見合せ

ヤ、お嬢さまかいな。

しつ　其方衆は、何をマア其やうに

ふき　モシ〳〵、お聞きなされませ。いま此やうな文を、持つて來た者がござりますから、そこでわたしが取つて置きました。ちやつと御覽じませ。

寅松　アヽコレ、それは

　ト思ひ入れ。おふきは文をお賤に渡す。お賤は宛名も見ずに、こなしあつて

しづ　これはしたり、ふきとした事が。どこからどこへ來た文やら、それを何でわしが見たとて。コレ寅松、其方の屆けるお方へ、お渡し申しや。

　ト文を投げる。寅松取つて

寅松　ハイ、それで私しも落ちつきました。

ふき　エヽ、お氣の弱いお賤さま、何であらうと其マア文を、御覽じてもようござりはするわいな。

　トその時障子の内より文藏出かゝりゐる。

しづ　ハテ、外のお方へ來た文ではない。文藏さまへどこやらから、これ見よがしの女子の文。なんの見るには及ばぬ事。ゆく〳〵女夫になつたとて、末の遂げぬ事ならば、いつそ今から。

文藏　愛想盡かさば盡かす氣で、この入り聟の文藏を、杯もせぬ其うちに、こりや長棹とやる氣だの。

しづ　エヽ。お前は文藏さま、長棹とやらは、何の事でござんすえ。

文藏　長棹とは、船に使ふ長い竹サ。實に此方は鼻の下の、長い竹ではなうて大だわけ……コレ、寅松、
その文を寄越せ。

寅松　ハイ。

トうろ／＼する。

文藏　エヽ、寄越せと云ふに。

ト文を取つて

コレ、寅松、われは今におれが出る時、供に連れて行くぞ。支度をして待つてゐろ。

寅松　ハイ／＼

ト氣の毒な思ひ入れ。

文藏　エヽ、早く行つて、髮でも結つて來ないか。

寅松　ハイ／＼、畏りました。

ト門口へ出て

髮結ひどんは居りませんかえ。

ト向うへ入る。お龍思ひ入れあつて

しづ　モシ、文藏さん、何ぢややら此あひだは、わたしの影さへ見なさんすと、耳にかゝるねすり言。わたしへの當りでござんすか。仰しやる事があるならば、きつぱりと仰しやりませいな。

文藏　ハテ、きつぱりと云はれぬが、養子の悲しさ。祝言はせぬが、末々こなたと養子合せ。文藏は小糠三合、お賤どのは實家の子。

しづ　イエ〳〵、家の子ぢやと仰しやつても、わたしも矢ツ張り他家の娘、四つの年にお内へ養子、御恩になつても女子では、家は立ちませぬ。それよりはお前さんは、馴染んでござんす藝者さんと一つになつて木屋のお内を

文藏　コレ〳〵、さう云ふのが、こなさんの詞に針があるぞえ。

しづ　なんの針がござんせう。わたしや眞實の所を申しまするわいな。

文藏　イエ〳〵、この頃はこなさん、氣儘になつたよ。氣儘に。

しづ　何がわたしが氣隨氣儘を申しました。お前こそ何ぞといふと

文藏　どうしました。何を云ひました。

ふき　ハテ、ようござりますわいな。

しづ　イエ〳〵、云うても大事ない事ぢやわいの。

よね　お鎭まりなされませいな。

ト捨ぜりふにて留める。この時奧より德兵衞出て來り、この中へ入り

德兵　これサ〳〵、見世先で、妹も文藏さんも、近所へ對して外聞が惡い。マア〳〵、靜かにしやいの。

文藏　イエ〳〵、私しは何も申す事はござりませぬが、モシ、親仁樣、お前も御存じの、あの仲町の宮が事から起りまして

德兵　エヽ、あの藝者の事から。コレ妹、ありやお主がよう知つてゐる藝者ぢや程に、必ず〳〵悋氣がましい事を

しづ　イエ〳〵、何も悋氣は致しませぬが、今も今とて先樣から文が來たのを、わたしが讀せと云ひもせぬのに、樣々な事を云うて。

文藏　ハテ、この文は、嫌味のある文ぢやアないよ。

しづ　色氣があらうがあるまいが、それをわたしや、決して悋氣は致しませぬわいな。

ふき　エヽ、お娘さま、悋氣をなされませいな。若旦那は仲町の大滿屋で、あのお宮さんとやらいふ藝者さんの

德兵　これサ、わいらも側から其やうに、役にも立たぬ事を囃て散らして……コレ〳〵妹、今日はマり

でもないぞや。去年の暮にお屋敷を下がつてから、尼になりたいの、イヤ坊主になりたいのと、おぬしが願ひ。それをどうぞ止めさせやうと、十右衛門の弟、爰にゐる文藏を、養子合せに貰うたも、家を譲つて徳兵衛は、樂に暮らさうおれが願ひ。おぬしもおれに義理を思はゞ、氣隨氣儘をやめにして、爰にゐる文藏と、ならう事なら祝言して

しづ　イエ／＼、そりや御免なされて下さりませ。わたしがあなたを、嫌ひまするといふではなし、わたしや一生、男を持たぬ、願籠めを致しました程に、どうぞ只今までお勤め申したお屋敷へ、御奉公にあげて下さりませ。

文藏　これサ、お賤どの、こなさん、わしを嫌ひはせぬと云はしつても、一生男は持ちませぬ、又お屋敷へ奉公にあげてくれとの、願ひが矢ッ張り嫌うた證據。この文藏こそお内を出まして、兄の所へ

ト立上がる。

ふき　アヽモシ、お待ち遊ばしませいな。

文藏　イヤ／＼、留めるな／＼。わしこそ入り聟。出た跡では好いた男と

しづ　エヽ、そりやお前さんの事ぢやわいな。好いたお方があればこそ、藝者さんからその文が

徳兵　ハテ、若い者ぢや、遊び先から文も来いでは。それほど疑がやるなら、文蔵、その文を娘に見せてやりやいの。

文蔵　サ、見せましても大事はござりませぬが、内には香爐の二百両、極印のある金を、あの宮居から取戻したかと、宮が尋ねの

徳兵　ナニ、極印の二百両とは。

文蔵　サ、極印の……どうで極印は紛しには、お内を出さねばなりますまいよ。

徳兵　そりや何で。

文蔵　ハテ、お賤どのに疑はれましたから。

しつ　イエ〳〵、わたしや袖には致しませぬが、お前こそその文を、見せさんせぬが、矢ッ張りわたしを疑ひなされて

徳兵　これはしたり、二人が二人、イヤお前が疑うた、イヽヤこなたが疑つたのと、いつまで云つても同じ事だ。取分けて文蔵は、コレ〳〵お杉、そこにあるお上下を持つて来い。

よね　ハイ〳〵。

ト障子の方に飾りある衝立の上下を持つて来る。徳兵衛取つて

徳兵　コレ文藏。このお上下は仲町で、殿甚三郎さまより其方が拜領。それといふも、十右衛門の所から、おぬしが持參の二百兩、その金が殿樣の、お役に立つて香爐の質請け、御前の御意に叶うた文藏。その殿樣のお行くへも、今日も知れぬと聞いたゆゑ、お身に恙のないやうに、又は御恩のあるお方と、アレあの通りに蔭膳まで。

文藏　サ、それ程までに、御恩を思ふ殿樣の、今にお行くへ知れぬのも、もしも香爐を質請けの、金の事から、ひよつと又

徳兵　コレ、あの金は、おぬしが持參の二百兩、それがどうした。

文藏　サ、その金がこの身の幸ひ、殿のお褒めのお詞に、それなるお召しのお上下、

徳兵　拜領の文藏は、冥加もない仕合せ者。おぬしが光りでおれまでも、お出入り仲間で肩身が廣い。コレ、十右衛門の所へ歸るといふ事は、必ず云ひ出してもくりやるなよ。

文藏　そりやア有り難うござりますが、何を申すも家の子の、お賤どのが

しづ　イエ／＼、わたしにお構ひなされまするな。お屋敷の御奉公が致したいとは、こりや眞實わたしが願ひでござんす。決して文藏さんが嫌うて申す

徳兵　サ、嫌はぬものなら、折角下がつた屋敷勤め、また御奉公に上がる事は

しづ　それおやと申して、こりやわたしが願ひでござりまする。

徳兵　ハテマアてまへも、情の剛い。

　ト爰にて暮れ六つの鐘鳴る。

ふき　オヤ〳〵、もう暮れ六つだ。三太どの、行燈ともさんせ。

三太　アイ〳〵。

　ト障子の間より丸行燈を灯し來る。

徳兵　アヽ、もう暮れるか。また例の俄盲目にならねばなるまい。コレ、妹も文藏も、眼病のおれが願ひだ。何事もおれがコレ、鳥目にめで、

　ト思ひ入れ。

文藏　さう仰しやれば私しは、どうなりとも。

徳兵　妹も智慧が

しづ　アイ。イヽエ、わたしやどう仰しやつても

徳兵　氣隨氣儘を

しづ　兄さん、堪忍して下さんせ。

徳兵　エヽ、勝手にしろよ。

ト唄になり、徳兵衛腹立し思ひ入れ。お賤もツンとして捨ぜりふ。おふき、お米、差寄つてなだめる。この唄なかり、向うよりおりく、袖頭巾、前帯、女房の拵へ。供の男一人、ヽ、葛飾といふ小提灯を持ち出て來り、門口へ來る。路地により若い者出て、路地の行燈へ灯をともし入る。おりく、こなしあつて

りく　コレ長八、ちつて隙が取らうほどに、其方はアノ御勝手へ行て待つてたも。

供男　ハイ〳〵。畏りました。

ト提灯を持ち、路地へ入る。

りく　ハイ、りくでござりまする。御免遊ばされませ。

ト内へ入る。

よね　ヤヽ、あなたは十右衛門さまのお内儀さま。

徳兵　おりくどのか。

文藏　姉御だやアござらぬか。

りく　オヽ、文藏どのかえ。

儀兵　夜中に、ようございました。サヽ、早うにあれへ。

りく　ハイ、御免なされませ。

ト行かうとして

お前はお賤さまかえ。

しづ　ハイ、左様でござりまする。

りく　これはマア、お噂ばかりで、お初にお目にかゝりました。何かとマア、連合ひの弟御文蔵どのが

文蔵　エヘヽヽヽヽ。

ト此にて、言ふなきこなし。お賤、モヂ／＼する。おりく、合點のゆかぬ思ひ入れ。儀兵衛氣の毒なる様子にて

儀兵　コレ／＼、文蔵、折角おりくどのがござつて、話しもあらうが、おれが代りに、あの永端町まで行つてくりやれ。夜に入つちやア盲目だ。モシ、お内儀、聞きなさいまし、この頃鳥目を煩らひまするよ。

りく　エヽ、鳥目故かえ。そりやマア、御不自由でございませう。コレ、文蔵どの、お前、氣を附けてあげなさんせえ。モシ、お賤さん、ほんにお目にかゝるは初めてなやが、よい御器量なやわいな。

ホヽヽヽヽ。

文藏　モシ、永堀町は、會所へ參りまするのかえ。

德兵　オヽ、今夜はいつもの參會、おれが行くのだが、この眼病ぢやア行けまい。代りにおぬし、行つてくりやれ。

文藏　心得ました。モシ姉御、話しもありますが、わしは親仁さんの名代に、會所まで行つて來ます。ゆるりと話してござりませ。

りく　ほんに、わたしも、こなさんには少と用もあつて……アイヤ、外の事でもないが、この頃は俄にこなさん、氣隨氣儘を

ト思ひ入れあり

サ、さういふ噂を聞いたゆゑ、こちの人が名代に、わしに行つて、弟が心意氣も聞いた上、あのお賤さんにも、物事をようお頼み申して來やと、十右衛門どのゝ名代ながら、德兵衛さま、わざわざと參りましたわいな。

德兵　それは御苦勞。折角のお出でながら、文藏は、よんどころなしの名代に、やらにやアなりませぬが、マア〳〵、ゆるりと話してござりませ。其うちには文藏も、ツイ行つて來ませう。コレ三太、

提灯を持つて附いて行け。

文蔵　イエ〱、提灯には及びませぬ。

ト此うち三太、近藤の百両を手早に取つてゐる。

徳兵　イヤ〱、暮れたではないか。提灯を持つて行かつしやれ。

文蔵　イヽエ、まだようござります。

ト門口へ出て

左様なら私しは、行つて参りまするが、コレ、お殿との、必ずこの文を麁末に思はぬがよい。ハテ、おれもお主やつと〱と、不思議な縁での養子合せ。持参もわづか二百両、殿のお役に立つとはいへど、兄十右衛門から添へて寄越した金なれば、随分お触れの四つ石の

ト云はうとする。

徳兵　ナニ四つ石。

文蔵　アイサ、四つ前には帰りませうよ。

いく行つてござんせ。

文蔵　アイ。姉御、読んでござりませ

ト唄、時の鐘にて、思ひ入れあり、向うへ入る。

りく　アヽ、暗い晩ぢやになア。

徳兵　モシ、提灯を持つて行きましたらうね。

三太　イエ〳〵、若旦那様はお一人で

徳兵　大だわけめ。附いてうせぬか。

ト三太うろたへて、延喜の百兩ばかり持ち、一散に向うへ入る。

ふき　エヽ、子供といふものは、あれほど大旦那様が、提灯をと仰しやつたに

ト小箱提灯そこらにあるを見て

オヤ〳〵、怪しからぬ。矢ツ張り爰に提灯が

徳兵　持つてうせぬか。エヽ、あの丁稚めが。

ト氣をいらち、思ひ入れ。

ふき　イエ〳〵、まだそこらに居りませう。コレ、三太どの、コレ、提灯があるわいなう。

ト初午の囃子にて、おふき叫びながら向うへ駈けて入る。

しづ　モシ〳〵、兄さん、どうぞわたしを、今日も願うたお屋敷へ、今宵あけて下さんせ。

德兵　すりや、譬への壁に馬を乘りかけたやうに、今から屋敷へあがりたいといふのか。

しづ　さうぢやわいな。

德兵　勝手にしろ／＼。もう／＼妹を持つたとは思はぬ。サヽ、今から行け／＼。

　　ト お睦を外の方へ突きやる。

よね　アヽモシ、左樣になされましては。

德兵　ハテ、捨てゝ置け／＼。これはお内儀、折惡う御挨拶もろく／＼に

りく　イエ／＼、お構ひなされまするな。ちやが、こりやお前さん、よく／＼な事で……コレ、お睦さん、兄御さんにお氣を揉ませ申しては

德兵　イエモウ、この間は取分けて、氣隨氣儘に

りく　アイ、その樣子も承りまして、それゆゑわざ／＼來ましたも、短氣になつた文藏どの、又はお睦さんの心意氣も、聞かうため。お前も御存じの通り、文藏とのは、わたしが連合ひ、卜右衛門の弟御。去年の冬、ふとした事で相手から、預かり金の三百兩……アイヤ、無理に借つたあの金を、附けてお内へ聟養子、一つとお前の氣に入らぬ

しづ　アヽモシ、決してわたしや氣に入らぬの何のと、さうした事ぢやござんせぬ。これには深い

りく　サ、譯が無うてはならぬ事。そこは女子は女子同士。モシ、徳兵衛さん、お賤さんの事は、わたしにお任せなされませいな。

徳兵　それ程お前が深切に、云うて下さる事ならば、いづれよろしう

りく　マア〳〵、お任せなされませいな。

しづ　モシ、おりくさん、お初にお目にかゝつたお前、あなたの方に縁のある、文藏さまを

りく　ハテ、氣遣ひしなさんすな。わたしや野暮にもしなさんせ、行き渡つたこちの人、まんざらな事もしやんすまい。モシ、徳兵衛さん、左樣ぢやござんせぬかえ。

徳兵　成る程、あの卜右衛門どのに連れ添ふこなさん、妹が事を賴まばとて、よもや味方見苦しい

ト思ひ入れあり

そんならお内儀、賴みました。

りく　必ず御苦勞になされまするな。

徳兵　忝うござります。コレ、米や、白魚でも取りにやりや。

よね　ハイ、お吸ひ物など拵へませうわいな。

りく　イエ〳〵、お構ひなされまするな。

德兵　ハテ、今になつて初めてぢや。わさつと寄を

りく　また案じまするわいな。

德兵　ハテ、有り合せた寒玉子。ほんに、獨活の取つたのがあつたか知らぬ。

ト唄になり、德兵衛、鳥目の思ひ入れ、お米介抱して、障子の内へ入る。あと合ひ方、お靜、手持ちなう思ひ入れ。おりく差寄り

りく　モシ、お靜さん。今宵わたしが參つたは、あの文藏どのがこの間、病氣になつてお前との、仲が悪いといふ噂。アヽ、そりや困つたものぢや、女夫にならぬ前方に、互ひに仲が悪うてはと、十右衛門どのも、いかう案じてゐらるゝゆゑ、イエ〱、そりやわたしが行て、これまでお目にはかゝらねど、お靜さんに逢うて、文藏どのゝ事も、詳しうわたしが頼みましてと、來て見たところが、却つて今ではお前の事を。モシ、お靜さん、女子同士のわたしぢや程に、必ず隠しなさんすな。お前が其やうに、男を持ちともないと云ひなさんすは、こりやてつきりお屋敷に、御奉公の其うちに、女夫約束しなさんした、外に男がござんせうがな。

ト　お靜恥かしさうに

しづ　おりくさん、お前が其やうに云うて下さんすりや、成る程わたしや

ト思ひ入れ。

りく　ハテ、恥かしい事はござんせぬ。ちやつとわたしに話しなさんせいな。誰れしも有る事ぢやわいな。

しづ　アイ、さう仰しやれば、何をお隱し申しませう。御奉公の其うちに、ふつと見染めて末々は、このお方なら女夫にと、思うたお方が……ォ、恥かし。

りく　さうでござんせう〳〵。

しづ　したが、現在養子合せの文藏さん、その兄御樣十右衞門さんの、お顏は知らねど、今にもお聞きなさんしたら、弟を嫌ふわたしゆゑ、お腹立ちもあらうし、わたしや、怖うて〳〵。

りく　ハテ、その位な事は面々に覺えのある事、身につまされて、無理な事とは思はねど、してマア、先のお身はえ。

しづ　サ、そのお方の、お名も存じて居るけれど、そりやお屋敷に奉公なされてござんす時、今は町家に住居して

りく　して、その所はえ。

しづ　存じませぬわいなア。

りく　エヽ、お前、知らぬのかいな。
しづ　アイ、この程、思ひもよらぬ所です、そのお方にお目にかゝつたわいな。
りく　エヽ、逢ひなさんしたかえ。その時父、なぜに聞きなさんせぬぞ〳〵。
しづ　その時も父、折惡う月に叢雲、あたりの人目、さりながら、これをわたしに下さんした、この折本の主さんに、この程逢うたゞ一目切り、嬉しいあとのにツイ恥かしい、たつた一度。

ト恥かしいこなし。せりふの内、守の中より折り本の花暦を出す。この時外の書き物も落ちかゝる。

おりく、本を取つて

りく　まだしもお前、そりや働きをしなさんした。ホヽヽヽヽヽ……アヽ、こりやコレ花暦ぢやござんせぬか。アノ、これを先のお方が
しづ　アイ、大事に持つて居りまするわいな。
りく　モシ、お嬢さん、聞けばお前も惣兵衛さんとは、違うた兄弟といふ噂。してマア實の親御さんは今では音信不通かえ。
しづ　サア、その父さんには二つの年に別れ、身寄りの方にかゝり人。四つの年に今のお内へ、それから只今に御奉公。母さんはその砌りお果てなされ、親類とても無い身の上。姉さん一人ありとはい、

六幕目



七幕目大切



へど、小さい時に別れたゆゑ

ト此せりふの內、おりく思ひ入れあつて

りく　モシ〳〵、お賤さん、そんならお前は二つの年に、父さんに生別れと云ひなさんすが、その父さんが、もしやお前に、親御の家名實名を

しづ　守に書いた生れ年月、しかも在所は梅澤の

りく　エ、アノ梅澤の生れとあれば、その父さんは醫道の世渡り、苗字は尾崎

しづ　アイ、昌庵娘と書いた書き物。

りく　エ。わたしも爰に父さんの、今の形見のこの書き物。

しづ　エ。

ト兩人守の中より年月の書き物を出し、互ひに取替へ見て

りく　千葉の家中、尾崎昌庵娘お賤。

しづ　おりくさんは實の姉さん。思ひがけない

りく　變つた緣で

ト顏を見詰めて思ひ入れ。

しづ　知らぬ事とて

ト縋り寄る。

りく　オヽ、尤もでござんす。

ト兩人よろしく思ひ入れ。唄になり、五つの鐘、拍子木の音。これにて道具廻る。すべて油堀のあたり。よき本舞臺、三間の間、向う見らす重びし住ひ、土藏、天水桶、うしろ黒幕。時分より新竹の鳴り物に繋り、道具とまる。

ト仕出し四人出て來り

仕一　今夜は好い宵宮でござるの。王子はさぞ賑はひませう。

仕二　左樣でござらう。わしらは明日は、半田へ參りまする。

仕三　それはようござらう。わしは眞崎稻荷樣へ願ほどきがござつた。

仕四　御一緒に參りませう。

皆　サア、ござれ〳〵。

ト安艮り寄り揃になり、仕出しは向うへ入る。東の口より文藏、スタ〳〵と出て來り、舞臺へ來て

文藏　アヽコレ、どうぞ金兵衛に逢つてと、會所の用もそこ〳〵に、あの男が居さうな所を尋ねてあるくも、どうぞ騙して先達て、香爐を請けた二百兩、極印のある持參の金を、取返さねば跡の難儀と、話しておいたお宮の方から、金の都合が出來たかと尋ねの文。先刻に内で親仁様が、矢張りお賤が心の濟むやう、見せるがよいと云はしつたが、極印の金の事、書いてあるこの文

ト出し

この文言からひよつと又、親仁様のお案じと、それゆゑあの場で見せぬのも

ト思ひ入れあり

アヽ、コレ、どうぞ金の工面が……オヽ、それ〳〵、爰から直ぐに干鰯場の、友達の所へ行つて是非と云つたら、ひよつと工面が……ドレ、相談して來ようか。

ト流行り唄になり、文藏花道へかゝり、向うへ入る。直ぐに聖天になり、下座より三太、延喜の金を持ち、徳松、丁稚にて附いて出て

徳松　コレ〳〵、三太どの、延喜の金を何にするのだ。

三太　これか、こりやア爰へ落して置いて、通りの者に拾はせて置いて遊ぶのよ。

徳松　コレ、貴様は若旦那のお迎ひに出たのぢやアないか。

三太　それがどうした。

逸松　それにマア、遊んでゐずと、早く行かつしやいよ。

三太　行かうが行くまいが、おれが勝手だ。打ッちやつて置きやアがれ。

逸松　なんだ、置きやアがれだ。

ト両人捨ぜりふにて争ひ、金を捨て、下座へ入る。向うよりおふき、留守居提灯をともし、出て来り

ふき　あのマア三太めは、どこへうせた事ぢややら。たうとうわしに箱提灯を持たせて。どこの国にか嫁御前のあられもない、女の提灯持つとは、エヽ自然たい。

ト本舞臺へ来て、右の金に躓みかけ、灯にて見つけ

——これやコレ慥か百両包み。

トこの時、ドロ／＼、御作の太鼓を打つ。おふき惻りして口をふさぎ、思ひ入れ。釣るなく／＼の合ひ方になり

オヽそれよ。僑八閣、盛衰記の梅ヶ枝は

ト思ひ入れ。向うより寅松出て来り

寅松　髪結ひさんに頼りませんかえ。

トうかく舞臺へ來り、おふきに突き當り、兩人顏見合せ

ふき　貴樣は寅松どんぢやァないか。

寅松　ハア、おふきどんだの。

ふき　エヽ、この子は愕りしたわな。

寅松　おれも愕りしたワ。さうしてこなたは夜夜中、どこへ行くのだ。

ふき　エヽ、口巧者な。貴樣こそ、先刻若旦那のお供を云ひつかつて、どこを遊んでゐるのだ。

寅松　おらァ髮結ひどんを探すのだ。

ふき　エヽ、夜夜中ナニ髮結ひどんが歩くものか。そんな事を云はずと、この提灯を持つて、早く若旦那のお迎ひに行かつしやい。

寅松　そんなら、この提灯を持つて迎ひに行くのか。

ト提灯を取らうとして、おふきが持つてゐる金へ思はず手をかけ

オヤ、こりやァ金ぢやァないか。

ふき　アヽコレ、この金は

寅松　こりやァこなたは、駈落ちをするのだの。

ふき　エヽ、何のこつたな。

　　　　ト振り切る。

寅松　そんなら旦那様にこの事を

　　　　ト行きにかゝる。

ふき　アヽコレ。

　　　　トとめる。

寅松　エヽ、放さつしやいな

ふき　イヤ、とめたく、とめたわいなア。

　　　　ト聖天になり、両人草摺りやーのおかしみよろしくあつて、ト寅松、金を持つて花道へかゝる。おふさ、これを追ひかけ、花道にて立廻り、右の金を落し、両人向うへ入る。引返して門口より丸兵衛、羽織股引、町人の拵にて、提灯を提げながら出る。跡より三助、手拭をかむり、荷ひの形、草鞋下駄にて、そろ／＼出て来り、よき所にて行きあひ、思ひ入れあつて

つる　モシ／＼、あなた様、ちよつと御無心がござりまする。

丸兵　なんだ、御無心だ。暗闇から女の声で、胸をさわがせたが、用は何だえ。

つる　ハイ、別の事でもござりませぬが、私しは長々煩らひました亭主と……ツイ別れまして、母親一人養育いたし、それも病人。申し兼ねましたが、朝夕にさし詰まりまして、斯様に女子の恥かしい御無心。お人柄を見かけてお願ひ申しまする。どうぞ御合力をお願ひ申しまする。

九兵　アヽ、そりやア氣の毒な事でござるの。併し、持ち合せはなし、折角女中の無心に、アヽコレ、どうぞして進ぜたいものだが

トいろ〱して、紙入れより二朱一つ出し

まんざらでもない女中の、暗闇での無心は、よく〱な事と思ひます。コレ、かみさん、爰に持ち合せの兩一、少ないが小遣ひにでもさつしやるがよい。

ト渡す。お鶴取つて、九兵衛の手をキツと握り

つる　これはマア、有り難うござりまする。

ト會釋して手を握る。九兵衛、ブル〱して

九兵　ハテサテ、こなさんは、病人の阿母の看病とは、アヽ親孝行な。殊に暗がりなり、この手の身當さ。顔はしかとは解らぬが、どうやら濱村屋といふ代物。惜しいものぢやが、アヽコレ、此のままにして置くは、ハテサテ殘念。いつそ上づつたわい。

ト小氣味惡い思ひ入れ。殘り多い體にて、流行り唄になり、向うへ入る。お鶴跡見送り

つる　南鐐一片。ア丶、無えにやアましか。

ト懷より襟に掛けたる財布入りの二百兩を出し、この中へ打込み

ア丶コレ、どうぞ二百兩の都合に拵へたいものだが。おつりきな代物がか丶ればいゝが。

ト向うの方を見て思ひ入れ。矢張り初午の鳴り物、時の鐘。向うより按摩、黒木綿の頰かむり、頭巾、羽織、やつし一本差しにて、杖を突き、出て來る。お鶴窺ひ見て、そろ〳〵と差寄り。

つる　モシ〳〵、申し兼ねましたが、

トしなだれ寄る。

按摩　按摩鍼の療治。

ト一文笛を吹き、下座へ入る。お鶴呆れて

つる　エ丶、氣が違つたさうな。

ト流行り唄、時の鐘になり、つぶやきながら下座へ入る。矢張りこの唄なかり、向うより文藏、引込して出て來り、花道にて、

文藏　ア丶コレ、間の惡い時といふものは、どこへ行つても出まして留守。斯うなると、友達でも留守

を使ふものだて。ア、コレ、どうぞ金の工面が

ト矢張り唄にて、舞臺へ來り、落ちてある延喜の金に爪づき、透し見て

何だか落ちてあ　が。

ト蹴つて見て、思ひ入れあり、ソツと取上げ、思ひ入れあつて

エヽ、いま〱しい。金の工面の最中に、延喜の金を拾ふとは、こりやァ何奴か、おれを焦らす爲にしたのだな。根性が僻んで居れば、猶々腹が立つて、エヽ。

ト捨てようとして思ひ入れあり。

イヤ〱、延喜の金でも形は小判、暗闇で拾ふとは、これが延喜か、捨てるでもねえわえ。

ト左の袂へ入れる。この時お鶴、財布の紐を締めながら出て、後に窺ふ。

ア、暗い晩だ。ドレ、更けねえ内に佐賀町まで、もう一軒相談して。

ト下座の方へ行かうとする。

つる　ハイ、あなた樣、ちつとお願ひがござりまする。

ト左の袂を捕へる。袂の中に延喜の百兩あり。お鶴これを探つて思ひ入れ。文藏透し見て

文藏　女の聲で暗闇から、願ひとは何だえ。

つる　ハイ、別の儀でもござりませぬが、私しは亭主に死なれまして、その上一人の母が大病ゆゑ、詮方なさに御覧の通り、夜に入つてから往來のお方樣へ、お袖に縋つて御無心申しまする。どうぞ御合力をお願ひ申しまする。

文藏　アヽ、なにか、親の爲の袖乞ひか。して、御亭主も、死なれたと云はつしやるの。

つる　左樣でござりまする。世に賴みない、女やもめでござります。

文藏　ハテ、それやア氣の毒な。して、どこのお人だ。

つる　ハイ、この近所の者でござりまする。

文藏　近所はどこだえ。

つる　アイ、平野町と申す所の者でござりまする。

文藏　エヽ。アノ平野町の

　　トいろ〳〵透し見て

ハテ、それやア氣の毒な。今日の生活に盡きて、若い身空で袖乞ひの、誰にどうやらまんざらな生れつきでもない女中。ハテ、よく〳〵な。

つる　アイ、御推量なされて下さりませ。

ト文藏が袂に縋り、しなだれるうち、延喜の金の目方を引いて見る思ひ入れ。

文藏　此方もちつと入用な、先立つ物は金の事と、身につまされてお互ひに、アヽ、氣の毒に思ふばかり。お恥かしいが折惡く、

つる　イエモウ、その御深切は、受けましたも同然。折ございませうなら、また重ねてなりとも。

文藏　アイヤ、進ぜる程はござらぬが、二朱や三朱の事なれば。

つる　少々なりとも、なんの否とも申しませう。

文藏　待ちなさい。

ト紙入れを探し、一分を一つ出し

お恥かしいが心ばかり、取つて置かつしやりませ。

ト差出す。お鶴その手を取つて

つる　僅かなお錢を貰ひたく、この暗がりでの袖乞ひに、こりやコレお金を。エヽ、有り難うございりまする。

ト手をしつかと握り、思ひ入れ。この時お鶴、帶に狹みし二百兩の財布ブラリと下がる、文藏フツと手をかけ、貫目を見て

文藏　一錢二錢の合力受けて、身すぎする袖乞ひ女、思ひがけない財布の金。慥かに量も

つる　エ。

ト懐へ入れる拍子に、握りし手を放す。文藏、ヂロ／＼見て

文藏　まだ宵闇の星あかり、その面ざしも物ごしも、袖乞ひしさうな風でもなし、どこか如才の無ささうな、道樂者の女房と、見えるお前のその風體。して、平野町は、ぬしの内かえ。

つる　アイ、木屋と申しまする地主の借家。夜の出入りは新道から、この間移りましたわいな。

文藏　エヽ、この間越したのか。そんなら木屋の、アノ借家に。

つる　アイ。御存じかえ。

文藏　アイヤ、知つたでもなし、知らぬでもなし。かみさん、ほんにこなさん、獨り身か。

つる　アイ、疾からやもめの獨り棲み、

文藏　誘ふ水あらや誘はれる、仇な身持ちに爰へ出て

つる　しみたれ女房の袖乞ひを、なんの、どなたが

文藏　相談するいナ。

つる　エ。

文藏 當時女に凹まされ、御緣の揉める出合ひ頭。女の世話がして見たいの。
つる そりや嬉しいが、お前、わつちを……イヽエ、わたしをお嬲りかえ。
文藏 イヽヤ眞實。嬲らぬ證據は、コレ。
ト後より抱きつくとて、懐の二百兩を探る。お鶴も文藏の袂の百兩が手に觸るゆゑ、兩人一度に思ひ入れあり。
つる わつちが内へ、
文藏 ヤ。
つる アイヤ、わたしが内へ。
文藏 行つてもよしか。
つる 誰れに遠慮が
文藏 亭主に遠慮サ。
つる エヽ、憎いなう。
ト寄添ふ。
文藏 闇で仕合せ。

つる　眞の事だよ。

ト押へ。時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、向う屋體、下の方に竈、荒神棚に札守、臺所道具をかけ、棧無しの疊を敷き、上細見圖を掛けたる置き炬燵。破れ行燈を灯し、門口に錠をおろし、路地の出入り。この見得にて道具とまる。

ト内に越州の久助、古き[illegible]の[illegible]子を着て、置き炬燵にあたり、茶碗酒を飲み、蛸の足を噛つてゐる。つる、文蔵、花道の附際へ来り

つる　モシ、爰でござんすわいな。

文蔵　アヽ、爰がお前の内か。

つる　アイ、お恥かしい、裏家も同然。

文蔵　入つて話さうわな。

つる　ちつと待ちなさんせ。

ト[illegible]、[illegible]へ来り、門口の戸を半分ほど明け

モシ、母さん、いま戻りましたぞえ。

九助　オヽ、姐御、戻らしつたかえ。

ト云ふをお鶴、「コレ」と思ひ入れあり、ちよつと囁く。九助うろたへ、腰の手拭を取つて頭へ卷き、二枚屏風を立て、急に婆アの病人の眞似をして、俄に唸りゐる。お鶴、捨ぜりふにて、そこらを片附ける。此うち文藏、門口へ來り、内を覗く。この時兩人顔見合せ、思ひ入れあり。

つる　サア、此方へお入りなさんせいな。

文藏　アイ〳〵。

ト内へ入り

アヽ、行燈が灯つてゐるの。阿母は寐てかえ。

つる　アイ。さうでござんせう。モシ、母さん、いま戻りましたぞえ。

ト九助思ひ入れあつて

九助　アヽ、娘、いま戻つてたもつたか。わが身の留守の間、癪がさしこんで、アヽ、胸先が

ト二枚屏風の蔭にて、見えぬやうに蛸の足を嚙り、茶碗酒を飲んで、唸る思ひ入れ。

つる　そりや折惡うわたしが居らいで、さぞ難儀なされませう。

九助　イヤモウ、大きに難儀しましたわいの。

ト此うち、文蔵、アヽ／＼見廻し

文蔵　アヽ、病人の阿母一人、内へ置いて、さぞ母さんは心細からうに。

ト九助へ目をつける。お鶴、九助の側へ來て

つる　今日は餘程心よいやうに存じまして、それゆゑお一人置き申しまして、眞崎稻荷樣へお詣り申した道で、あなたにフツと行きあうて、お連れになつて來る道々、難儀な事をお話し申したりや、御合力を下さりました。お前、お禮を云ひなさんせ。

ト金を出して見せる。九助見て

九助　そいつはよかつた。それおやア、マア酒が飲める。

ト云はうとして

アヽ、さても／＼御深切な。ようマア御合力下されました。旅は道連れ、世は情。アヽ、南無阿彌陀佛々々々々々々。

文蔵　ハイ／＼。モシ、母さん、アヽ、お前孝行な娘御を持ちなされた。來る道々も、難儀な話を聞きやしたが、コレ女中、お前また、人並勝れた器量で居ながら、なぜ又人の世話にでも

つる　それも如才はござんせぬが、何でマア此やうに、しみたれてゐる者を、どなたがお世話に

文藏　わしならするの。こなさんも暗がりで……コレ、錢貰ひをするよりは、小やすくも圍ひ者か、ア、向うに當を拵らへるがよい。

つる　拵へたうても、この暮しでは。

文藏　イヽヤ、案じねえがいゝ。わしが世話をしませう。

つる　エ。アノ、お前さんが

文藏　世話して進ぜう。斯う男が云ひ出しては、おれが女房にしたも同然。これから互ひに奧底なく。

つる　姉のやうなわたしでも、女房同然に思うて下さんすなら

文藏　そりやア此方も踏んごんで、內證向きの何やかや

つる　面倒さへ見て下さんすりや、わたしも女の精一ぱい。

文藏　あの阿母に孝行盡して

九助　オヽ、嬉しい〳〵。

つる　奧底無しに打割つて

文藏　女房の物は亭主の都合。

つる　亭主の都合は亭主の物。
九助　そんなら、親の物は子の物、人の物は我が物、構ふ事はねえ。なう、姐御。
　　　ト我れを忘れて云ふ。文藏惘りして
文藏　ヤア、何時だといふは。
九助　エヽ。
　　　ト思ひ入れ。この時お鶴、延喜の金を見て
つる　サア、こりやァ小判と思ひの外、土でこせえた延喜の金。
文藏　こりやァ騒アといつたのは、亭主だな。
九助　イヽヤ、おらァ関構ふ。
文藏　ヤ。
九助　仕事にかけて引込んだ、此方を其方で仕事にかけるか。
文藏　ミヤ、仕事とやらは知らないが、野郎が贋アに化けるやら、油断のならぬ結ひの、甘い罠に附け込んだも、こなたの持つた財布入り、小二百両のその金を
つる　エ。

文藏　借りたうござる。貸して下さい。

九助　イヤ、今時の素人には、油斷も透もなるこッちやアないわい。

つる　ウム、そんなら此方のこの金を、取らうばつかり暗がりの

九助　よみやはしたる初午の、眞赤なお強飯にかけるのか。姐御、こりやモウ地金を

文藏　イヤサ、これにやア段々譯の、

つる　長い話しを聞くものかな……エヽ、寒くなつた。炬燵を貸してくんねえ。

ト文藏をかきのけ、上の方へ行き炬燵へあたる。この時下の路地より德兵衞、草履下駄を穿き、丁稚の德松が肩へかゝり出て來て、德兵衞ちやつと囁く。德松のみこみ、元の所へ入る。德兵衞、門口に窺ひゐる。お鶴思ひ入れあつて

コレ、この頃ちつとしみたれて、或ひは稽古所茶屋小屋を、無心に盡き果て往來の、人に當つて錢貰ひ、騙して見たり高飛車に、又は體をぶツつけて、身を切り見世は稼がぬが、月圍ひから寺大黑、とゞが宿場へ納まつて、生れも附かぬ刺青は、惡婆の見習ひ生ぬるな、女湯ならば板の間を、稼ぎも世渡り世間ぢやア、うるさがられる半ぎらお鶴、首の細つた年增だよ。それをこなさん、足を附けて、物した物の上前取り、てもおッかねえ二才だの。

文藏　イヤ、見かけつたのが因果の始まり。是非とも借りてゆかにやアならねえ。

つる　イヤあつかましい無宿やら、素性の知れぬ小二歳に、達引がいるものか。出來ねえ話しだ。よしてもくんな。

ト財布を引ッたくる。徳兵衛聞き耳立てる。

九助　おいらが金を借りやうとは、上前取りのよい首代、わしが路銀に貯への、小判の數も百兩あまり。

ト木綿財布の金を見せる。

つる　亭主の命の綱にもと、貯めた金の二百兩、無駄にはなつたが、外に義理ある其の人へ。

文藏　身貧な借家に二百兩、怪しけれどもその金を

つる　こなたに預ける。

九助　呑みこんだ。

文藏　道ならねども、その三包み。

トかゝる中九助、文藏を突きのけ

九助　エヽ、あつかましい。猫覗ひあいおたら。

ト徳兵の出刃を取つて打つてかゝる。文藏引ッたくつて九助の眉間を割る。九助ムツとなつて

うぬ、疵を附けたな。

トこの手を押へ、出刃を引合ふはずみに、誤まつてお鶴の脇腹へ突き立てる。この物音を聞き、門口にて徳兵衞、いろ〳〵に思ひ入れ。

ヤア、姉御も出刃で

トよろぼひ寄るを、文藏當てる。九助「ウン」と倒れる。この時文藏の懐より文落ちる。お鶴よろぼひ、文を取つて、上書を見て

つる　「文藏さまへ、宮より。」

文藏　ヤ、その文は、

ト取らうとする。

徳兵　すりや、お鶴が内に文藏は

文藏　親仁樣か。

徳兵　文藏、譯は

ト内へツカ〳〵と入る。

文藏　アヽコレ、危なうござるぞ。

つる　イヤ、、木屋の旦那の一言に、文藏様はと仰しやる上、爰へ落ちたる文の宛名も文藏さま、そんならあなたが

文藏　ト、右衞門が弟の文藏なれど、金に詰まつて

つる　モシ、これ御覽じて下さりませ。

ト懐に附けたる守り袋の中より書き付を出す。文藏取つて開き

文藏　ヤ、、御代官所へ差上げ申す一札の事と

德兵　ヤア、、。

つる　ウム。

ト苦しむ。

文藏　モシ、その女は、手を負つて居りますぞえ。

ト德兵衞思案の體。

德兵　コレ、氣をしつかりと……して、書置きの文言は。

ト時の鐘、誂への合ひ方。文藏、口書を明けて

文藏　「書き殘しりく、私し夫、これ迄で寢ても取り置く侍の金子、殘らず下總出立仕り候はゞ、萬一命も助か

り候はんと、女の淺き心より、さま〴〵と金拵へ候ふところ、天罰にや病死いたし、死首ながら梟木に晒され候ふとの事。その上、四つ石の極印御座候ふ三百兩、葛飾さま方へ仕入れの金と僞はり、預け置き候ふ由、十右衞門さま御事、夫の素性を決して御存じなく、預かり置き候へば、何卒右の三百兩差上げ候ふ上は、露ほども十右衞門さま、弟御文藏さまにも、御存じなき御事に候へば、御疑ひ御晴らし下さるべく候ふ」――ヤヽヽヽ、そんならお鶴は

徳兵 アノ盗人の

つる モシ、これといふのも女の身で、恐ろしい巧み事、この身に報ふ天罰の、遁れぬ譯も皆金ゆゑ。これで揃うた三百兩、極印打ちし金の代りに。

ト九助が金を一つにして文藏へ差出す。

文藏 流石はお鶴。

徳兵 惡い男に添うたが因果。

九助 上前取りのその上に、よく此やうに

ト文藏へかゝる。見事に引敷く。お鶴、落ちたる出刃にて、九助の胸許を突く。九助「アヽ」と苦しむ。文藏、これを見て

文藏　ハア丶。

ト思ひ入れ。

つる　サア、姉の敵を引受けて、相手になつたわたしが自害。

德兵　すりや、早まつて

文藏　アヽ女に構ふな。

德兵　コレ……門を締めやれ。

文藏　ハイ。

ト門口を締め、兩人思ひ入れあつて手を合せる。木の頭。お鶴、バツタリ落入る。

ひやうし　幕

大切　葛飾十右衞門内の場

役名――十右衞門女房、おりく。德兵衞妹、お賤。同下女、お米。菜賣り、曲り金の仁太。葛飾十右衞門。木屋文藏。油の丸平次。犬上團右衞門。長谷部運太夫。手代、舍兵衞。船頭、十太。

遠山甚三郎。

本舞臺、世話場の屋體、上の方唐紙の押入れ、のれん口、下の方床の間、眞中に籠花活けに梅の花を挿し、下手の口二階、階子たて、下は杉戸、階子をかけ、門口、この外に木戸を取附け、誂らへの通り、爰に十六、又内、茶屋場の形にて、棕櫚箒を槍にして上草履を持ち、供先の稽古してゐる。上に九平次、咬へ煙管にて寢ころび、指圖してゐる。門の外に箍屋、縄釣瓶をかけてゐる。通り神樂、てんつゝにて幕明く。

ト十六、又内、いろ／＼あつて、槍も草履も投げ損なふ。

九平　アヽ、コレ／＼、又も十も、それでゆくものではない。槍も門の出入りに、ぐる／＼と廻すばかりぢやアない。ありやア一體、九字を切る心だ。

十六　九字を切るとは、そりやア大阪無盡か。

九平　べら坊め。コレ、草履を投げるにもナ、大分祕密のある事だ。投げるのは、丁度子供が

又内　西は何方といふやうか。

九平　おきやアがれ。なんぼ屋敷日雇だといつて、心の持ちやうで出世も出來らア。親分のアノ葛飾十

右衛門どのを見やれ。

又内　それ〳〵。元は千葉のお屋敷に勤めてゐたさうだが、今は神田で何の某。

十六　女房といやア、あの美しいおりくさん。

九平　イヤ、美しいばかりで、とんだ情知らずよ。

又内　ヤ、情知らずとは、九平次。

十六　さては當りかけたかな。

九平　エヽ、べら坊め、そんなさしを云はずと、供先に目に見られぬやう。

兩人　もう一遍やるべいか。

トまた稽古する。通り神樂にて、向ふより十太、前の縮緬屋にて、塗替へ柄杓を擔ぎ、出て來り

十太　オヽ、いつもの箍屋どん、爰に居たか。方々尋ねるやつさ。

箍屋　なんぞ急な御用かえ。

十太　サア、商賣物の塗替へが殘るから、かけてもらはうと思つて。

箍屋　もうこの釣瓶が繕ひだから、今に行きやす。

十太　イヤサ、序に湯へ行かにやアならないが、あの湯へか出くつもりヤア、早手にあつた時に大事だ。

トこの聲に九平次、門口へ來り

九平　オヽ、こりやア十太、今日も沖へ行くか。

十太　一日でも行かにやア、顋が干上がりやすワ……干上がるといへば、お前に見てもらはうと思つてゐたが、一昨日干潟へ見突に行つた歸り、喰ひ醉つて桐ケ谷の藪際に寐てゐたら、何奴か、とんだ物をぶッつけて行つたがよ。

九平　それはとんだものだ。

十太　何だかカウ、茶碗のやうな。

九平　そりやア見たいものだな。

十太　アイ、新道から行つて取つて來やせう。

箱屋　アイ、モシ、釣瓶が出來やした。

九平　オイ〳〵、錢は一緒にやらう。

箱屋　アイ〳〵。そんなら十太さん。

十太　ドレ、行つて取つて來べい。

ト箱屋は荷を擔ぎ、十太附いて木戸の内へ入る。通り神樂。九平次、釣瓶を二重へ上げながら

九平　オヽ、釣瓶で思ひ出したが、かみさんが、奥の庭を掃除して置けと云つたが。

十六　ほんに、それ〳〵、云はれないうち

又内　ドレ、掃除をして置くべいか。

ト矢張通り神樂にて、兩人奥へ入る。

九平　今あの十太めが、寐てゐる所へぶち込んだのは、何だか知らん。そりやアさうと、豫ねてあの團右衛門さまから、預かつてゐる千葉家のこの書き物。今日らは取りに來さうなものと、懐へ入れてゐるが、アヽコレ、心遣ひ。ちやつとどこぞへ。

トあたり見廻すうち、通り神樂にて、向うより金兵衛、蔵魔所な手拭に括りつけ、擔ぎ出て來り、門口にウロ〳〵してゐるうち、九平次はこれを知らずに、右の書き物を床の間の花活けへ隠す。金兵衛合點のゆかぬ思ひ入れにて

金兵　モシ、九平次さん。

九平　エ。

ト悧りしながら花活けをかけ

金兵衛さん、何ぞ用があつて來たか。

金兵　イヤサ、わしは十右衛門さんに話しがあるが、内にかえ。
九平　イヤ、頭はどこへか行つて留守だ。
金兵　ハテ、そりやア

　　ト云ふうち木戸より十太出て來り

十太　モシ〳〵、九平次さん、その見せようといふ物は
九平　アヽ、これサ。

　　ト花道へ連れて出て

　マア、どんな物だ。
十太　サア、茶碗にしては足があつて、何だか不細工な。

　　ト前幕の香爐を出して見せる。

九平　ヤ、こりやコレ四方出の
十太　エ。
九平　イヤサ、鹽壺か、甞め物入れにしかならないこの瀬戸物。併しマア、頭が歸つたら見てもらふ程に、置いて行かつし。

十太　そんなら預けて行きやすが……アヽ、二百にもなればよいが。

ト通り神樂にて十太向うへ入る。

九平　思ひがけない四が出の香爐、こいつは好い正月が出來るわえ。

ト屋臺へ來ながら、金兵衛、今見かちつた花活け、合點のゆかぬ思ひ入れにて、中の袋入りの書き物を見付け、なんでも好い物だらうと取出し、花活けは掛け、ウロ〳〵する內、九平次來るゆゑ、持つて來た破魔弓の筒の中へ隱すうち、九平次門口を入る。金兵衛キヨロ〳〵する。

金兵衛どん、をかしな、何をキヨロ〳〵するのだ。

金兵　イエサ、內の子の持遊びに、この破魔弓を餘所から貰つて

九平　邪魔なら打ッちやつてしまふがよい。

ト取るを

金兵　アヽ、これサ。そしてマア、十右衛門さんの歸るまで、ちやつと見附前まで行つて來たいが。

九平　そんなら、この破魔弓を、奥へでも掛けて置くがよい。

ト下の柱へ掛ける。

金兵　でも、これにや

九平　ハテ、邪魔な物を持つて歩かずと、どうで行つて來るぢやアないか。
金兵　それもさうか……ドレ、行つて來ようか。
ト通り神樂にて、金兵衞下の木戸へ入る。九平次、香爐を捻くり廻して見てゐる。此うち流行り唄になり、向うよりお米、前幕の形にて、ツカ〳〵と出て來り、門口より
よね　モシ〳〵、葛飾十右衞門さまのお宅は、これでござりましたな。
トこれにて九平次あわて、最前の釣瓶置きある中へ香爐を隱し、ドキマギしながら
九平　成る程、此方でごんすが、どこからござりました。
よね　ハイ〳〵、私しは深川から參りましたが、どうぞ內方のおかみ樣に、お目にかゝりたうござります。
九平　アイ〳〵、用なら呼んで進ぜう……モシ〳〵、おりくさん
ト合ひ方になり、奧よりおりく、莨盆を提げて出て來り
りく　九平次どん、何ぢやぞいの。
九平　深川から來たと、アレあの女中が待つて居ります。
トおりく、お米を見て

りく　まア、こりや平野町のお米どの、こなさんこさんすからは、わしが云うた通り
よね　サア、お賤さんをお連れ申して
　　ト云はうとするを
りく　アヽコレ
　　ト目まぜして、門口へ連れて出て囁く。
よね　ハイ／＼、畏りました。
　　ト[illegible]にてお米向うへ入る。おりく、内へ入る。
九平　おりく様、今の女は、ありやアどこから来ました。
りく　ありや深川の水屋から、使ひに来たのぢやわいの。
九平　わしやア又深川といふから、親分が馴染みの女郎屋から来たと思つた。
りく　なにを。今こちの人が、そんな浮気な事をなさらうぞいの。
九平　この間も下谷の蔵前寺で、日が暮れてしかとは知れぬが、随分粋らしい者と二人
りく　エ。
九平　サ、浮気な亭主を、後生大事に守つてゐると、日頃から心を尽すこの九平次、もう大抵に得心し

て

りく　又かいなア。アタ嫌らしい。

九平　お前ばつかり眞面目でも、親分は外へ出ると

りく　何を、人をしやくりちらかして

九平　イヤサ、しやくるのぢやァないが、女郎ござれ、圍ひ者、若後家、お乳母、マアおれが云ふ事を聞きなさい。

ト捨ぜりふ。此うち通り神樂にて、向うより十右衛門、羽織一本差しにて、ツカ〱と出て來り、内の様子を聞いてゐる。九平次これを知らず

子守り飯炊き婆アでも、女さへ見りやア、嫌らしく抱きついて

ト抱きつくを

りく　エヽ、何をするのぢやぞいなう。

九平　イヤサ、こりやァ親分が助兵衛の講釋。十右衛門改名いたし、助兵衛だ〱。

ト又しなだれる。十右衛門ズッと入り、九平次を突きのける。

ヤア、親分か。

ト悔り。

十右　イヤ、助兵衛た。

九平　エ、

ト術なき思ひ入れ。

十右　九平次、助兵衛の講釋を、もう一遍聞かうか。

九平　イヤサあれは

十右　無駄ばかり吐かさず、奥へ行つて、似合つたやうに、釜の下でも焚きやアがれ。

九平　ムウ。安い奴す。

ト合ひ方になり、鈴姫へ思ひ入れするな、十右衛門睨めるゆゑ、是非なくツイと奥へ入る。

りく　こちの人、何がな遙かな洒奴が

十右　エヽ、打ッちやつて置け……時に、云ひ附けて置いた二階の事は、何もかも好いか。

りく　そりや好うござんすが、内に用もたんとあるに、お前はマアどこへ行かしやんしたぞいなア。

十右　殿様三郎さまのお行くへが知れぬと、あへ返すところへ、かて、加へて馴染みのお初どのが、駈出してならぬと云ふゆゑ、よく意見云つて、深川の親方へ預けて來た。

りく　意見といへば、こちの人、お前にちと頼みがござんす。
十右　頼みとは。
りく　サア、昨日平野町へ、ちよつと行つたところが、お前の弟文藏さんに娶合すといふ娘御に、初めて逢うたところが
十右　ムウ。その娘は、まだおれは間違つて逢はぬが、どうぞしたのか。
りく　サア、文藏さんを嫌うて氣隨氣儘、兄御の德兵衞さんと兄弟いさかひ、氣の毒さに連れて戻つて意見云はうと話し合つたところが
十右　話したところが
りく　思ひがけない、わたしが妹でござんしたわいなア。
十右　エ。
りく　サア、お前にも豫ねて話して置いた、小さい時に別れた
十右　ハテ、そりやアとんだ事だの。
りく　サア、わたしが妹といふ事が知るれば、猶更捨てゝも置かれぬゆゑ、今日連れて來る筈に、約束して來やんしたが、お前の氣を兼ねて、向うの角に待たせて置いたわいの。

十右　エヽ、大猫の絆に何の遠慮。早く内へ呼べばよいに。

りく　そんなら宜く呼びますぞえ。

ト門口へ出て手を叩き、向うを招くと、出の唄になり、花道よりお賤先に、お米附き、出てくる。

サア／＼、姉、こちの人の機嫌もよい程に、遠慮せずと早くおぢや。

しづ　嫁さん、初めてお目にかゝる兄様が、氣隨な奴ぢやと、定めて

りく　なんの、叱るやうな野暮ぢやない。わが身も逢うたら、姉の連合ひ、遠慮に及ばぬ。わしに隠す事はない。打明けて

しづ　頼んでもようござんすかえ。

りく　ほんに、自慢ぢやないが、わが身にもあのやうな男を持たせたいと……ホヽヽヽヽ、こりやお米どの、大儀でござんした。内へ行んだら徳兵衛さまに、お賤は今宵泊めます、しつかり預かりましたと、よう云うて下さんせ。

よね　ハイ／＼、左様なら又、お迎ひに参じませう。

ト通り神樂にて、お米向うへ入る。

りく　ほんに、あのお米は、よい使ひ頃。今年も重年であらう。

ト捨ぜりふ云ひながら、お賤恥かしさうに門口を入つて、そこへ出る。

十右　こりや初めて

ト互ひに顔見せ

しづ　ヤア、お前は。

十右　其方は。

ト悸り。

りく　お前方は近附きかえ。

十右　アヽ、イヤ、初めて逢つたわが身の妹、なんの知らう筈はなけれども

しづ　あんまり初々しさにツイ

ト思ひ入れ。

りく　なんの、初々しいと云つて、これがほんの親は泣寄り……したが、こちの人、早速マアお前の弟御、養子に行つた文蔵さんを嫌やるは、内證にどういふ事があるか知らねど、不所存な事ちやないかいなう。

十右　サア、それも何ぞ、餘儀ない事であらうわサ。

りく　サア、その詮儀ない事も、お前に意見云うてもらうて、あれが得心すれば、親類内も丸う納まる

どうぞマアとつくりと。

十右　サア、そりや好いやうに、おれが云はうよ。

りく　お前の意見で、きかぬと云うたところが、わたしもたつた一人の妹。

しづ　姉さん、わたし不便と思うてなら、矢ッ張り尼にして下さんせいなア。

ト思ひ入れ。

りく　エ……これいなう、この間まで、そんなに気随もあつたなれど、ふツつりやんで、髪も衣も派手やかになつたは、尼になる心もないと、内外の噂、それに又そんな事云やるも、矢ッ張り内證に

ト思ひ入れ。

こちの人、お前も肝積起さずと、あれが心の済むやうに。

十右　そりやマア、胸を聞いた上。

りく　文蔵さんとの縁も、潔よく切つて、あれが思ふ壻に、どうぞ添はせて下さんせ、こちの人。

十右　ヤ。

りく　お前の意見が獨參湯、見立て違ひのないやうに、よう云ひ聞かせて下さんせえ。

ト唄になり、おりく思ひ入れあつて奥へ入る。お賤は始終恥かしく、俯向いてゐる。十右衛門思ひ入れあつて

十右 思ひがけない、女房が妹だと連れて來たは、この間巌隨寺で

トちよつと顔見合せ

殊更弟の文藏に娶合すとあれば、これ重縁、それをマア、知らぬ事とて

ト思ひ入れあつて、側ににじり寄り

コレ、お賤、其方はアノ芝居でする、お半長右衛門の狂言、何と思うて見やるぞ。

しづ 何と見ませう。お半は尤もな事ぢやと

十右 それ〳〵、それが悪い。たとへ身持ちにならうとも、おろす流すといふ事もあれば、どのやうにもして嫁入りすればよい事を、その身の片意地から、末の末まで憂恥をさらす。今時あんな事があつたとて、マアおいらなら知らぬ顔で祝言し、浪風ないのがこれ當世。この間の事は、ありやおかしい夢を見たと思ひ切つて、文藏と祝言してくれ。こんな事とは露知らず、今も女房が其方の事、よう意見云うてくれ、もしきかぬとて兄弟の事、術よく文藏とも縁切つて、あれが望む男を尋ね、添はしてくれいと頼まれる程、眞綿で首っ其方が爰を聞分けぬと、ツイ暗闇の恥を明る

みへ持出しても、おれだけに桂川とはゆかない、神田川で外聞なかゝにやアならない。

しづ サア、お前が其やうに云はしやんすけれど、あのお伴は石部の宿から……わたしやそんな事ちやござんせぬぞえ。

十右 そんな事でないとは。

しづ これ見て下さんせ。

ト懷の中より小さな折本を出す。十右衞門取つて

十右 これやコレ拝見……しかもおれが手だが。

しづ 覺えがござんすかえ。

ト十右衞門思ひ入れ。お[illegible]かしき思ひ入れ。合ひ方になる。

七年以前、お下屋敷の花盛り。わたしやお嬢様のお附き、お前は殿様のお供とて、御庭前の四阿

十右 ほんに、その時分は、おれも千葉きさの草履摑み、はるか下部もお身近う召使はれ、女中交りの御酒宴のお相手。その砌は、まだちよつほりの切り禿。

しづ 花が欲しうてあれこれと、折つてもらうてその時に、一重と八重の名が知れず

十右 幸ひおれが小姓から、書いて置いた花暦、雛[illegible]に花は附き物ゆゑ

しづ　覺える爲と下さんした、その折これは成人して、おれが女房の結納ぢやと

十右　ツイ戯言に云つたのを、すりや、長の年月忘れもせず。

しづ　一生連れ添ふ男ぢやと、心で心に誓ひを立つてゐましたわいなア。

十右　ムウ。ハテ、思ひがけない。

しづ　サア、どうぞと思ふ其うちに、お前は下がつて行くへ知れず、この身は一生御奉公と、思ふに任せぬお暇願ひ。わしにも知らせず兄さんが、あの文藏さんを聟養子。飽かれたいばつかりに、氣隨氣儘のそぎ尼にと、この程お寺の非の許で、逢ふ嬉しさに又その上、思ひがけない一世の固め。どうマア思ひ切られませうぞいなア。

十右　諦らめてくれ。

しづ　エ。

十右　サ、おれが惡い。なんの殺生な事をせにやア、おぬしに思ひもさせない、と云つて妹の女房なり、おれが弟の嫁といひ、どう思ひ直して見ても……サ、所詮末の納まらぬ事。とつくり思案しかへて見や。

ト此うち暖簾口よりおりく出かゝり、これを聞いて入る。お賤しめ泣き。十右衛門持ちあつかひ思

ひ入れ。此うち通り神樂になり、向うより仁太、菜賣りにて、籠を擔ぎ、呼び〳〵出て來て、直ぐに舞臺へ來て

ト門口を少し明ける。

仁太　小松菜や〳〵。

十右　誰れだ。

仁太　モシ、好い菜があるが、買はつしやらねえか。

十右　なんだ、菜賣りか。今日はまだ要らない。

仁太　モシ、さう云はずと、木小松菜たア。廉くして置いて行くべい。

十右　イヤサ、要らないといふに。

仁太　要らない筈。おかみさんと二人、うまい

十右　ヤ。

仁太　サア、こりやア旨い菜たア。ほんに、おかみさんと云へば、爰はこの間菜を賣つた内だ。その時おかみさんが、又よい菜があるなら、持つて來いと云はしつた。どうぞ買つてくれさつしやい。

十右　ハテ、ひつッこい。いま女房は奧に用をしてゐる。なんなら行き廻つてくるがよい。

仁太 成る程、さう云はつしやりやア、その女中さんは、この間のおかみさんぢやアないが、なんでも好い娘と、うまい所へわしか來たので

十右 エ。

仁太 こまつたや〳〵。小松菜や〳〵。

ト矢張り通り神樂にて、仁太呼びながら下の木戸へ入る。十右衛門、門口を締めようとする内、向うより團右衛門、家來を連れ、早足に出て來り、直ぐに舞臺へ來て

團右 十右衛門、在宿か。

十右 これは〳〵、何ぞ御用筋でも

團右 其方にとくと談じて……コリヤ〳〵、家來、其方は屋敷へ歸り、十右衛門宅に居ると、同役どもへ届けて置きやれ。

家來 畏りました。

ト向うへ引返して入る。十右衛門はお賤に、爰に居ては惡いといふ仕方。合ひ方になり、お賤思ひ入れあつて奥へ入る。

十右 サヽ、マヽお通り下されませう。

團右　許しやれ。

ト上へ通る。

十右　早速ながら、御用の趣きは。

團右　サア、一昨日同役どもより、申し達したとある大事。其方も

十右　成る程、御遊所先より、お行くへ知れざるとある殿様の儀。

團右　サア、表立つて詮議はならず、内々手分けして家中の騒動。其方が方にも、未だ御在所の手がゝりは知れぬか。

十右　サア、運太夫さまより、御内意あると其まゝ、心きゝたる者を所々へ出し、私しとても駈け廻り油断なく穿鑿いたせど、未だそれぞと

團右　御小身の御大名、出奔御隠しなぞあらう筈もなし

十右　お出入りなれば私しも、心痛いたし居ります。

ト通り神樂、バタ／＼にて、向うより運太夫、走り出で來り、門口より急きこみ

運太　十右衛門、内に居るか。運太夫、急用で罷り越した。

ト草履を穿いたまゝ内へ通る。

十右　ヤ、これは運太夫さま、いかうお急きなされた樣子。

團右　團右衛門もこれに居る。ソレ、疊の上へ草履で。マヽ、氣を鎭めさつしやれ。

運太　エヽ、鈍くさい。

ト草履を取つて抛り出し

コレ、十右々々、大事でおじやる。大事でござる。

トこの時十右衛門、暖簾口より湯を汲み來り

十右　モシ〳〵、マアさうお急ぎなされては、仰しやる事が解りませぬ。マヽ、これをあがつて

ト運太夫湯を取つてグッと飲み、むせる。十右衛門、背中を叩き、介抱するうち、木戸より仁太、また呼びながら出て來り

仁太　モシ、先刻約束の菜を持つて來ました。買つて下さりませ。

十右　エヽ、そこ所ぢやアない。取込んでゐる。マア〳〵、今度々々。

仁太　そんなら、もう要らないのかえ……エヽ、今日のやうに惱む事もないものだ。延喜直しに一服吸つて行くべい。

ト天秤棒へ腰をかけ、摺火打ちにて煙草のみゐる。此うち運太夫、また湯をグッと飲む。

十右 運太夫さま、御大事とは如何の仔細。

運太 サア、聞いておくりやれ。一昨日御遊興にいらせられ、その場よりお行くへ知れぬ殿甚三郎さま。然るところ明日未明に、鎌倉御所へ出仕いたすべき旨、秩父どのより御書封來。サア、急に出仕と仰せ出されたは、お身持放埒のお咎しか。何に致せ、お行くへ知れざれば、評議も工風も力及ばぬ。サヽ、お身の頼みは、事に馴れたる其方、なんと急々、お行くへを尋ね求めてはくれまいか。

十右 イヤモ、舊來人足請負ひのお出入りといひ、殊に以前はお草履も摑んだ拙者なりや、御家來も同然なれば、モウ私しが力一ぱい……と申した所が雲を摑。

運太 折惡い急ぎのお召し、家中は猾吏、身共が心配、明日までにお行くへ知れねば、御病氣と云ひ立てゝ、急に御養子願ふより、外に思案はおりない……まづ御養子の心當りは

十右 イヤ、運太夫どの、外より御養子には及ばぬ。屈竟な者がござる。

運太 屈竟な者とは。

十右 外でもない、この十右衛門サ。

運太 エ。

團右　今でこそ家來分、身が曾祖父は千葉の連枝、すりや、きつとした血筋でないか。
運太　ハヽヽヽ、先祖は御連枝にもせよ、今は用人、家老よりはるか末座。家中の歸服が
團右　イヤサ、なんぼ他家から養子をしても、肝腎の一萬丁の、御朱印があるまいが。
運太　ムウ。その朱印は、この運太夫が預かり。紛失せしも殿樣と、身共より外知らぬ大事を、どうして貴殿は
團右　サ、それは。
運太　なんと。
十右　アモシ、お跡目の穿鑿より、取急いでは殿樣のお行くへ。
運太　知れざる樣子パッとして
團右　世間へ知れゝば、千葉家の大事。
運太　兎角内々穩便に
十右　穿鑿いたすでござりませう。

ト此うち仁太、内の者に見えぬやうに、門口にて聞いてゐて

仁太　アイ、モシ、ちつと御免なさいやし。

ト すつと内へ入る。皆々悧り。

十右 ヤ、其方は先刻の茶賣り、まだそこに居たか。

仁太 アイ、一服のんでゐるうち、お前の話し、かいつまんで聞いて、氣の毒だから爰へ出やしたが、その千葉の殿樣なら、鶴ヶ谷から山續き、金澤の方へ行つたに違ひござりやしない。

運太 ムウ。すりや其方、そのあたりで、殿を見掛けたといふやうな事か。

仁太 見かけたどころぢやアない。しかもその殿樣は、なんだか病氣か知らないが、藪際に苦しんでござつたから、わしが介抱して、ちつとよくなつたから聞いたら、なんだか詰まらぬ事があるから駈落ちするといふからは、出奔に違ひないのサ。

皆々 エヽ。

ト 悧り。

仁太 サア、わしも骨を折つて介抱して、駈落ちまでさしたからは、お屋敷が知れたら、骨折り賃を貰ひに行かうと思つてゐたところが、丁度幸ひ。お侍ひさん方、褒美に酒手をくれさつしやい。

運太 ムウ。すりや其方、いよ／＼殿樣を

十右 御介抱申したと、この場の話しを聞き取つて、合力してくれろとは、見す／＼知れた

仁太 騙りだと云はつしやるのか。
十右 サア。
仁太 騙りなら騙りにして、褒美をくれずば爲になるまい。今に吠え面をかくなよ。
運太 吐かし居るか。おのれ、なんで此方、吠え面をかくのぢや。
仁太 さればサ、お大名が供をも連れず、遊所歸りの途中から、出走りしても事が濟むか。
運太 ヤア。
ト愕り。
仁太 サア親仁、なんだ、切らないか。おらア強請りだ。騙りだ。存分にして見ないか。朴念仁め。
運太 エヽ、おのれ、武士に向つて
ト立ちかゝるを
團右 アヽコレ、運太夫どの、彼れを殺め、この事世間へ流布いたさば一大事。まづ鎭まられよ。
運太 ムウ。
ト思ひ入れあつて鎭まる。
仁太 サア親仁、突かないか、切らないか。此奴は竹光でも差してゐるさうだ。よい〳〵。これからは

おれが父、千葉の親が出奔したを見附けましたゆゑ、強請りに参つた、然しは強請りでござりますと、代官所へ駈け込んでくれべい。

ト身ごしらへして行きかけるを

関右　アヽコレ、それを云はれては一大事。

運太　それ〳〵、この運太夫が御詫訟なら、御前にも詫びる程に

仁太　イヽヤ否だ。おぬし達に彼れこれ云はれるより、我れと我が強請りを打割つて、科人になりたくなつた。恐れながらとくらはすべい。

トまた行かうとするを

十右　イヤ、待ちやれ。

仁太　なんぞ用でもあるか。

十右　成る程、きついものだ。生とし生けるもの、命惜しまぬものは無いに、事を好んで科人とは、ハテ大束な。薬賣りには惜しい魂ひ。

仁太　呼ぶから何ぞ用かと思やア、こなさん、おれをてうらかすか。

十右　なにサ、その大丈夫な魂ひを、なんと賣つてはくれまいか。

仁太　ムウ。すりや、おれが願つて出ようといふ魂ひを

十右　横に寐かして内分に。

仁太　ムウ。それも値との相談で

十右　賣る氣ならば

仁太　いくらに買ふ氣だ。

十右　カウト、まづいくらであらうぞ。

仁太　コレ、おれは木性で、魂ひは九ツあるよ。

十右　サア、いくつあらうと、まづ災ひも三兩かえ。

ト紙入れより金を三兩出す。

仁太　ハヽヽヽ。間男でさへ七兩二分。根ぎり小ぎりを云はずと

十右　ムウ。そんなら堪忍五兩がギリ〳〵。

仁太　もう金は無いか。

十右　ハテ、表を張つても道樂商賣、さう遊び金があるものか。これでも飲んで

仁太　歸れたれば、ドレ代官所へ

ト また行きにかゝるを

十右 待て。して、いくらならば濟ます氣だ。

仁太 どうで其方も百年目、百兩ならば料簡しよう。

十右 でも百兩といふ大金が

仁太 一廓丁の知行と釣替へ。

團右 十右衛門、扱ひ出來ぬか。

十右 サ、その儀は。

仁太 サア〱〱、見掛け倒しな、しみつたれめが。

十右 ムウ。

ト思ひ入れ。此うちおりく、奥より財布を持ち、出かゝりゐて

りく こちの人、委細は奥で聞きました。お屋敷の大事といひ、扱ひかゝつて濟まぬも恥。この金をやらしやんせいな。

十右 この金は。

りく サア、大事な金ぢやと、お前が仕舞うておかしやんした

十右 簞笥の金なら、こりやどうも
りく あんな者に、しみたれの何のと、腹が立つわいなア〳〵。
十右 成る程、難儀になれば、この身一つを
ト財布より小判を出して數へ
ソレ、望みの通り百兩。
ト そこへ置く。
仁太 ムウ。脈いものだが濟ましてやらう。
ト取上げる、その手を取つて
十右 イヤ、この金はまだやられぬ。
仁太 ヤ。
十右 サ、まこと殿を介抱したか、しかと證據の無いおぬし。
仁太 イヤ、そりやアきつとした印しがある。コレ
ト叺　笥入れより前幕の鑑定書を出し
その時、殿樣が持つてゐたこの書き物。

團右　ムウ。そりや繪香爐の鑑定書。

運太　香爐も御所持であつた筈だが。

仁太　その香爐とやらもある。

　トそこにある御墨附を、鑑定書の袱紗へちよつと包み

　コレ、爰に持つてゐるが、殺したといふ慥かな證據。

十右　ムウ……それ聞いたら、もうその金は

仁太　どうしたと。

十右　やるには及ばぬ。

　ト引ッたくる。

仁太　イヤ、手に取つた金どこまでも

　ト奪取らうと引ッ張り合ふ拍子に、右の金を二階の障子の中へ打込み

南無三、二階へ

　ト皆々を突きのけ、ツカ〳〵と二階へ上つて、障子を明ける。内よりポンと投げ落され

ヤヽ、慥かにあれは

ト見上げる。

十右　千葉の殿樣。

ト二階の内にて

甚三　甚三郎は、狹くよりこれに。

三人　なんと。

甚三　疑念の輩、對面なして安堵させん。

ト合ひ方になり、障子引拔き、内に甚三郎、誂らへの形にて莨のみゐる。

運太　イヤナウ、御遊所先よりお行くへが知れざるゆゑ、如何なさんと存ぜしに、夢なら覺めな拙者が喜び。どういふ仔細でこの所に。

甚三　サア、某若氣の過まりとはいひながら、身持ち放埓、家國をかへりみぬ御先祖の御罰目前に、この程遊所で馴染む傾城へ、何者が仕込みしか、正しく俗に稱れ藥、毒氣の廻る折も折、それなる匹夫に騙かられ、罪も無の傷か從。いまだ此の命捨てさせ給はぬしるしにや

十右　折よく行きあふ御前の殿樣。

甚三　命を拾ふ介抱に、毒氣も忽ち

十右　消えてお命恙なく、お心は附いたれど

甚三　世間を憚り、彼れと同道。

十右　夫婦の外は人に知らさず

りく　あの二階に忍ばせましたも

十右　御所持の香爐知れざるの爲。

甚三　さは知らずして、家斷絶といふにつけこみ、ためし稀れなる不屆きの……此ほど思はず引裂きし鑑定書の此の破れ。

ト懐中より茶屋場の破れを出し

よく似せたれど墨色時代、相違の似せ物。誠の鑑定を持參なしたは、此方の却つて幸ひ……サア匹夫、今一應讀んで見ぬか。

仁太　サそれは。

甚三　サア〳〵……斯様な奴は、家にかへても糺明なすが、世上の助け。召連れる。そこ動くな。

ト突き放す。

仁太　ムウ。こりやそれ

ト逃げようとする。十右衞門突き廻して門口をシャンと締め

十右　イヤ、貧乏ゆるぎもさしやアしないぞ。

仁太　ムウ。氣遣ひするな。斯うなりやア野へ出した死人。ドリヤ、末期の莨、一服やるべい。

ト下の方にて莨吸ひつける。皆々呆れる。

甚三　一度死して又この土へ、生れ變つた甚三郎、今まで惰弱な魂ひも、改めずんばあるべからず。その手初めに團右衞門、それへ出い。

團右　ハッ。御用でござりまするかな。

ト氣味惡さうににじり出る。

甚三　外でもない、紛失の朱印は、其方盜み取つたであらうが。

團右　アヽモシ、どう致して拙者めが

甚三　申すな。隱すより顯はるゝはなし。某死去と聞くよりも、家相續を望むといひ、人に知らさぬ紛失を、其方一人知つたは曲事。

團右　サそれは。

甚三　なんと。

團右　アヽモシ、そりやなんでござります。去年お蟲干しにも出ませぬゆゑ、もし紛失も致したかと、こりやほんの、犬の蚤も食ひあて。

十右　モシ、團右衛門さま、お前は見下げ果てたお人だ。御主人の物を盗み掠めて、顯はれても、まだ陳じさつしやるか。わし共は此やうな商賣こそしてをれ、むさい穢ない心は無い。盗んだら盗んだと、早く云つてしまはつしやりませ。

ト此うち九平次出かゝりゐて

九平　イヤモシ、親方、むさい穢ない心は無いと、立派な事を云はつしやるが、あんまり潔白な男でもないぞえ。

ト前へ出る。

萬三　ヤア、そちや九平次。

十右　この十右衛門、潔白でねえとは。

九平　さればサ、この間八丁畷で獄門にかゝつた、引窓與兵衛といふ大泥坊と

十右　エ。

九平　サア、懇意に附合ふのみならず、金錢の貸借りまでしたとあれば、泥坊の上前取り同様

ト云ふうち

十右　ヤイ／＼九平次、滅多な事を云ふな。

りく　それいなア。こちの人の子分でありながら、親方の外聞どころか、身の上にも係はる事をツカツカと。そんな者と懇ろにした事なら、わしが知らん事は無いに、また附合つたと云ふには何ぞ。

九平　證據の無い事云ふものか……どうでおれも、埒の明かない事とやら、腹立ちに尻割りにかゝつて見たが、おりくさん、お前が承知なら出さないが、魚心あれば水心は無いかえ。

ト袖を曳く。

りく　エヽ、知らぬわいなア。

九平　知らざア此方も高々と

ト思ひ入れ。懐より手紙を出して

サア、みんな聴聞しなさい……「久々お目もじ致し申さず候へども、いよ／＼御機嫌よく、さてはこの度與兵衛こと、御心にかけられ、御深切にお取計らひ下され有り難く、これと申すも、御懇意なし下され候ふゆゑ、御預け申し候ふ物も御座候ふ由なれど、これは御禮に差上げ候ふまゝ、御心遣ひ下さるまじく候ふ。十右衛門さまへ、與兵衛内より」

ト讀む。此うち十右衞門、この間拾はれたとハッと思ひ入れ。此うち金兵衞、木戸より出て窺ひゐて、この時ツト中へ入り

金兵　十右衞門さま、ちよつと逢ひたい。

十右　こりやア澤屋の金兵衞。

金兵　この金覺えがござりまするか。

ト財布より序幕の二百兩を出す。十右衞門見て

十右　ヤア、これは。

ト恟り。

金兵　先度[illegible]し、お前の弟文藏さまが、養子先の德兵衞さまの名代に、お出入り屋敷の御用金と、差出されたを、直ぐに此方へ質請けに、受取つたこの二百兩、殘らず四つ石の極印。こりやアお觸れのあつた紛失の金。

十右　アヽ、コレ、筋は知れた。マア靜かに

ト甚三郎へ氣兼ねする。金兵衞、甚三郎を見て

金兵　サア、諸事筋を云へば、屋敷へ掛合ふところなれど、聞けばこの金は、弟御の文藏さまの、持參

に附けてやつた金とあれば、口を廣くするでもないと、内々で來たもお前の爲。なんとこの二百兩を、世間通用の小判と、取替へては下さるまいか。

十右　成る程、尤もなれど、今といつては

金兵　出來にやア事をぶち割つて、かゝり合ひの名を出すぞえ。

ト金を持つて立上がる。仁太、この金を見て

仁太　ヤア、この金が紛失金とあれば、いま十右衛門が扱ひに出した、百兩にも四つ石の極印。さてはおれの弟の與兵衛が、盗んだ金を十右衛門、われも遣つてゐたな。

十右　サア、それは。

仁太　こりやア好い物が手に入つたワ。

金兵　ムウ、誰れだと思つたら、こなたはおれが請け人の

仁太　曲り金の仁太が、この金は預からう。

十右　ムウ。すりや噂のあつた曲り金の

仁太　にたか似ないかこの間

十右　八丁縄手で

仁太　捨て札の

十右　噂も暗い

仁太　身の上の

十右　なんと。

仁太　筋道立てりやア盗人の同類、青菜小菜賣り在郷でも、直ぐにはゆかぬ曲り金、仁太が氣儘の云ひ次第。十右衛門、この譯は。

九平　イヽヤ、此方は短兵急、元値にならない頭の尻割り。

りく　どうでも其方はする心か。

九平　知れた事、この手紙で

　ト行かうとするを

甚三　イヤ、代官所へ行くには及ばぬ。遠山甚三が裁いてくれう。

九平　なんと。

甚三　十右衛門、一應これへ。

十右　ハツ。

ト九平次が持つてゐる一通を引ツたくる。

りく　アヽモシ、その書き物を殿様へ、差上げてはどのやうな

ト手に縋る。

十右　ハテ、お主様も同然な、お出入り屋敷の殿様に、お捌き受けりやア家來の本望。お咎めうけるも覺悟の前。

トおりくを突きのける立廻りのうち、右の一通と、二幕目に拾ひし一通を取替へ渡す。甚三郎取つて

甚三　すりや、この一通が

十右　泥坊の同類といふ證據、疑はしくばま一遍、とくと讀んで御覽じませ。

ト甚三郎一通を開き

甚三　ナニ〳〵「先達て預け置き申し候ふ遠山家の一の寶、一萬丁の御朱印」

團右　エ。

ト悄り。これに構はず

甚三　「身共盗み置き候ふも、うつけ者の甚三郎に、放埓を勸め、追ひ失ひ」

團右　アヽ、コレ〳〵、そりやア違つた〳〵。九平次、とんだ物を爰へ

九平 サア、かしこ出す氣はごさらないが、どうしてマア

ト兩人立騷ぐを

運太 ヤレ犬上氏、御前でござる。

十右 立騷がずと、マア〳〵聞きやれ。

ト運太夫は團右衞門、十右衞門は九平次を引据ゑる。

甚三「あはよくば國家を一呑みの所存に候ふ間、大切に賴み入り候ふ。九平次へ、犬上團右衞門。」

トかゝる九平次を、十右衞門突き廻す。團右衞門を甚三郎ちよつと當て、褄をかいてのめらす。

團右 それを。

甚三 運太夫、繩。

運太 ハツ。

ト下げ緒にて團右衞門を縛しあげる。

甚三 家國を一呑みとは、團右衞門、其方に似合はぬ、小さい望みの。

團右 ウム。

ト思ひ入れ。

甚三　とても及ばぬ願ひなら、雲に棧橋、水に月、たとへて云はゞ

ト　あたり見廻し

冬の内より室にも咲く、あの花筒、これへ。

十右　ハッ。

ト　取りに上がる。九平次悔りして

九平　アヽ、コレ〳〵、その花活けをどうするのだ。

十右　知れた事、殿樣が御意見の譬へに。

ト　振り切つて行きにかゝるを又とめて

九平　アヽ、これサ、御意見の譬へに、花とは惡い思ひつき、それより好い物がござります。コレ〳〵この破魔弓。

ト　掛けてある破魔弓を取る。金兵衛悔りして

金兵　アヽ、コレ〳〵、御意見に破魔弓とは惡い思ひ附き、こりや成らぬ。

九平　ナニ惡い事があるものか。意見ならこの弓で、くらはすとも、射殺すとも

ト　金兵衛を突きのけ

ヘイ／＼、御勝手に遊ばされませ。

ト甚三郎へ渡す。金兵衛堪らず、ツカ／＼と行つて

金兵　こりやどうも

ト引ッたくるはずみに、破魔弓毀れて、筒の中より隠せし朱印出る。

運太　こりや紛失の御朱印。

ト取つて甚三郎へ渡す。

九金　ヤアそれを

ト恟りするを、甚三郎、落ちたる破魔弓にて兩人を打ち据ゑ

甚三　性は善なり甚三郎、身の放埓も實心より、致す所存は無けれども、この朱印とくより紛失、先代の越度にせん事、心苦しく、第一出でさるその時は、柔惰弱ゆゑと汚名を引受け、一つは心許させ評議なさんと、これ甚三郎が慮り。再び朱印手に入つて、近き憂ひを除きしも、この破魔弓の魔を破る、手段と知らずウカ／＼と、天晴れ兩人、フヽ、無駄骨大儀。

ト弓を抛る。

九中　ムヽ。なんの事だ。あの花活けへ隠した物が、どうして破魔弓の中にあつたか。うぬが物をうぬ

が持つて出て、引ッたくられて叩かれるとは、成る程無駄骨、嘘はない。
運太　御朱印戻る上は、殿には即刻。
甚三　いかにも罷り歸るであらう。
運太　して、袖香爐の鑑定書は。
十右　アイヤ、その儀は跡より拙者めが。
甚三　ムウ。すりや慮外なした、あの土民も
仁太　科がかゝりやァ金で押しぶち。
甚三　リ、さう見たゆゑに、この場の勘辨。
十右　モシ、それもこれも十右衛門が、預かりまして今宵のうち。
りく　して、あのお方と九平次は。
甚三　連れ歸つて、國へ押籠め。
十右　九平次は商賣構ひ。口請けへ引渡すぞ……オイ〳〵、野郎どもは居ねえか。
ト奥より十六、又内、行燈を持ち出て來り
兩人　親方、なんでごんす。

十右　十六、わりやアこの男を、口請けの三ヶ所へ預けて、商賣構ふと届けて來い。

りく　アノ九平次をかえ。

十右　オヽサ、又内はソレ、繩釣瓶も先刻羅ヮかけたおやアないか。裏の井戸へ持つて行つて吊せ。

又内　アイ〳〵、合點でごんす。

ト以前の釣瓶を引抱へる。九平次また悔り。

九平　アヽ、コレ〳〵、その釣瓶にやア。

ト思ひ入れするを

十右　やかましい。十六、逃がさぬやうに連れて行け。

金兵　時に請け人、おれが金は。

仁太　いさくさ無しの金にして、子を産ましてやる。待つてゐやれ。

トばた〳〵にて向うより中間二人、丸にいの字の高提灯をともし、ツカ〳〵と出て來り

中間　お旦那お迎ひ。

蓮太　ヤヽ、幸ひの家來。イザ團右衛門、お立ちやれ。

團右　エヽ、いま〳〵しい。

ト皆々門口へ出て

甚三　立歸らんが十右衛門、香爐は必ず

十右　夜明けまでに

仁太　やるもやらぬも極印の

十右　かねて斯うなる覺悟とは

りく　知らぬ夫の身の上の

十右　晴れるも曇るも

りく　風に任せて

甚三　十右衛門

十右　殿樣。

甚三　最前の金子。

ト腰の印籠を抛る。十右衛門取って

十右　こりや御印籠。

甚三　サア、時代蒔繪も寶船、たとへにその身の差合せ、手詰めとならば寶にも、代へて葛飾

十右　エ。

甚三　堅固でゐやれ。

ト時の鐘にて、提灯二張先に、思ひ入れあつて甚三郎、運太夫は團右衛門の繩を取り、釣瓶へ思ひ入れする九平次を、十六氣なくぼり。附いて向うへ入る。又內は釣瓶を持ち、金兵衛附いて奥へ入る。あと合ふ方。十右衛門思ひ入れあつて、仁太の側へ寄り

十右　イヤ、仁太どの、所詮知れたからは、何もかもぶちまけて話すが、こなたの弟與兵衛とは、あれが女房お鶴の縁から、ねんごろに出入りして、いかにも三百兩預かつたが、大泥坊とは、今のお煙草が毒となれ、夢更知らない十右衛門。

りく　待ちなさんせ。お鶴が縁と云はしやんすからは、あの上州から折々來て、こちの內へ逗留した

十右　それよ。あの與兵衛が、引窓とまで異名のある

りく　ほんにマア、人といふものは

ト氣味惡き思ひ入れ。

十右　サア、當分いらぬ金、困る時にやア遠慮なくと、云はれたが因果のつくばい。年頃の弟文藏。あの平野町から貰ひたいといふこそ幸ひ、持參にやつた二百兩。德兵衛どの、お出入りの屋敷へ、

用金に出したのが、先こそ多いあの千葉さま。甚三郎さまの御放埒から、香爐を預けた質請けの金になつたその跡で、與兵衛が事を泥坊と、八丁縄手の捨て札から、知つて仰天くやんでも、取つて返らぬ跡の祭り。薄々聞けば極印の、金の詮議を聞く度に、疵もつ足ゆゑ殘りの百兩、隱して置いたを女房が、持出した折も折、金兵衛が先刻の體裁。殿樣の御前といひ、身を切り裂かるる切なさも、身から出した銹と思やア、この身の事は思はないが、質請けの金になつたばつかりに、屋敷のお名も出やうかと

仁太　それが此方の附け目だツ。一萬丁の大名も、事と術とで同類に

りく　ア丶モシ、隱して置いたあの金を、女の淺はか持つて出て、こんな事になつたと思へば、ぬしへどうも

十右　ハテ、馬鹿な。持つては出ないでも、知れる時節は澤屋の金兵衛、請け人といふこそ幸ひ、なんと仁太どの、どのやうにも膝を抱へようが、この事を内分に。

仁太　ムウ。して與兵衛から預かつた、三百兩の當てがあるか。

十右　お心ありげな殿樣の、寶に代へよと下されたは、大金になるこの印籠。

りく　印しのあるあの金を、持つてお出でなされたも、それと云はずに籠るお情。

十右　賣り代なして事足りずば、御拜借を願うても、耳を揃へて三百兩。

仁太　返したばかりぢやァ腹が癒ない。

十右　ヤア。

誠に殘念ではあるが、底本とした脚本は爰で切れてしまつてゐる。もう少しの所で、打出せない始末である。評判記その他に依つて見ると、この跡では仁太が、弟の意趣晴らしだとて十右衞門を打擲し、十右衞門は香爐欲しさに堪へる事があつて、そこへ文藏が來て前幕の三百兩を出すので、仁太はそれを取つて、最前の筒茶碗を渡して逃げる。跡でそれと解つて十右衞門は追ひかける。道具替ると柳原の土手で、十右衞門は仁太に追ひついて立廻りになる所へ、文藏が、鶯籠から取出した香爐を持つて驅つけ、引張りの見得で打出しになつたのである。お贓の一件がどう落着したのか、それが不明なのが誠に殘念である。緒言でも申した如く、再版までに完本が手に入つたら、必ず增補する事をお約束する。

大正十五年二月十三日印刷
大正十五年二月十六日發行

『大南北全集第六卷』
非賣品

校訂者　坪内逍遙
編纂者　渥美清太郎

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者　堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所　常磐印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂

